岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 141

田益田中(国立岡山病院)遺跡

国立岡山病院建設に伴う発掘調査 I

1999

岡 山 県 教 育 委 員 会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 141

田益田中(国立岡山病院)遺跡

国立岡山病院建設に伴う発掘調査Ⅰ

1999

岡 山 県 教 育 委 員 会

1．縄文後期土器

2．縄文晩期土器

１．銅剣鋳型様石製品（約3/2）

W2

W3

W4

櫛 1/2

釣瓶 1/6

W5

W8

２．井戸１出土木製品（櫛・釣瓶）

序

県下最大の岡山平野は、おもに県の中央部を南北に貫流する旭川の沖積作用によって形成された平野であります。そして、この平野の各所と周辺の各丘陵部には、数多くの遺跡が残されていることも広く知られているところです。また、この平野の北西部に派生する笹ヶ瀬川の中流域の狭隘な平野に、山陽自動車道や国道53号北バイパスの建設に伴う発掘調査等によって、遺跡の存在がより明らかになってきました。

両自動車道に隣接するこの地に、平成２年５月、国立岡山病院の移転整備の方針が厚生省によって決定され、県に用地確保等の協力依頼がなされました。これを受けて岡山県教育委員会は、移転候補地の埋蔵文化財の取扱いについて、国立岡山病院、県保健福祉課、県開発公社等の関係機関と協議を重ねてまいりました。まず最初に、遺跡の範囲や規模等を明確にする目的にそって、平成６年11月に確認調査を実施しました。その結果、一部を除き候補地のほぼ全面に遺跡の広がりが確認されたため、建物や道路それに水路等の構造物部分のやむをえず破壊される部分については、記録による保存処置をとることになりました。

発掘調査は、平成７年度から着手し平成９年度末までに第１期工事分について終了し、平成９・10年度の報告書整理期間を経てここに報告書の刊行に至りました。

本書に収録した発掘調査の最大の成果は、岡山県の南部平野では希有な縄文時代後期から同晩期にかけての土器と流木を多く含む数条の河道の発見により、当時の環境復元の貴重な資料を得られたことにあります。また個々の出土遺物の中にも、県下では出土例のない型式の縄文時代後期の浅鉢形土器や弥生時代中期の銅剣の鋳型の可能性のある石製品、さらに新しいところでは江戸時代後期の井戸から出土した漆絵の櫛、釣瓶など注目されるものも少なくありません。そのほか縄文土器片と弥生石器の出土比率が高い点から、なるべく多くの遺物を細かく観察できるよう、写真図版にはできる限り実大で掲載しました。

本書が、今後の歴史研究を進める上での基礎資料として生かされるだけでなく、埋蔵文化財の保護・保存のため有効に活用されるよう願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査の実施ならびに報告書の作成にあたり、当事業埋蔵文化財保護対策委員の先生方から数々の御教授と御指導を賜りました。また、地元町内会の方々をはじめ直接調査作業に従事していただいた皆様、ならびに国立岡山病院・県保健福祉課・県開発公社の関係機関には暖かい御理解と多大な御協力をいただきました。あらためて、各位に衷心より厚くお礼申し上げます。

平成11年３月

岡山県古代吉備文化財センター

所　長　　葛　原　克　人

例　言

1　本書は、国立岡山病院建設に伴い、国立岡山病院より委託を受けて、岡山県教育委員会が平成６年11月と平成７年４月から平成９年３月まで調査を実施した、岡山市田益に所在する田益田中遺跡の発掘調査の報告書である。

2　発掘調査は岡山県古代吉備文化財センターが担当し、本報告書掲載の発掘調査区・担当者・期間等は、本文の表１に示すとおりである。

3　発掘調査および報告書作成にあたっては、国立岡山病院移転建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会を設け、下記の方々に委員を委嘱した。対策委員各位からは終始有益な御指導と御助言をいただいた。記して感謝の意を表す次第である。

角田　茂（元岡山市立岡輝中学校教諭）
出宮徳尚（岡山市教育委員会文化課文化財専門監）
中田啓司（元岡山県立矢掛高等学校教諭）
福本　明（倉敷市埋蔵文化財センター主任）
間壁葭子（倉敷考古館学芸員）
山本悦世（岡山大学文学部助手）
稲田孝司（岡山大学文学部教授）平成８年度まで
小林博昭（岡山理科大学理学部教授）平成８年度まで

4　各専門分野における鑑定、分析等については、次の方々から有益な御教授をいただき、機関の成果については報告文を得た。記して感謝の意を表す。

石製品鑑定	小田富士雄（福岡大学教授）
石材鑑定	妹尾　　護（倉敷芸術科学大学助教授）
樹種同定・自然科学分析	パリノ・サーヴェイ株式会社

5　本報告書の作成は、平成８年度に柳瀬昭彦・難波拓史・岡本泰典・小林利晴が、平成９・10年度に柳瀬が担当して行い、遺物の写真撮影には江尻泰幸の援助と協力を得た。また、遺物の実測・トレースなどには第２章第２節に明記した方々の協力を得た。

6　本文の執筆は、調査担当者が分担し、文責は各節、各項目あるいは遺構ごとの文末に示した。

7　本書の編集は、柳瀬昭彦が担当した。

8　出土遺物ならびに図面・写真類は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325-3）に保管している。

凡　　例

1　本報告書に用いた高度は海抜高である。

2　遺跡位置図および遺構配置図・遺構配置位置図等のグリッドの北方位は、国土座標系の座標北を示し、各遺構図の方位は磁北である。なお、遺跡付近の磁北は西偏6°30′を測る。

3　報告書にもちいた時代・時期区分は執筆者の意向に添って統一しておらず、一般的な政治史区分に準拠し、それを補うために世紀などを併用している。

4　本文の註は、原則として章あるいは節末にもうけることとしたが、第4章については項目の末に示した部分もある。

5　本報告書の遺構および遺物実測図の縮尺については、基本的には下記のとおりに統一している。なお、例外については各々に明記している。

遺構

遺構配置1/600　竪穴住居・掘立柱建物1/60　土壙1/30　井戸1/60　溝断面1/30・1/60　河道断面1/80

遺物

土器1/4　石器・石製品1/2　木製品1/2・1/4　土製品1/2

また、図版の遺構写真の縮尺は任意、遺物写真の縮尺は基本的にキャプションの末尾に明記し、例外あるいは複数の縮尺にわたる場合は個々に示した。

6　遺構配置図に示す遺構名は、遺構密度密度の高い部分について、土壙のみ「土」と略称を用いた。

7　本文中の図表・遺構・遺物の各番号は章をとおしての連番号であり、写真図版および遺物観察表の遺構・遺物番号とも対応する。ただし、付載1・2はそれぞれ単独である。

8　遺物番号のうち土器以外のものについては、その材質を示しかつ他と区別できるよう、下記の略号を番号の前に付した。

石器・石製品 S　土製品 C　木製品 W

9　土器実測図で表現する中軸線左右の白抜きは、小破片のために口径復元に不確実なものを示す。

10　土層断面図等の土色は、各調査者の記述に従った。

11　本報告書に掲載した第1章第3図は、国土地理院の1/25000地形図「岡山北部」を複製し、それに加筆したものである。

目　　次

巻頭カラー図版
序
例　言
凡　例
目　次

第１章　歴史的・地理的環境 …… 1
第２章　発掘調査および報告書作成の経緯 …… 5
　第１節　発掘調査の契機 …… 5
　第２節　発掘調査および報告書作成の体制 …… 7
　第３節　発掘調査および報告書作成の経過 …… 10
　　(1)　確認調査 …… 10
　　(2)　全面調査および補足調査 …… 16
　　(3)　報告書作成 …… 19
第３章　遺構・遺物の概要 …… 21
　第１節　縄文時代の遺構・遺物 …… 21
　　(1)　土　壙 …… 21
　　(2)　　溝 …… 26
　　(3)　河　道 …… 28
　　(4)　たわみ …… 52
　第２節　弥生時代の遺構・遺物 …… 53
　　(1)　竪穴住居 …… 53
　　(2)　土　壙 …… 55
　　(3)　　溝 …… 85
　　(4)　たわみ …… 122
　第３節　古墳時代・奈良時代の遺構・遺物 …… 123
　　(1)　土　壙 …… 123
　　(2)　　溝 …… 126
　　(3)　柵列状遺構 …… 128
　第４節　中世以降の遺構・遺物 …… 129
　　(1)　建　物 …… 129
　　(2)　土　壙 …… 132
　　(3)　井　戸 …… 137
　　(4)　　溝 …… 139
　第５節　包含層等の遺物 …… 143

第４章　田益田中遺跡のまとめ …… 147
第１節　縄文時代の遺構と遺物 …… 147
(1)　遺　構 …… 147
(2)　縄文後期の土器 …… 148
(3)　縄文晩期の土器 …… 154
第２節　弥生時代の遺構と遺物 …… 162
(1)　遺　構 …… 162
(2)　弥生土器の分類と出土パターン …… 166
(3)　石器の組成 …… 177
(4)　銅剣鋳型様石製品 …… 179
第３節　古墳時代以降の遺構と遺物 …… 183

付　載１　田益田中遺跡の旧河道流木（縄文時代）の樹種同定 …… 185
２　田益田中遺跡の自然科学分析 …… 191

出土遺物一覧（観察）表 …… 197
１．土器観察表 …… 198
２．石器・石製品観察表 …… 211
新旧遺構名称対照表 …… 217
報告書抄録 …… 220

写真図版

図　目　次

第１図　遺跡位置 …… 1
第２図　河道１出土ナイフ形石器 …… 1
第３図　周辺遺跡分布 …… 2
第４図　発掘調査対象位置および範囲 …… 6
第５図　確認トレンチ位置 ……10
第６図　Ｔ１～６平・断面 ……12
第７図　Ｔ７～14平・断面 ……13
第８図　Ｔ15～20平・断面 ……14
第９図　土層柱状模式図相関（深さ1/30）…15
第10図　設計変更等による調査変更 ……16
第11図　調査対象地区位置 ……17
第12図　調査対象地グリッド ……19
第13図　土壙１～４ ……21
第14図　縄文時代遺構配置図範囲(1/2,500)　22
第15図　縄文時代遺構配置Ⅰ(1/600) ……23
第16図　縄文時代遺構配置Ⅱ(1/600) ……24
第17図　土壙５～10 ……25
第18図　溝１断面 ……26
第19図　溝２断面 ……26
第20図　溝３・４断面 ……27
第21図　溝５～７断面 ……27
第22図　溝８断面 ……27
第23図　河道１〈A･B〉断面(1/80) ……28
第24図　河道１・２〈C〉断面(1/80) ……29
第25図　河道１〈D〉断面(1/80) ……29
第26図　河道１・２〈E〉断面(1/80) ……30
第27図　河道１〈F〉断面(1/80) ……30
第28図　河道１出土遺物（1）〈水路5区上､6区下〉…30
第29図　河道１出土遺物（2）〈本館1区〉……31
第30図　河道１出土遺物（3）〈本館1区〉……32
第31図　河道１出土遺物（4）〈本館4･5､水路7区〉…32
第32図　河道２〈A･B〉断面、同出土遺物(1)33
第33図　河道２出土遺物(2) ……34
第34図　縄文時代遺構配置Ⅲ(1/600) ……挿頁1
第35図　河道３〈A～E〉断面(1/80) ……35
第36図　河道４〈A･B〉断面(1/80) ……36
第37図　河道５〈A～C〉断面(1/80) ……36
第38図　河道５〈D～F〉断面(1/80) ……37
第39図　縄文時代遺構配置Ⅳ(1/600) ……38
第40図　河道５出土遺物 ……39
第41図　河道６断面 ……40
第42図　河道７断面 ……40
第43図　河道６出土遺物 ……41
第44図　河道７出土遺物 ……41
第45図　河道10〈A〉断面(1/80) ……42
第46図　河道10〈B･C〉断面(1/80) ……43
第47図　河道10出土遺物(1) ……45
第48図　河道10出土遺物(2) ……45
第49図　河道10出土遺物(3) ……46
第50図　河道10出土遺物(4) ……47
第51図　河道10出土遺物(5) ……48
第52図　河道10出土遺物(6) ……49
第53図　河道10出土遺物(7) ……50
第54図　河道10出土遺物(8) ……51
第55図　河道10出土遺物(9) ……52
第56図　たわみ１、同出土遺物 ……52
第57図　竪穴住居１ ……53
第58図　弥生時代遺構配置図範囲(1/3,000)…54
第59図　弥生時代遺構配置Ⅰ ……54
第60図　弥生時代遺構配置Ⅱ ……挿頁2
第61図　弥生時代遺構配置Ⅲ ……挿頁3
第62図　弥生時代遺構配置Ⅳ ……挿頁4
第63図　土壙11～17 ……55
第64図　土壙18 ……56
第65図　土壙19・20 ……56
第66図　土壙21・22 ……56
第67図　土壙23 ……57
第68図　土壙24・25、同出土遺物 ……57
第69図　土壙26・27 ……58
第70図　土壙28、同出土遺物 ……58

第71図　土壙29、同出土遺物 ……58
第72図　土壙30～33 ……59
第73図　土壙34、同出土遺物 ……59
第74図　土壙35、同出土遺物 ……60
第75図　土壙36～38、土壙37出土遺物 ……60
第76図　土壙38出土遺物 ……61
第77図　土壙39・40、土壙40出土遺物 ……61
第78図　土壙41、同出土遺物 ……62
第79図　土壙42 ……62
第80図　土壙43、同出土遺物 ……63
第81図　土壙44 ……64
第82図　土壙45 ……64
第83図　土壙46 ……64
第84図　土壙47、同出土遺物 ……64
第85図　土壙48、同出土遺物 ……65
第86図　土壙49、同出土遺物 ……65
第87図　土壙50 ……65
第88図　土壙51、同出土遺物 ……65
第89図　土壙52 ……66
第90図　土壙53、同出土遺物 ……66
第91図　土壙54、同出土遺物 ……66
第92図　土壙55 ……67
第93図　土壙56、同出土遺物 ……67
第94図　土壙57出土遺物 ……67
第95図　土壙59出土遺物 ……67
第96図　土壙56～61 ……68
第97図　土壙62～64、土壙63・64出土遺物 …69
第98図　土壙65・66 ……70
第99図　土壙67、同出土遺物 ……70
第100図 土壙68・69、溝52、土壙68出土遺物 ……70
第101図 弥生時代遺構配置Ⅴ ……71
第102図 土壙70・71 ……72
第103図 土壙72・73 ……72
第104図 土壙74・75 ……72
第105図 土壙76～80、土壙76・80出土遺物 …73
第106図 土壙79出土遺物(1) ……74
第107図 土壙79出土遺物(2) ……75
第108図 土壙81～84 ……75
第109図 土壙81出土遺物 ……76
第110図 土壙82出土遺物 ……76
第111図 土壙85～90 ……77
第112図 土壙91～93、土壙92・93出土遺物 …78
第113図 土壙94～99、土壙95～97出土遺物 …79
第114図 土壙100・101、土壙101出土遺物 …80
第115図 土壙102 ……81
第116図 土壙103 ……81
第117図 土壙104・105 ……81
第118図 土壙106～110 ……82
第119図 土壙111 ……83
第120図 土壙112、同出土遺物(1) ……83
第121図 土壙112出土遺物(2) ……84
第122図 土壙113 ……84
第123図 土壙114 ……84
第124図 溝9・10断面〈上流部〉 ……85
第125図 溝9・10出土遺物〈上流部〉 ……86
第126図 溝9・10断面〈下流部〉 ……87
第127図 溝9出土遺物〈下流部〉(1) ……88
第128図 溝9・10出土遺物〈下流部〉 ……89
第129図 溝9出土遺物〈下流部〉(2) ……90
第130図 溝9出土遺物〈下流部〉(3) ……91
第131図 溝10出土遺物〈下流部〉 ……92
第132図 溝11・12断面 ……93
第133図 溝13断面 ……93
第134図 溝14・15断面 ……93
第135図 溝16断面 ……94
第136図 溝17断面 ……94
第137図 溝18断面、同出土遺物 ……94
第138図 溝19断面 ……94
第139図 溝20～23断面 ……95
第140図 溝24断面、同出土遺物 ……95
第141図 溝25・26断面 ……95
第142図 溝27断面 ……96
第143図 溝28断面 ……96
第144図 溝29～30断面 ……96
第145図 溝31断面 ……96

第146図 溝32断面、同出土遺物 ……97
第147図 溝33断面、同出土遺物(1) ……97
第148図 溝33出土遺物(2) ……98
第149図 溝34・77断面 ……98
第150図 溝35断面、同出土遺物 ……98
第151図 溝36断面 ……99
第152図 溝37断面、同出土遺物 ……99
第153図 溝38～40断面、溝38・39出土遺物 …99
第154図 溝41・42断面 ……100
第155図 溝43～49断面、溝43出土遺物 ……100
第156図 溝50断面、同出土遺物 ……100
第157図 溝51断面 ……101
第158図 溝53〈A～E〉断面 ……101
第159図 溝53出土遺物(1) ……102
第160図 溝53出土遺物(2)〈上流部〉 ……103
第161図 溝53出土遺物(3)〈下流部〉 ……104
第162図 溝54断面 ……105
第163図 溝55断面 ……105
第164図 溝56断面 ……105
第165図 溝57断面 ……105
第166図 溝58・59断面、同出土遺物 ……106
第167図 溝60・61断面、
溝60出土遺物 ……106
第168図 溝61出土遺物 ……107
第169図 溝62・63・71断面、同出土遺物 …107
第170図 溝63～66〈a～e〉断面 ……108
第171図 溝65・67〈f～i〉断面 ……109
第172図 溝64出土遺物(1) ……109
第173図 溝64出土遺物(2)〈上：水路
2区・下：付属建物2区〉……110
第174図 溝64出土遺物(3)〈浄化槽区〉 ……111
第175図 溝65出土遺物(1)〈石器：水路
2区〉……112
第176図 溝65出土遺物(2)〈上：水路2区・
中：付属建物2区・下：浄化槽区〉
……113
第177図 溝66出土遺物(1) ……114
第178図 溝66出土遺物(2) ……115
第179図 溝67出土遺物(1) ……116
第180図 溝67出土遺物(2) ……117
第181図 溝67出土遺物(3) ……118
第182図 溝68断面 ……119
第183図 溝68出土遺物(1) ……119
第184図 溝68出土遺物(2) ……120
第185図 溝69断面、同出土遺物 ……120
第186図 溝70断面、同出土遺物 ……121
第187図 溝72～75断面 ……121
第188図 たわみ2～6断面 ……122
第189図 土壙115、同出土遺物 ……123
第190図 土壙116 ……123
第191図 古墳～奈良時代遺構配置図範囲 …124
第192図 古墳～奈良時代遺構配置Ⅰ ……124
第193図 古墳～奈良時代遺構配置Ⅱ ……125
第194図 古墳～奈良時代遺構配置Ⅲ ……125
第195図 溝76断面 ……126
第196図 溝76出土遺物 ……126
第197図 溝78・79断面 ……127
第198図 溝80・81 ……127
第199図 古墳～奈良時代遺構配置Ⅳ ……128
第200図 柵列状遺構1・2 ……128
第201図 中世以降遺構配置図範囲(1/2,500) 129
第202図 中世以降遺構配置Ⅰ ……130
第203図 中世以降遺構配置Ⅱ～Ⅴ ……130
第204図 中世以降遺構配置Ⅵ ……131
第205図 建物1 ……131
第206図 建物2 ……132
第207図 土壙117、土壙118・溝18断面 ……132
第208図 土壙119・120 ……133
第209図 土壙121、同出土遺物 ……133
第210図 土壙122～125、土壙123出土遺物 …134
第211図 土壙126・127 ……135
第212図 土壙128、同出土遺物 ……135
第213図 土壙129～131 ……136
第214図 土壙132・133 ……136
第215図 土壙134～136 ……137
第216図 井戸1、同出土遺物(1) ……138

第217図 井戸１出土遺物(2) ……139
第218図 溝82断面 ……139
第219図 溝83～87断面、溝83出土遺物 ……140
第220図 溝88・89断面 ……140
第221図 溝90～96、畎畝断面 ……141
第222図 溝97（近世～近代用水）
出土遺物 ……142
第223図 包含層等出土遺物(1) ……143
第224図 包含層等出土遺物(2) ……144
第225図 包含層等出土遺物(3) ……144
第226図 包含層等出土遺物(4) ……145
第227図 包含層等出土遺物(5) ……146
第228図 縄文時代後・晩期の景観 ……挿頁５
第229図 縄文後期の土器分類(1/8) ……149
第230図 縄文晩期の土器分類(1/8) ……155
第231図 弥生時代の遺構配置（前期）……163
第232図 弥生時代の遺構配置（中期）……164
第233図 弥生時代の遺構配置（後期）……165
第234図 弥生土器分類（前～中期）……167
第235図 弥生土器分類（中～後期）……169
第236図 溝９・10相関〈本館5－8区内〉(1/200)
……171
第237図 溝９遺物出土状況と接合関係〈A〉
(1/40) ……173
第238図 溝９遺物出土状況と接合関係〈B〉
(1/40) ……174
第239図 溝９遺物出土状況と接合関係〈C〉
(1/40) ……175
第240図 石器の組成 ……177
第241図 溝64出土の銅剣鋳型様石製品 ……180

表 目 次

表１ 田益田中遺跡調査一覧 ……12
表２ 縄文後期の土器編年 ……152
表３ 縄文晩期の土器編年 ……159
表４ おもな溝の消長 ……162

図 版 目 次

巻頭図版１－１.縄文後期土器
２.縄文晩期土器
巻頭図版２－１.銅剣鋳型様石製品
２.井戸１出土木製品（櫛・釣瓶）
図版１－１.田益田中遺跡遠景（北西から）
２.確認トレンチＴ５（東から）
３.確認トレンチＴ18（東から）
図版２－１.土壙５（東から）
２.土壙６（南から）
３.土壙８（東から）
図版３－１.溝３（北から）
２.溝４（北から）
３.溝５（南西から）
図版４－１.水路５区河道１（南西から）
２.本館１区河道１・２（南西から）
３.本館４区河道１（北西から）
図版５－１.本館４区河道１断面（南から）
２.宿舎区河道２（北東から）
３.本館１区河道２（北から）
図版６－１.本館５区河道３（西から）
２.本館２区河道４（北から）
３.本館２区河道５（東から）
図版７－１.本館８区河道５（南東から）
２.本館８区河道５（北東から）

図版８ - １.本館３区河道５（南西から）
２.水路２区河道６（北から）
３.水路２区河道７（南から）
図版９ - １.付属建物１区河道10（南から）
２.付属建物２区河道10（南東から）
図版10 - １.浄化槽区河道10（北西から）
２.浄化槽区河道10（北東から）
３.浄化槽区河道10断面（北から）
図版11 - １.河道10掘り下げ状況（北西から）
２.たわみ１（東から）
３.たわみ１断面（南から）
図版12 - １.竪穴住居１（南から）
２.進入路１区土壙12、溝９・10（南から）
図版13 - １.土壙19・20、溝31（南西から）
２.土壙25（南東から）
３.土壙29（南から）
図版14 - １.土壙34（南西から）
２.土壙36（南東から）
３.土壙37・38（東から）
４.土壙38（北西から）
図版15 - １.土壙41（北西から）
２.土壙43（東から）
３.土壙46（北から）
図版16 - １.土壙48（南東から）
２.土壙53～64（南西から）
３.土壙57～60（東から）
図版17 - １.土壙68・溝52（北から）
２.土壙77（西から）
３.土壙78（西から）
図版18 - １.土壙79遺物出土状況（北東から）
２.土壙79・80、溝58・59（北西から）
３.土壙79完掘状況（北西から）
図版19 - １.土壙81～84、溝58・59・63（北から）
２.土壙81（北東から）
３.土壙82（西から）
図版20 - １.土壙83・84（南西から）
２.土壙85・86（南東から）
３.土壙87・88・90、溝63（西から）
図版21 - １.土壙87・89（東から）
２.土壙87・89断面（南東から）
３.土壙90断面（西から）
図版22 - １.土壙91（東から）
２.土壙92（東から）
３.土壙92断面（南東から）
図版23 - １.土壙93（北東から）
２.土壙95（北から）
３.土壙95・96（北東から）
図版24 - １.土壙104、たわみ１、溝63・64・97井戸１（北東から）
２.土壙105～112、溝74・75（東から）
３.土壙112（北から）
図版25 - １.進入路２区溝９～13（北東から）
２.水路１区溝９・10（南から）
３.駐車場区溝９・10・28～30（東から）
図版26 - １.本館２区溝９・10（北西から）
２.本館５区溝９・36（北東から）
３.本館８区溝９・10（北東から）
図版27 - １.本館５区溝９遺物出土状況・溝10（南から）
２.本館５区溝９・10・36（南から）
図版28 - １.本館８区溝９遺物出土状況・溝10（南西から）第236図Ｂ
２.本館８区溝９遺物出土状況・溝10（北西から）第236図Ｃ
図版29 - １.本館８区溝10（北東から）
２.本館８区溝10（南東から）
図版30 - １.溝16（北から）
２.溝16断面（南東から）
３.宿舎区溝17（南から）
図版31 - １.溝39・40（南から）
２.本館３区溝53（北東から）
３.本館８区溝53断面（北から）
図版32 - １.溝56（西から）

2.溝58・59、60・61（南から）
3.溝60・61断面ａ（西から）
図版33－1.本館７区溝62・河道10肩部（南西から）
2.付属建物２区溝62～64（南から）
3.付属建物２区溝63（南西から）
図版34－1.水路２区溝58・59、64・65（南から）
2.水路２区溝65・70（北から）
図版35－1.浄化槽区溝64・66（北東から）
2.浄化槽区溝65～68（北から）
図版36－1.たわみ４（南から）
2.たわみ４断面（南から）
3.たわみ６・溝80（西から）
図版37－1.溝76（南から）
2.溝78断面（南から）
3.溝81・竪穴住居１（南から）
図版38－1.柵状遺構２（北西から）
2.建物１（北から）、Ｐ１（南から）Ｐ３（東から）
図版39－1.土壙117（南から）
2.土壙119（南から）
3.土壙121（北東から）
図版40－1.土壙123（南西から）
2.土壙129（南から）
3.土壙133（南東から）
図版41－1.井戸１平面（南から）
2.井戸１井側断面（南から）
3.井戸１掘方断面（南から）
図版42－1.溝83（東から）
2.溝22・たわみ３、溝85・86（北東から）
3.溝88・89（北から）
図版43　縄文後期土器(1)〈1/2,1/6〉
図版44　縄文後期土器(2)〈1/2,1/6〉
図版45　縄文晩期土器(1)〈1/2,1/6〉
図版46　縄文晩期土器(2)〈1/2,1/4,1/6〉
図版47－1.縄文晩期土器(3)〈1/2,1/6〉
2.縄文後期土器(3)〈1/1〉
図版48　縄文後期土器(4)〈1/1〉
図版49　縄文後期土器(5)〈1/1〉
図版50　縄文後期土器(6)〈1/1〉
図版51　縄文後・晩期土器(1)〈1/1〉
図版52　縄文後・晩期土器(2)〈1/1〉
図版53　縄文晩期土器(4)〈1/1〉
図版54　縄文晩期土器(5)〈1/1〉
図版55　縄文晩期土器(6)〈1/1〉
図版56　縄文晩期土器(7)〈1/1〉
図版57　縄文晩期土器(8)〈1/1〉
図版58　縄文晩期土器(9)〈1/1〉
図版59　縄文後・晩期土器(3)〈1/1〉
図版60　縄文晩期土器(10)〈1/1〉
図版61　縄文晩期土器(11)〈1/1〉
図版62　弥生前・中期土器(1)〈1/2,1/4〉
図版63　弥生前・中期土器(2)〈1/2,1/4〉
図版64－1.奈良～近世陶磁器等〈1/3,1/4〉
2.縄文・古代土製品〈1/1〉
図版65－1.ナイフ形石器〈1/1〉
2.縄文後期石器各種〈1/2〉
図版66　石鏃(1)〈1/1〉
図版67　石鏃(2)〈1/1〉
図版68　石鏃(3)〈1/1〉
図版69　石鏃(4)〈1/1〉
図版70　石鏃(5)〈1/1〉
図版71　石錐(1)〈1/1〉
図版72　石錐(2)〈1/1〉
図版73　磨製石包丁〈1/1,1/2〉
図版74　打製石包丁〈1/1,1/2〉
図版75　石槍・石匙・スクレイパー・楔等〈1/1,1/2〉
図版76　石鍬・石斧（打製・磨製）・石鑿〈1/2,1/3〉
図版77　扁平片刃・紡錘車・砥石・凹石・石錘・銅剣鋳型？等〈1/2〉
図版78　敲石等〈1/2〉
図版79　木器（櫛・釣瓶）〈1/2,1/4〉

第１章　歴史的・地理的環境

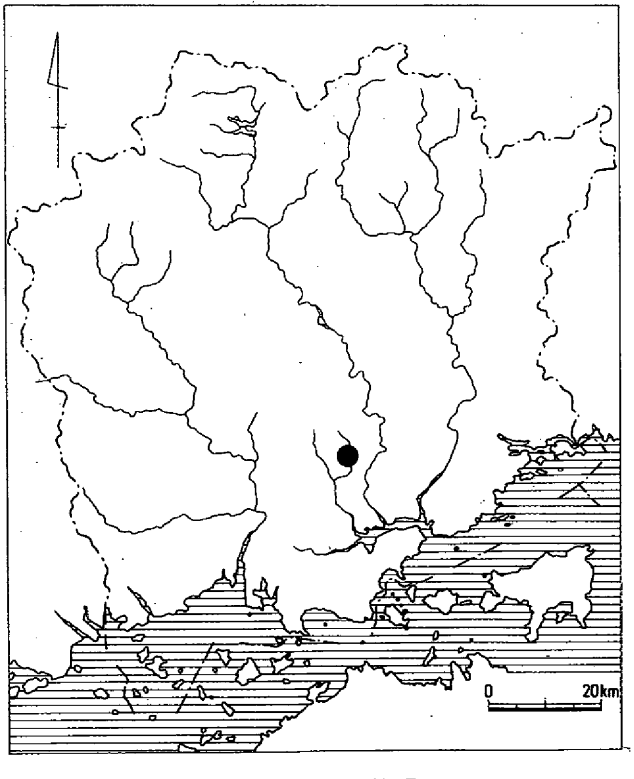
田益田中遺跡は、岡山市田益に所在し、古代の行政区分では備前国津高郡津高郷にあたる。

津高地区は、岡山平野のほぼ中央を南流する笹ヶ瀬川の上流域に形成された、南北に細長い平野を中心とする地域である。東西には丘陵が迫っており、平野の広さは、南北約５km、東西幅は広いところでも１km弱である。田益田中遺跡はその平野のほぼ中央部に位置しており、笹ヶ瀬川およびその支流の河畔に形成された微高地上が、古くから人々の居住地として利用されてきたと考えられる。今回の発掘調査では、縄文時代の河道などから多数の植物遺体が出土しており、その分析によって遺跡の自然環境をうかがい知ることも可能である。詳細は分析報告を参照されたいが、周辺には温帯性の針葉樹や照葉樹が生息しており、また河川沿いに生息することの多い植物の遺体も認められるようである。

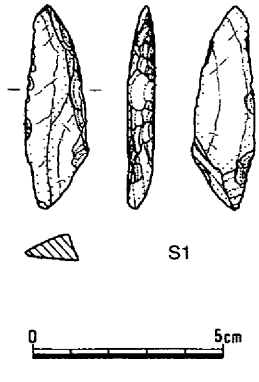
この津高盆地には、近年の発掘調査で、古くから人々の生活が営まれていたことが知られるようになり、また盆地を取り囲む丘陵部にも、古墳をはじめとする多くの遺跡が知られている。

この地域での最も古い遺跡・遺物として、これまで旧石器時代のものは知られていなかったが、今回の調査で、後期旧石器時代のナイフ形石器が出土しているのでここに報告しておきたい（第２図－Ｓ１）。出土したのは水路６－１区の河道１である。河道は縄文時代に形成されたものであるが、その中に混入して発見された資料である。サヌカイト製で、横長剥片を素材とした一側縁加工のものであり、刃潰し加工は腹面から背面に向けて加撃している。全長は5.35cmを測る。

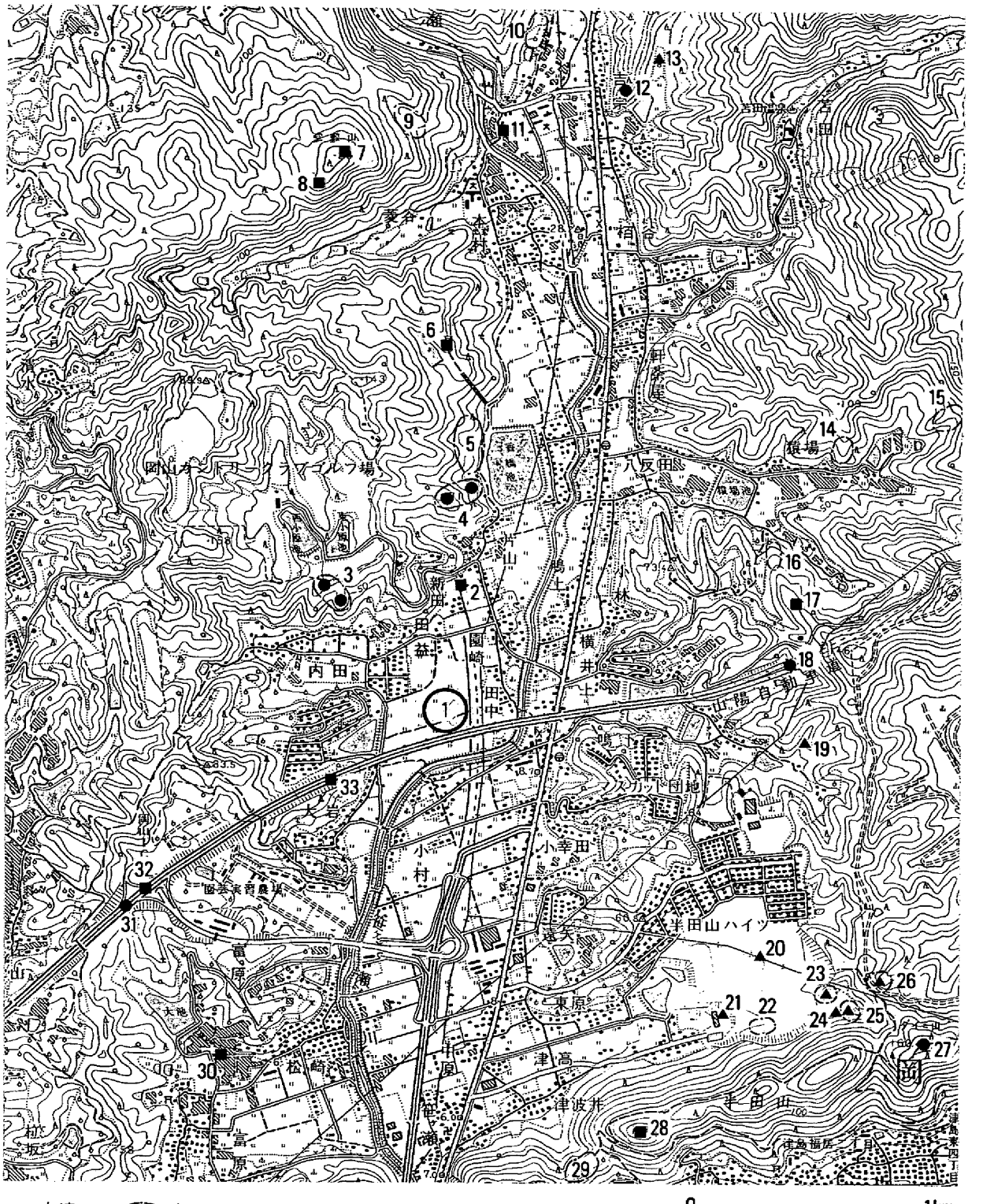
縄文時代についても、これまでほとんど遺跡は判明しておらず、山陽自動車道建設に伴って調査された田益田中遺跡(註１)や、田益新田遺跡(註２)において自然河道から縄文時代後・晩期の土器片が出土している程度であった。ところが今回の調査では、土壙や溝などの遺構が検出され、縄文時代後・晩期にこの地域に人々が居住していたことが確認された。



第１図　遺跡位置



第２図　河道１出土ナイフ形石器



●古墳　古墳群　▲製鉄関連遺跡　■その他の遺跡

1	田益田中遺跡	2	田益新田遺跡	3	青谷古墳群	4	片山古墳群	5	西山古墳群
6	神輪神社遺跡	7	堂敷山遺跡	8	堂敷山廃寺	9	平岩古墳群	10	横山古墳群
11	国司遺跡	12	大谷古墳	13	大谷遺跡	14	猿場古墳群	15	猿場北奥古墳群
16	猿場池南奥古墳群	17	清水谷遺跡	18	白壁古墳	19	白壁奥古墳	20	猪ノ坂南遺跡
21	新田上南遺跡	22	佐良池古墳群	23	擂鉢池遺跡・古墳群	24	立越南遺跡	25	奥池遺跡・古墳群
26	佐良池谷尻古墳群	27	ダイミ山古墳	28	半田山城	29	都月坂墳墓群	30	富原北廃寺（荒神廃寺）
31	富原西奥古墳	32	富原大池奥山遺跡	33	大岩遺跡				

第３図　周辺遺跡分布

弥生時代になると、比較的多くの遺跡が知られるようになる。田益田中遺跡では、今回の調査も含めて、竪穴住居や溝、土壙といった弥生時代前期から中期、後期に及ぶ遺構が確認されている。また田益新田遺跡では弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけての建物や土壙などの遺構が発見されている。これらの笹ヶ瀬川沖積地の遺跡のほかに、津高盆地を取り囲む丘陵上にも集落遺跡が認められる。大岩遺跡(註３)では弥生時代後期を中心とする竪穴住居12軒や建物１棟、袋状土壙20数基などが検出され、津高住宅団地造成地内遺跡(註４)においても弥生時代中期から後期の集落跡の存在が明らかにされている。

集落遺跡以外では、津高盆地の南端に位置する半田山丘陵上に、弥生時代後期から古墳時代前期につづく墳墓群が知られている。都月坂２号弥生墳丘墓(註５)は、弥生時代後期末に築造されたと考えられる墳丘墓で、長辺約20m、短辺約16m、高さ約２mの墳丘をもち、中央に竪穴式石槨が築かれている。また、同じく半田山丘陵に所在する七つ坑10号地点(註６)では、弥生時代後期の集団墓が発見されている。

つづく古墳時代前期の古墳は、やはり半田山丘陵を中心に築造されている。前方後方墳の都月坂１号墳(註７)や、前方後方墳２基を含む七つ坑古墳群(註８)、一辺20mの方墳であるダイミ山古墳などが知られている。ただしこれらの古墳は、津高地域というよりも、半田山丘陵の南側に広がる平野をみる位置にあると理解すべきであろう。古墳時代中期においても、津高盆地内の首長墳は明確でなく、半田山丘陵の南側において、一本松古墳(註９)や神宮寺山古墳(註10)といった著名な古墳が築造されている。古墳時代後期になると、津高地域にも多くの古墳が見られるようになる。近年調査された西山古墳群(註11)や青谷５号墳(註12)などは、副葬品として装飾付の大刀や馬具をもっており、この地域の有力な古墳であると考えられる。また、丘陵の谷部に単独で所在する白壁古墳(註13)も、副葬品は不明であるが、墳丘径約19m、石室全長約12mの大規模な古墳である。そのほか、終末期の古墳である富原西奥古墳(註14)も発掘調査が行われており、一辺7.6～7.7mの方墳であることが明らかになっている。

また、７世紀頃になると、この地域において本格的な鉄生産が開始されたようであり、奥池遺跡(註15)、白壁奥遺跡(註16)などで多数の製鉄炉や炭窯が発見されている。上述した西山古墳群の中にも、鉄滓を供献する古墳が確認されている。

古代の遺跡では、白鳳時代の創建と考えられている富原北廃寺（荒神廃寺）(註17)や、山陽道の備前国４駅のひとつ津高駅と推定されている富原遺跡(註18)などが所在しており、富原付近は津高郡の中心的位置を占めていたようである。古代における山陽道は津高地区の南部を通っていたと考えられ、交通の要衝として重要な役割を担っていたことが推測できる。上述の富原西奥古墳は、７世紀中ごろの築造であり、これらの遺跡を見下ろす位置に築造されている。

中・近世の遺跡としては、半田山城、烏山城といった山城、中世墓、寺院などがあり、またこの地を岡山藩領として支配した池田家の墓所である大岩墓所の立会調査(註19)が、山陽自動車道の建設に伴って行われている。

（尾上元規）

註

註１　二宮治夫編『大岩遺跡・田益田中遺跡・白壁奥遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告128　日本道路公団中国支社津山工事事務所・岡山県教育委員会　1998年

註２　内藤善史編『田益新田遺跡・西山古墳群』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告109　建設省岡山国道工事事務所・岡山県教育委員会　1996年

註３　註１に同じ

註４　岡山市教育委員会『津高住宅団地造成地内遺跡発掘現地説明会資料』1991年

註５　近藤義郎「都月坂二号弥生墳丘墓」『岡山県史』第18巻　考古資料　1986年

註６　近藤義郎・新納泉「半田山丘陵七つ坑古墳群７号墳および10号地点の発掘」『都市近郊林（半田山）の自然特性およびその環境保全機能に関する研究Ⅲ』岡山大学　1989年

註７　近藤義郎「都月坂一号墳」『岡山県史』第18巻　考古資料　1986年

註８　近藤義郎・高井健司編『七つ坑古墳群』七つ坑古墳群発掘調査団　1987年

註９　近藤義郎「一本松古墳」『岡山県史』第18巻　考古資料　1986年

註10　鎌木義昌「神宮寺山古墳」『岡山市史』古代篇　1962年

註11　註２に同じ

註12　氏平昭則『田益新田遺跡・青谷５号墳』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告112　岡山県教育委員会　1996年

註13　松本和男「白壁古墳」『山陽自動車道建設に伴う発掘調査』７　岡山県埋蔵文化財発掘調査報告83　日本道路公団広島建設局岡山工事事務所・岡山県教育委員会　1993年

註14　松本和男「富原西奥古墳」『山陽自動車道建設に伴う発掘調査』７　岡山県埋蔵文化財発掘調査報告83　日本道路公団広島建設局岡山工事事務所・岡山県教育委員会　1993年

註15　註４に同じ
光永真一「製鉄と鉄鍛冶」『吉備の考古学的研究』（下）　山陽新聞社　1992年

註16　註１に同じ

註17　伊藤晃「富原北廃寺・富原遺跡」『岡山県史』第18巻　考古資料　1986年

註18　註17に同じ

註19　註１に同じ

第２章　発掘調査および報告書作成の経緯

第１節　発掘調査の契機

現在岡山市南方に所在する国立岡山病院は、昭和36年５月に設置されて以来37年が経過し、施設建物の全般的な老朽化と敷地の狭隘さから、医学の進歩に合わせた整備が困難とされていた。

こうした状況の中で、昭和57年には現地での建替えの検討が始まり、昭和60年には移転整備の方向での検討もなされた。しかし、用地買収等の困難さから昭和62年には当初の現地建替えの方針に戻ったものの、平成元年頃からはまた移転整備で再検討されるなど、二転三転した結果、厚生省は平成２年５月に岡山市田益地区への移転整備を決定し、岡山県に対し用地確保等の協力依頼がなされた。

岡山県はこれを受けて、岡山県土地開発公社に用地買収・造成の協力要請を行うとともに、県の窓口の保健福祉部保健福祉課と国の直接的な窓口である国立岡山病院との三者で、土地造成に伴う調整池、埋蔵文化財の調査、進入路や地元要望の配水施設、現病院用地との等価交換の方法等について関係機関等と協議を重ねることとなった。

移転が決定された岡山市田益地区は、平成３年４～６月に山陽自動車道建設に伴う発掘調査(註１)が実施され、その結果弥生時代から中世にかけての集落遺跡であることが周知されており、候補地についても当然遺跡の広がりが予想されていた。そのため、岡山県教育委員会（岡山県教育庁文化課）は、直接的に関係する埋蔵文化財の保護・保存について何度か協議を行い、協議の過程で前三者に対して平成３年８月19日付けで次の要望を申し入れた。

1　遺跡調査にかかる来年度の執行体制を検討する時期に来ている。

2　国立病院の調査要員として、来年度４月から６人の体制を考えていたが、年度当初から調査に入れるのか。用地取得等が虫食い状態では調査が困難であり、人は配置できない。年度当初から調査に入れないなら、再来年度（平成５年度）から入ることになる。現時点での見通しを聞きたい。

3　県下の平成４年度の遺跡調査については、山陽自動車道・県立大学が重点と考えている。継続中のものが優先し、新規、不確実なものは後回しとせざるを得ない。(調査員数－47人)

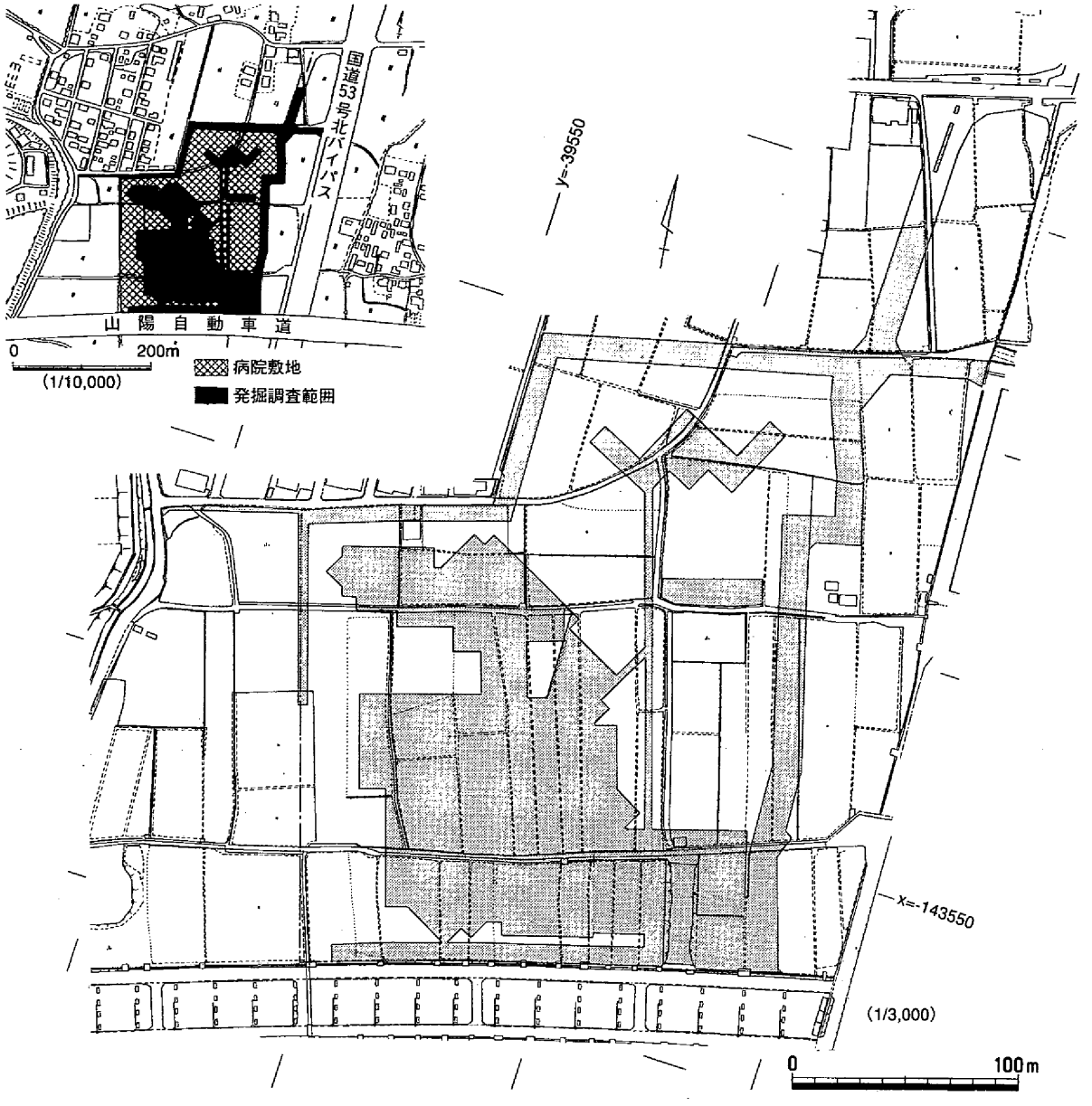
4　用地買収の状況、見通しを調査願いたい。また、建物の位置関係を決定することが効率的、かつ早期の調査につながる。配水管等の構造物も関係し、かなり具体的な配置計画が必要となる。掘り下げる深度も関係する。

5　遺跡は、表土から40～50cmのところから出土している。

6　調査員の配置上、年度中途からの受託は難しい。平成５年に調査員を12人投入すれば、調査期間は平成４年に６人投入したと同程度になる。

7　９月末までに、文化課としての来年度の執行体制を決定したいので、それまでに回答をお願いしたい。

以上の申し入れの結果、用地交渉の遅れ等により少なくとも平成４年度には調査に入れないことが判明し、その後事業認定のための地権者全員の同意が得られたのは平成４年度末、さらに買収単価の



第４図　発掘調査対象位置および範囲

合意を得たのは１年後の平成５年度末であった。そして用地買収そのものは、平成６年度初めに地権者の７割強と集団調印、その後個別の用地交渉がなされ、買収完了は平成７年５月末であった。

平成６年度になって急速に移転整備が具体的に動きだすにつれ、造成工事に先立つ埋蔵文化財の取り扱いも具体的な協議に入り、国立岡山病院敷地内については平成６年11月～12月に確認調査、平成７年度から建物・進入道路・浄化槽等の恒久施設部分を対象にして全面発掘調査を実施することになった。そして、最終的に平成７～９年度の全面発掘調査の対象は、第４図に示す範囲となったものである。

（柳瀬）

註

註１　岡山県教育委員会「田益田中遺跡他―山陽自動車道建設に伴う発掘調査16―」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』128　1998年

第２節　発掘調査および報告書作成の体制

発掘調査および報告書作成事業は、岡山県教育委員会が国立岡山病院から委託を受け、確認調査は平成６年度（１ヶ月間）、発掘調査は平成７～９年度（９年度４ヶ月間）、報告書作成は平成８～10年度（８年度３ヶ月間・９年度８ヶ月間・10年度６ヶ月間）に実施した。

発掘調査にかかる調査員は、平成６年度は２名の１班、平成７年度は８名の１班、平成８年度は４名の２班、平成９年度は２名の１班体制で当たり、報告書作成は平成８年度は４名、平成９・10年度は１名の体制で担った。以下に、組織としての体制を記す。

確認調査

平成６年度

岡山県教育委員会

教育長	森崎岩之助

岡山県教育庁

教育次長	岸本憲二

文化課

課長	大場淳
課長代理	松井新一
課長補佐（埋蔵文化財係長）	高畑知功
主任	若林一憲

岡山県古代吉備文化財センター

所長	河本清
次長	葛原克人

＜総務課＞

総務課長	丸尾洋幸
課長補佐（総務係長）	杉田卓美
主査	石井善晴
主任	三宅秀吉

＜調査課＞

調査第一課長	正岡睦夫
課長補佐（第一係長）	松本和男
主事	杉山一雄

発掘調査

平成７年度

岡山県教育委員会

教育長	森崎岩之助

岡山県教育庁

教育次長	黒瀬定生

文化課

課長	大場淳
課長代理	樋本俊二
参事	葛原克人
課長補佐（埋蔵文化財係長）	高畑知功
主任	若林一憲

岡山県古代吉備文化財センター

所長	河本清
次長	高塚惠明
次長（文化課本務）	葛原克人

＜総務課＞

総務課長	丸尾洋幸
課長補佐（総務係長）	井戸丈二
総務主幹	守安邦彦
主査	石井善晴

主　　任　　木山　伸一

＜調査第三課＞

課　　長　　柳瀬　昭彦
課長補佐（第一係長）　　平井　　勝
文化財保護主査　　平井　泰男
文化財保護主査　　槙野　芳典
文化財保護主任　　谷本　琢広
文化財保護主任　　東呂木　博
文化財保護主事　　渡辺　泰夫
文化財保護主事　　弘田　和司
主　　事　　根木　智宏

発掘調査・報告書作成

平成８年度

岡山県教育委員会
教 育 長　　森崎　岩之助

岡山県教育庁
教育次長　　黒瀬　定生

文化課
課　　長　　大場　　淳
課長代理　　松井　英治
課長代理　　臼井　洋輔
参　　事　　葛原　克人
課長補佐（埋蔵文化財係長）　　平井　　勝
主　　任　　若林　一憲

岡山県古代吉備文化財センター
所　　長　　河本　　清
次　　長　　高塚　惠明
次　　長（文化課兼務）　　葛原　克人
文化財保護参事　　正岡　睦夫
＜総務課＞
課　　長　　丸尾　洋幸
課長補佐（総務係長）　　井戸　丈二
総務主幹　　守安　邦彦
主　　査　　木山　伸一

＜調査第三課＞

課　　長　　柳瀬　昭彦
課長補佐（第二係長）　　井上　　弘
文化財保護主事　　難波　拓史
主　　事　　岡本　泰典
主　　事　　小林　利晴

平成９年度

岡山県教育委員会
教 育 長　　黒瀬　定生

岡山県教育庁
教育次長　　平岩　　武

文化課
課　　長　　髙田　朋香
課長代理　　臼井　洋輔
課長代理　　西山　　猛
参　　事　　葛原　克人
課長補佐（埋蔵文化財係長）　　平井　　勝
主　　事　　三宅　美博

岡山県古代吉備文化財センター
所　　長　　籔本　克之
次　　長　　正岡　睦夫

＜総務課＞

総務課長　　小倉　　昇
課長補佐（総務係長）　　井戸　丈二
主　　査　　木山　伸一

＜調査第三課＞

課　　長　　柳瀬　昭彦
課長補佐（第一係長）　　岡田　　博

文化財保護主事　尾上　元規

報告書作成

平成10年度

岡山県教育委員会

教育長　黒瀬　定生

岡山県教育庁

教育次長　平岩　武

文化課

文化課長　髙田　朋香

課長代理　西山　猛

参事　正岡　睦夫

課長補佐（埋蔵文化財係長）　松本　和男

主事　三宅　美博

岡山県古代吉備文化財センター

所長　葛原　克人

次長　大村　俊臣

＜総務課＞

総務課長　小倉　昇

課長補佐（総務係長）　安西　正則

主査　山本　恭輔

＜調査第三課＞

課長　柳瀬　昭彦

課長補佐（第三係長）　岡本　寛久

発掘調査・報告書作成協力者

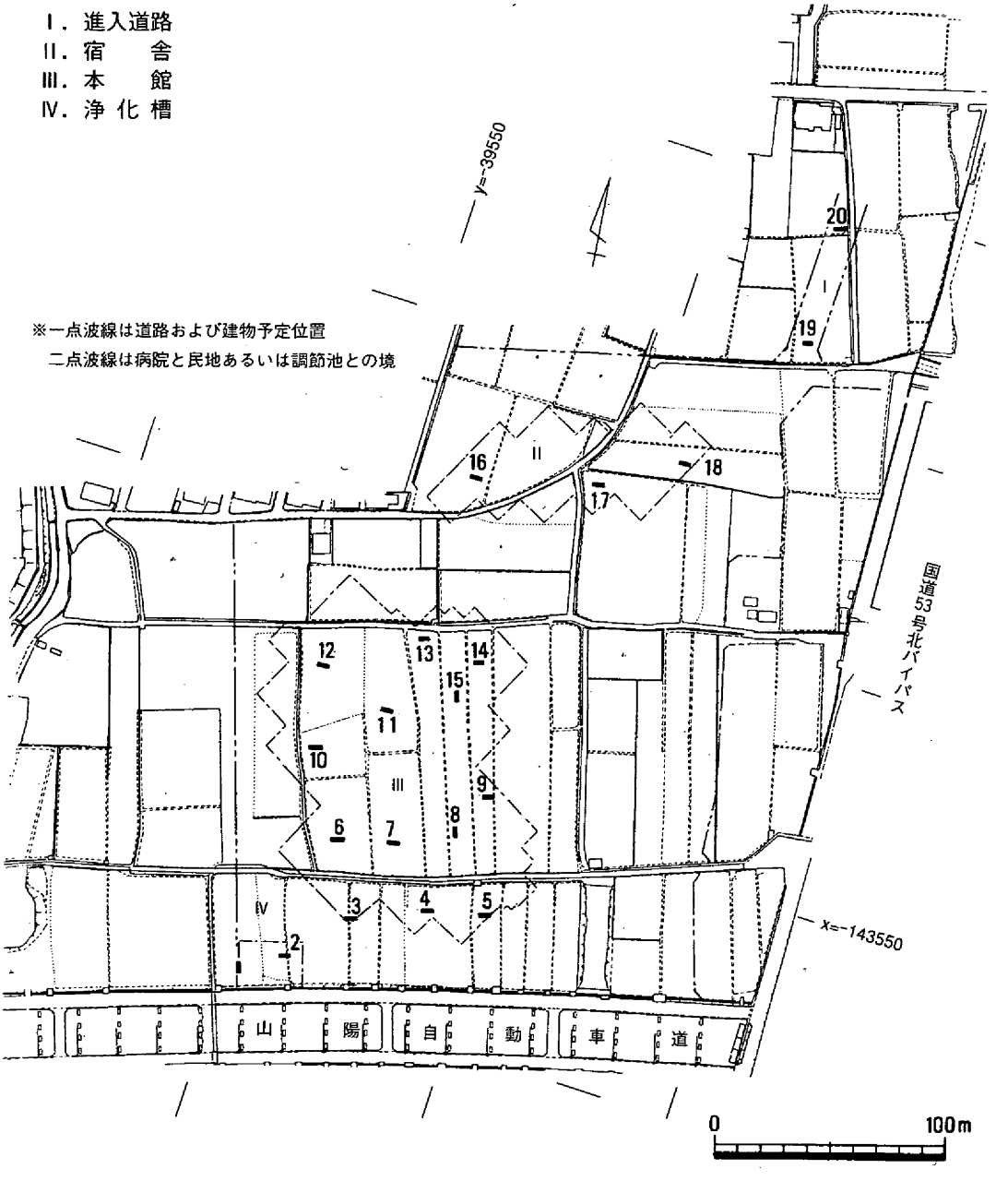
上田匡文　光延秀典　萱野百合子　三垣佐知子　村岡雅子　伴祐子　丸山啓子　田中淑子

第３節　発掘調査および報告書作成の経過

(1)　確認調査

調査概要

調査地は山陽自動車道の北に広がる水田地で、平成３年に自動車道建設に先立って行われた発掘調査では縄文時代後期から中世に至る遺構・遺物が確認されている。このことから今回の調査地内にも該期の遺構・遺物が存在する可能性が推測されたため、当初計画で進入道路、宿舎、本館、浄化槽が予定されている地点に1.5×４ｍのトレンチ20本を設定して、平成６年に確認調査を実施した（第５



第５図　確認トレンチ位置

図)。なお、調査は現地表面から人力により掘り下げを行った。

浄化槽地点〈Ｔ１・Ｔ２〉(第５・６図)　現地表面から70～80cmで明黄色粘質土層を確認し、Ｔ２ではこの下面で溝の西肩を検出した。明黄色粘質土層中にはＴ２で14世紀前半代の土師器椀が出土し、これより上層の包含層中には近世を中心として弥生時代までの遺物が混在している。このことから溝の時期は、出土遺物はないが中世以前と判断される。

本館地点〈Ｔ３～Ｔ15〉(第５～８図)　全体的に西から東にかけて明黄色粘質土層の検出面が浅くなり、地形的に東が高くなっていると推測される。遺構はＴ５～Ｔ７で明黄色粘質土層下面で、Ｔ11では上面で溝・ピットを検出した。それぞれＴ５では浅い溝とピット、Ｔ６では溝の東肩とピット、Ｔ７では褐灰色土を埋土にもつピット、Ｔ11では溝であるが、いずれの遺構からも出土遺物がなく時期は明らかでない。また、明黄色粘質土層以下の堆積層は、西側のＴ３～Ｔ７・Ｔ10・Ｔ12で白色粘質土、東側のＴ８・Ｔ９・Ｔ13～Ｔ15は褐灰色土で、両者とも南北方向に堆積している。出土遺物は、明黄色粘質土層より上層では近世遺物を中心として、弥生時代のものまでが混在してみられる。Ｔ６では古墳時代後期の埴輪片、Ｔ４・Ｔ14・Ｔ15では古墳時代後期の須恵器が出土しているが、摩滅が顕著であることから流入品と判断される。また、Ｔ８では下層の褐灰色土層から弥生時代前期を主体とする土器片が比較的まとまって出土している。

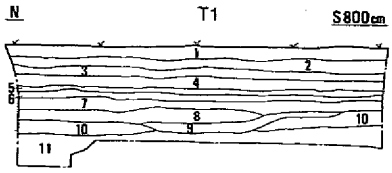
宿舎地点〈Ｔ16～Ｔ18〉(第５・８図)　現地表面から約40～60cmの深さで検出した明黄色粘質土層の状況から旧地形は東が高いと推察される。遺構はＴ16で明黄色粘質土層上面でたわみとピット、Ｔ18では下面で溝と考えられる肩を検出したが、グライ化のため不明瞭である。出土遺物は遺構からの物はなく、すべて明黄色粘質土層より上層で、近世を中心として中世までの遺物が混在してわずかにみられる。

進入道路地点〈Ｔ19･Ｔ20〉(第５・８図)　現地形同様に明黄色粘質土層が北から南に下がって状況で検出された。遺構は、Ｔ19で明黄色粘質土層上面で褐灰色土を埋土にもつ時期不明のピットを検出した。遺物は明黄色粘質土層より上層の包含層で中世を主体として古墳時代後期のものまでが混在してみられる。

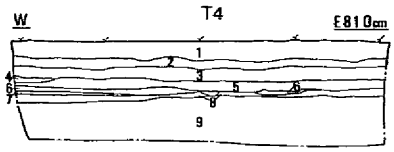
調査結果

以上、各地点における調査の概要を述べてきた。調査の結果、現地表面からの深さは各地点によってまちまちではあるが、約40～100cmの深さで明黄色粘質土層を確認し、この上下で遺構を検出した。明黄色粘質土層中にはＴ２で14世紀前半代の土器が出土しており、これより上層で弥生時代から近世の遺物が混在することから、調査地全体で中世段階に大幅な削平が行われたと考えられる。削平以後は、土層の堆積状況で鉄分の沈着層が水平に確認され、粘性の強い土質であることから判断して水田耕作が行われていたものと推察される。

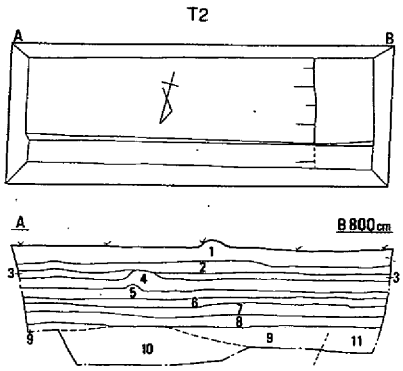
明黄色粘質土層以下については、遺構に伴う遺物がなく時期が明らかでない。上面で検出した遺構は、Ｔ16のたわみ以外は褐色の強い埋土であることから弥生時代から古墳時代の可能性が高い。また、下面の遺構はＴ８で弥生土器が出土していることから該期を中心としたものと判断されるが、山陽自動車道の発掘調査の際に縄文時代の遺構・遺物が確認されており、縄文時代まで溯る可能性もある。しかしながら、第９図の土層柱状模式図をみると明黄色粘質土層の下層の堆積土は大別して褐灰色土と白色粘質土、砂・砂質土の地点がみられる。Ｔ16では砂・砂質土層の上層に白色粘質土がみられることから、各層は先後関係があるものと推察される。このうち褐灰色土層はＴ８で弥生土器が出土し



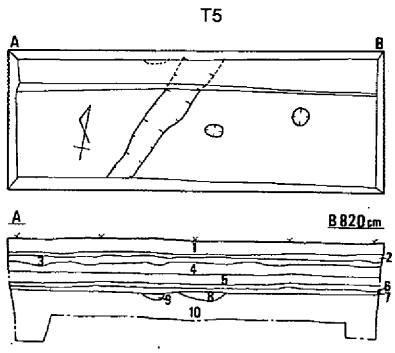
1 青灰色粘質土
2 にぶい灰白色粘質土
3 青灰色粘質土
4 灰褐色土
5 灰白色土
6 灰白色土
7 灰白色粘質土
8 灰白色粘質土
9 灰白色砂
10 明黄色粘質土
11 白色粘質土



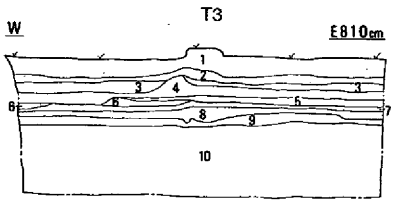
1 青灰色粘質土
2 にぶい灰白色粘質土
3 青灰色粘質土
4 灰褐色土
5 灰白色土
6 灰白色土
7 灰白色粘質土
8 明黄色粘質土
9 白色粘質土



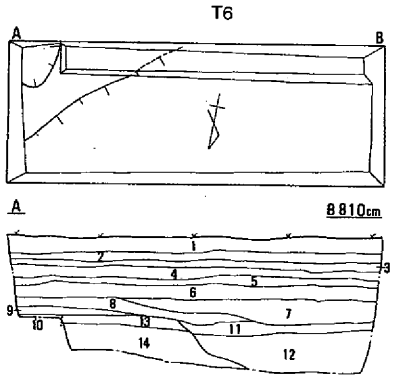
1 青灰色粘質土
2 にぶい灰白色粘質土
3 青灰色粘質土
4 灰褐色土
5 灰白色土
6 灰白色土
7 灰白色粘質土
8 明黄色粘質土
9 青灰色粘質土
10 青灰色砂（溝埋土）
11 青灰色粘質土



1 青灰色粘質土
2 青灰色粘質土
3 にぶい灰白色粘質土
4 青灰色粘質土
5 灰褐色土
6 灰白色土
7 明黄色粘質土
8 にぶい灰褐色砂（溝埋土）
9 にぶい灰褐色粘質土
（ピット埋土）
10 白色粘質土

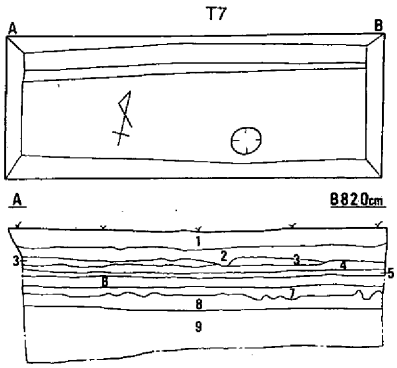


1 青灰色粘質土
2 にぶい灰白色粘質土
3 青灰色粘質土
4 灰褐色土
5 灰褐色土
6 灰白色土
7 灰白色土
8 灰白色粘質土
9 明黄色粘質土
10 白色粘質土

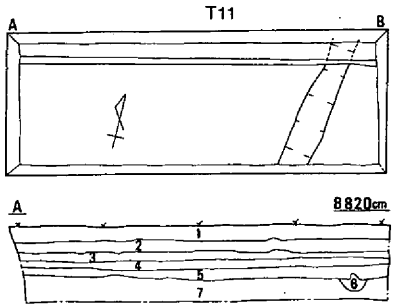


1 青灰色粘質土
2 にぶい灰白色粘質土
3 青灰色粘質土
4 灰褐色土
5 灰白色土
6 灰白色粘質土
7 灰白色砂質土
8 明黄色粘性砂質土
9 明黄色粘質土
10 暗褐灰色粘質土（ピット埋土）
11 褐灰色粘性砂質土（溝埋土）
12 褐灰色粗砂（溝埋土）
13 褐灰色土
14 白色粘質土

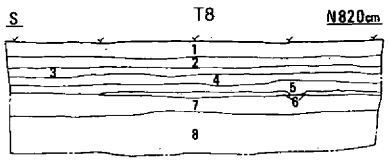
第６図　Ｔ１～６平・断面



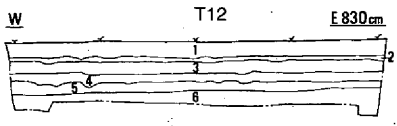
1 青灰色粘質土
2 にぶい灰白色粘質土
3 青灰色粘質土
4 灰褐色土
5 灰白色土
6 灰白色土
7 灰白色粘質土
8 明黄色粘質土
9 白色粘質土



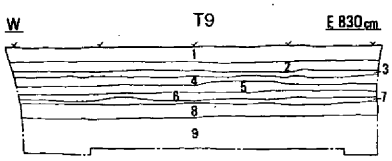
1 青灰色粘質土
2 にぶい灰白色粘質土
3 灰褐色土
4 灰白色土
5 灰白色土
6 褐灰色粘質土（溝埋土）
7 明黄色粘質土



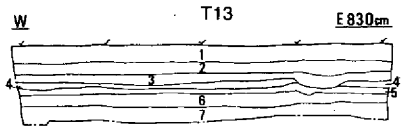
1 青灰色粘質土
2 にぶい灰白色粘質土
3 青灰色粘質土
4 灰褐色土
5 灰白色土
6 灰白色粘質土
7 明黄色粘質土
8 褐灰色土



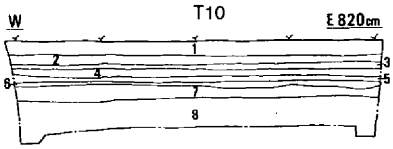
1 青灰色粘質土
2 明黄色粘質土
3 灰褐色土
4 灰白色土
5 明黄色粘質土
6 白色粘質土



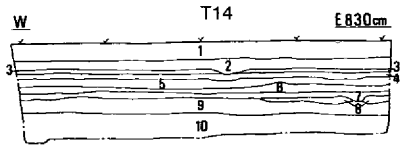
1 青灰色粘質土
2 にぶい灰白色粘質土
3 黄灰色微砂
4 青灰色粘質土
5 灰褐色土
6 灰白色土
7 灰白色粘質土
8 明黄色粘質土
9 褐灰色土



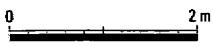
1 青灰色粘質土
2 にぶい灰白色粘質土
3 灰褐色土
4 灰白色土
5 灰白色粘質土
6 明黄色粘質土
7 褐灰色土



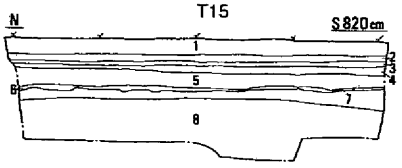
1 青灰色粘質土
2 黄灰色粘質土
3 青灰色粘質土
4 灰褐色土
5 灰白色土
6 灰白色粘質土
7 明黄色粘質土
8 白色粘質土



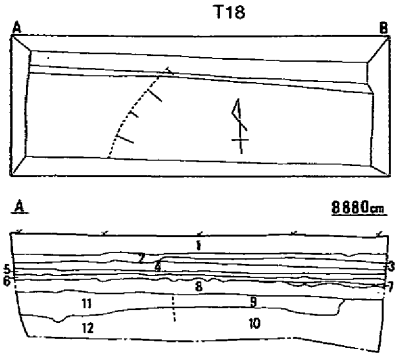
1 青灰色粘質土
2 にぶい灰白色粘質土
3 青灰色粘質土
4 灰褐色土
5 灰白色土
6 灰白色土
7 暗褐灰色粘性砂質土
8 灰白色粘質土
9 明黄色粘質土
10 褐灰色土



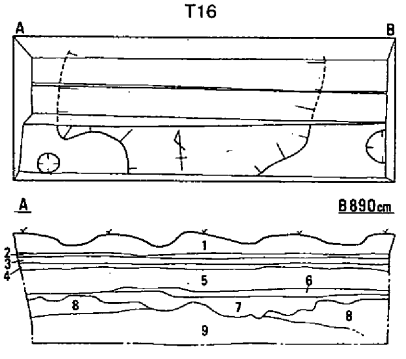
第７図　Ｔ７～14平・断面



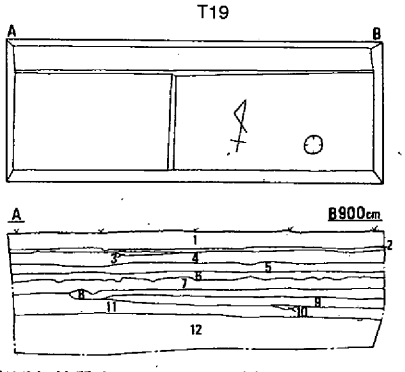
1 青灰色粘質土
2 にぶい灰白色粘質土
3 にぶい灰白色粘質土
4 青灰色粘質土
5 灰褐色土
6 灰白色粘質土
7 明黄色粘質土
8 褐灰色土



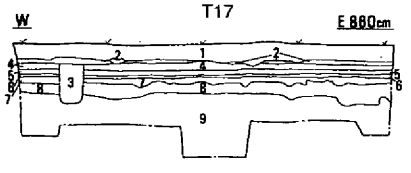
1 青灰色粘質土
2 灰褐色土
3 灰褐色土
4 灰白色土
5 灰白色土
6 暗褐灰色粘性砂質土
7 白色砂
8 明黄色粘質土
9 青灰色粘質土（溝埋土）
10 青灰色砂（溝埋土）
11 青灰色粘質土－しまり良い
12 青灰色粘性砂質土



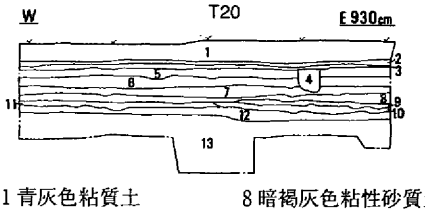
1 青灰色粘質土
2 明黄色砂質土
3 青灰色砂質土
4 灰白色砂質土
5 灰白色土
6 灰白色粘質土
7 黄色粘質土＋暗褐灰色粘質土ブロック（たわみ埋土）
8 白色粘質土
9 白色砂質土



1 青灰色粘質土
2 明黄色砂質土
3 にぶい灰白色砂質土
4 青灰色砂質土
5 灰白色土
6 灰白色土
7 暗褐灰色粘性砂質土
8 灰白色粘性砂質土
9 白色砂
10 灰白色粘質土
11 明黄色粘質土
12 褐灰色土

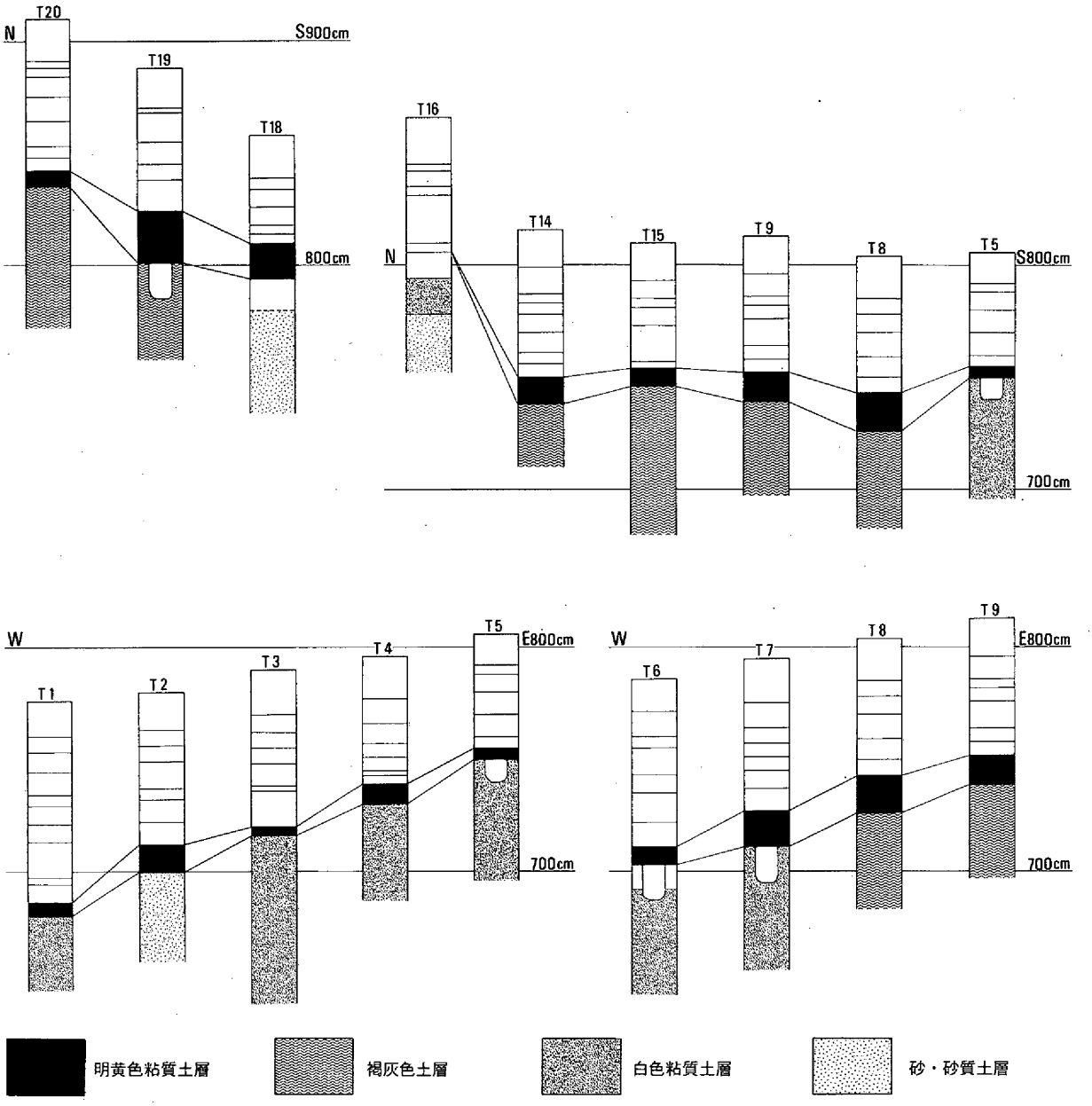


1 青灰色粘質土
2 明黄色砂質土
3 （暗渠）
4 青灰色砂質土
5 灰白色砂質土
6 暗褐灰色粘性砂質土
7 明黄色粘質土
9 褐灰色土



1 青灰色粘質土
2 明黄色砂質土
3 にぶい灰白色砂質土
4 （暗渠）
5 青灰色砂質土
6 灰白色土
7 灰白色土
8 暗褐灰色粘性砂質土
9 灰白色粘性砂質土
10 白色砂
11 灰白色粘性砂質土
12 明黄色粘質土
13 褐灰色土

第８図　Ｔ15～20平・断面



第９図　土層柱状模式図相関（深さ1/30）

ており、該期と判断できる。

確認調査は人力による調査だったため、現地表面から深いものでも約160cmの深さまでの確認に止まっており、明黄色粘質土層以下については十分な確認ができたとは言えない。土層柱状模式図をみると調査地内の旧地形は大きくみると北から南へ緩やかに下がり、東から西へはやや急に下がっているが、下層の堆積土層が地点によって異なっていることからかなり複雑な様相を呈しているものと推察される。

以上のことから、調査地全面について明黄色粘質土を鍵層として希薄ではあるが遺構が存在することが確認された。しかし、明黄色粘質土層以下の遺構については十分な確認ができなかったので、本調査の際にあらためて確認する必要がある。　（杉山）

(2)　全面調査および補足調査

調査計画の変更推移

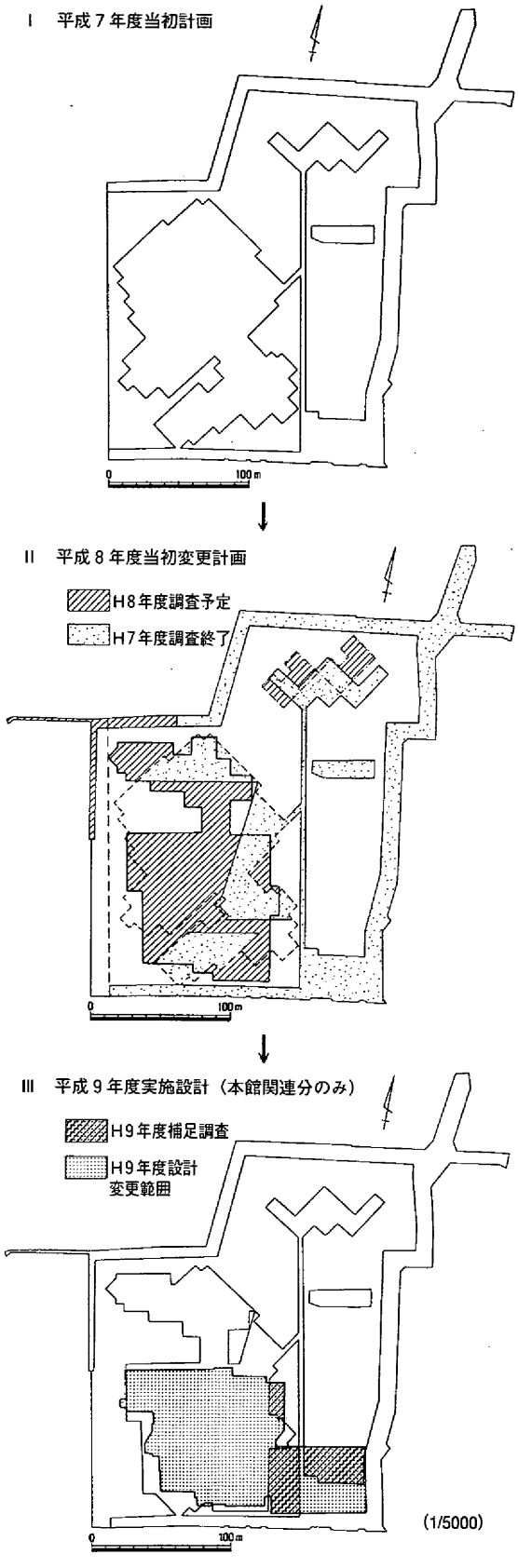
全面調査は平成７年度４月から、まず調査員３名で開始した。そして、７月から調査員２名、10月から調査員３名を加え、10月以降は年度末まで調査員総勢８名の３班体制で、年間18,000㎡の調査面積分について実施することとなった。

平成７年度当初には病院施設建設計画が定まっておらず、まず造成工事に関わる進入道路、外周水路と道路、および擁壁部分について先行して調査を進め、年度途中から明らかにされた本館および宿舎等の調査に順次移行した。また、病院側から年度途中に外来駐車場下に調整池を設置する計画が持ち上がり、一部調査着手後撤回されるなどの変更もあったが、平成７年度中に病院側から示された工事計画（工事による掘削範囲、予定を含む）は、第10図のⅠであった。

平成８年度の調査は、調査員４名の２班体制で年間12,000㎡の調査を計画し進めた。ただし、調査計画は、平成７年度末に病院側から示された大幅な設計変更（とくに本館部分）に伴い、第10図のⅡのように変更を余儀なくされた。このことは単に変更されたに止まらず、結果的に本来保存されるべき部分が余分に調査されたことになり、その期間と費用をも含めて今後に課題を残すこととなった。設計変更の大きな要因は、本館部分の北側に広がる住宅の日照権の問題だと聞き及ぶが、本館調査にかかる前に変更ができなかったことが悔やまれる。なお、宿舎の設計変更部分は調査着手後すぐに撤回されている。

調査の結果、平成８年度の調査面積は 9,945㎡で、平成８年12月末で終了し、平成９年１～３月は調査員４名で報告書整理を行った。

平成９年度は、調査員１名が年間を通じて報告書の作成を実施する計画で進められたが、平成９年５月になって国立病院側から実施設計段階での変更計画が協議に上り、当面の工事計画部分であ



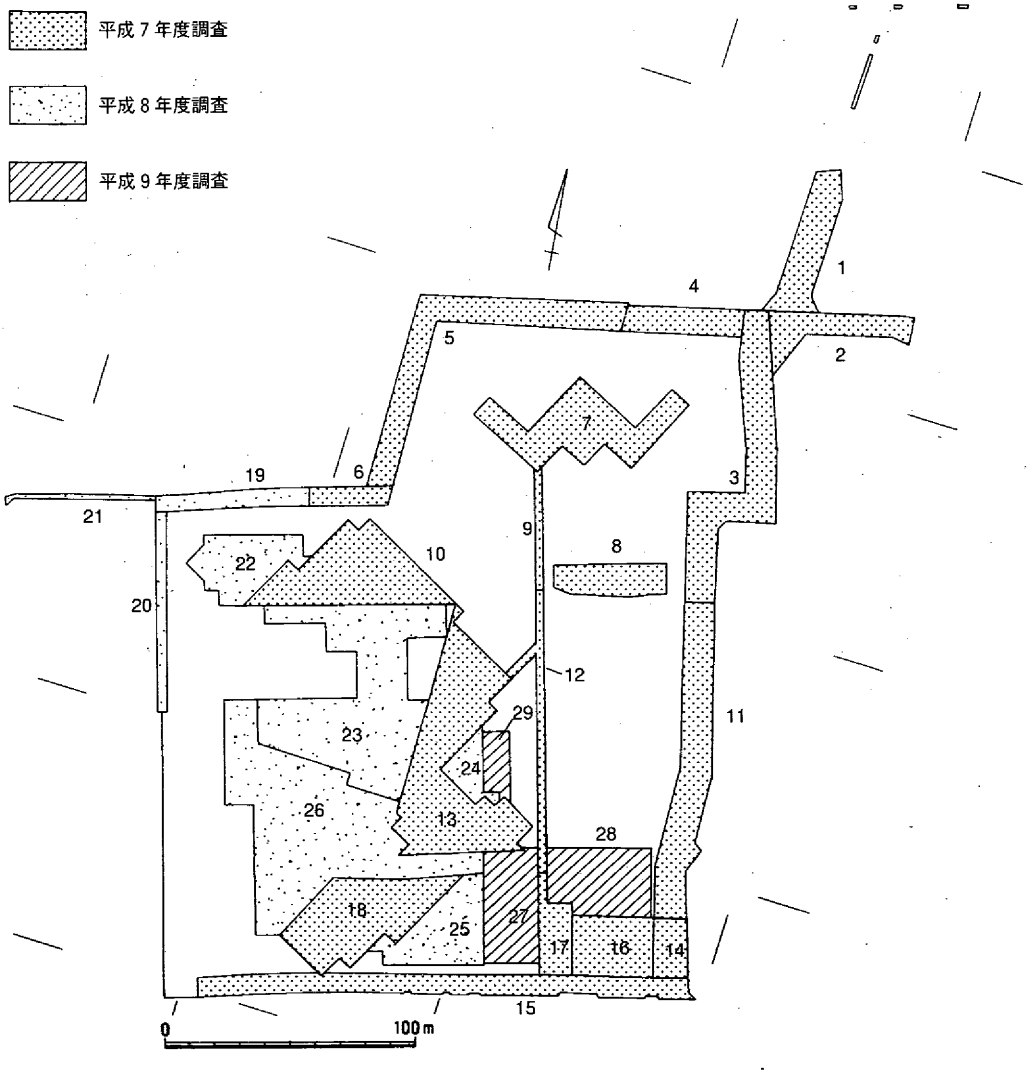
第10図　設計変更等による調査変更

る本館および付属建物の変更（第10図のⅢ）による未調査部分（約2,000㎡）について、造成工事終了（10月頃）の後直ちに補足調査を実施してほしいという要請であった。岡山県教育委員会は協議を重ねた結果、報告書作成を一時中断し調査員２名で平成９年12月～平成10年３月の４ヶ月間を調査に当て、調査による報告書作成期間減の４ヶ月分と平成９年度調査の報告書作成にかかる２ヶ月分を合わせて、平成10年度に調査員１名で６ヶ月間（４～９月）の報告書作成期間をもうけることで合意し、それに沿って実施されたものである。なお、平成９年度調査の実績面積は2,486㎡であった。

ただ、第10図のⅡの設計変更時と同様、結果的に保存されるべき部分が余分に調査されたことになり、文化財の保護側としては何としても悔いが残る。

調査概要

全面調査および補足調査は、前項でも触れたように平成７年度が調査員８名（６名で通年計算）、平成８年度が調査員４名（９ヶ月間）、平成９年度が調査員２名（４ヶ月間）で実施した。調査対象地は、恒久構造物である建物・水路を含む道路・共同溝・浄化槽などで、工事掘り方による破壊部分を想定して基本的に水路・溝は１ｍ、建物は２ｍの余掘りを加算した。また、調査区は構造物ごとに設定したが、それぞれが広範囲にわたるためと調査員の班編制との絡みなどで、細かく区分した部分



第11図　調査対象地区位置

表１　田益田中遺跡調査一覧

年度	番号	調査区	調査担当者	調査期間	面積(m²)	遺物(箱)
平成7年度	1	進入路１	平井泰・東呂本・渡辺	4.10～5.19	809	
	2	進入路２	平井泰・東呂本・渡辺	4.20～5.9・11.16～12.1	695	
	3	水　路１	平井泰・東呂本・渡辺	5.22～6.27	1,617	
	4	水　路４	平井泰・東呂本・渡辺	5.22～6.12	592	
	5	水　路５	平井泰・東呂本・渡辺	6.27～8.30・10.3～11.21	1,633	
	6	水　路６	平井泰・東呂本・渡辺	7.17～8.11	256	
	7	宿　舎	平井泰・東呂本・渡辺	8.9～9.27	1,376	
	8	調節池	平井泰・東呂本・渡辺	9.20～11.13	554	
	9	共同溝１	平井泰・東呂本・渡辺	11.6～11.24	150	
	10	本　館１	平井泰・東呂本・渡辺	11.24～3.31	1,318	25
	11	水　路2-1	弘田・根木・槙野	10.1～12.20	1,220	
	12	共同溝２	弘田・根木・槙野	12.20～1.16	333	
	13	本　館２	弘田・根木・槙野	12.20～3.31	2,947	109
	14	水　路2-2	平井勝・谷本	9.12～1.17	377	
	15	水　路３	平井勝・谷本	7.1～9.11	1,463	
	16	浄化槽	平井勝・谷本	9.12～1.17	780	
	17	共同溝３	平井勝・谷本	9.12～1.17	376	
	18	本　館３	平井勝・谷本	1.18～3.31	1,504	53
				計	18,000	187
平成8年度	19	水　路７	柳瀬・小林	5.21～6末・7末～10.11	496	
	20	水　路８	柳瀬・小林	8.1～8.23	274	
	21	市道拡幅	柳瀬・小林	8.6～10.15	180	
	22	本　館４	柳瀬・小林	5.13～6中・6末～9.17	870	
	23	本　館５	柳瀬・小林	4.8～5.23・10.7～12.26	3,178	37
	24	本　館6-1	岡本泰・難波	4.8～6.4	301	
	25	本　館７	岡本泰・難波	4.10～6.19	966	
	26	本　館８	岡本泰・難波	4.5～4.25・5.14～12.26	3,680	55
				計	9,945	92
平成9年度	27	付属建物１	柳瀬・尾上	12.4～3.6		
	28	付属建物２	柳瀬・尾上	12.4～3.20		
	29	本　館6-2	柳瀬・尾上	1.28～2.3		19
				計	2,486	19
				総計	30,431	298

もある。３年度にわたる調査地区の区分は第11図に示したとおりであり、調査区の番号は前頁の表１の番号に対応する。なお、調査区ごとの調査担当者・調査期間および調査面積等は、表１に示したとおりであり、調査総面積は30,431㎡、総遺物数は整理箱で298箱にのぼった。

発掘調査の基準は国土座標を用い、調査対象地全体を覆う20m単位のグリッドを設定し、第12図のように緯度を１・２・３などの算用数字、経度をＡ・Ｂ・Ｃなどのアルファベットの大文字で示し、両者の交点の名称（例えば17Ｊ・20Ｋなど）をその南東側の20m四方の範囲の呼称とした。

発掘調査は確認調査時の層位関係を参考にして、基本的に現水田層および近世水田層までの40～50cmの深さを重機によって排土し、以下を手掘りで進めた。しかし、平成７年７月下旬になって、水路６区の調査中に弥生時代前期の遺構検出面下約50cmに縄文時代後期の河道の存在が判明し、それ以降はそれまでに弥生時代前期までが終了していた調査区も含めて、再度約50cm分を重機で掘り下げることになった。

調査区全体をとおして、検出された遺構の時期は大きく分けて、縄文時代後・晩期、弥生時代、中世以降で、縄文時代はおもに河道、弥生時代はおもに前期の土壙墓を含む土壙と前期～中期の溝、中世以降はおもに中世～江戸時代後期の土壙などであった。遺物は弥生時代の溝に伴う前期～中期の土器が圧倒的に多く、同時代の石器も比較的多く出土している。

なお、発掘調査にかかる当事業埋蔵文化財保護対策委員会は、平成７年度に２回、平成８年度に２回、平成９年度に１回（報告書作成を兼ねる）を現地で開催し、委員の先生方から多くの御助言と御指導を賜った。

（柳瀬）

(3)　報告書の作成

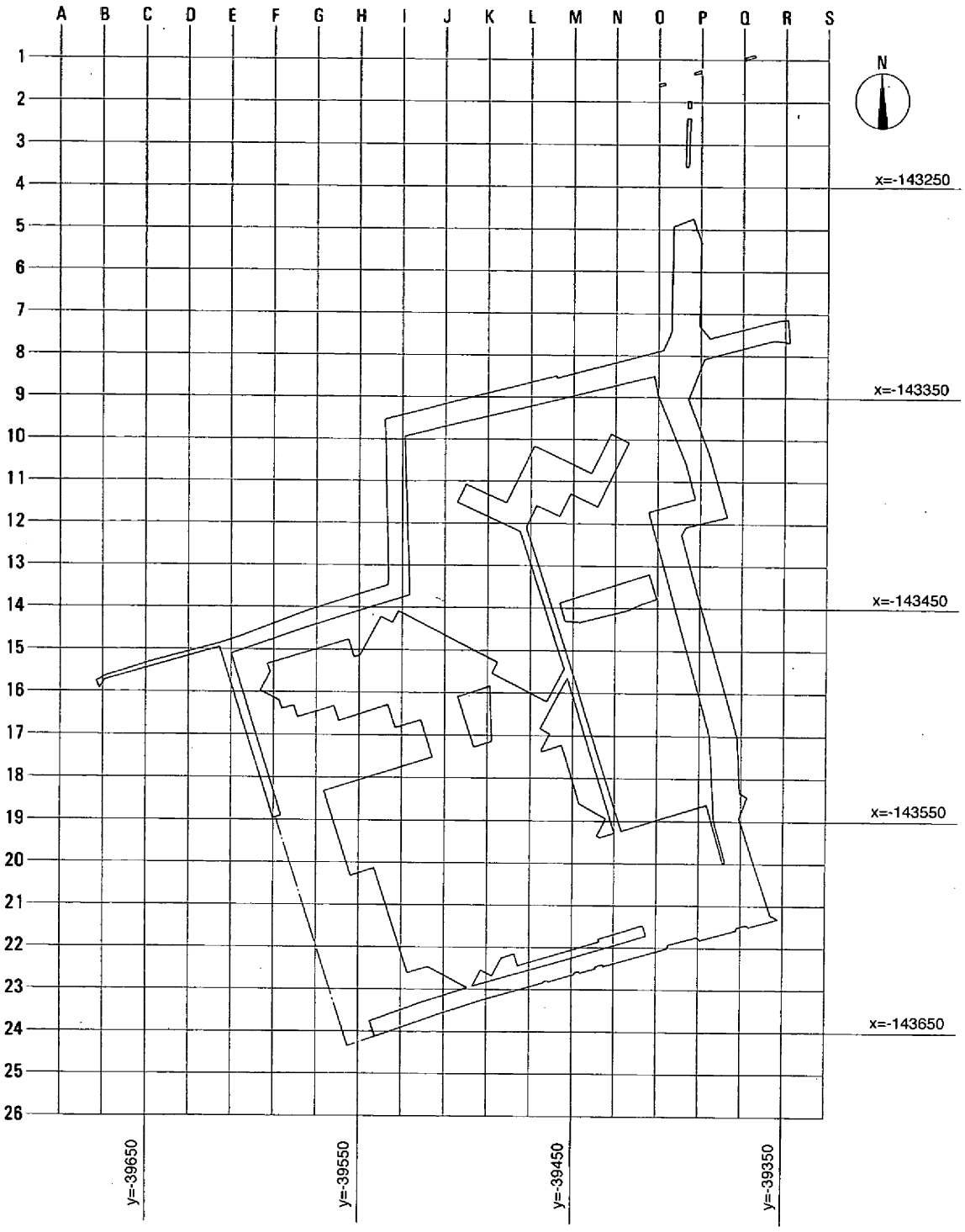
報告書の作成期間は、遺構総数と出土遺物総数および整理の難易度等から調査員１名で24ヶ月が割り出され、平成８年度の通年予定であった調査が平成８年12月末で終了することが判明した時点で、調査担当の４名の調査員が引き続いて平成８年度１～３月まで整理に当たり、平成９年度に調査員１名が通年で報告書作成を担うことになった。しかし、平成９年度に実施設計の変更に伴う補足調査に作成期間を割かれ、結果的に平成９年度は調査員１名で８ヶ月間、そして新たに平成10年度４～９月までが作成期間となり、報告書は平成10年度内刊行となった。

整理・報告書の担当は、調査に関わった13名の調査員のうち４名が関わったが、その期間は４名のうち３名が３ヶ月間、１名が通算17ヶ月間であった。報告書作成期間の当初は、復元作業と併行して掲載遺物の選考を行い、同時に時期別の掲載遺構の選考も行った。

遺物総数約300箱のうち、その大半は土器片であり、またその９割以上が弥生土器であったが、溝に伴った土器が多かったためか完形土器はほとんど無く、さらに図示に耐える土器片も箱数の割には少ない選考結果となった。遺構はまとまりの付かない柱穴状遺構を除いて、大半の遺構を掲載した。

なお、遺物を含まない遺構の時期については、検出レベル・覆土の状況・平面形態・周辺の時期の判明した遺構との比較などから決定した。

遺構提示の方法は、調査対象範囲が東西約300m、南北約400mと広くかつ調査区が細分されたことにより、調査区ごとの提示は煩雑になると予想されたため、編集方針として全体的に通しで提示を行い、調査区を越えて存在する溝などで明らかに同一と考えられる遺構は、調査区が違っても同一遺構名とした。そして、基本的に各遺構の執筆は各調査担当者が執筆し、調査区が複数にまたがる場合は



第12図　調査対象地グリッド（1/3000）

一つの遺構を各調査担当者ごとに、調査区での状況を併記することとした。また、掲載遺構・遺物がある程度決定した段階で、縄文時代後・晩期、弥生時代、古墳時代～古代、中世以降の４つの節を設けて遺構・遺物の概要を記述し、遺構・遺物および図番号も通し番号にする方法を採った。

なお、掲載した遺構の浄書・遺物の実測および浄書の一部を、協力者一覧に明記した補助員・整理作業員の援助を仰いだが、基本的には編集担当の柳瀬が行い、その責に帰すものである。　（柳瀬）

第３章　遺構・遺物の概要

第１節　縄文時代の遺構・遺物

隣接する山陽自動車道の調査で、弥生時代の基盤層下に旧河道の存在が知られ、当調査区もその予測のもとに進めた結果、少なくとも縄文後期土器を包含する６条の河道と同晩期土器を包含する２条の河道、10基の土壙および８条の溝、たわみ状の大型土壙等の検出をみた。

縄文晩期の遺構は、弥生前期の遺構検出面とほぼ同レベルの海抜7.2m前後で検出でき、縄文後期の遺構はそれより50～70cm下位で検出可能であった。河道はいずれも蛇行が著しく、おもに微砂・細砂・粗砂で埋没していたが、底近くで比較的多くの縄文土器片と葉や小枝などの有機質、ドングリ・トチなどの種子、そして部分的に流木も認められている。とくに流木は、根がついたままの太さ50cmを越えるものもあり、当時かなり大規模な洪水が近辺で起こったことを推定させる。また、後期の河道１出土流木の樹種同定（付載１）によれば、流路沿いの河畔にはムクノキやムクロジなどの広葉樹、谷斜面にはモミなどの針葉樹が生育していたとみられる。

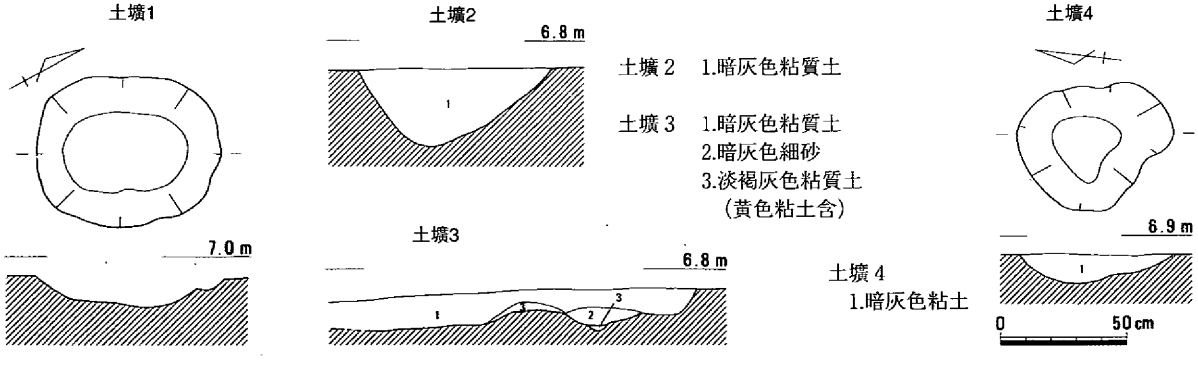
縄文後・晩期の遺物は、土器約600片（うち２割強が後期）、石器約30点などを数え、縄文土器はそれらの約2/3、石器はほぼ全点の図を本書に示した。また、図示した遺物の大半について写真図版にも掲載し、とくに復元不可能な小片は実大で扱い、観察しやすく心がけた。　（柳瀬）

(1)　土　　壙

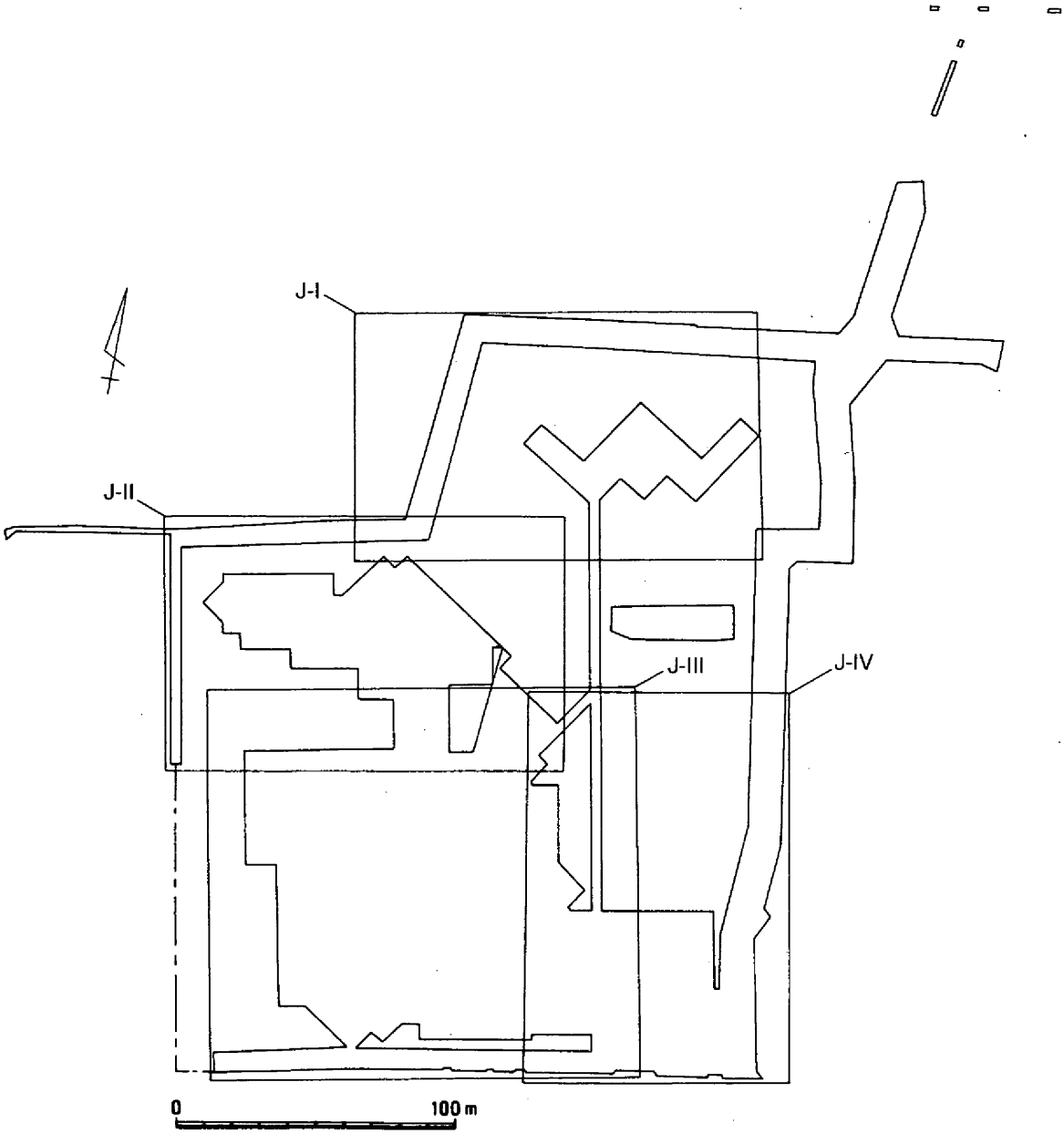
土壙１・２（第13・15図）

水路５区に位置する。いずれも弥生時代以降の調査を終了させた後に、縄文時代の河道を検出するために粘土層を1.5m前後掘り下げた面において検出できた。土壙１は74×58cmの楕円形で、深さは12cmを測る。埋土は暗褐灰色粘土であった。土壙２は溝状を呈しており、幅75cm前後で、長さ約３ｍを検出した。いずれも人為的なものかどうか不明確である。

また出土遺物がないため時期についても明確ではないが、検出レベルなどから後期～晩期ではなかろうか。　（平井泰）



第13図　土壙１～４



第14図　縄文時代遺構配置図範囲(1/2,500)

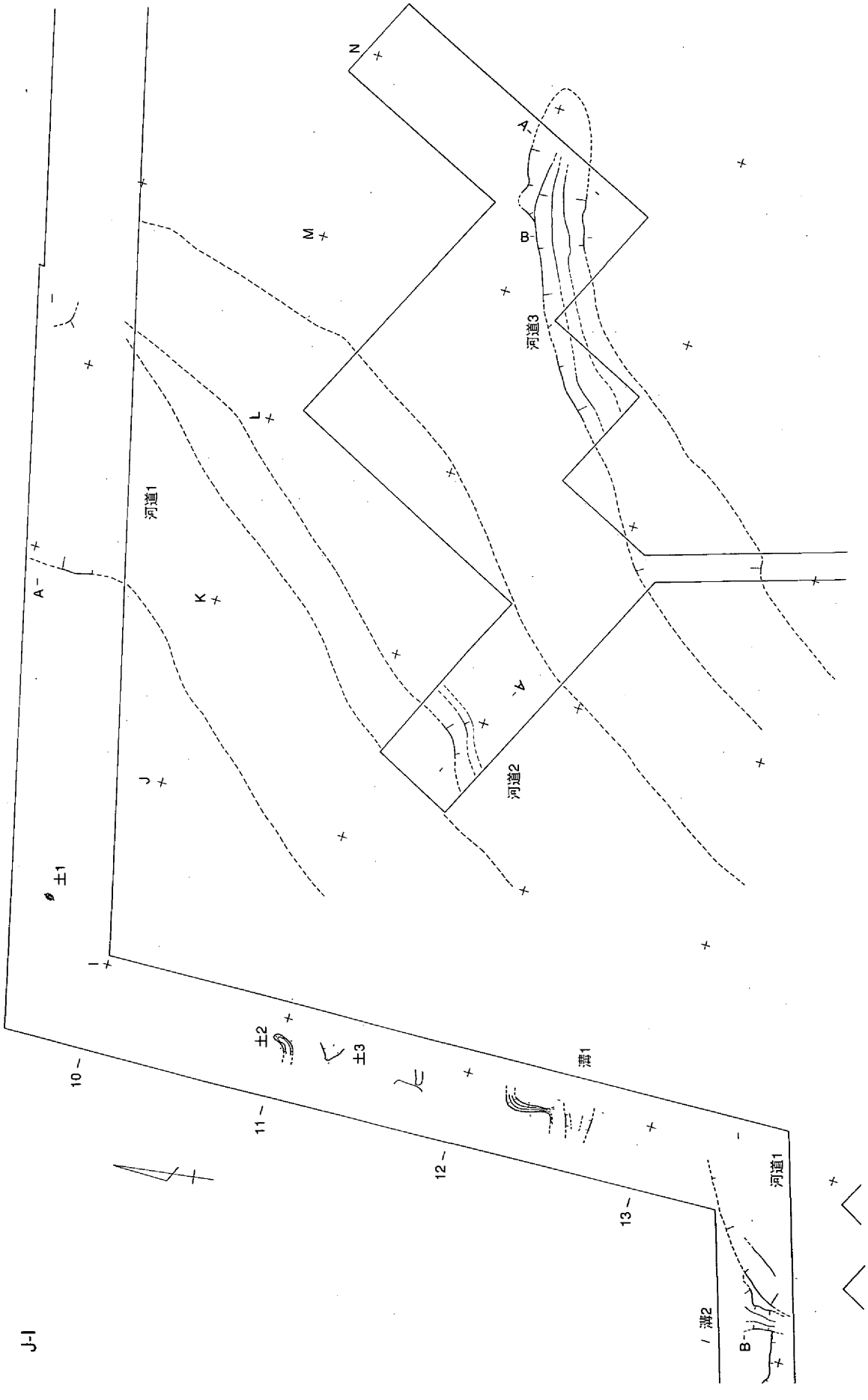
土壙３・４（第13・15図）

土壙３は土壙２の南に位置し、同じ面で検出した。平面形は三角形状を呈し、深さは最大でも約15cmで、底面には凹凸があった。土壙４は宿舎区に位置し、縄文時代の河道検出面において検出できた。平面形は不整形で、深さも約10cm残存していたにすぎない。

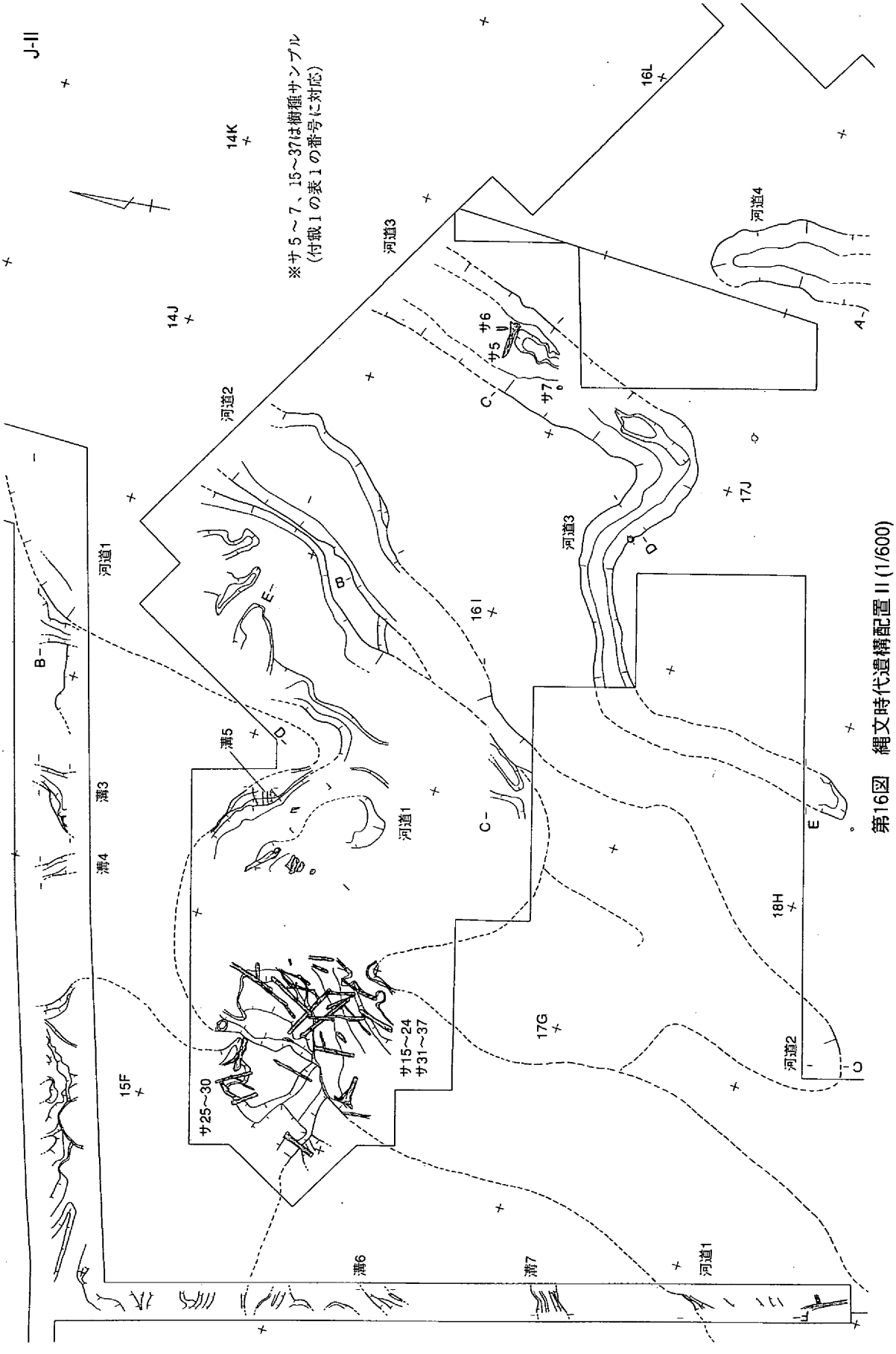
土壙１・２と同じく、いずれも人為的なものかどうか不明確で、時期も出土遺物が無く、後期～晩期の幅でしか捉えきれない。（平井泰）

土壙５（第17・34図、図版２－１）

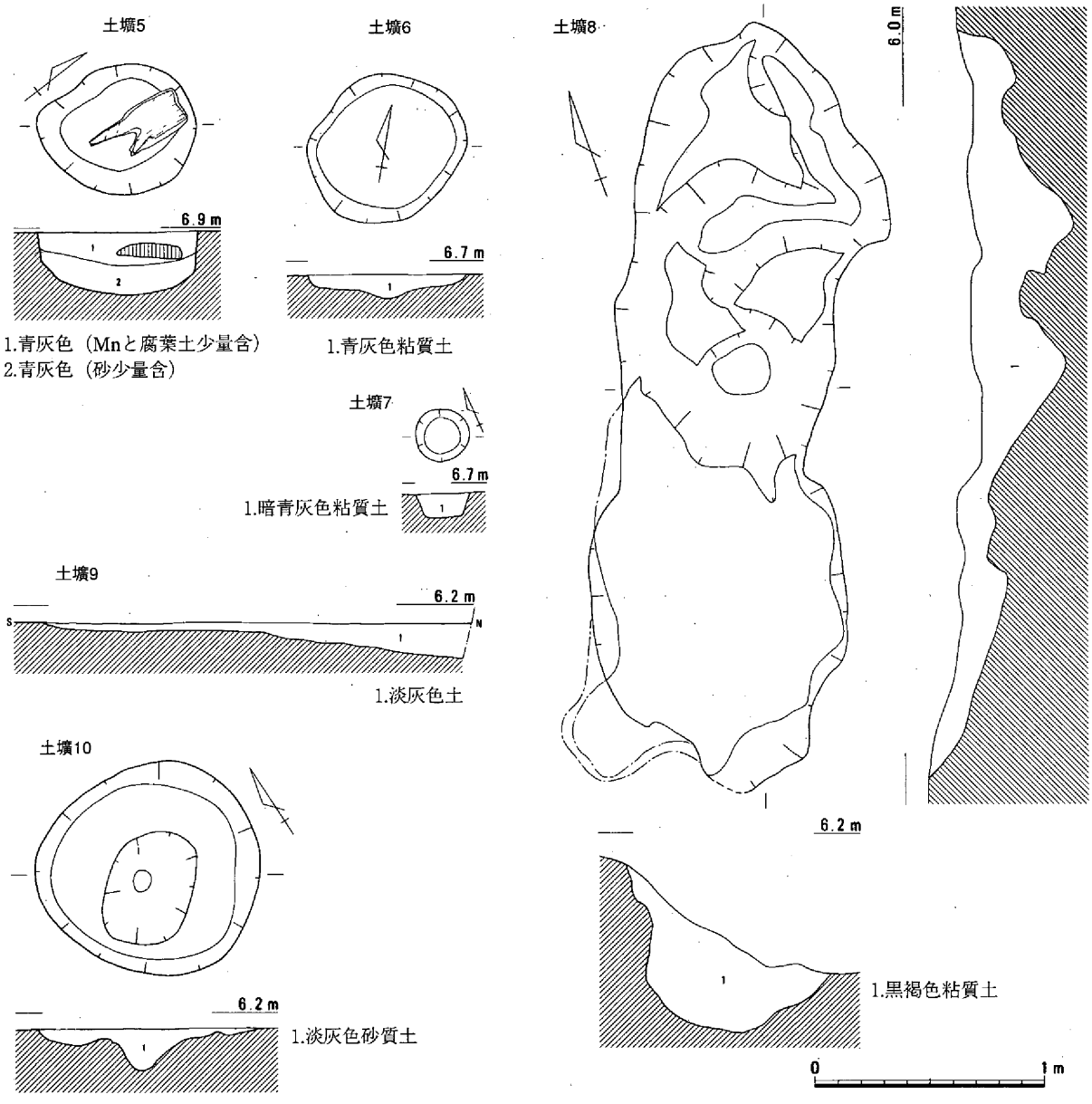
土壙５は16Ｉ区のほぼ中央にあり、河道３の西側の肩部に位置する。先後関係は、河道３より後出する。主軸はＮ－39°－Ｅで、長軸長70cm、短軸長57cm、深さは検出面から26cmを測る。平面形態は楕円形で、断面形態は皿状である。比較的上層部から、木材が１点検出された。（小林）



第15図　縄文時代遺構配置Ⅰ（1/600）



第16図　縄文時代遺構配置Ⅱ(1/600)



第17図　土壙５～10

土壙６（第17・34図、図版２－２）

この土壙は、17Ｊ区の北西側に位置する。近接する土壙は存在しない。主軸はＮ－80°－Ｅを測り、長軸長70cm、短軸長65cmで、平面形態は円形である。深さは検出面から10cmで、断面形態は概ね皿状であるが、最深部付近が突出する。なお遺物は出土しなかった。（小林）

土壙７（第17・34図）

18Ｈ区の北側に位置し、北東側には河道３が近接する。主軸はＮ－65°－Ｗを測り、長軸長24cm、短軸長23cmで、平面形態は円形である。深さは検出面から11cmで、断面形態は皿状である。（小林）

土壙８（第17・34図、図版２－３）

19Ｌ区の東端に位置する。縄文時代晩期の河道５の肩口からやや下がった位置で検出した。

遺物は出土していないものの、検出レベルや埋土などから縄文時代晩期の可能性が強く、また平面形・断面形ともに不整形であることから風倒木痕とも思われる。（弘田）

土壙９（第17・34図）

本館３区の北辺で検出された土壙であるが、北側を蛇行しながら北東から南西に流走する、河道５の南岸である可能性が強い。埋土は淡灰色砂で、遺物は出土しなかった。　（平井勝）

土壙10（第17・34図）

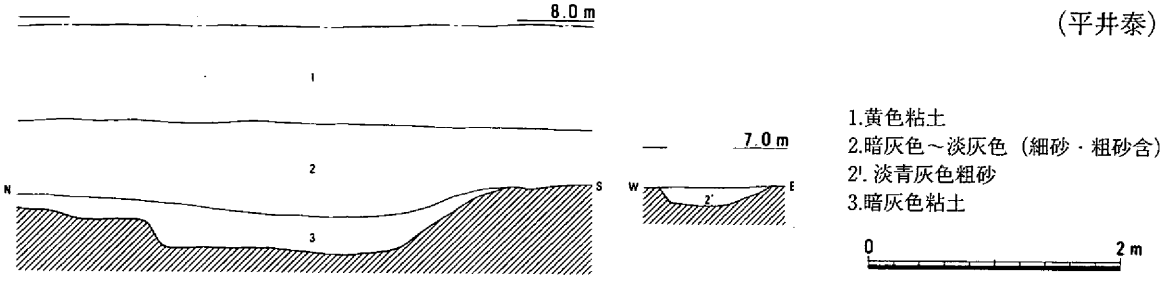
縄文時代の微高地上面と考えられる灰黒色土上面で検出された土壙で、本館３区の西寄りに位置する。平面形は径１ｍあまりの円形を呈し、深さは浅く、底面はやや凹凸をもち中央部はさらに一段深くなる。遺物が出土していないため時期は明確でないが、後・晩期と推定される。　（平井勝）

(2)　溝

溝１（第15・18図）

水路５区の南端部に位置し、土壙１～３と同じく縄文時代の遺構面で検出できた。平面形状は東西方向の溝に南北方向の細い溝が接続するようになっており、埋土は粗砂および粘土であった。肩口や断面形が明瞭ではなく人為的なものかどうか不明確である。時期も出土遺物が無く、後期～晩期の幅でしか捉えられない。

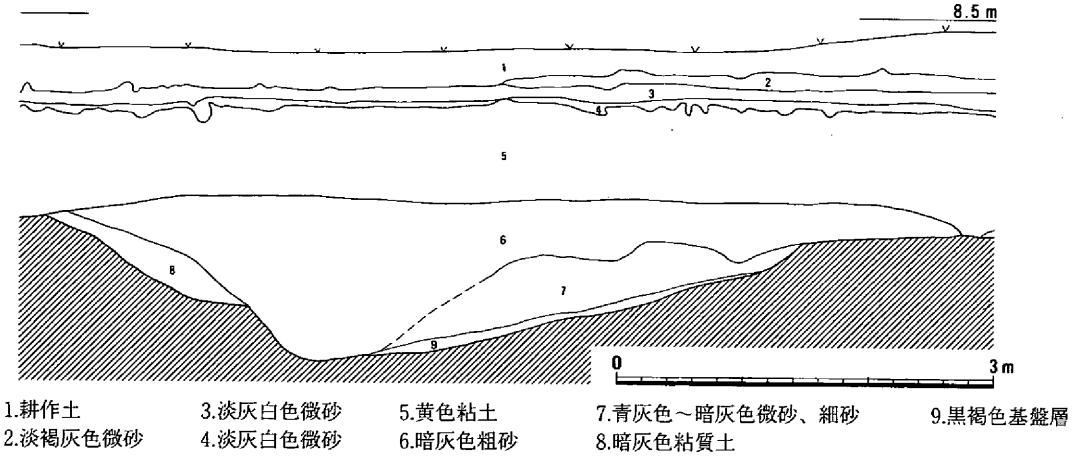
（平井泰）



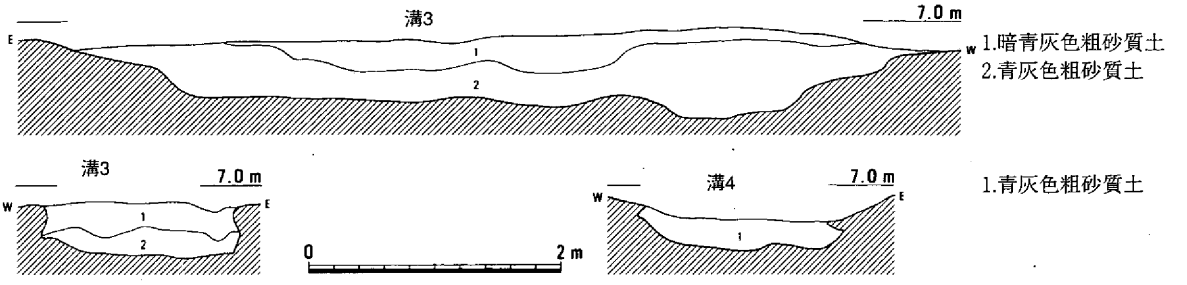
第18図　溝１断面

溝２（第15・19図）

水路６区において、縄文後期の河道１と同一面で確認できた。幅２ｍ前後で南北方向に検出でき、北壁部分では東側が膨らみ、幅は６ｍを越えている。肩口や断面形状は明瞭でなく、溝１と同じく人為的なものかどうか不明確である。また溝１と２は、底の海抜高や埋土の状況は異なっているが、検出面が海抜6.7ｍ前後と同じであることや位置関係からつながる可能性が考えられる。土器が出土し



第19図　溝２断面



第20図　溝３・４断面

ていないため、時期は後期～晩期とせざるを得ない。　（平井泰）

溝３・４（第16・20図、図版３－1・2）

溝３は14Ｇ区に位置し、北東側から南西側に広がりながら流走する。おそらく同区の南西端で、河道２に合流すると思われる。

溝４は14Ｆ・Ｇ区に位置し、北西側から南東側へ流走する。おそらく同区西中央部で、溝３に合流すると思われる。　（小林）

溝５（第16・21図、図版３－３）

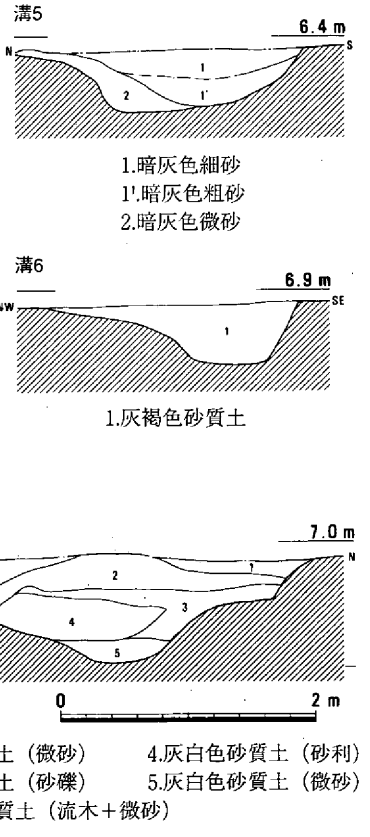
溝５は、15Ｇ区の北東側に位置し、ほぼ東西方向に流走する。溝の幅は、肩部で２ｍ前後、底部で１ｍになる。深さは48cmを測り、堆積土は粗い砂質土である。遺物は出土しないが河道１に切られており、今回の調査区の中で最も古い溝になる。　（小林）

溝６（第16・21図）

溝６は、15Ｅ区の南東端と16Ｅ区の中央部で確認される。南西側から北東側に流走し、15Ｆ区の南西端で河道２に合流する。溝の幅は、肩部で 1.9ｍ前後、底部で 0.7ｍ前後になる。深さ48cmを測り、堆積土は粗い砂質土になる。（小林）

溝７（第16・21図）

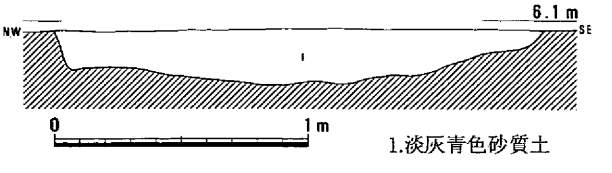
溝７は、17Ｅ区の中央部に位置する。16Ｆ区付近で河道１から発し、北東側から南西側へ流走する。溝の幅は、肩部で３ｍ前後、底部で 0.8ｍ前後になる。深さは90cmを測り、堆積土は砂礫層・砂利層・砂質土の互層となる。　（小林）



第21図　溝５～７断面

溝８（第22・34図）

本館３区の西端に位置し、縄文時代の微高地を形成する灰黒色土上面で検出された溝である。ほぼ南北に流走し、延長７ｍを検出したが、南端は河道５に取り付くものの、北端は調査区外へ延びるため明確でない。規模は幅1.9ｍ、深さ20cmを測る。遺物は出土していないが、後・晩期と推定される。　（平井勝）



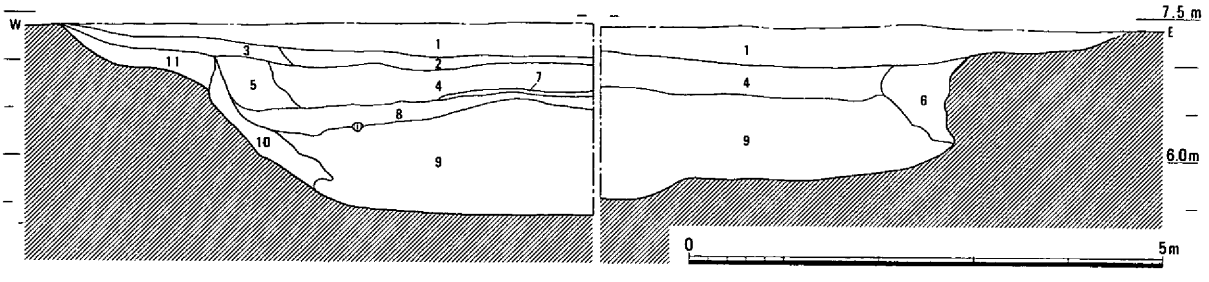
第22図　溝８断面

(3)　河　　道

河道１（第15・16・23～31、巻頭図版１、図版４・５－１・43・47－２・65）

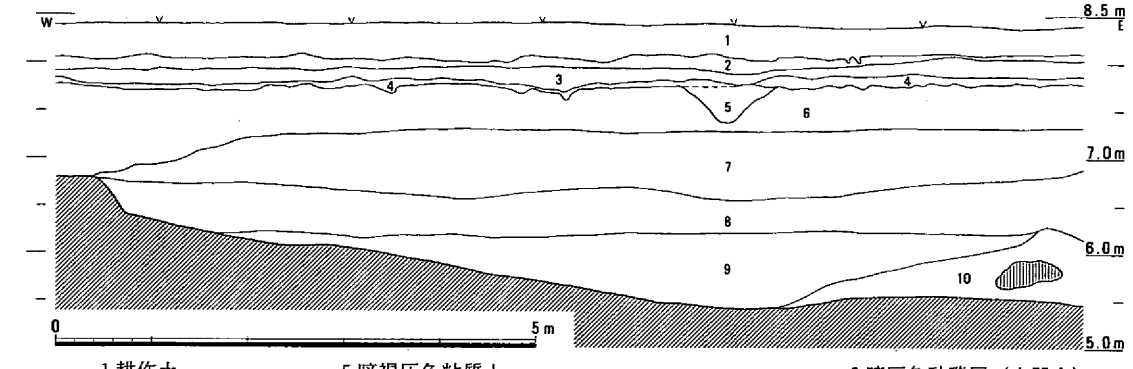
水路５・６区、本館１・５・４区、水路８区にわたって検出された河道である。水路５区では東端部において検出できた。検出面は海抜約7.4ｍである。東西幅は北壁で約26ｍを測る。深さは最深部で検出面から約２ｍで、海抜高は約5.4ｍである。西側の肩はほぼ南北方向に検出できたが、東側では北西－南東方向に肩は検出できた。遺物としては土器がおもに最下層の灰色砂礫層（図の９層）から少量ではあるが出土した（第23図上段）。図示した土器は後期中葉の津雲Ａ式から彦崎Ｋ２式前後のものであろう。水路６では東端部において、幅約15ｍにわたって検出できた。検出面は海抜約6.7ｍで、深さは検出面から約1.2ｍであった。埋土のうち、８層には自然木や葉・木の実を多く含んでおり、９･10層の砂礫層・粗砂層からは少量ではあるが土器片やサヌカイト片が出土した（第23図下段）。本館１区では西半部において検出できた。東側の肩は図のように検出できたが、西側の肩については本館１区内では確認することはできなかった。検出面は海抜約6.6ｍで、深さは一定していないが最深部で約２ｍを測る。第24図の断面図では６～21層までが河道１に相当し、後述する河道２より新しいことが確認できた。埋土中には粘土や砂が複雑に堆積していたが、最下層には粗砂があり、おもにこの中から土器や石器が出土した（第28～30図）。また中位の層には自然木が多く埋没していた。出

A



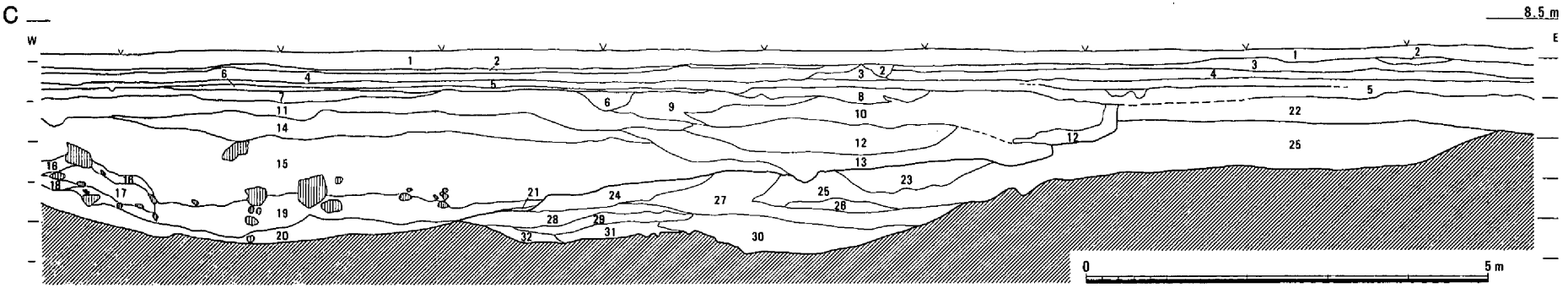
1.淡灰色粘質土
2.青緑灰色微砂
3.青緑灰色細砂、粗砂
4.暗青緑灰色粘土
5.暗青緑灰色粘土（青灰色細砂）
6.暗茶褐色粘土（炭含）
7.暗青茶灰色微砂
8.黒茶灰色粘土（基盤層）
9.灰色砂礫層（部分的に黒茶灰色粘質土＜基盤層＞含）
10.暗茶灰色粘質土
11.暗～黒灰色砂質土

B



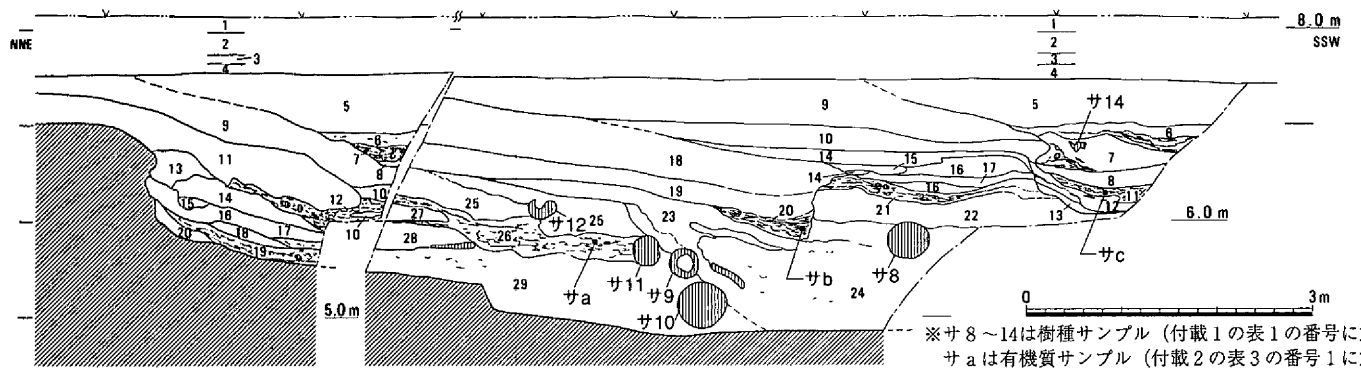
1.耕作土
2.淡褐灰色微砂
3.淡灰白色微砂
4.淡灰白色細砂、微砂
5.暗褐灰色粘質土
6.黄色粘土（淡灰色粘土）
7.淡青灰色微砂
8.黒褐色基盤層（自然木・葉・木の実含）＜縞状＞
9.暗灰色砂礫層（土器含）
10.淡灰色粗砂（小礫混）

第23図　河道１〈A･B〉断面(1/80)



1.暗褐色粘質土（耕作土）
2.褐色粘質土
3.淡灰褐色粘質土
4.灰褐色粘質土
5.褐灰色粘質土（弥生時代基盤）＜Mn層＞
6.淡青灰色細砂、微砂
7.淡灰青白色微砂層
8.橙黄白色砂
9.灰黄白色砂礫層
10.淡橙黄白色砂礫層（小石混）
11.橙黄白色細砂、粗砂、礫混じり
12.淡灰黄白色細砂、粗砂
13.（土層不明）
14.淡灰白色細砂、粗砂、礫混じり
15.灰白色砂礫層
16.灰黒色炭化層
17.灰白色細砂、礫混じり
18.淡灰白色微砂
19.暗灰黒色炭化層（木片多含）
20.灰白色砂礫層
21.灰白色細砂
22.橙黄色粘質土（弥生時代基盤）
23.暗灰黒色炭化層、粘質土（木片含）
24.淡灰白色細砂、微砂
25.淡緑灰色粘質微砂
26.淡灰白細砂層
27.灰色粘質土
28.淡褐灰色粘質土
29.灰白色細砂
30.暗灰黒色粘質土
31.淡灰色細砂
32.褐灰色粘質土

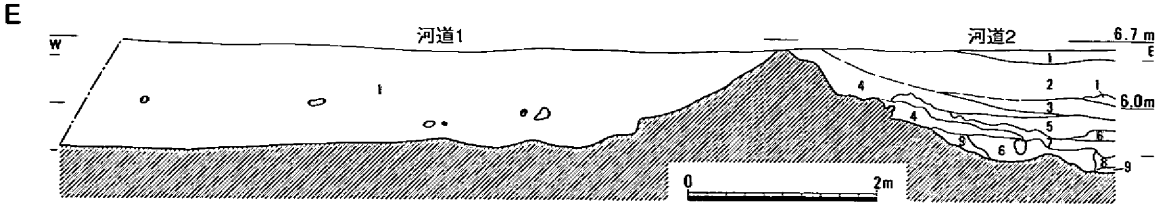
第24図　河道1・2〈C〉断面（1/80）



※サ8～14は樹種サンプル（付載1の表1の番号に対応）
サaは有機質サンプル（付載2の表3の番号1に対応）

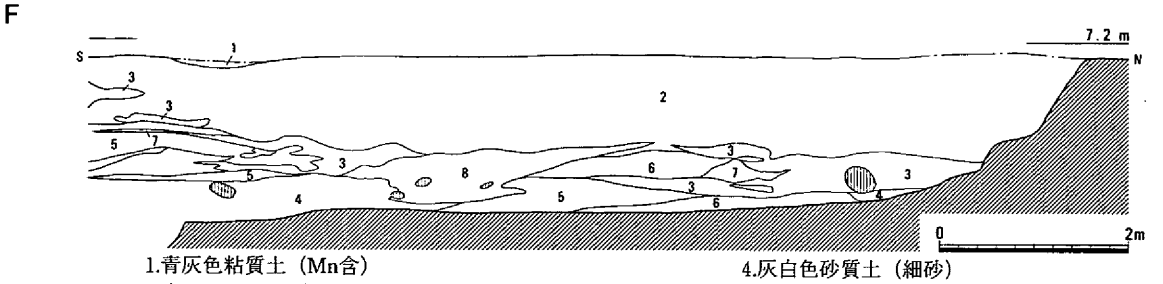
1.現水田耕土
2.床土＋褐色粘質土
3.灰色粘（質）＋＜中世？＞
4.黄色粘（質）土
5.淡青灰色微砂（シルト質）＜黄灰色砂質土、淡緑灰色砂質土＞
6.茶褐色細砂（木質多く含）＜暗緑灰色細砂、有機質（砂分多）＞
7.黄茶褐色粗砂（部分的に細砂）＜木枝・葉＞
8.黄褐色粗砂（淡灰色粗砂）
9.淡青灰色粘質微砂、淡（緑）灰色細（微）砂
10.暗灰色砂質土（部分的に有機質含）、淡灰色細砂
11.淡（緑）灰色砂質土、有機質、木質
12.（上部に粗砂・細砂含）
13.青灰色粘土、砂、砂質土
14.淡白色細砂、暗灰色粘質土
15.粗砂、砂質土
16.淡緑色細砂、黄褐色粗砂
17.淡青灰色～灰色細砂（シルト含）
18.暗灰色微砂、淡青灰色粘質微砂
19.淡青灰色粘質土（有機質＋微砂）
20.淡青灰色微砂（有機質）
21.細砂（有機質含）
22.淡灰色粗砂
23.暗青灰色砂質土（細砂含）
24.有機質、粗砂
25.淡黄灰色細砂（部分的に木質層）
26.有機質（多）
27.褐色粗砂
28.褐色粗砂、細砂
29.有機質、粗砂

第25図　河道1〈D〉断面（1/80）



1.灰白色～灰色微砂、粗砂、小礫（木材・葉・種子含）
2.緑灰色粘質土
3.灰茶色粘土
4.淡緑灰色微砂、細砂
5.茶灰色微砂、細砂
6.黒灰色粘質土（木材片・種子含）
7.淡灰色微砂、細砂
8.緑灰色粘質土
9.淡緑灰色粘質土

第26図　河道１・２〈E〉断面（1/80）

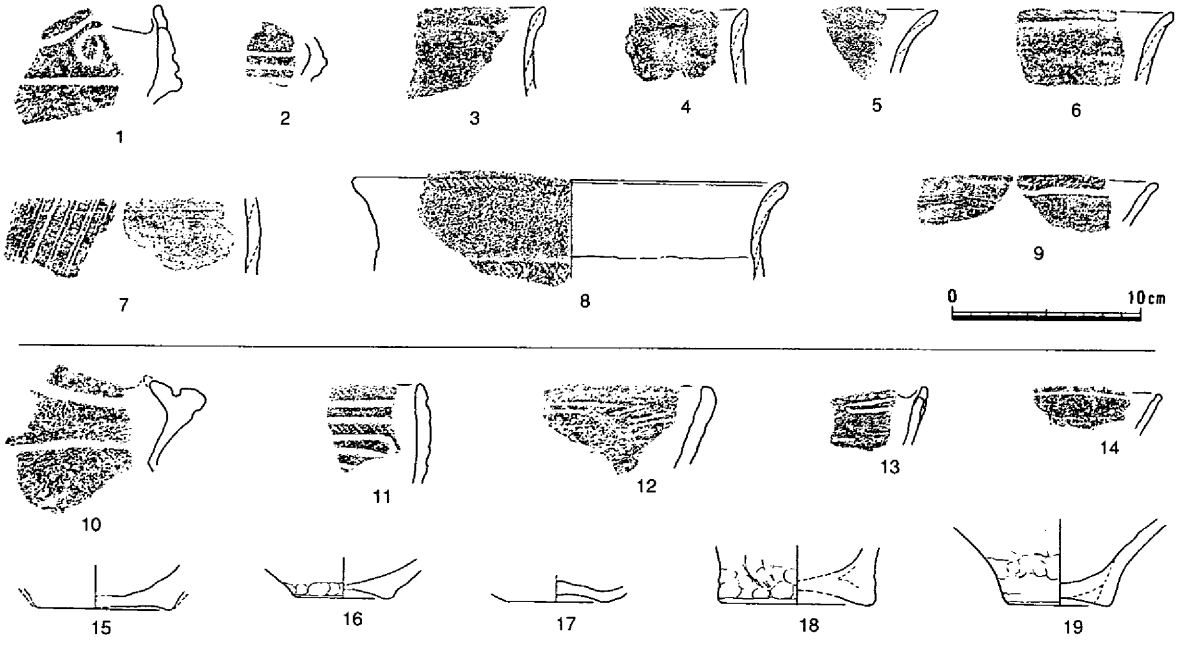


1.青灰色粘質土（Mn含）
2.青灰色粘質土（微砂）
3.黒灰色粘質土（流木片混入微砂）
4.灰白色砂質土（細砂）
5.灰白色砂質土（砂利）
6.灰白色砂質土（砂礫）

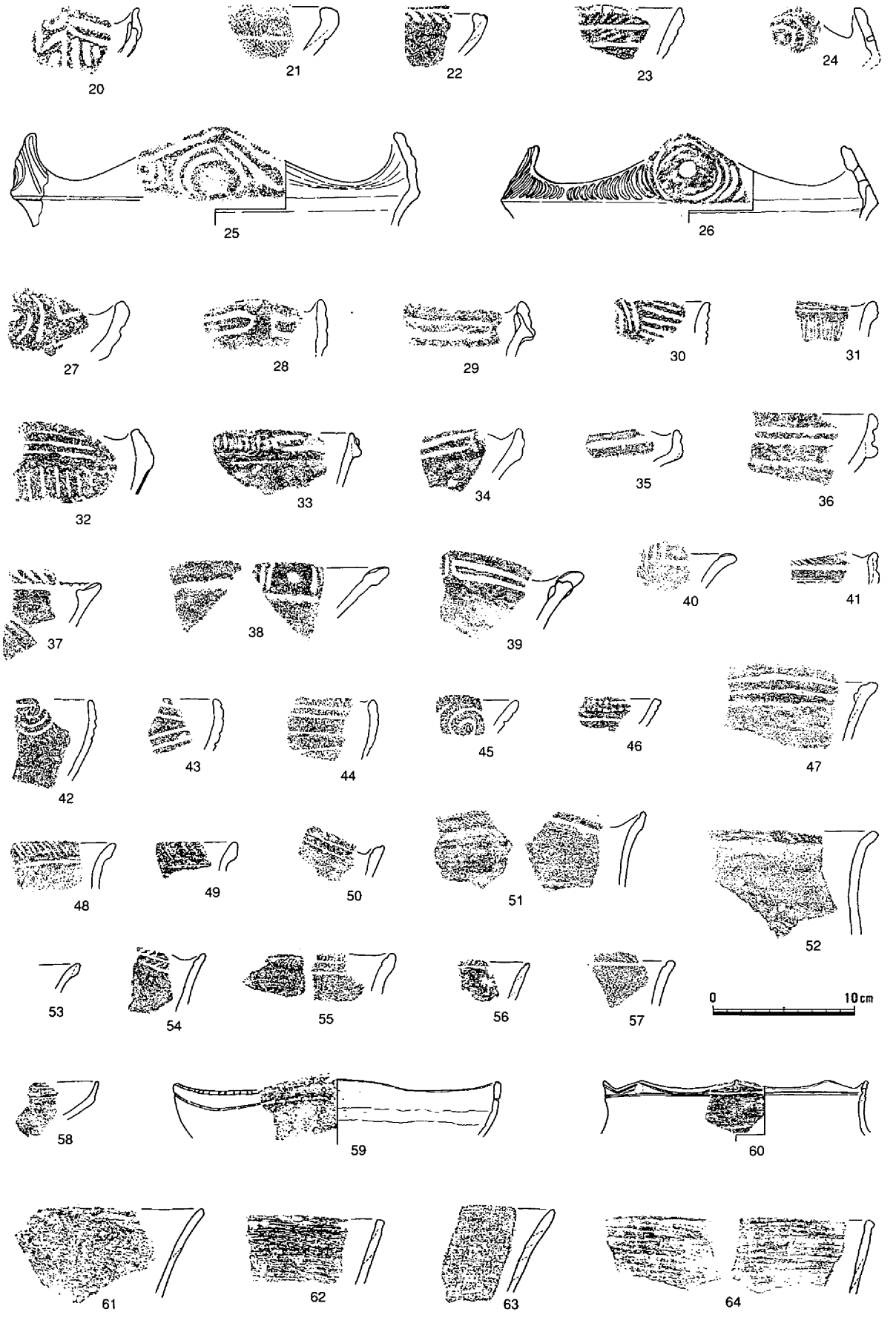
第27図　河道１〈F〉断面（1/80）

土土器の時期は後期中葉の津雲Ａ・彦崎Ｋ１・彦崎Ｋ２式段階のものが圧倒的に多いものの、中期末や後期前葉（20・21）、後期末～晩期初頭（60）の土器なども含まれている。　（平井泰）

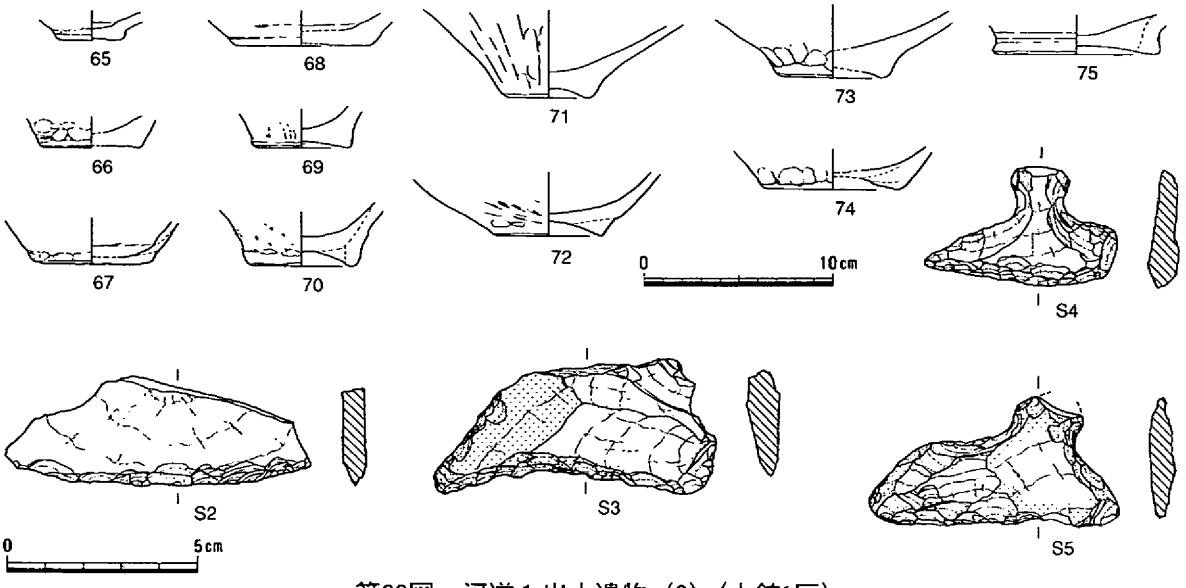
河道１は、本館１区から下流では本館５区の西端をかすめ、大きく北西に蛇行して本館４区を経てさらに南西方向に向きを変えて、水路８区の南端から笹ケ瀬川調節池の上池調査区の東端を南に流下



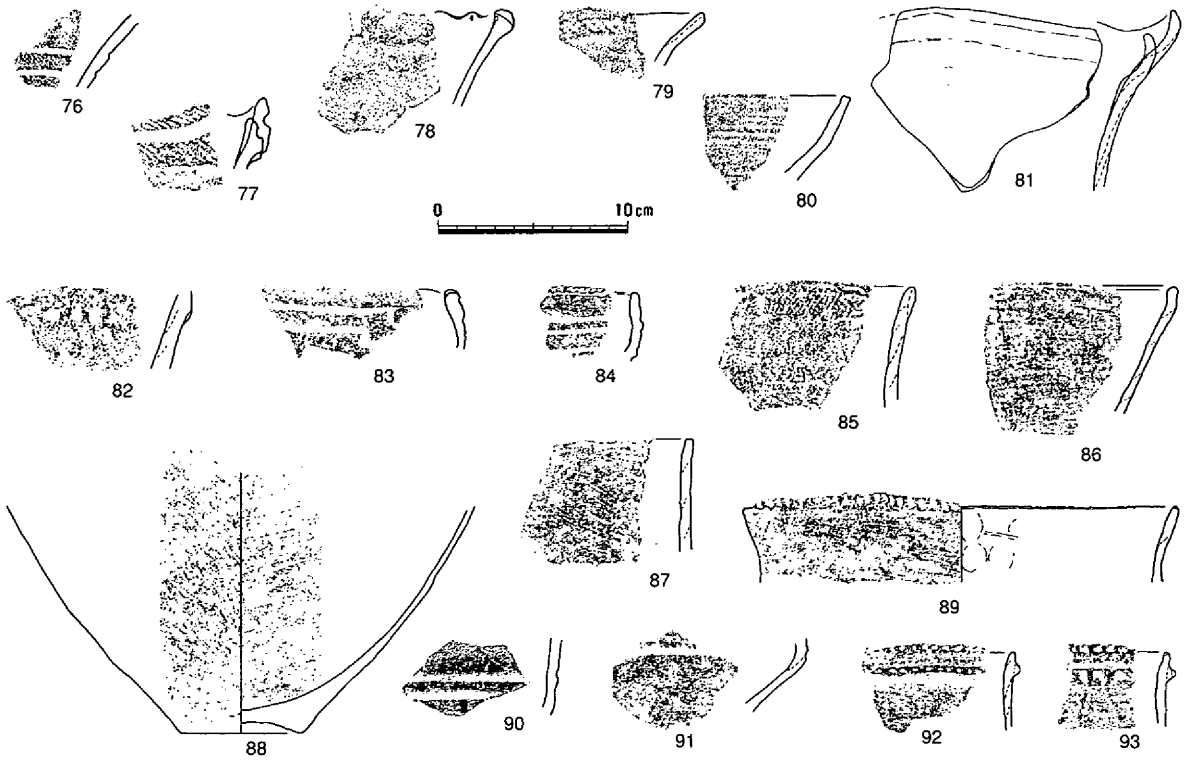
第28図　河道１出土遺物（1）〈水路5区上、6区下〉



第29図　河道１出土遺物（2）〈本館1区〉



第30図　河道１出土遺物（3）〈本館1区〉



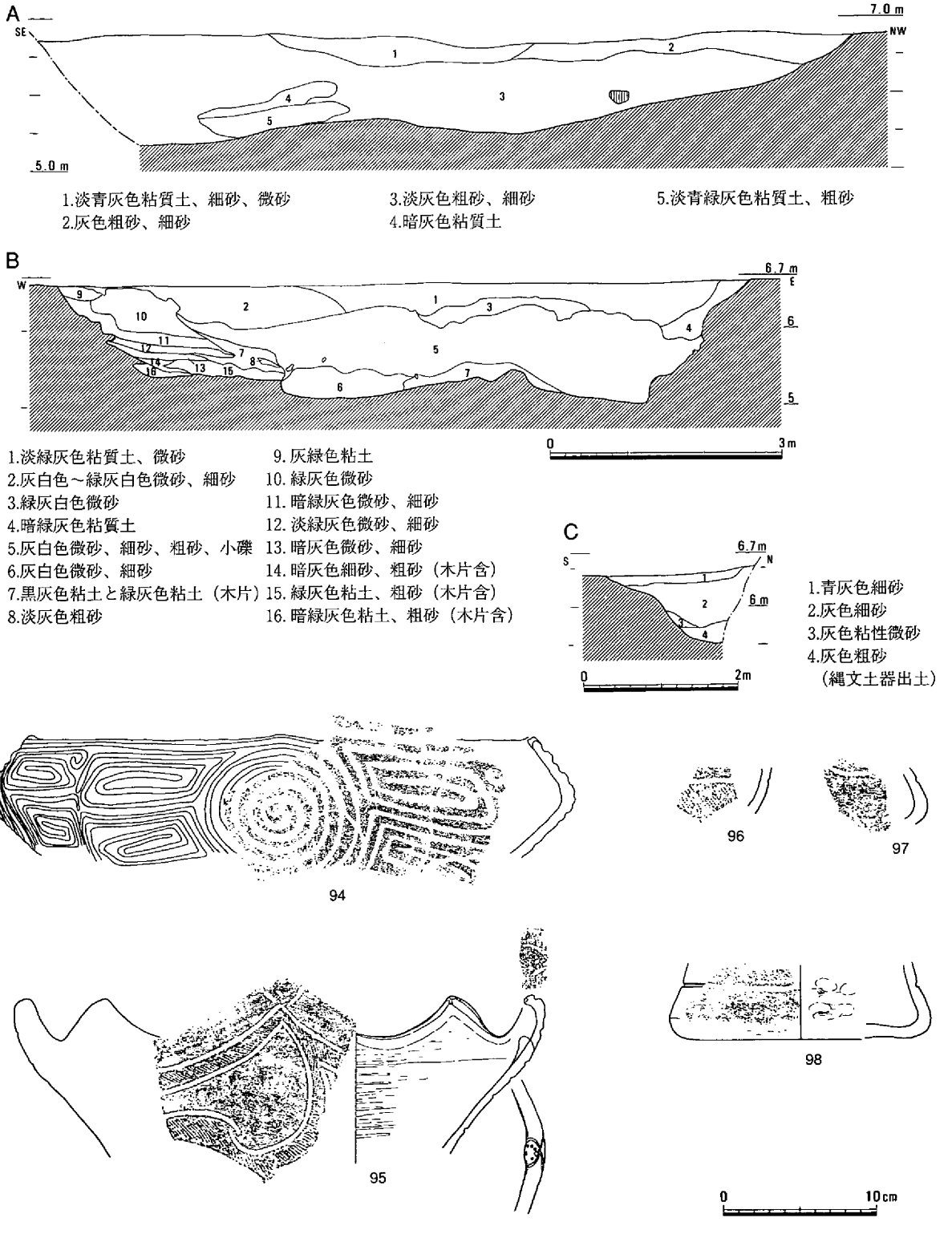
第31図　河道１出土遺物（4）〈本館4･5､水路7区〉

する。また、本館４区から水路７区にかけても本河道の一部が枝別れ、あるいは本河道と合流している可能性もある。河道はどの地区でも粗砂・細砂・砂利、あるいは葉などの有機質が縞状に堆積し、とくに本館４区では流木が多く見られた。遺物は小枝・モミやイチイガシの葉・アカガシの果実などの自然遺物とおもに縄文後期土器が出土している。

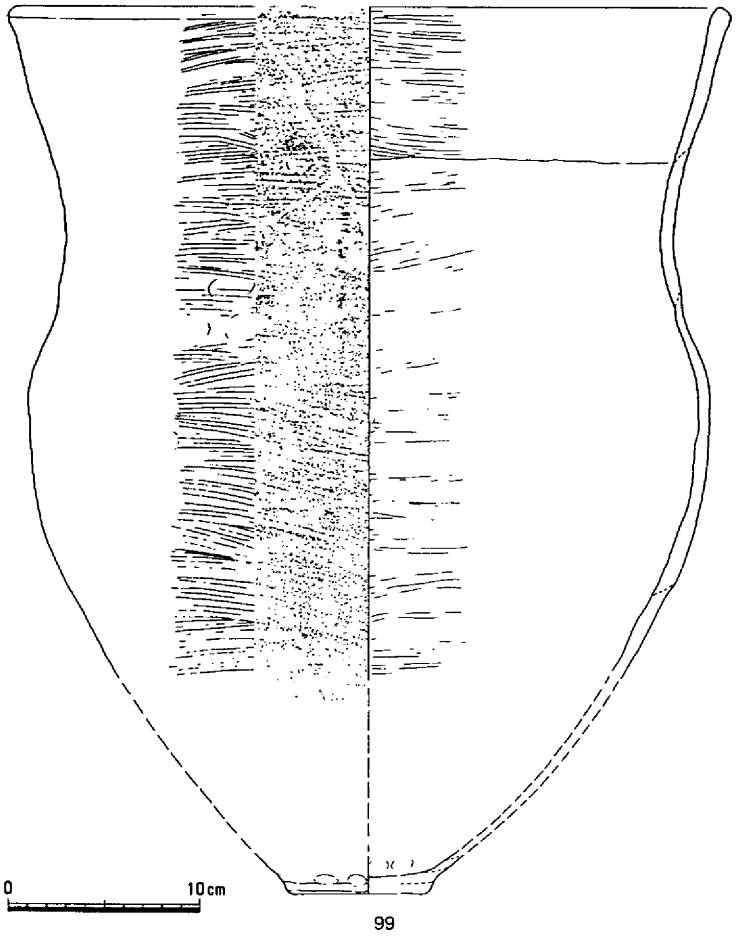
縄文晩期土器89・92・93は水路７区の河道上層から、後期土器は下層あるいは河底からの出土である。時期は後期中葉の津雲Ａ式、後葉の彦崎Ｋ２式、末の宮滝式（90・91）などがある。　（柳瀬）

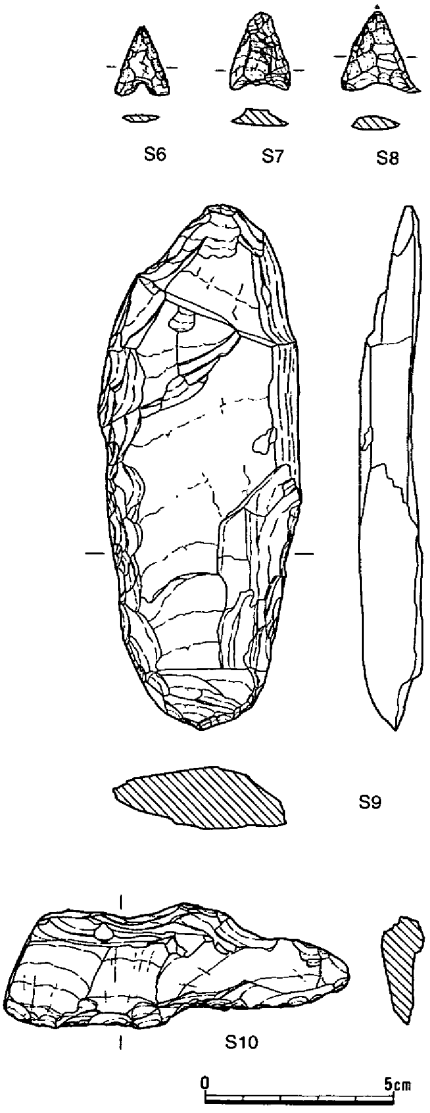
河道２（第15・16・24・32・33図、巻頭図版１、図版４・５・44・47・65）

水路４区、宿舎区、本館１・５・８区において検出した河道である。水路４区では西端部において砂の堆積が確認できた。この範囲は東西約７ｍ、南北４～５ｍで、掘り下げを試みたが、湧水のため壁が崩れ底や肩は確認できなかった。砂層中から磨滅した土器小片が２～３片出土し、縄文時代のものである可能性があること、および位置関係から河道２の一部と判断した。



第32図　河道２〈A・B〉断面、同出土遺物（1）





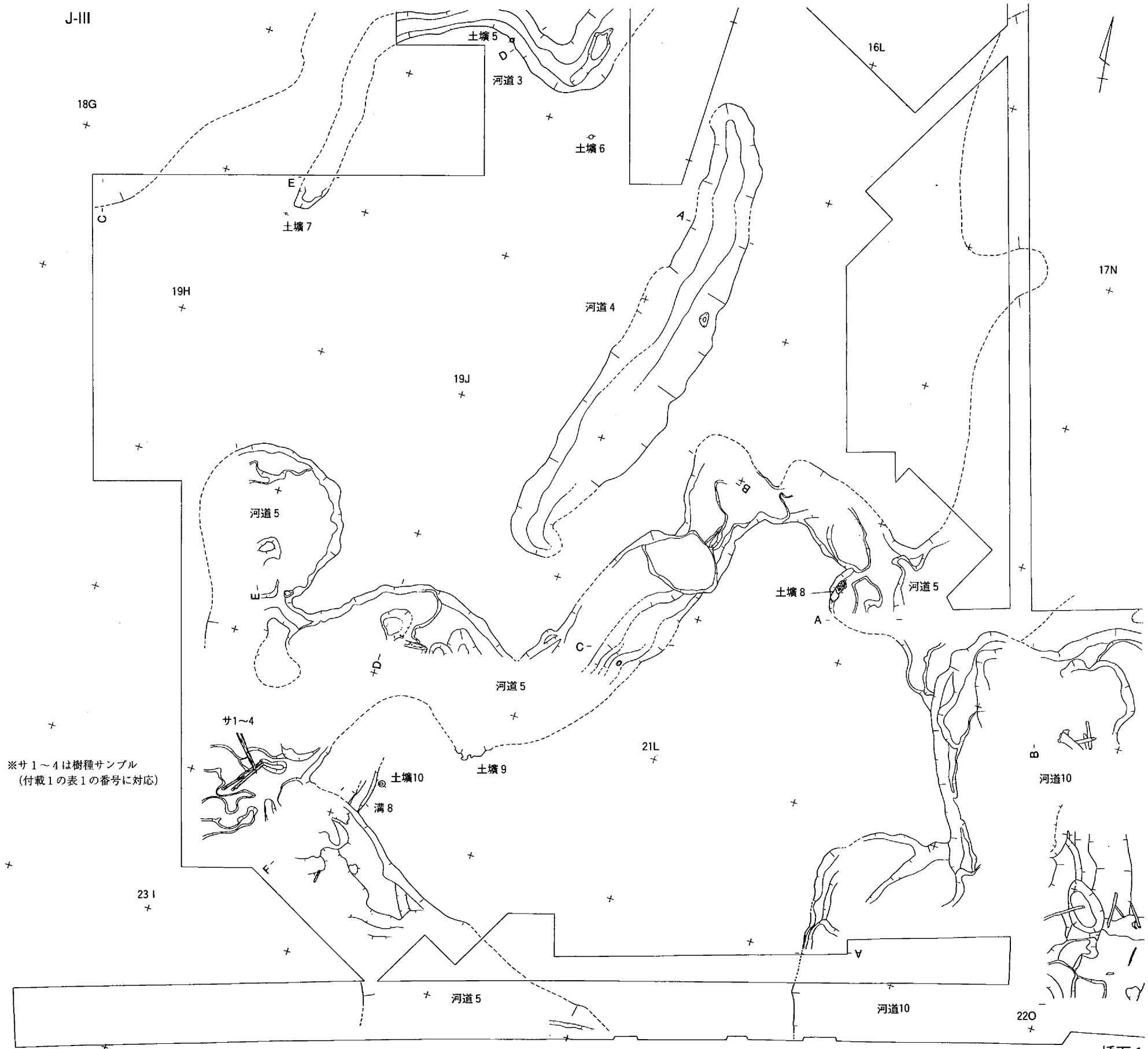
第33図　河道２出土遺物（2）

宿舎区では西半部において検出した。西側の肩については一部確認できたが、東側についてはおそらく現存していた道路部分に位置すると考えられるため確認することはできなかった。河道は海抜約6.7ｍで検出し、深さは約1.5ｍであった。埋土中にはおもに細砂・粗砂が堆積していた。94の浅鉢とＳ９の石鏃はこの調査区から出土した。94は埋土の上面で出土したもので、器形は口縁部が内側に強く屈曲しており、口縁部および胴部外面には沈線によって反時計回りの渦巻きや長方形の幾何学的な紋様が施されているのが大きな特徴である。こうした特徴を持つ浅鉢は高知県松ノ木遺跡から多く出土しており、松ノ木式として捉えられている。地元産の可能性を考えているが明確ではない。赤彩はない。

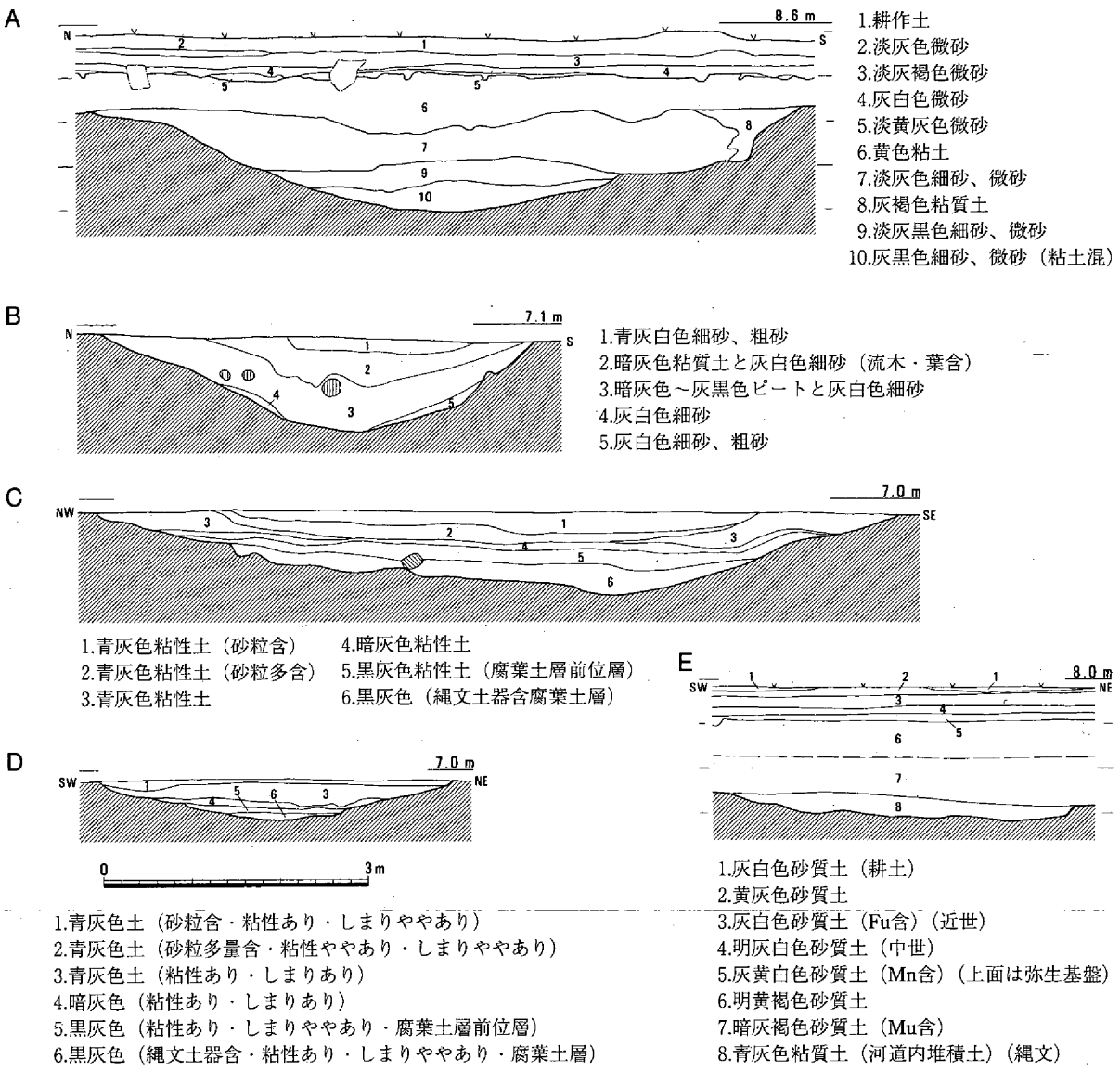
本館１・５区では海抜約6.5ｍで検出できた。深さは1.5ｍ前後で、埋土中には木片を含む細砂・粗砂が堆積していた。遺物はおもに粗砂層から土器や石器が少量出土した（95～99、Ｓ６・７・10）。95は本館５区で出土し、福田Ｋ２式の古相ではなかろうか。99は本館１区の南半部からまとまって出土した。Ｓ６・７・８は石鏃、Ｓ10はスクレイパーと考えている。（平井泰）

河道３（第15・16・34・35図、図版６－１）

宿舎区では海抜約７ｍで面的に検出でき、幅５～７ｍ、深さ約１ｍを確認した。断面形は皿形で、暗灰色～灰黒色のピート層が底面に堆積していたのが特徴的であった。共同溝１区や本館１区では部分的に確認できたにすぎないが、この特徴から同一の河道と判断している。（平井泰）



第34図　縄文時代遺構配置III（1/600）



第35図　河道３〈A～E〉断面（1/80）

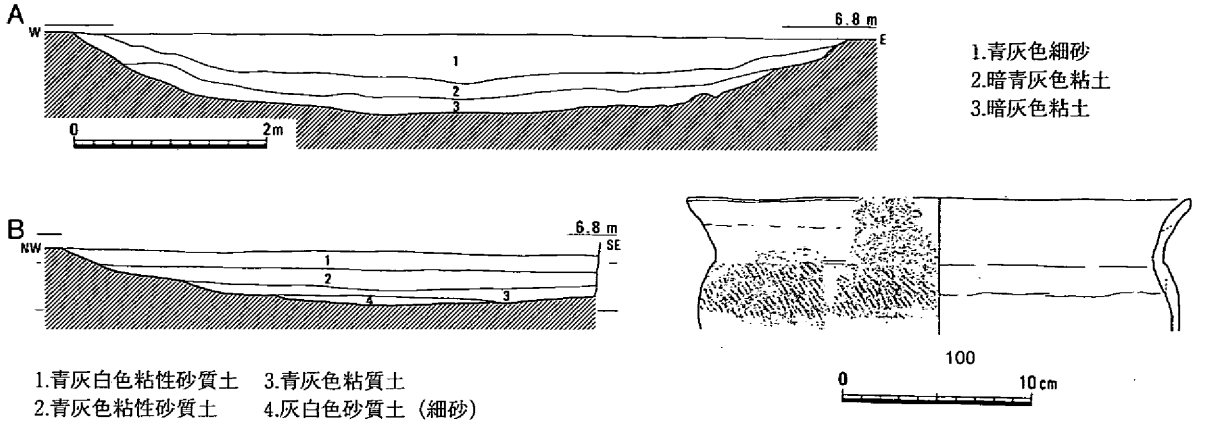
18H区から発した河道３は、16Ｉ区の中央部から南東部に至り、16Ｊ区から左折して15Ｊ区に向かって北東方向に流走する。河道の幅は、16Ｉ区中央部で肩部が約４ｍ、底部が 1.6mになり、15Ｊ区では肩部が約９ｍ、底部で約３ｍと広がっている。最も広がった箇所には、流木が存在する。堆積土は底部付近に黒灰色の腐葉土層が溜まり、上層は青灰色の砂質土である。　（小林）

河道４（第16・34・36図、図版６－２）

16Ｋ区から19Ｊ区にかけて検出した長さ70cmあまりの窪み地形である。一方の端である16Ｋ区の西端中央部から徐々に深さを増して南下し、18ラインあたりでの規模は、幅が約９ｍ、深さは1.1ｍを測る。また、埋土の下半分は粘土層であり、緩やかな堆積が進んだとみられる。

出土遺物は深鉢100の１点のみである。外面に擬縄文を施し、彦崎ＫⅡ式に相当する。　（弘田）

18・19Ｊ区内の河道４は、最も深い所でも42cmであり、南側に向かって浅くなる。北東方向から南西方向へ流走にした河道は、19Ｊ区東側中央付近で屈折し、幅を狭めつつ東側へ流れる。堆積土は粘質土が基本である。18・19Ｊ区内では遺物は出土しなかった。　（小林）



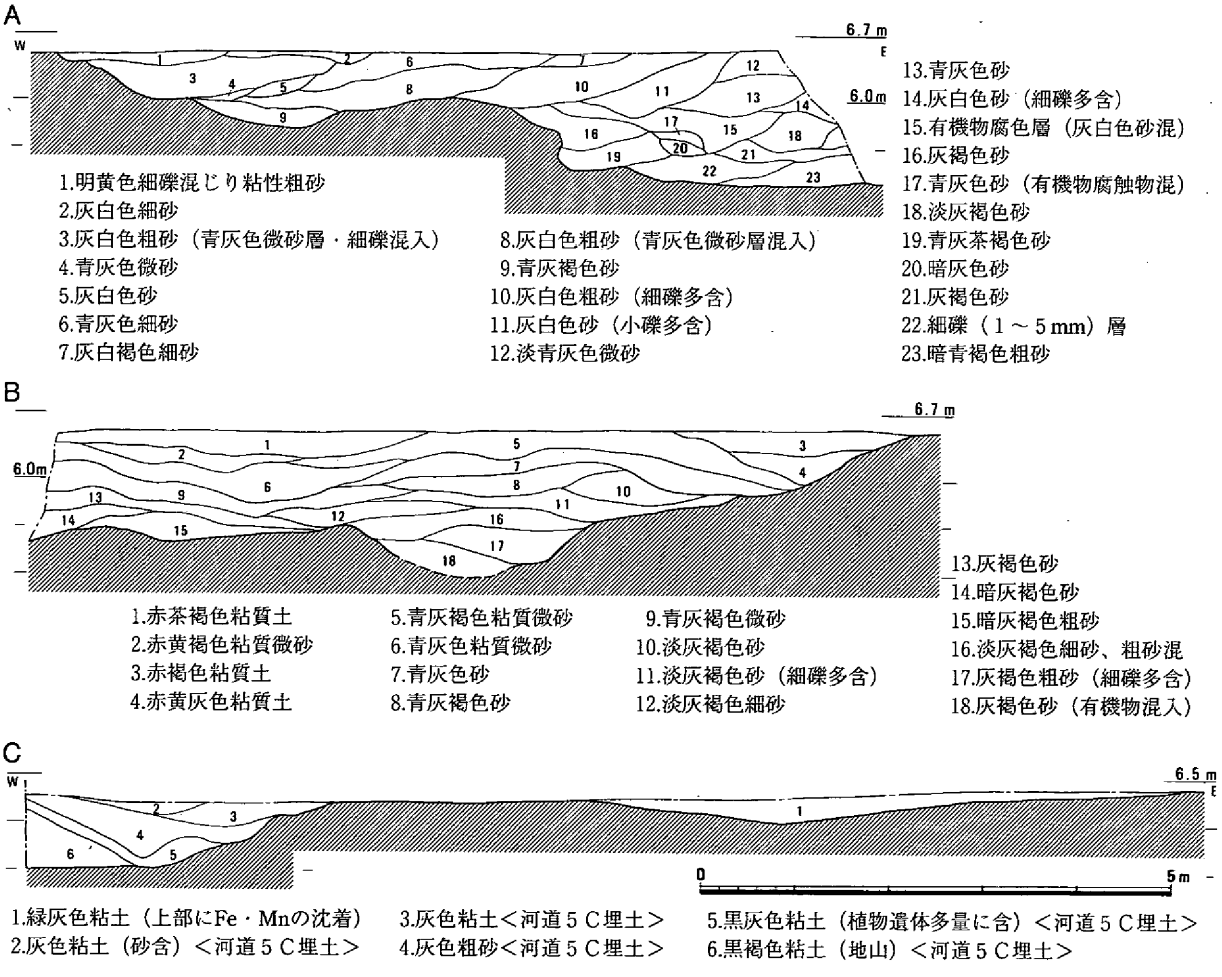
第36図　河道４〈A･B〉断面（1/80）

河道５（第34・37～40図、図版６－４・７・８－１・50・51・65）

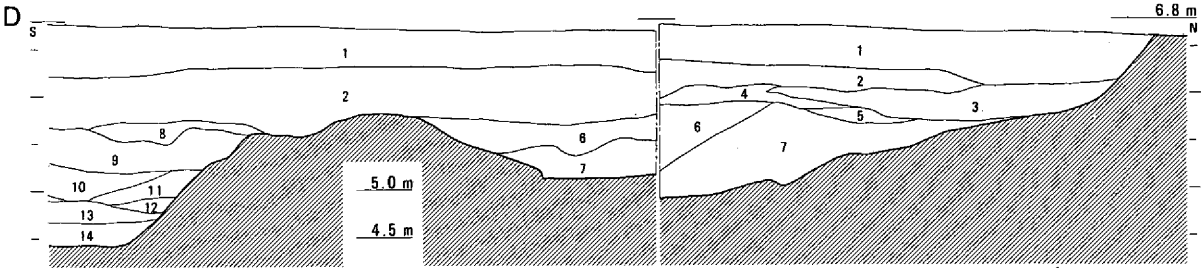
本館調査区の南側を西へと蛇行しながら流走したのち水路３区へと南下する河道で、本館２区では調査区南側の大部分をしめる。河道底では凹地やテラス状地形が複雑に入り組み、また埋土も細礫を多く含む粗砂層であったことから数度の激しい流水があったことを窺わせる。

この調査区からは縄文時代後期の土器片101～109や植物遺体、ドングリなどが出土した。（弘田）

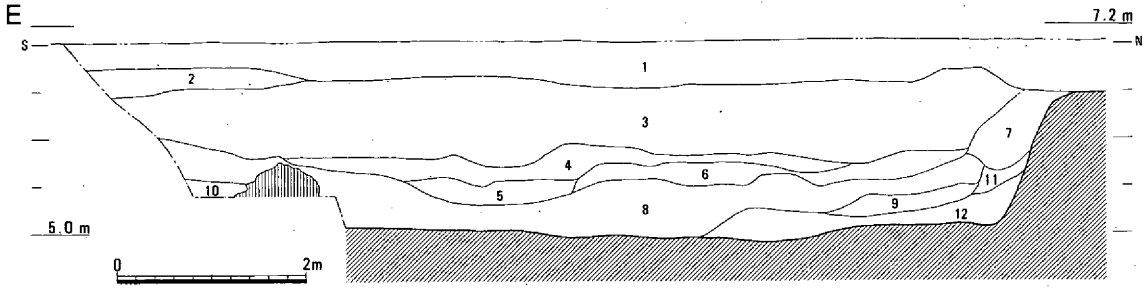
本館２区から南西に流下してきた河道は、本館８区では一旦北西へ折れた後、再び反転して南東の



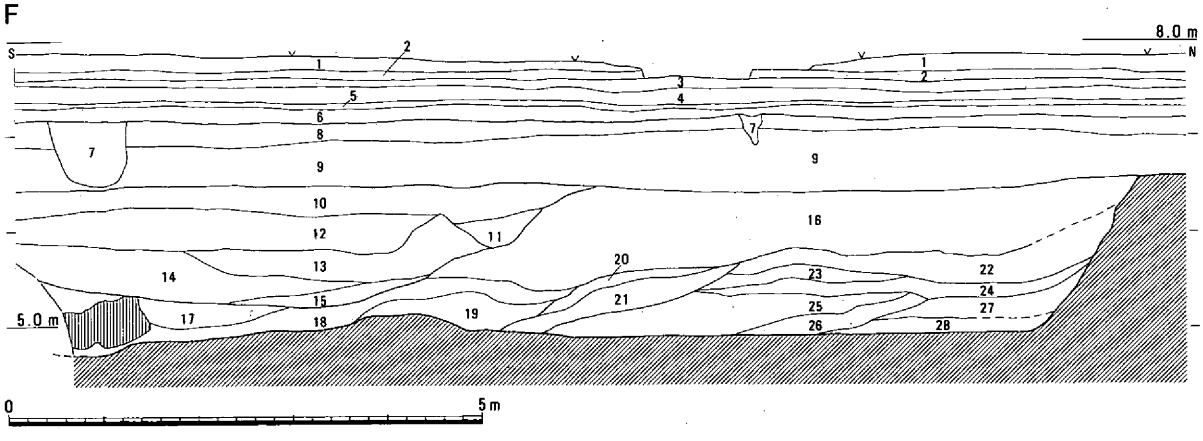
第37図　河道５〈A～C〉断面（1/80）



1.淡緑灰色粘質土（上部は茶褐色）＜部分的に微砂混＞
2.緑灰色粘性微砂質土
3.淡黄灰色細砂
4.淡灰色微砂
5.灰色微砂（粗砂含）
6.淡灰色細砂
7.灰色粗砂
8.暗灰色微砂（植物遺体含）
9.灰色粗砂
10.暗灰色粗砂（植物遺体含）
11.灰色細砂
12.暗灰色粘土
13.暗灰色微砂
14.暗灰色粗砂（礫含）



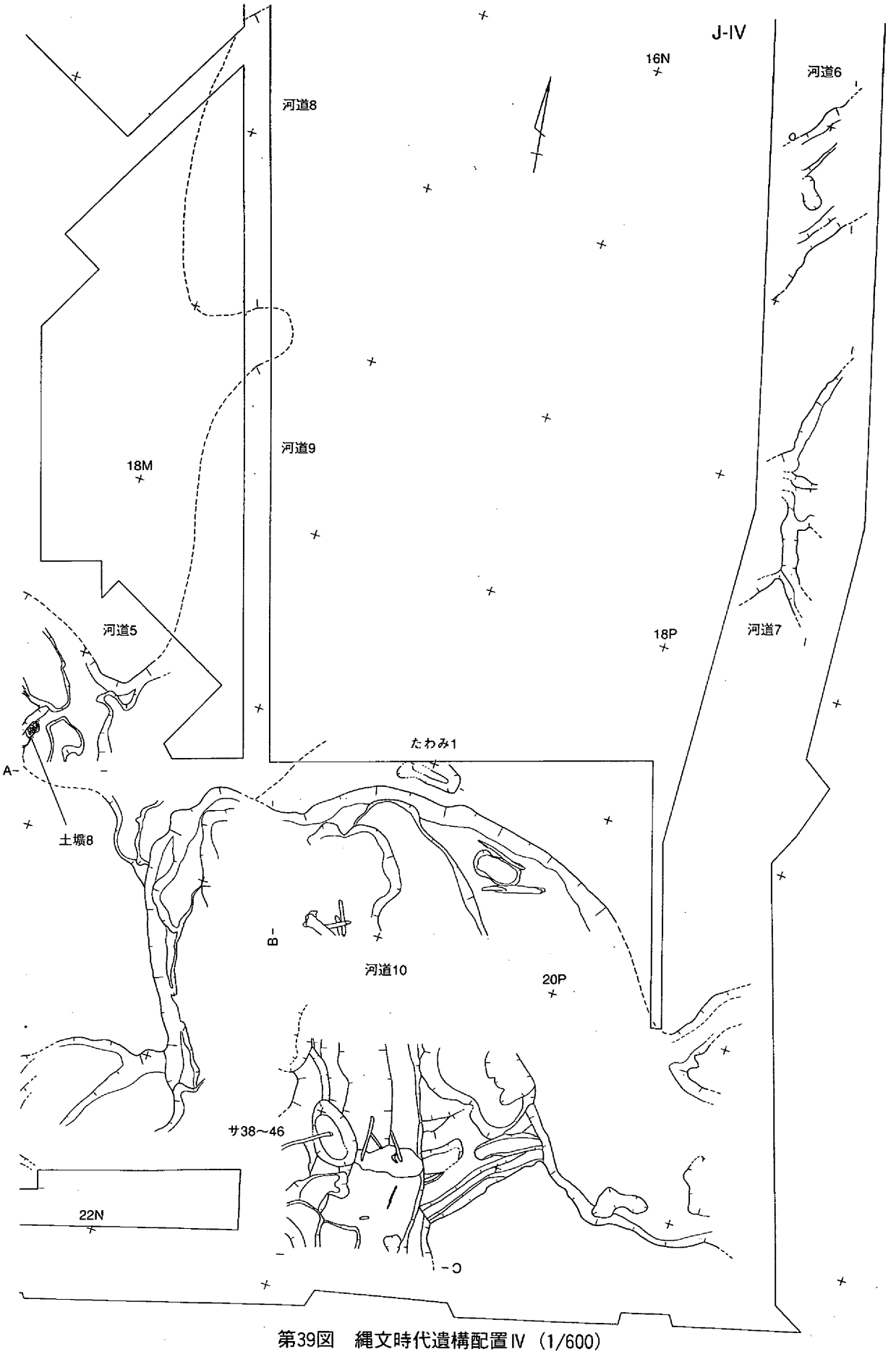
1.淡灰色微砂質土（弥生面地山）
2.淡灰褐色細砂
3.淡青灰色微砂（上部は茶褐色を呈す）
4.灰色細砂
5.灰色細砂（植物遺体・粗砂含）
6.灰色微砂（粗砂含）
7.青灰色粘性砂質土
8.灰色微砂（植物遺体多量に含）
9.淡灰色微砂（植物遺体多量に含）
10.淡青灰色細砂
11.淡青灰色微砂質土
12.灰色粗砂



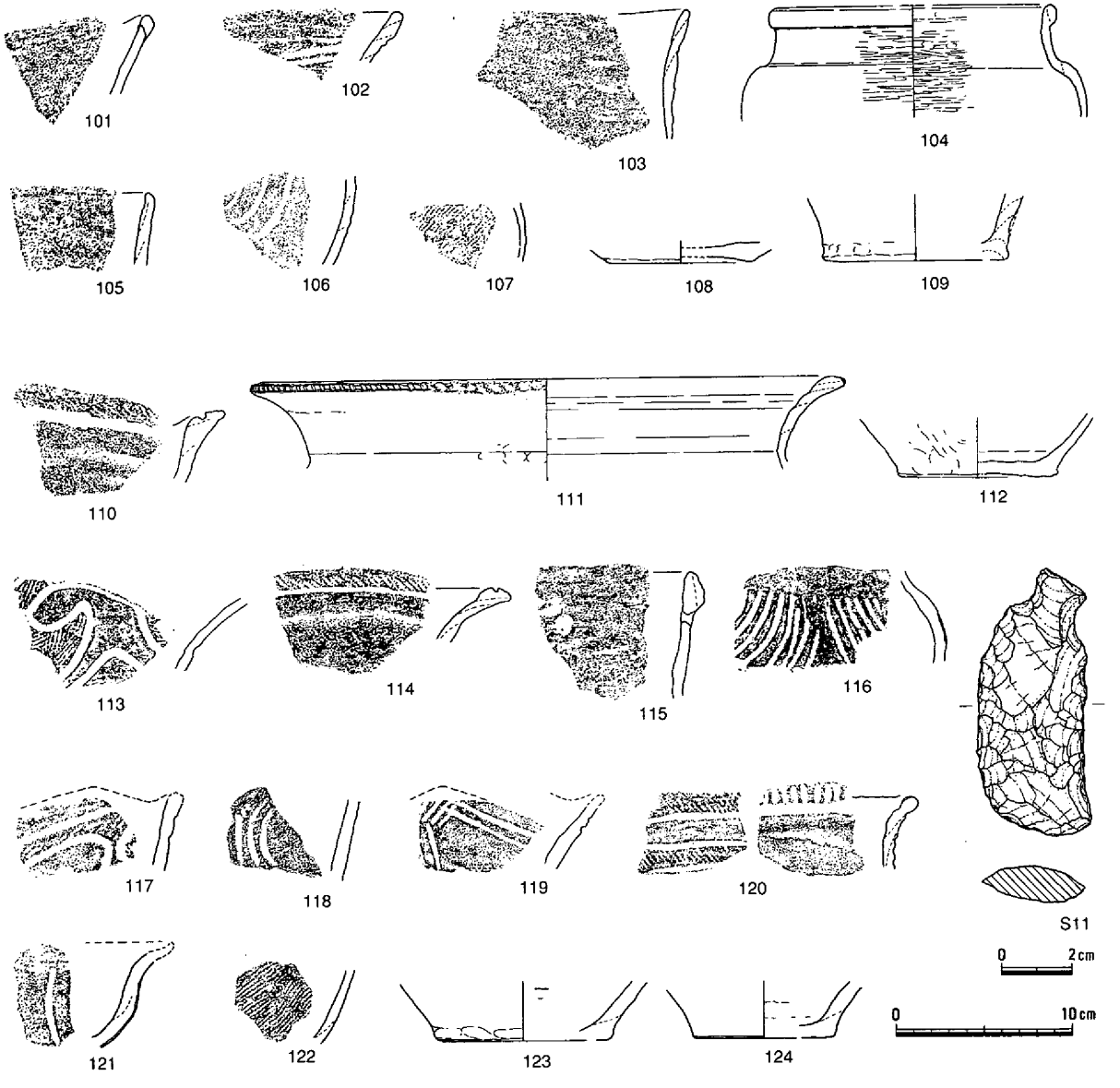
1.耕作土
2.灰褐色土（鉄分・Mn多含）
3.灰色微砂
4.暗灰色微砂
5.灰色微砂
6.淡灰色土
7.黒褐色土
8.灰色土（鉄分多含）
9.淡灰色砂質土
10.青灰色土
11.灰青色土
12.淡灰色砂
13.黒褐色砂（流木多）
14.砂礫層
15.礫層（径２cm前後）
16.青灰色砂質土
17.砂礫層
18.灰黒色砂（流木多）
19.淡灰色砂
20.灰色砂
21.灰黒色砂
22.青灰色砂
23.黒灰色砂（流木多）
24.黒色砂
25.灰青色砂
26.青灰色砂（流木多）
27.灰青色砂
28.黒色砂（流木多）

第38図　河道５〈D～F〉断面（1/80）

本館３区へと向かう。反転箇所の左岸は、一時的な増水等のためか北側へ大きく拡張している。この著しい蛇行のため水流は複雑な動きを示したようで、河道底は凹凸が激しく、流木も多く遺存していた。遺物としては、縄文後期土器110～116のほか縦長の石匙Ｓ10が出土している。　（岡本）



第39図　縄文時代遺構配置Ⅳ（1/600）



第40図　河道５出土遺物

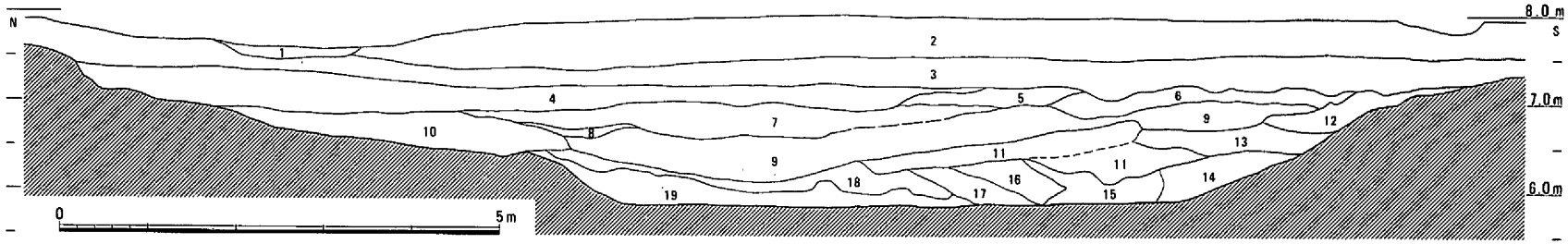
本館３区から水路３区にかけて検出された河道で、西側から北側へ大きく蛇行する河道に続く。灰黒色土層で形成された縄文時代の微高地を抉って北西から南へ流走する河道は、幅30mあまり、深さ1.6mを測る。底面は凹凸が著しいものの、全体としては平坦である。埋土は基本的に砂であるが、礫や流木を多く含む層もある。遺物は概して下層に含まれ、そのほとんどは土器であるが、量は少ない。第40図の土器は磨消縄文を主体とするもので、後期前半に属する。　（平井勝）

河道６（第39・41・43図、図版８－２・51）

水路２区で検出した河道２条のうち北側の河道である。規模は、幅が約16m、深さは約1.6mを測る。河道内は砂～粗砂層によって埋没していることから常時流水があったとみられる。

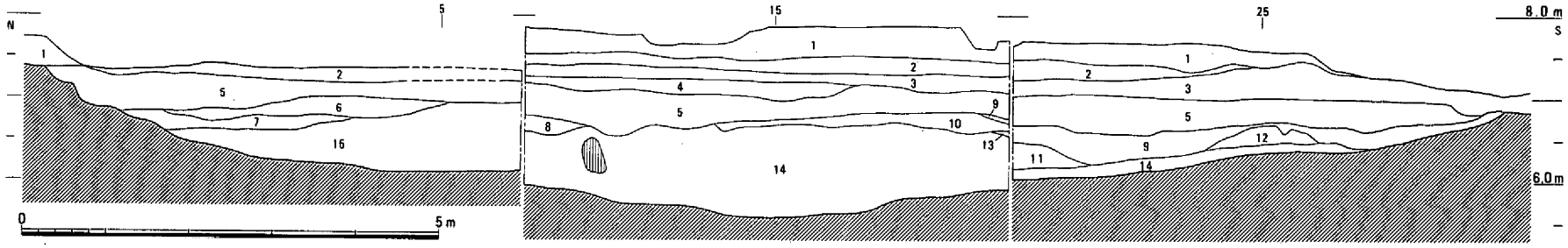
出土遺物は、いわゆる縁帯文土器である。口縁部を内上方に拡張させ、その外側にヘラ描き沈線や擬縄文・磨消縄文で文様帯を構成する125～127と口縁部内側に擬縄文とヘラ描き沈線を施す128や外側に拡張し外端に刻目を施す129がある。前者が津雲Ａ式に後者は彦崎ＫⅡ式に相当する。

この河道は方向性や遺物からみてさきの河道５につながる蓋然性が高く、北東から南西方向への流



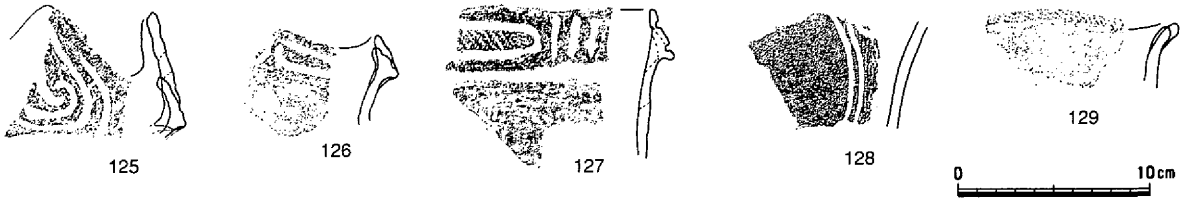
1.黄褐色砂質土
2.暗黄茶褐色砂質土（上面弥生基盤）
3.赤黄褐色砂質土
4.青灰色微砂
5.青灰褐色砂
6.青灰色砂
7.淡灰褐色砂
8.暗灰褐色粘土
9.黄灰褐色砂
10.青灰褐色粘質微砂
11.灰褐色粗砂
12.青灰色粘土
13.淡青灰色砂
14.暗灰褐色砂
15.有機物腐色層
16.茶灰褐色砂
17.暗灰色砂
18.腐色有機物・暗灰色砂混合
19.灰色砂

第41図　河道６断面



1.暗褐色粘質土
2.赤黄色粘土
3.青灰色粘質微砂
4.青灰褐色粘土
5.青灰色粘土
6.淡褐色砂
7.淡灰褐色砂
8.淡暗褐色砂
9.有機物腐色層
10.淡茶褐色砂
11.淡茶褐色砂
12.暗褐色砂
13.有機物腐色層
14.暗褐色粗砂
15.礫、細礫混じり粗砂（縄文土器混入層）

第42図　河道７断面

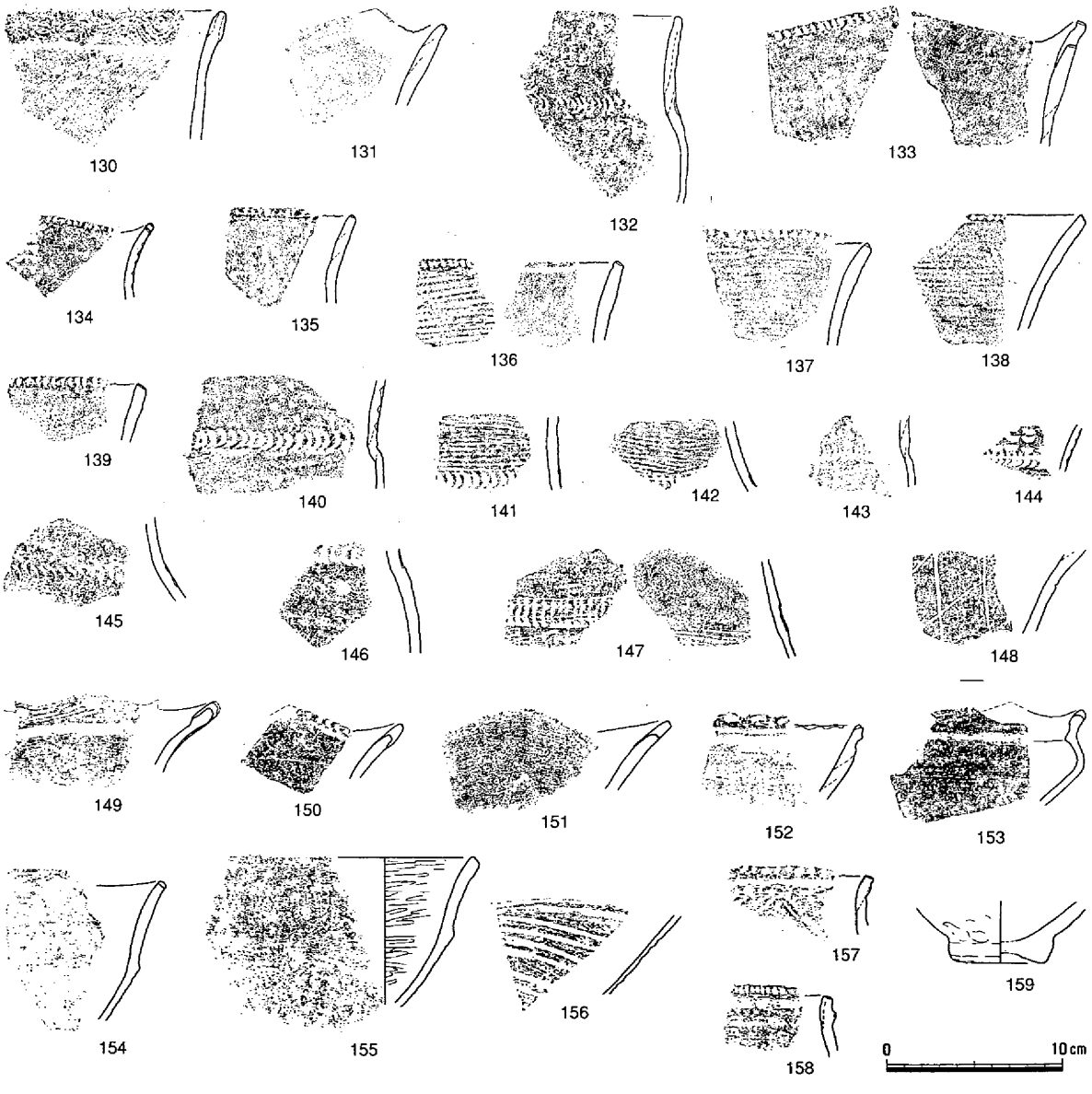


第43図　河道６出土遺物

れが想定できる。　（弘田）

河道７（第39・42・44図、図版８－３・51・52）

水路２区の南側で検出した河道である。河道肩部が円弧を描くように調査区内に刳り込んでおり、河道の中心部分はこれより東側となる。河道の断面をみると、２から５層は比較的安定した堆積の状況を示すが、それ以下は砂～粗砂層で埋没しており、９～13層・14層・15層に大別できる。



第44図　河道７出土遺物

遺物は大半が15層から出土した。このうち130が中期の縁帯文土器であるほかはいずれも晩期の土器である。深鉢では、口縁端部が平坦な面をなし外端に刻目を施す。調整は、条痕文のほかにケズリ139・147やナデ131・135がある。頸部の文様には逆Ｃ字形の爪形文が多く、ほかには押引文147や櫛描沈線文148もみられる。浅鉢には口縁部が強く開き、端部を内外に肥厚させる149と丸く終わる150・151および外に肥厚させる152、体部を強く内湾させて頸部をつくり短く外反する153や体部との境が短く内に屈曲したのち緩く外反する154・155がある。これらは上げ底の底部159も含め、谷尻式（晩期中葉）に相当する。なお、口縁部直下に刻み目突帯を貼り付けた157・158は晩期後葉でも古相を示すとみられる。（弘田）

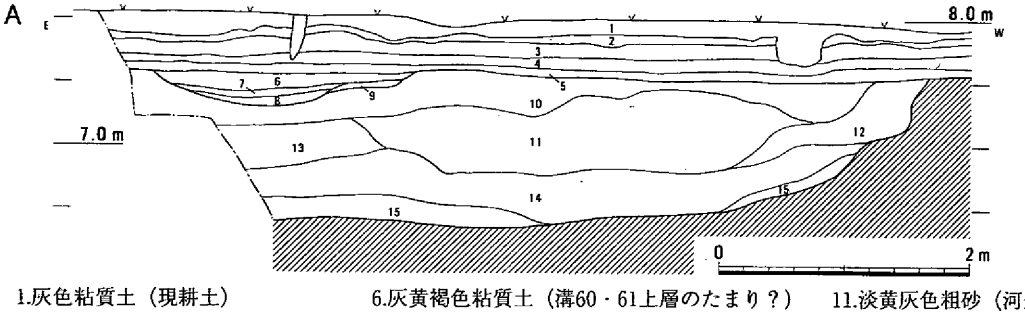
河道８・９（第39図）

共同溝２区では弥生時代の基盤層下の大部分を河道が占めており、中州状地形を境に北を河道８、南を河道９とした。ただし、調査区幅と掘削深度の点から危険であったため直ちに埋め戻しを行った。河道８は流走する方向を確認できなかったものの、河道９では縄文後期の河道６の延長線と河道５の北東端間を結ぶ間に位置することからこれら３本は同一の河道とみられる。（弘田）

河道10（第34・39・45～55図、巻頭図版１、図版９～11－１・46・47・59～61）

浄化槽の大部分と水路３区の東寄りで検出された河道で、付属建物１・２区および本館７区で検出された河道の南岸をなす。この河道は，浄化槽で大きく蛇行し、東から西に向かう流れが南に向きをかえる。また、浄化槽東端からは北に向かって大きく蛇行し、河道７につながるものと推定される。河道の幅は浄化槽の東寄りで22mあまりであるが、流路を南に向けた水路３区では50mを測る。深さは1.6m前後で、底面の標高は4.6m前後を測るが、河道７の底面の標高が約5.3mであることからすれば、北から南へと流れていたと推定される。浄化槽および水路３の河道10は、土層断面（第46図）を見ると立ち上がりは急傾斜であるが、底面は凹凸が著しいものの全体としてはほぼ平坦に推移する。土層の情況は、流路の埋没と掘削が何回か繰り返されたことが見て取れる。まず、土層９・10・11が堆積して河岸となった段階、そして順次河幅を狭めながら７・８層が堆積して８層が河岸になった段階、さらに１層が浅い流路であった可能性もある。埋土は基本的に砂であり、これに１～３cm前後の円礫を含む層（２・３・４・11）が見られる。また全体的に流木を含むが、１層と８層上面には多く見られた。なお、径20～40cm前後の大木が浄化槽の西寄り部分の８・11層中に集中していた。

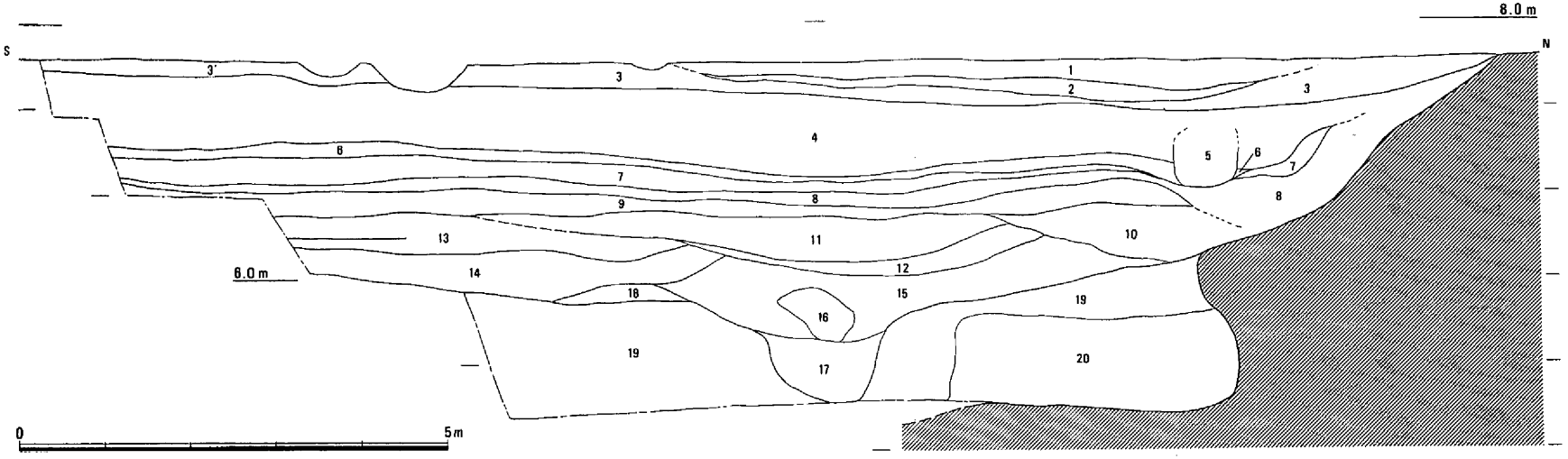
遺物は、水路３区では上層に弥生時代前期の土器を含み、中・下層から晩期の土器が出土した。浄



1.灰色粘質土（現耕土）
2.明黄褐色粘質土
3.黄褐灰色粘質土（耕土）
4.淡褐灰色粘性砂質土
5.黄灰白色微砂質土（洪水砂？）
6.灰黄褐色粘質土（溝60・61上層のたまり？）
7.暗褐灰色粘質土（溝60埋土）
8.灰褐色粘質土（溝60埋土）
9.淡褐灰色粘質土（溝61埋土）
10.灰黄褐色微砂（Mn沈着・河道埋土）
11.淡黄灰色粗砂（河道10埋土）
12.黄灰褐色微砂（河道10埋土）
13.灰色微砂（河道10埋土・粗～細砂含）
14.淡灰褐色粗砂（河道10埋土）
15.青灰色細砂（河道10埋土）

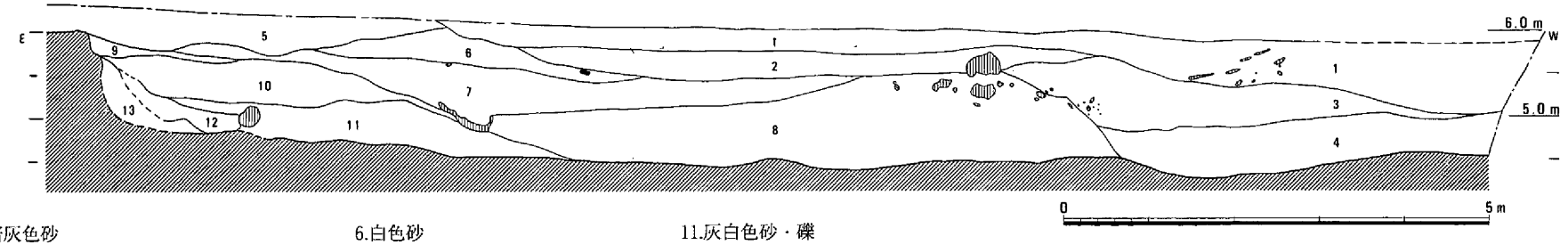
第45図　河道10〈A〉断面（1/80）

B



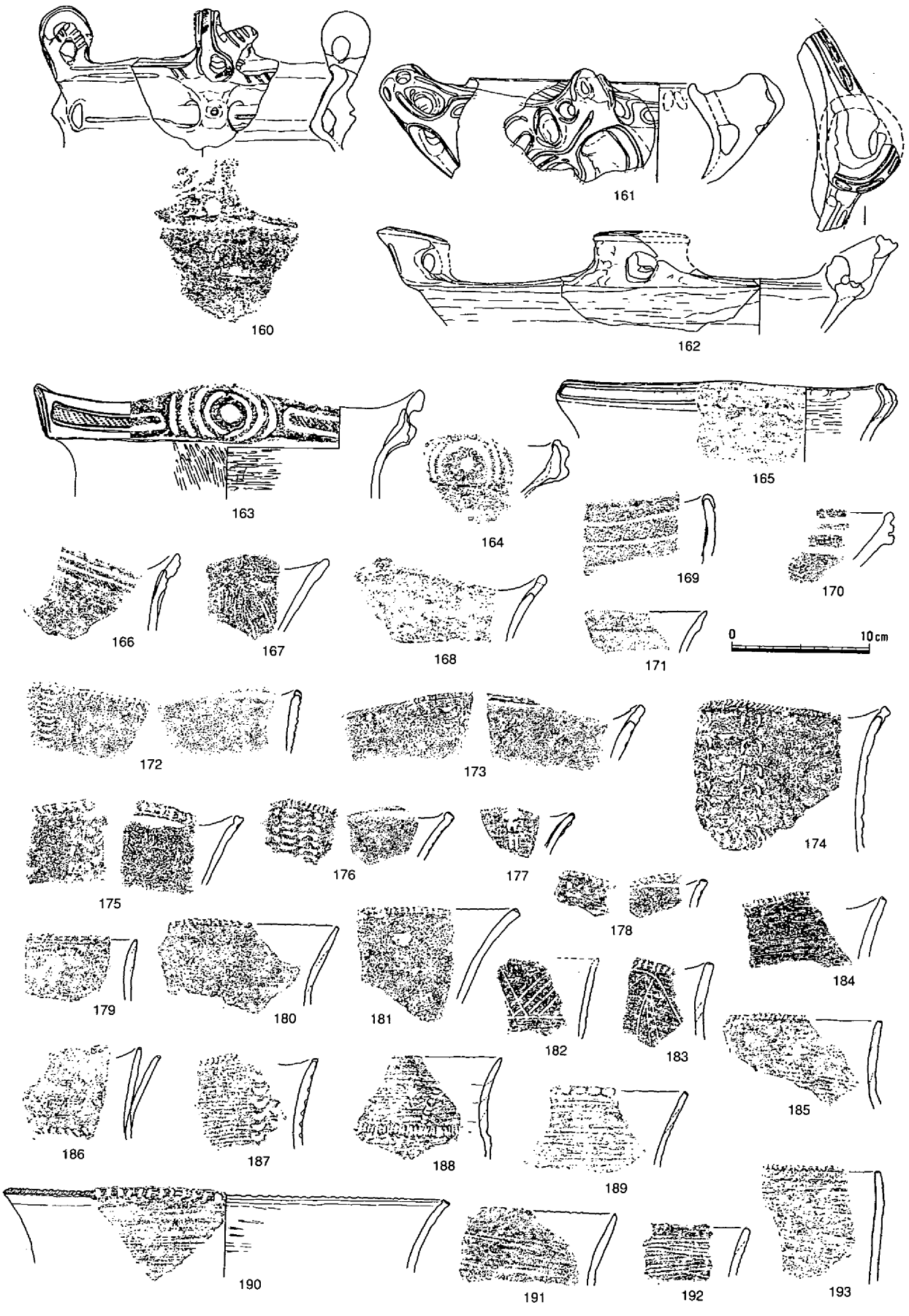
1.暗褐色粘質土
2.明灰色粘質土
3.褐灰色粘質土（木炭多含）
4.黄褐色～明緑灰色粘質土
5.黒灰色粘質土（木炭多含）＜木の根が腐った部分か＞
6.暗灰色粘質土
7.灰色砂質土（細砂）
8.黒灰色粘質土
9.灰白色砂質土（細砂）
10.暗灰色砂質土（やや粘性あり）
11.灰白色砂質土（細～粗砂）
12.灰白色砂質土（細砂）
13.灰色砂質土（細砂）
14.灰色砂質土（細砂）＜13層よりやや色調が暗い＞
15.灰白色砂質土（細砂）
16.黒褐色粘質土塊
17.青灰色粗砂～砂礫
18.灰色砂質土（細砂）
19.暗緑灰色粘質土（木材多含）
20.暗灰色砂質土（粘性土中に粗砂含）

C

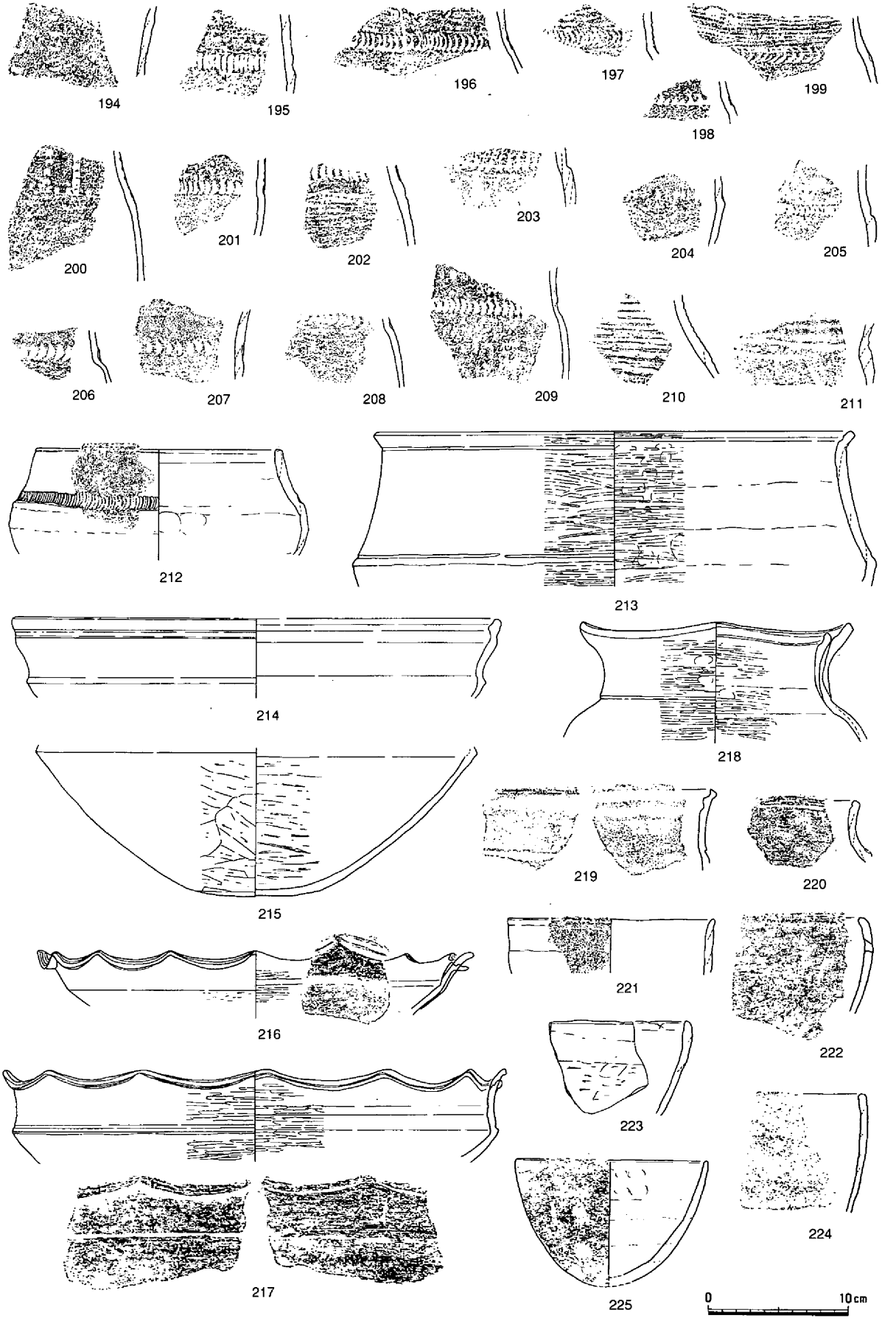


1.暗灰色砂
2.青灰色砂（礫含）
3.灰白色砂（瓦多含）
4.淡青灰色砂（礫含）
5.青灰色砂
6.白色砂
7.灰白色砂
8.淡灰白色砂
9.黄灰色砂
10.暗灰青色砂
11.灰白色砂・礫
12.灰色砂
13.灰白色砂（上部は緑灰色で粘質）

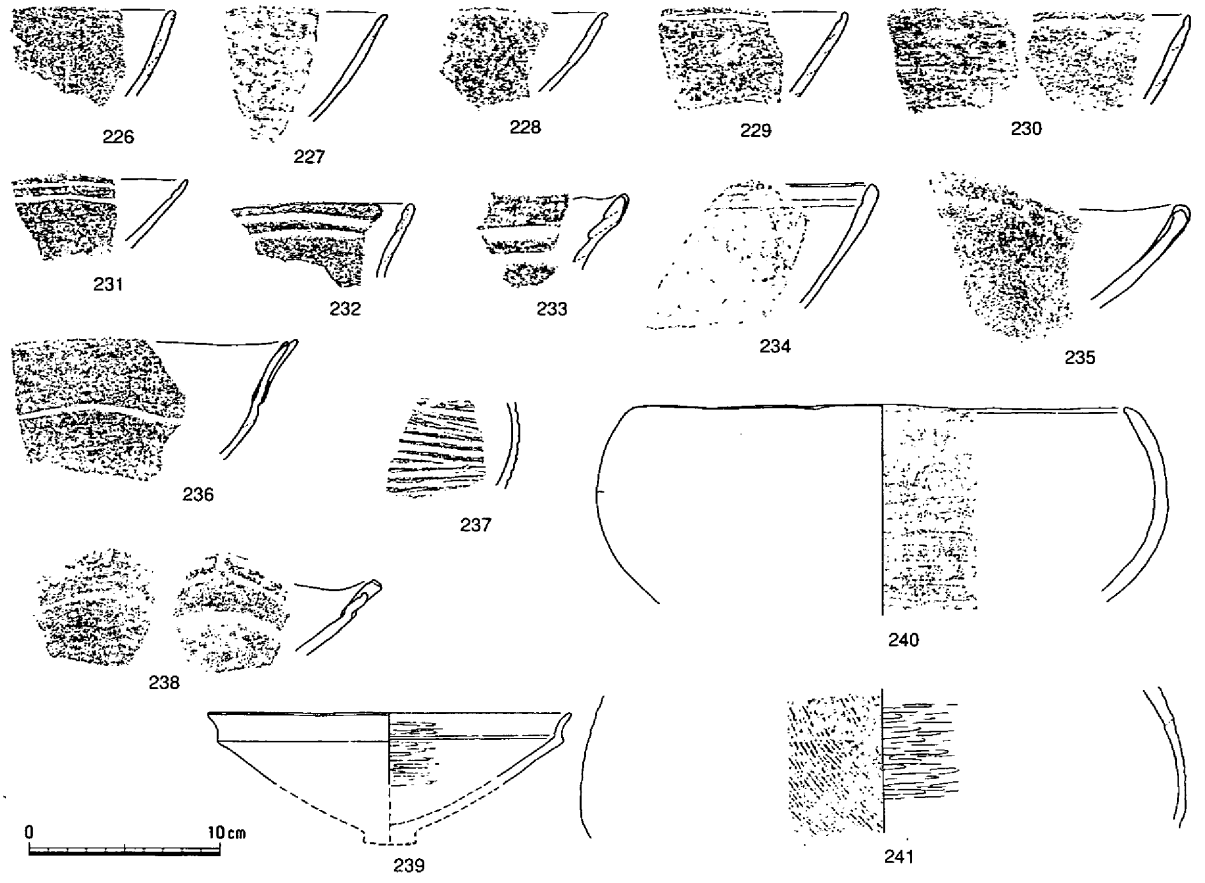
第46図　河道10〈B･C〉断面（1/80）



第47図　河道10出土遺物（1）



第48図　河道10出土遺物（2）



第49図　河道10出土遺物（3）

化槽では中・下層から晩期の土器が、下層から後期の土器が出土した。しかし、層位毎に土器を取り上げていないので確実とはいえず、調査時の傾向として指摘するに留める。

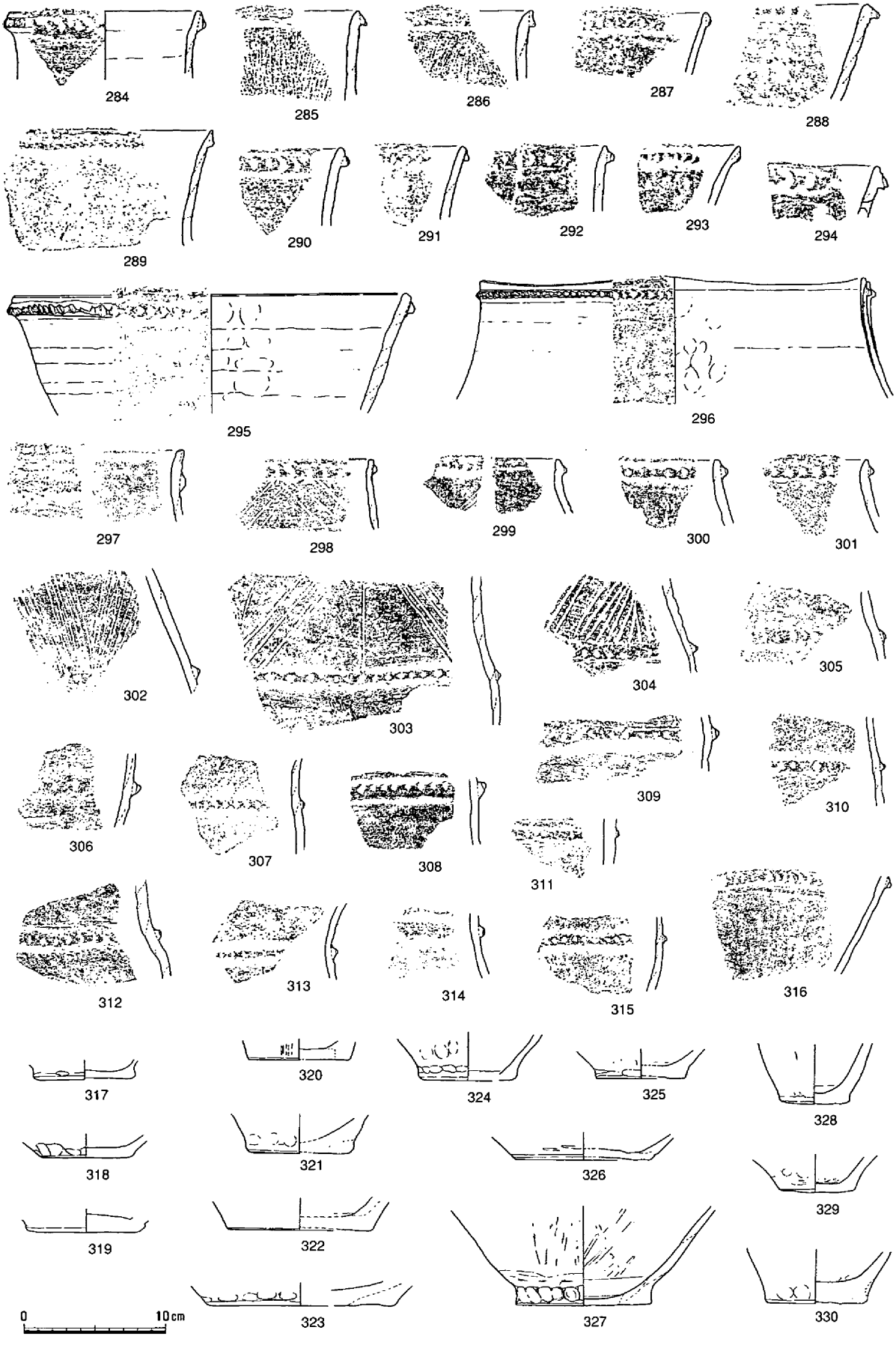
遺物（第47～55図）は土器と石器が出土した。浄化槽の土器（第47～52図）は後期前半から中頃のものは少量で、多くは晩期に属する。後期に属するものは160～171・240・241である。160～162は口縁部に飾られた突起をもつもので、福田ＫⅡ式に属する。163～165・170は外面が肥厚するもので、津雲Ａ式であろう。166～169・171は彦崎ＫⅡと考えられる。172～212・214・215・218～220・232～236・238は突帯文土器出現前の土器である。172～193は口縁部から頸部にかけての破片で、口縁端部には刻目が、頸部には垂下する爪形文が施される。また、頸部と胴部の境界にも横位に爪形文がめぐるが、195～209がそれにあたる。214・215・219・220・232～236・238は浅鉢、218～220は壺と思われる。いずれも丁寧なヘラ磨きが行なわれている。242～301は口縁部に突帯文を巡らすものである。頸部には258のように箆描文をもつものと、無文のものがある。頸部と胴部の境界を沈線で区画する（256など）ものもあるが、302～316のような突帯文を巡らすものもある。

石器（第52図）はほとんどが弥生時代のもので、石鏃、石錐、石包丁、削器、磨製石斧がある。

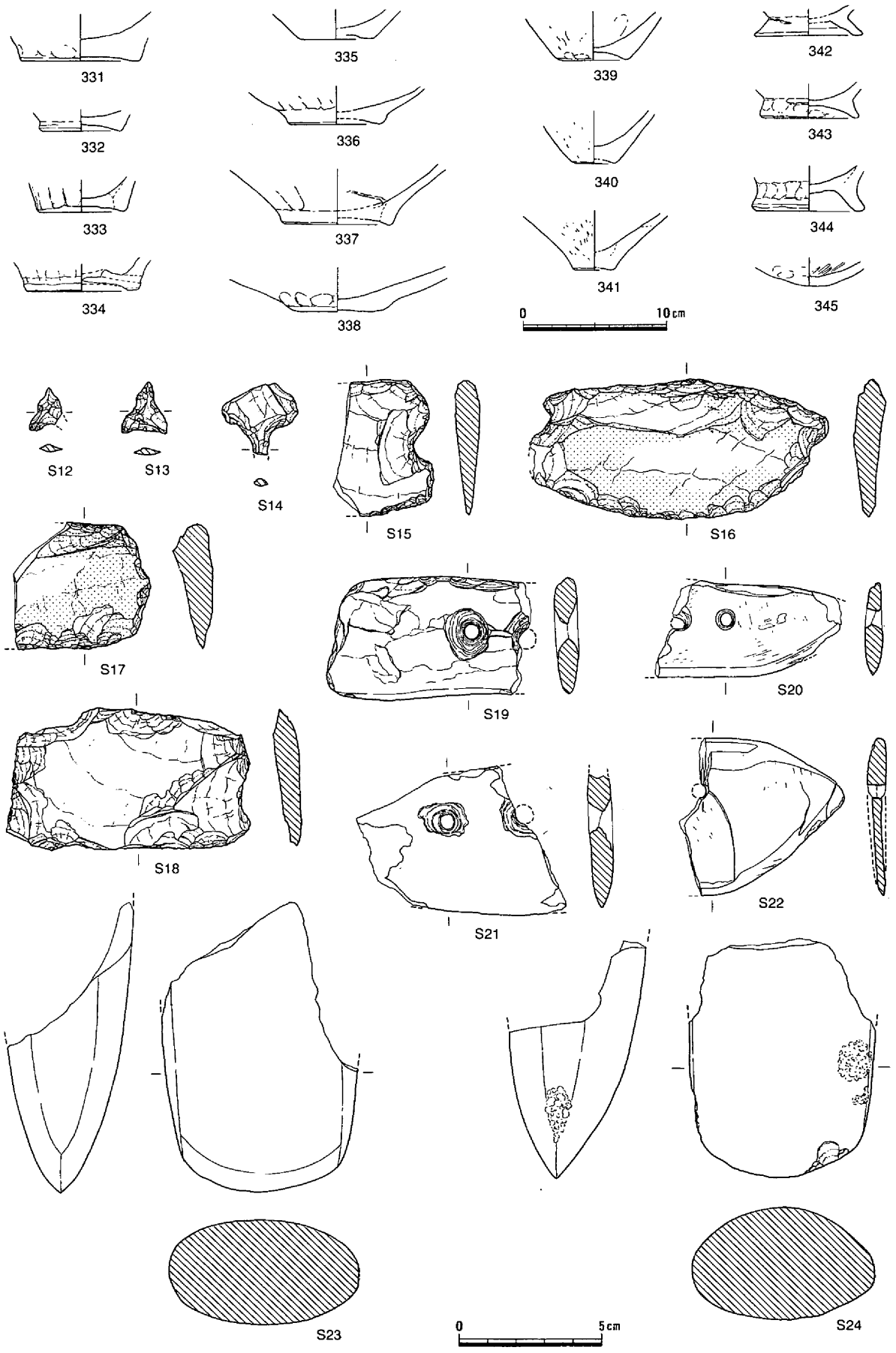
水路３区の遺物（第53図）は土器と石器がある。土器は突帯文出現前（353～356）と出現後（357～361）に分かれ、ほぼ浄化槽と同じ様相を呈する。石器としては、削器が出土した。　（平井勝）

付属建物１・２区では、河道10の北岸部分を検出した。河道が大きく湾曲する外側の部分にあたり、水流の攻撃を受けたためか、河道の肩はかなり急角度で落ちている。また底部近くでは、壁がえぐれている箇所も多い。深さは断面Ｂの南端部分がもっとも深く、完掘できていないが、検出面から５ｍ

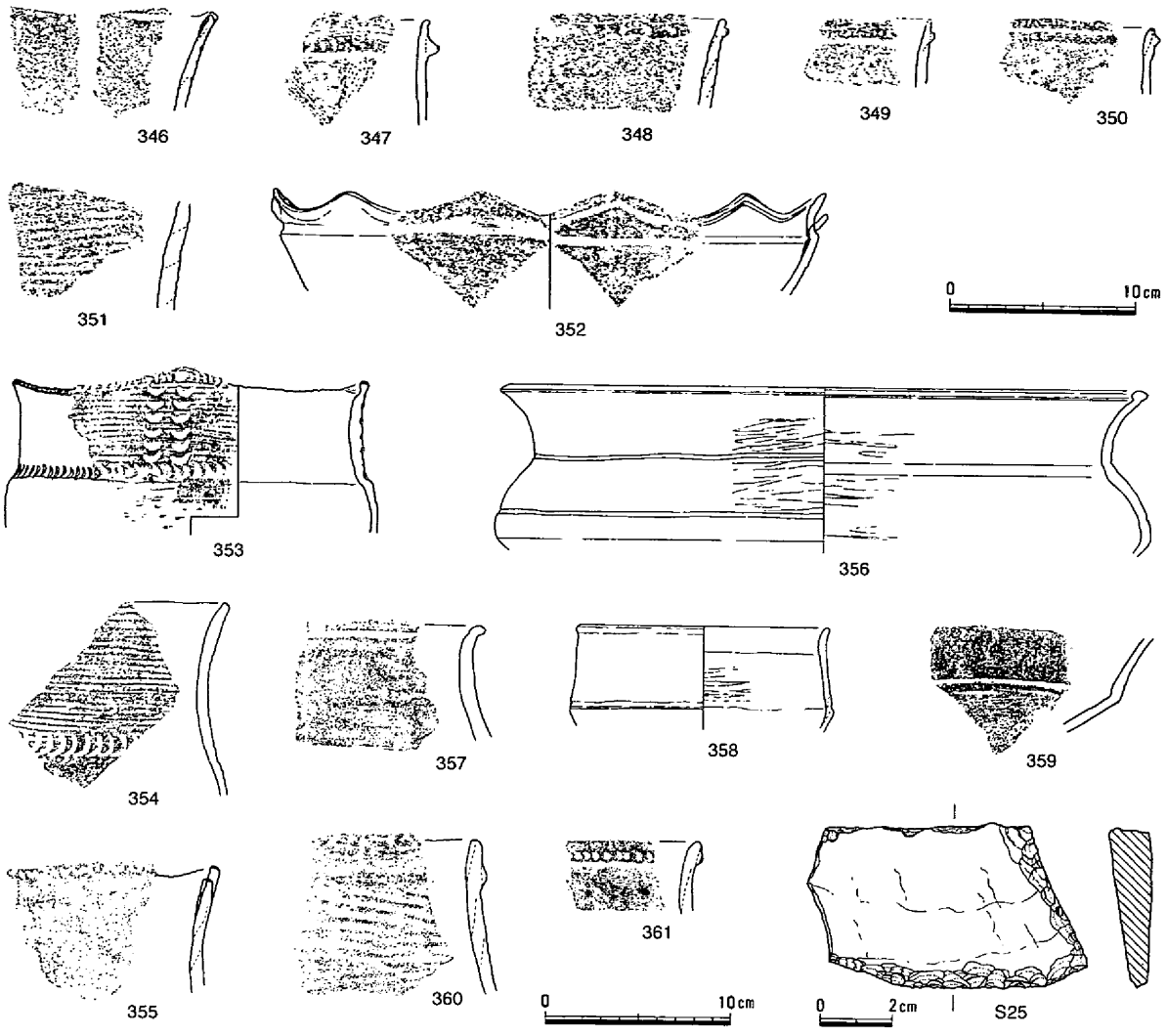
第50図　河道10出土遺物（4）



第51図　河道10出土遺物（5）



第52図　河道10出土遺物（6）

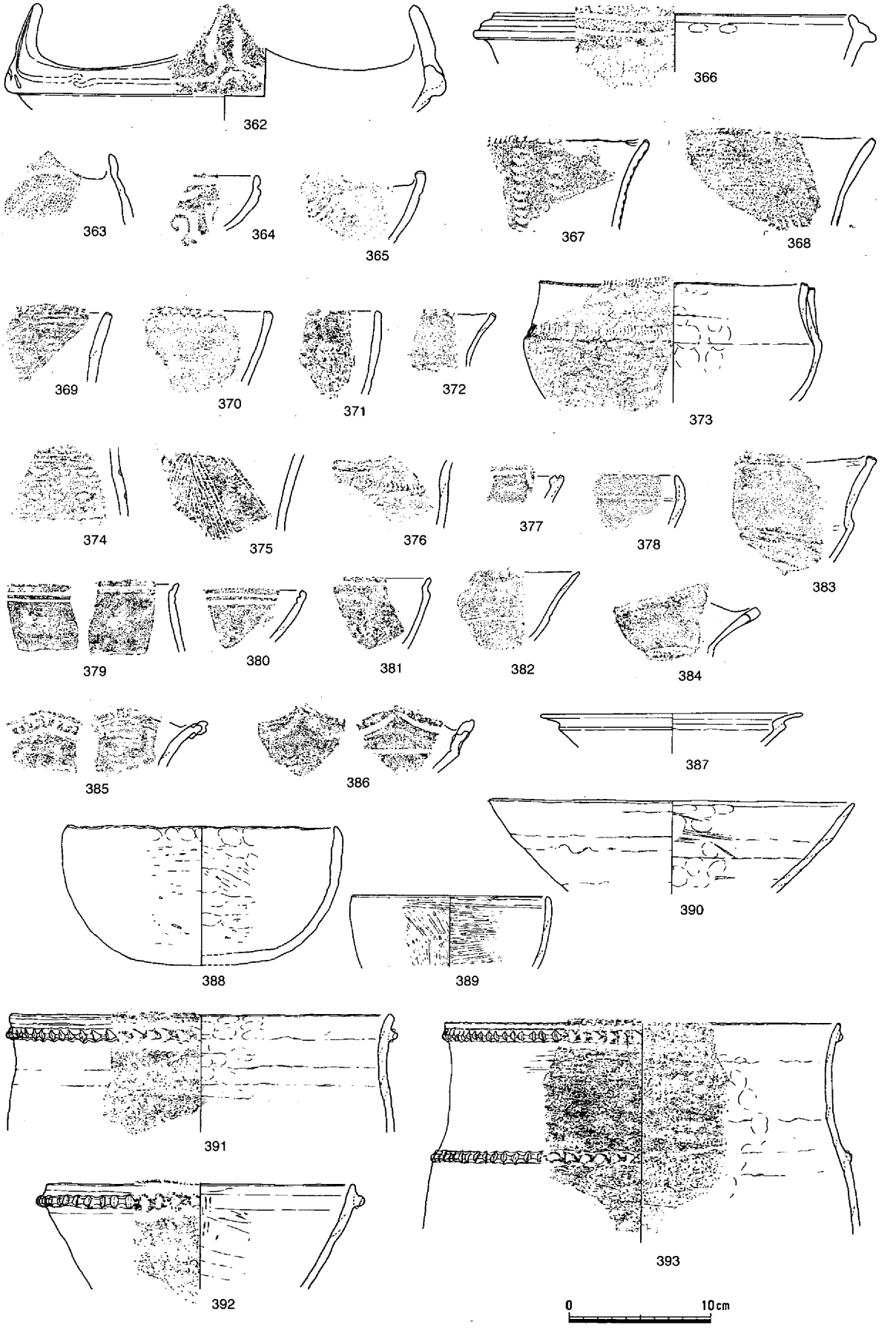


第53図　河道10出土遺物（7）

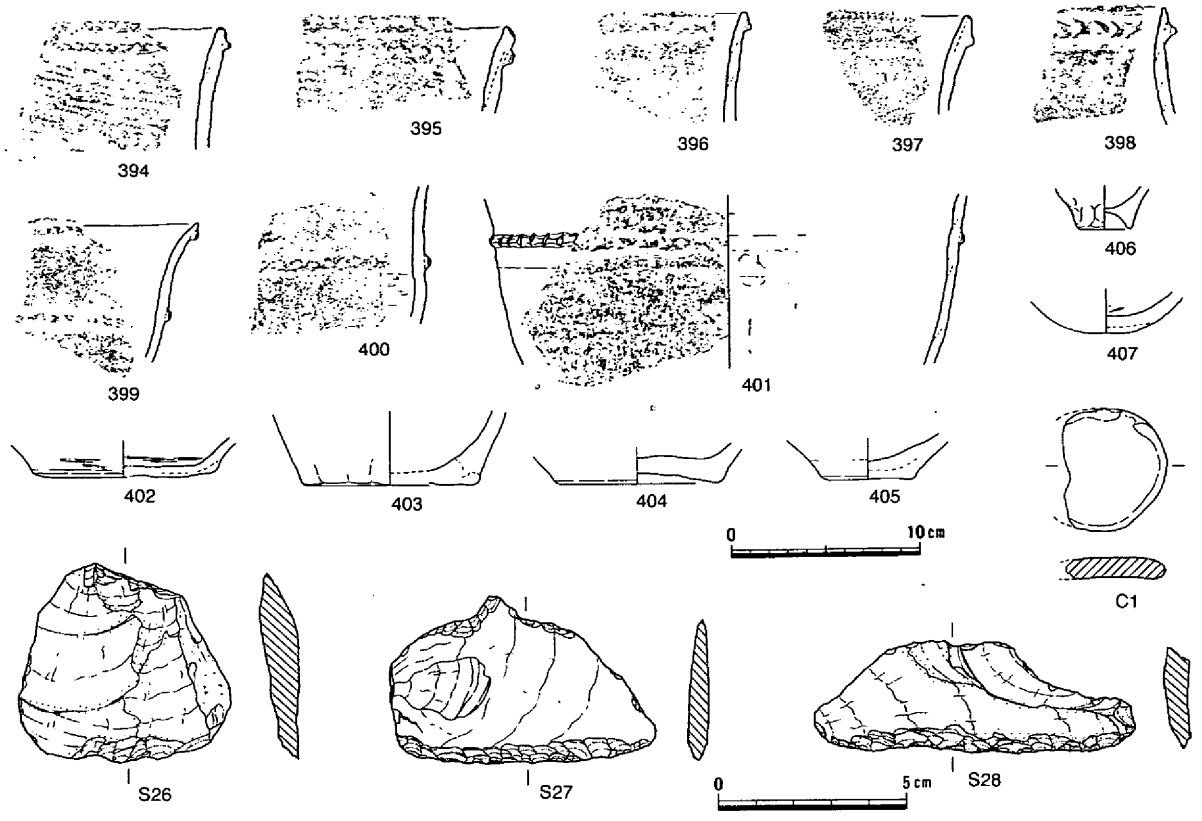
をこえると推定される。河道の埋土は、下層では粗砂が多く、上層では粘性を帯びる箇所が多い。特に断面Ｂ付近一帯では上層に非常に粘性の強い土が堆積していたことから、河道の埋没過程で、水の流れが弱く湿地状になっていたことが考えられる。

遺物は、下層の粗砂中からの出土が多いが、全体的に散漫な出土状態であり、特に遺物の集中する箇所は認められない。出土遺物には縄文時代後期から晩期の幅があるが、その両者に出土層位などの差はないようである。また縄文時代後期の土器は摩滅が著しいという傾向がある。そのほか、流木や種子などの植物遺体も多数採取された。

付属建物１・２区における河道10の出土遺物は第54・55図に示している。362～366は縄文時代後期の深鉢形土器で、磨消縄文を主体とする施文が行われている。367～401は縄文時代晩期の土器で、このうち367～390は刻目突帯をもたない一群、391～401は刻目突帯を有する一群である。前者は口唇部に刻目をもつ資料が多く、頸部には沈線文や爪形文が施される。後者は二条の刻目突帯をもつ資料が目立ち、晩期の中でも新しい様相を示す。また、402～407は深鉢形土器などの底部の破片である。そのほか、円板状土製品（Ｃ１）や、スクレイパー（Ｓ26・28）、石匙（Ｓ27）などのサヌカイト製石器が出土している。　（尾上）



第54図　河道10出土遺物（8）

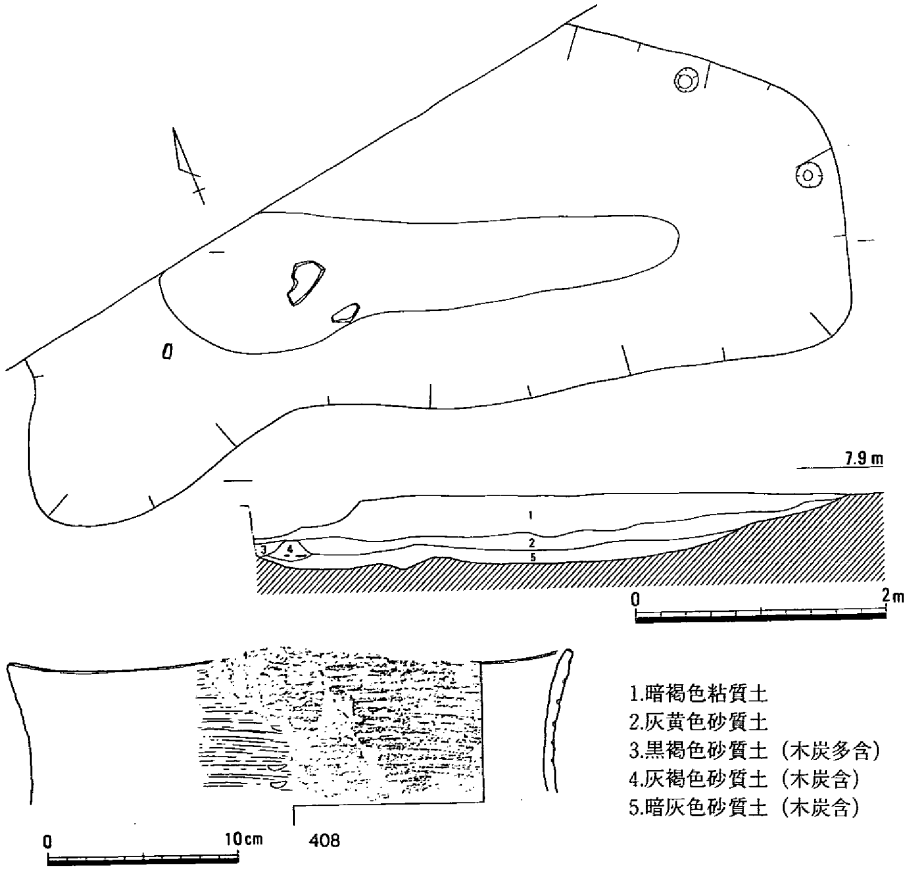


第55図　河道10出土遺物（9）

(4) たわみ

たわみ１（第56図）

付属建物２区の河道10の北側で検出したたわみ状の遺構である。長さ７ｍ前後の不整形な平面形を示し、深さ約30cmで、底部は比較的平坦である。埋土には木炭を多く含み、底部には石材が若干認められた。また肩に近い部分には小規模なピットが２基検出された。遺構の性格は不明であり、埋土から縄文時代晩期の土器片が若干出土している。　（尾上）



第56図　たわみ１、同出土遺物

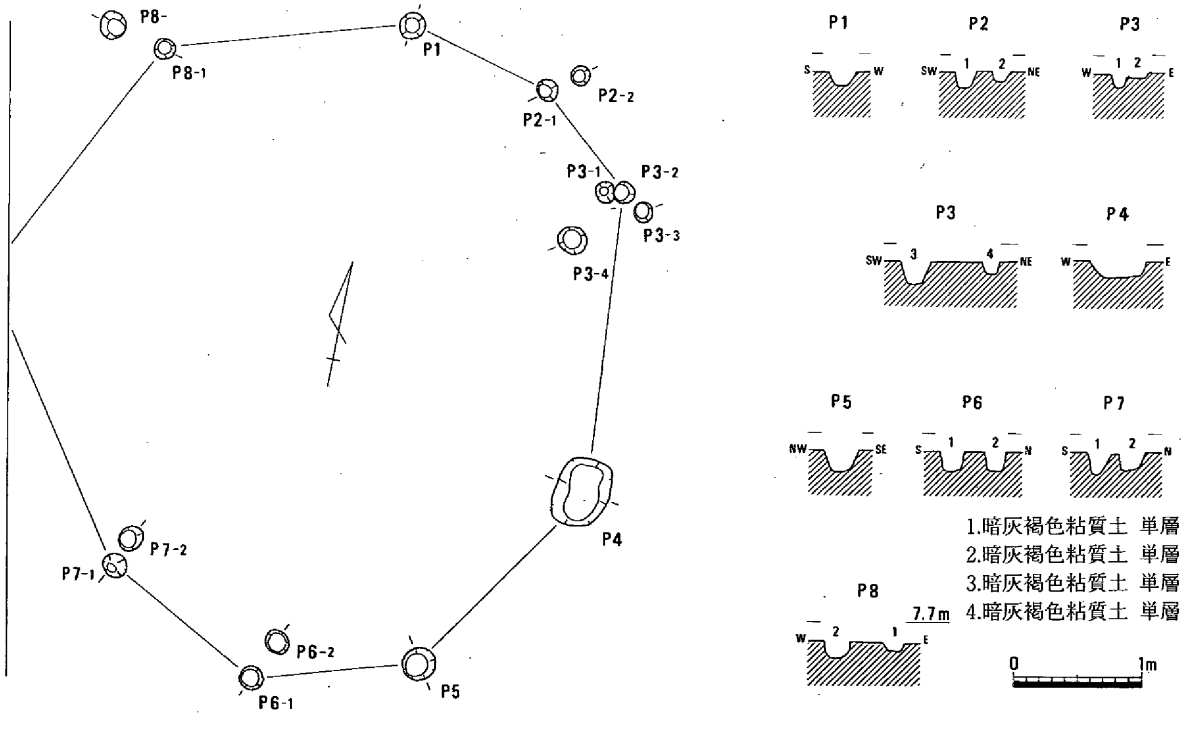
第２節　弥生時代の遺構・遺物

調査対象地区の中では、とくに弥生前期の遺構が多く検出されている。遺構の検出レベルは、表土から約40～50cm下の黄色粘（質）土層上面の海抜7.5m前後であり、竪穴住居１軒、土壙100余基・溝60余条・たわみ状遺構５基、柱穴状遺構多数が認められた。遺構分布の傾向を大きく捉えると、弥生前期から中期にかけての中心的な集落は、柱穴および土壙墓状の遺構が密集する本館の中央から南西部分と水路３区の南半から浄化槽区の南東隅、あるいは柱穴が密集する本館の南東部分である。また、比較的大規模な弥生前期の溝（溝９・53）と中期の溝（溝10）が病院敷地内のほぼ中央を北東から南西方向に流下し、同様に中期から後期の溝群（溝64～68）が敷地内の南東隅を同様に流下している。遺物は前期から中期の土器片が大量に（約270箱）出土しているが、その９割以上が溝からであり、出土量の割りには図示できるものは少なかった。また、石器は500点近くと多量であったが、その８割に相当する400余点を図示し、とくに石鏃と石錐については実大で写真図版に掲載した。　（柳瀬）

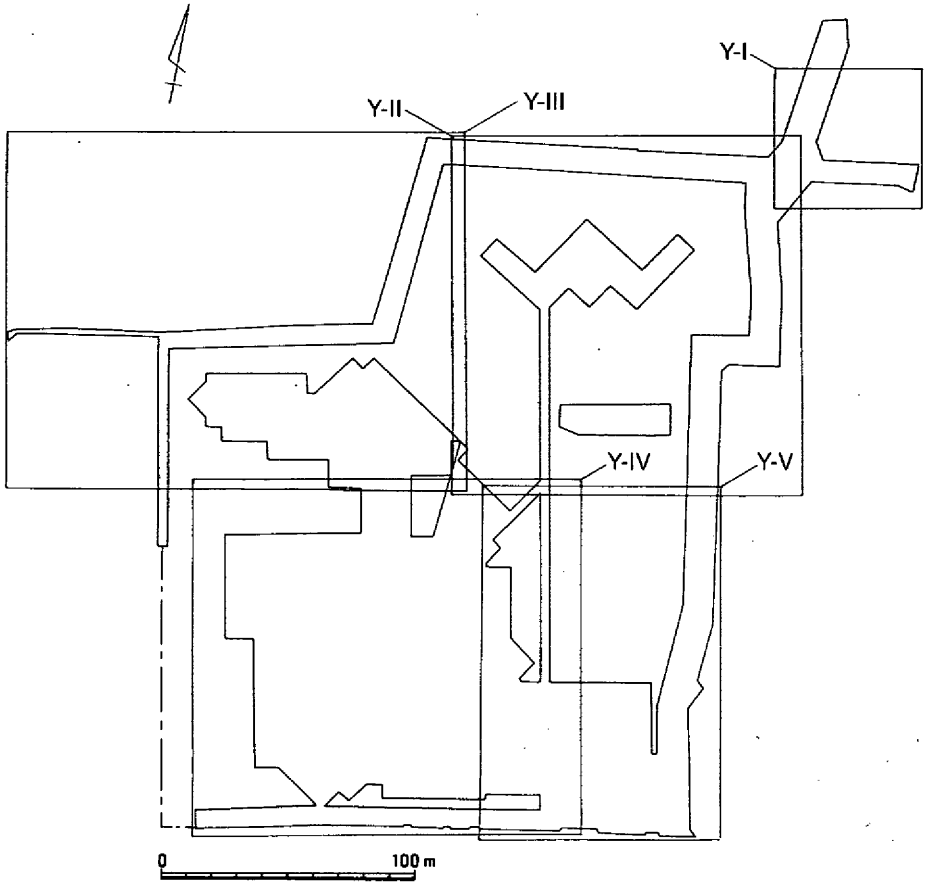
(1)　竪 穴 住 居

竪穴住居１（第57・62・101図、図版12－１）

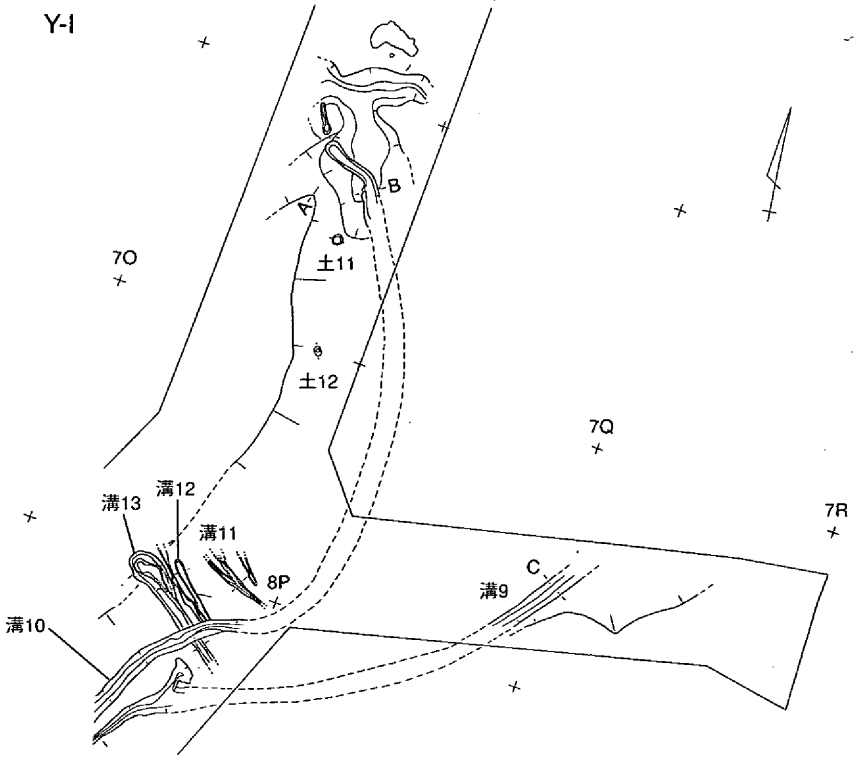
付属建物１区の北西部で検出した遺構である。削平を受け残存状況が悪いが、径20cm、深さ15cm前後の小ピットが弧状に配置していることから、竪穴住居の柱穴と判断した。竪穴住居の直径は７m前後に復元され、主柱は９～10本と推定される。また1箇所に２本の柱穴が認められる部分があり、住居の建て替えを示していると考えられる。遺物の出土は皆無で、時期は不明といわざるを得ないが、柱穴埋土の土質や周辺の遺構の検出状況から判断すれば、弥生時代前期の可能性が高い。　（尾上）



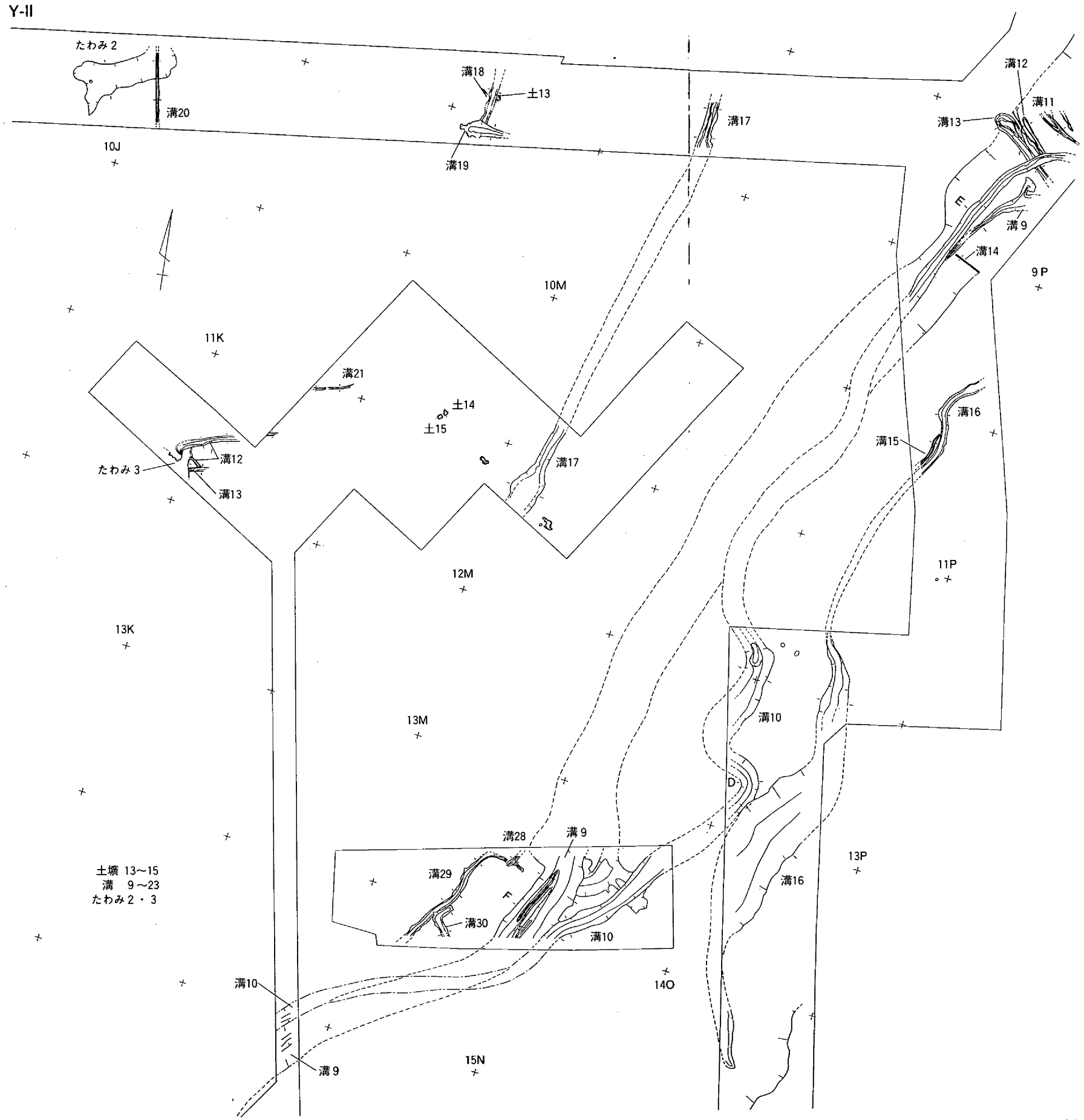
第57図　竪穴住居１



第58図　弥生時代遺構配置図範囲（1/3,000）

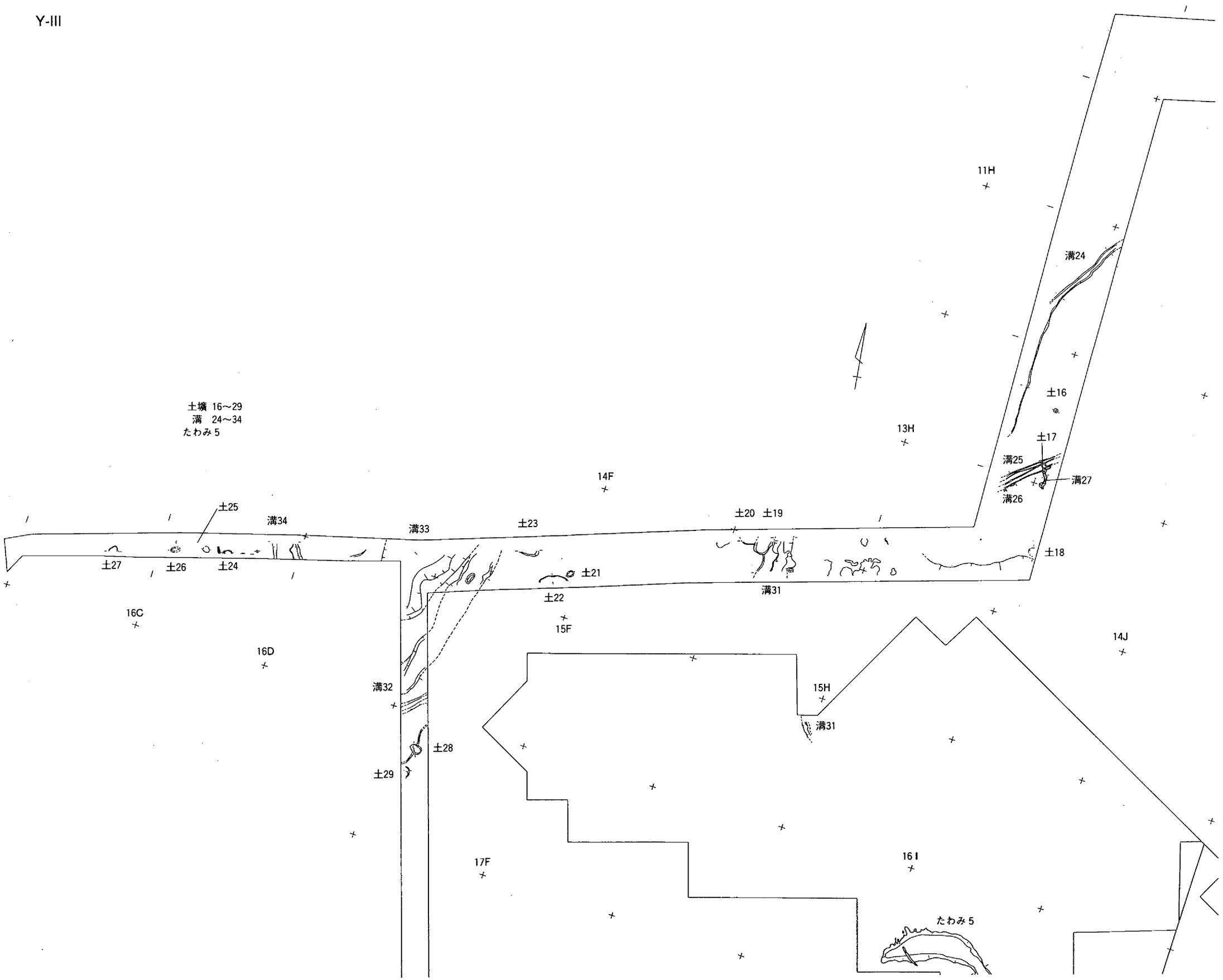


第59図　弥生時代遺構配置Ⅰ

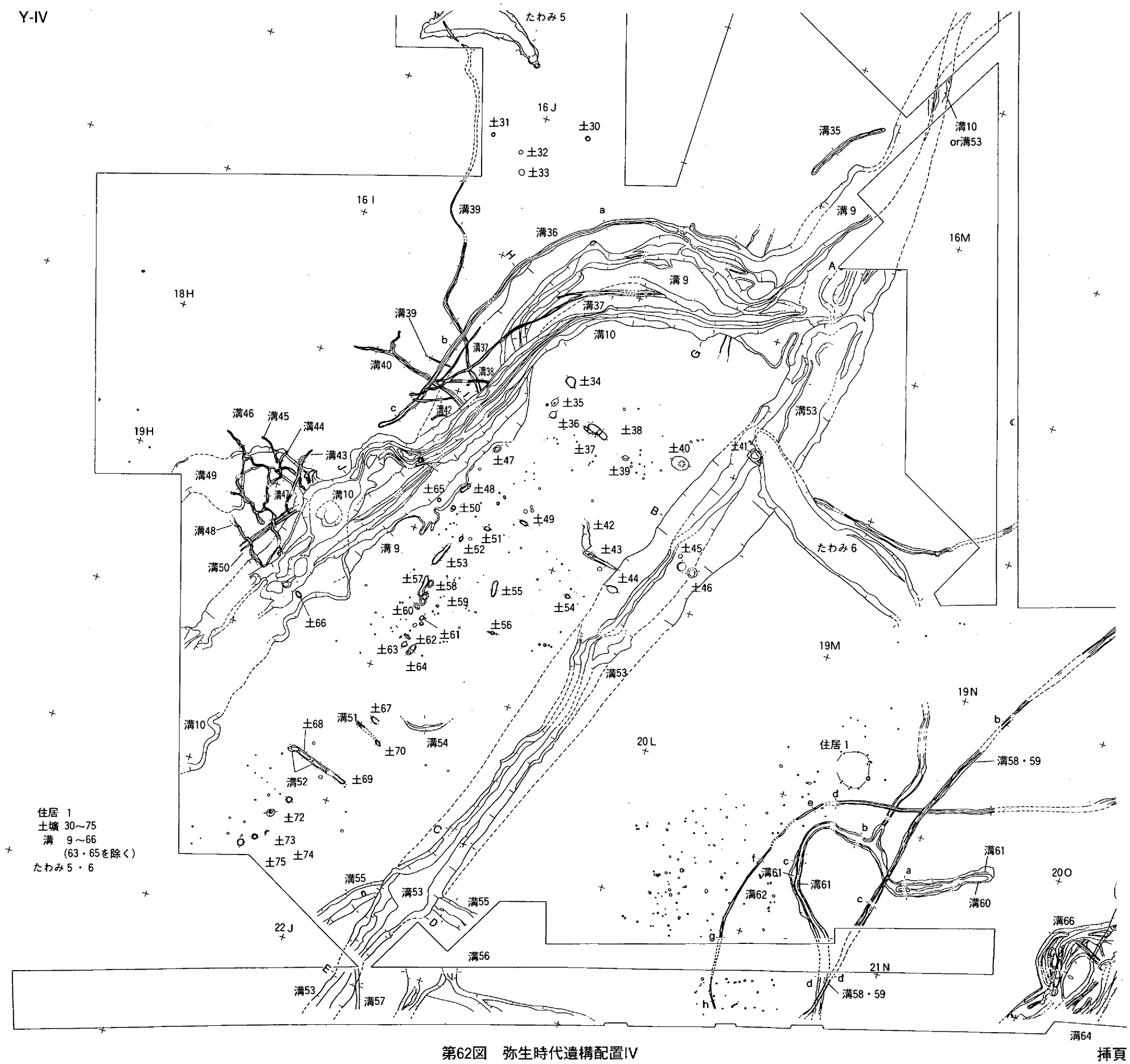


第60図　弥生時代遺構配置 II

Y-III



第61図　弥生時代遺構配置III



第62図　弥生時代遺構配置IV

(2)　土　　壙

土壙11（第59・63図）

進入路１区の中央部において検出した。平面形は85×81cmの楕円形で、深さは最深部で16cm残存していた。底面には凹凸が認められた。埋土は三層に区分できた。出土遺物がないため明確ではないが、時期は弥生時代で、中期中葉以降と考えている。　（平井泰）

土壙12（第59・63図）

進入路１区において、土壙11の南で検出した。平面形は75×52cmの楕円形で、深さは25cm残存していた。埋土は二層に分離でき、下層には土壙11と同じく淡灰色細砂が堆積していた。時期は出土遺物が無く明確ではないが土壙11と同じ頃と考えている。　（平井泰）

土壙13（第60・63図）

水路５区の東端部において検出した。溝18によって西端部がきられているが、平面形は直径約80cmの円形で、深さは約15cm残存していた。出土遺物がなく時期は明確ではないが、弥生時代ではなかろうか。　（平井泰）

土壙14（第60・63図）

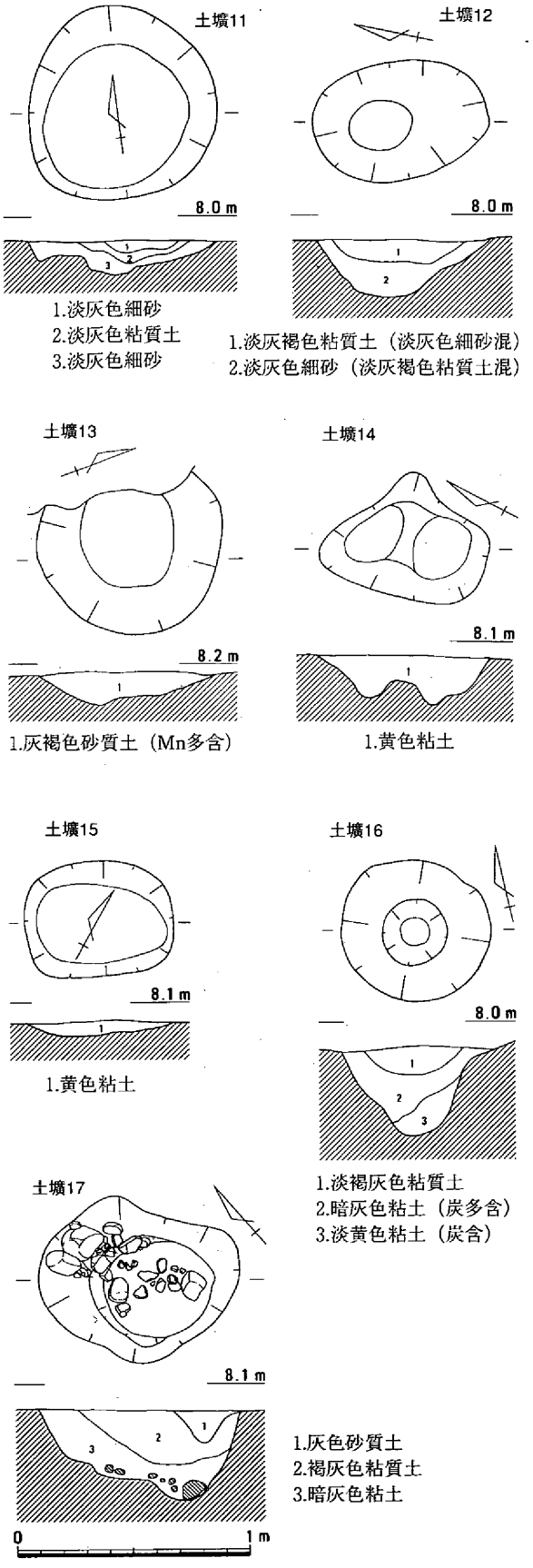
宿舎区の中央部において検出した。平面形は73×55cmの不整形で、深さは最深部で約20cmを測り、底面には二カ所に凹みがあった。土器片が１点出土しており、中期と考えている。　（平井泰）

土壙15（第60・63図）

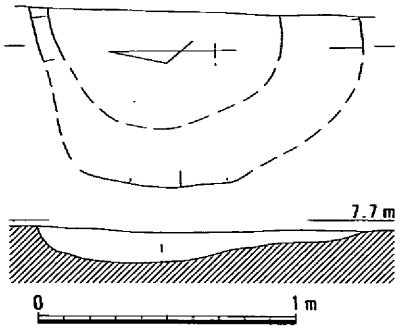
宿舎区の中央部、土壙14の南に接するようにして検出できた。平面形は64×50cmの不整楕円形で、深さは約６cm残存していたにすぎない。埋土中から土器の小片が出土しており、時期は後期後半と考えられる。　（平井泰）

土壙16（第61・63図）

水路５区の南端部に位置する。平面形は直径約64cmの円形で、深さは40cm残存していた。埋土中に炭を多く含むことが特徴である。時期は明確ではないが、弥生時代であろう。　（平井泰）

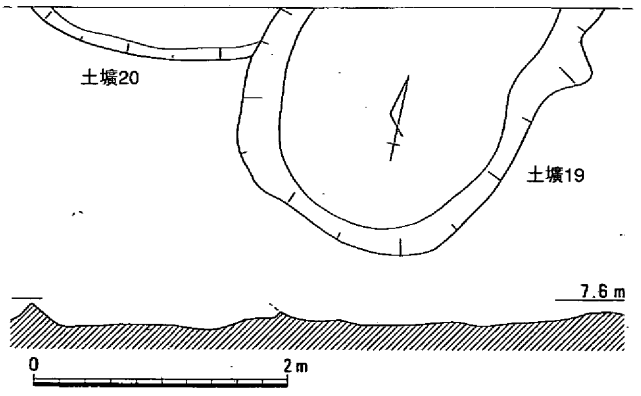


第63図　土壙11～17

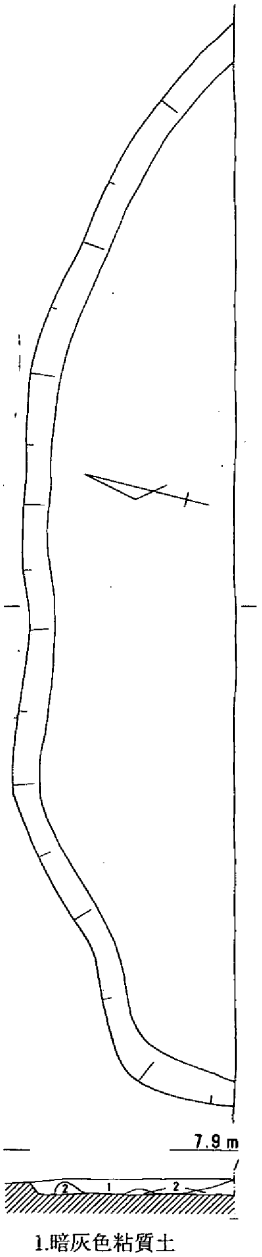


1.暗褐灰色粘質土

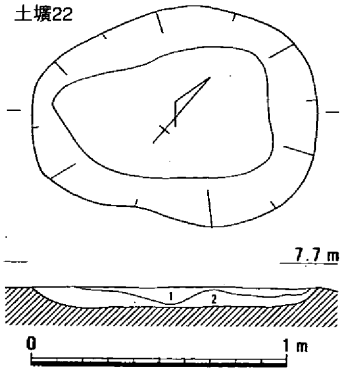
第64図　土壙18



第65図　土壙19・20



1.暗灰色粘質土
2.灰色細砂質土



1.暗灰色粘質土
2.灰色細砂質土

第66図　土壙21・22

土壙17（第61・63図）

水路５区の南端部において検出した。平面形は約80×62cmの不整楕円形で、深さは最深部で38cmを測る。埋土は三層に分離でき、最下層には川原石が多く存在していた。遺物は土器片が２点出土しており、時期については明確ではないが、中期と考えている。　（平井泰）

土壙18（第61・64図）

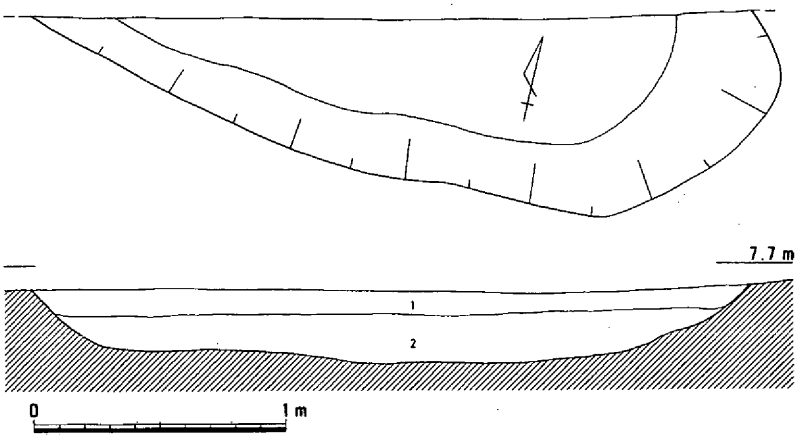
水路６区の東端部において検出した。東側が調査区外にのびていることや中央部が側溝によってきられていることなどから、形状は不明確であるが、楕円形で、深さは12cm残存していた。時期が特定できる遺物は出土していないが、弥生時代と考えている。　（平井泰）

土壙19・20（第61・65図、図版13－１）

両土壙とも、14Ｇ区の北西部に位置する。土壙19は、長軸長 4.2m前後、短軸長２m前後になると思われ、平面形態は楕円形である。深さは確認面から20cmで、断面形態は皿状である。土壙20は規模と平面形態は不明であるが、深さは確認面から20cmで断面形態は皿状を呈する。両者の先後関係は、土壙19が後出する。　（小林）

土壙21・22（第61・66図）

両土壙とも、14Ｅ区の南東部に位置する。土壙21は南半分が調査区外で全貌は不明だが、長軸長4.3m以上、短軸長 0.8m前後になり、平面形態は楕円形なると思われる。深さは確認面から６cmで、断面形態は皿状である。土壙22は、長軸長1.12m、短軸長0.86mで、平面形態は楕円形である。深さは確認面から８cmで、断面形態は皿状である。　（小林）



1.灰茶褐色粘質土
2.灰白色砂質土（Mn含）

第67図　土壙23

土壙23（第61・67図）

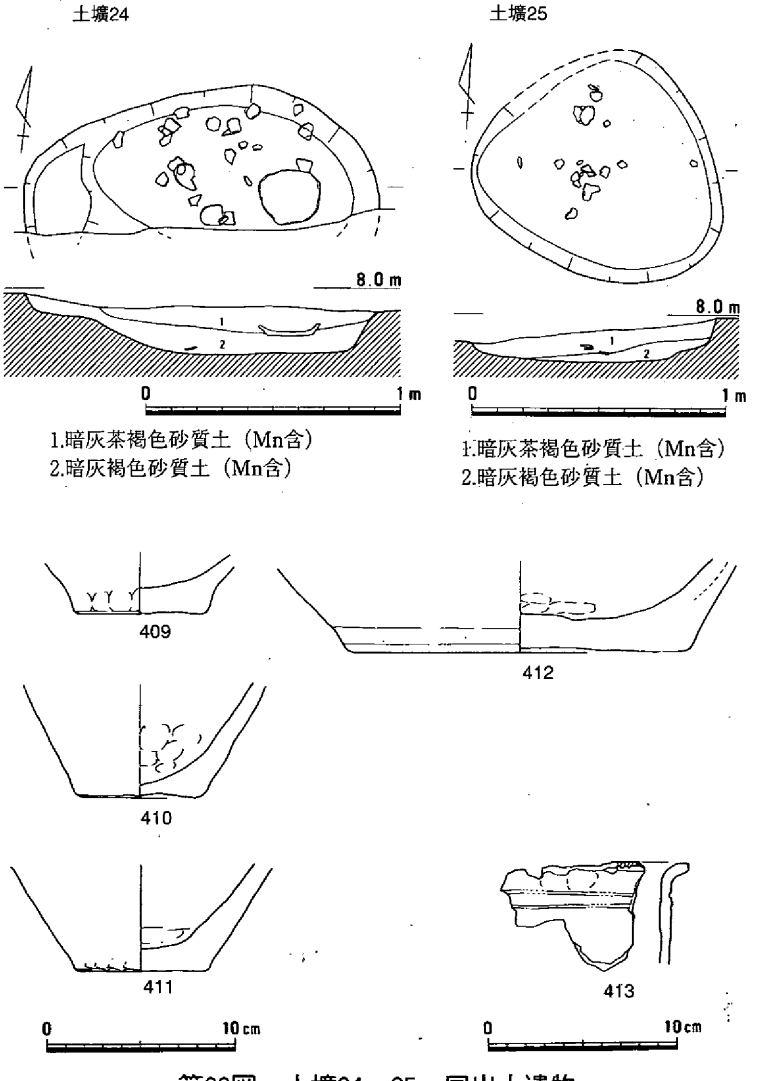
土壙23は、14Ｅ区の南東部に位置し、南東方向 3.5m付近に土壙21が存在する。北半分が調査区外のため全貌は不明だが、長軸長３ｍ以上、短軸長 0.8m前後で、平面形態は楕円形になると思われる。深さは確認面から30cmで、断面形態は皿状である。遺物は出土しない。　（小林）

土壙24（第61・68図）

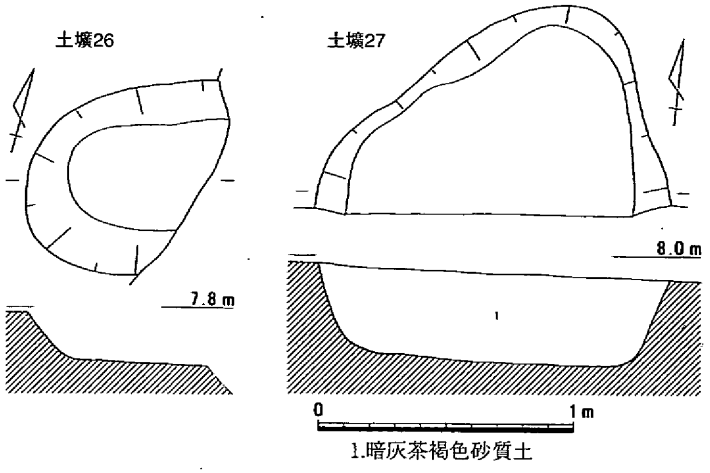
土壙24は、15Ｃ区の中央部よりやや北側に位置し、西方向２ｍに土壙25が存在する。南側 1/3が欠損しているが、長軸長 1.4m、短軸長約 0.8m前後で、平面形態は楕円形である。深さは約20cmで、断面形態は概ね皿状である。弥・前・Ⅱの土器片が多数出土し、409～ 411は甕の底部で、 412は壺の底部である。　（小林）

土壙25（第61・68図）

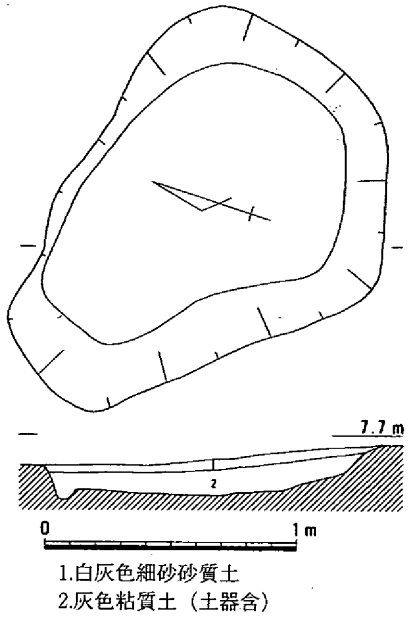
土壙25は、15Ｃ区の中央部よりやや北西側に位置し、東方向２ｍに土壙24が存在する。北側の一部が欠損しているが、土壙の規模は長軸長0.95m、短軸長 0.9mで、平面形態は不整円形である。深さは約13cmで、断面形態は皿状である。弥・前・Ⅱの土器片が出土し、 413は甕で、頸部に２条のヘラ描沈線があり、口縁端部には刻目文がある。　（小林）



第68図　土壙24・25、同出土遺物



第69図　土壙26・27



第70図　土壙28、同出土遺物

土壙26（第61・69図）

土壙26は、15Ｃ区の西側に位置する。東半分を溝78に切られているため全貌は不明だが、長軸長 1.5m前後、短軸長 0.8mで、平面形態は楕円形である。深さは確認面から18cmで、断面形態は皿状を呈する。遺物は出土しない。　（小林）

土壙27（第61・69図）

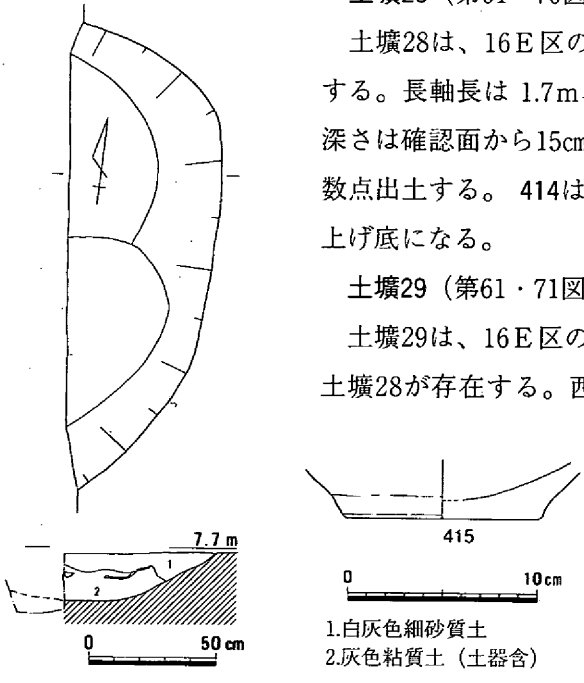
土壙27は、15Ｂ区の中央部よりやや東側に位置する。北北東８m付近に土壙26が存在する。南側が調査区外になるため全貌は不明であるが、長軸長 1.4m、短軸長 1.3m前後で、平面形態は不整円形になると思われる。深さは確認面から36cmで、断面形態は皿状である。遺物は出土しない。　（小林）

土壙28（第61・70図）

土壙28は、16Ｅ区の北西側に位置し、南方向 2.2m付近に土壙29が存在する。長軸長は 1.7m、短軸長は 1.3mで、平面形態は不整楕円形である。深さは確認面から15cmで、断面形態は皿状である。覆土内からは土器片が数点出土する。414は弥・前・Ⅱの甕の底部である。底面はドーナツ状の上げ底になる。　（小林）

土壙29（第61・71図、図版13－３）

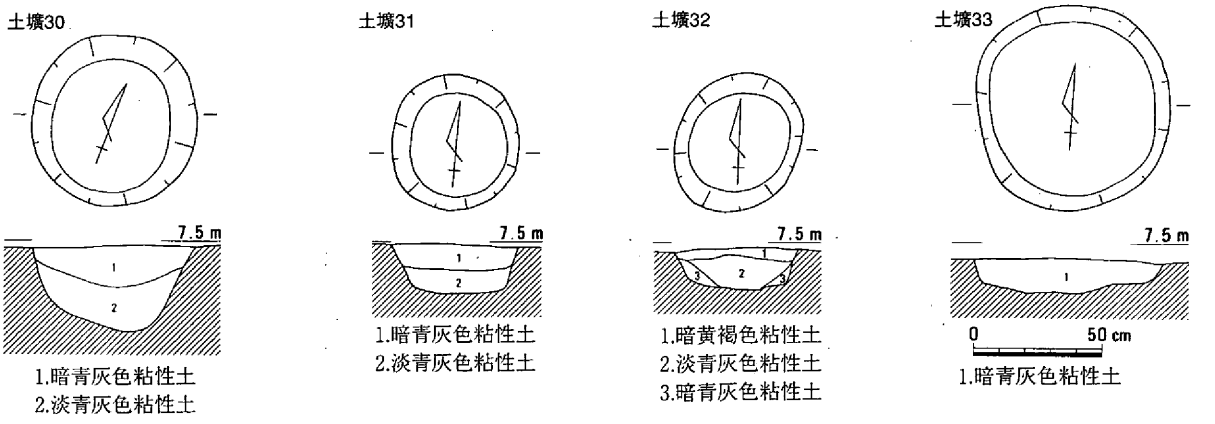
土壙29は、16Ｅ区の中央部よりやや西側に位置し、北方向 2.2m付近に土壙28が存在する。西半分が調査区外のため全貌は不明だが、長軸長は 1.8m以上、短軸長は 1.2m前後で、平面形態は楕円形である。深さは18cmで、断面形態は皿状である。土器片が数点出土し、415は弥・前・Ⅱの壺の底部である。　（小林）



第71図　土壙29、同出土遺物

土壙30（第61・72図）

土壙30は、17Ｊ区の北東側に位置し、南南西９m付近に土壙32が存在する。長軸長は0.85m、



第72図　土壙30～33

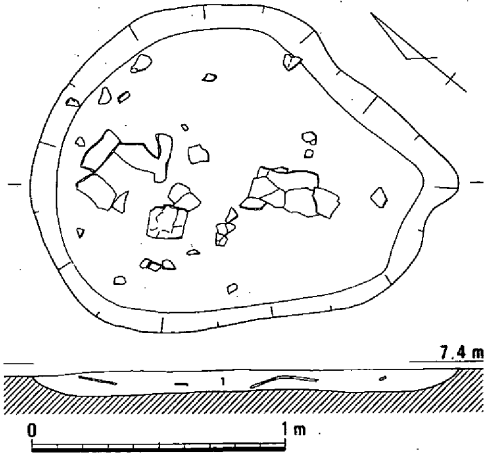
短軸長は0.65mで、平面形態は円形である。深さは確認面から33cmで、断面形態は半円形状である。遺物は出土しない。　（小林）

土壙31（第62・72図）

土壙31は、17Ｉ区の北東側に位置し、南東 4.2m付近に土壙32が存在する。長軸長は0.55m、短軸長は 0.5mで、平面形態は円形である。深さは20cmで、断面形態は皿状である。　（小林）

土壙32（第62・72図）

土壙32は、17Ｉ区の北東側に位置し、北東 4.2mに土壙31が、南 2.2mに土壙33が存在する。長軸長は 0.6m、短軸長は0.48mで、平面形は楕円形である。深さは17cmで、断面形は皿状である。　（小林）

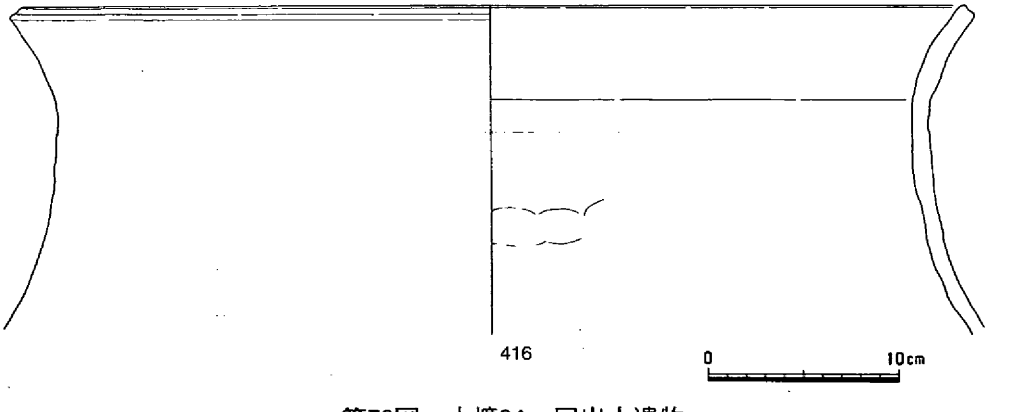


土壙33（第62・72図）

土壙33は、17Ｉ区の北東側に位置し、北 2.2mに土壙32が存在する。長軸長は0.85m、短軸長は0.75mで、平面形態は円形である。深さは14cmで、断面形態は皿状である。　（小林）

土壙34（第62・73図、図版14－１）

土壙34は、18Ｊ区の南東側に位置し、南 2.5mに土壙35が存在する。土壙の規模は長軸長 1.7m、短軸長

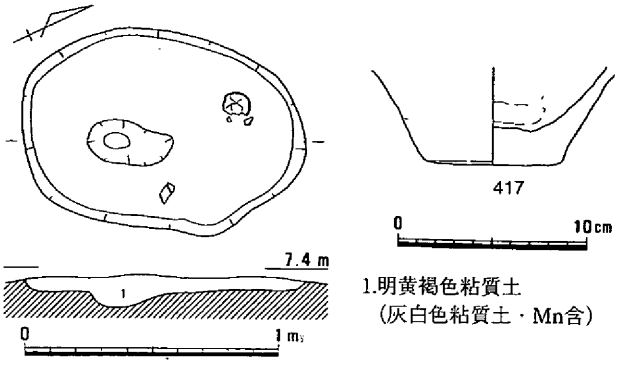


第73図　土壙34、同出土遺物

1.7mで、平面形態は不整楕円形である。深さは確認面から９cmで、断面形態は皿状である。覆土内からは、416が横になり上部が削平された形で出土した。416は、弥・前・Ⅱの壺である。口径は50.4cmと大型で、口縁部は逆「ハ」字に立ち上がる。（小林）

土壙35（第62・74図）

土壙35は、18Ｊ区の南東部に位置し、北側2.5mに土壙34が、南側0.7mに土壙36が近接する。規模は長軸長1.1m、短軸長0.78mで、平面形態は楕円形である。深さは12cmで、断面形態は皿状で中央部が突状になる。土器片が数点出土し、417は弥・前・Ⅱの甕の底部である。（小林）



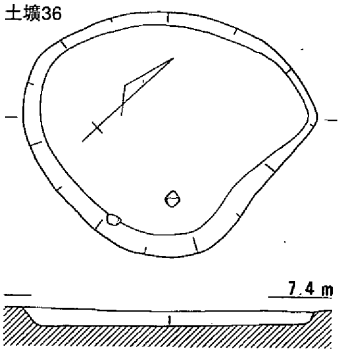
第74図　土壙35、同出土遺物

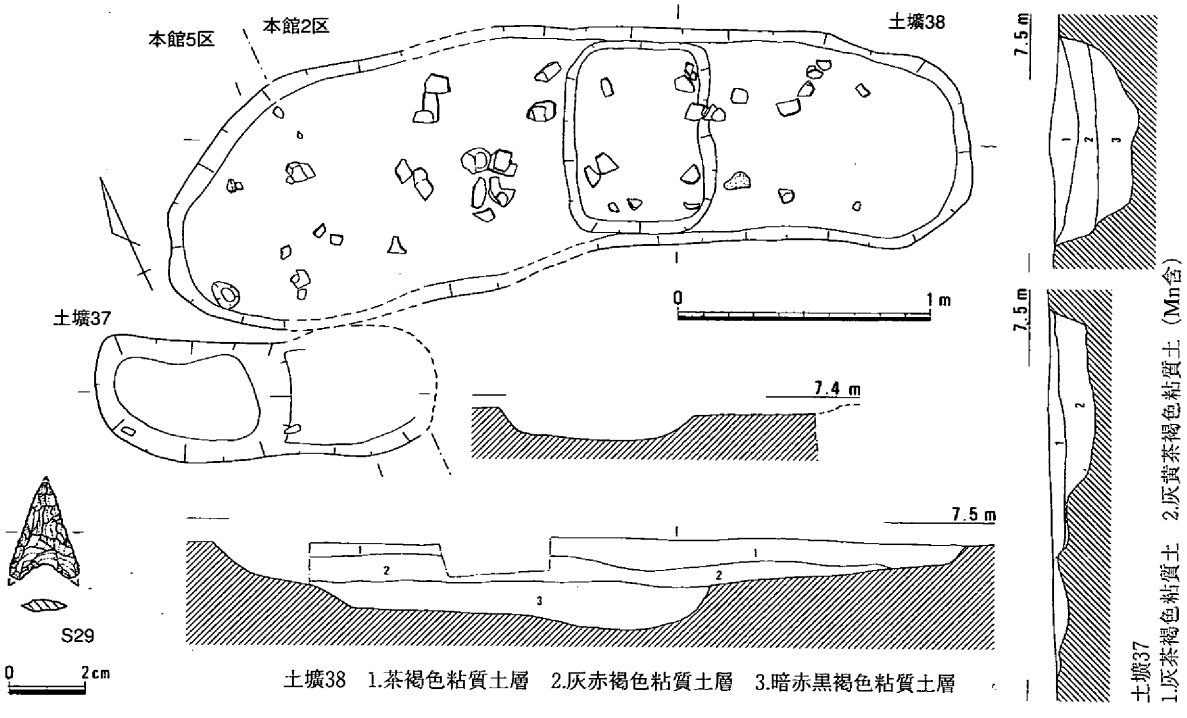
土壙36（第62・75図、図版14－２）

土壙36は、18Ｊ区の南東部に位置し、北側0.7mに土壙35が近接する。規模は長軸長1.2m、短軸長0.97mで、平面形態は不整円形である。深さは６cmで、断面形態は皿状である。遺物は弥・前・Ⅱの土器片が数点出土するが、図化出来るものはない。（小林）

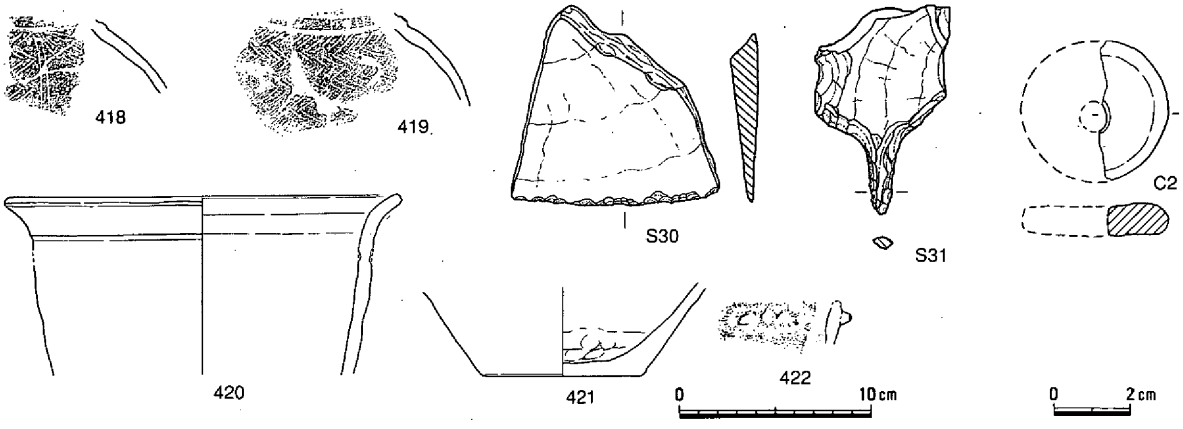
土壙37（第62・75図、図版14－３）

土壙37は、18Ｊ区の南東端と19Ｊ区の北東端の境に位置する。東側1/3が調査区外のため全貌は不明だが、長軸長1.3m、短軸長0.45mで、平面形態は不整楕円形になると思われる。断面は西側が深く東側が浅くなり、最深部では12cmを測る。（小林）





第75図　土壙36～38、土壙37出土遺物



第76図　土壙38出土遺物

土壙38（第62・75・76図、図版14－３・４・71）

18Ｊ区南東隅の土壙37に接して位置する土壙である。平・断面形からみて、２基の土壙が重複している可能性もある。規模は最大で長さが320cm、幅は180cmで深さが30cmを測る。

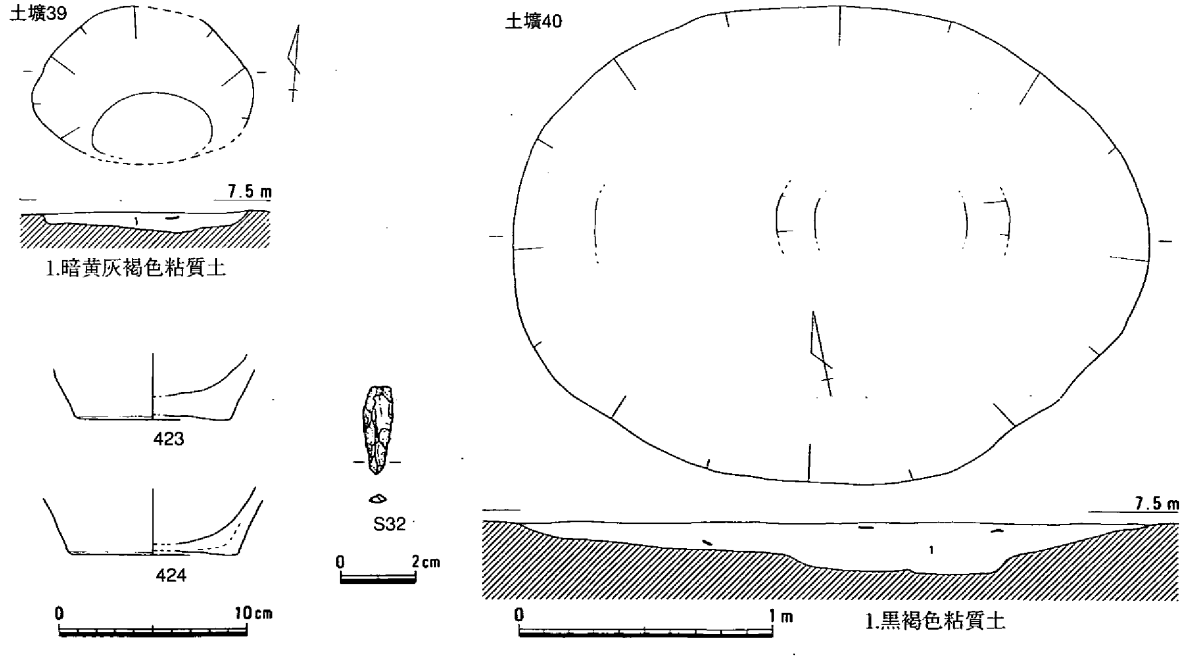
出土遺物についてみると、418・419は、頸部に削出し突帯をめぐらせ、帯部は無軸木葉文と綾杉文で飾る。甕420は頸部に段を有し、口縁部は如意状を呈す。また、口縁端直下に貼付け突帯をもつ甕422も存在する。土器以外の遺物としては、サヌカイト製のスクレーパーＳ30、錐Ｓ31や土製紡錘車Ｃ２もみられる。この土壙の時期は、前期中葉である。（弘田）

土壙39・40（第62・77図、図版71）

土壙39は19Ｋ区の北西部に位置する土壙であり、平面形が楕円形を呈し、断面形は浅い皿状を呈す。規模は、長径が87cmで、深さは10cmを測る。

出土した土器片から判断してこの土壙の時期は、前期中葉ころとみられる。

土壙40は18～19Ｋ区の19ライン上に位置する土壙で、平面形が楕円形を、断面形は浅い皿状を呈す。



第77図　土壙39・40、土壙40出土遺物

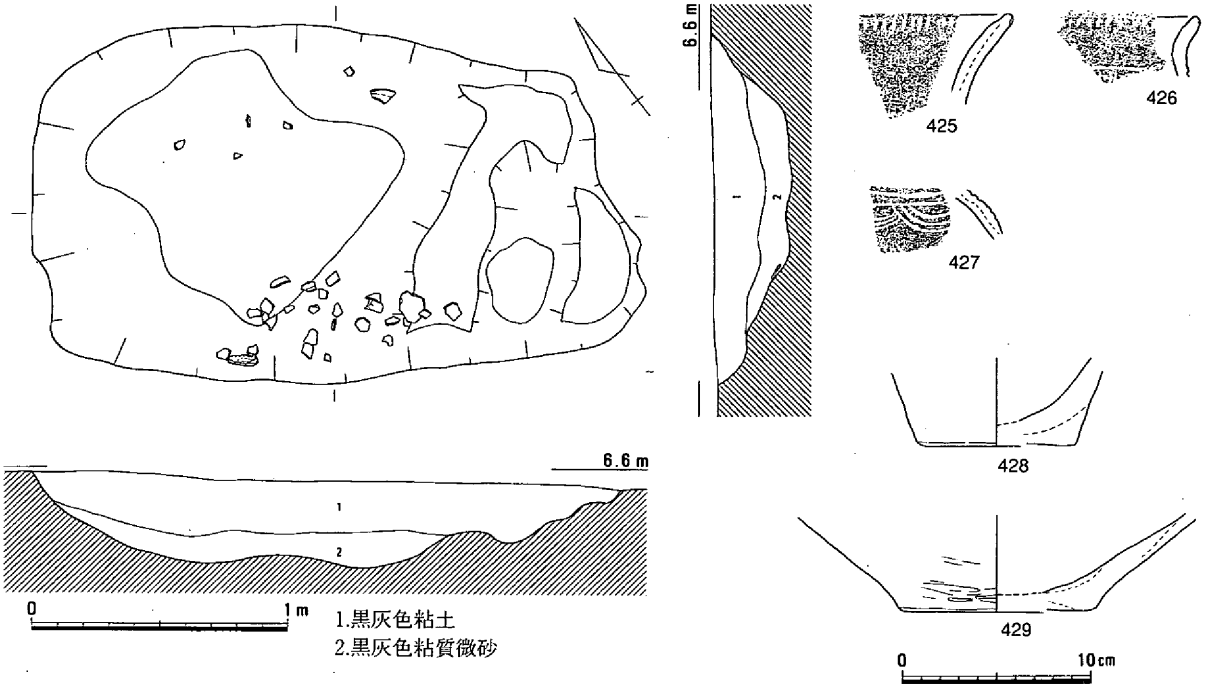
規模は、長さが249cmで、幅は188cm、深さが21cmを測る。

弥生土器の底部片423・424とサヌカイト製石錐Ｓ32が出土しており、これからみるとこの土壙の時期は、弥生時代前期と思われる。（弘田）

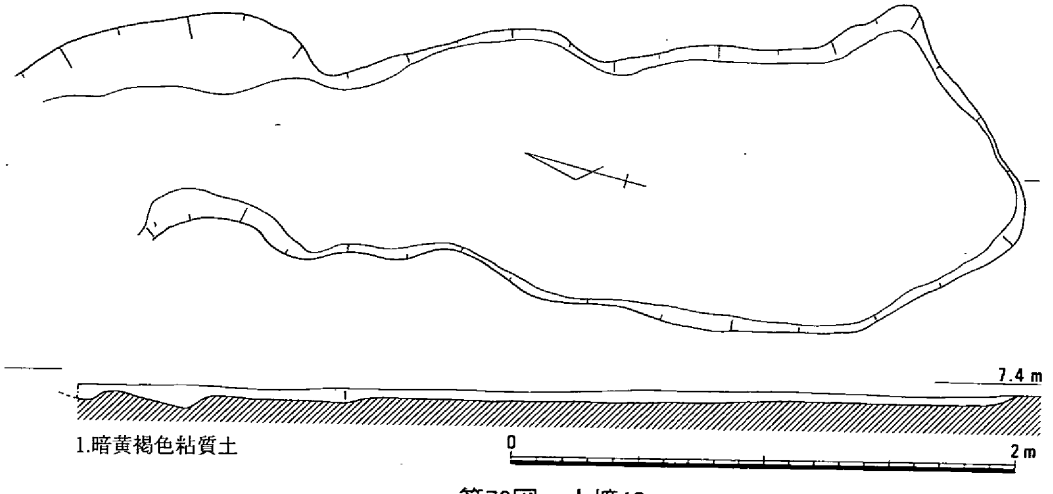
土壙41（第62・78図、図版15－１）

18Ｌ区の南西隅に位置する。平面形は長方形であるが、断面形は長辺方向をみると西側が階段状を呈しており、全体的に不整な椀形をなす。規模は、長辺が239cm、短辺は143cmで、深さが38cmを測る。

出土遺物のうち、425～427は壷である。口縁部の長く外上方に立つ425と短く外反する426があるがともに端部には刻目を施す。427は胴部片で、２条の沈線の直下に上弦重弧紋を施す。なお、428は甕の、429は壺の底部とみられる。この土壙の時期は、前期中葉である。（弘田）



第78図　土壙41、同出土遺物



第79図　土壙42

土壙42（第62・79図）

19Ｋ区の南西部に位置する。平面形が不整形で、長さは400cmあまりで、最大幅が115cmを測るのに対し、深さはわずかに16cmである。

わずかに出土した土器小片からみてこの土壙の時期は、弥生時代前期中葉ころと思われる。　（弘田）

土壙43（第62・80図、図版15－２・62）

19Ｋ区の南西部に位置する。平面形はややいびつで、東西に細長い溝状を呈し、断面も浅い皿状をなす。規模は、長さが540cm、幅が75cmで、深さは27cmを測る。

甕430は底部を欠くが多くの破片が土壙の東側でまとまって出土した。如意状の口縁部は、端部がやや丸みをもつ。その外面直下には16条と多条化したヘラ描き沈線を施している。

この土壙の時期は、前期後葉である。　（弘田）

土壙44（第62・81図）

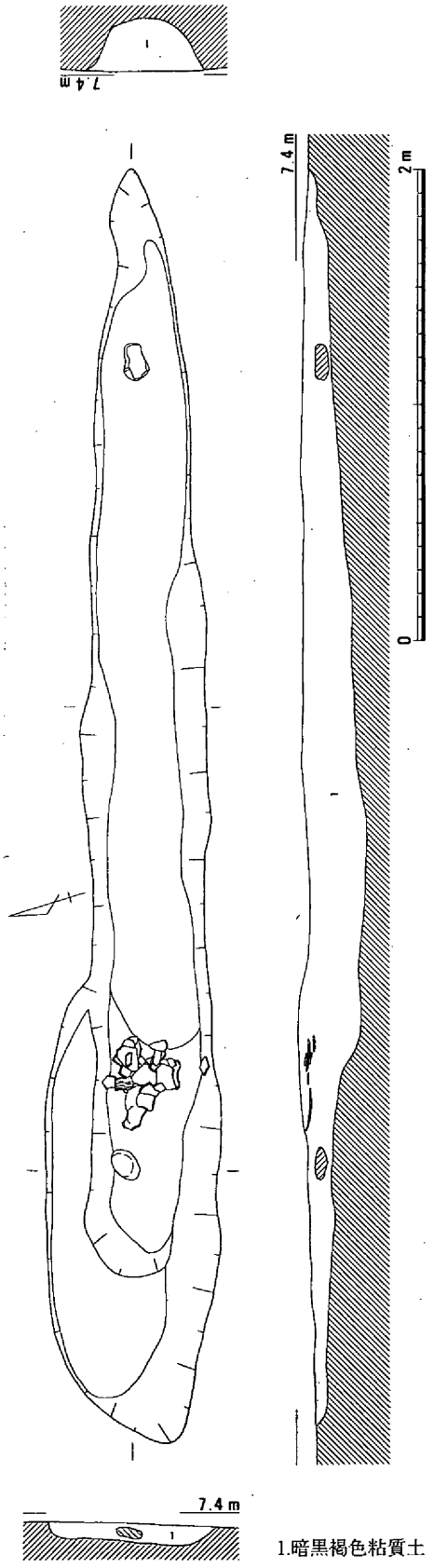
19Ｋ区南端中央部に位置する。平面形が不整楕円形を、断面形は浅い皿状を呈す。規模は、長さが166cmで、幅は100cm、深さが19cmを測る。

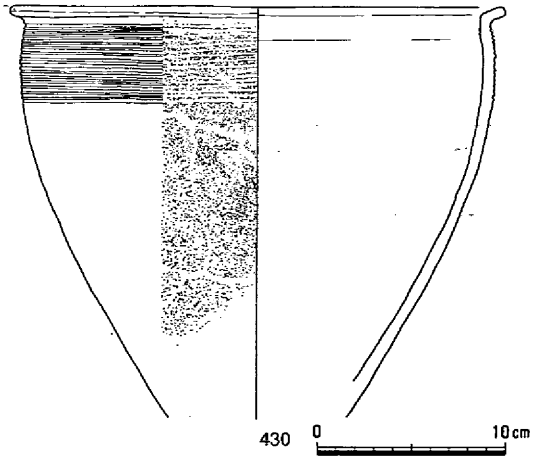
土壙の時期は、溝53を切っていることと、出土した土器片から前期後葉と考えられる。　（弘田）

土壙45（第62・82図）

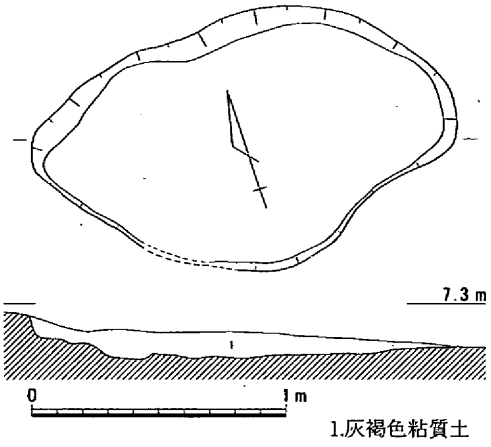
19Ｋ区の東端に位置し、溝53埋没後に掘り込まれている。平面形が円形で、断面形が箱形を呈す。規模は、直径が123cm、深さは50cmを測る。

周囲の状況から時期は、前期の可能性がある。（弘田）

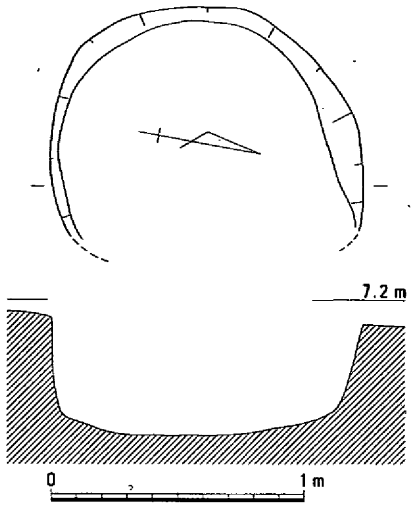




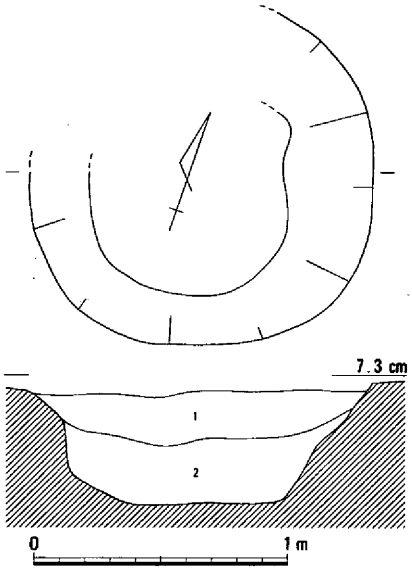
第80図　土壙43、同出土遺物



第81図　土壙44



第82図　土壙45



第83図　土壙46

土壙46（第62・83図、図版15－３）

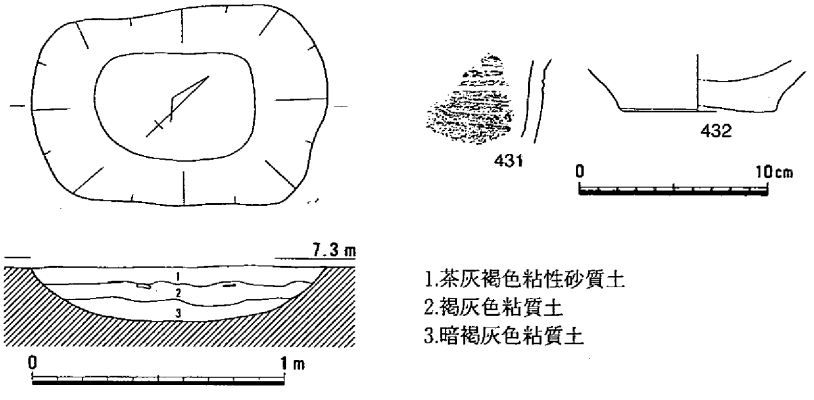
土壙45の東に接して位置する。平面形は円形で、断面形が逆台形状を呈する。規模は、直径が135cmで、深さは48cmを測る。出土遺物はないものの、土壙の時期は埋土や検出レベルなどから弥生時代と思われ、かつ溝53を切ることから前期後葉以降と考えられる。　（弘田）

土壙47（第62・84図）

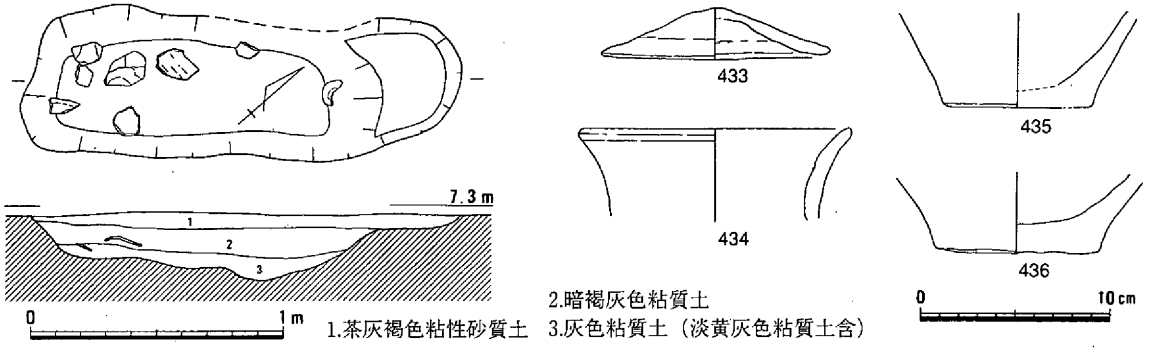
19Ｊ区の北半で検出された、溝９の東側に位置する土壙である。平面形は隅丸長方形、断面形は椀状を呈する。規模は、長さ117cm、幅78cm、深さ22cmを測る。埋土は３層に分層され、遺物は主として第２層から出土している。431・432はそれぞれ弥生土器の甕の口縁部と底部である。土壙の時期は弥生時代前期と思われる。　（岡本）

土壙48（第62・85図、図版16－１・62）

19Ｊ区の南半、溝９の東側に接する位置で検出された土壙である。平面形は不整な隅丸長方形を呈し、一見土壙墓を思わせる形態である。長さ174cm、幅60cm、深さは最大で26cmを測る。北東の壁面には段を有し、底面は北東側へ傾斜している。遺物は主に南半部の第２層中から出土した。433は蓋、434は壺、435は甕の底部、



第84図　土壙47、同出土遺物



第85図　土壙48、同出土遺物

436は壺の底部である。これらの遺物から、土壙の時期は弥生時代前期と考えられる。　（岡本）

土壙49（第62・86図、図版75）

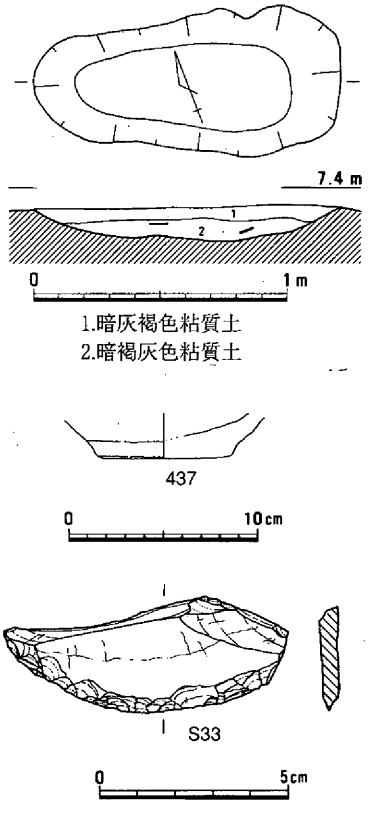
19Ｊ区南半部で検出された。平面形は東側がやや角張った不整な長楕円形を呈し、長さ122cm、幅59cm、深さ13cmを測る。壁面の傾斜は緩く、底面との境は不明瞭である。遺物は主に第２層から出土したが、小片のため図示しうるものは少ない。437は甕の底部、Ｓ33はサヌカイト製のスクレイパーである。土壙の時期は弥生時代前期と思われる。　（岡本）

土壙50（第62・87図）

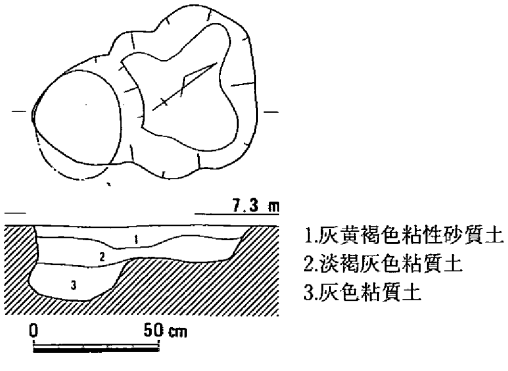
19Ｊ区南半、溝９の東側で検出された土壙である。平面形は北側に広がった不定形を呈し、長さ89cm、幅66cmを測る。南端部は円形に深く掘り込まれており、そこでの深さは30cmを測る。遺物には図示可能なものはないが、出土した土器小片や埋土からみて時期は弥生時代前期と思われる。　（岡本）

土壙51（第62・88図）

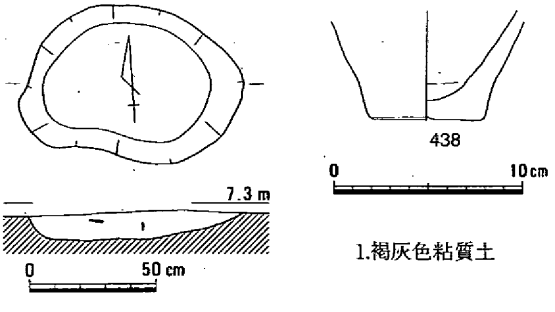
19Ｊ区南半で検出された、不整な楕円形を呈する土壙である。規模は、長さが89cm、幅が61cmを測る。深さは最大でも10cmと浅く、削平を受けて底部付近のみが残存した土壙と考えられる。少量の土器片が出土し、図示した438は甕の底部である。土壙の時期は弥生時代前期と思われる。　（岡本）



第86図　土壙49、同出土遺物



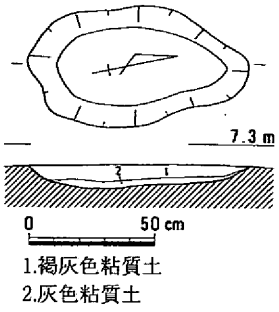
第87図　土壙50



第88図　土壙51、同出土遺物

土壙52（第62・89図）

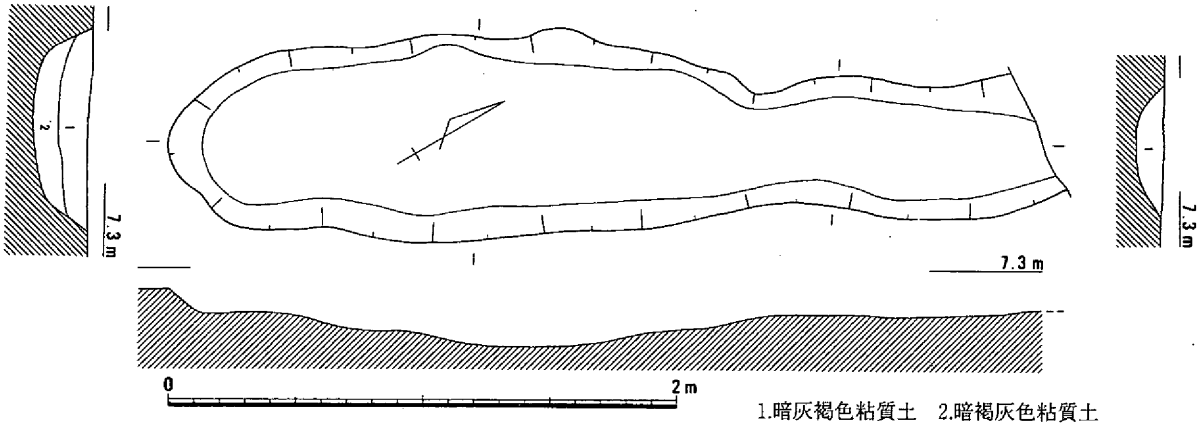
19Ｊ・20Ｊ区の境界線上で検出された土壙である。平面形は不整な楕円形を呈し、長さ87cm、幅48cmを測る。深さは10cmと浅く、削平により底部付近のみが残存した土壙と考えられる。図示しうる遺物は出土していないが、土壙の時期は弥生時代前期と思われる。　（岡本）



第89図　土壙52

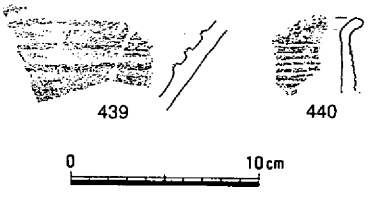
土壙53（第62・90図、図版16）

20Ｊ区北半、土壙57～59の北側で検出された細長い土壙である。北端部が調査区の側溝に切られているが、全長は270cm程度と推定される。



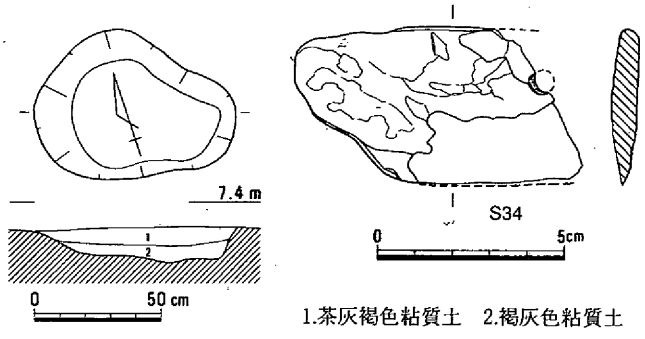
第90図　土壙53、同出土遺物

土壙南半部では幅・深さがともに増し、それぞれ最大で81cm、24cmを測る。埋土中から少量の遺物が出土しており、うち２点を図示した。439は内面に突帯が巡る壺の口縁部、440は甕の口縁部である。これらの遺物からみて、土壙の時期は弥生時代前期後葉に比定される。　（岡本）



土壙54（第62・91図、図版16）

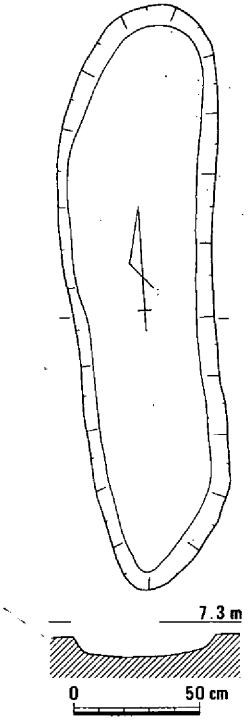
20Ｋ区の北西隅で検出された。20Ｊ区の土壙群とは離れて位置する。平面形は不整な楕円形を呈し、長さ81cm、幅59cm、深さ14cmを測る。遺物としては少量の土器片のほか、磨製石包丁の破片Ｓ34が出土している。土壙の時期は弥生時代前期と思われる。　（岡本）



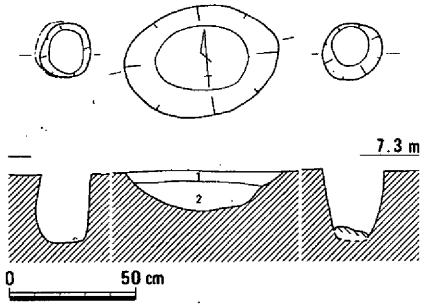
第91図　土壙54、同出土遺物

土壙55（第62・92図、図版16）

19Ｋ区で検出された長楕円形の土壙である。長さ62cm、幅233cmを測る。深さは最大でも６cmとごく浅く、検出面上では痕跡程度に確認できたにすぎない。本来は土壙54・57のような長大な土壙であったものが、削平を受けて底部のみが残存した結果と考えられる。遺物が出土していないが、土壙54などとの類似からほぼ同時期の弥生時代前期に比定されよう。　（岡本）



第92図　土壙55



1.茶灰褐色粘質土
2.褐灰色粘質土（黄灰色粘質土混）

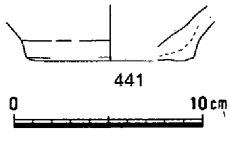
第93図　土壙56、同出土遺物

土壙56（第62・93図、図版16・66）

20Ｊ区南半で検出された土壙である。平面形は楕円形を呈し、長さ61cm、幅44cm、深さ16cmを測る。土壙の東西に柱穴が１基ずつ隣接して位置する。両柱穴は径・深さとも近似し、土壙と併せて三者一体で機能した可能性が高い。東側の柱穴底には礎石上の平石が置かれていた。遺物としては、石鏃Ｓ35が出土している。時期は弥生時代前期と思われる。　（岡本）

土壙57（第62・94・96図、図版16）

20Ｊ区、土壙53の南側に、南北に主軸をとる土壙57～59が互いに近接して位置する。当遺構は、土壙58・59の西に隣接し、一部土壙59に切られる細長い土壙である。長さ309cm、幅69cm、深さは最大23cmを測る。底面は北から南へ緩く傾斜している。少量の遺物が出土しており、441は壺の底部である。時期は弥生時代前期と思われる。　（岡本）



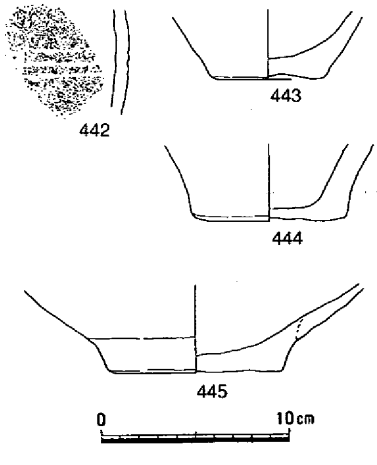
第94図　土壙57
出土遺物

土壙58（第62・96図、図版16）

土壙57の東側、土壙59の北側に、両者と主軸を揃えて位置する楕円形の土壙である。規模は、長さ108cm、幅57cm、深さ14cmを測る。図示しうる遺物は出土していないが、埋土や他土壙との位置関係からみて、時期は弥生時代前期と推定される。　（岡本）

土壙59（第62・95・96図、図版16）

土壙57の南東に位置し、同土壙を切る形で検出された不整長方形の土壙である。長さ188cm、幅90cm、深さ23cmを測り、底面は平坦である。両小口部の壁面には段が認められる。図示した遺物のうち、442は甕の口縁部付近、443・444は甕の底部、445は北小口の段上に正置されていた壺の底部である。これらの遺物や埋土の特徴から、土壙の時期は弥生時代前期に比定される。　（岡本）



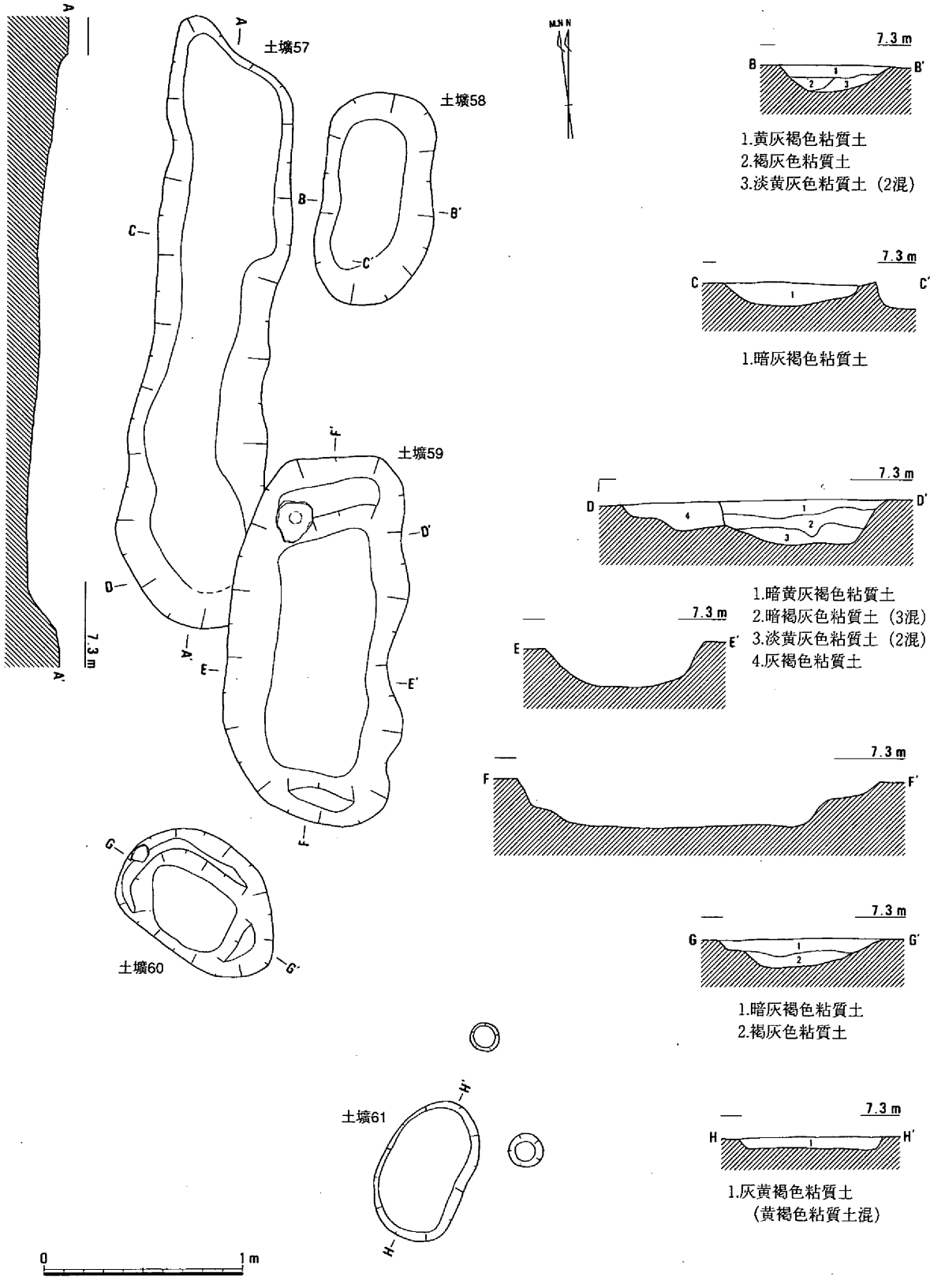
第95図　土壙59出土遺物

土壙60（第62・96図、図版16）

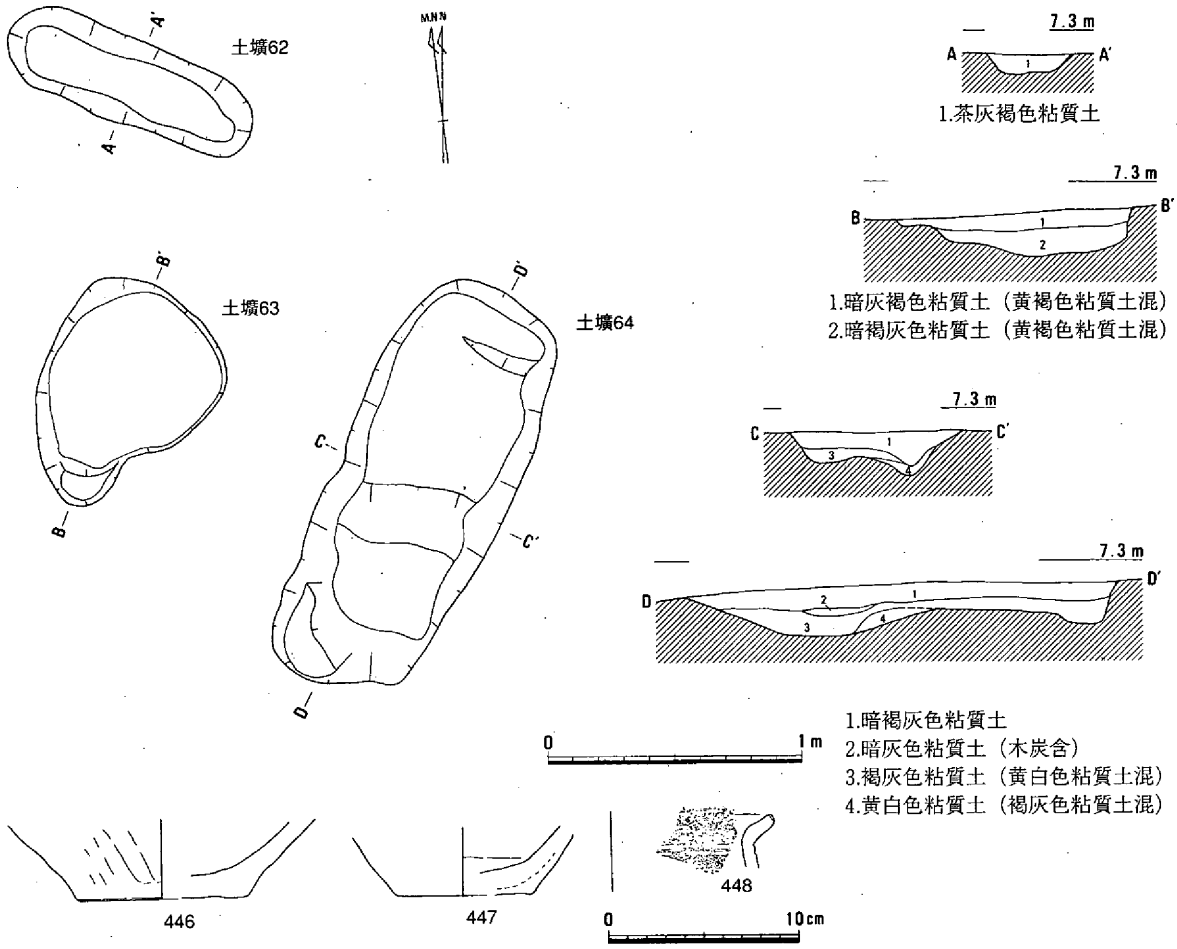
20Ｊ区で、土壙59の南に隣接して位置する楕円形の土壙である。長さ89cm、幅60cm、深さ14cmを測り、壁面には段が認められる。少量の土器片が出土しているが図示可能なものはない。土壙の時期は弥生時代前期と思われる。　（岡本）

土壙61（第62・96図、図版16）

20Ｊ区、土壙59・60の南東で検出された土壙である。平面形は楕円形を呈し、長さ73cm、幅45cmを測る。深さは検出面から６cmとごく浅く、土壙の底部付近のみの検出とみられる。図示可能な遺物はないが、出土した土器小片や埋土から判断して、土壙の時期は弥生時代前期と思われる。　（岡本）



第96図　土壙56～61



第97図　土壙62～64、土壙63・64出土遺物

土壙62（第62・97図、図版16）

20Ｊ区の南西部に土壙62～64が近接して所在する。当土壙は土壙63の北側に位置し、平面形は長楕円形を呈する。規模は、長さ104cm、幅34cm、深さ８cmを測る。図示可能な遺物は出土していないが、埋土の特徴等からみて時期は弥生時代前期と思われる。（岡本）

土壙63（第62・97図、図版16）

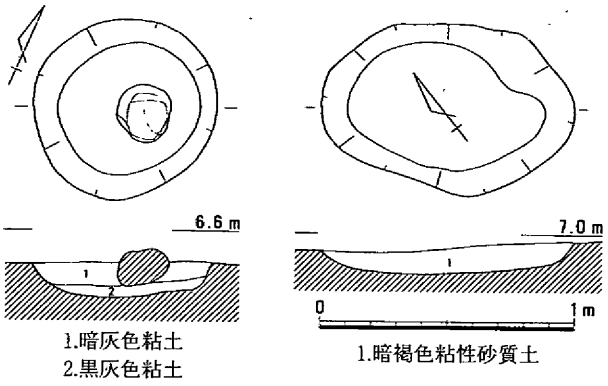
土壙62の南、土壙64の西に位置する。平面形は、南端に突出部をもつ不整な円形を呈し、長さ94cm、幅70cm、深さ18cmを測る。壁面の傾斜は垂直に近く、底面は北側に向かって傾斜している。南端の突出部には小さな段が形成されている。遺物としては、甕の底部446・447が出土している。土壙の時期は弥生時代前期と考えられる。（岡本）

土壙64（第62・97図、図版16）

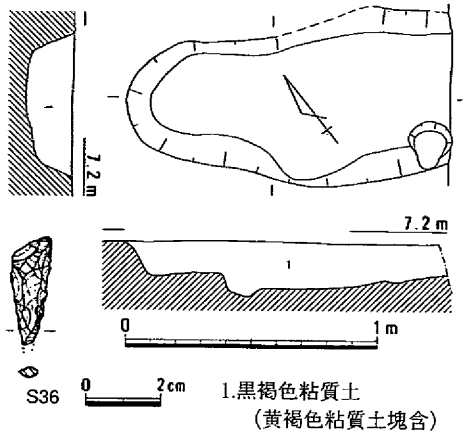
土壙63の東に位置する。平面形は不整な長方形を呈し、長さ172cm、幅71cmを測る。底面は南半部が窪んでおり、北小口部でも浅い溝状の窪みが確認された。深さは最大20cmである。甕の口縁部446が出土している。土壙の時期は弥生時代前期後葉に位置づけられる。（岡本）

土壙65（第62・98図）

19Ｉ区で検出された。この土壙は弥生時代遺構面では確認することができず、縄文面まで掘削した段階で検出された。平面形は円形を呈し、径73cm、深さ14cmが残存していた。遺物は出土していない



第98図　土壙65・66



第99図　土壙67、同出土遺物

が、溝９の下層で検出されたことから、時期は弥生時代前期と推定される。　（岡本）

土壙66（第62・98図）

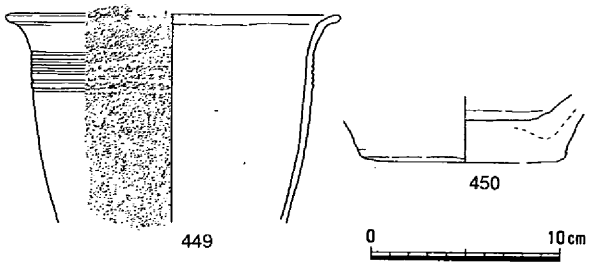
20Ｉ区で検出された。平面形は不整な楕円形を呈し、長さ100cm、幅69cm、深さ11cmを測る。土器の細片が少量出土しているのみで時期は確定しがたいが、埋土や検出状況から判断すると弥生時代前期と考えられる。　（岡本）

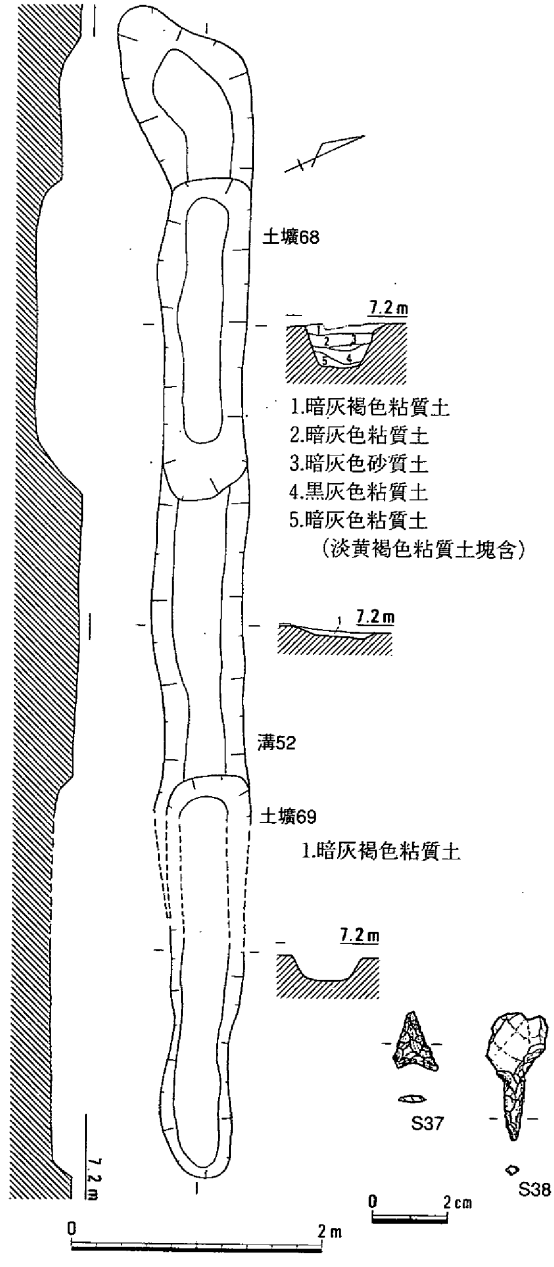
土壙67（第62・99図）

22Ｊ区で検出された。東端を側溝に切られて完存しないが、平面形は幅70cmの不整長楕円形と推定される。深さは最大22cmを測る。遺物としては、石錐Ｓ36が出土している。時期は、埋土の質などからみて弥生時代前期と思われる。　（岡本）

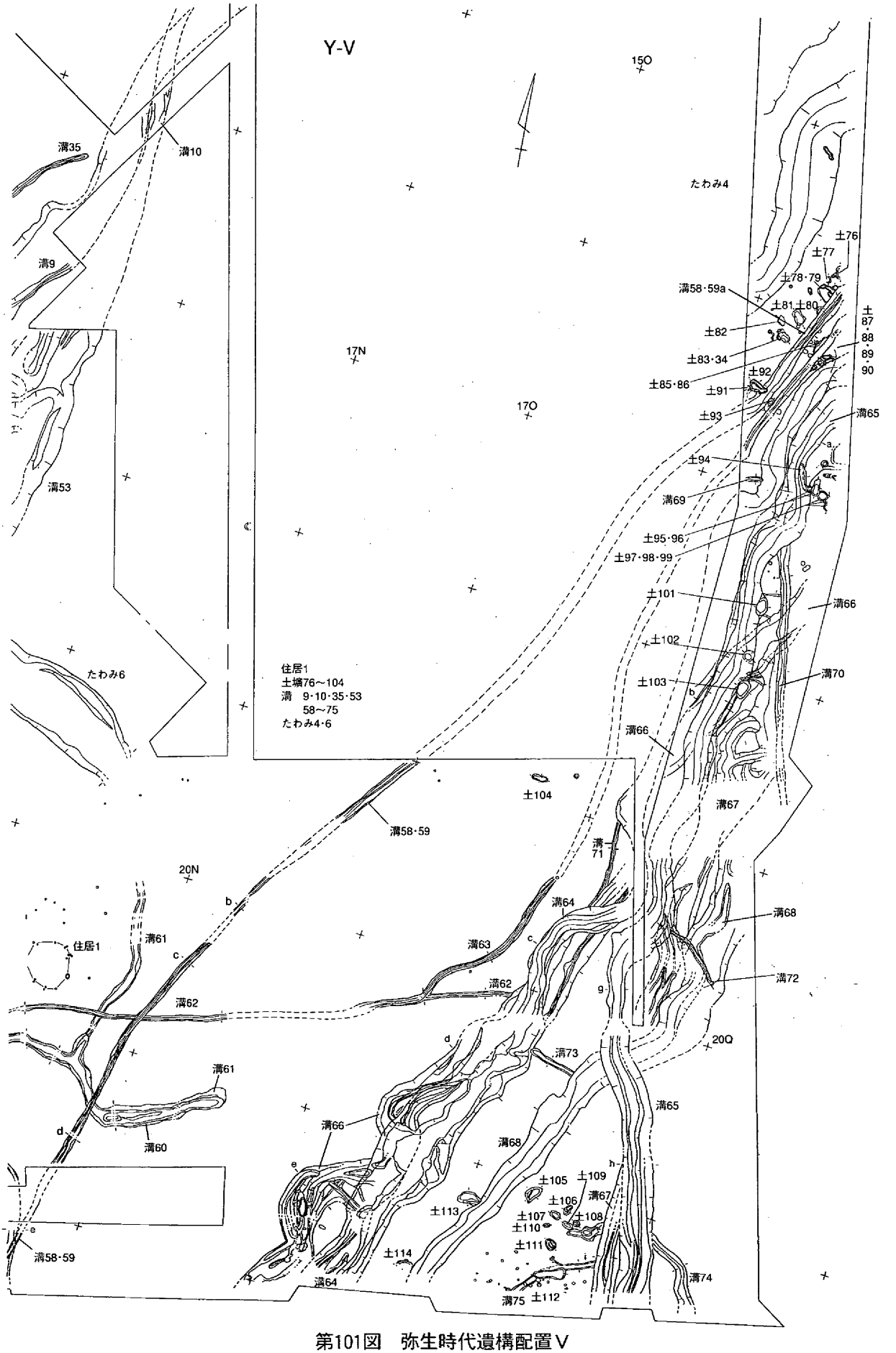
土壙68（第62・100図、図版17－１・66・71）

21Ｉ区南東部に位置する長方形の土壙である。長さ254cm、幅73cm、深さ36cmを測る。東隣の土壙69とは溝52で連結され、西側にも溝状の張り出し部が取りつく。これらは本来単一の遺構である可能性が高く、併せると全長約930cmとなり、いわゆる舟形土壙の形状を呈する。遺物には、土器





第100図　土壙68・69、溝52、土壙68出土遺物

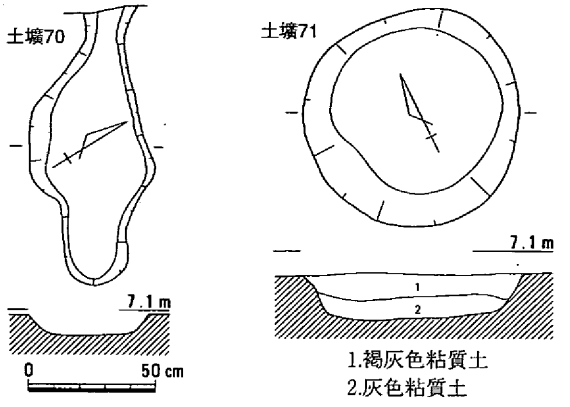


第101図　弥生時代遺構配置Ⅴ

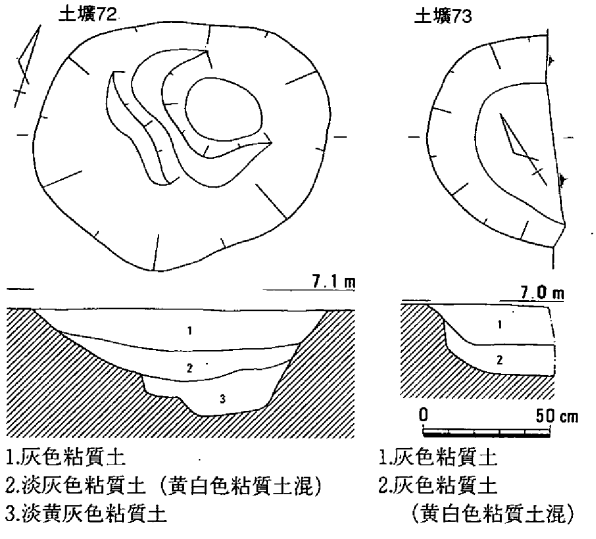
片のほか石鏃Ｓ37、石錐Ｓ38がある。土壙の時期は弥生時代前期後葉に比定される。　（岡本）

土壙69（第62・100図）

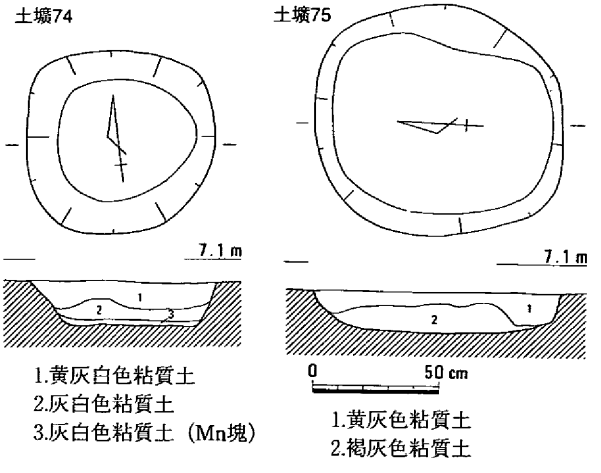
本館３区の西端で検出された、細長い土壙であるが、本館８区でこれに続く位置に溝52が検出されたことから、その一部をなすものと考えられる。規模は検出長182cm、幅52cm、深さ16cmを測る。遺構の詳細な時期は不明。　（平井勝）



第102図　土壙70・71



第103図　土壙72・73



第104図　土壙74・75

土壙70（第62・102図）

本館３区の西端で検出された細長い土壙であるが、本館８区の溝51に続く可能性が強い。埋土は土壙69と同じであるが、遺物がないため詳細な時期は不明である。　（平井勝）

土壙71（第62・102図）

22Ｉ区の北東部に土壙71～75が所在する。これらの土壙は、形状が円形に近く、出土遺物に乏しく、色調の明るい灰色系の土で埋積するという特徴を共有する。土壙71は円形を呈し、径85cm、深さ18cmを測り、底面は平坦に掘削されている。遺物が出土していないため、正確な時期は不明である。　（岡本）

土壙72（第62・103図）

土壙71の南西に位置する。平面形は楕円形を呈し、長さ118cm、幅97cm、深さ43cmを測る。西側の壁面には段を有する。埋土中からコナラ属の炭化種子が多く出土したが、他に出土遺物はなく、時期は特定しがたい。　（岡本）

土壙73（第62・103図）

土壙72の南で検出された。調査区端に位置するため正確な形状・規模は不明であるが、円形ないし楕円形の土壙と思われる。検出部分での径は85cm、深さは28cmを測る。遺物は出土しておらず、正確な時期は不明である。　（岡本）

土壙74（第62・104図）

土壙73の南西に位置する。平面形は円形に近い隅丸方形を呈し、径73cm、深さ18cmを測る。底面は平坦に掘削されている。出土遺物はなく、正確な時期は不明である。　（岡本）

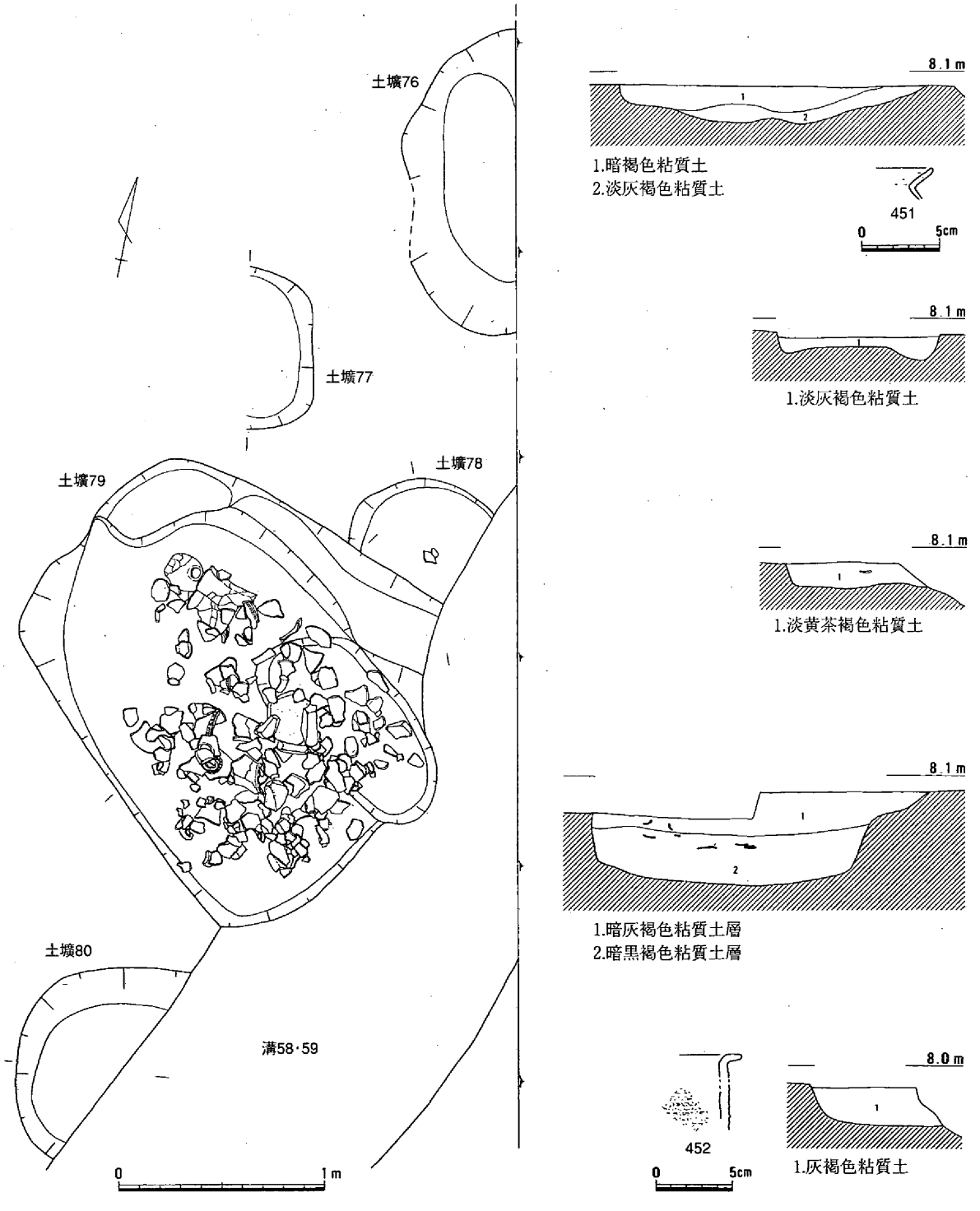
土壙75（第62・104図）

土壙74の南西に位置する。平面形は円形に近

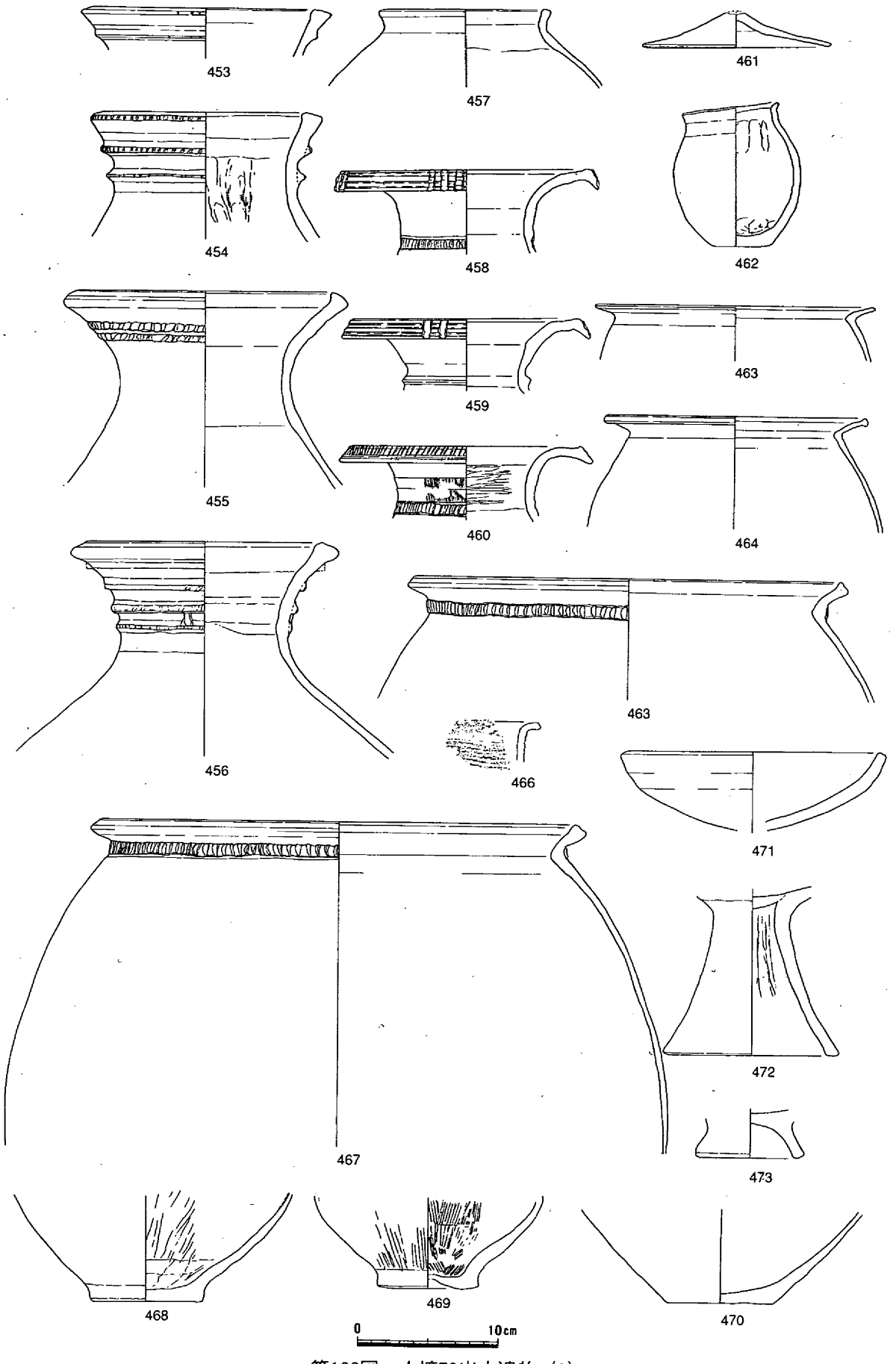
い隅丸方形を呈し、長さ98cm、幅92cm、深さ17cmを測る。底面は平坦に掘削されている。遺物が出土していないため、正確な時期は不明である。　（岡本）

土壙76・77（第101・105図、図版17－２）

16Ｐ区の南西部に位置する。土壙76は平面形が不整円形で、断面形が椀形を呈する。東半分が調査区外となり、残存部での規模は、長さが149cm、深さは18cmを測る。出土した甕451からみて、時期は中期Ｉである。土壙77は西半分が検出できなかったが平面形は隅丸方形、断面形は浅い皿状を呈す。規模は長さが75cmで、深さは11cmを測る。出土遺物はないが時期は弥生時代と思われる。　（弘田）



第105図　土壙76～80、土壙76・80出土遺物

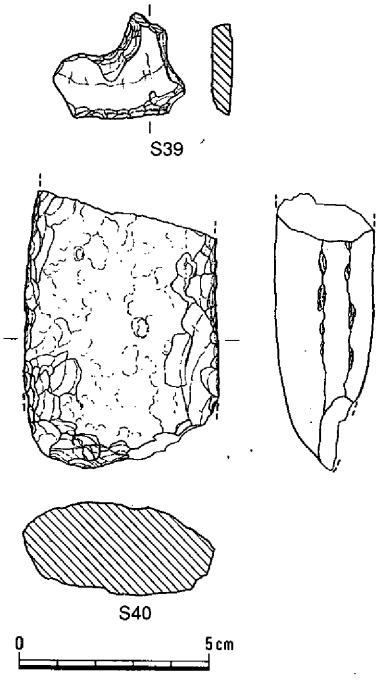


第106図　土壙79出土遺物（1）

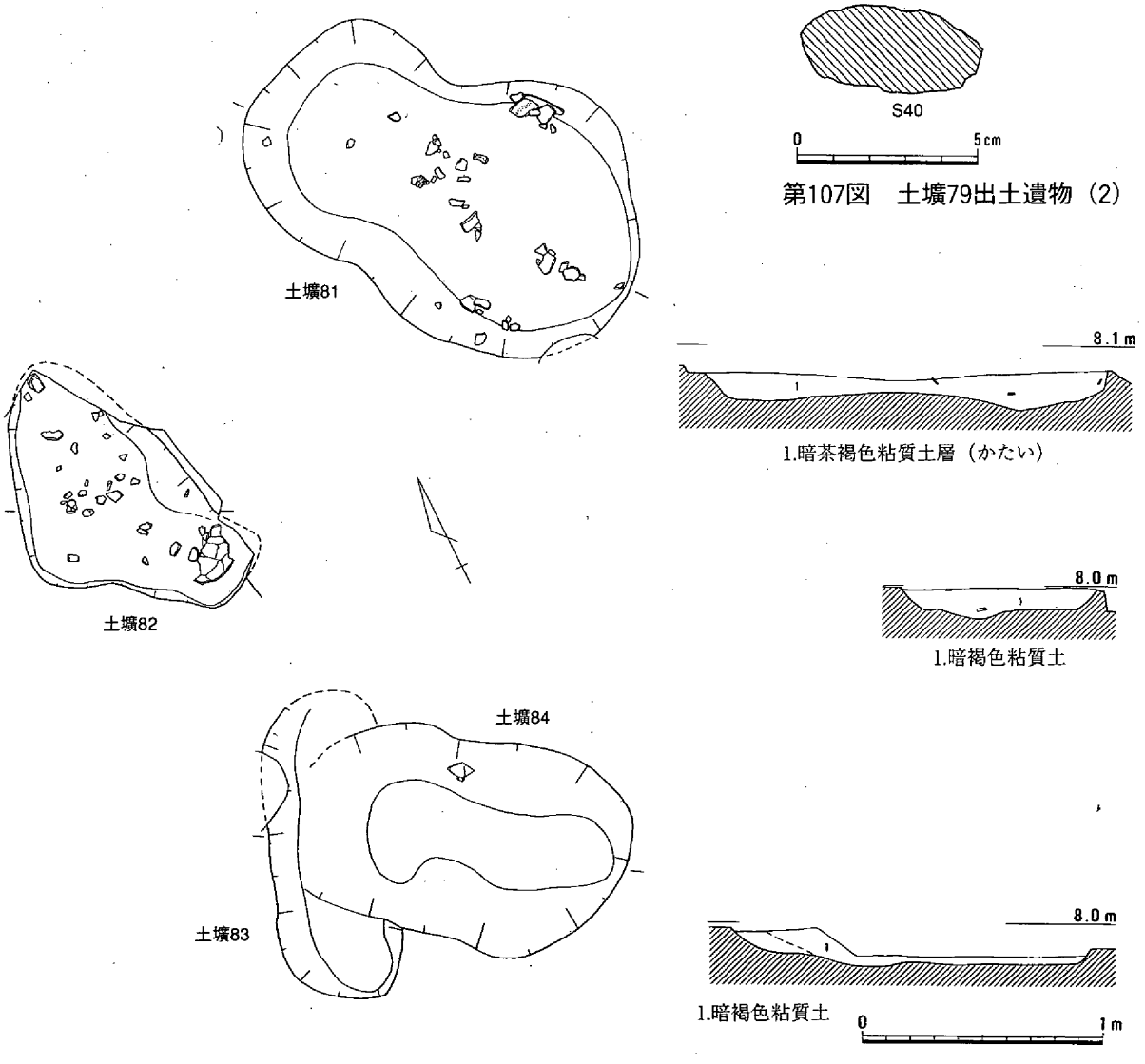
土壙78・79・80（第101・105図、図版17－３・18・62・75・76）

いずれも15Ｐ区の南西部に位置する。土壙79は平面形が隅丸長方形で、断面形は箱形を呈する。規模は、長さが204cm、幅が140cmで、深さは45cmを測る。この土壙は、埋土中に多くの土器片を含んでいた。広口壺には、外上方に緩く外反する口縁部に突帯を貼付け、口縁端部が肥厚して内傾する面をなす453～456と外湾する口縁部の端部を上下に肥厚させて、外端面には凹線文に加え棒状浮文や刺突文を施す458～460がある。甕には短く「くの字」に外反する口縁をもつ463・464と口縁端部を上下に肥厚させ、かつ頸部に指頭押圧突帯を貼付ける大形の465・467がある。さらには傘形の蓋461や高杯471・472、サヌカイト製の石匙Ｓ39や石斧Ｓ40もあり、多くは中・Ⅱに属す。

土壙78・80はともに溝58・59に切られており、形態や規模は不明であった。遺物は、土壙80から口縁部下の外面に櫛描沈線を施す甕452が出土しており、中・Ⅰに属す。また、土壙78からも中・Ⅰの土器小片が出土している。（弘田）



第107図　土壙79出土遺物（2）



第108図　土壙81～84

土壙81（第101・108図、図版19－１・２・66）

16Ｐ区の北西隅に位置する土壙で、平面形は瓢箪形、断面形が皿状を呈する。規模は、長さが174cm、幅が118cm、深さは16cmを測る。

474～476は如意状口縁を持つ甕で、474では外面に櫛描沈線を施す。ほかには、サヌカイト製の石鏃Ｓ41もみられる。

この土壙の時期は、中・Ｉである。　（弘田）

土壙82（第101・108図、図版19－３）

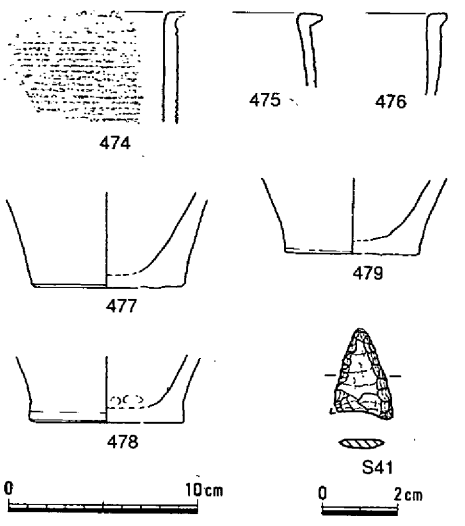
16Ｐ区の北西隅に位置する。平面形は不整楕円形で、断面形が浅い皿状を呈する。規模は、長さが125cm、幅が85cmで、深さは12cmを測る。

出土したのは甕の体部片480と底部481・482で、このうち480では、外面に櫛描沈線とその直下に刺突文を施している。

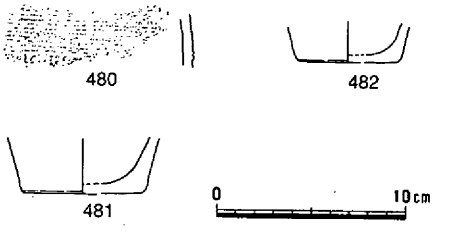
この土壙の時期は、中・Ｉである。　（弘田）

土壙83・84（第101・108図、図版20－１）

16Ｐ区の北西隅に位置する。土壙83は、84に切られており、平面形は長円形を呈する。規模は、長さが130cm、幅が51cmで、深さは10cmを測る。土壙84は、平面形が不整楕円形を呈し、長さが150cmほど、幅が87cmで、深さは16cmを測る。



第109図　土壙81出土遺物



第110図　土壙82出土遺物

出土した土器細片からみて、時期はともに中期前半とみられる。　（弘田）

土壙85・86（第101・111図、図版20－２）

ともに16Ｐ区の北西部に位置する。土壙85は、土壙86によって切られた平面形が不整楕円形を呈する土壙であり、規模は、直径が103cm、深さが16cmを測る。

土壙86は、溝63によって半分ほどが削平されており、平面形は隅丸長方形ないしは長円形を呈すると思われる。規模は、長さが246cmで、深さは20cmを測る。

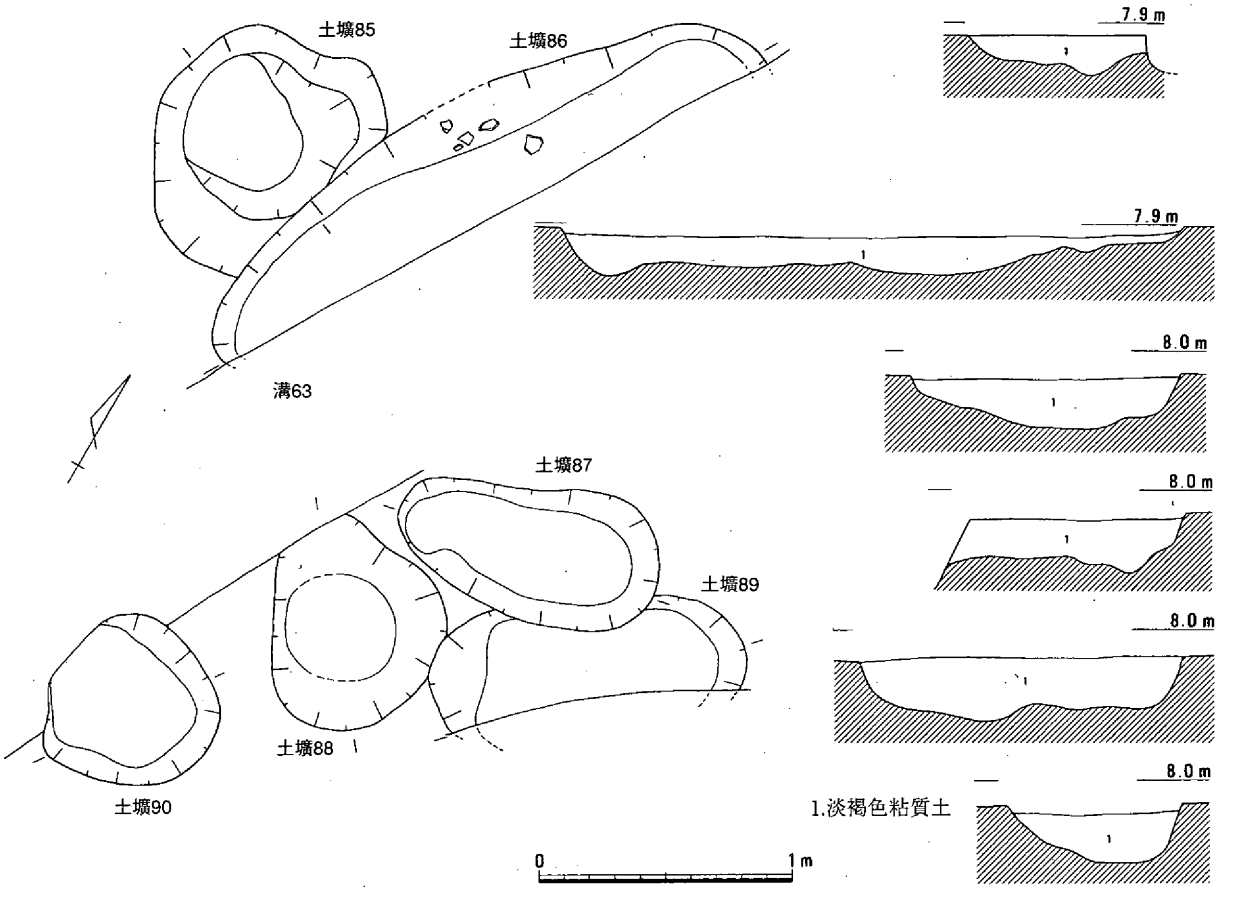
出土した土器片と遺構の切り合い関係から、土壙の時期はともに中・Ｉとみられる。　（弘田）

土壙87・88・89（第101・111図、図版20－３、21－１・２）

16Ｐ区の北西部に位置し、相互に近接した土壙群である。

土壙87は、平面形が不整楕円形を呈する。規模は、長さが109cm、幅が55cmで、深さが22cmを測る。土壙88は溝63によって切られており、平面形が不整円形を呈する。規模は、長径が77cm、短径は67cmで、深さは24cmを測る。土壙89は土壙87および溝64に切られており、平面形は楕円形を呈する。規模は、長さが125cmで、深さは26cmを測る。また、いずれの土壙も断面形は椀状であり、底面は凹凸がみられるほか、埋土は淡褐色粘質土であった。

遺物は、小片がわずかずつ出土しているものの図示できるものはない。それらからみた各土壙の時期は、土壙88・89は中・Ⅱに、土壙87が中・Ⅲに属する。　（弘田）



第111図　土壙85～90

土壙90（第101・111図、図版20－３、21－３）

16Ｐ区北西部に位置する土壙で、平面形は楕円形で、断面形が椀形を呈する。規模は、直径が70cmで、深さは23cmを測る。

出土した土器からみて時期は、中・Ｉである。（弘田）

土壙91（第101・102図、図版22－１）

16Ｐ区の中央部西端に位置し、土壙92に切られる不定形の土壙である。断面をみると、深さ15cmほどでテラス状の平坦面があり、中央ではさらに一段下がって底面となり、深さは40cmを測る。

遺物をみないが、遺構の切り合い関係などから、時期は前期に遡る可能性がある。（弘田）

土壙92（第101・102図、図版22－２・３）

16Ｐ区の中央部西よりに位置し、平面形が不定形をなす土壙である。規模は、長さが190cm、幅は130cm程度で、深さが50cmを測る。

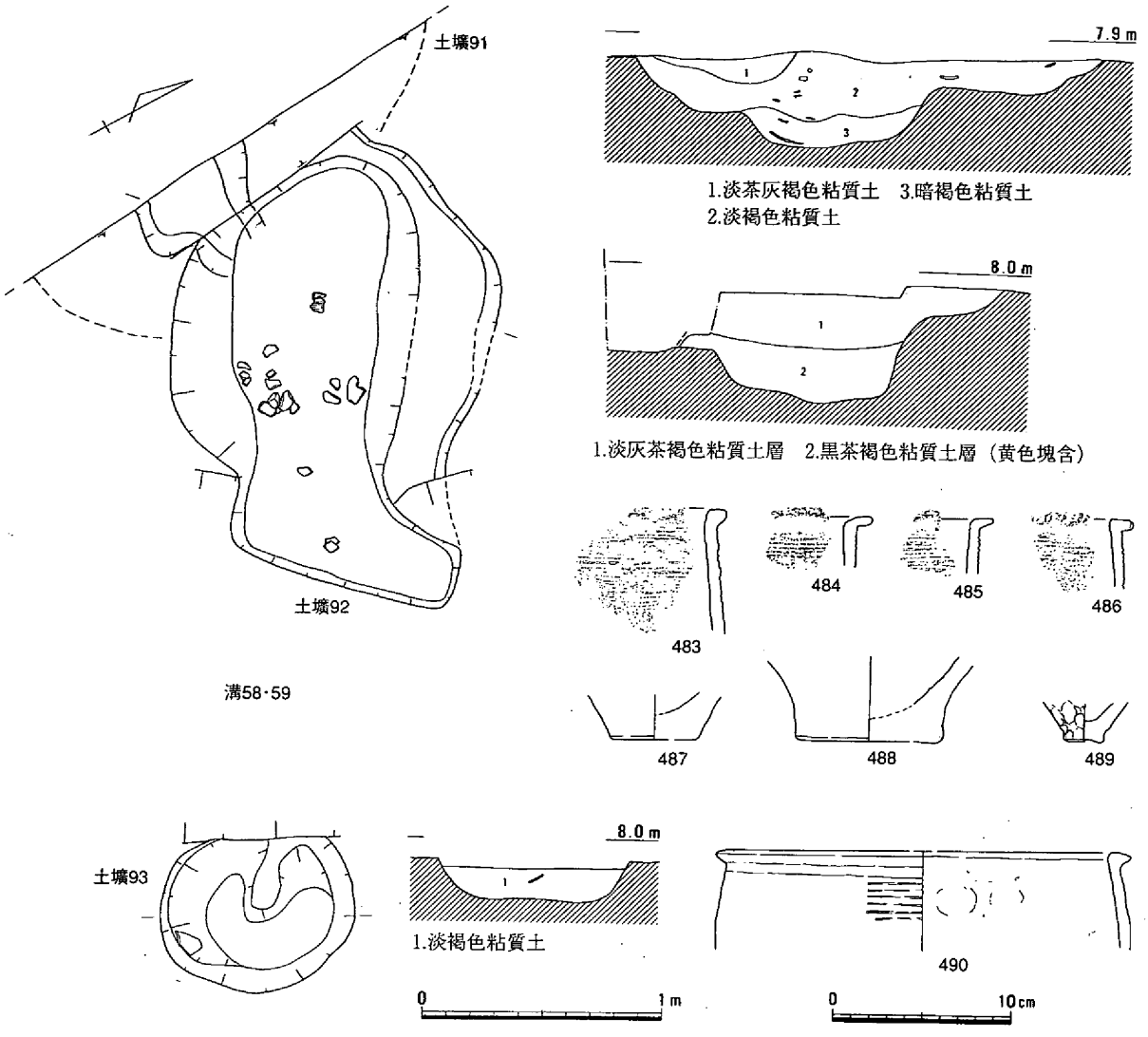
出土遺物のうち、483～486は如意状口縁を持つ甕で、486では端部に刻目を施している。また、いずれも口縁部直下の外面には櫛描沈線を施す。さらには壺底部487・488や、手捏ね489もみられる。

この土壙の時期は、中・Ｉでも古相である。（弘田）

土壙93（第101・102図、図版23－１）

16Ｐ区の中央部西端に位置する土壙で、一部が溝58・59によって切られる。平面形は楕円形を、断面形が椀形を呈して、長さが81cm、深さは17cmを測る。

出土した490は如意状口縁を持つ甕で、口縁部下の外面にはかすかに櫛描沈線が認められる。これ



第112図　土壙91～93、土壙92・93出土遺物

からみて土壙の時期は、中・Ｉの古相と考えられる。　（弘田）

土壙94（第101・113図）

16Ｐ区の南東部に位置し、溝65によって削平を受けた土壙である。残存部での規模は、長さが308cm、幅が83cmで、深さは35cmを測る。

遺物の出土をみないが、埋土からみてこの土壙の時期は、弥生時代後期である。　（弘田）

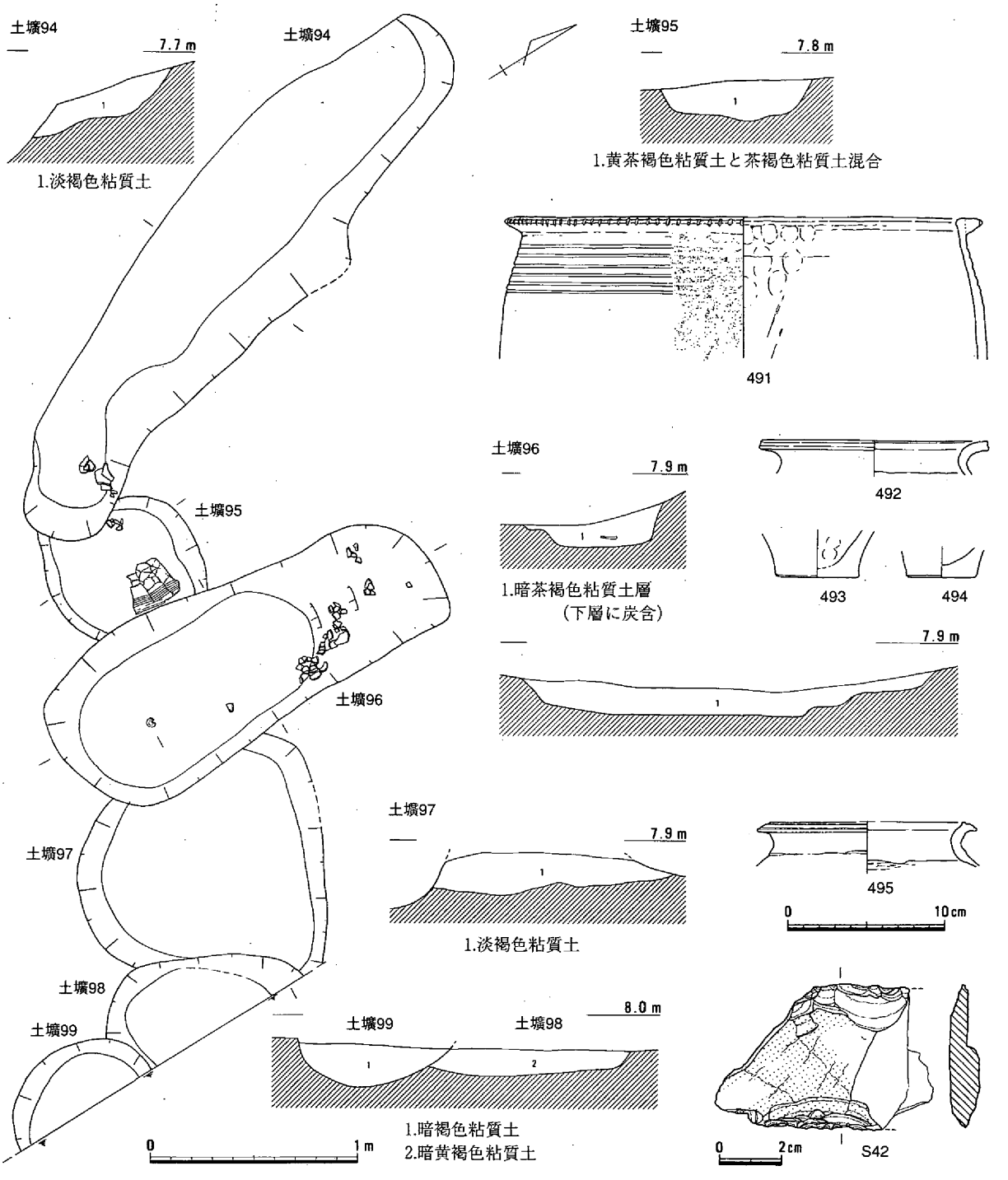
土壙95（第101・113図、図版23－２・３）

16Ｐ区の南東部に位置し、土壙94・96に切られる。平面形は隅丸方形で、断面形が椀状を呈する。規模は、長さが75cmで、深さは20cmを測る。

出土した、甕491は如意状口縁を持ち、口縁端部には刻目を、口縁部直下の外面には６条のヘラ描き沈縁を施す。この土壙の時期は、前期Ⅲである。　（弘田）

土壙96（第101・113図、図版23－３）

16Ｐ区の南東部に位置する。平面形は隅丸方形を呈するが、長軸方向での断面をみると、東端から階段状に下がって底面に至る不定形な浅い皿状となる。規模は、長さが198cm、幅は81cmで、深さが20cmを測る。



第113図　土壙94～99、土壙95～97出土遺物

出土遺物には、甕の口縁部492や甕底部493・494がある。この土壙は土壙95・97より後出し、時期は後期Ⅱである。　(弘田)

土壙97（第101・113図、図版74）

16Ｐ区南端に位置し、土壙96・98に切られる。平面形は不整円形を呈し、断面形は浅い椀状を呈する。規模は、残存部での長さが119cmで、深さは20cmを測る。

出土遺物には、短く外反する口縁部を持ち、拡張した口縁端部には２条の凹線がめぐる甕495や、サヌカイト製の石包丁Ｓ42も出土している。この土壙の時期は、後期Ⅱである。　(弘田)

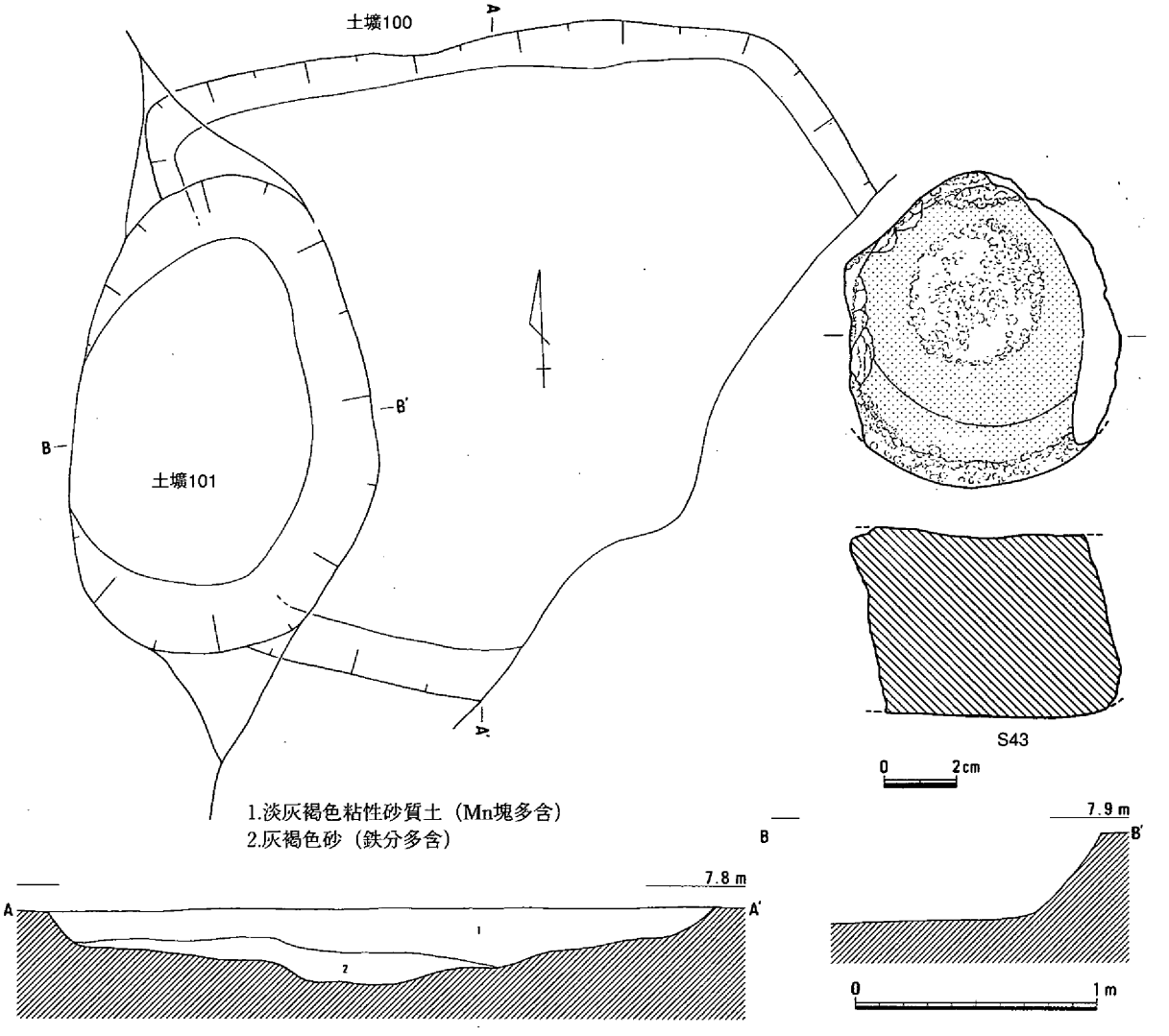
土壙98・99（第101・113図）

16Ｐ区の南端に位置しており、土壙98は土壙97を切り、かつ土壙99に切られる関係にある。土壙98は、平面形が不整円形を呈し、断面形は浅い皿状を呈す。規模は、長さが100cmで、深さは13cmを測る。土壙99は、平面形が円形を呈し、断面形は椀状を呈す。規模は、直径が74cmで、深さは23cmを測る。

時期は、遺構の切り合いからみてともに後期Ⅱ以降と考えられる。　（弘田）

土壙100・101（第101・114図、図版77）

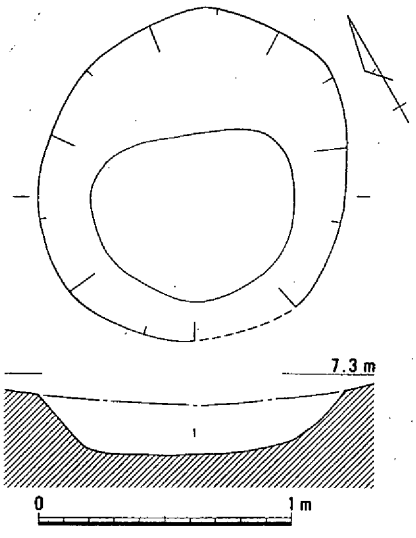
17Ｐ区の中央に位置する。土壙100は溝64・66と土壙101に切られる。平面形は歪な方形を呈し、規模は一辺が275cm、深さは31cmを測る。土壙101は溝64に切られており、平面形が不整楕円形を呈す。規模は長さが198cmで、深さは37cmを測る。土壙101からは、石器Ｓ43が１点出土している。円形で厚さ５cmほどの石の中央部を、径４cm程にわたって叩打痕が残るものの、その周囲はよく使用していることから石皿とみられる。遺構の切り合い状況からみて弥生時代中～後期とみられる。　（弘田）



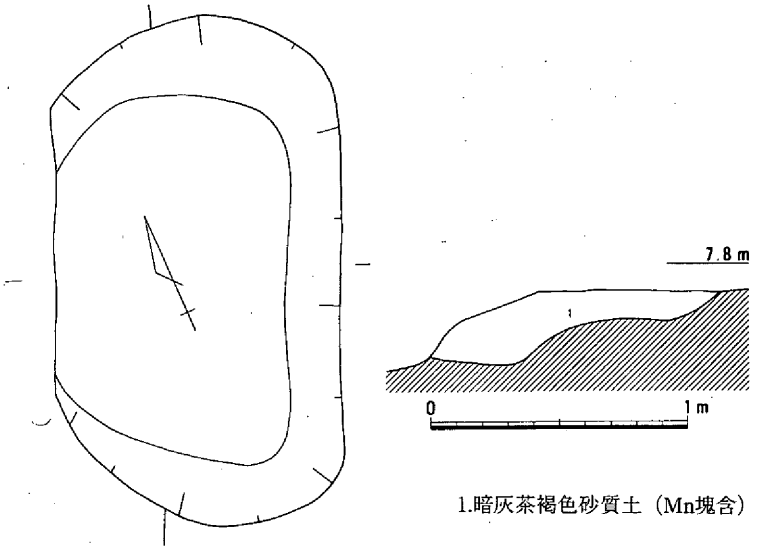
第114図　土壙100・101、土壙101出土遺物

土壙102（第101・115図）

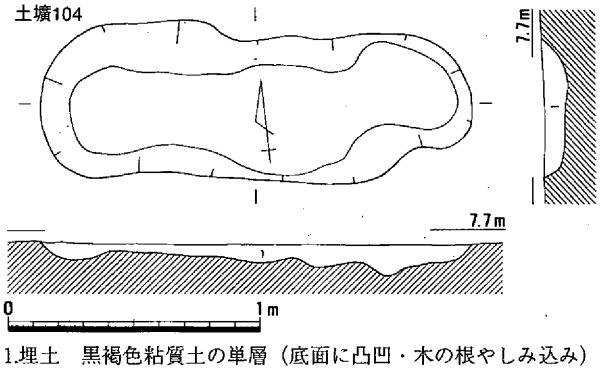
17Ｐ区の南端に位置する土壙で、溝64の下層で検出した。平面形は楕円形を、断面形が皿状を呈して、規模は長さが134cm、幅が122cmで、深さは24cmを測る。

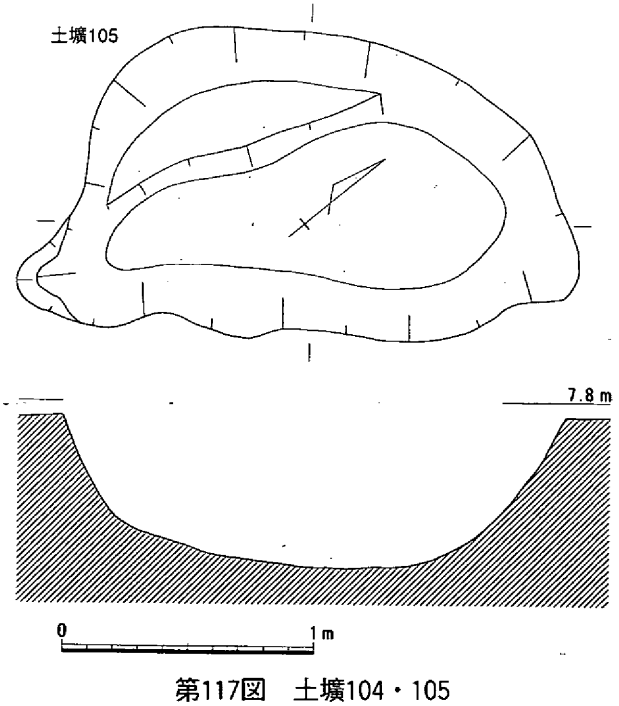


第115図　土壙102



第116図　土壙103





第117図　土壙104・105

出土遺物はないが、周辺遺構の状況などから弥生時代中期～後期と思われる。（弘田）

土壙103（第101・116図）

18Ｐ区北端に位置する土壙で、西端は溝64に切られている。平面形は長円形を呈し、底面は溝に向かって階段状に下がる。規模は、長さが200cmで、深さは30cmを測る。

遺物の出土はないが、埋土の状況などから時期は弥生中～後期と思われる。（弘田）

土壙104（第101・117図、図版24－１）

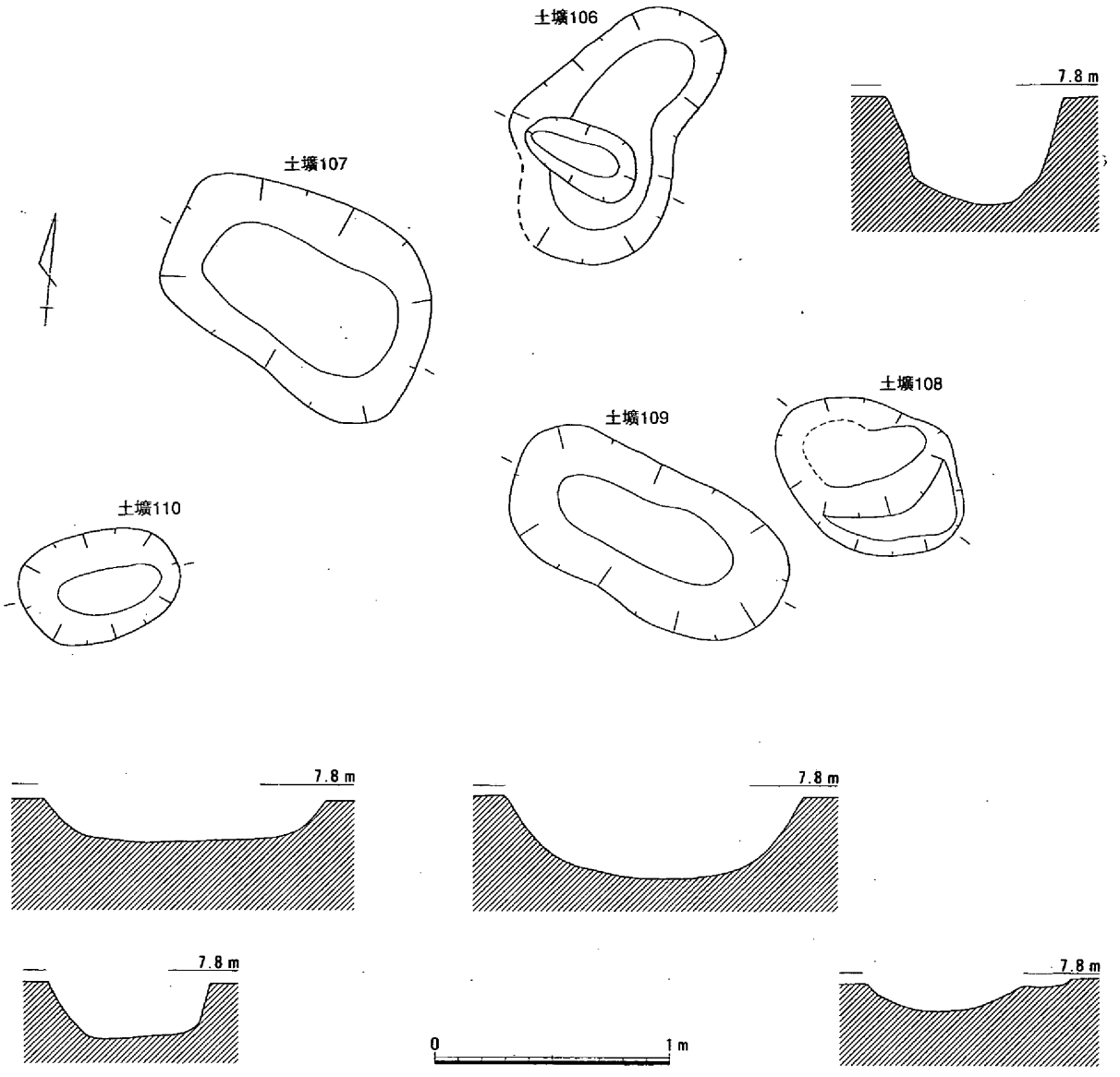
付属建物２区の北端部で検出した土壙で、長さ約170cm、幅50～60cmの隅丸方形ないし楕円形を呈する。深さは10cm程度が残存していた。遺物は弥生土器の細片がわずかに出土しているに過ぎないが、埋土の土質から弥生時代の可能性が考えられる。（尾上）

土壙105（第101・117図、図版24－２）

浄化槽区の南東寄りで検出された不整形な土壙で、内部は西側にのみ段が見られる。規模は長さ222cm、幅119cm、深さ60cmを測る。遺物がないため詳細な時期は不明であるが、埋土が灰黒色砂であることや、検出面から弥生時代に属すると考えられる。（平井勝）

土壙106（第101・118図、図版24－２）

浄化槽区の南東端近くでまとまって検出さ



第118図　土壙106～110

れた５基の土壙の内、最も北側に位置する。平面形はやや不整形な長楕円形を呈し、長さ122cm、幅74cm、深さ47cmを測る。埋土が灰黒色砂を呈することから、弥生時代と推定される。　（平井勝）

土壙107（第101・118図、図版24－２）

土壙106の南西側に位置する土壙で、平面形は隅丸長方形に近い。規模は長さ116cm、幅79cm、深さ18cmを測る。遺物は出土していないが、埋土が灰褐色砂であることや、検出面から弥生時代に属するものと推定される。　（平井勝）

土壙108（第101・118図、図版24－２）

土壙106の南東側に位置する土壙で、平面形は楕円形を呈する。内部の形状は、南東側を浅く掘り下げ、北西側はさらに深く掘り下げている。規模は長さ88cm、幅64cm、深さ13cmを測る。遺物は出土していないが、埋土が灰褐色砂を呈することから、弥生時代に属すると考えられる。　（平井勝）

土壙109（第101・118図、図版24－２）

土壙108の西側に近接して検出された土壙で、平面形は長楕円形を呈する。規模は長さ126cm、幅63

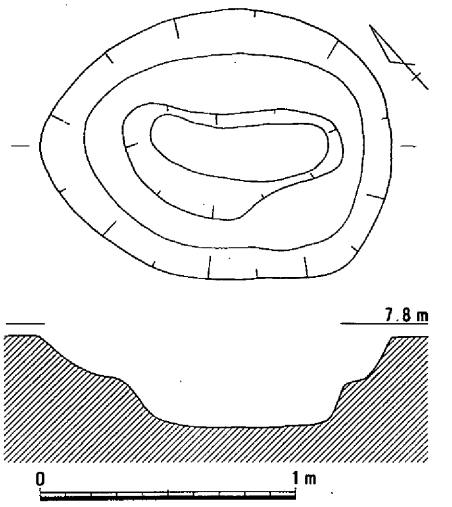
cm、深さ35cmを測る。遺構の時期は、埋土が灰褐色砂であることから弥生時代と推定される。　（平井勝）

土壙110（第101・118図、図版24－２）

土壙107の南西側で検出された土壙で、平面形は楕円形を呈する。規模は長さ68cm、幅48cm、深さ24cmを測る。遺物は出土していないが、埋土が灰褐色砂であることから弥生時代に属すると推定される。　（平井勝）

土壙111（第101・119図、図版24－２）

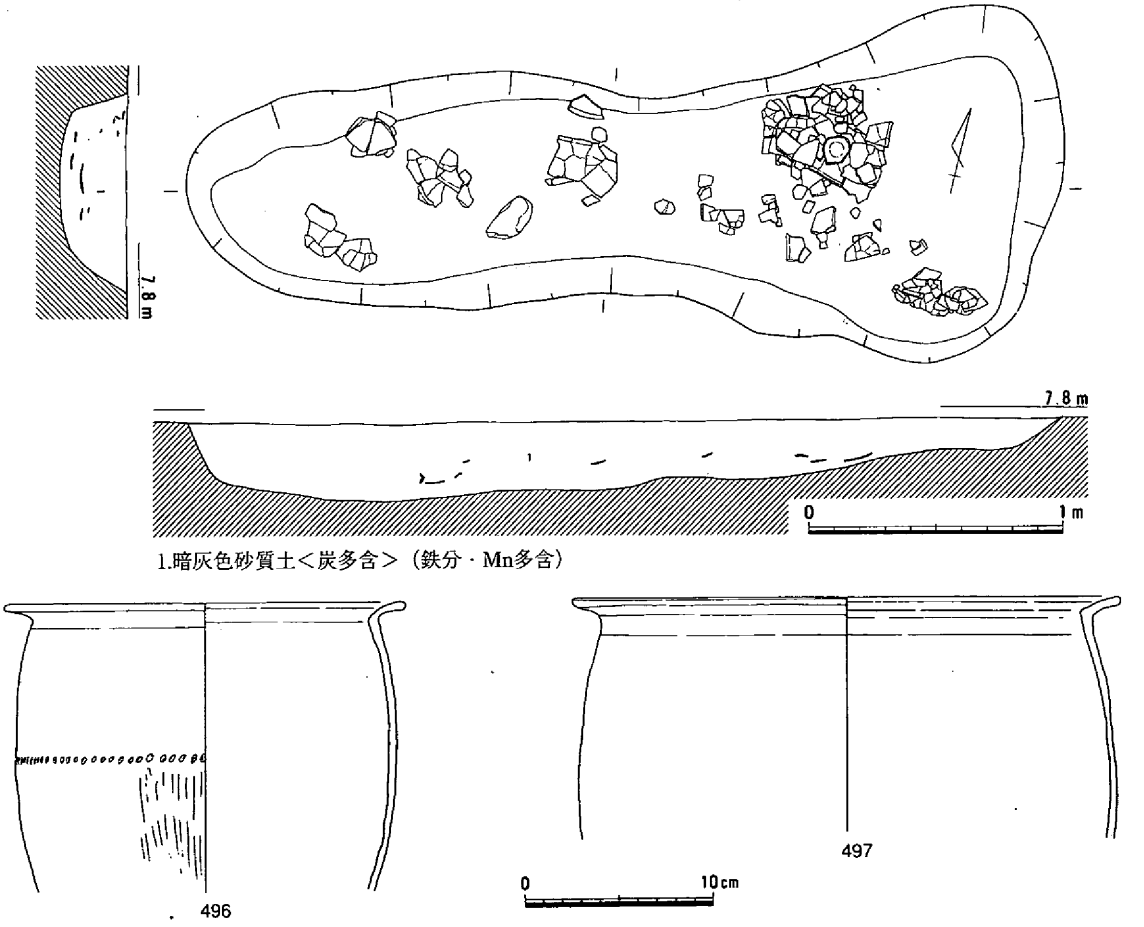
水路３区の東端近く、浄化槽区の土壙106から110が集中する南側に位置する土壙で、平面形は楕円形を呈する。規模は長さ139cm、幅107cm、深さ35cmを測る。埋土が灰褐色砂であることから弥生時代と推定される。　（平井勝）



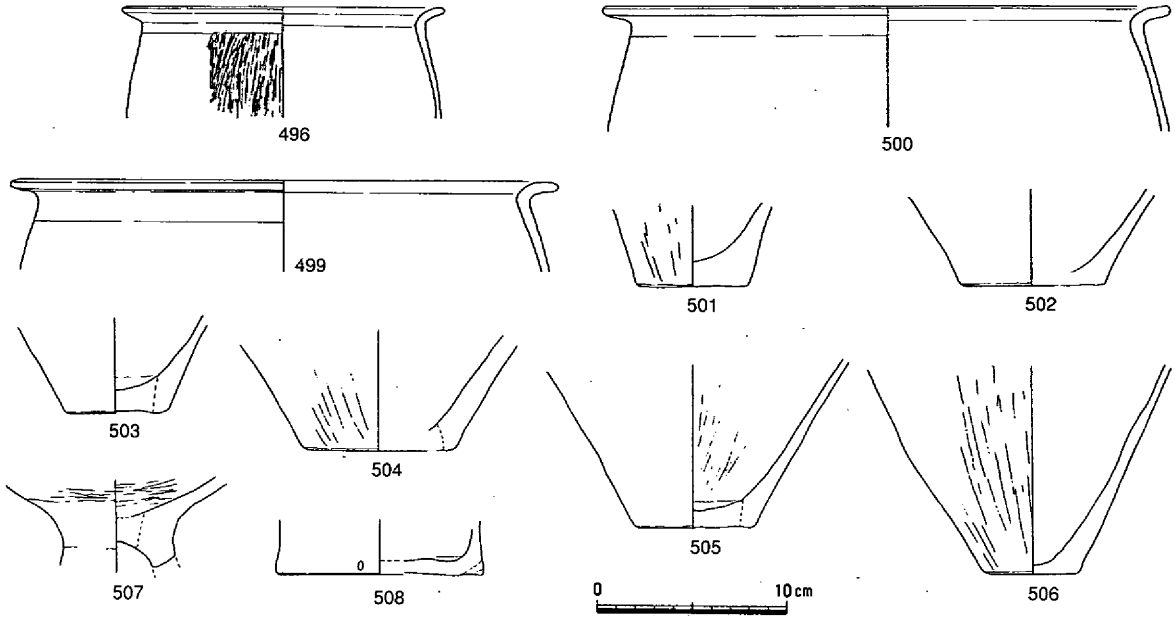
第119図　土壙111

土壙112（第101・120図、図版24－２・３・63）

水路３区の東端近くで検出された土壙である。平面形は細長い楕円形を呈するが、東端は南北に拡張される。内部は急傾斜に掘り込まれ、底面は東端が浅く、西側に向かって徐々に深くなる。埋土中には土器を含み、東側ではまとまって出土した。496～500はく字状に強く外反する口縁部をもつ甕で、496のように胴部中位に刺突を巡らすものもある。501～506は壺ないし甕の底部、507は高杯、508は



第120図　土壙112、同出土遺物（1）



第121図　土壙112出土遺物（2）

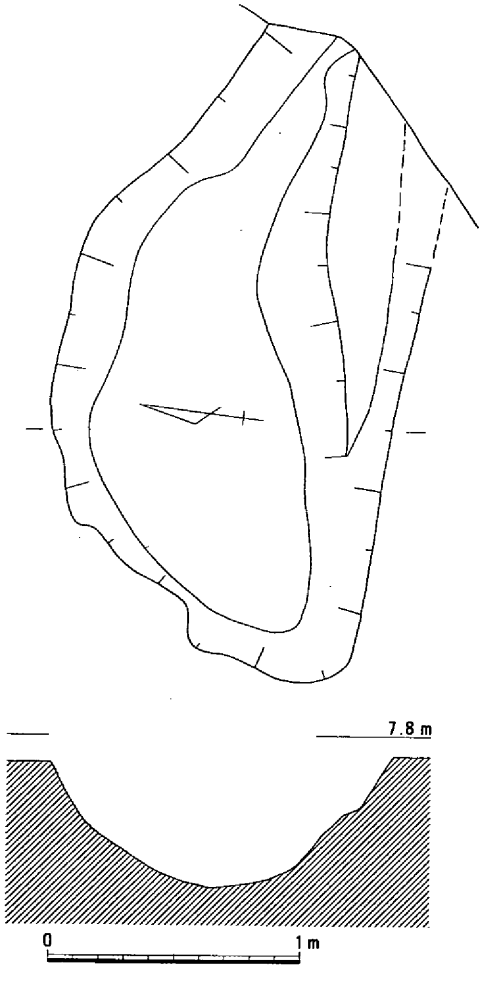
ジョッキ形の鉢である。土壙の廃絶時期は、土器の示す中期Ⅱと推定される。　（平井勝）

土壙113（第101・102図）

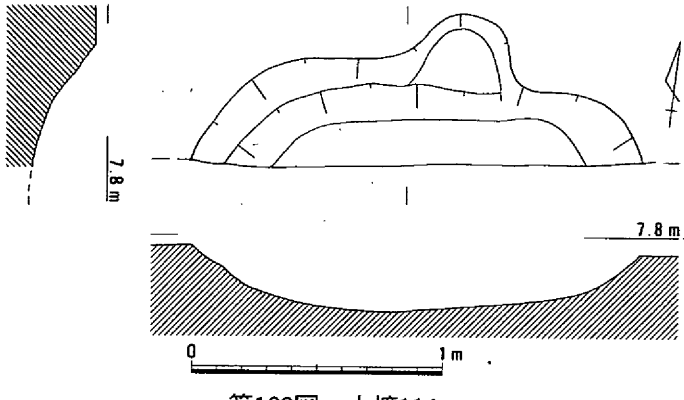
浄化槽区の南寄り、溝68に接して検出された土壙である。平面形は不整形な長楕円形を呈するが、東端は溝68に切られている。規模は長さ254cm、幅135cm、深さ50cmを測る。埋土が灰黒色砂であることなどから、弥生時代と推定される。　（平井勝）

土壙114（第101・123図）

水路３区の東側、浄化槽区の南側にあたる位置で検出された土壙である。平面形は明確でないが、楕円形と思われる。残存部の規模は長さ179cm、幅57cm、深さ25cmを測る。埋土は黒褐色砂である。　（平井勝）



第122図　土壙113



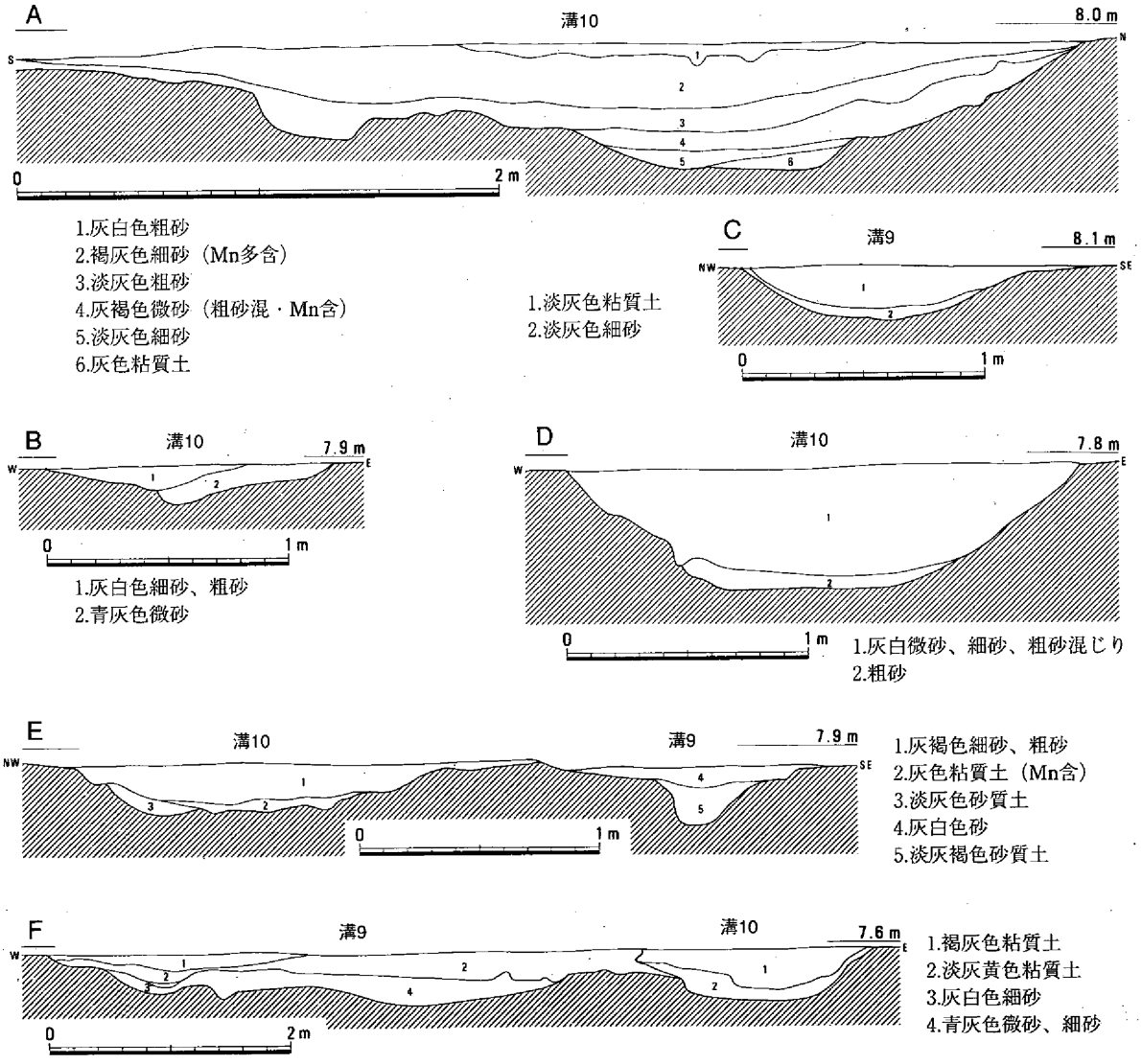
第123図　土壙114

(3)　溝

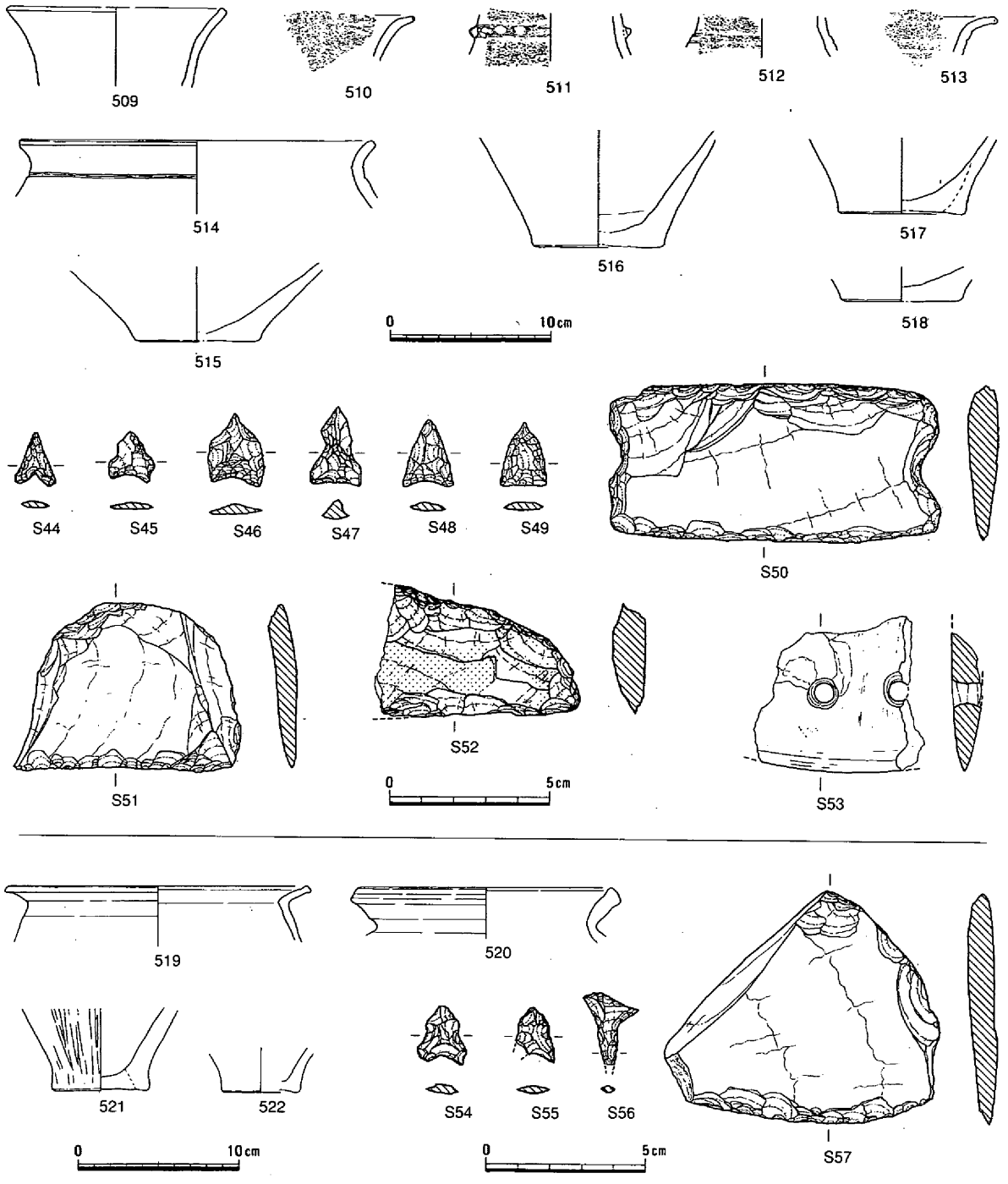
溝９・10[上流部]（第59・60・125図、図版25・66・71・74）

溝９は、進入路２区では微高地面から北西側の下がる肩口と底面に存在する一段深い溝を確認している。溝は北東－南西方向に約10m検出できた。幅140cm、深さ22cmを測る。水路１区では、一段深い溝が北東－南西方向に約15m検出できた。幅は60～200cmで、深さは25cm前後残存していた。駐車場区でこれらの溝の続きと考えた溝は、ほぼ中央部において検出できた。幅は５m前後で、深さは約40cmを測り、最下層に微砂・細砂が堆積していたのが特徴的であった。図示した遺物のうち509～518・522、Ｓ44～48・52・54～56は進入路２区から、Ｓ50は駐車場区から出土した。

溝10は、進入路１区・水路１区では幅１～２m、深さ20cm前後で、ほぼ北東－南西方向に検出できた。また溝の両側には幅７～８mの凹みがみとめられた。519～521の土器とＳ51・53の石器は進入路１区からの出土である。水路１区と駐車場区では幅２～３m、深さ40～50cmで、北東－南西に蛇行するかたちで検出できた。Ｓ50は駐車場区からの出土である。（平井泰）



第124図　溝９・10断面〈上流部〉

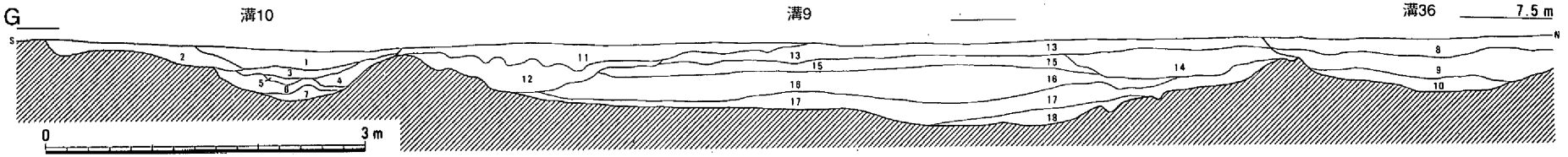


第125図　溝９・10出土遺物〈上流部〉

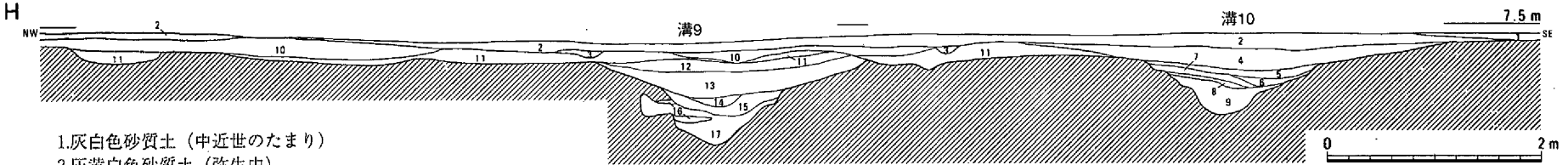
溝９・10［下流部］（第62・126～130・236～239図、図版26～28・63・66・71・73～77）

本館の17Ｊ～21Ｈ区にかけては、溝９・10とも蛇行しつつ南西方向へ流下している。18～20Ｉ区では溝９の右岸は溝10により大幅に削平されている。20Ｉ区南半に至ると溝９は完全に溝10の下に入り込んでしまい、以南では検出されなくなる。

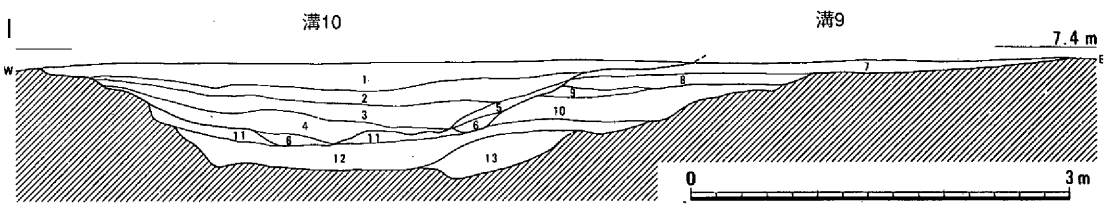
溝９の流路は18・19Ｊ区でＳ字状に緩くカーブし、以後は直線的に南西に流下する。溝の幅は上流部に比べて広くなり、６～８ｍを測るが、両岸の傾斜は緩く、中央部のみが２ｍ前後の幅をもって深く掘り下げられている。18・19Ｊ区では溝底が１段深く掘り窪められている状態が観察できた。検出



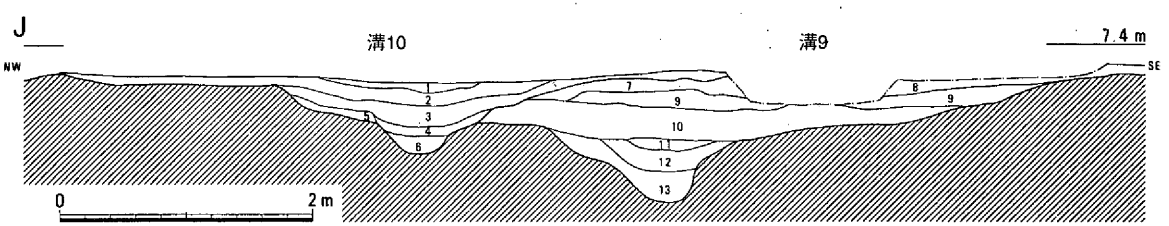
1.淡紫灰色砂質土
2.明黄灰色粘質土
3.淡黄灰色砂
4.紫灰色砂質土
5.赤黄色粘質土
6.暗灰色粘土
7.暗黄灰色微砂
8.淡紫灰色粘質土
9.暗黄灰褐色粘質土
10.暗黄灰色粘土
11.暗黄褐色砂質土
12.黄褐色粘質土（Mn塊含）
13.黄灰色砂
14.暗黄灰色砂質土
15.黄灰褐色粘質土
16.青灰色粘質土
17.青灰色粘土
18.黒灰色粘土



1.灰白色砂質土（中近世のたまり）
2.灰黄白色砂質土（弥生中）
3.灰白色砂層＜溝37＞
4.灰褐色砂質土
5.灰茶褐色砂質土（Mn含）
6.灰白色砂質土（Mn含）
7.灰白色砂質土（微砂）
8.灰白色砂質土（黄褐色粘質土混入）
9.褐灰色砂質土
10.黄灰白色砂質土（弥生前）
11.淡黄灰色砂質土（弥生前）
12.黄茶褐色砂質土
13.灰褐色粘質土
14.灰白色砂質土（微砂）
15.灰白色粘性砂質土
16.灰白色粘質土
17.青灰色粘質土

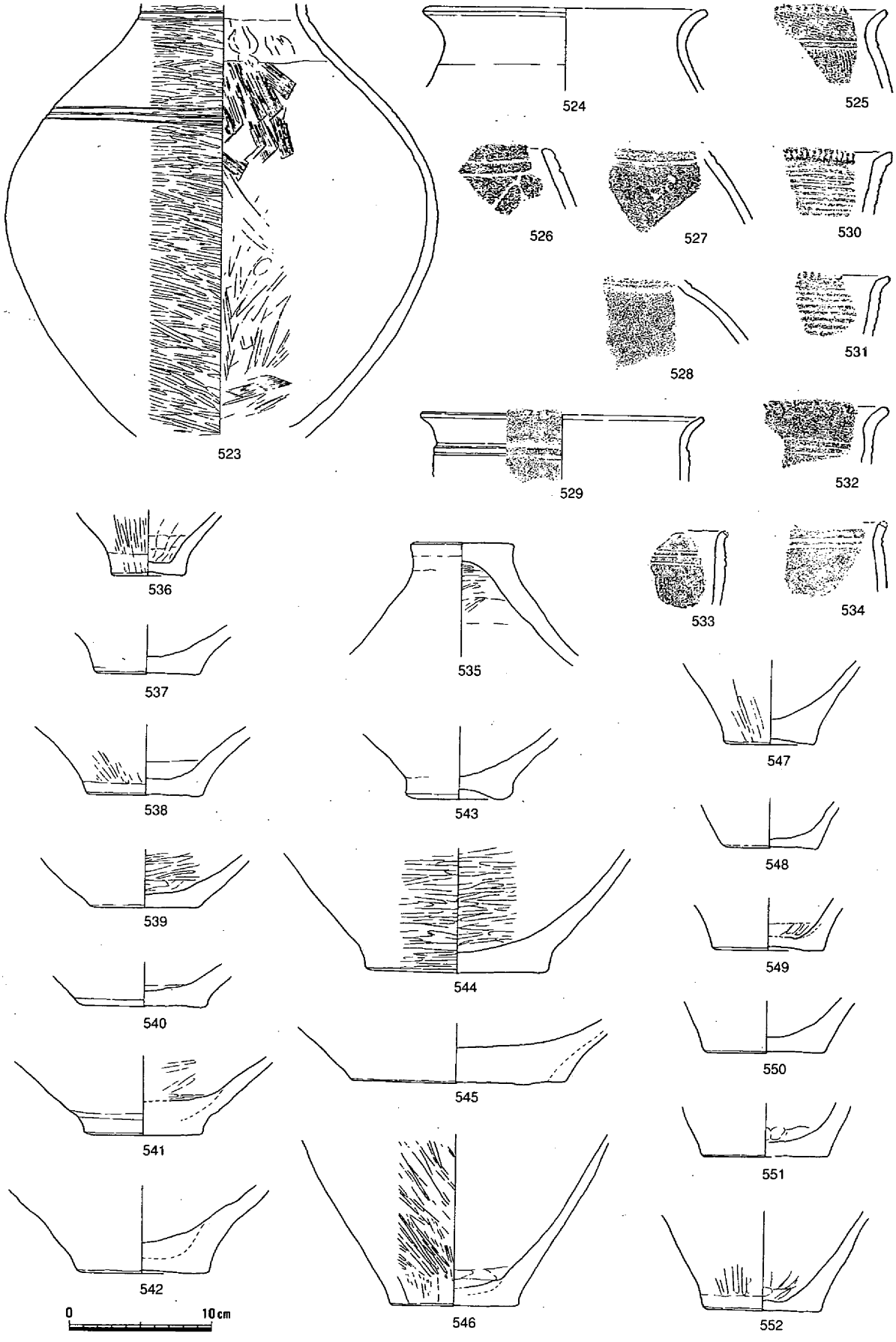


1.黄灰白色砂質土
2.黄茶褐色砂質土（Mn含）
3.灰茶褐色粘性砂質土
4.暗灰白色砂質土
5.灰黄白色砂質土
6.灰白色砂質土
7.灰黄白色砂質土
8.黄褐色粘質土
9.暗黄褐色粘質土（Mn含）
10.暗灰黄褐色粘質土（Mn含）
11.青灰色粘質土
12.青灰色粘性砂質土
13.灰白色砂質土（細砂）

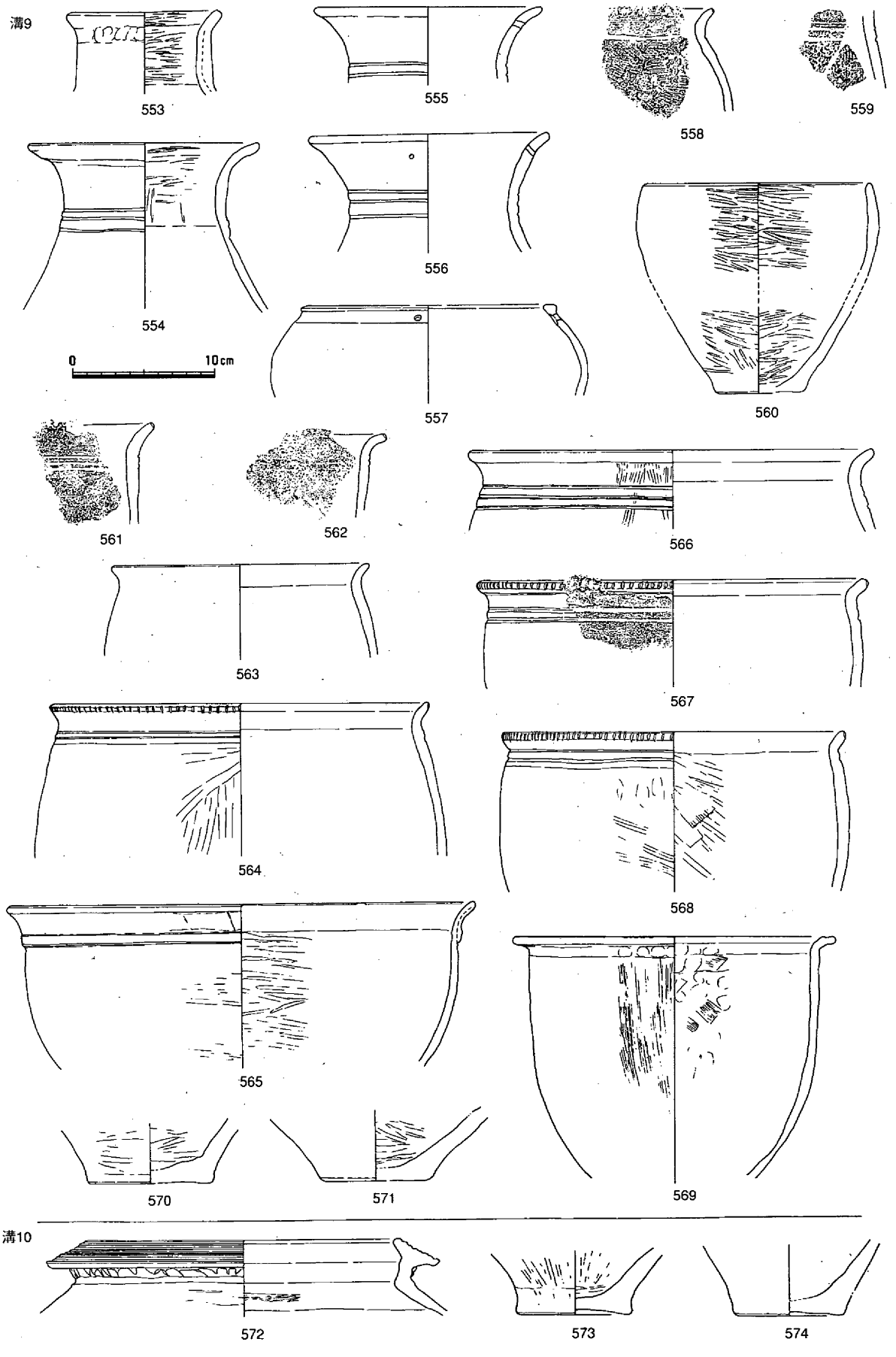


1.灰白色砂質土
2.褐灰色粘性砂質土
3.暗褐灰色粘性砂質土
4.灰色砂質土
5.灰白色粘性砂質土
6.灰色砂質土
7.灰白色砂質土
8.黄茶褐色粘質土
9.灰褐色粘質土
10.黒灰色粘質土（土器多含）
11.淡灰色砂質土
12.暗灰色粘質土
13.灰色砂質土

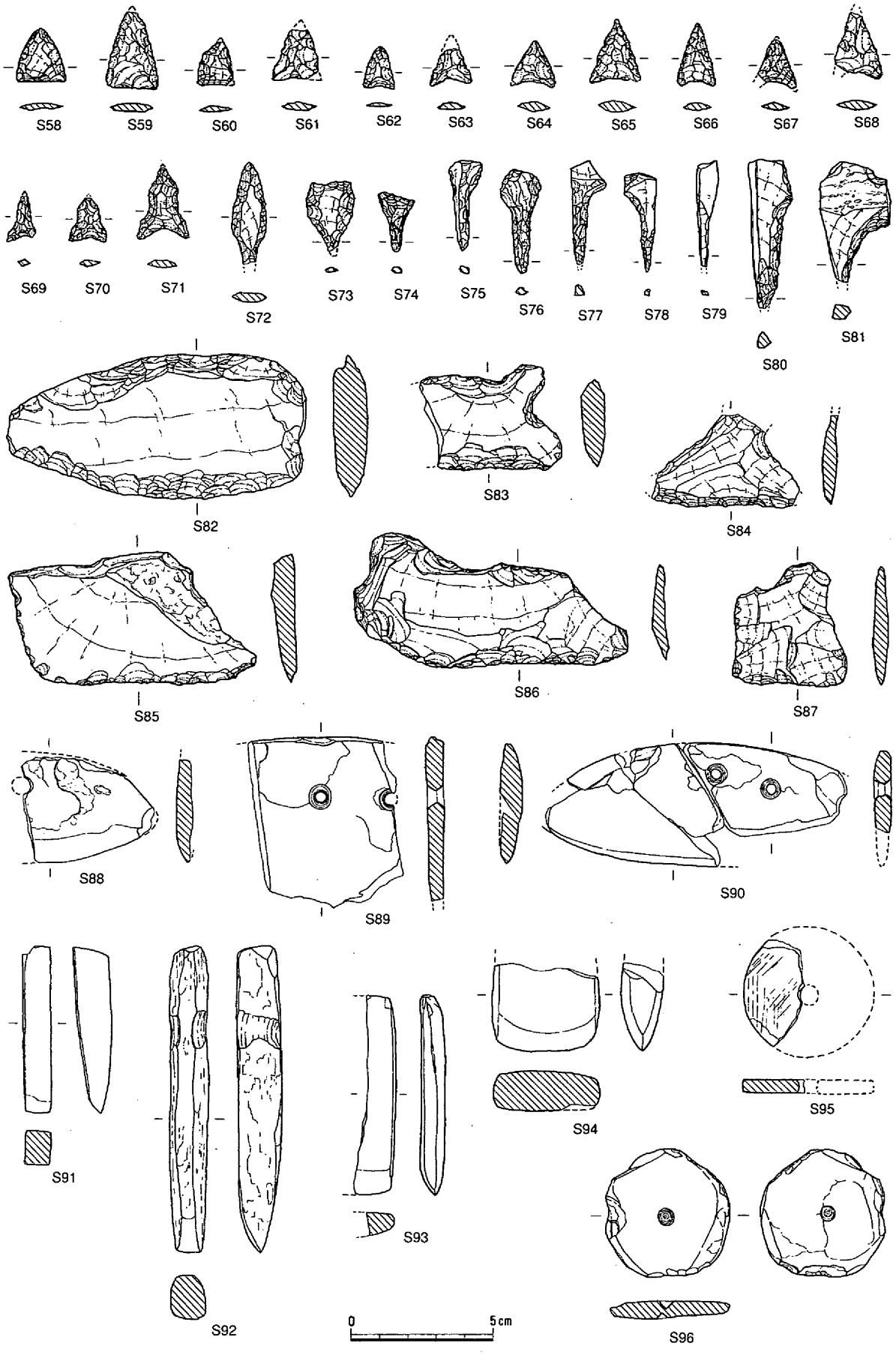
第126図　溝9・10断面〈下流部〉



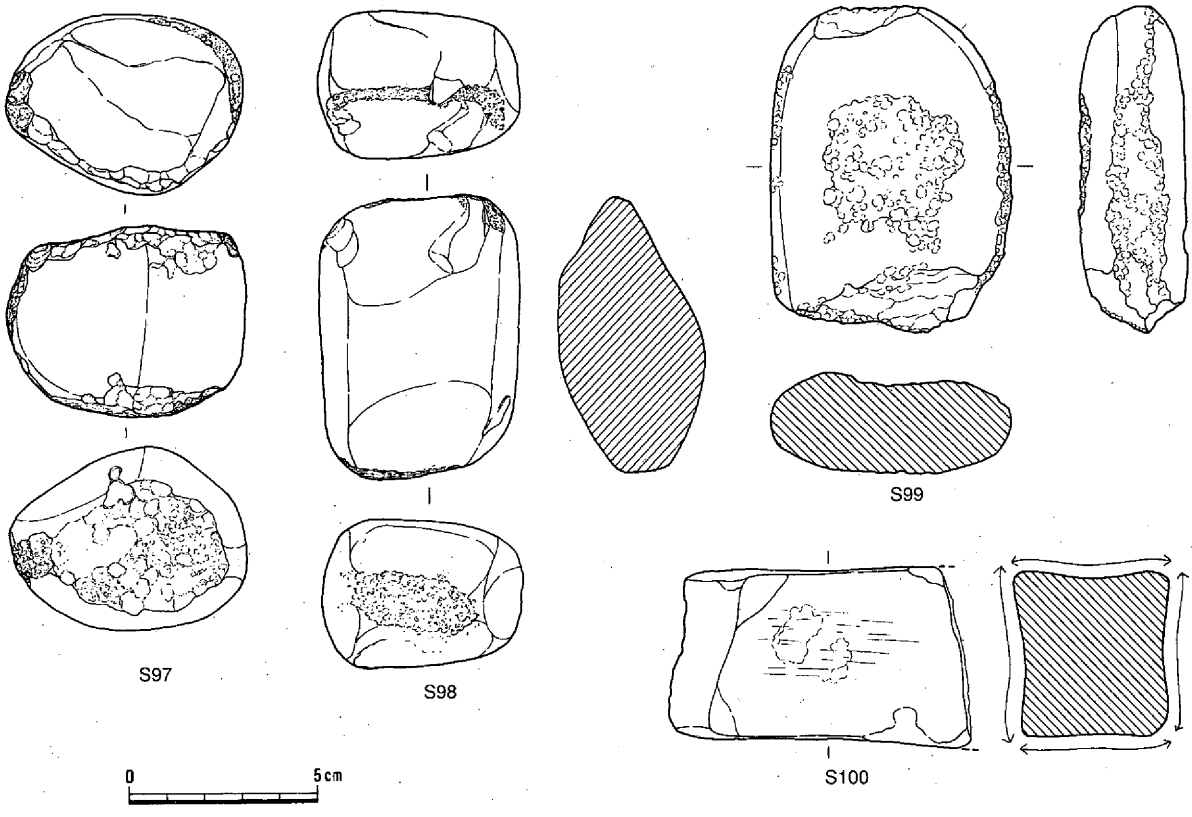
第127図　溝９出土遺物〈下流部〉(1)



第128図　溝９・10出土遺物〈下流部〉



第129図　溝９出土遺物〈下流部〉(2)



第130図　溝９出土遺物〈下流部〉(3)

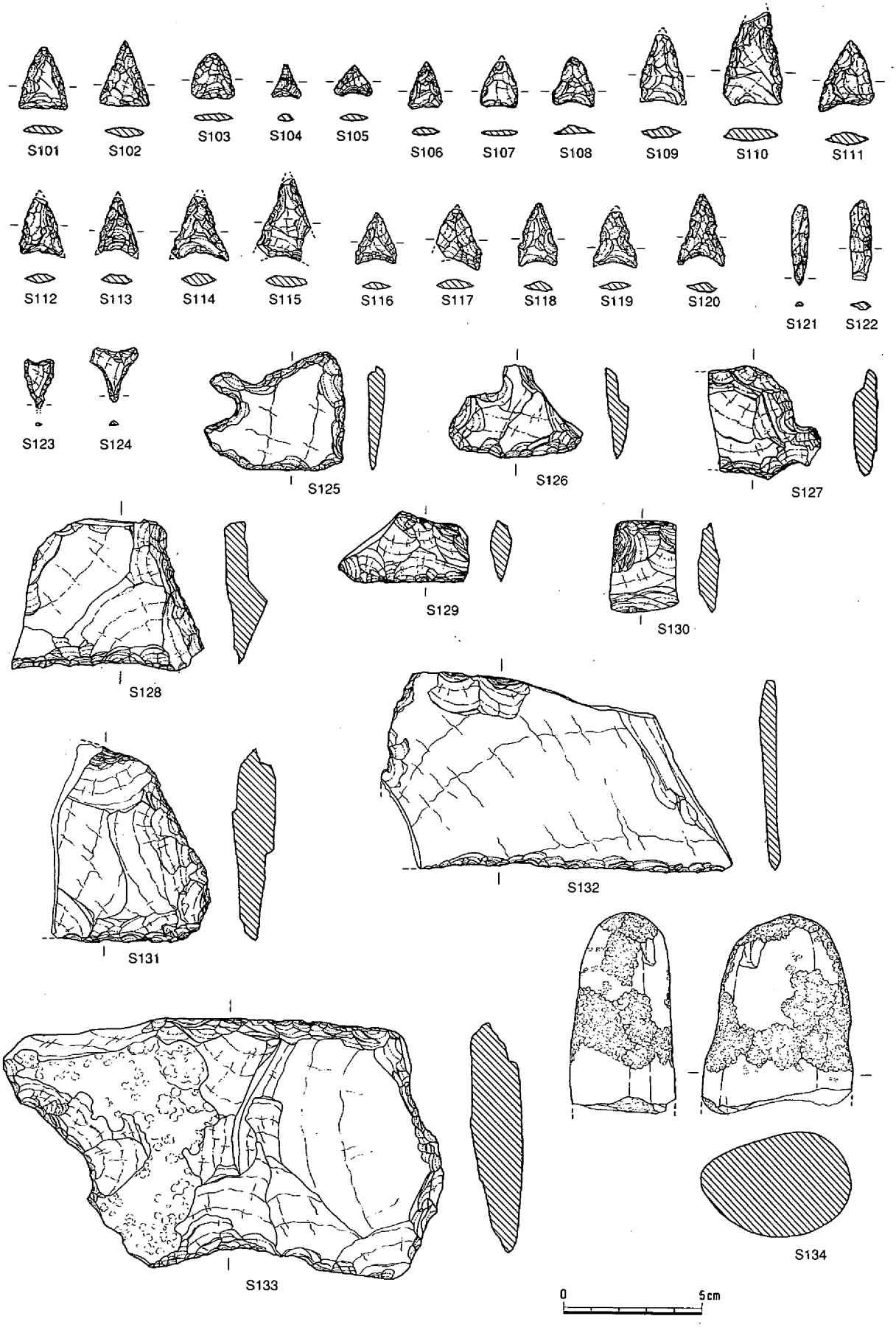
面からの深さはいずれの地点でもほぼ90～100cmの範囲におさまり、大きな変動はない。

19Ｊ～20Ｉ区では、溝10による削平を免れた東半部の埋土中層（第126図Ｊ断面の第10層が該当）から、多量の土器片が密集した状態で出土した。これらの土器は溝の廃絶時に一括投棄されたとみられ、土器の廃棄方法についての資料になると考えて出土状況を実測し、接合関係の検討を行った。その結果は別章で詳細に報告している。

遺物は各層から出土しているが、土器については中層から多量に出土したものが大部分を占めている。多くは小片となっており復元可能な個体は少ない。時期的には弥生時代前期中葉から後葉に該当し、溝の廃絶時期を前期後葉にあてることができる。石器類は種類に富み、石鏃・石匙等のほか、磨製石包丁Ｓ88～90、細身の柱状片刃石斧Ｓ91・92、扁平片刃石斧Ｓ93・94、紡錘車Ｓ95・96、敲石Ｓ97～99、砥石Ｓ100等が出土している。

溝10は上流部では溝９の南東側を流れているが、18・19Ｊ区で一旦溝９の西側に流路を移した後、再び溝９の上面に移動し、以降はほぼ直線的に南西に流下する。溝の幅は流下するにつれて広くなり、18Ｊ区で1.5～２ｍ程度であったものが、21Ｉ区付近では９ｍ前後にまで拡張している。溝９同様、両岸の傾斜は緩く、中央部が特に深く掘削されている。一方深さにはさほどの変化はみられず、いずれの地点でも70～80cmを測った。19Ｉ区の蛇行部では底面に複雑な凹凸がみられる。なお、20Ｉ区では溝10の水流によって下層の縄文河道が攪拌され、本来の溝底面より下位の河道埋土中にも弥生土器が多数包含される結果となっていた。

出土遺物は溝９に比較して少ない。図示した甕口縁部572は弥生時代中期後葉の特徴を示しており、この溝が溝９の廃絶からかなり間をおいて掘削されたことが知られる。石器類は、石鏃・石匙等のほ



第131図　溝10出土遺物〈下流部〉

かに、スクレイパーないし楔形石器Ｓ128～132、大形の打製石包丁Ｓ133、敲石Ｓ134等が出土した。

この２条の溝の性格としては、東側に多数の土壙や柱穴が分布する一方、西側では溝群以外には顕著な遺構も少ないことから、集落の縁辺部を画する溝の可能性が考えられる。しかし、その規模や流路の蛇行状況からすれば、いわゆる環濠ではなく、ある程度の改修を受けながらも基本的には自然流路に近いものであったとみておくのが妥当であろう。（岡本）

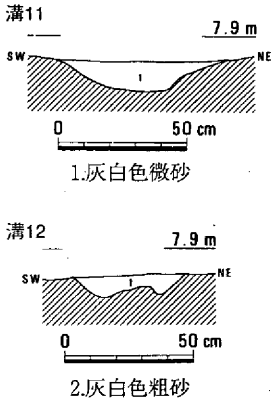
溝11（第59・60・132図、図版25－１）

進入路２区の西端部に位置する。幅50cm前後で、長さ３ｍあまりが検出できた。埋土は灰白色の細かい微砂が一層のみであった。

時期は明確ではないが、検出面や埋土から、前期である可能性が高いと考えている。（平井泰）

溝12（第59・60・132図、図版25－１）

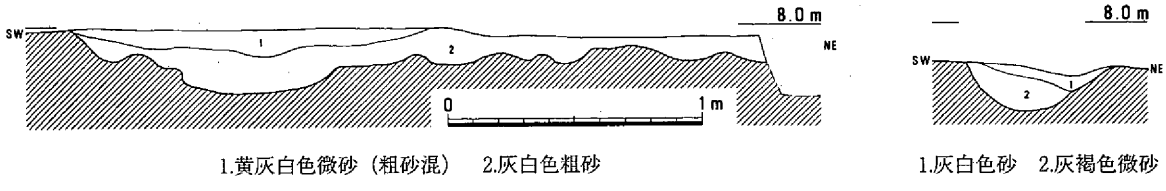
進入路２区の西端部、溝11の西に位置する。幅40cm前後で、長さ約5.5ｍを検出した。埋土は灰白色の粗砂で、底面には凹凸が認められた。溝11や13と同じ面で検出でき、また同じ方向である。時期を示す遺物は出土していないが、前期ではないかと考えている。（平井泰）



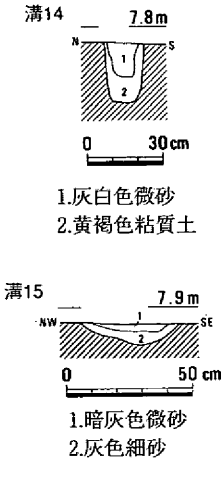
第132図　溝11・12断面

溝13（第59・60・133図、図版25－１）

進入路２区の西端部、溝12の西に位置する。一部が溝10によってきられており、それより北側では幅３ｍ前後の凹みの中に二条の溝が検出できた。南側では幅60cm、深さ18cmの溝が一条確認できている。遺物としては前期と考えられる土器片がごく僅かではあるが出土している。（平井泰）



第133図　溝13断面



第134図　溝14・15断面

溝14（第60・134図）

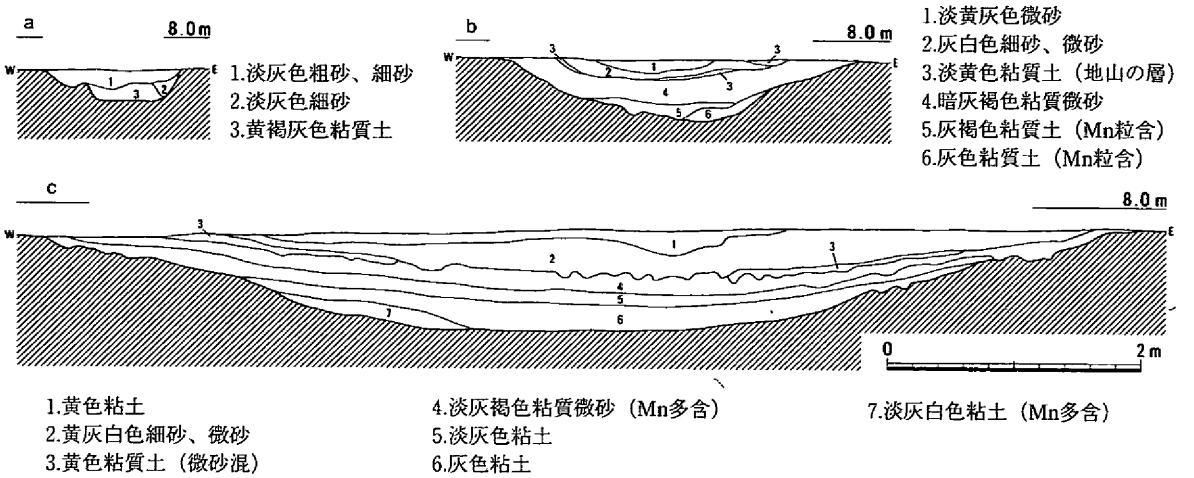
水路１区の北端部に位置する。幅15cm前後と小規模で、長さ約４ｍが検出できた。深さは24cmと幅の割合に深いこと、および断面形が垂直にちかいことが特徴である。埋土は二層確認でき、上層には溝11で見られたような微砂が堆積していた。遺物は土器片が１点出土しており、時期は明確ではないが、前期と考えている。（平井泰）

溝15（第60・134図）

水路１区の北端部で溝16に接するようなかたちで検出できた。幅35cm前後、深さ約8cmの小規模な溝で、長さは約５ｍ確認できた。遺物は土器片が３点出土しており、時期は中期と考えている。（平井泰）

溝16（第60・135図、図版30－１・２）

水路１区で北北東－南南西方向に検出した。北側では幅80～120cmで、

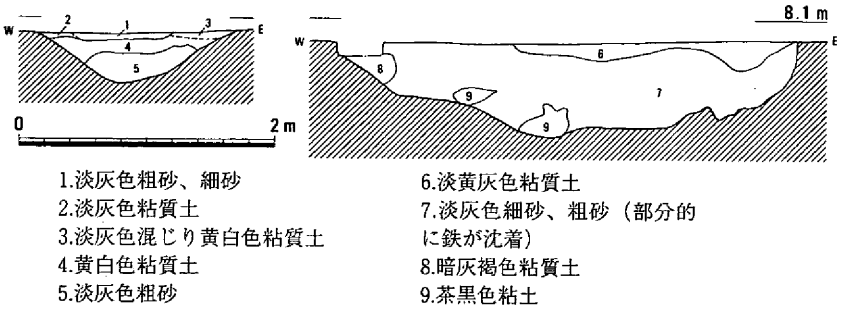


第135図　溝16断面

深さ25cm前後の規模であるが、南側では最大幅約９ｍ、深さ80cmの規模で確認できた。遺物は中期らしい土器片３点とＳ57のスクレイパーが出土したのみである。　（平井泰）

溝17（第60・136図、図版30－３）

水路４区と宿舎区において検出した。水路４区では幅1.5m前後、深さ約40cm、宿舎区では、幅1.4～3.7m、深さ75cmの規模で、埋土中には細砂・粗砂を多く含んでいた。両調査区の溝が同一のものである直接的な根拠はないものの、可能性を考えている。遺物は前期らしい土器片が１点出土している。　（平井泰）



第136図　溝17断面

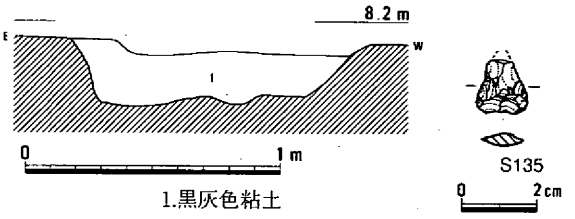
溝18（第60･137･208図）

水路５区の東端部に位置する。幅１ｍ前後、深さ約30cmの規模で、長さは南北方向に約５ｍ検出できた。埋土は黒灰色粘土が一層のみで、底面には凹凸が認められた。土壙13をきっており、また南端部は溝19にきられている。

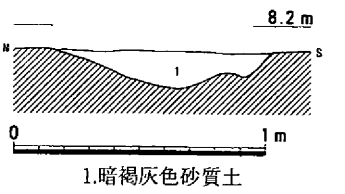
遺物はＳ135の石鏃が出土したのみで、時期は明確でないが弥生時代と考えた。　（平井泰）

溝19（第60・138図）

水路５区の東端部、溝18の南に位置する。規模は幅80～220cm、深さ15cmで、長さは約６ｍを検出した。埋土は暗褐灰色砂質土が一層のみで、溝18をきっている。



第137図　溝18断面、同出土遺物



第138図　溝19断面

時期は土器片が５点出土しており、明確ではないが中期中葉と考えている。　（平井泰）

溝20（第60・139図）

水路５区の東半部に位置する。規模は、幅30cm前後、深さ５～15cmで、長さは約10m検出できた。埋土は黒灰色粘土が一層のみで、時期は土器片が１点出土しており、前期～中期と考えている。　（平井泰）

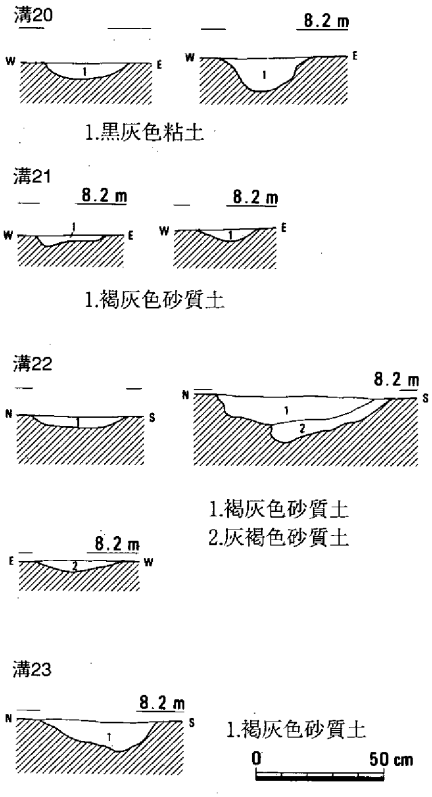
溝21（第60・139図）

宿舎区の北半部に位置する。幅20～25cm、深さ5cm前後と小規模で、東西方向に約５m検出できた。埋土は褐灰色砂質土が一層のみで、時期は明確ではないが、弥生時代と考えている。　（平井泰）

溝22（第60・139図、図版42－２）

宿舎区の西端部に位置する。規模は、幅30～70cm、深さ４～20cmで、西南部が大きく東に屈曲するかたちで長さ約16m検出できた。

出土遺物がないため時期は明確ではないが、検出面や埋土から弥生時代と考えている。　（平井泰）



第139図　溝20～23断面

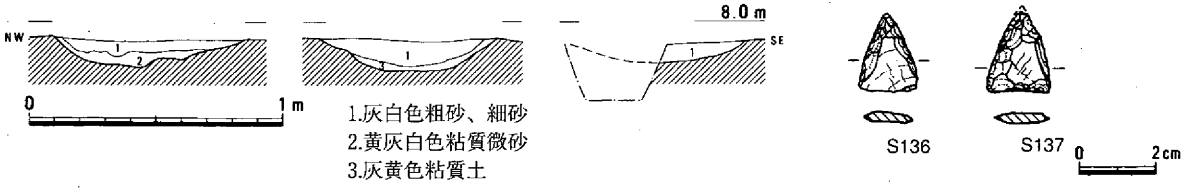
溝23（第60・139図）

宿舎区の西端部に位置する。幅40cm前後、深さ約12cmの規模で、長さ約３mを検出した。溝22をきっている。埋土は褐灰色砂質土が一層のみである。

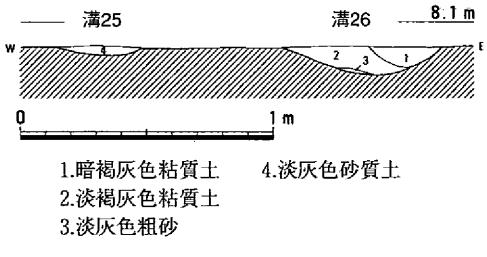
出土遺物がなく時期は明確ではないが、検出面や埋土から弥生時代と考えている。　（平井泰）

溝24（第61・140図、図版67）

水路５区の南端部に位置する。規模は、幅1.2m前後、深さ10cm前後で、長さ約33mを検出した。



第140図　溝24断面、同出土遺物



第141図　溝25・26断面

埋土は細砂・微砂が多く、底面には凹凸が多く認められた。遺物は土器片や石器が少量出土し、時期は前期～中期前葉と考えられる。　（平井泰）

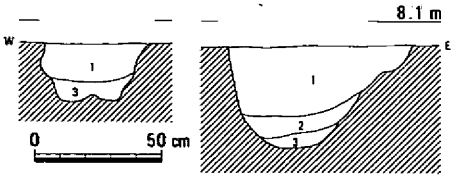
溝25・26（第61・141図）

水路５区の南端部に位置する。溝25は、幅30～50cm、深さ5cm前後で、長さ約８mを検出した。北西部では溝26をきっている。溝26は、幅60～90cm、深さ約10cm

で、長さ約９ｍを検出した。時期は埋土や検出面から弥生時代と考えている。　（平井泰）

溝27（第61・142図）

水路５区の南端部、溝26の南に位置する。幅30～70cmで、深さは最深部で約40cmを測る。底は二カ所で大きく凹んでいた。長さは蛇行しながら約４ｍを検出した。溝26をきっている。遺物は土器片が約10片出土しており、時期は中期と考えている。　（平井泰）

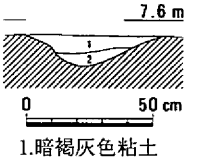


1.暗褐灰色～暗灰色粘質土（黄色粘土塊含）
2.暗灰色粘質土
3.暗灰色粗砂（10mm以下の円礫含）

第142図　溝27断面

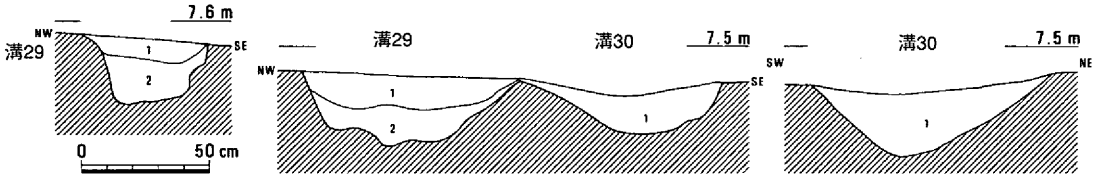
溝28（第60・143図）

駐車場区の中央部に位置する。規模は、幅50～190cmで、深さは12cmを測る。南端部が大きく膨らんでおり、長さ約3.5ｍを検出した。埋土は二層 確認でき、溝29をきっている。検出面や埋土から時期は弥生時代と考えている。　（平井泰）



1.暗褐灰色粘土
2.暗灰色粘土

第143図　溝28断面



1.暗褐灰色粘土
2.淡褐黄色粘土

1.暗褐灰色粘土
2.暗灰色粘質土（灰黄色砂質土含）

1.灰色微砂と褐灰色粘質土

第144図　溝29～30断面

溝29･30（第60・144図）

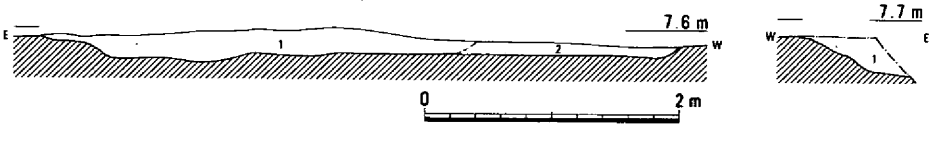
溝29は駐車場区の西半部に位置する。幅は30～90cmで、深さは約30cm残存していた。調査区北端部では二方向に分岐しており、東側の溝は溝28をきっている。

溝30は駐車場区の溝29の南に位置する。規模は、幅80～150cm、深さ約30cmを測る。長さは約５ｍ検出でき、北側はＬ字状に屈曲していた。遺物は土器片が少量出土している。

時期は明確ではないが、いずれも弥生時代で中期と考えている。　（平井泰）

溝31（第61・144図）

溝31は14Ｇ区の北西側に位置し、北から南に向かって流走するが、南下して他のどの調査区に繋がるかは不明である。溝は東側が深く、西側はなだらかに立ち上がる。溝の規模は肩部で約 4.6ｍを測り、東側の深い部分の肩部が約 2.6ｍ、底部が約 1.6ｍである。　（小林）

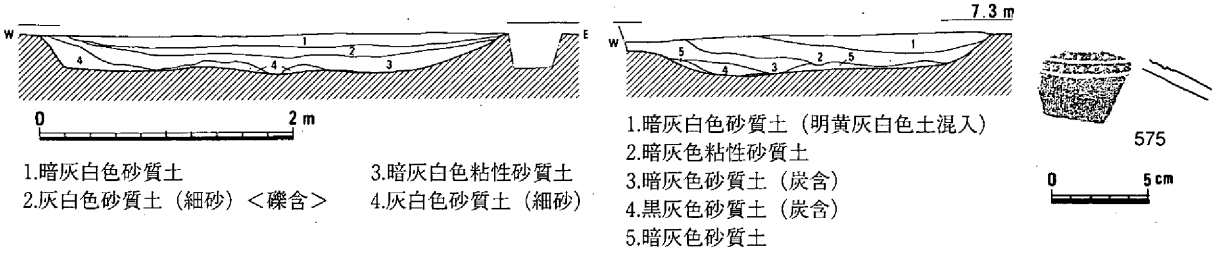


1.灰色粘性土
2.灰色粘性土
（１層より鉄分と砂粒が少ない）

第145図　溝31断面

溝32（第61・145図）

溝32は、14Ｅ区南西側からＥ15区の南西側に向かってほぼ南北方向に流走する。溝の規模は、14Ｅ

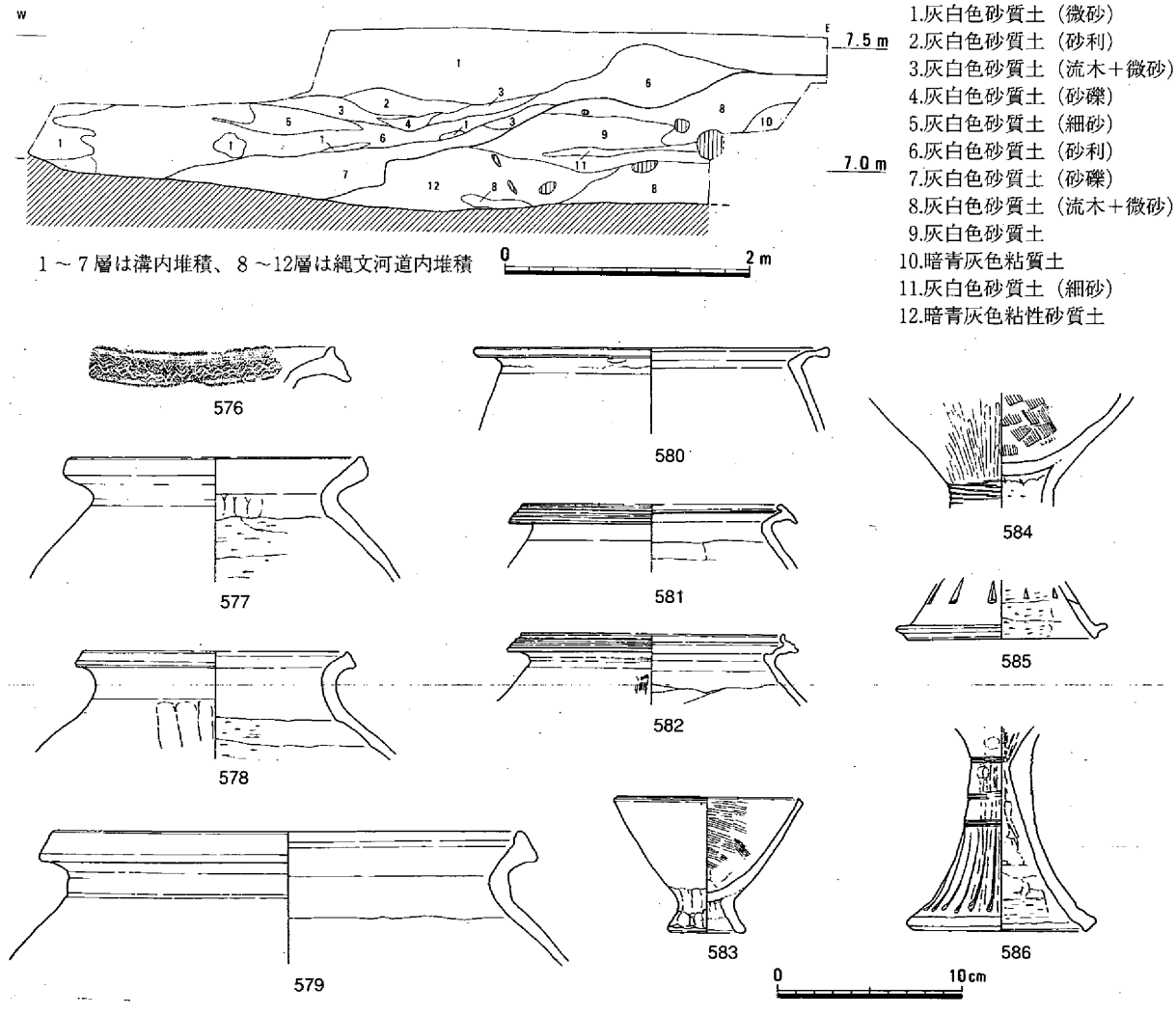


第146図　溝32断面、同出土遺物

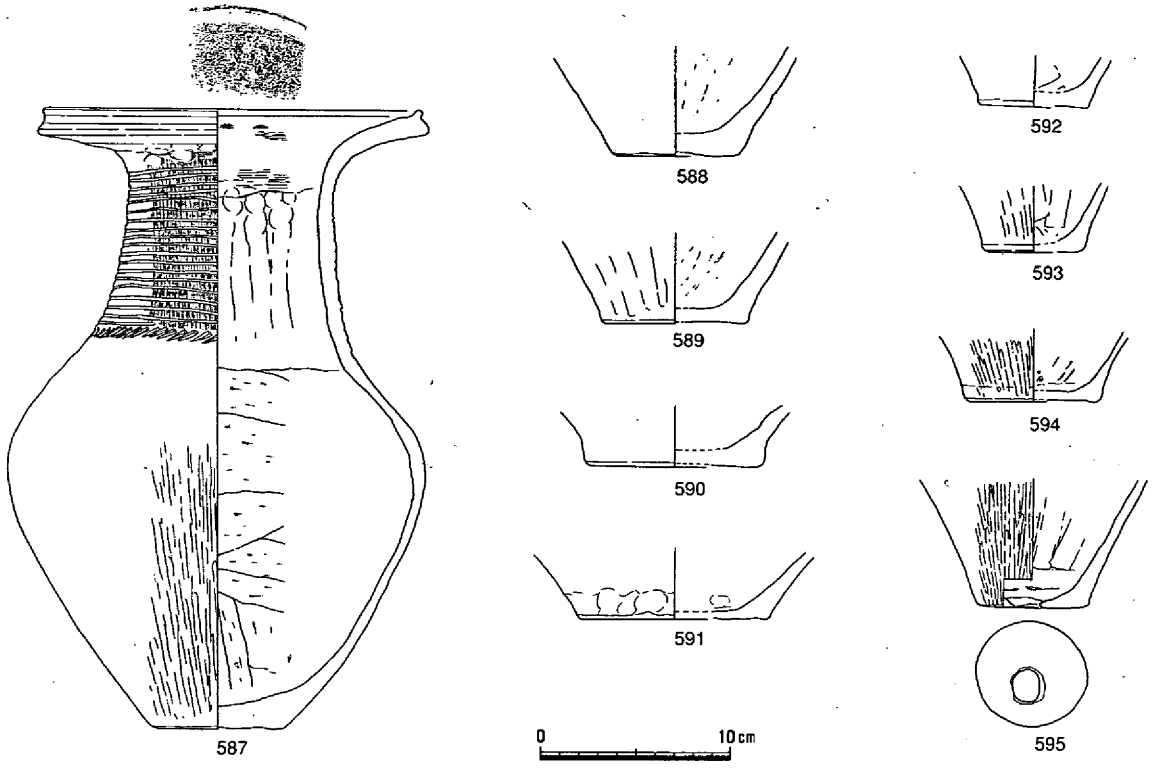
区で肩部が約 4.1m、底部が約３ｍで、15－Ｅ区で肩部が約 3.2m、底部が約 1.8mを測る。深さは14・15Ｅ区とも確認面から32cmを測り、断面形態は皿状である。出土した遺物は土器片が数点のみで、575は弥・前・Ⅱの壺の肩部になり、条線の間に列点文がある。　（小林）

溝33（第61・146図）

溝33は、14Ｅ区の南東部から14Ｄ区北東部に至り、14Ｄ区の中央部に向かって南西方向に流走する。溝の規模は西側の大半が調査区外になるため全貌は不明だが、概ね肩部が９ｍ前後、底部が３～４ｍ前後になると思われる。断面は１～７層までが溝33で、８～12層が縄文河道になる。覆土は大半が砂利層である。溝の深さは確認面から 1.2mを測り、断面形態は皿状である。出土した土器は、大半が



第147図　溝33断面、同出土遺物（1）

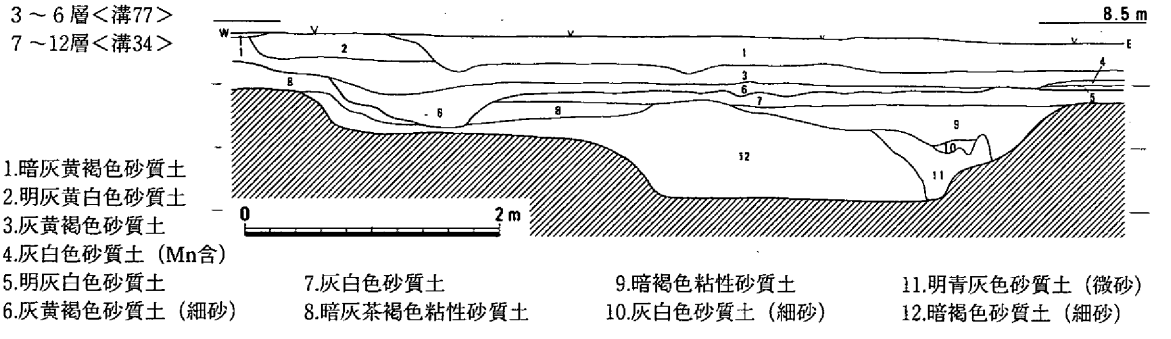


第148図　溝33出土遺物（2）

弥・中・Ⅲで、576～579が壺、580～582が甕、583が茶碗形で584が台付の鉢、585と586が鉢か高杯の脚部、595が甑になる。587は弥・後・Ⅱの長頸壺である。　（小林）

溝34（第61・148図）

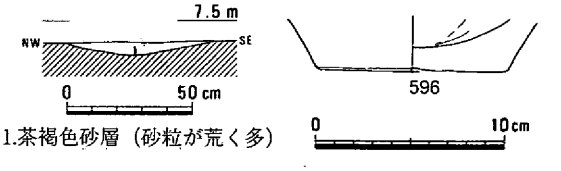
溝34は、15Ｃ区の北東側に位置し、15Ｄ区に向かって南東方向へ流走する。東側の上部は溝77によって切られ、断面図では１～６層までがそれに当たり、７～12層までが溝34である。溝の幅は肩部で約４ｍ、底部で約2.5ｍになる。深さは確認面から約76cmを測り、東側に最深部が寄る。　（小林）



第149図　溝34・77断面

溝35（第62・150図）

本館２区の16Ｋ、Ｌ区に位置する繭状の溝である。溝９に並行するように全長約12ｍで幅約55cm、深さ約５cmを測り、両端は完結していた。



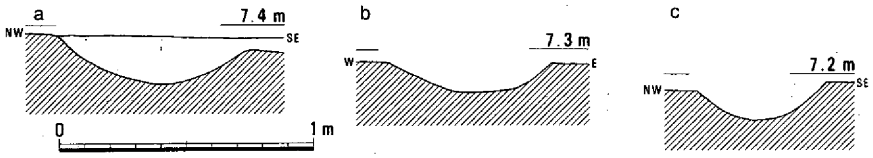
第150図　溝35断面、同出土遺物

埋土中からは図示した弥生土器の壺の底部とともに胴部の破片など、数点が出土している。

出土した土器から時期は、弥生時代前期前半と考えられる。（根木）

溝36（第62･151図）

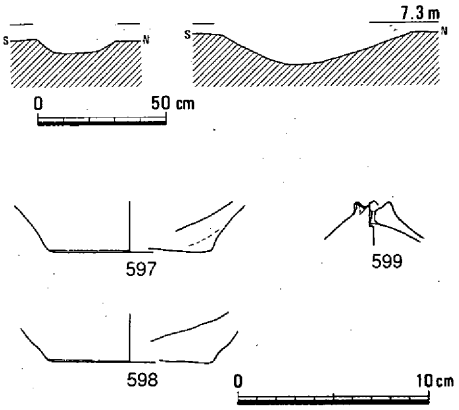
17Ｋ区の中央付近から発した溝36は西に流れ、17Ｊ区で溝９に平行する形で南西方向に屈折し、19Ｉ区へ向かう。溝の幅は 0.5～ 0.7m、深さは15cm前後で断面形態は皿状である。覆土は砂質になり、18Ｇ区で粘質覆土の溝39・40を切る。土器片が数点出土するが、図化するには至っていない。（小林）



第151図　溝36断面

溝37（第62・152図）

17Ｋ区付近から発した溝37は西に流れ、18Ｊ区で溝10に平行する形で南西方向に屈折し19Ｉ区に向かう。溝の幅は 0.3～ 0.7m前後、深さは12cm前後で断面形態は皿状である。覆土は砂質になり、18Ｉ区付近で粘質覆土の溝39・40を切る。土器片が数点出土し、597・598は壺か甕の底部、599は蓋である。（小林）



第152図　溝37断面、同出土遺物

溝38（第62・153図）

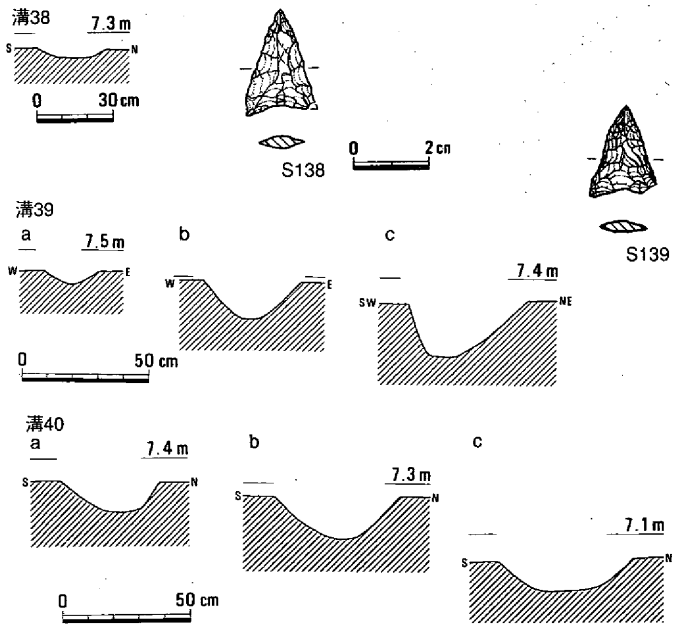
18Ｉ区の南東付近から発した溝38は、東へ流走し、18Ｊ区の南西付近で溝10に合流し、溝10の東側には至らない。溝の幅は30cm前後、深さ５cmで断面形態は皿状である。石鏃が出土し、Ｓ138は三角形、Ｓ139は五角形で、共に基部が内湾する。（小林）

溝39（第62・153図、図版31－１）

16Ｉ区の西側付近で発した溝39は、南西方向に向かい、17Ｉ区付近で南に屈折し、18Ｉ区で再び南西に向かって、18Ｊ区で溝９に合流する。溝９の東側には至らない。溝の幅は 0.2～ 0.5m、深さは５～20cm前後で、断面形態は皿状である。覆土は粘質であり、溝36・37・38に切られる。（小林）

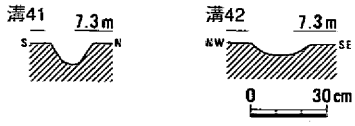
溝40（第62・153図、図版31－１）

溝40は、18Ｉ区の南西部と中央部より南側の２カ所から発し、合流して東に流走し、19Ｊ区の北西部で溝９に至る。溝９より東側へは至らない。幅は



第153図　溝38～40断面、溝38・39出土遺物

0.4～ 0.5m、深さは15cm前後で断面形態は皿状である。覆土は粘質であり、砂質覆土の溝36・37・38に切られる。　（小林）



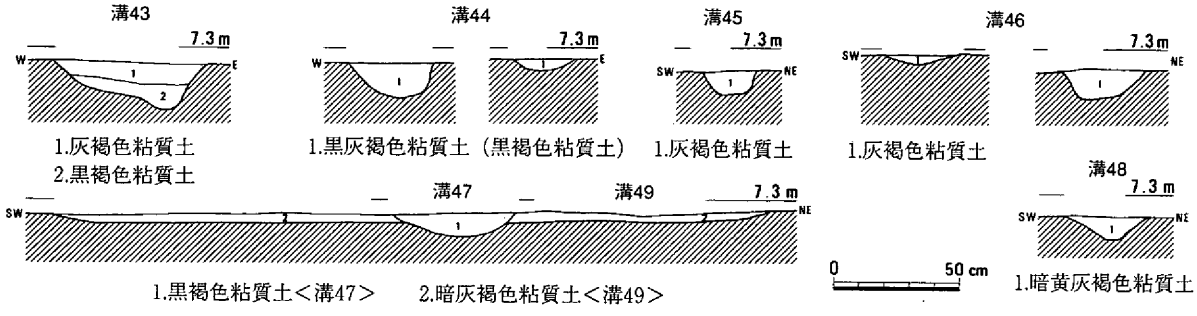
第154図　溝41・42断面

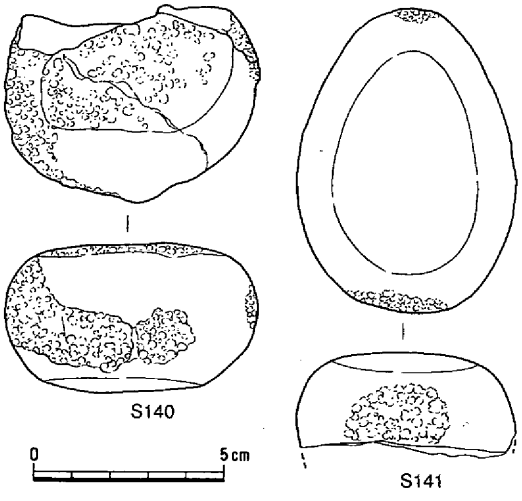
溝41・42（第62・154図）

溝41は18Ｇ区の南東部に位置し、東西方向に流走する。溝の幅は0.2m前後、深さは10cm前後で断面形態は半円形である。覆土は粘質となる。溝42は19Ｉ区の北東部に位置する東西方向の溝で、深さは５cm前後、断面形態は皿状を呈する。両溝とも出土遺物はないが、検出状況から弥生時代の遺構と考えられる。（小林・岡本）

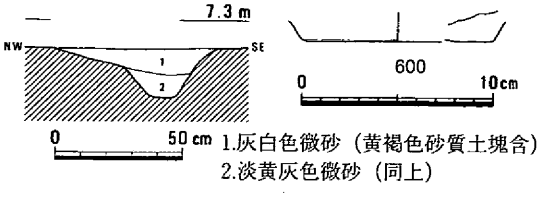
溝43・44・45・46・47・48（第62・155図、図版78）

19Ｈ～20Ｉ区にまたがる位置で検出された溝群で、後述する溝49の埋没後、その上面を流れていたものである。流路はさまざまに蛇行しているが、いずれも基本的には北から南へと流下している。検出面上での幅は15～30cm程度、深さは最大でも20cm程度であり、溝の底部付近のみの検出とも考えられる。出土遺物は非常に少なく、図示可能なものもほとんどない。Ｓ140・141は溝43から出土した敲石である。溝の性格は不明である。時期についても確定するだけの根拠に乏しいが、検出状況や埋土からみて弥生時代には含まれると判断される。　（岡本）





第155図　溝43～49断面、溝43出土遺物



第156図　溝50断面、同出土遺物

溝49（第62・155図）

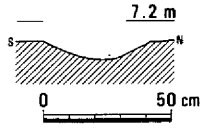
19Ｉ区から20Ｈ区にかけて、東から西へ流走する溝である。検出面での幅は３～５ｍを測る一方、深さは５～10cm程度とごく浅い。埋土は粘質の強い暗灰褐色土で、地山との境は不明瞭であった。遺物は土器小片が少量出土したに留まり、時期の特定は困難であるが、溝10に先行することからみて弥生時代前～中期の範囲にはおさまると思われる。（岡本）

溝50（第62・156図）

20Ｈ・Ｉ区で検出された、北東から南西方向へ直線的に流下する溝である。北端部は溝10に切られている。幅60～90cm、深さ20cm前後を測り、他の溝と異なり灰色系の微砂で埋積していた。出土遺物は少なく、図示した600は甕の底部である。溝の時期は、検出状況からみて弥生時代前～中期の範囲と考えられる。　（岡本）

溝51（第101・157図）

21Ｊ区に位置する。調査区端にあたるため一部のみの検出に留まる。検出面上での幅は30cm前後、深さは10cm前後を測る。位置関係からみて東側の土壙70に連続する可能性が高く、両者をあわせて１遺構と理解すべきかも知れない。出土遺物がなく、詳細な時期は不明である。　（岡本）



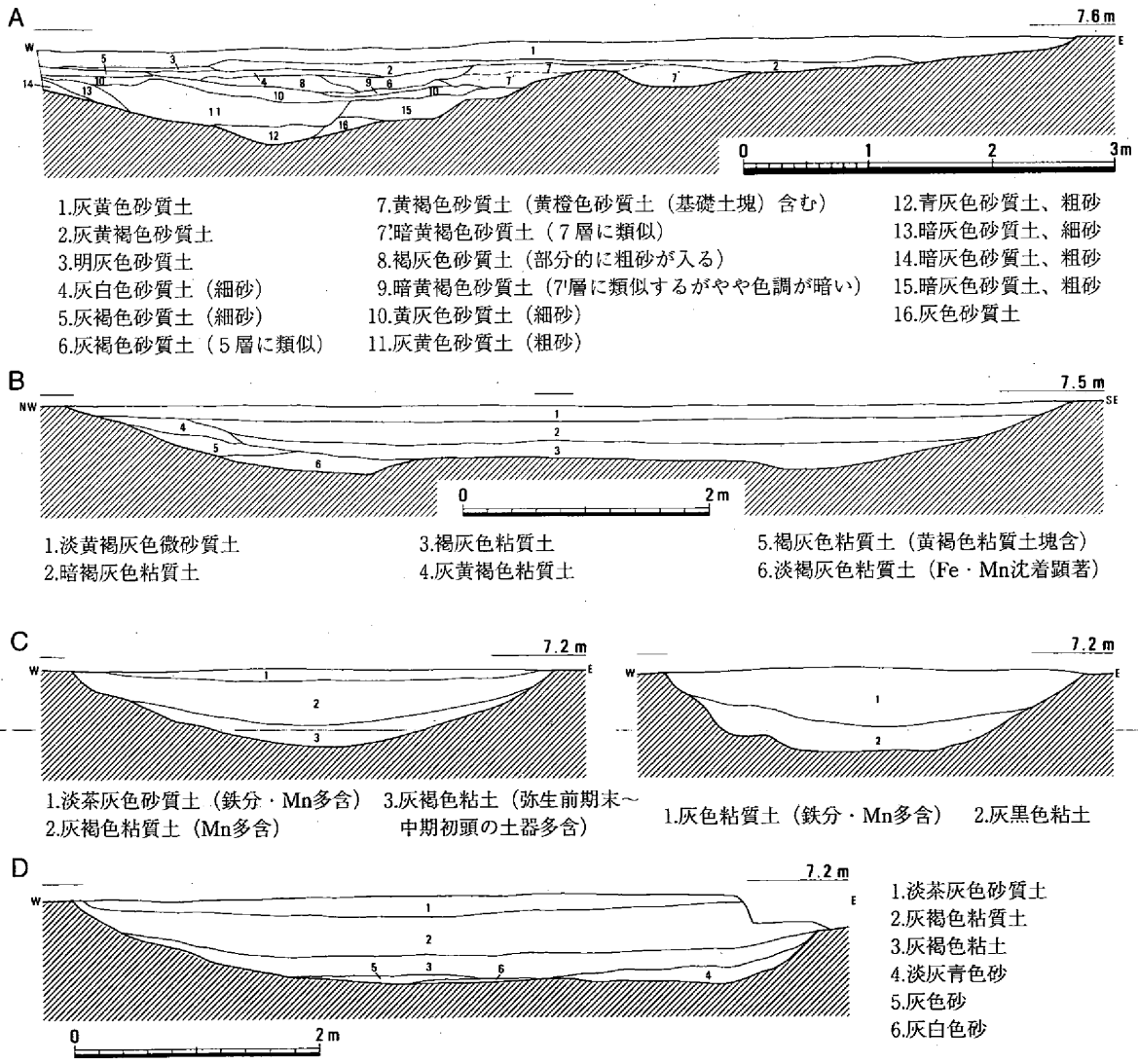
第157図　溝51断面

溝52（第101・100図）

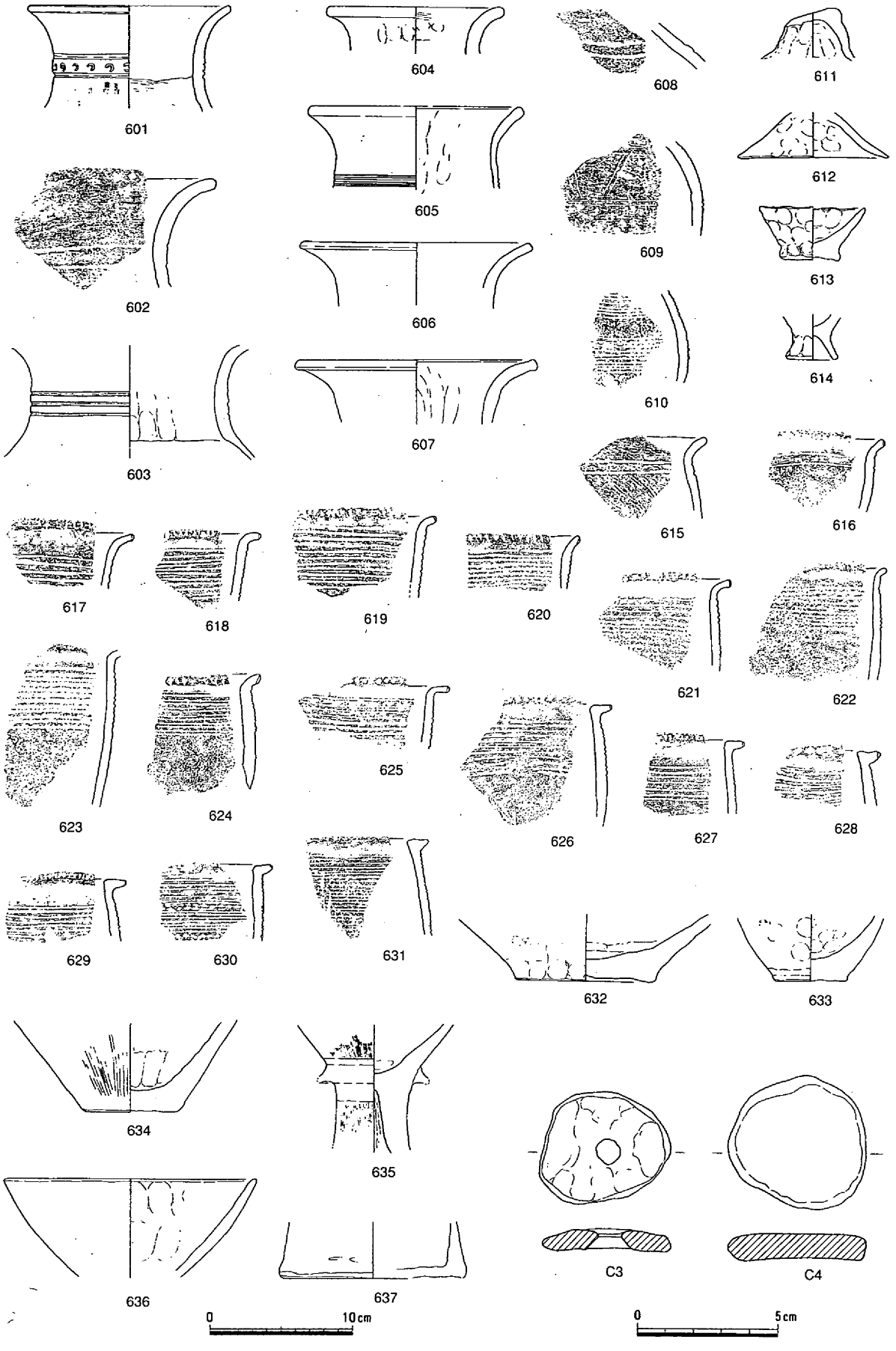
Ｉ21区に位置し、土壙68と土壙69を連結している長さ220cmの溝である。幅60～70cm、深さ10cm前後を測る。両土壙とあわせると長さ930cmの長大な溝状の土壙となり、いわゆる舟形土壙を構成する可能性がある。遺物は少ないが、土壙と同時期の弥生時代前期後葉の遺構と考えられる。　（岡本）

溝53（第62・101・158～161図、図版31－２・３）

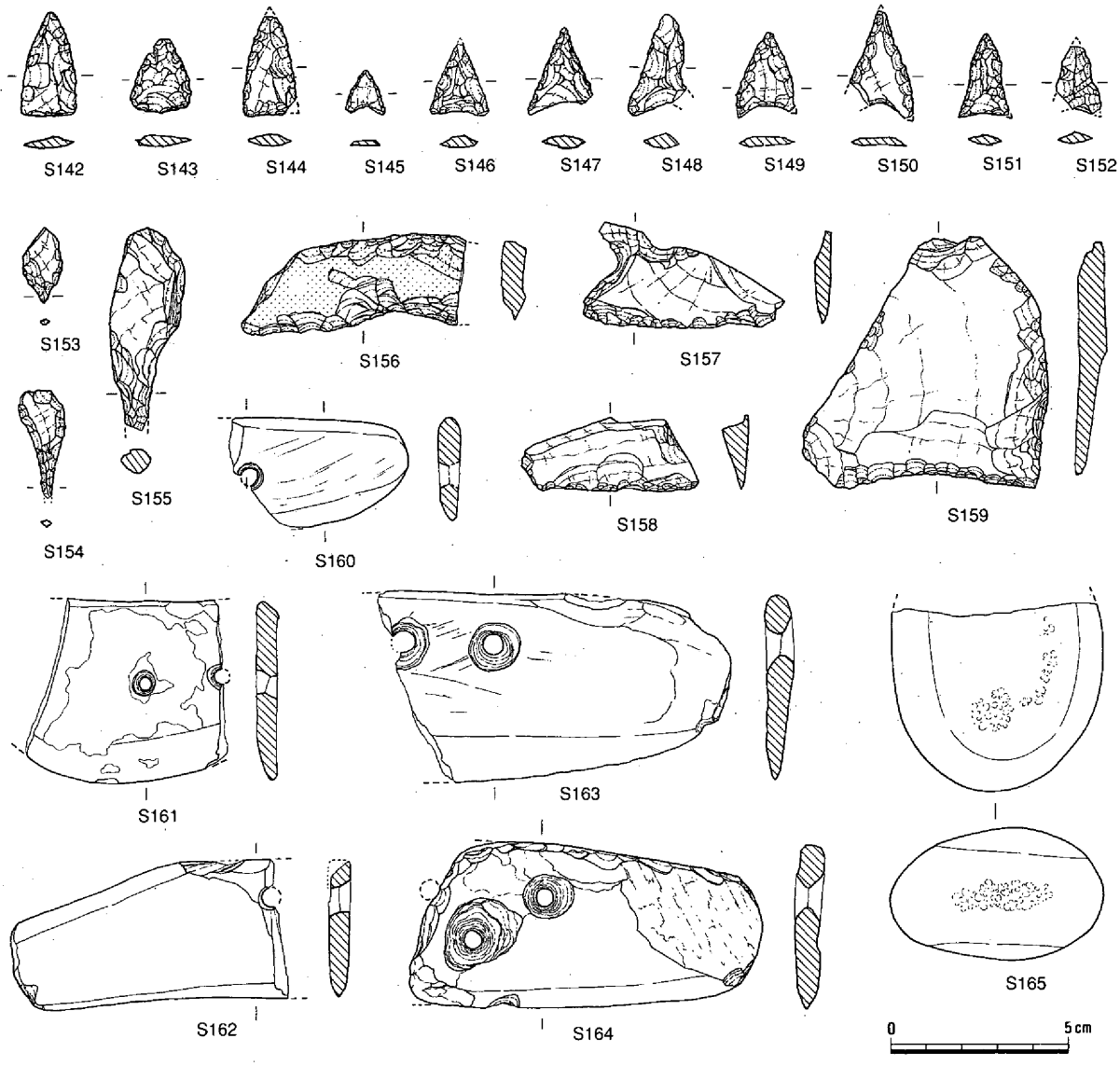
本館６－２区から本館２区、本館３区にかけて流れる溝である。本館６－２区では、溝の東肩から底部にかけての一部を検出したに過ぎない。断面観察（断面Ａ）によれば、数回の溝の改修を行っていることがうかがえる。遺物は底部付近からの出土が顕著で、弥生土器や石器が比較的多く出土しているが、いずれも小破片である。　（尾上）



第158図　溝53〈A～E〉断面



第159図　溝53出土遺物（1）

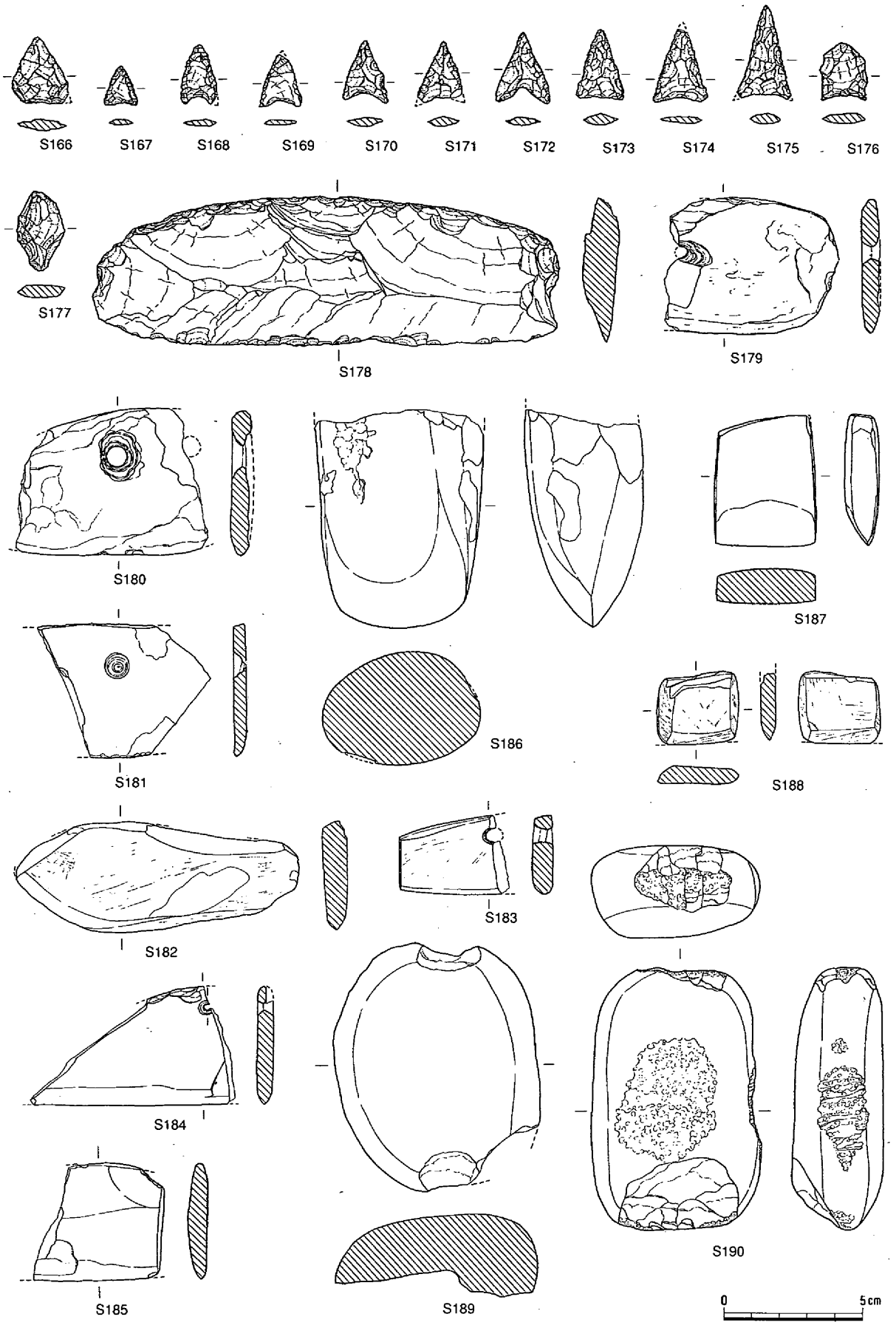


第160図　溝53出土遺物（2）〈上流部〉

本館２区における溝53は、17Ｌ区から22Ｊ区にかけて、調査区のほぼ中央付近を南流している。溝の幅は北側で約12m、南側で約４～５ｍを測る。溝の南側は、上面に比較的新しいたわみが存在したために溝の肩が削られていたので検出できなかったが、調査区の北側同様の幅を有していたものと推定される。

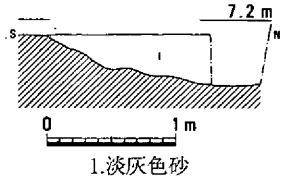
埋土は灰黒色を中心とした砂質土で、底の部分からは多くの親指大の小石とともに弥生時代前期の土器の底部や石器が多く出土している。また共伴する土製品に土器片を転用した紡錘車（Ｃ３・４）がある。　（根木）

本館３区の中央を北東から南西方向に流走する溝で、北東側は本館６区、南西側は水路３区の溝とつながる。形状は残存状態にもよるが、北側は幅が狭く、南側に向かって徐々に拡がり、溝55と接続する場所は瘤状に膨れている。規模は最も幅の狭い北東端で280cm、最も広い溝55の取り付き部で785cm、深さは前者が47cm、後者は51cmを測る。埋土はほぼ３層に分かれるが、遺物の多くは下層、とりわけ底面に貼りつくように土器の細片が認められた。出土した土器は前期Ⅲから中期Ⅰまで認められ



第161図　溝53出土遺物（3）〈下流部〉

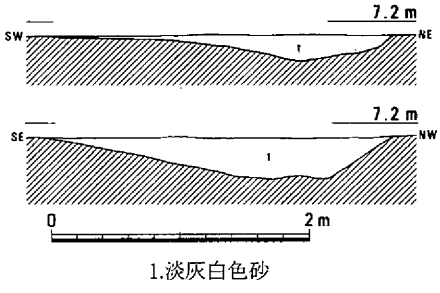
る。石器は石鏃（Ｓ166～Ｓ177）、石包丁（Ｓ178～Ｓ185）を中心に、磨製石斧（Ｓ186）、扁平片刃石斧（Ｓ187・Ｓ188）、石錘（Ｓ189）、敲石（Ｓ190）等が出土した。この内、石包丁に磨製の多いことが注目される。溝の廃絶時期は、土器の示す中期Ｉと考えられる。　（平井勝）



第162図　溝54断面

溝54（第62・162図）

本館３区の北西端に位置するが、北側は調査区外になるため、形状は明確でない。このため、溝であるかどうかの確証はなく、大きな土壙であるかもしれない。南北の断面を見ると、北側に向かって緩やかに下がっていき、北端で平坦になることから、この辺りが溝の中心と思われる。遺構の時期は弥生時代と推定される。　（平井勝）



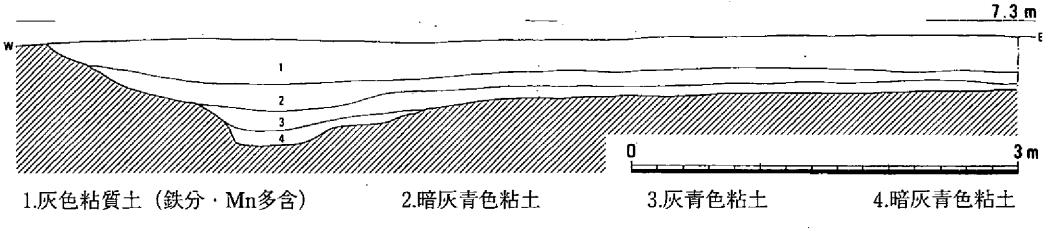
第163図　溝55断面

溝55（第62・163図）

本館３区の南端で検出された溝で、溝53が瘤状に膨らむ場所に取り付くものと考えられる。溝53から東側は、南東に向かい水路３まで延びる。西側は南西に向かって延びると思われるが、水路３区では検出し得なかった。おそらく溝53の下流側を堰止め水位を上げ、溝55に流していたと推定される。　（平井勝）

溝56（第62・164図、図版32－１）

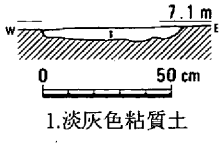
水路３区で検出した溝であるが、調査の過程で湧水が多く検出は困難を極めたため、明確さに欠ける。北側は本館３区に向かって延びるものと思われるが、本館３区でその痕跡を検出することは出来なかった。また、南側は東側に大きく拡がっていることなどから、たわみとも思える。　（平井勝）



第164図　溝56断面

溝57（第62・165図）

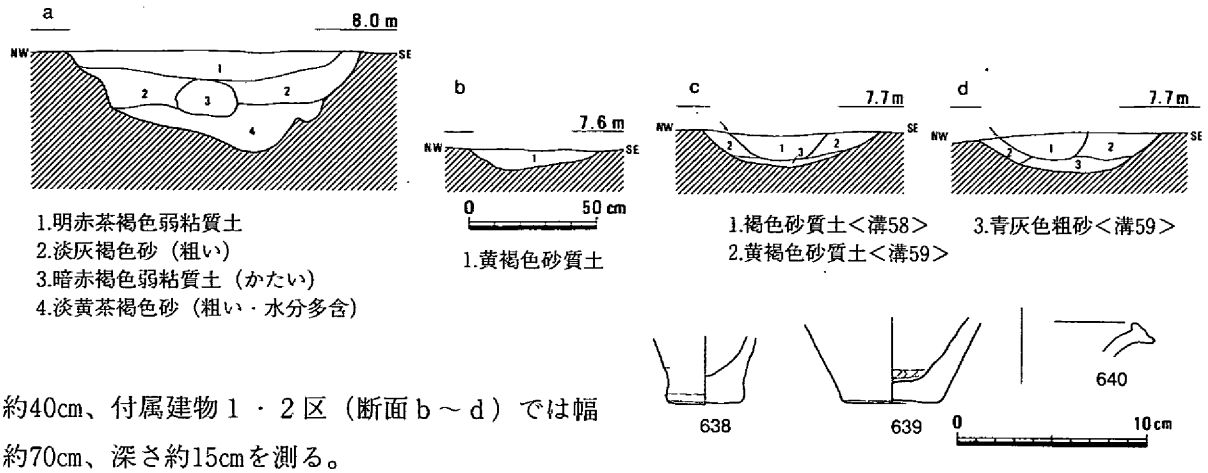
水路３区の西寄り、溝53と一部重なって検出した溝であるが、湧水が著しく検出に困難を極めたことから、明確でない部分もある。規模は幅58cm、深さ５cmを測る。溝の北側は本館３区へ延びると思われるが、その痕跡は検出されなかった。　（平井勝）



第165図　溝57断面

溝58・59（第62・101・166図、図版32－２・34－１）

付属建物１・２区および水路２区において、北東から南西の方向に直線的に検出された溝である。時期差をもつと考えられる２条の溝が重複しており、新しい方を溝58、古い方を溝59とした。溝の底面のレベルは付属建物１・２区よりも水路２区の方が浅いため、北東から南西に向けて流れていた溝と考えられる。溝58は、水路２区（断面ａ）では幅約100cm、深さ約10cm、付属建物１・２区（断面ｂ～ｄ）では幅約30～40cm、深さ約10cmを測る。溝59は、水路２区（断面ａ）では幅約110cm、深さ



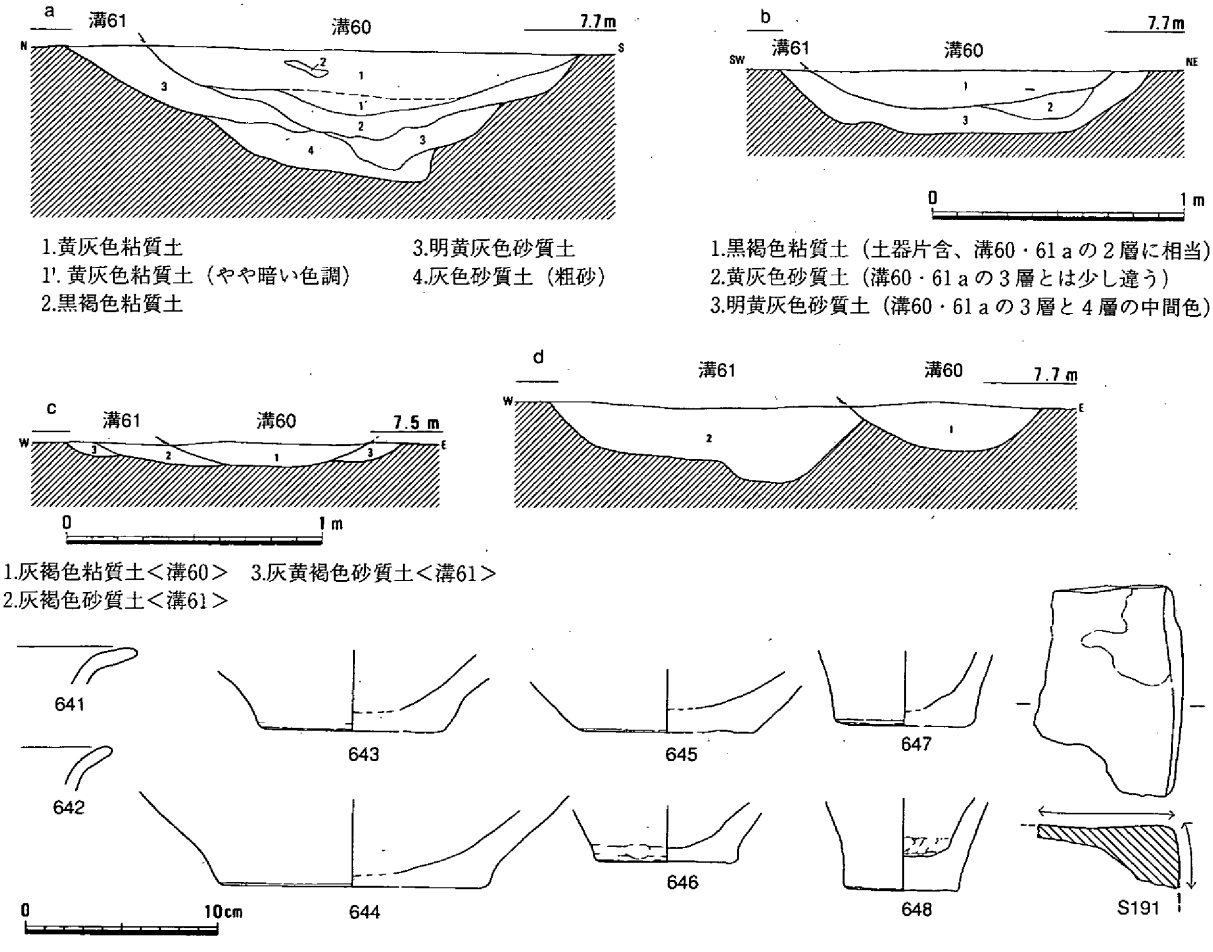
第166図　溝58・59断面、同出土遺物

約40cm、付属建物１・２区（断面ｂ～ｄ）では幅約70cm、深さ約15cmを測る。

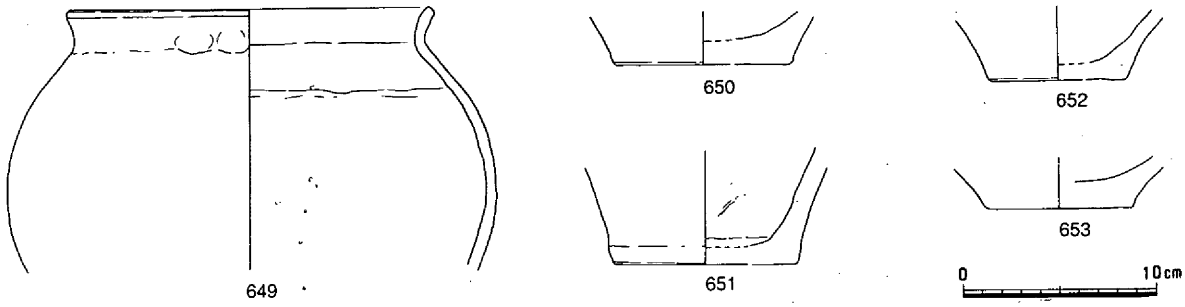
出土遺物は少ないが、弥生時代中期後葉と考えられる土器片が出土している。　（尾上）

溝60・61（第62・101・167・168図、図版32－２・３）

付属建物１区、本館７区で検出された、大きく蛇行する溝である。時期差をもつと考えられる２条の溝が重複しており、新しい方を溝60、古い方を溝61とした。両者はほぼ同じ位置を流れているが、溝61のみ途中で分岐している。他の溝と同じく北東から南東方向に流れをもっていると考えられる。遺物は、弥生時代前期の壷や甕の破片が比較的多く出土している。　（尾上）



第167図　溝60・61断面、　溝60出土遺物



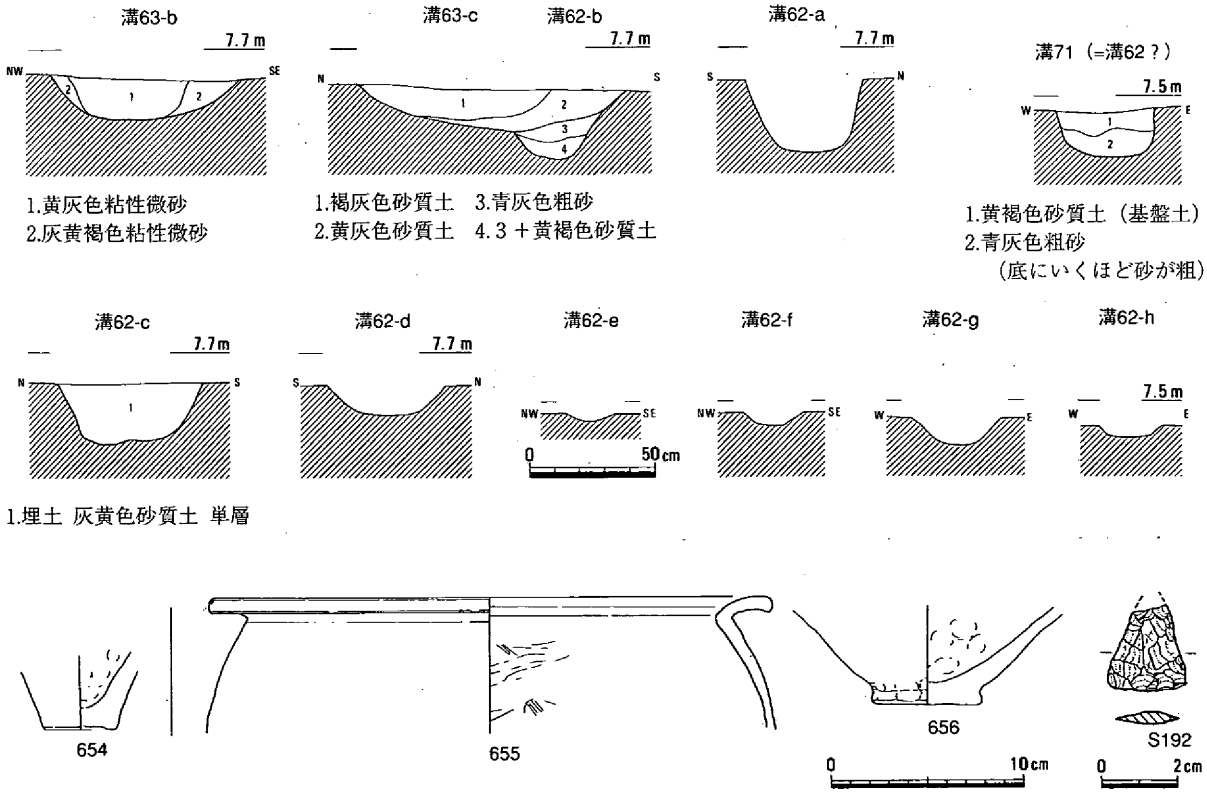
第168図　溝61出土遺物

本館６区に至ると流路は南向きに屈曲を始め、そのまま水路３区へ流下していく。この地区では両溝はほとんど同じ流路をとるため識別困難であったが、先行する溝61のほうが幅・深さともにやや増す傾向がある。遺物は、弥生時代前期の土器が出土している。（岡本）

溝62・63（第62・101・169図、図版33・68）

付属建物１・２区、本館７区で検出された溝である。時期差をもつ２条の溝が重複しており、新しい方を溝63、古い方を溝62としている。両者はほぼ同じ位置を流れているが、北東部では分岐しており、溝63ではさらに新古２条の溝が認められる。これらの切り合い関係は付属建物２区のみで確認できた。溝62・63ともに、幅40～60cm、深さ15～30cm程度の規模をもっている。溝の流れは、溝底面のレベルから判断して、他の溝と同じく北東から南東方向へと考えられる。

出土遺物は少ないが、弥生時代中期中葉と考えられる土器片のほか、サヌカイト製の石鏃（Ｓ192）などが出土している。なお、溝62は溝71につながる可能性がある。（尾上）

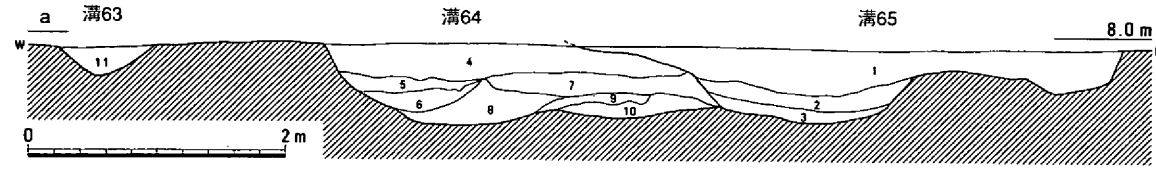


第169図　溝62・63・71断面、同出土遺物

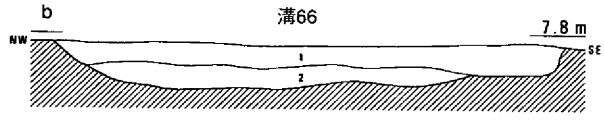
溝64（第101・170・172～174図、巻頭図版２－１、図版34－１・35－１・68・69・71・72・74～77）

水路２区から付属建物２区を経て、浄化槽区に至る溝である。北端の水路２区では、16Ｐ区から18Ｐ区にかけて南流する。幅は約４ｍ、深さ50～80cmを測る。上流部分では後述の溝65に切られており、下流部では溝66を切っている。時期は弥生時代前期末から中期初頭の土器片が多量に出土しているものの、後期の土器も散見されることから廃絶の時期は弥生時代後期後半と考えられる。　（根木）

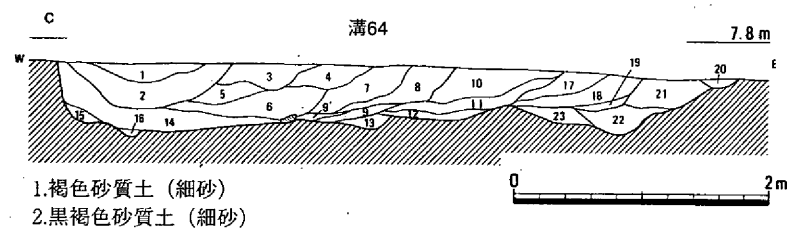
付属建物２区では、調査区の南東部において検出された。断面観察によると、その幅や位置を若干変えながら、埋没、掘削を繰り返したようである。出土遺物は、土器のほかに石器も多く、石鏃（Ｓ



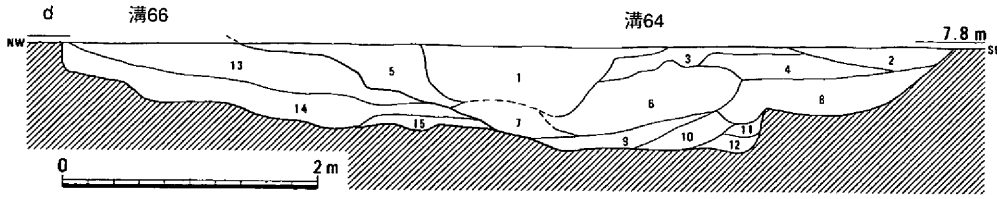
1.暗褐色土
2.暗灰褐色粘質土
3.暗灰色粗砂
4.淡褐色砂質土
5.黒褐色粗砂
6.暗黄褐色砂質土（粗砂）
7.褐色砂質土
8.淡褐灰色粗砂
9.暗黄褐色砂
10.淡褐灰色粗砂
11.淡褐色砂質土



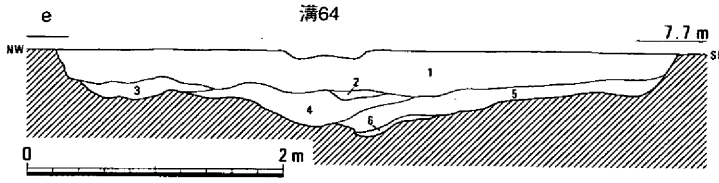
1.淡黒褐色砂質土層（粗砂多含）
2.淡灰白色砂層（粗砂含）



1.褐色砂質土（細砂）
2.黒褐色砂質土（細砂）
3.褐色砂質土（細砂）、１層に類似
4.褐色～黄橙色砂質土（微砂）
5.暗褐色砂質土（粗砂）
6.暗灰色砂質土（粗砂および細砂）
7.黄褐色～灰色砂質土（微砂）
8.褐色砂質土（微砂）
9.黄白色砂質土（微砂）
9'.黄橙色砂質土（細砂）
10.黒褐色砂質土（細砂）
11.黒褐色～灰色砂質土（細砂）
12.灰色砂質土（粗砂）
13.暗灰色砂質土（粗砂）
14.褐灰色砂質土（粗砂）、間に数条褐色砂質土（細砂）層入る
15.灰褐色砂質土（粗砂）
16.青灰色砂質土（粗砂）
17.褐色砂質土（細砂）、１層に類似
18.明黄色褐色砂質土（細砂）
19.明灰色砂質土（細砂）
20.灰色砂質土（粗砂）
21.褐色砂質土（細砂）、17層に類似
22.灰色砂質土（粗砂）
23.灰褐色砂質土（粗砂）

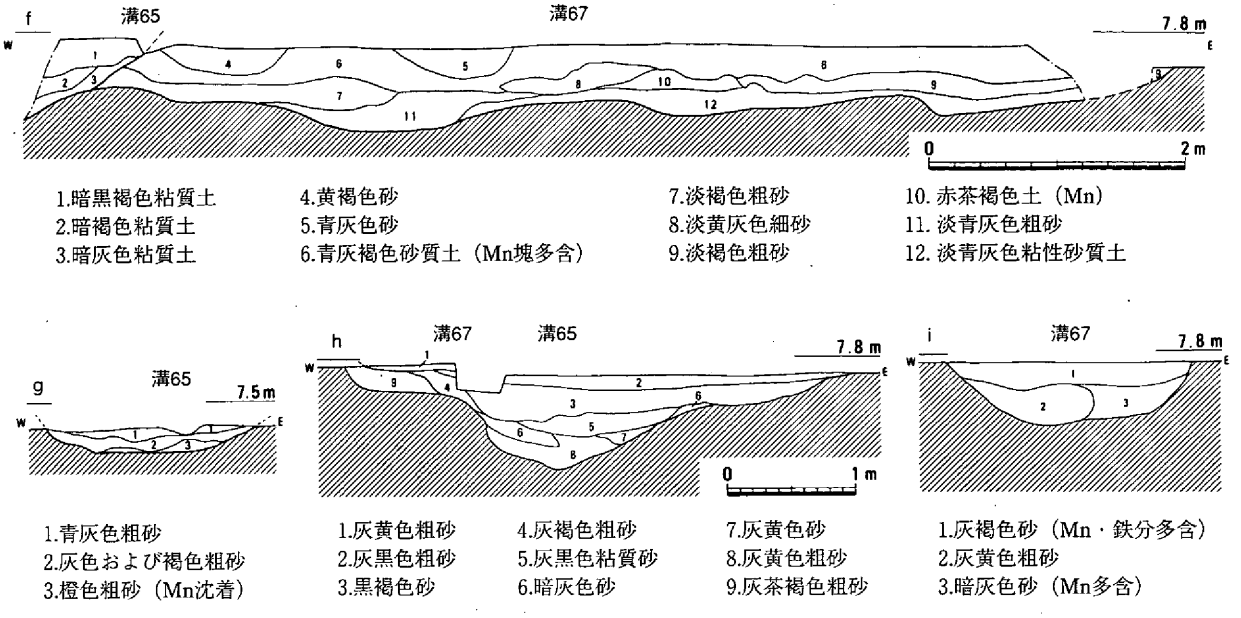


1.暗褐色（Mn多含）粗砂
2.茶灰色粗砂（鉄分・Mn含）
3.黄灰色粗砂（鉄分・Mn含）
4.暗茶灰色砂（Mn多含）
5.茶灰色砂（鉄分・Mn含）
6.褐色礫層（３～８mm大）
7.明灰色砂
8.灰色砂（Mn含）
9.茶灰色粘質砂
10.褐色粗砂
11.灰色粘質砂
12.赤褐色粗砂
13.灰色砂（Mn多含）
14.淡灰色砂（炭含）
15.暗灰色粘質砂（炭含）



1.灰黄色粗砂（Mn多含）
2.灰白色砂
3.淡灰黄色砂
4.灰褐色粗砂
5.灰白色砂＜溝66＞
6.暗灰色粗砂＜〃＞

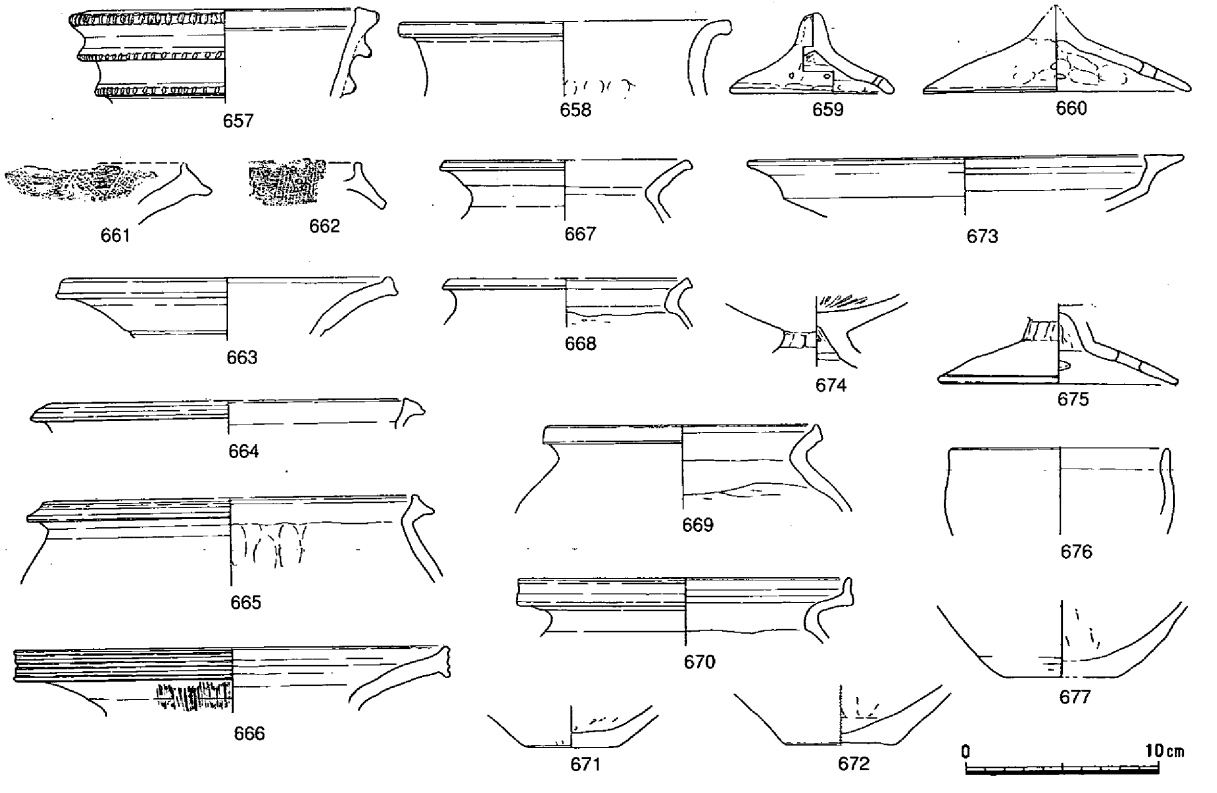
第170図　溝63～66〈ａ～ｅ〉断面



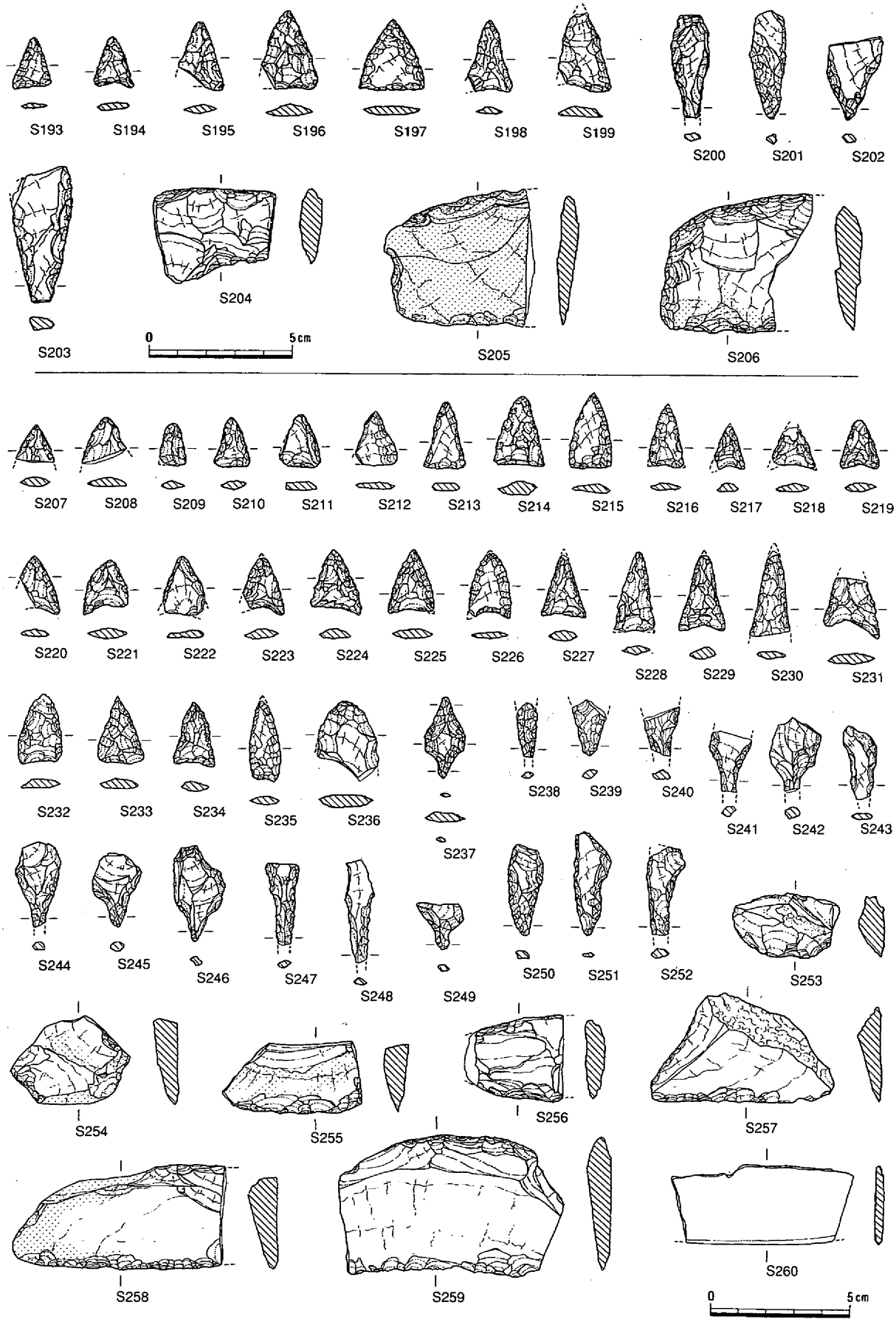
第171図　溝65・67〈ｆ～ｉ〉断面

207～236)、石錐(S237～252)、スクレイパー(S253～259)のほか、玉切りの石鋸と思われる石器(S260)が出土している。石器の石材はほとんどがサヌカイトであるが、S260のみ紅簾片岩である。(尾上)

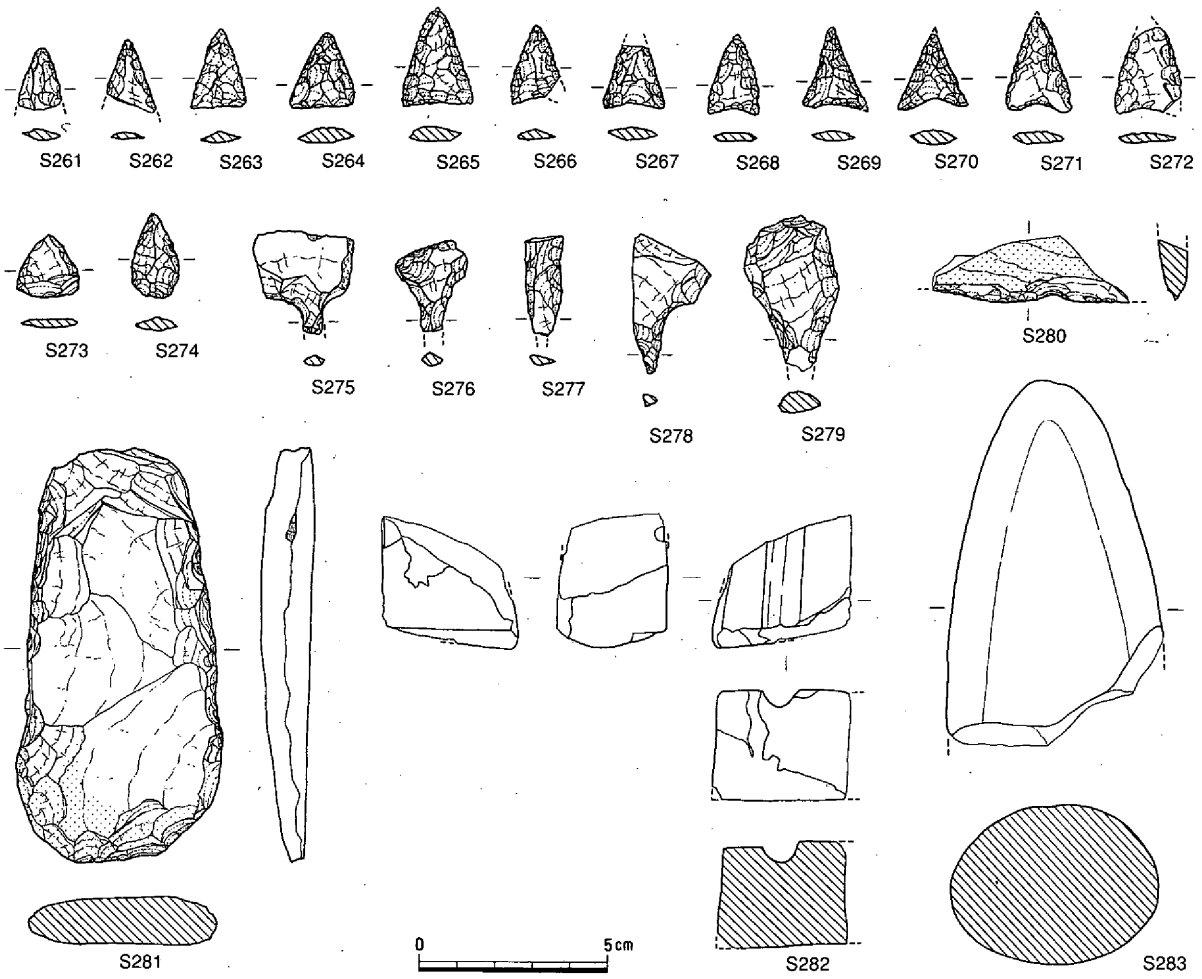
浄化槽区で検出された溝で、北側は付属建物２区および水路２－１区の溝とつながり、全体としてほぼ北東から南西方向に多少蛇行しながら流走する。底面には数条の凹が認められることから、底さらえないし掘り直しが繰り返されたものと思われる。遺物は土器と石器が出土した。土器は中期Ⅱか



第172図　溝64出土遺物（1）



第173図　溝64出土遺物（2）〈上：水路２区・下：付属建物２区〉



第174図　溝64出土遺物（3）〈浄化槽区〉

ら後期Ⅲまでの幅をもつ。石器は石鏃（Ｓ261～Ｓ274）、石錐（Ｓ275～Ｓ279）、石包丁（Ｓ280）、石鍬（Ｓ281）、銅剣鋳型の可能性のある有溝砥石（Ｓ282）、磨製石斧（Ｓ283）がある。　（平井勝）

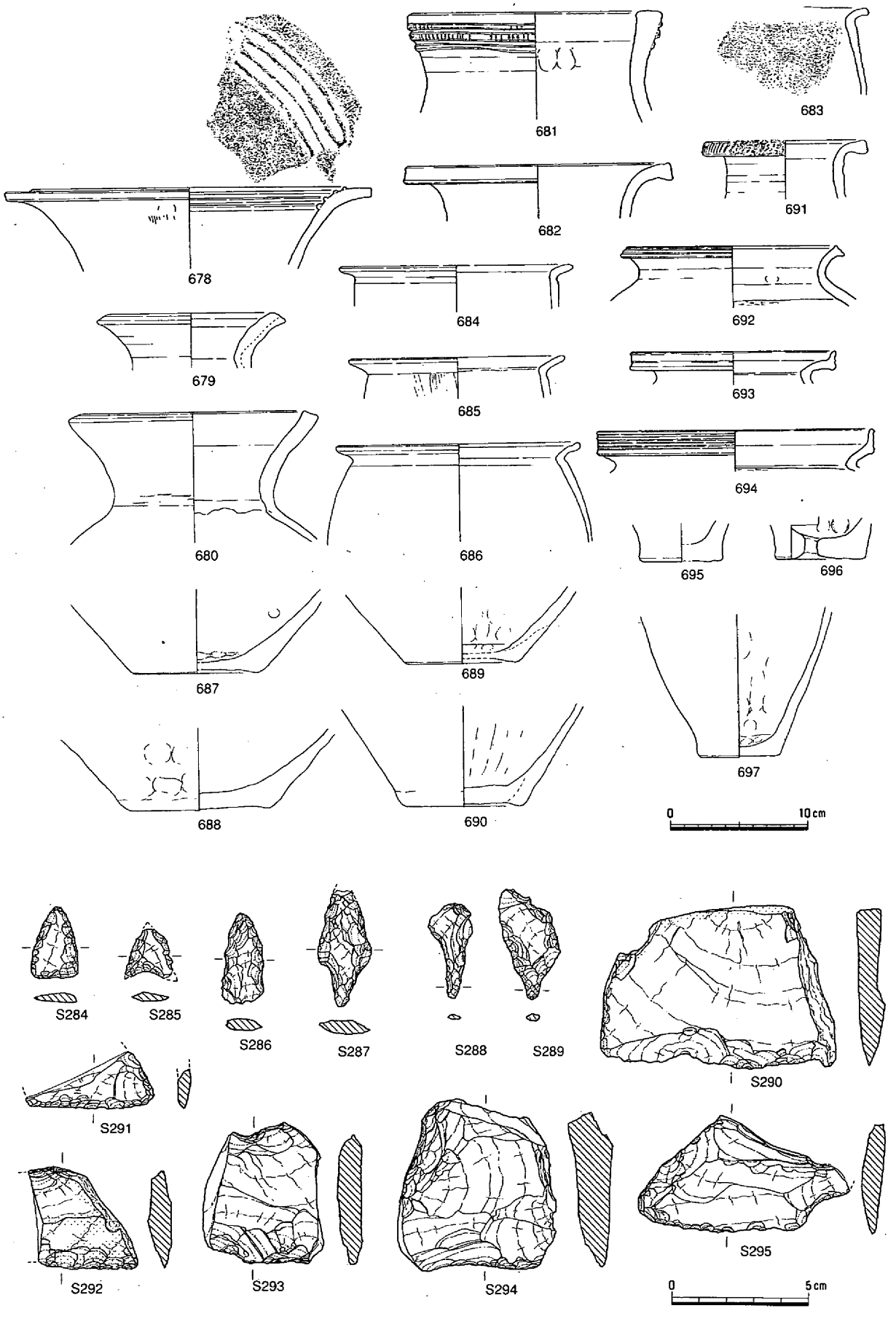
溝65（第101・170・171・175・176図、図版34・35－２・69・70・72・75・78）

溝65は、水路２区では16Ｐ区から19Ｐ区にかけて南流する溝である。上流部では、北側に並流する溝64・66を、また南側では溝68を切っている。溝は緩やかに掘り込まれており、底部が部分的に１段深くなっている。

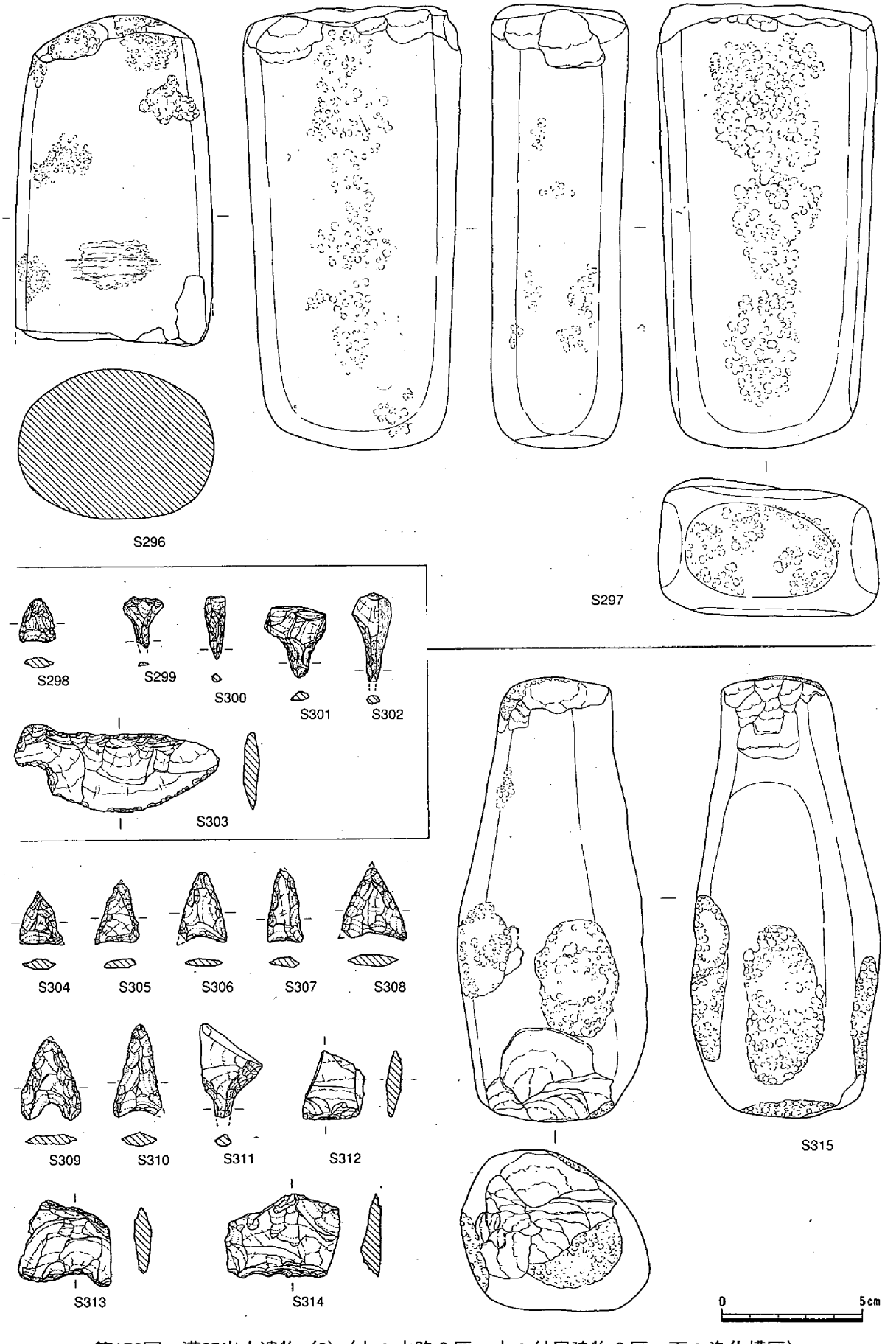
出土した土器は、埋没の時期差によって上層と下層に分けられる。上層からは図示をしていないが、弥生時代中期中頃の土器が、下層からは弥生時代前期末～中期初頭の土器が比較的多く出土している。溝65が溝として機能した時期は、弥生時代後期の溝64を切っていることや、出土した土器片から弥生時代後期後葉が考えられる。　（根木）

付属建物２区では、調査区の南東隅にごく一部が検出されたに過ぎない。出土土器には広い時期幅があり、中期中葉から後期後葉のものまである。また、サヌカイト製の石器も出土しており、石鏃（Ｓ298）、石錐（Ｓ299～302）、石匙（Ｓ303）がある。　（尾上）

浄化槽区の東端で検出された溝で、北側は付属建物２区から水路２－１区へと延びる。全体としては多少蛇行しながらほぼ南北に流走する。溝は比較的緩やかに掘り込まれ、中央はさらに１段深く掘



第175図　溝65出土遺物（1）〈石器：水路２区〉

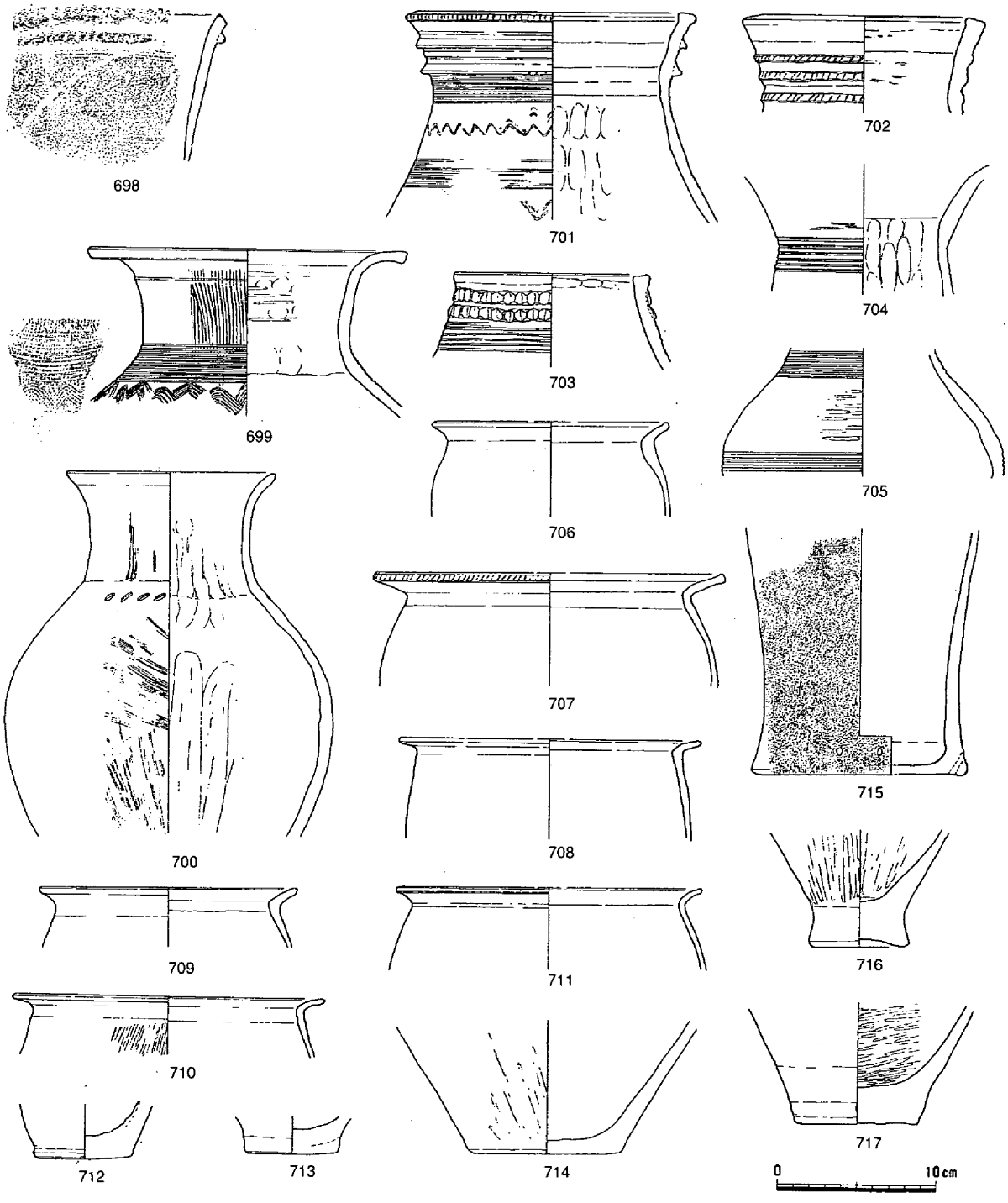


第176図　溝65出土遺物（2）〈上：水路２区・中：付属建物２区・下：浄化槽区〉

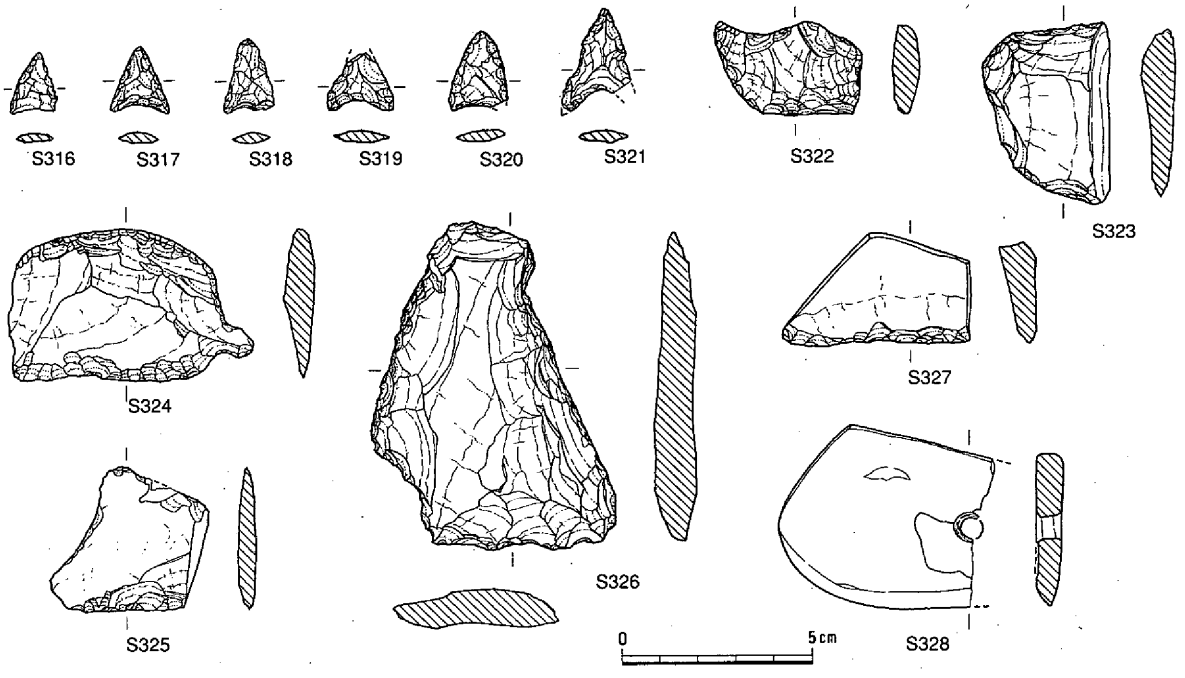
り下げられている。規模は幅350cm前後、深さ70cm前後を測る。遺物は土器と石器が出土した。この内土器は前期Ⅲから中期Ⅱ、そして後期Ⅳと幅広い時期のものが認められる。石器は石鏃（Ｓ304)、石錐（Ｓ311)、スクレイパー（Ｓ312～Ｓ314)、敲石（Ｓ315）が出土した。　（平井勝）

溝66（第101・170・177・178図、図版35・70・73・75)

水路２区の南端から付属建物２区にかけて南流する溝である。流路は、ほぼ前述の溝64に並行、もしくは同一地点を幹流している。溝の規模は上流部で幅約3.9m、深さは約30cmであり、下流部では幅約4.8m、深さは約70cmを測る。埋土は粗砂を多く含み、下層付近から多くの土器片や石器が出土



第177図　溝66出土遺物（1）



第178図　溝66出土遺物（2）

している。遺物は弥生時代中期の中頃を中心に出土している。そのうち古相の土器では、甕の口縁部に突帯が伴う701・702や、胴部に櫛描平行文を施して底部には２ヶ所に２つの穿孔を持つ鉢715等が見られる。時期は下流部で溝64に切られていることや出土遺物から、弥生時代中期前葉～中期中頃の範疇に入るものと考えられる。（根木）

浄化槽区をほぼ北東から南西方向に大きく蛇行しながら流走する溝で、南西側は水路３区へ、北東側は付属建物２区から水路２－１区に延びる。溝64と重なる部分が多く、西側に張り出した蛇行部がわずかに残る。遺物は土器と石器が出土した。土器は多くはないが、中期Ⅱと考えられる壺と甕、ジョッキ形の鉢がみられる。石器は石鏃（Ｓ316～Ｓ321）、スクレイパー（Ｓ322・Ｓ323・Ｓ325・Ｓ327）、石匙（Ｓ324・Ｓ326）、石包丁（Ｓ328）があるが、Ｓ323・Ｓ327は石包丁の可能性もある。（平井勝）

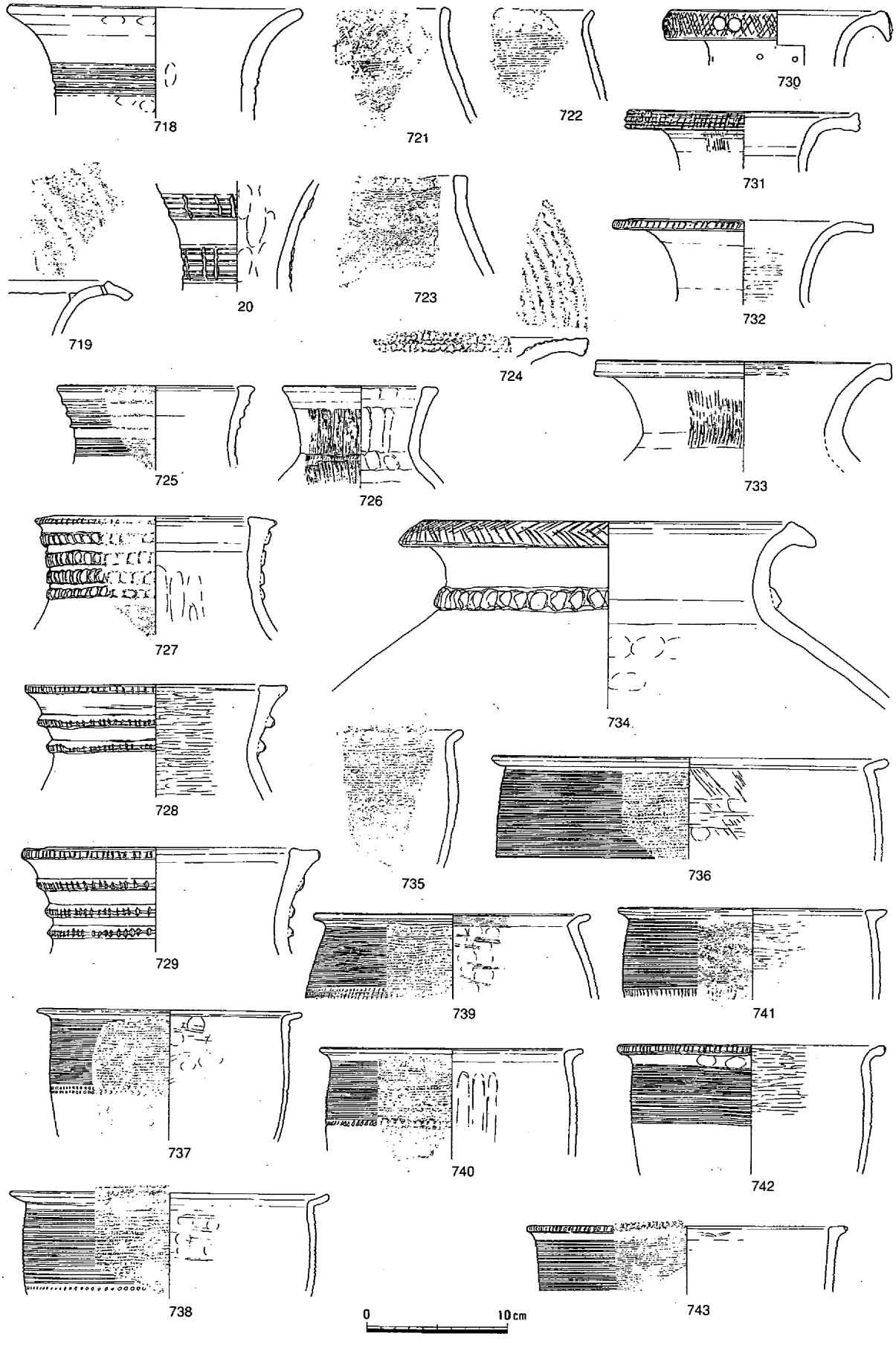
溝67（第101・179～181図、図版35－２・63・70・72～77）

溝67は水路２区の南東部で検出されて、南側の浄化槽区に至る溝である。調査区の東側からほぼ南に向かって流走するこの溝は、西側の肩部を溝65、66に切られていた。

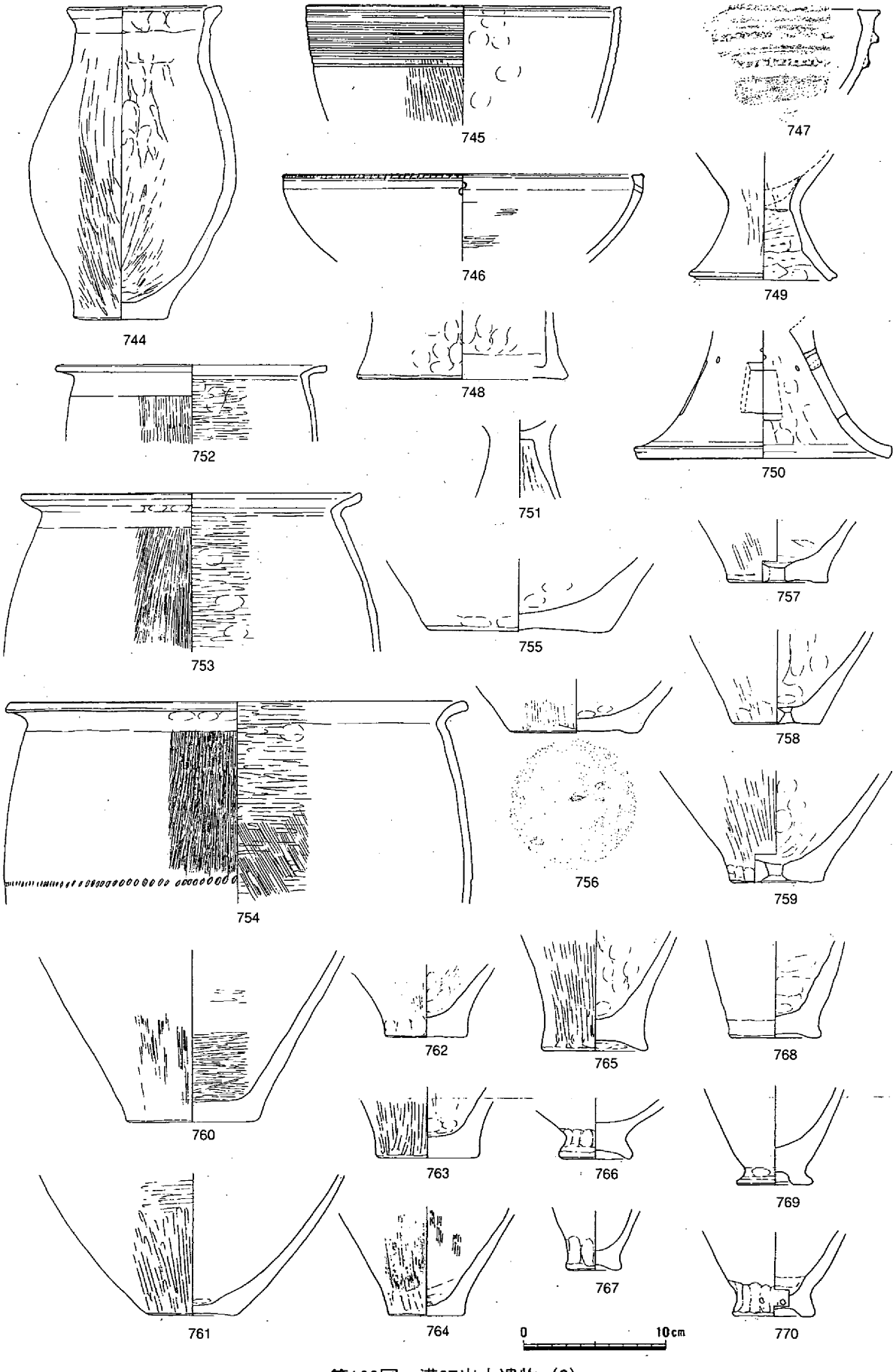
溝の底部は他の溝のように一定ではなく、かなりデコボコした状態が観察できた。埋土は上層と下層に大別され、上層では粘質土を中心とした比較的安定した堆積の状態が、また下層は水分を多分に含んだ砂礫層が全般に亙って確認された。

遺物は主に下層部分から弥生時代前期末～中期中頃の土器片を中心として、コンテナで20箱前後出土している。出土した遺物の構成は、土器では総じて壺と甕が最も多く、続いて鉢や高杯などの細片が若干出土している。出土した遺物の量も北側に多く、南側に少ないことから、調査区外の東側に微高地の存在が想定される。（根木）

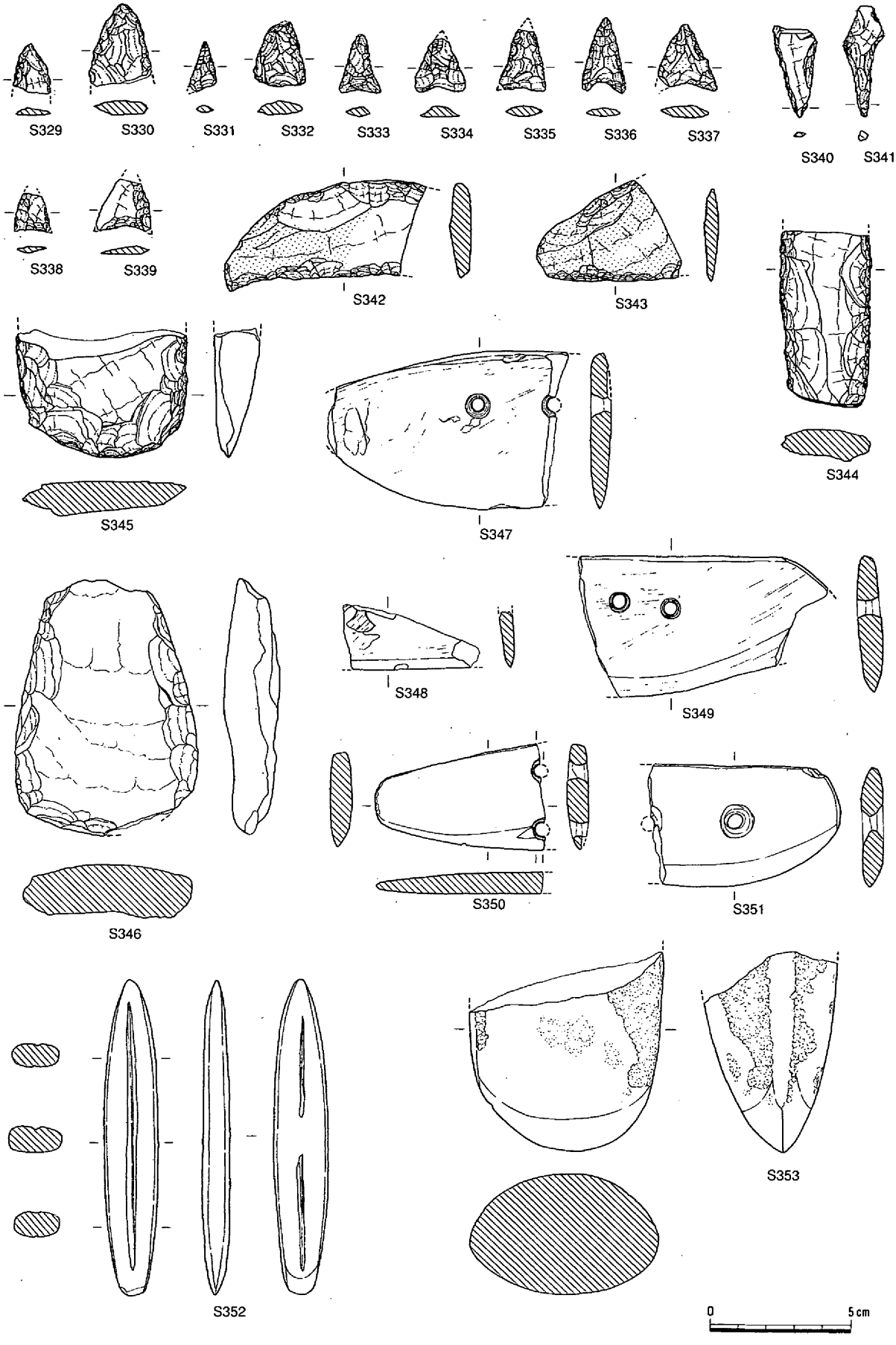
浄化槽区の南東端から水路３区で検出された溝で、北半は溝65に切られており、残る南半が溝65と平行して流走する。溝は水路３区から調査区外へ延びるものと推定され、北側は水路２－１区の溝とつながることから、多少蛇行しながらほぼ南北方向に流走するものと考えられる。規模は幅200cm前



第179図　溝67出土遺物（1）



第180図　溝67出土遺物（2）

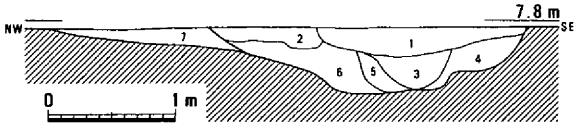


第181図　溝67出土遺物（3）

後、深さ50cm前後を測る。遺物は水路２－１区に比べると少ないが、土器と石器が出土した。土器は中期Ⅰが主体をなすが、前期Ⅲや中期Ⅱも認められる。石器では石鏃（Ｓ329～Ｓ339)、石錐（Ｓ340～Ｓ341)、石包丁（Ｓ342・Ｓ343・Ｓ347～Ｓ351)、石鍬（Ｓ345・Ｓ346)、石槍（Ｓ344)、磨製石斧（Ｓ353)、ノミ状石斧（Ｓ352）が出土した。溝の廃絶時期は中期Ⅱと考えられる。　（平井勝）

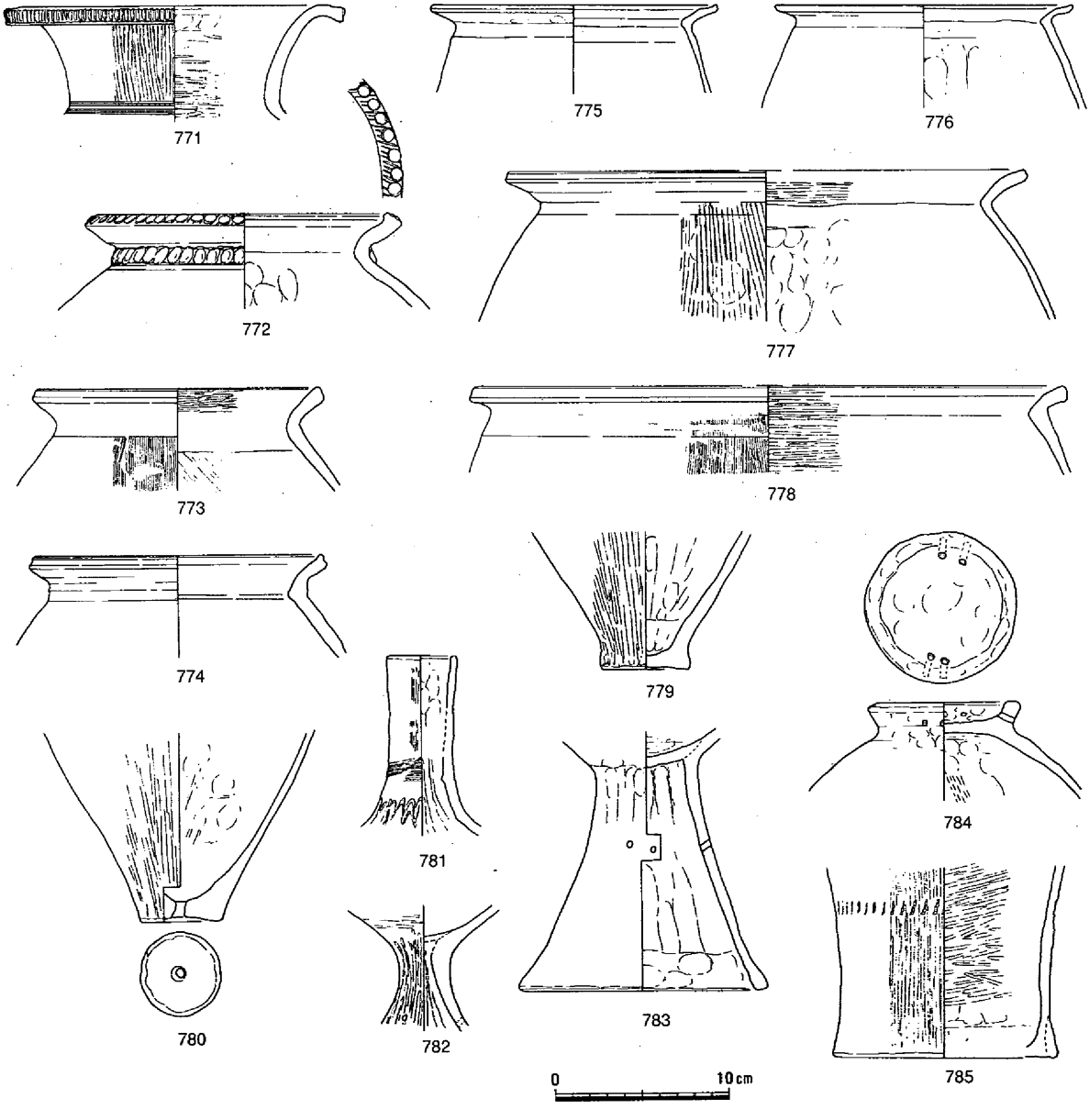
溝68（第101・183・184図、図版35・70・76）

浄化槽区から水路３区にかけて検出された溝で、南側は調査区外へ、北側は水路２－１区へ延びる。全体的には多少蛇行しながら北東から南西方向に流走する。溝65との関係は明確でないが、溝65に切られているものと考えられた。規模は幅300cm前後、深さ50cm前後を測る。

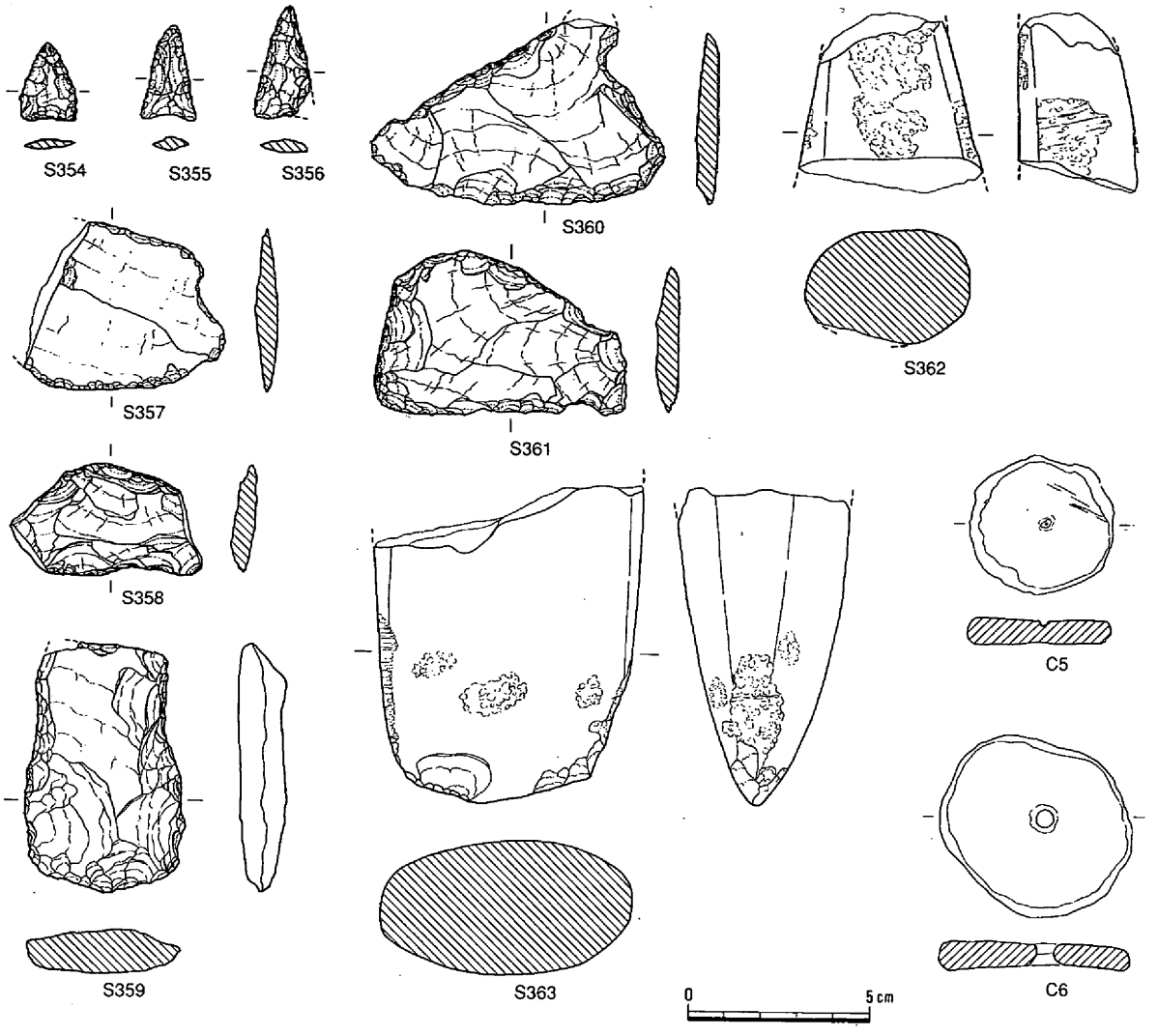


1.灰茶色粗砂（鉄分・Mn含）
2.灰色粗砂（鉄分・Mn含）
3.茶灰色粗砂（Mn多含）
4.暗灰色粗砂（Mn多含）
5.黒褐色粗砂（Mn多含）
6.灰白色粗砂（Mn多含）
7.灰白色粗砂（鉄分・Mn含）

第182図　溝68断面



第183図　溝68出土遺物（1）



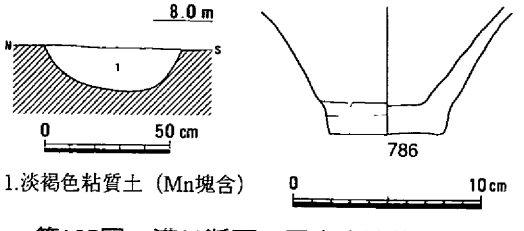
第184図　溝68出土遺物（２）

遺物は土器と石器、および土製品が出土した。土器には壺、甕、高杯、鉢などの器種が認められる。壺は771のように頸部が長くラッパ状に開き、口縁部は端部がやや下がり気味になるように強く外反するものと、781のように細長く立ち上がる口頸部をもつものとがある。甕はすべて口縁部がくの字状に外反するものであるが、形状や文様の有無などで775～778と772～774は異なる。784は蓋と考えられるもので、２個１対の円孔が２箇所に穿たれている。785はジョッキ状の鉢で、胴部には櫛状工具による刺突文がめぐる。これらの土器は中期Ⅱおよび中期Ⅲのものが混在しているが、溝の廃絶時期は中期Ⅲと思われる。石器は石鏃、石包丁、削器、石鍬、石匙、太形蛤刃石斧がある。土製品はいずれも土器片利用の紡錘車であるが、Ｃ５はその未製品である。（平井勝）

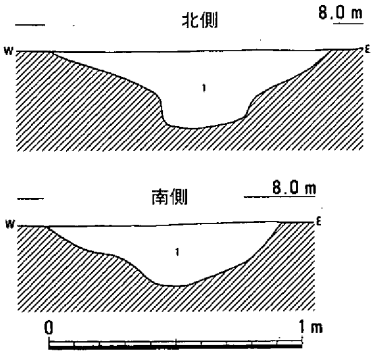
溝69（第101・185図）

水路２区の北側、16Ｐ区に位置する溝である。幅は約55cm、深さは約15cmを測る。

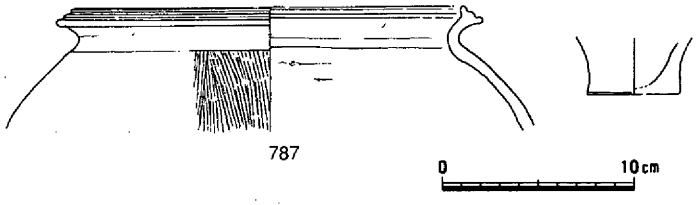
遺物は僅かで、甕もしくは鉢の底部（786）が唯一図示できたものである。時期は、出土遺物から弥生時代前期の後半が考えられる。（根木）



第185図　溝69断面、同出土遺物



1.暗褐色土



第186図　溝70断面、同出土遺物

溝70（第101・186図）

水路２区の南側、17Ｐ区から18Ｐ区にかけて検出された南北方向に流走し、調査区外へ達する溝である。北側で溝65に切られ、溝66を切っている。規模は幅と深さが、北側は約110cmと約30cmで、南側では約90cmと約25cmを測る。

遺物は、図示した甕の口縁部787や底部788とともに若干の遺物が出土している。溝の機能した時期は、出土した遺物や埋土の状況から弥生時代中期後半と思われる。（根木）

溝71（第101・169図）

付属建物２区の東端で検出された溝であり、溝64・66によって切られている。幅約40cm、深さ約20cmを測り、埋土の土質の共通性や溝底面のレベルから、溝62につながると考えられる。遺物は出土していないが、溝62と同じく弥生時代中期と推定される。（尾上）

溝72（第101・187図）

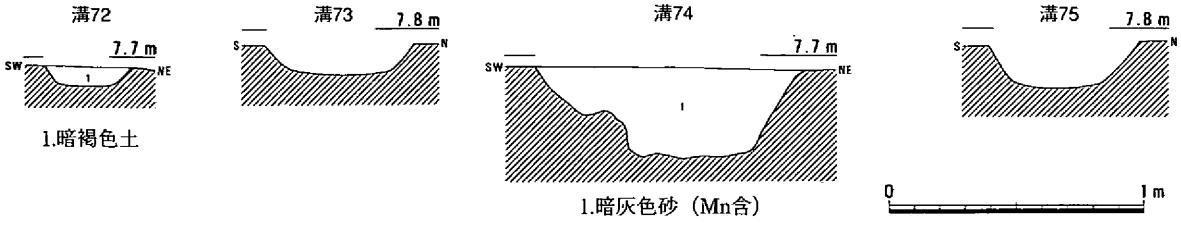
水路２区の南端部、19Ｐ区で検出された全長８ｍほどの溝である。規模は幅約35cm、深さが約10cm弱を測る。遺物が出土していないことから時期の特定は困難だが、溝65に切られていることから弥生時代後期中頃以前であること以外、明らかではない。（根木）

溝73・74・75（第101・187図）

溝73は浄化槽区の北東部で検出された長さ５ｍあまりの細い溝で、東端は溝68に切られている。規模は幅150cm前後、深さ10cm前後を測る。埋土は灰色微砂である。時期は溝68より古いと言う意外は明らかにし得ない。

溝74は浄化槽区の南東端から水路３区の東端で検出された溝で、途中を溝65・67に切られている。溝65・67の西側はほぼ東西に流走するが、４ｍあまりで途切れ、東側は北西から南方向に流走し、調査区外へ延びる。規模は幅100cm前後、深さ40cm前後を測る。

溝75は水路３区の東端近くで検出された溝で、東端は溝67に切られている。時期は、埋土が暗灰色砂であることや、溝65・67との関係から、溝74同様、前期から中期の中に求められる。（平井勝）



第187図　溝72～75断面

(4)　た　わ　み

たわみ２・３（第60・188図、図版42－２）

たわみ２は水路５区の東半部に位置する。平面形は12×３ｍほどの不整長方形状を呈し、深さは最深部でも約10cm残存していたにすぎない。底面には多くの凹凸が認められた。溝20にきられており、時期は弥生時代と考えている。たわみ３は宿舎区の西半部に位置する。平面形は一部幅約１ｍの溝状を呈し、深さは最深部でも約15cmを測るにすぎない。埋土は灰白色の微砂・細砂であった。時期は弥生時代と考えているが、明確ではない。（平井泰）

たわみ４（第101・188図、図版36－１・２）

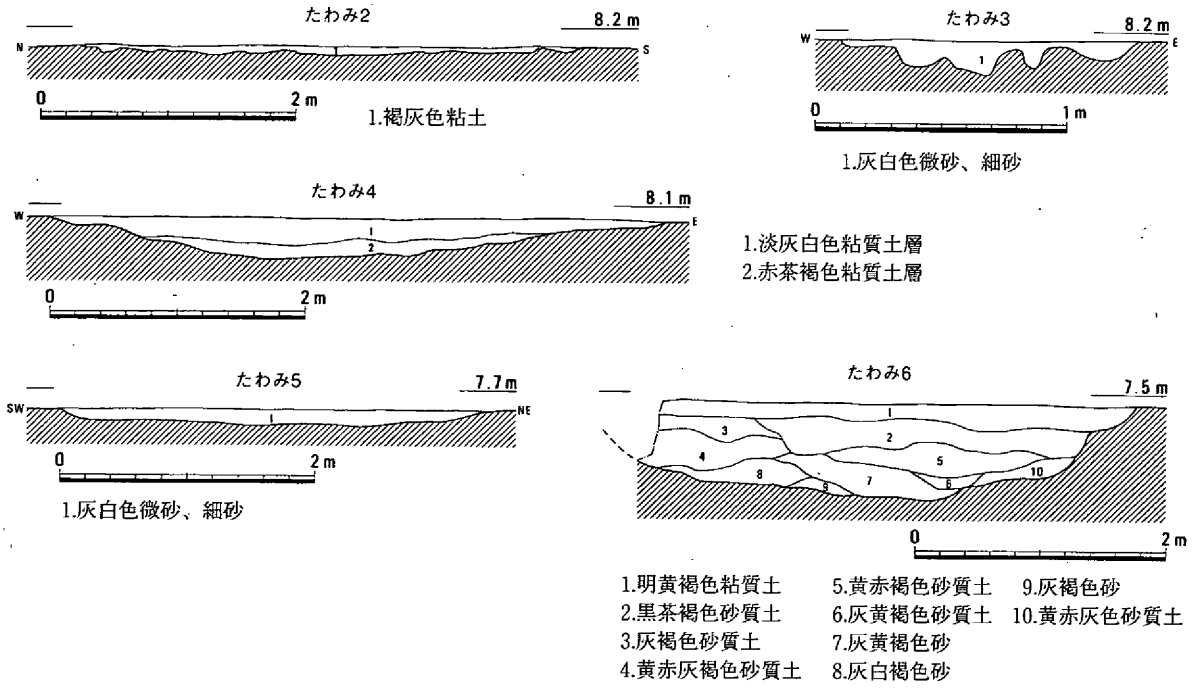
水路２区最北端の南に向かって下がる微高地の端部で検出された溝状のたわみである。緩やかに調査区内を南北方向に蛇行するような形態で検出された。規模は幅約480cm、深さ約30cmを測る。埋土は淡灰白色・赤茶褐色粘質土の２層であった。詳細な時期は不明ではあるが、検出状況等から弥生時代と考えられる。（根木）

たわみ５（第61・62・188図）

本館５区の北半部に位置する。海抜約7.55ｍの黄色粘質土層の上面において検出した。平面形は約17×５ｍの三日月形を呈し、深さは10cm前後を測るにすぎない。埋土は灰白色の微砂・細砂が一層のみであった。時期は明確ではないが、弥生時代と考えている。（平井泰）

たわみ６（第62・188図、図版36）

本館２区の東側で検出された繭状のたわみである。遺構の両端は徐々に細くなってゆく傾向が見受けられるので、全長40cm前後で完結するものと推定される。規模は幅が450cm前後、深さが約75cmであった。遺物は出土していないが、弥生時代前期末の溝53の上面で検出された状況から、弥生時代中期以降のものと推定される。（根木）



第188図　たわみ２～６断面

第３節　古墳時代・奈良時代の遺構・遺物

調査対象区域内のこの時代の遺構は、縄文・弥生時代に比べて極端に少なく、土壙２基・溝６条・柵列状遺構２を数えるに過ぎず、おもに病院敷地の東半と北西の一部に遺構の分布を認めるに過ぎない。また、各遺構の検出レベルは弥生時代遺構と同じ面であり、その上層は中世の灰色粘土層であるところから、弥生時代およびこの時代の生活面ともに、中世のある時期に上面を削平されている可能性が高い。

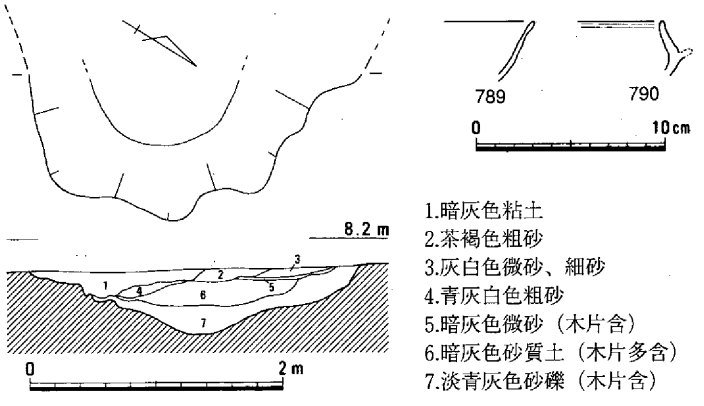
遺物も溝76のややまとまった古墳前期の土師器の一群を除いては、須恵器・土師器の破片が少量と土錘等が認められるのみで、図示できるものも少ない。　（柳瀬）

(1)　土　　壙

土壙115（第189・192図）

水路４区の西端部に位置する。西側は現存していた道路に向かってのびていたため、全体の形状は明らかにならなかった。検出した部分は不整形な楕円形を呈し、深さは約50cm残存していた。埋土には粗砂や微砂が多く堆積していた。

時期は明確ではないが、埋土中からは、古墳時代や古代の土器片が少量出土している。　（平井泰）

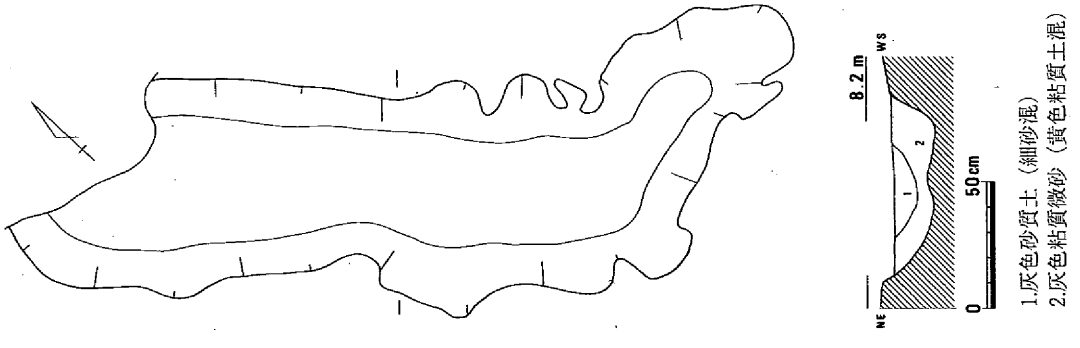


第189図　土壙115、同出土遺物

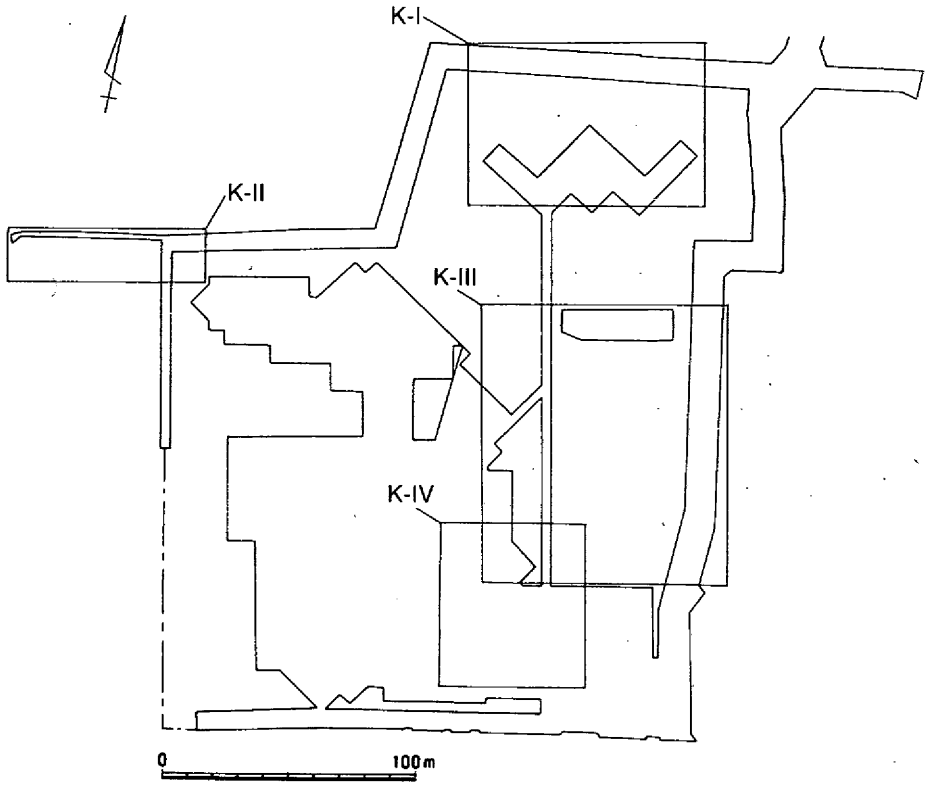
土壙116（第190・192図）

水路５区の東端部に位置する。平面形は長さ約3.2m、幅80cm前後の溝状を呈し、東端部では北に屈曲していた。北西端部は溝82によってきられていた。深さは20cm前後残存しており、底面には凹凸が認められた。

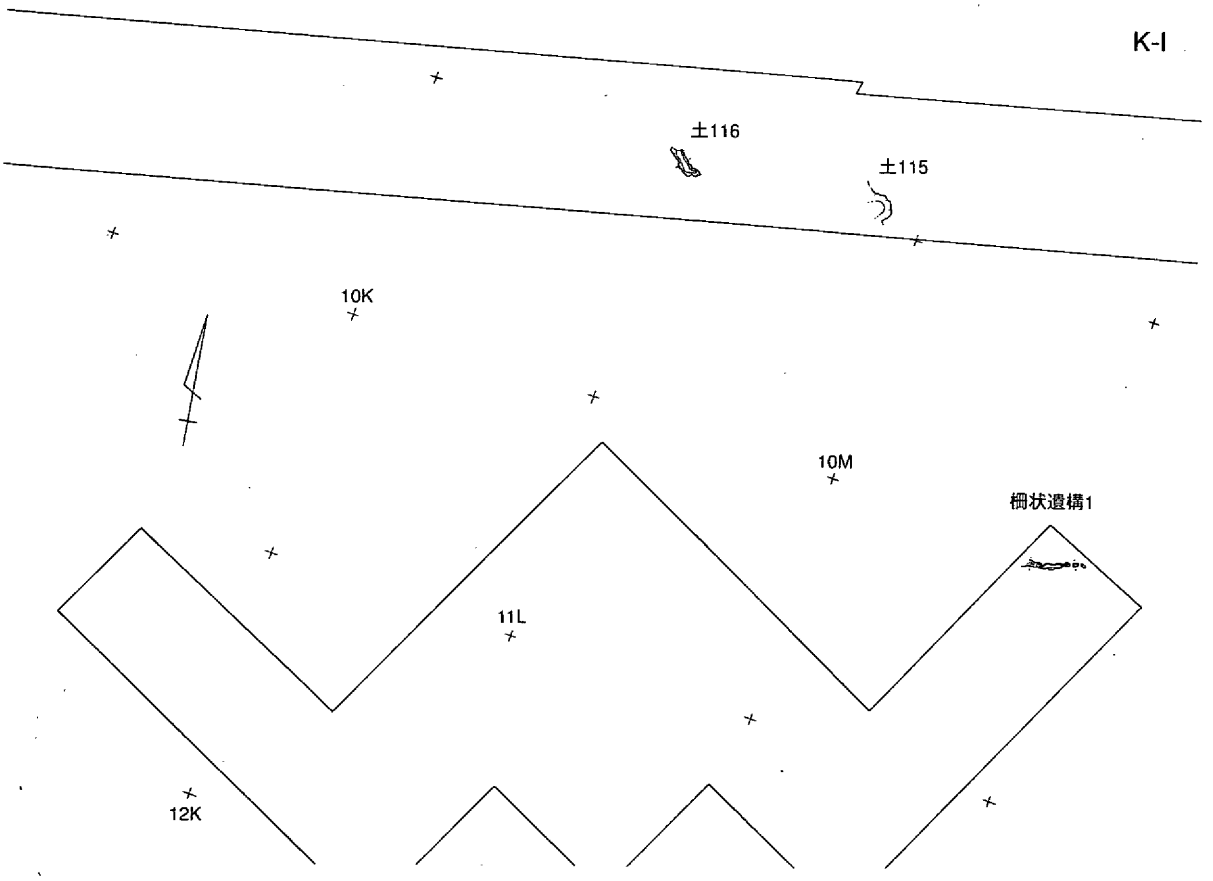
埋土中から土器小片が少量出土しており、時期は古代と考えている。　（平井泰）



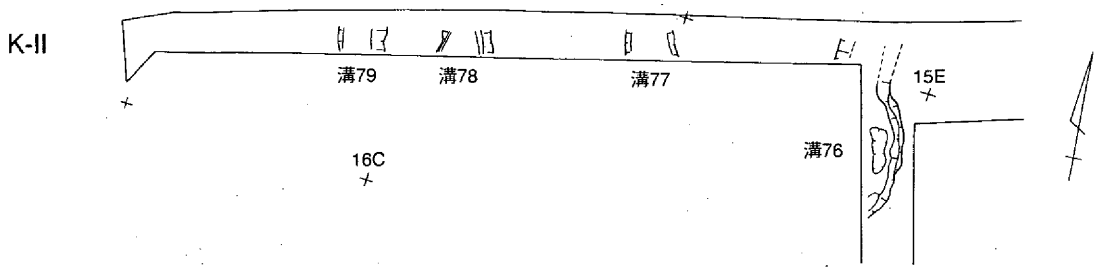
第190図　土壙116



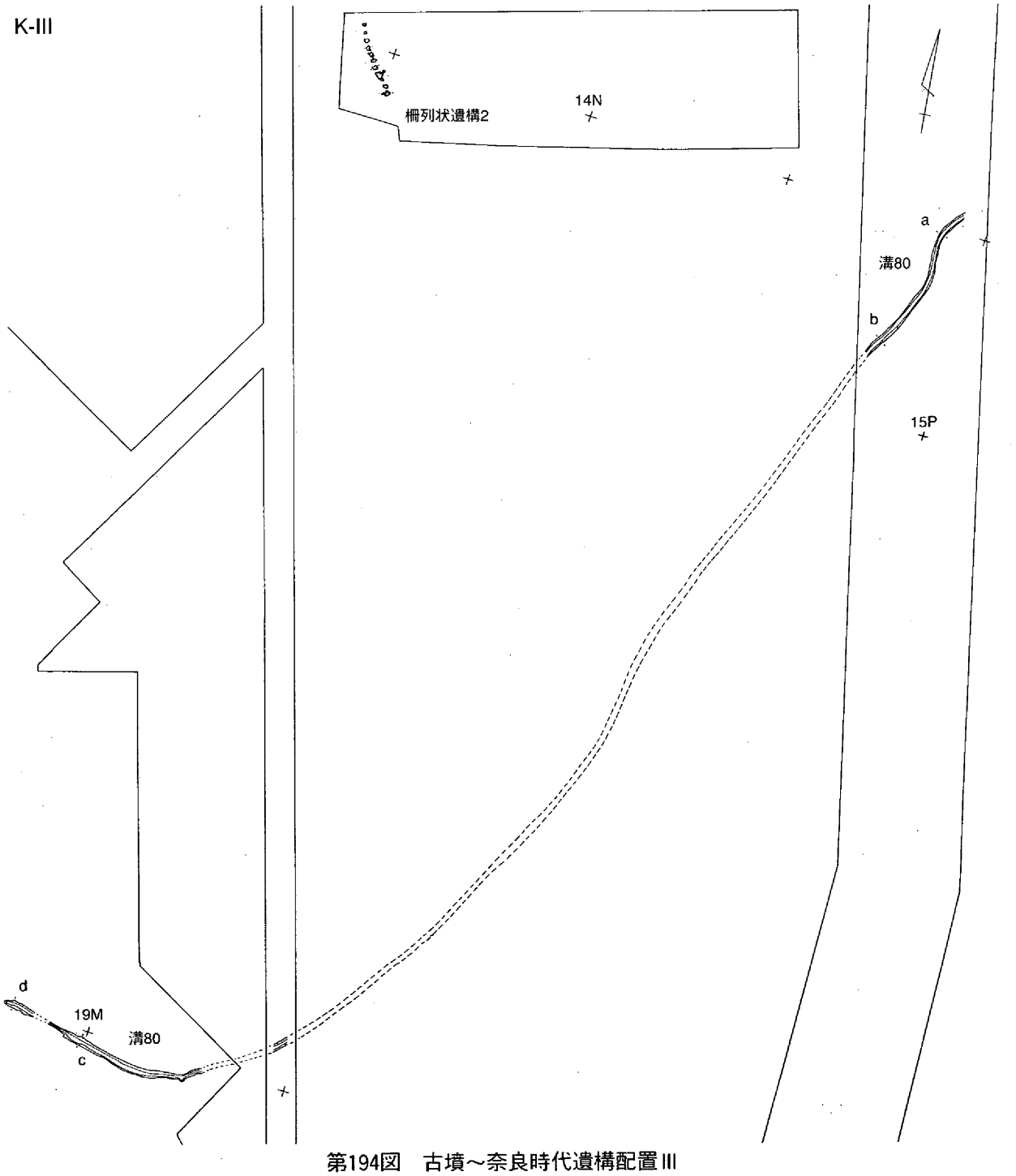
第191図　古墳～奈良時代遺構配置図範囲（1/3,000）



第192図　古墳～奈良時代遺構配置Ⅰ



第193図　古墳～奈良時代遺構配置Ⅱ

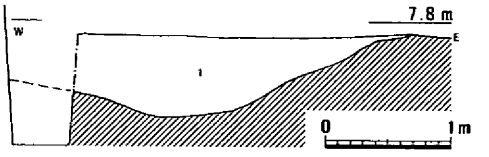


第194図　古墳～奈良時代遺構配置Ⅲ

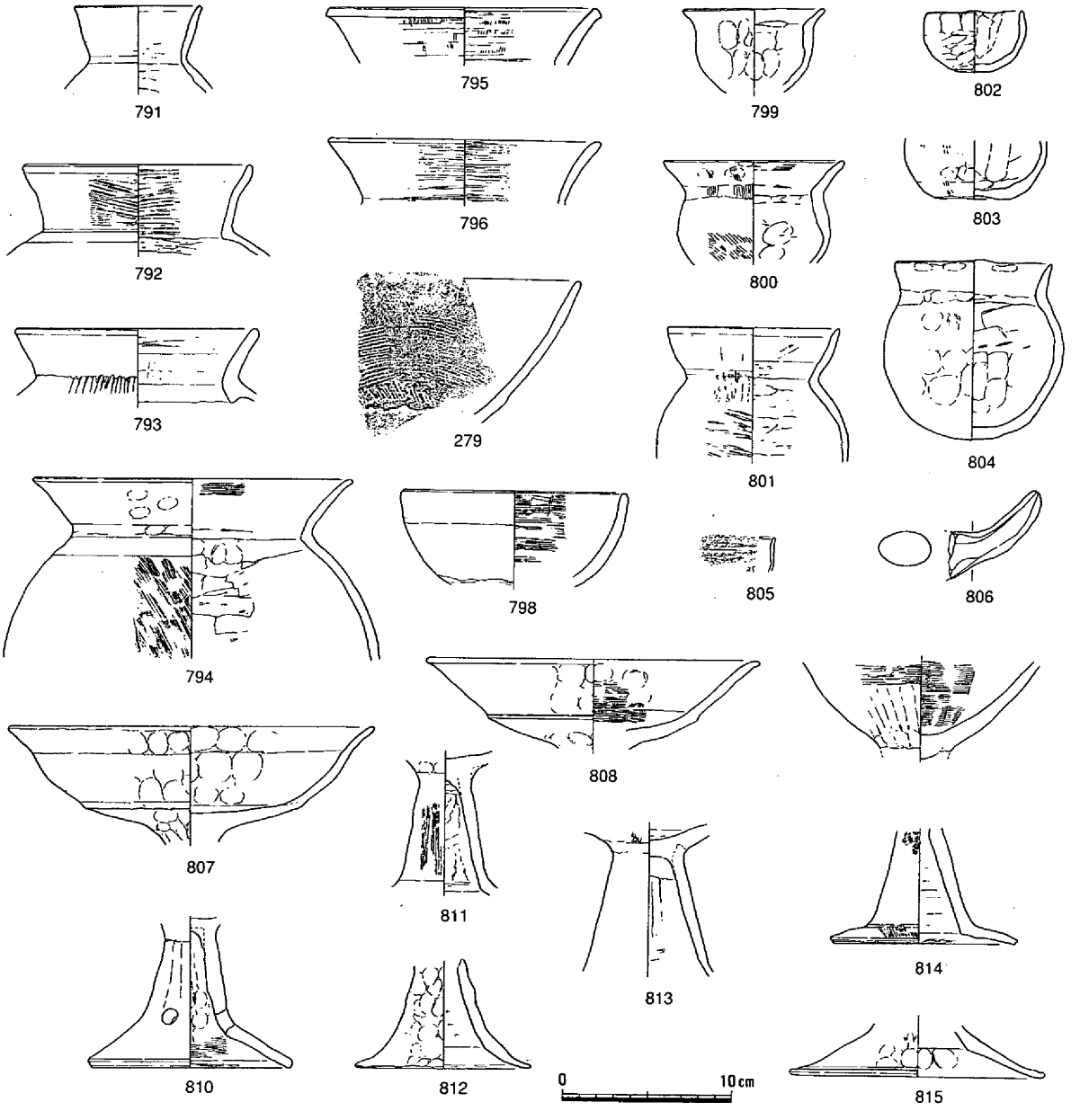
(2)　溝

溝76（第193・195・196図、図版37－１）

溝76は、14Ｄ区の南東側から発し、南へ流走して15Ｄ区の北東側から、南西方向に屈曲する。溝の全貌は西側が調査区外のため不明であるが、幅が概ね５ｍ前後、深さが65cm前後で断面形態は皿状である。覆土は粘質の黒色土である。覆土の下層からは、多量の土器が出土した。これらの大半が、古墳時代前期後半のものである。791～796は、壺・甕類である。798・802・803は、椀になる。799～801・804は、小型壺形土器である。805は製塩土器で、806は鍋の取手部になる。807～815は高杯であり、出土器種中最も数



第195図　溝76断面



第196図　溝76出土遺物

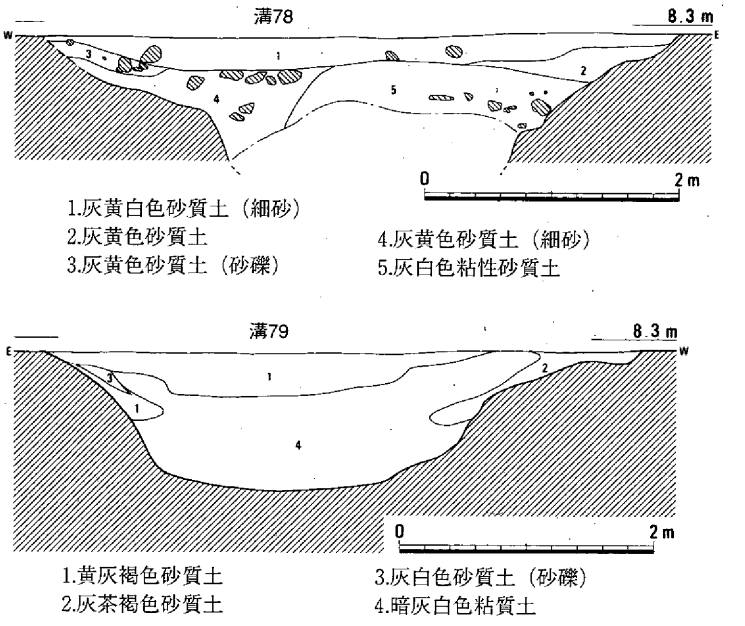
が多い。溝76から出土する土器は、壺や甕などの日常的なものより、小型壺形土器や高杯などが多いのが特徴である。　(小林)

溝77（第149・193図）

溝77は、15Ｃ区の北東部に位置し、ほぼ南北方向に流走する。溝34と重複し、これを切っている。溝の幅は約0.65ｍを測り、深さは約20cmで断面形態は皿状である。覆土は、やや粘土を含んだ砂質土である。遺物は出土しない。　(小林)

溝78（第193・197図、図版37－２）

溝78は、15Ｃ区の北西部に位置し、ほぼ南北方向に流走する。溝の断面形態は、中央部が深くなり、肩部に向かってなだらかに立ち上がる形である。溝の幅は肩部で 5.2ｍを測り、深くなり始める中央部は、 2.7ｍである。覆土は砂質土主体であるが、上部に礫が混じる。須恵器の甕の小片が数点出土している。　(小林)



第197図　溝78・79断面

溝79（第193・197図）

溝79は、15Ｂ区の東側に位置し、ほぼ南北方向に流走する。溝の幅は肩部で約 4.6ｍ、底部で約 2.4ｍを測り、深さは約１ｍで断面形態は概ね皿状である。覆土は上層部が砂質土で、下層部が粘質土になる。須恵器の甕の破片が数点出土しているため、古墳～古代とした。　(小林)

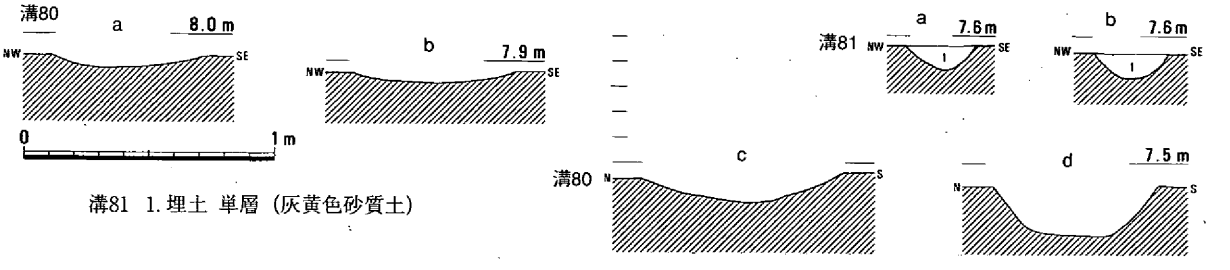
溝80（第194・198・199図）

水路２区の北端部分の14Ｏ区から、本館２区の19Ｍ区に至る幅約60～80cm、深さ約５～20cmの溝である。周辺に同規模の溝がなく、埋土や方向等の状況から水路２区と本館２区の両者を同一とした。

遺物は出土していないが、検出面の状況等から古墳時代前期の可能性が考えられる。　(根木)

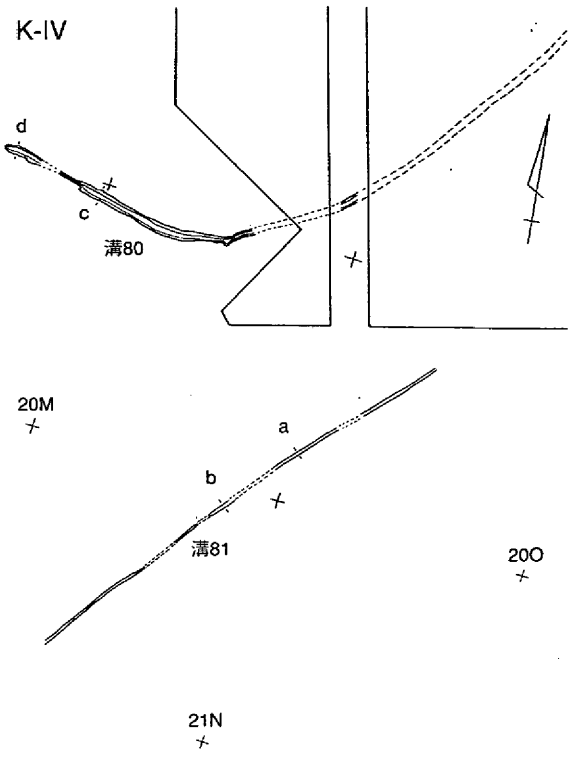
溝81（第198・200図、図版37－３）

付属建物１・２区で検出された溝である。削平を受けており、現存で幅30cm以下、深さ10cm以下である。底面のレベルから、北東から南西に流れをもつと考えられる。遺物は出土していないが、他の遺構との前後関係などから、古墳時代前後に位置付けられよう。　(尾上)

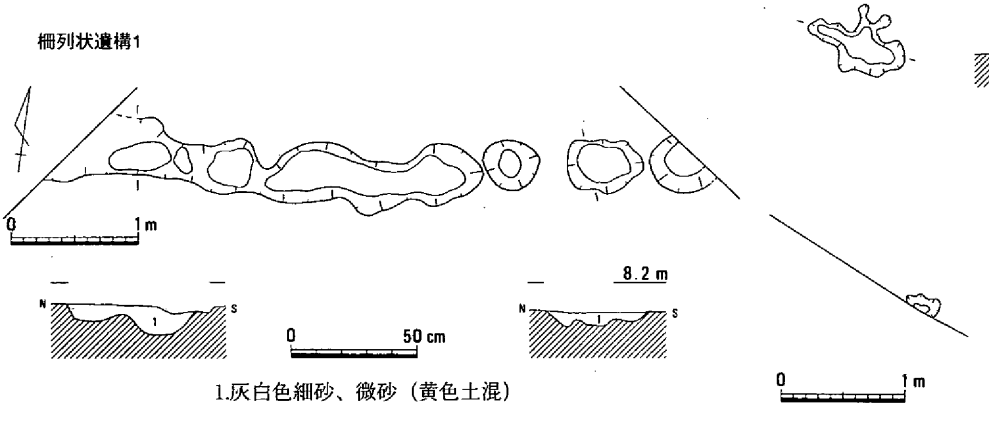


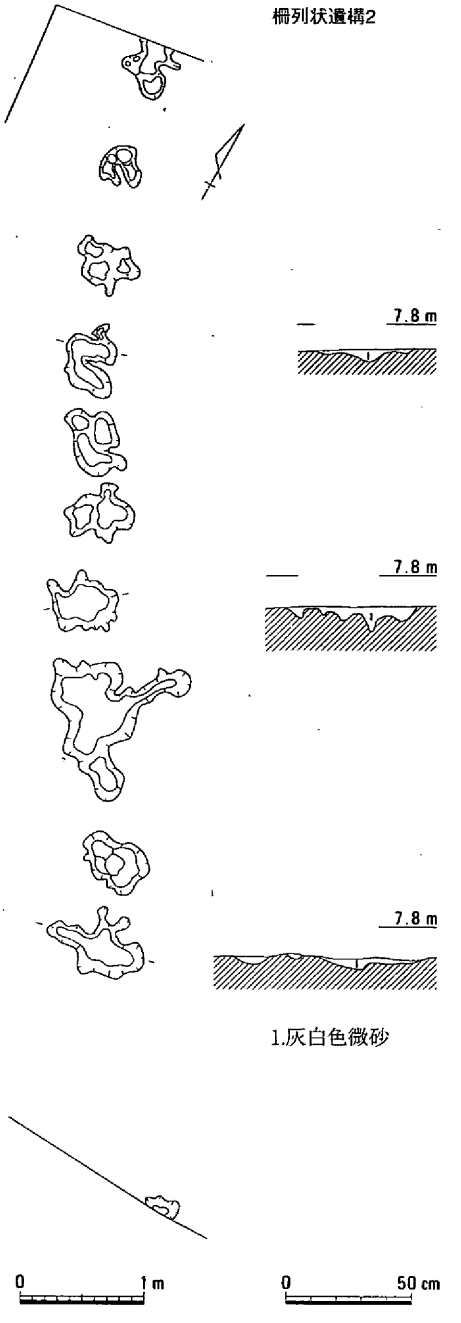
溝81　1. 埋土 単層（灰黄色砂質土）

第198図　溝80・81



第199図　古墳～奈良時代遺構配置Ⅳ





第200図　柵列状遺構１・２

(3) 柵 列 状 遺 構

柵列状遺構１・２（第192・194・200図、図版38－１）

柵列状遺構１は宿舎区の北端部に位置する。平面形は幅50cm前後の溝状を呈する部分と、直径40cm前後の柱穴状の凹みが連なった部分とがある。方向はほぼ東西方向である。深さは５～10cmで、埋土には微砂・細砂が堆積していた。

柵列状遺構２は駐車場区の西端部に位置する。平面形は約30～100cmのアメーバ状の凹みが連なったかたちで検出でき、深さも５～10cmと浅かった。方向は北西－南東である。埋土は灰白色微砂が一層のみであった。いずれからも遺物が出土していないため時期は明確ではないが、他遺跡での類例から、古墳時代～古代と考えておきたい。（平井泰）

第４節　中世以降の遺構・遺物

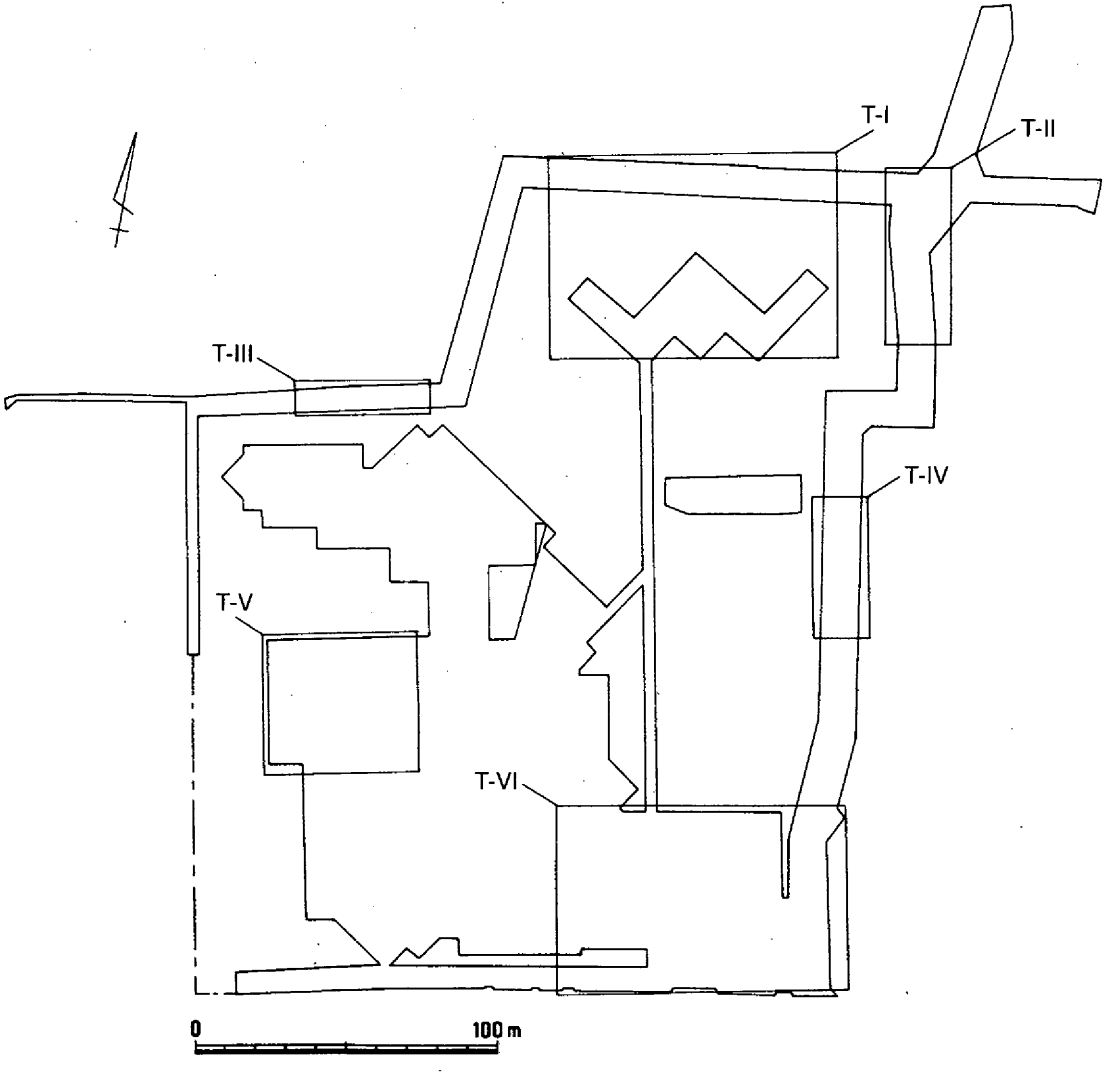
中世以降は、前節に比べれば遺構の数は多いが、建物２棟・土壙20基・井戸１基・溝15条程しか認められていない。そのうち中世と近世の遺構の割合は半々くらいと思われ、病院敷地の西半に中世、東半に近世の遺構が多い傾向が認められた。中世遺構は表土下約30～40cmの灰色～灰褐色粘質土を埋土に持ち、遺構出土の土器は無か伴っても弥生土器片のほうが多い場合もあった。

近世遺構の遺物は、江戸時代後期の井戸や土壙、用水路などから比較的多くの陶磁器が、また井戸からは、漆絵を含む櫛４個体分や丸形と角形の釣瓶各１個体などが出土している。　（柳瀬）

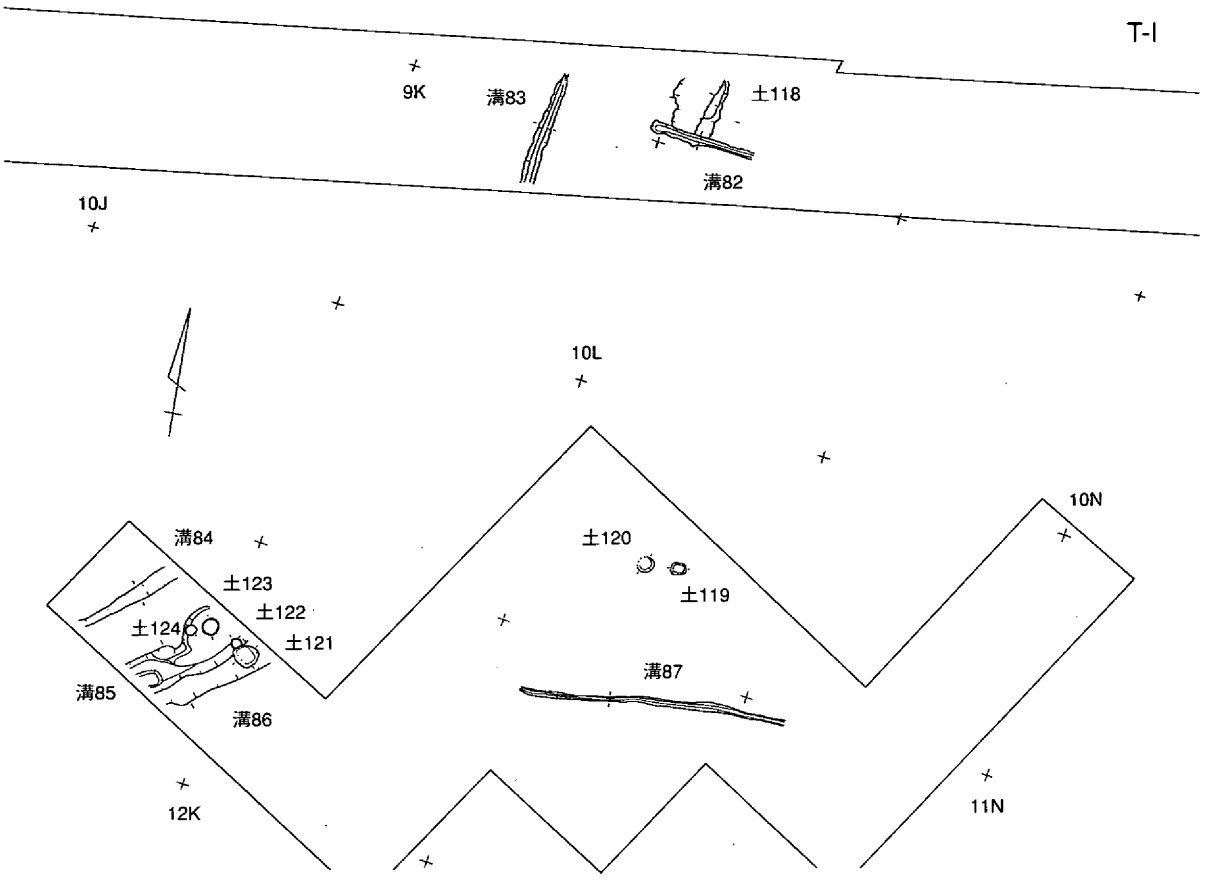
(1)　建　　物

建物１（第203・205図、図版38－２）

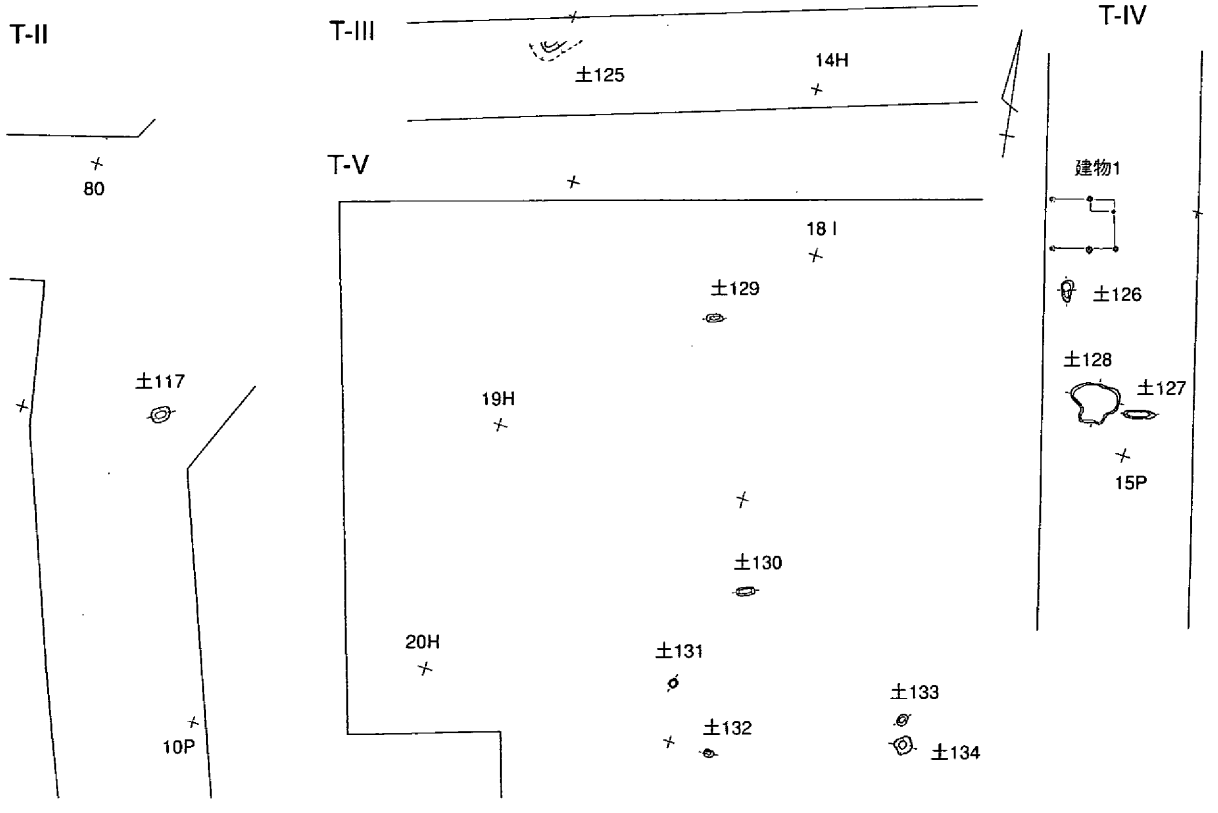
水路２区の北端部、14Ｏ区に位置する２×１間の掘立柱建物である。棟方向は、ほぼ東西方向を呈している。Ｐ３、６は側溝によって東側は検出できなかった。



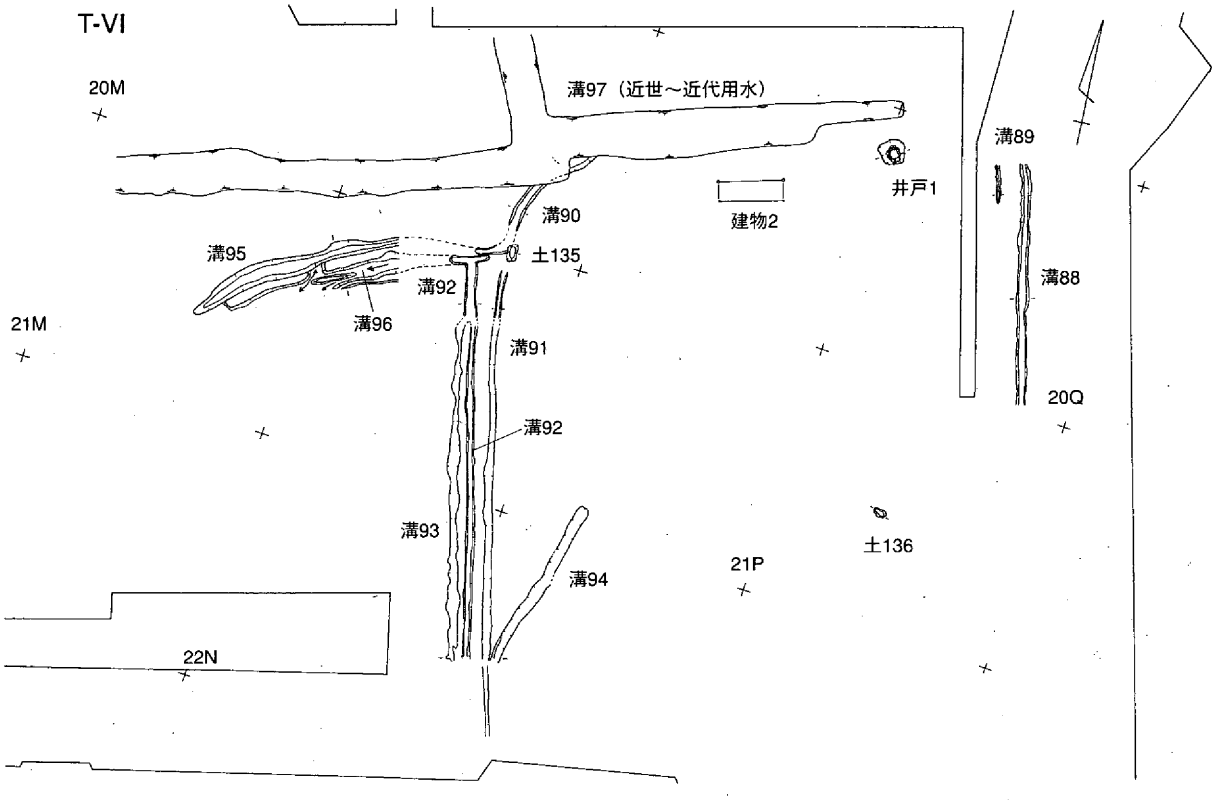
第201図　中世以降遺構配置図範囲（1/2,500）



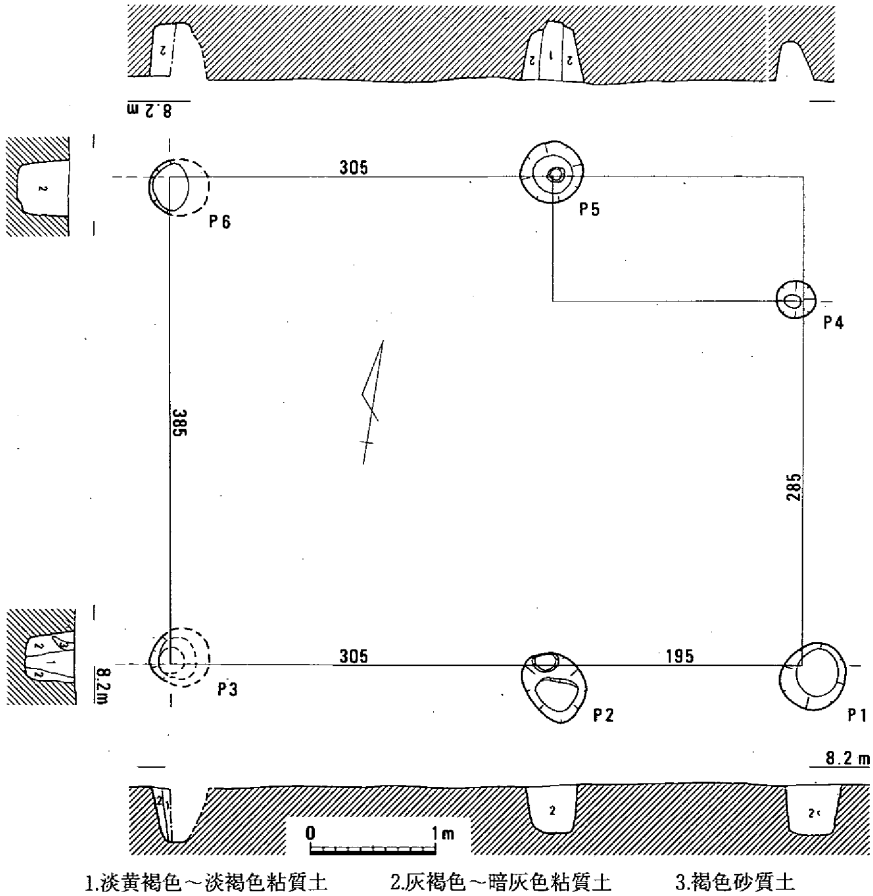
第202図　中世以降遺構配置Ⅰ



第203図　中世以降遺構配置Ⅱ～Ⅴ



第204図　中世以降遺構配置 VI



1.淡黄褐色～淡褐色粘質土　2.灰褐色～暗灰色粘質土　3.褐色砂質土

第205図　建物１

建物の構造を観察してみると、東西方向の柱穴列の間隔が均等でないことから東側に廂を伴うか、もしくはＰ４の柱穴の位置関係から、北側より入る小規模な建物の入り口が想定される。

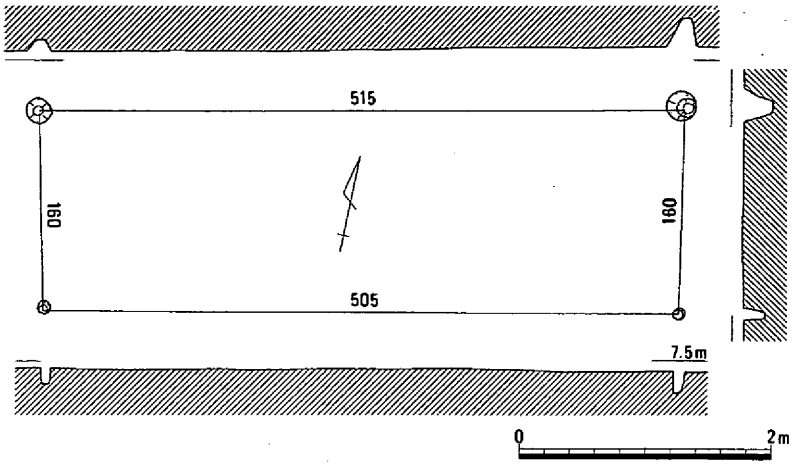
埋土は褐色の砂質土であり、遺物の出土は皆無であった。柱穴群を検出した面や後述の土壙126～128などの埋土の状況と、比較的相似している点などから、江戸時代以前に遡ることはないものと考えられる。　（根木）

建物２（第204・206図、図版）

東西方向に長い１間×１間の掘建柱建物として図示しているが、建物の北側を現代の水路によって破壊されているため、全体像は明らかでない。北側の柱穴が径20～25cm、深さ10～25cmであるのに対して、南側の柱穴は径10cm弱、深さ15cm程度とやや規模が小さいことを考えると、建物の範囲はさらに北側に広がる可能性がある。

柱穴内から遺物は出土していないが、柱穴の埋土は明灰色砂質土で、その土質から中世の遺構と判断される。

（尾上）



第206図　建物２

(2) 土　　壙

土壙117（第203・207図、図版39－１）

水路１区の中央部に位置する。平面形は152×110cmの不整長方形で、深さは36cm残存していた。断面形は皿形である。遺物が出土していないため時期は明確ではないが、近世～近代と考えている。（平井泰）

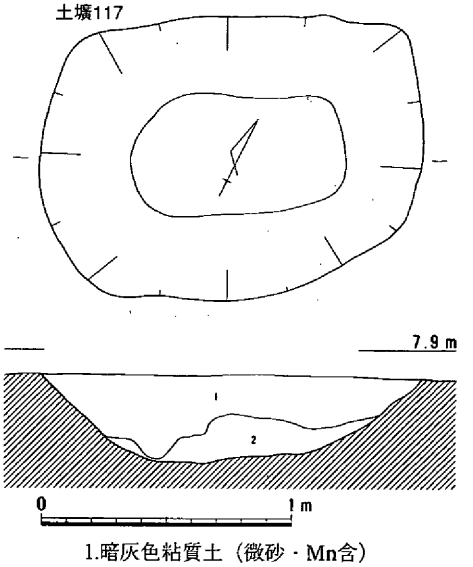
土壙118（第202・207図）

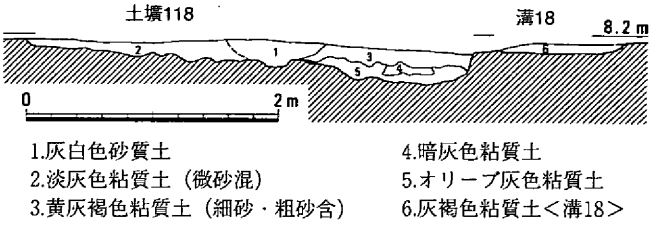
水路５区の東端部に位置する。平面形は、北側が調査区外にのび、南側は溝82によってきられているため、明確ではないが、長楕円形を呈するものと考えられる。検出できた規模は長さ4.8m、幅４m、深さ約25cm残存していた。時期は明確ではないが、埋土や切り合い関係から、古代～中世と考えている。（平井泰）

土壙119（第202・208図、図版39－２）

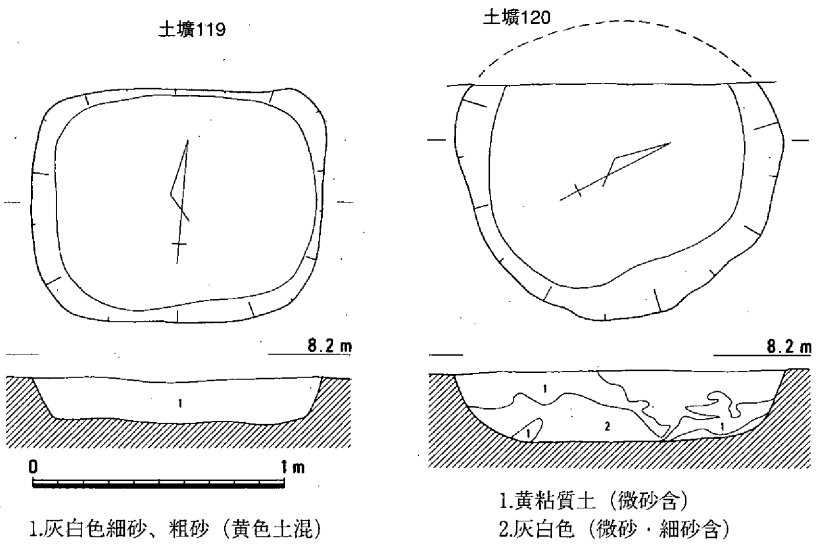
宿舎区の中央部に位置する。平面形は116×94cmの隅丸長方形状を呈し、深さは約18cm残存していた。

断面形は逆台形で、埋土は灰白色細砂・粗砂が一層のみであった。遺物は何も出土しなかったため時期は明確ではないが近世～近代で、水稲や畑作に関連する土壙ではなかろうか。（平井泰）





第207図　土壙117、土壙118・溝18断面



第208図　土壙119・120

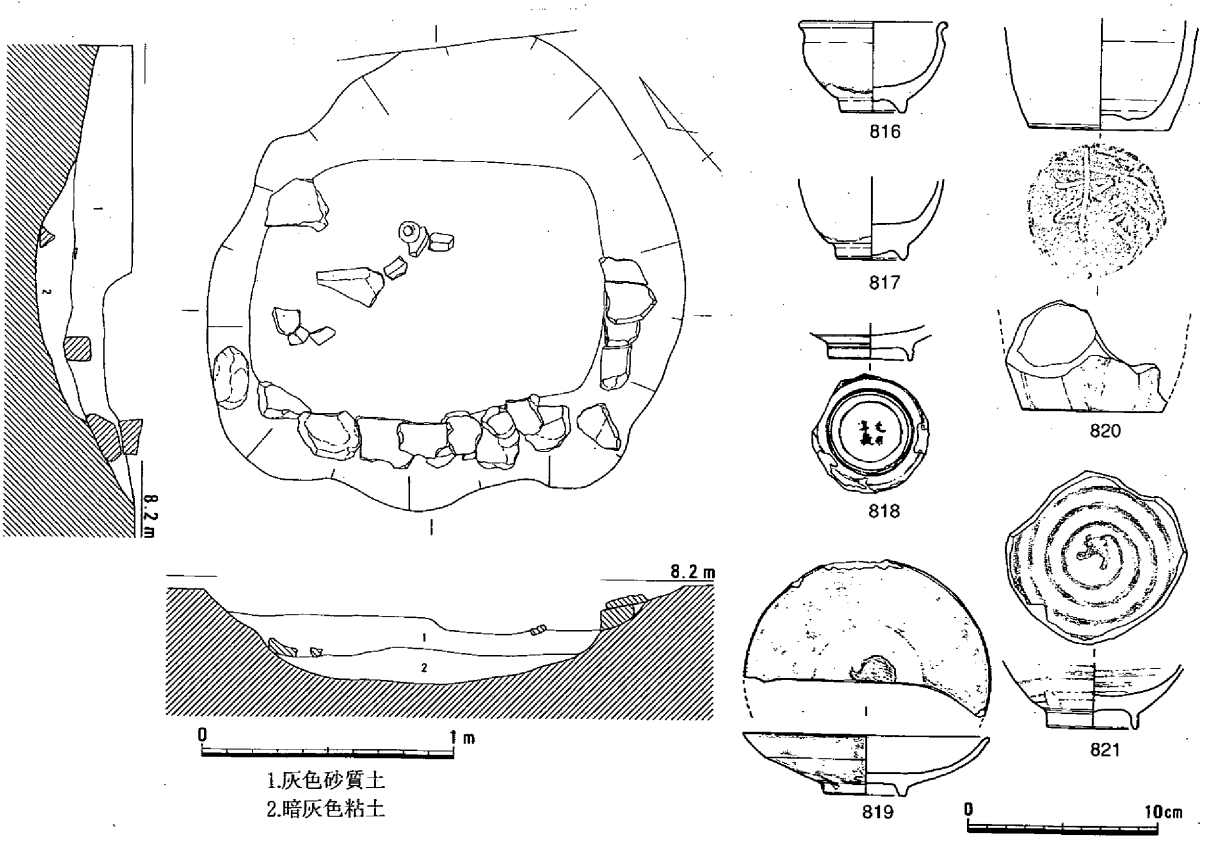
土壙120（第202・208図）

宿舎区の中央部、土壙119の西約１ｍに接して検出できた。平面形は北西部を側溝で切ってしまったが、直径約130cmの円形で、深さは28cm残存していた。

出土遺物がないため時期は明確ではないが、近世以降のものであろう。また土壙119と同じく水稲や畑作に関連した土壙で、水や肥料を入れていたのではなかろうか。　（平井泰）

土壙121（第202・209図、図版39－３・64－１）

宿舎区の西端部に位置する。平面形は200×180cmの不整楕円形の掘り方をもち、内部におそらく140×100cmほどの長方形に平たい石を組んでいたものと推定している。深さは検出面から約40cm残存していた。埋土は二層確認でき、下層には粘土が堆積していた。遺物は近世以降の備前焼の壺・徳利・灯明皿、伊万里焼の皿・椀、唐津焼の椀、瓦等が約70点出土した。820の備前焼徳利の底部外面



第209図　土壙121、同出土遺物

にはヘラ記号が施されている。

近世後半以降明治くらいまで機能していたもので、水くみ場的な用途を想定している。（平井泰）

土壙122（第202・210図）

宿舎区の西端部、土壙121の西にきられるかたちで検出した。平面形は直径約80cmの円形で、深さは約12cm残存していた。壁は垂直に近く、底面には板が敷かれていた。遺物が出土しなかったため、時期は明確ではないが、近世以降で、水稲や畑作に関連した土壙と考えている。（平井泰）

土壙123（第202・210図、図版40－１）

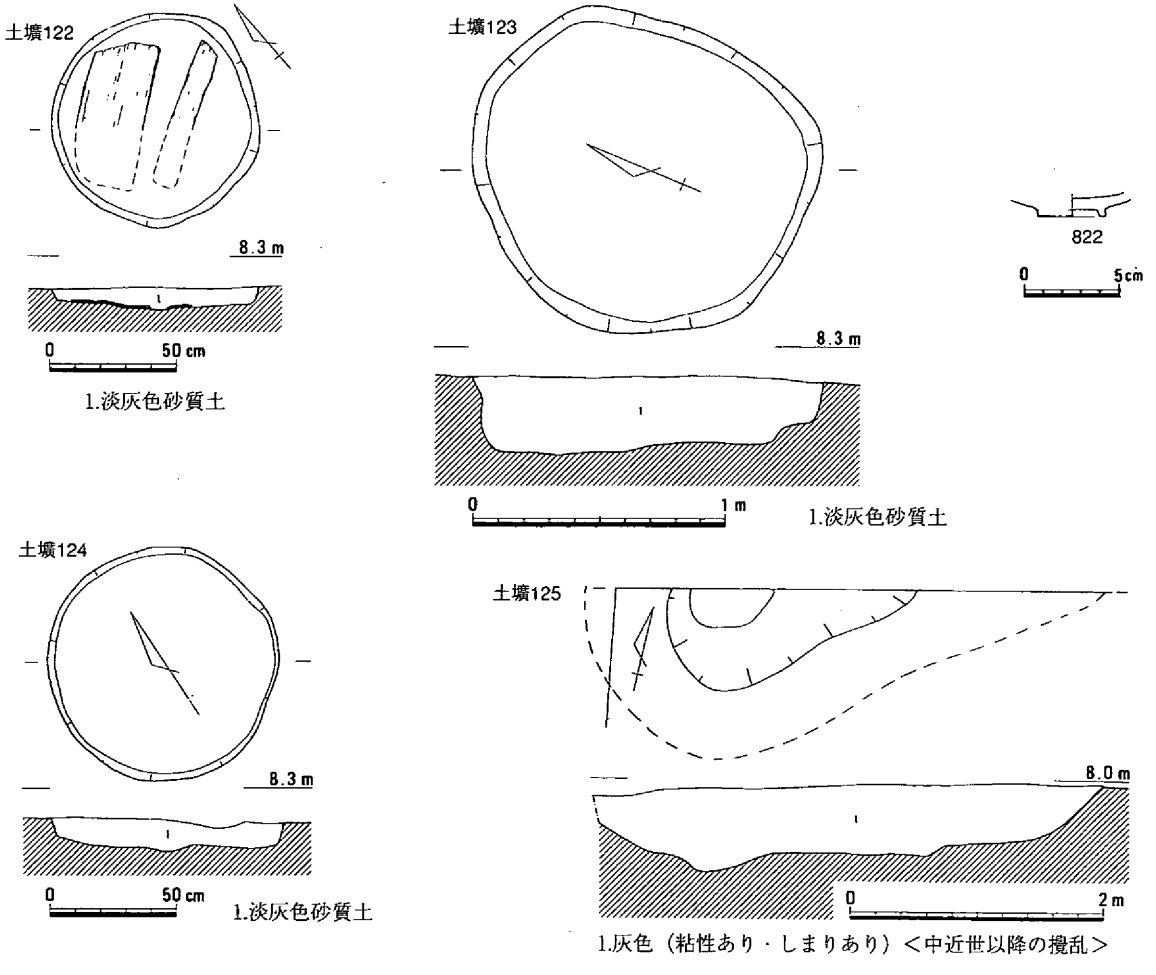
宿舎区の西端部、土壙122の西約1.4ｍにおいて検出した。平面形は136×125cmの不整円形で、深さは32cm残存していた。埋土は土壙122と同じく淡灰色砂質土が一層のみであった。遺物は近世陶器椀の底部片が１点出土した。時期は近世以降で、土壙122と同じ用途と考えている。（平井泰）

土壙124（第202・210図）

宿舎区の西端部、土壙123の西約40cmにおいて検出した。平面形は直径約90cmの円形で、深さは13cm残存していた。壁は垂直に近く、埋土は土壙122・123と同じであった。遺物は出土していないが、時期は近世以降で、土壙122･123と同じ用途を考えている。（平井泰）

土壙125（第203・210図）

土壙125は、14Ｆ区の北東側に位置し、東側２ｍ付近に土壙20が存在する。北側半分が調査区外に



第210図　土壙122～125、土壙123出土遺物

なり全貌は不明であるが、長軸長約２ｍ、短軸長約 1.2ｍで、平面形態は楕円形になると思われる。深さは確認面から約30cmで断面形態は皿状である。中世以降の撹乱と思われる。　（小林）

土壙126（第203・211図）

水路２区の北端部分にある建物１に南接した14Ｏ区に位置する長円形の土壙である。規模は長径約70cm、短径約80cmを測る。

遺物は出土していないが、検出状況等から近世以降と考えられる。　（根木）

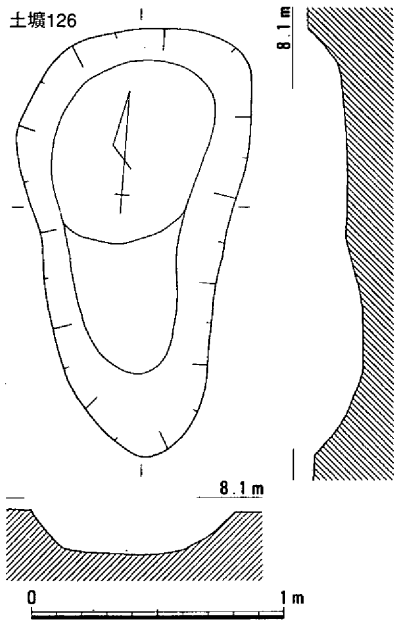
土壙127（第203・211図）

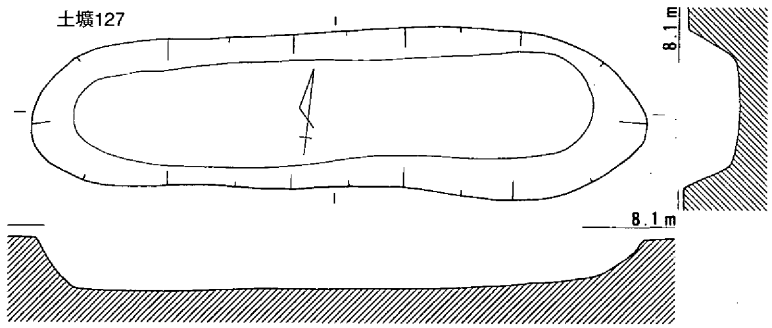
水路２区の北側、14Ｏ区に位置する土壙である。土壙の規模は長径約240cm、短径約60cmを測る。当初、近現代の廃棄穴として掘り下げたために遺構の詳細な観察はできず、また遺物も出土しなかったので、建物１同様、近世以降と推定される。　（根木）

土壙128（第203・212図）

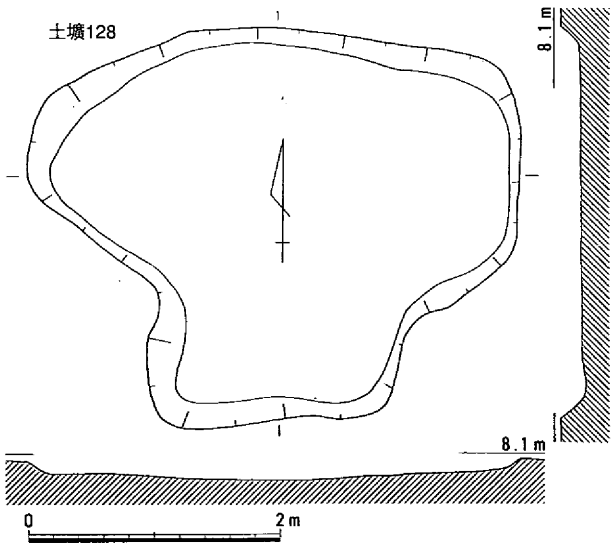
水路２区の14Ｏ区に位置する不整方形の土壙である。幅が東西方向約195cm、南北方向約155cmで、深さ約20cmを測る。

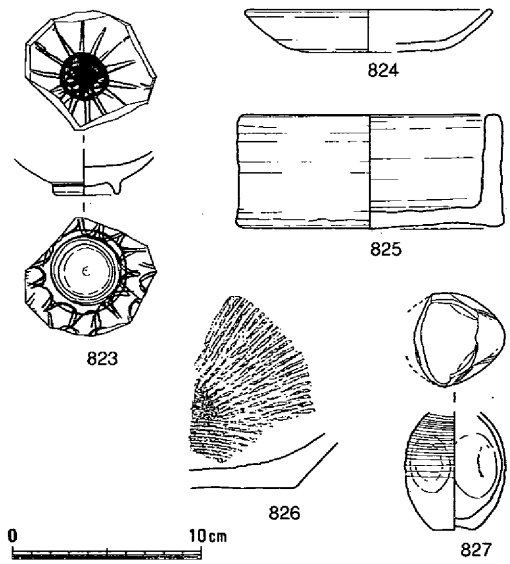
遺物は染付の皿823や、備前焼灯明皿824・平鉢825・擂り鉢826などが出土している。827の小壺は備前焼で、その形態



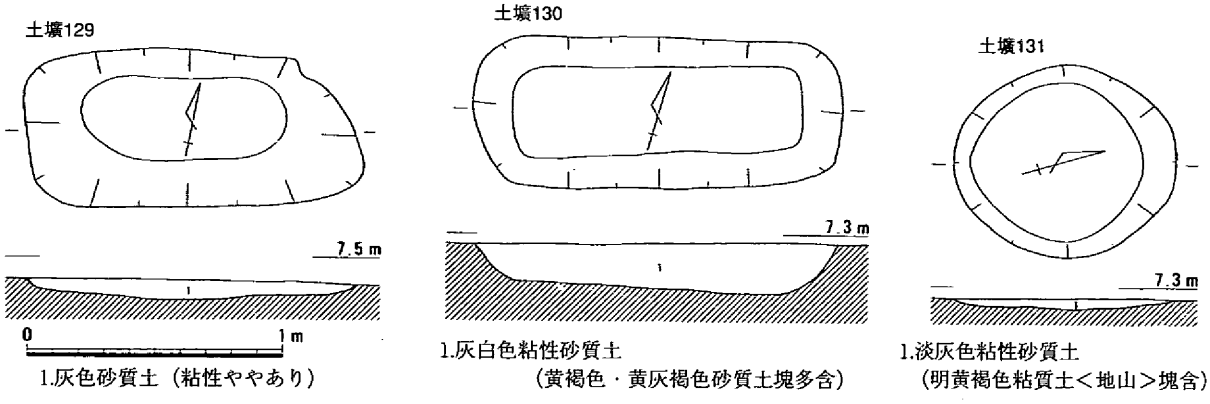


第211図　土壙126・127





第212図　土壙128、同出土遺物



第213図　土壙129～131

からお神酒徳利の可能性がある。

時期は、検出面や出土遺物から幕末前後が考えられる。　（根木）

土壙 129（第203・213図、図版40－２）

土壙129は、18Ｈ区の中央部よりやや北東側に位置し、近接する土壙は存在しない。土壙の規模は長軸長 1.4ｍ、短軸長0.65ｍを測り、平面形態は不整楕円形である。深さは確認面から８cmで、断面形態は皿状である。覆土は粘質土である。遺物は出土しない。　（小林）

土壙130（第203・213図）

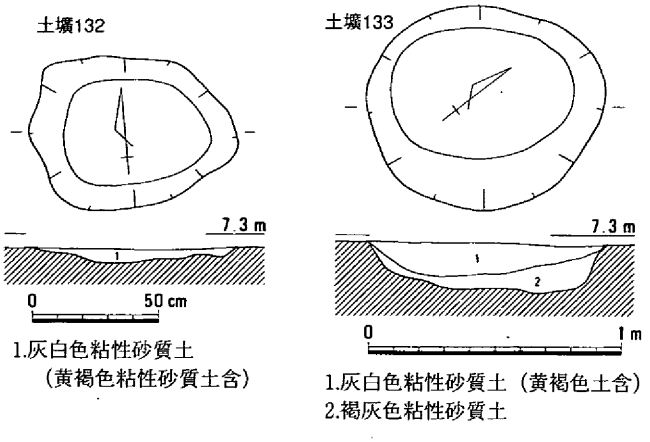
19Ｉ区の中央やや北西寄りに孤立して検出された。検出面での平面形は長軸146cm、短軸61cmを測る隅丸長方形を呈し、深さは中央付近で検出面から18cmを測る。底面はわずかに西から東へ下がっている。遺物は伴わないが、埋土の状況より近世のものである。　（難波）

土壙131（第203・213図）

溝49の北側に接する位置より検出された。検出面での平面形は、南北方向にやや長いが、径80～90cmでほぼ円形に近い。深さは検出面から最大４cmほどである。埋土には地山と同質の土塊を含み、遺物は伴わない。埋土の状況より時期は近世と考えられる。　（難波）

土壙132（第203・214図）

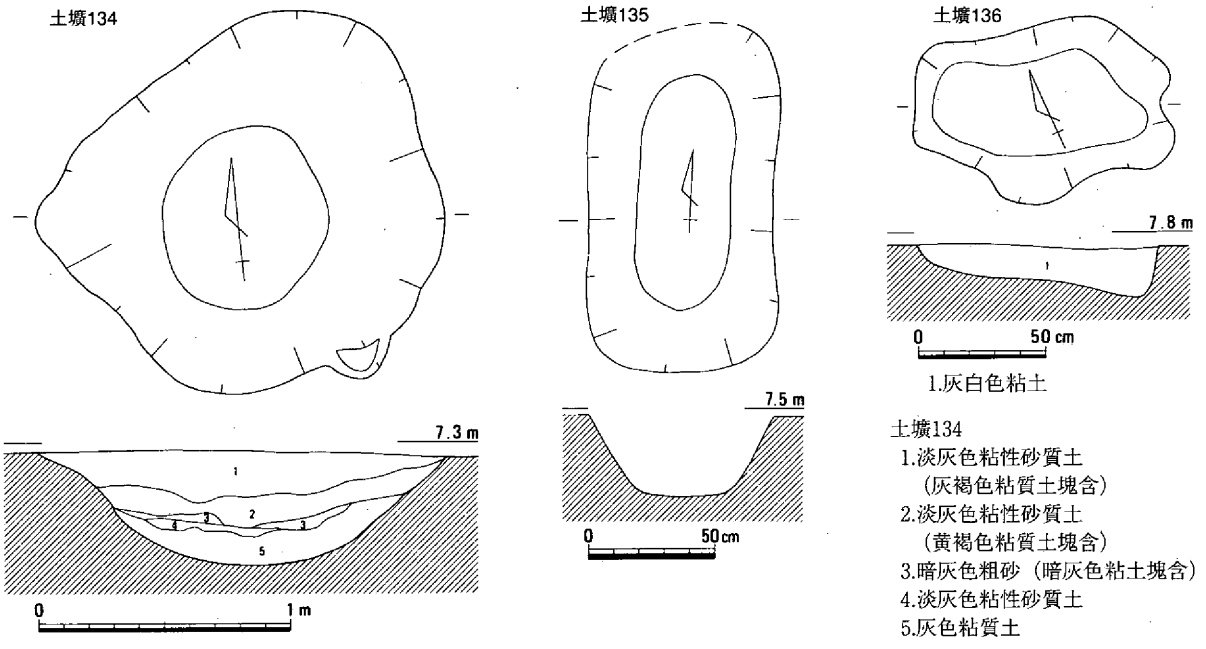
20Ｉ区の北西端、溝43と溝47の間に位置する。検出面での平面形は、東西方向を長軸とした不整楕円形で、82cm×60cmを測る。深さは検出面から最大６cmで、底面には不規則な起伏が認められる。遺物はないが、時期は近世と思われる。　（難波）



第214図　土壙132・133

土壙133（第203・214図、図版40－３）

19Ｉ区のやや南東寄り、溝９と溝10の重複地点の上面で検出された。平面形は円形に近く、長軸95cm、短軸80cm、底面は楕円形で深さは検出面から最大19cmを測る。遺物は伴っていないが、埋土の状況より近世と考えられる。　（難波）



第215図　土壙134～136

土壙134（第203・215図）

土壙133の南側で検出された土壙である。形状は、やや角張ったような不整円形を呈する。検出面において、径は150～160cm前後で、深さは最大で45cmを測る。底部はすりばち状になっている。埋土には弥生土器・須恵器等の小片が混入しているが、近世の陶器片が１点出土していることから、土壙の時期は近世である。（難波）

土壙135（第204・215図）

付属建物２区の西部で検出された土壙である。平面形は隅丸方形、断面形は逆台形を呈し、規模は長さ約135cm、幅約75cm、深さ約30cmを測る。埋土は明灰色砂質土の単層で、その土質から中世の遺構と考えられる。土壙の性格については不明と言わざるを得ない。（尾上）

土壙136（第204・215図）

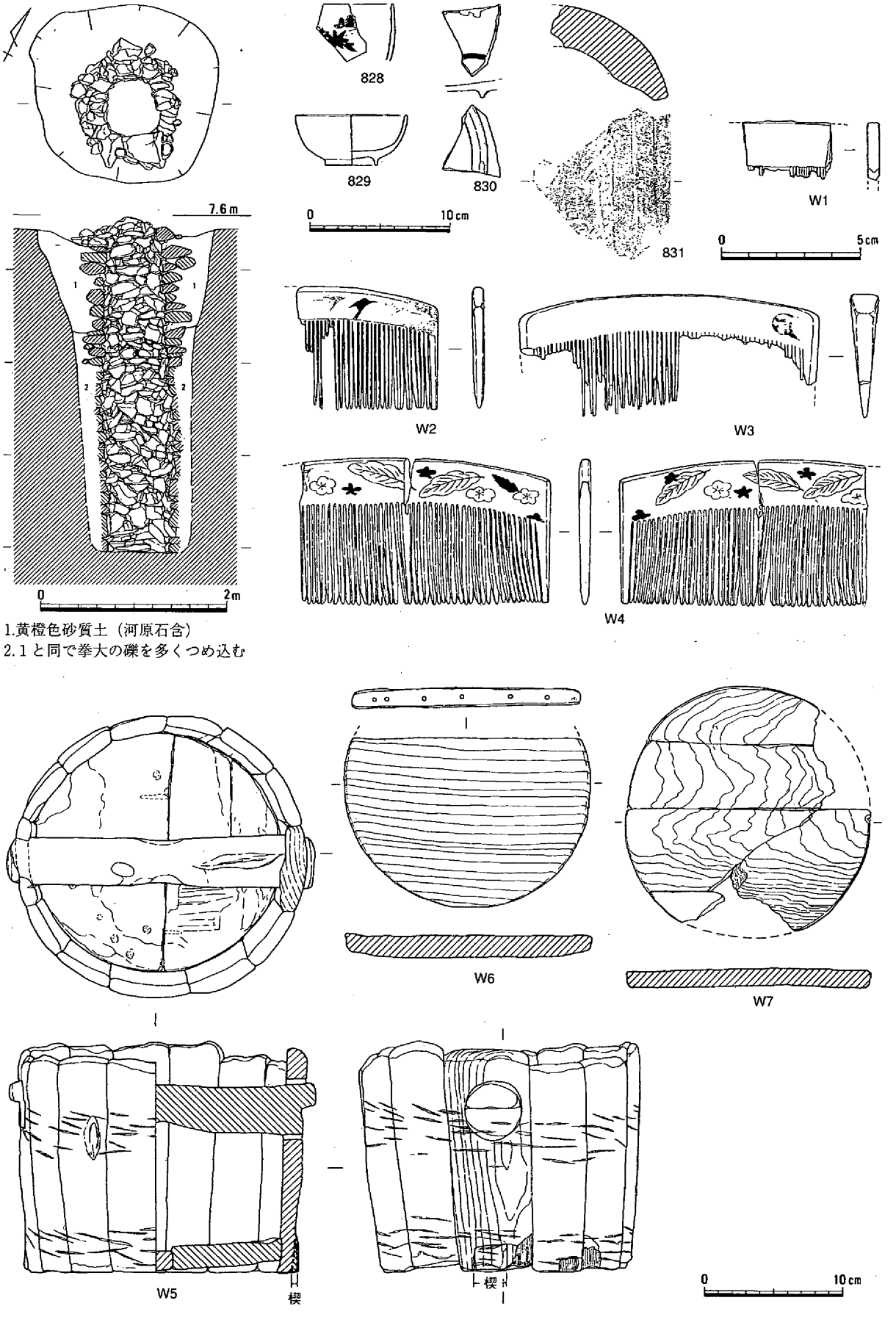
浄化槽区の北東寄りで検出された土壙である。平面形は多少の凹凸はあるが、大略長楕円形を呈し、規模は最大長1.02m、最大幅0.68mを測る。底面も外形に沿って長楕円形となるが、東に向かって傾斜し、東端で最も深く、検出面から18cmとなる。時期は中世ないし近世と考えられる。（平井勝）

(3)　井　　戸

井戸１（第204・216・217図、巻頭図版２－２、図版41・79）

付属建物２区の東部で検出された近世の石組み井戸である。掘り方は、検出面での径約２m、深さ約3.5mを測り、底部に向かって径を縮小していく。石組みは、検出面での内径約50cm、底部での内径約65cmであり、最大径は底部から120cm程のところにあり、約70cmを測る。使用された石材は比較的小形のものが多いが、底部付近ではやや大形のものを用いている。

遺物はすべて底部付近から出土している。染付磁器（828・830）、白磁（829）、瓦（831）のほか、木製品として、櫛（Ｗ１～４）、釣瓶桶（Ｗ５・８）が出土している。Ｗ６・７も桶の底板と考えら



1.黄橙色砂質土（河原石含）
2.１と同で拳大の礫を多くつめ込む

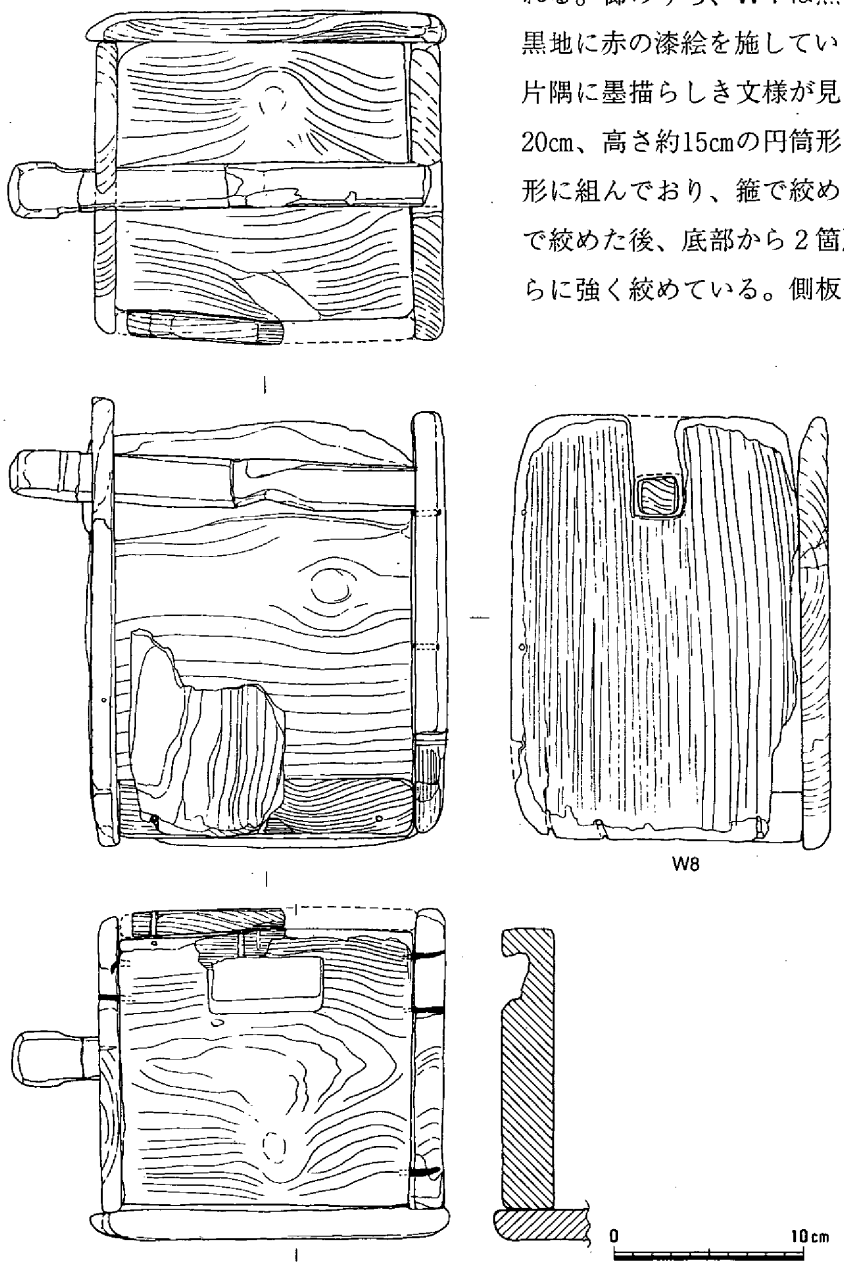
第216図　井戸１、同出土遺物（1）

れる。櫛のうち、Ｗ１は黒漆塗り、Ｗ２・４も漆塗りで黒地に赤の漆絵を施している。Ｗ３は漆を塗っておらず、片隅に墨描らしき文様が見える。Ｗ５の釣瓶桶は、径約20cm、高さ約15cmの円筒形のもので、13枚の側板を円筒形に組んでおり、箍で絞めた痕跡が認められる。また箍で絞めた後、底部から２箇所に木製の楔を打ち込み、さらに強く絞めている。側板のうち２枚には上部に円孔をあけ、吊り下げるための丸棒を差し込んでいる。その両側に突き出す部分は半月形にカットし、その上から側板と一緒に箍で絞めていたようである。底板（Ｗ５～７）は円板であるが、２～３枚の板を枘で結合して製作している。

Ｗ８は箱形の釣瓶で、細い鉄釘によって組み立てている。上面観は一辺約18cmの正方形で、高さは約22cmである。吊り下げの棒は断面方形で、側板にあけられた方形孔に通している。

井戸の時期は、出土磁器の年代観から18世紀後半以降と考えられる。

（尾上）

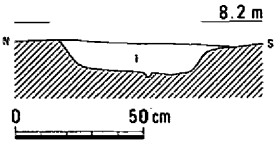


第217図　井戸１出土遺物（2）

(4)　溝

溝82（第202・218図）

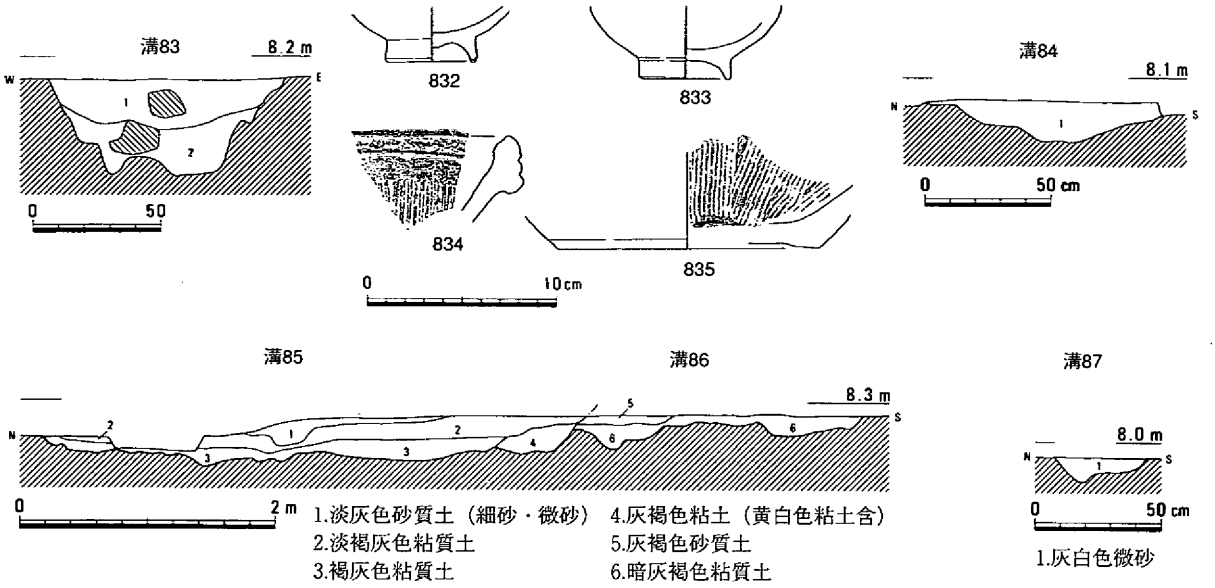
水路５区の東端部に位置する。幅60～90cm、深さ約10～20cmの規模で、長さ約９ｍを東西方向に検出した。埋土は暗褐色と褐灰色の砂質土で、底面には凹凸が認められた。遺物が出土しなかったため時期は明確ではないが、切り合い関係から中世以降と考えられる。　（平井泰）



第218図　溝82断面

溝83（第202・219図、図版42－１）

水路５区の東端部に位置する。幅30～110cm、深さ25～45cmの規模で、南北方向に長さ約10ｍを検出した。埋土は二層確認



第219図　溝83～87断面、溝83出土遺物

でき、下層は粘土であった。底は南側が低い。この溝の特徴は埋土中に角礫を多く含んでいたことである。遺物は備前焼や陶器・瓦などが約20点出土しており、時期は近世以降と考えている。(平井泰)

溝84（第202・219図）

宿舎区の西端部に位置する。幅50～80cm、深さ10～20cmの規模で、北東－南西方向に長さ約８ｍを検出した。南北で底の高さに大きな違いはなく、底面には凹凸が多く認められた。遺物が出土しなかったため時期は明確ではないが、埋土などから古代～中世と考えている。　(平井泰)

溝85・86（第202・219図、図版42－２）

宿舎区の西端部に位置する。溝85は幅2.3～4.5m、深さ40cm前後の規模で、北東－南西方向に長さ約９ｍを検出した。溝86をきっており、断面図の１～４層が溝85に相当する。断面図の５・６層が溝86である。幅約1.5m、深さ約25cmが残存しており、底面は凹凸が多かった。溝85からは少量の土器片が出土しており、時期は古代～中世と考えている。溝86の時期は明確でないが、溝85にちかいのではなかろうか。　(平井泰)

溝87（第202・219図）

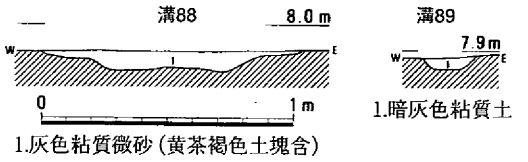
宿舎区の東半部に位置する。幅30～70cm、深さ５～15cmの規模で、ほぼ東西方向に約28m検出できた。埋土は灰白色微差が一層のみであった。時期を示す遺物は出土していないが、検出面や埋土などから近世以降と考えている。　(平井泰)

溝88・89（第204・220図、図版42－３）

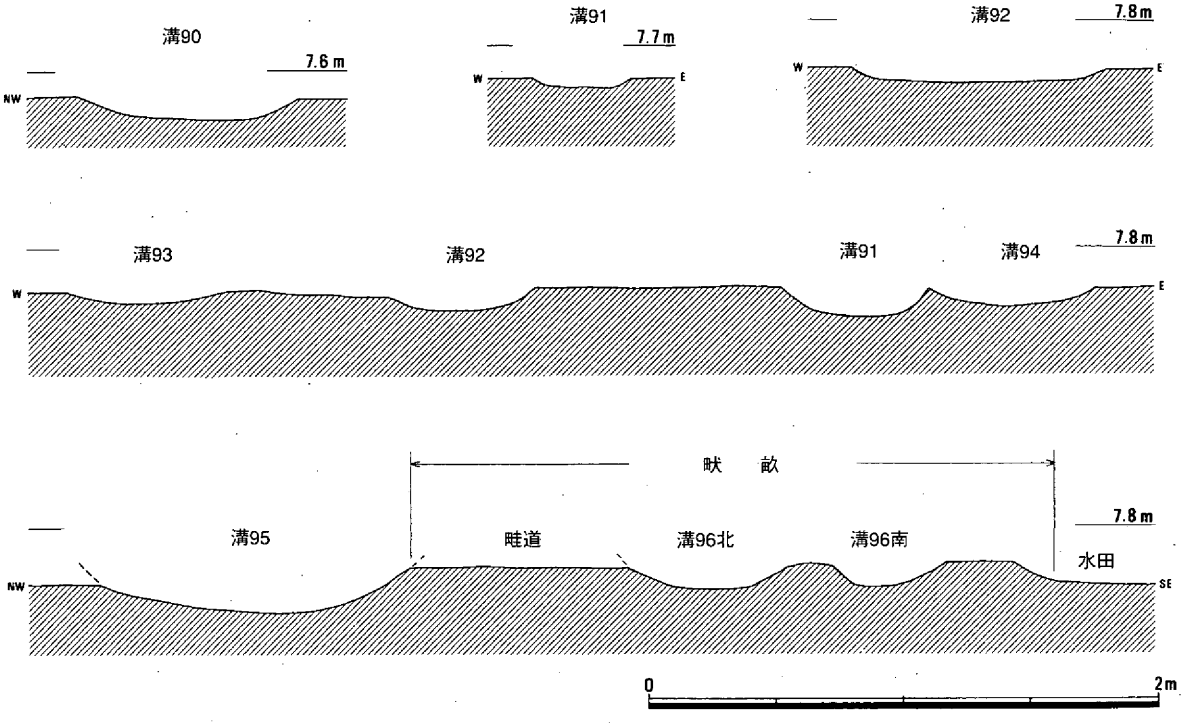
溝88は、水路２区の南端の19Ｐ区に検出され、調査区の中央を南流する溝である。幅は約100cm、深さは約10cmを測る。

溝89は溝88に隣接し、溝88と同様に南流する溝である。幅は約20cm、深さは約５cmを測る。ともに水路２区の調査区内で完結している。

遺物は出土していないが、埋土や遺構の検出状況から中世末の可能性が考えられる。　(根木)



第220図　溝88・89断面



第221図　溝90～96、畎畝断面

溝90・91（第204・221図）

付属建物２区、浄化槽区において検出された溝である。ほぼ南北方向に直線的にのびているが、北端部分で緩やかに東方に曲がり、溝97に切られている。溝97の北側で続きが検出されていないため、溝97と重複して東方向にのびていたと考えられる。溝の周辺には水田の存在が推定され、灌漑用水路としての性格が考えられる。時期は、埋土の色調から中世と推定される。（尾上）

溝92・93（第204・221図）

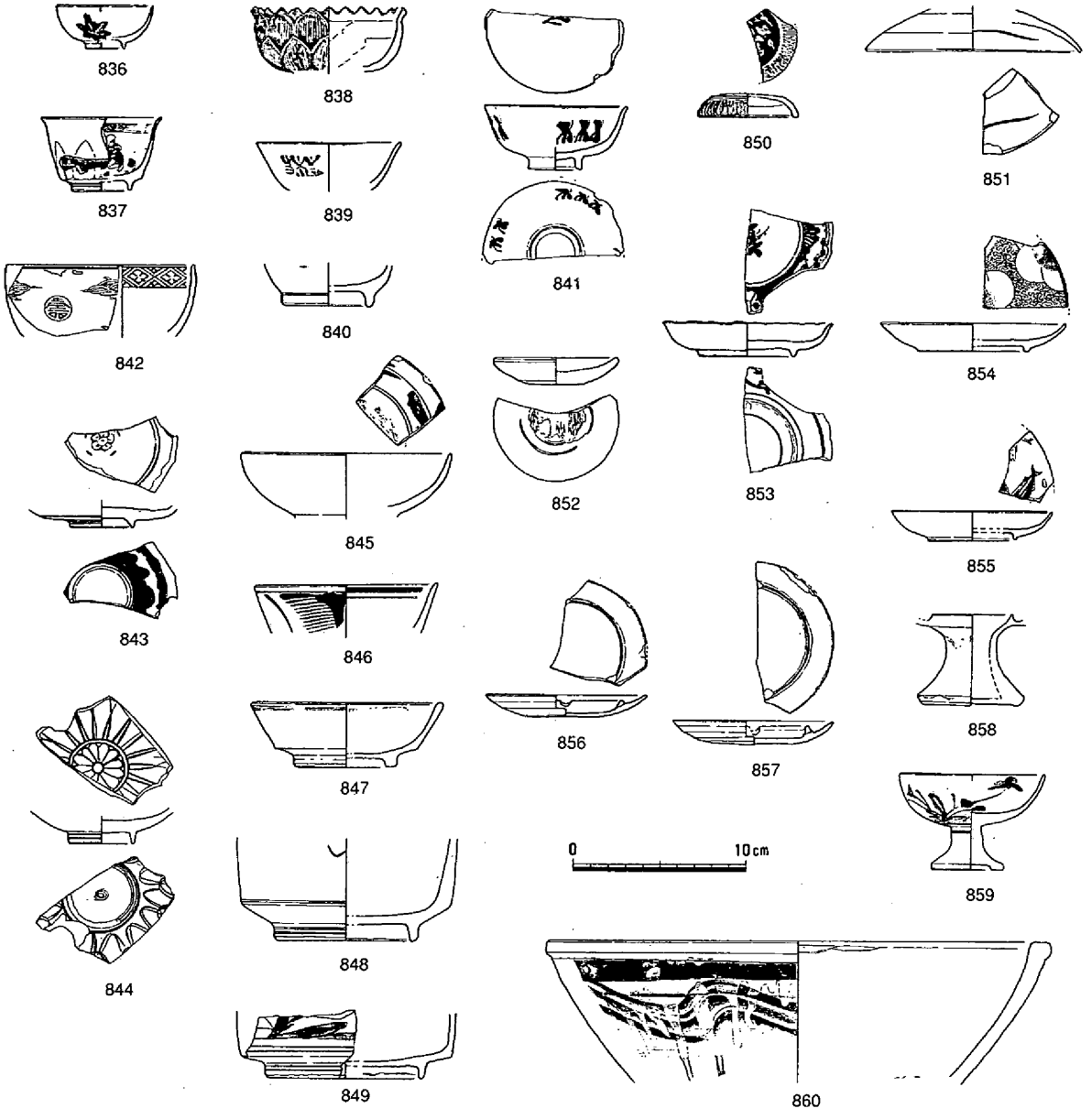
共同溝３区および付属建物１・２区で検出された溝で、共同溝３区では２条の溝が平行しているが、付属建物２・３区では１条となる。これは２条の溝が重なりあったことによるものではなく、付属建物２・３区の検出面がわずかに低いため、非常に浅い溝93は削られてしまったものと思われる。規模は溝92が幅１m、深さ４cm、溝93は幅60cm、深さ３cmを測る。時期は近世であろう。（平井勝）

溝94（第204・221図）

浄化槽区から共同溝３区で検出された溝で、北東から南西方向にほぼ真直ぐ流走する。検出長17m、幅65cm、深さ８cmを測る。埋土は灰白色粘質土で、弥生土器の細片を含んでいた。溝の時期は、出土した土器とは関係なく、検出面と埋土から中世ないし近世と考えられる。（平井勝）

溝95・96（第204・221図）

付属建物１区において検出された、東西方向に走る溝である。溝95は溝90から、溝96は溝92から、それぞれほぼ直角に分岐している。溝95と溝96の間には幅70～90cm前後の畔道状の高まりが作り出され、溝96の南側にも幅30～50cm程度の畔が認められる。いわゆる畎畝に相当するものであろう。溝96の底面レベルはその南側の水田面とほぼ同じで、導水機能をもっていたと考えられるが、溝95は水田面よりも深いことから、排水の機能をもっていたかもしれない。時期は、溝90～94と同様に中世で、それらと同時に機能していた灌漑用水路と考えられる。（尾上）



第222図　溝97（近世～近代用水）出土遺物

溝97（第204・222図）

付属建物１・２区の北部を東西に走る溝で、途中で北方に分岐している。この溝は現代まで機能しており、コンクリート製のＵ字溝が設置されていたが、それを除去すると下層にそれ以前の溝が検出された。出土遺物は江戸後期から近代にかけてのものであるが、溝の底部に近い部分では江戸後期のものが目立って出土していることから、溝の掘削はその時期にさかのぼるようである。ただし、中世の溝90と重複していることを考えると、中世の溝を踏襲している可能性がある。

出土遺物は第222図に示している。836～839・841は磁器の小杯で、染付のほか、蓮弁を模した陽刻を施すもの（838）がある。840は磁器の瓶である。842～846・848・849は磁器の碗、847は陶器の椀、850・851は磁器の蓋、852は陶器の皿、853～855は磁器の皿である。856・857は備前焼の灯明皿、858は磁器の台付灯明皿、859は磁器の高杯、860は肥前陶器の鉢である。（尾上）

第５節　包含層等の遺物

本節では、前節までに取り上げた遺構に混入したと思われる遺物、つまりその遺構の存続時期と異なる時期の遺物や、遺構検出時あるいは側溝掘り下げ時に遊離した遺物、いわゆる遺物を包含する堆積層中の遺物等の中から、より特徴的な土器あるいは完形に近い石器を選んで掲載した。

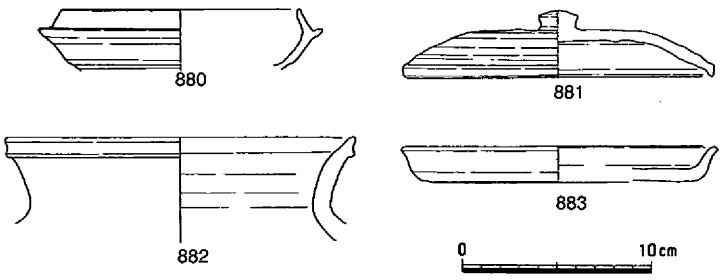
土器・土製品（第223・225図、図版61・64－２）

縄文晩期土器861～863は、弥生後期の溝33の埋土中の土器であり、水路８区の縄文河道の上層遺物の混入であろう。弥生土器864～868は前期後葉、同869～873は中期前葉、同874～876は中期中葉、同877・878は後期初頭、同879は後期末葉を示す。須恵器880・881は６Ｃ初頭、同882と土師器883は確実な遺構の見つかっていない８Ｃ前半とみてよい。また、土錘Ｃ７・Ｃ８はいずれも上下の口部分が

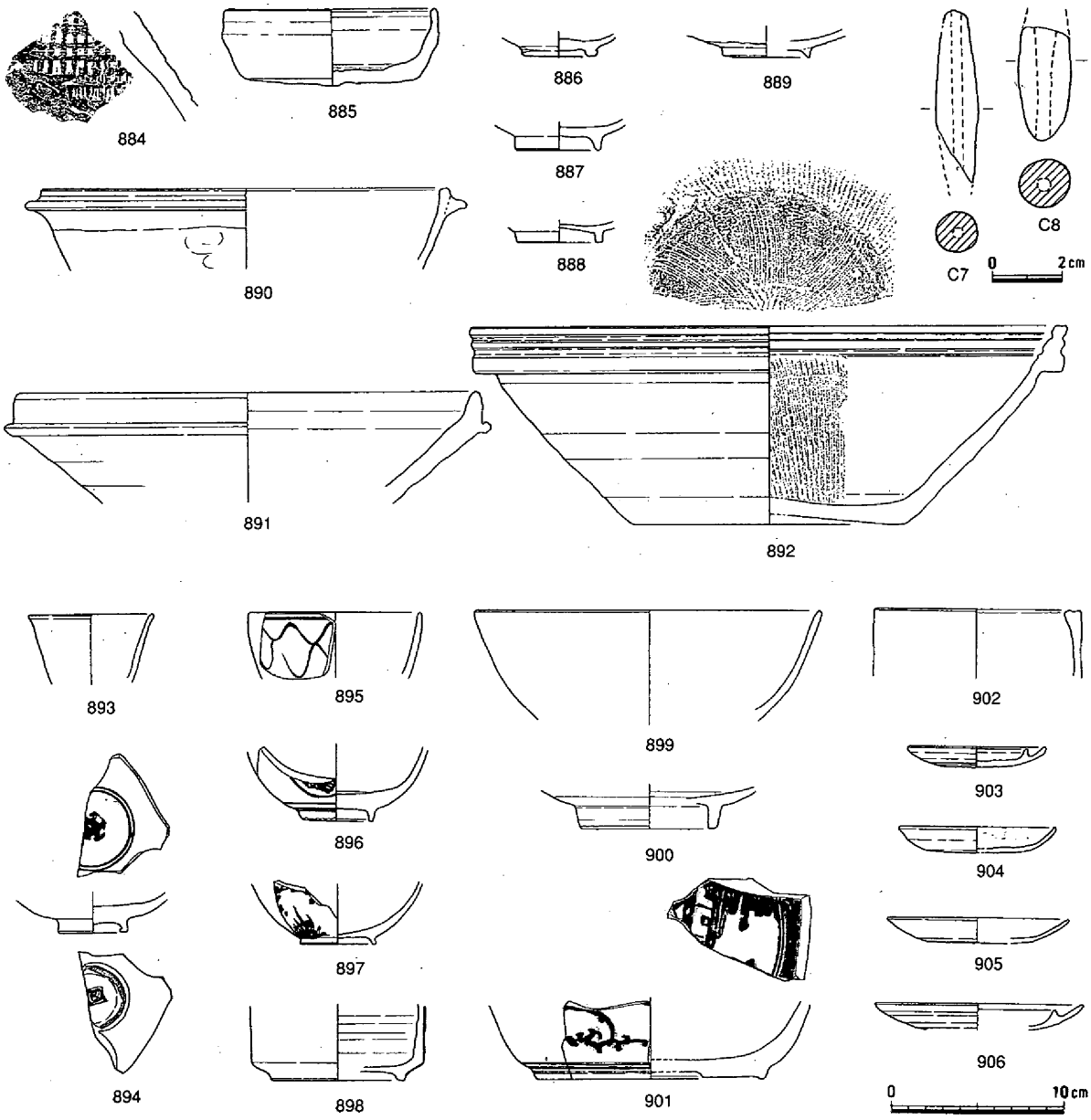
第223図　包含層等出土遺物（1）

細い中太の紡錘形を呈し、古代に時期を求められる。

884・885の須恵質土器、886～889の土師質土器、890の瓦質土器、891の備前焼捏ね鉢などは中世の範疇、892～906の陶磁器は江戸時代後期とみられる。



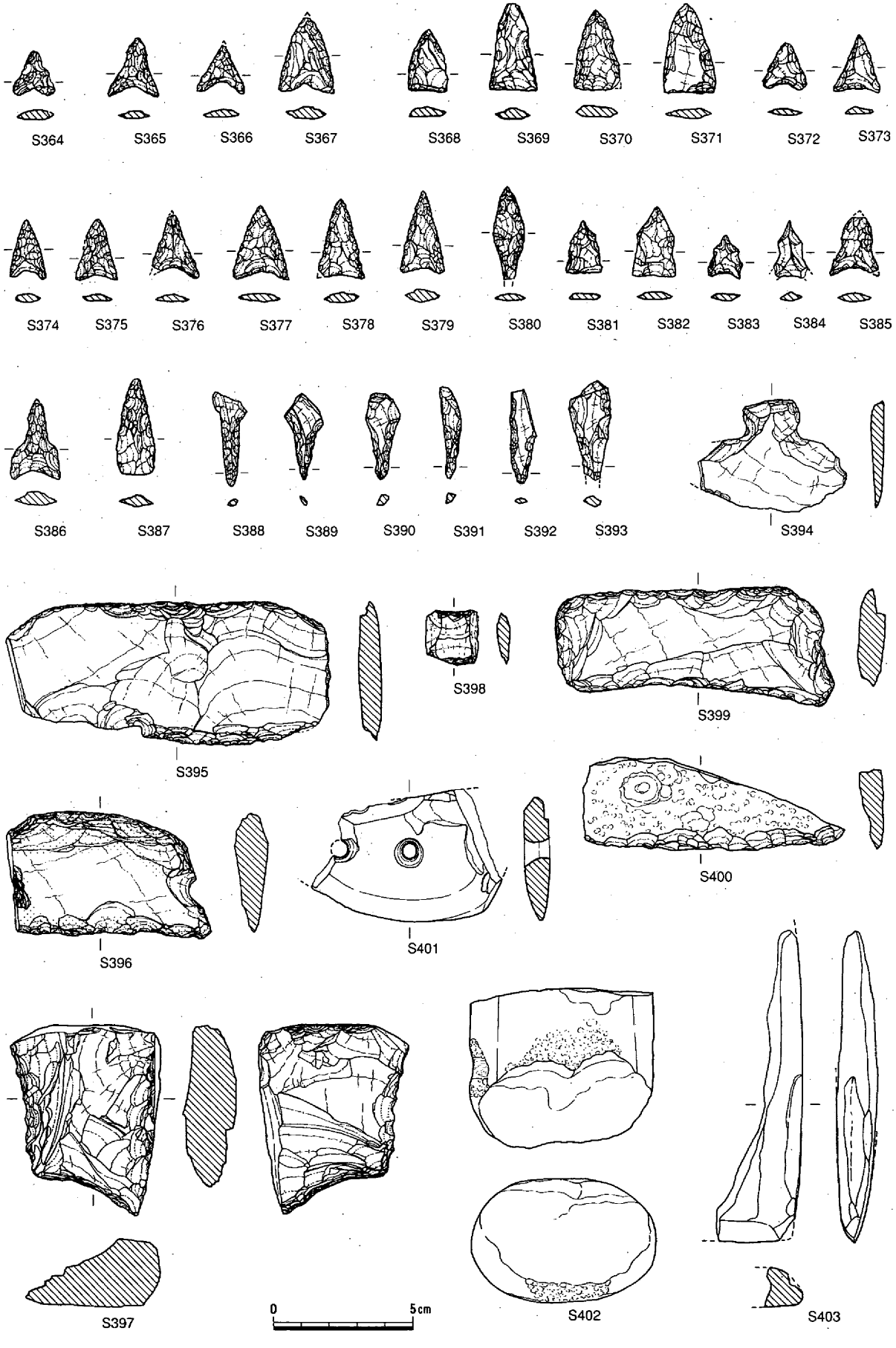
第224図　包含層等出土遺物（2）



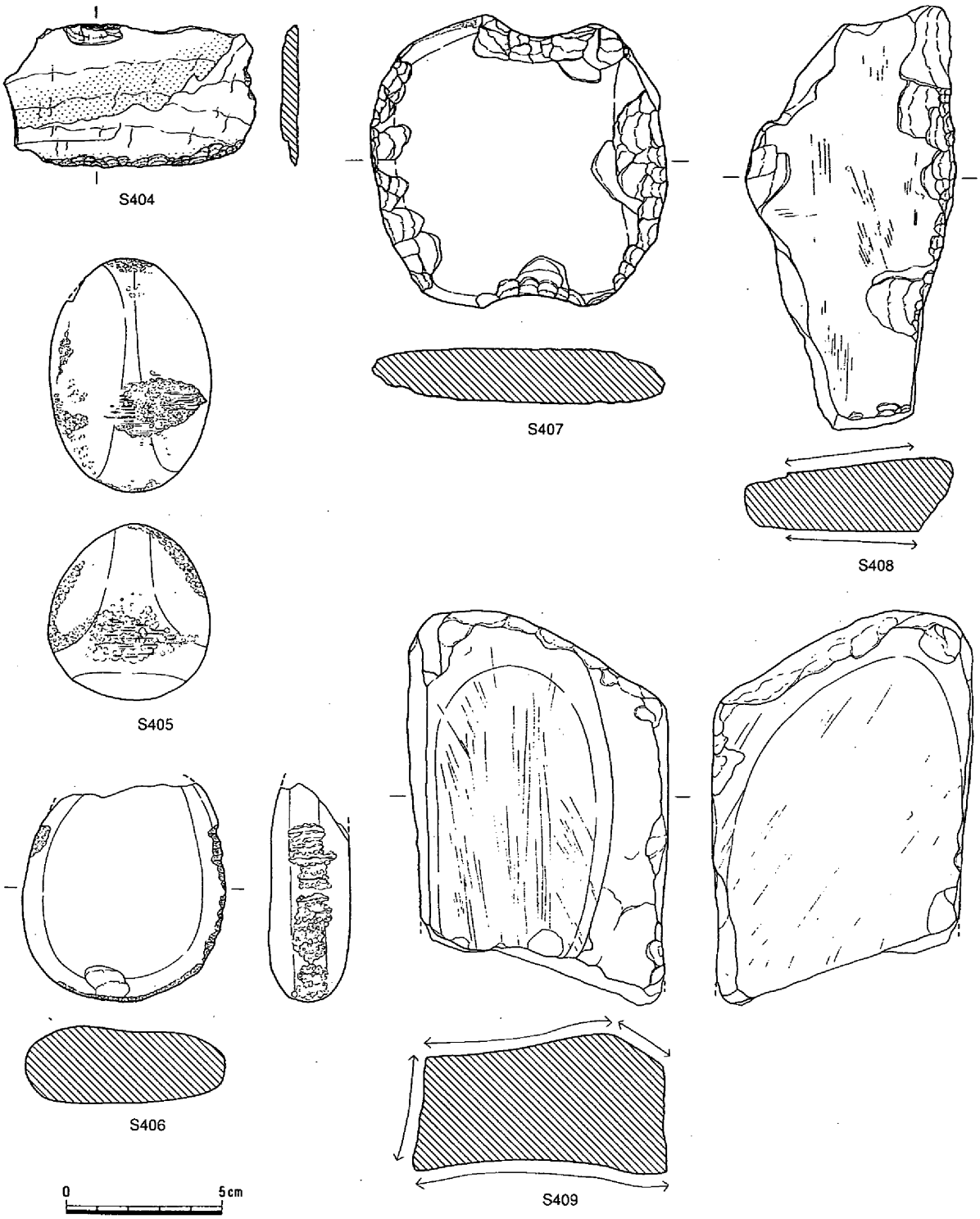
第225図　包含層等出土遺物（3）

石器（第226・227図、図版66）

石鏃S364～S367は河道１あるいは河道２に伴う可能性が強く、縄文後期かもしれない。また、S364



第226図　包含層等出土遺物（4）



第227図　包含層等出土遺物（5）

は唯一黒耀石製である。S368～S371は平基式、S372～S379は凹基式、S380は凸基式、S381～S386はやや変形を含むが弥生前期に特徴的な抉り入り式、S387は平基式の範疇である。ただ、S386は錐として使用された可能性もある。石錐S388は、他と比較にならないほど調整が細かい希有な例である。

そのほか完形に近い打製石包丁S395・S396・S399・S404や楔S398、扁平片刃石斧S403、石錘S407、敲き石S405・S406、砥石S408・S409などがある。そのうち、使用痕が著しく再生時に破損したS404と敲き石S405は河道10、S406は溝53、S407・S408は溝67出土の可能性もある。（柳瀬）

第４章　田益田中遺跡のまとめ

第１節　縄文時代の遺構と遺物

(1) 遺　構

縄文時代の遺構はわずかな土壙と溝を除けば、調査区の大半は旧河道の跡が占める。この旧河道跡は蛇行が著しいものの、全体としてほぼ北東から南西方向に流走する。いま少し詳しく見てみよう。

河道１は、一番北西側に位置する。水路５・６区から本館１区まではほぼ北東から南西方向に直線的に流走するが、本館４区で北側へ大きく屈曲し、さらにまた南西方向に曲がって直線的に流走する。河道２は河道１の東側をほぼ河道１に沿って北東から南西方向に流走するが、本館８区の北西端で北西方向に大きく曲がって河道１となる。河道３は宿舎区と本館５区で検出された。本館５区から始まり、河道２の５ｍほど東側を南西から北東方向に蛇行しながら流走する。河道３の東側には河道４が本館６区で検出されているが、その間、調査区で言えば本館５・８区の大部分に微高地が広がる。この微高地の南側を画するようにほぼ東西に蛇行しながら流走する河道５は、本館８区の西端で南側に大きく屈曲する。東側は河道９および河道６と繋がるものと推定され、蛇行しながら北東方向へ延びる。河道７は河道10と繋がるものと考えられ、水路２－１区から蛇行しながら浄化槽区に向かい、ここで大きく屈曲して南に流走する。浄化槽区の屈曲部は特に川幅が広くなっている。

以上のように、国立病院の調査区では、多くの河道がほぼ北東から南西方向に蛇行しながら流走し、河道の間には狭い微高地が形成されていたという自然景観が見て取れる。河道の中から出土する土器には、遠くから流れてきたことを感じさせる摩滅の著しいものが認められないことから、河道間の微高地、それもあまり遠くないところに居住していたことが窺われる。微高地が利用された時期は、河道から出土した土器によると、後期初頭から中葉までの一群と、晩期中葉から後半までの一群という、二時期に大きく分かれる。したがって、主にこの二時期に微高地が利用されたのであろうが、後期の一群は河道１・２・４・５・６、特に河道１を中心に出土していることから、北側の微高地を利用しており、晩期の一群は河道７・10を中心に出土していることから、南東部の微高地を利用していたことが推定される。その利用した集団がどのような生活をしていたかは、きわめて少ない遺構・遺物から多くを語れないが、一型式あたりの土器の量もわずかであることを考えると、小集団あるいは短期間の断続的な居住地であったものと考えられる。

田益田中遺跡の様相は、西側の笹ケ瀬川調節池建設に伴う調査区（註１）あるいは南側の山陽自動車道建設に伴う調査区（註２）、およびその南側の笹ケ瀬川調節池建設に伴う調査区（註３）の調査成果をも併せて考えなければならないが、笹ケ瀬川調節池の調査区でも、国立病院の調査区とほぼ同じように多くの河道が流走し、その中から縄文土器が出土している。したがって、この一帯にはかなり広範囲に縄文人の活動の痕跡が認められる。しかしその痕跡は粗であり、現状では少なくとも拠点と考えられるような場所は発見されていない。

（平井　勝）

註

註１　1995年度から1997年度まで岡山県古代吉備文化財センターが調査を実施した。報告書は1998年度に刊行予定。

註２　伊藤晃ほか「田益田中遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』128　1998年

註３　註１に同じ。

(2) 縄文後期の土器

縄文後期の土器は河道１・２・４・５・６・７・10から出土した。この内、河道１と10からは比較的多く出土したが、その他では少ない。河道によって時期的な違いが認められるかどうか検討したが、時期的な偏在はないものと思われた。また、調査時に詳細な土層に基づいて土器を取り上げていないことから、各河道内の堆積土や上下関係で時期差が認められるかどうかを検討することは出来なかった。そこで河道から出土した土器を、主に口縁部の形状と文様から分類し、既存の土器型式との関係を明らかにしたい。

Ａ．土器の分類

さて、河道から出土した土器は有文土器と無文土器とに分かれるが、これをさらに深鉢、鉢などの器種に分類し、主に口縁部の文様や形状により器種毎に細分を行なった。なお、分類については細片が多いため、その帰属について曖昧さが残るもののあることは否めない。

有文深鉢形土器

有文深鉢は磨消縄文系と縁帯文系の２群に大別する。

Ⅰ群土器

Ⅰ群土器は、沈線で曲線的な文様を描くものやその曲線間を縄文で埋める、いわゆる磨消縄文系土器群で、文様によりさらに細分される。この群に属する土器はわずかである。

一類（21・95・113など）

２本の沈線で描かれた曲線間に縄文が施されるものであるが、沈線による曲線が途切れることなく描かれる－Ａ類（113）と、沈線が曲線の変換点で一旦途切れながら描かれる－Ｂ類（95）がある。

二類（118・128など）

口縁部はないが、胴部の破片に３本の沈線で描かれた曲線間に縄文を施すものが認められることから設定した。

Ⅱ群土器

Ⅱ群土器は、肥厚した口縁部に文様が集中する、いわゆる縁帯文系土器群である。全体の形状は明確でないが、文様はⅠ群土器が口縁部から胴部まで連続して施されるのに対し、Ⅱ群土器は口縁部と胴部の文様が分離し、文様帯としてそれぞれ独立している。

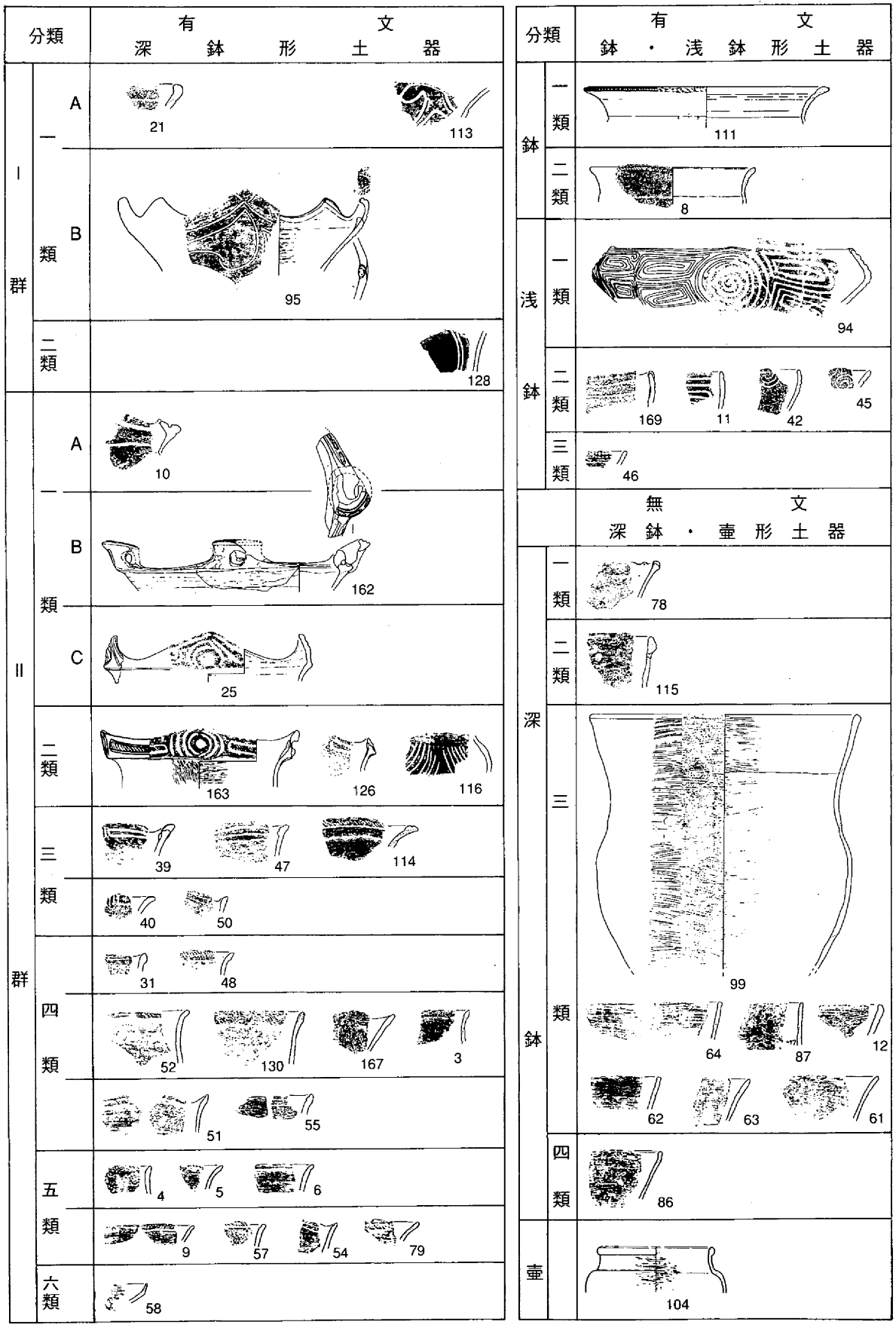
一類（１・10・24・24～28・125・160～162など）

一類は口縁部を内外あるいは上方に拡張し、そこに文様帯を形成するものを一括した。口縁部と胴部の文様の分離が明確であるが、なお頸部に文様をもつものが僅かに認められる。本類は口縁部の形状と文様で、さらに細分できる。

－Ａ類（10）は口縁端部を内外に拡張し、その上面に沈線を１条めぐらす。また、口縁下には頸部

第228図　縄文時代後・晩期の景観（1/1,200）

挿頁5



第229図　縄文後期の土器分類（1/8）

とを分ける界線がめぐる。なお、拡張された口縁部上面に縄文が施されていたかどうかは、摩滅しているため明確でない。

一Ｂ類（160～162）は口縁部を内外に拡張し、その上面に沈線をめぐらす。さらに沈線の外側には刻目状の短沈線を施すものが多い。なお162は短沈線が沈線と直交せず、沈線と平行している。また、本類には突起（161・162）や橋状の把手（160）などで口縁部から頸部を飾るものが比較的多い。

一Ｃ類（１・24～28・125）は波状口縁をなし、内傾ぎみに上方へ拡張するものを一括した。文様は波頂部下を中心に、左右に展開する。典型的なものは、波頂部下を円形に穿ち（26）、あるいは凹ませて（25）中心とし、その外側を沈線の円弧で囲み、さらに左右には沈線で弧文ないし途中に円弧文を配する。また、本類の口縁部文様帯は、沈線による文様のみであり縄文を施さないところが特徴である。

二類（29・32～34・36・77・116・126・127・163～165・170など）

二類は拡張した口縁部の外面を肥厚させ、そこに文様を集約するもので、頸部は無文化し、胴部に文様を施すが、32のように頸部に沈線を垂下させるものも僅かにある。口縁部文様帯は波頂部下に円形の凹みを施し、その外側を円弧で囲み、さらに左右に沈線による長方形の区画を配するもの（163）を典型とするが、長方形の区画のみのもの（126・165）、あるいは長方形の区画間に縦方向の短沈線を施すもの（33・127）などがある。二類の文様は一Ｃ類と類似しているが、二類は沈線による円弧や区画内に縄文を施すことが、一Ｃ類とは大きく異なる点である。

胴部の文様は明確でないが、116のような多条の沈線を左右に振り分けるような文様をもつものも本類に含まれるものと思われる。

三類（38～40・47・50・110・114など）

三類は口縁部を内側に肥厚させ、そこに文様を施すものを一括したが、さらに肥厚の度合いによって細分した。

三Ａ類（38・39・47・110・114）は内面への肥厚が強いものを一括した。内面の文様は縦方向の短沈線を中心に、左右に沈線による幅の狭い区画を配するもの（39）、あるいは１条ないし２条の沈線をめぐらせそこに縄文を施すもの（47・110・114）などがある。38は口縁部を内外に肥厚させるが、内面に円形の刺突を中心に短沈線を左右に配する文様が施されることから、本類に含めた。

三Ｂ類（40・50）は僅かに内面の肥厚が認められるものを一括した。内面の文様は短沈線の左右に区画を配すもの（40）、また沈線をめぐらすもの（50）など、三Ａ類と類似する。

四類（３・31・48・51～53・55・130・167など）

四類は僅かに外面を肥厚させ、そこに文様を施すものを一括したが、肥厚の度合いや文様を外面のみ、あるいは内外面に施すものなどで細分した。なお、四類の多くは胴部に縄文を施すのみの簡素なものである。

四Ａ類（31・48）は二類に比較すると肥厚の度合いも幅も狭いが、比較的明瞭に肥厚させているものを一括した。外面の文様は細い沈線を２条めぐらすもの（31）、あるいは縄文のみを施すもの（48）などがある。31は頸部に垂下する条線が施されている。

四Ｂ類（３・52・53・130・167）は口縁部外面が僅かに肥厚するもので、そこに縄文を施すものが多い。しかし、130のように櫛状工具で波状文をめぐらせ、頸部には同じ工具で斜めに条線を施すものや、167のように口縁部は無文にし、頸部に条線を垂下させるものもある。

四Ｃ類（51・55）も口縁部外面を僅かに肥厚させるが、文様を外面だけでなく内面にも施すものである。文様は外面に縄文、内面には沈線をめぐらすもの（51）や、外面は無文、内面には２条の沈線をめぐらすもの（55）がある。

五類（４～６・９・54・57・79・85・129など）

五類は口縁部の肥厚が認められないもので、端部は尖りぎみないし丸く収める。文様が外面のみに施されるものと、内面に施されるものとに細分される。いずれも器壁は薄く、調整にミガキを多用するなど、概して丁寧な仕上げを施している。

五Ａ類（４～６・85・129）は口縁部外面に幅の狭い縄文帯をめぐらすものである。

五Ｂ類（９・54・57・79）は口縁部内面に文様を施すもので、狭い縄文帯の下端を沈線で画するもの（９・57）、縄文帯に２条の沈線をめぐらすもの（54）、結節縄文帯をめぐらすもの（79）などがある。

六類（58など）

六類は外反する頸部から立ち上がる口縁部をもつもので、外面には２条の細い沈線がめぐる。器壁は薄く、丁寧な仕上げである。

有文鉢形土器

外反する口縁部の下端から僅かに膨らむ浅目の胴部をもち、丸底になるものを鉢とした。

一類（111など）

一類は口縁部の内面を肥厚させ、そこに沈線を１条とその外側に刻目をめぐらす。ただ111は深鉢になる可能性もある。

二類（８・100など）

二類は口縁部が肥厚しないもので、端部は丸くないし尖りぎみに収める。口縁部の文様は幅の狭い縄文帯をめぐらすもの（８）と、無文のもの（100）とがある。頸部下端と胴部の境には僅かな段をもつものが多く、胴部には全面縄文が施される。

有文浅鉢形土器

浅鉢は内面をミガキで丁寧に仕上げている。器形の判明するものはないが、文様によりさらに細分される。

一類（94など）

一類は口縁部がく字状になるもので、口縁部から胴部にはやや太い渦巻文を描き、その両側には長方形に渦を巻かせた文様を配している。

二類（11・42～45・169など）

二類は口縁部ないし胴部にかけて磨消縄文、あるいは沈線をめぐらすものである。11と43は磨消縄文、44と169は細目の沈線が数条めぐるが、やや摩滅しているため縄文が施されていたかどうかは明確でない。42と45は口縁部に沈線で渦巻文を描いている。器形は口縁部が直立ないしやや内湾ぎみのボール状を呈するものと考えられるが、45は皿状に開くものであろう。

三類（46など）

三類は口縁部に２条の押引文がめぐり、その下を沈線で画するものである。

無文深鉢形土器

口縁部や頸部に文様のないものを一括したが、胴部に縄文を施すものもある。器形は外反ぎみに立

ち上がる長い口頸部に、口径近くまで膨らんだのち底部に向かって徐々にすぼまる胴部がつく。調整は概してやや粗雑である。口縁部の形状によってさらに細分される。

一類（78など）

一類は口縁端部に幅の広い刻目を施すものである。調整は内面がミガキ、外面はナデで仕上げる。

二類（115など）

二類は口縁部の外面を肥厚させるもので、115には補修孔が穿たれている。

三類（12・61～64・87・99・101・103など）

三類は開きぎみに立ち上がる頸部から単純に口縁部となり、端部は丸くないし尖りぎみに収めるものを一括したが、調整は何種類か認められる。内面の調整は基本的にミガキによるが、64のような条痕も僅かに見られる。外面は条痕調整のもの（12・64・87・99）と、ナデによるもの（61～63・101・103）とがある。なお、条痕には12と64のようなやや幅の広いものと、87と99のような細いものとが認められる。

四類（86など）

四類は外反しながら立ち上がる頸部に、ほぼ垂直に立ち上がる口縁部が付くもので、調整は内面がミガキ、外面はナデによって仕上げている。

無文壺形土器（104など）

口径より大きい胴部にやや内傾ぎみに立ち上がる頸部をもち、口縁部は外面を肥厚させている。頸部と胴部の境界には段をもつ。調整は内外面とも丁寧なミガキで仕上げている。

Ｂ．既存の土器型式との関係

後期前半から中葉の土器を、器種ごとに主に口縁部の文様から分類を試みたが、最後に既存の土器型式との関係を述べ、まとめとしたい。なお、土器編年表は関係する部分のみ掲載している。

有文深鉢のＩ群土器は磨消縄文系土器群としてまとめられるものである。このうち一類とした土器は２本の沈線間を縄文で埋めるものを一括したが、一Ｂ類は沈線の途中が途切れることから、かって「中津Ⅲ式」とされ（註１）、その後「福田ＫⅡ式古段階」（註２）として再設定された土器に相当する。なお、一Ａ類は中津式であろう。二類は３本の沈線間に縄文を施すもので、これまで典型的な福田ＫⅡ式とされてきたものである。

有文深鉢のⅡ群土器は縁帯文系土器をまとめた。このうち一類としたものは成立期の縁帯文土器で、浅鉢一類などもこの時期に含まれる。泉・玉田の言う「四ツ池式」（註３）、千葉の「広瀬土壙40段階」（註４）、あるいは出原の「松ノ木式」（註５）に相当すると考えられる。浅鉢一類は松ノ木遺跡（註６）の有文浅鉢Ⅲ類に類似する。また、鉢一類もこの時期に含められるのではなかろうか。なお、一Ａ類は、口縁部の下に頸部とを界

表２　縄文後期の土器編年

	土器型式	
縄文後期	中津式	古段階 新段階
	福田ＫⅡ式	古段階 新段階
	（広瀬土壙40段階）	
	津雲Ａ式	
	彦崎ＫＩ式 ＋　（永井遺跡） ＋　（津島岡大遺跡） 四元式	
	彦崎ＫⅡ式	

する沈線がめぐっているが、やや古い様相を留めているものとして成立期の縁帯文土器に含めた。

二類は口縁部の外面を肥厚させ、そこに文様を集約するもので、津雲Ａ式に相当する。二類はその典型であるが、三類あるいは四Ａ類、鉢二類、浅鉢二類の一部、壺なども伴うものと考えられる。

三類は口縁部の内面を肥厚させ、そこに文様を集約することから、彦崎ＫＩ式と考えられなくもないが、二類に伴う可能性もある。

四類は彦崎ＫⅡ式に先行する土器で、五類、鉢二類、浅鉢二類の一部もこの時期に含まれる。彦崎ＫＩ式と彦崎ＫⅡ式間の土器は少なくとも３段階には細分される（註７）が、その中段階のものは津島岡大遺跡の大学院自然科学研究棟で出土（註８）しており、新段階は百間川沢田遺跡四元調査区（註９）から出土した土器を基準に四元式（註10）が提唱されている。しかし、少量の土器ではどの段階に属するのかは明確にし得ない。

五類は口縁部の肥厚がなくなるものの、端部に狭い文様帯をもつもので、四類の退化したものといえる。四類の一部とともに彦崎ＫⅡ式に含まれるものと考えられるが、一部はそれ以前に相当するものの可能性がある。六類および浅鉢三類も彦崎ＫⅡ式と思われる。

無文の深鉢は時期を明確にし得ないが、一類は有文深鉢Ⅰ群に、二類は有文深鉢のⅡ群二類に伴う可能性が高い。三類と四類は特定の土器型式に帰属さすことは困難で、Ⅰ群からⅡ群の土器に伴う粗製深鉢である。ただ、器壁が薄めでやや丁寧な仕上げのものは、彦崎ＫⅡ式ないしそれに先行する時期のものである可能性が高い。

縄文後期の土器をまとめるにあたり、千葉豊氏から御教示を得た。厚くお礼申し上げる。

（平井　勝）

註

註１　泉拓良・玉田秀英「文様帯系統論―縁帯文土器―」『季刊考古学』第17号　1986年

註２　玉田芳英「中津・福田ＫⅡ式土器様式」『縄文土器大観』４　1989年

註３　註１に同じ。

註４　千葉豊「備前市新庄西畑田遺跡採集の縄文土器」『古代吉備』第９集　1987年

註５　出原恵三「第Ⅶ章　松ノ木式土器の提唱とその意義」『本山町埋蔵文化財調査報告書』第３集　1992年

註６　出原恵三「松ノ木遺跡」『本山町埋蔵文化財調査報告書』第３集　1992年

註７　橋本雄一氏も同様の見解を発表されている。
橋本雄一「彦崎ＫⅡ式に先行する土器群について」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第７冊　1994年

註８　山本悦世・阿部芳郎ほか「津島岡大遺跡４」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第７冊　1994年

註９　平井勝ほか「百間川沢田遺跡３」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』84　1993年

註10　平井勝「縄文後期・四元式の提唱―彦崎Ｋ２式に先行する土器群について―」『古代吉備』第15集　1993年

(3) 縄文晩期の土器

Ａ．土器の分類

晩期の土器は河道１・７・10から出土しているが、その多くは河道10からで、残りの河道からは僅かである。河道単位で時期的な偏在が認められるようで、河道１からは突帯文出現前と出現後のものが、河道７は突帯文出現前が、河道10からは突帯文出現前と出現後のものが出土している。しかし、層位毎に新旧があるかどうかは、詳細な層位に基づいて土器を取り上げていないので、検討できない。したがって、ここでは器種毎に主に口縁部の文様と形状で分類を行ない、それを既存の土器型式に対応させ時期的な変遷を述べる。なおここで晩期の土器としたものの中には、弥生時代早期説（註１）に立てば弥生早期とすべき土器が含まれるが、一応晩期の土器として一括しておく。

深鉢形土器

Ｉ群

突帯文をもたないものを一括したが、文様の有無でさらに細分できる。器形は、外反気味に立ち上がる口頸部下端と胴部の境界がくびれ、上半で膨らんだ胴部は底部に向かってすぼまる砲弾形を呈する。底部は小さな凹底であるが、まれに丸底も存在する。

一類（89・137・138・180・181・185・189・190・368など）

頸部に文様をもたないものを一括した。口縁端部は平坦な面をもつように仕上げられるものが多く、そこにはほぼ例外無く刻目が施される。調整は外面をナデによって仕上げるもの（180）もあるが、多くは横方向の条痕（138・185）が残る。内面はミガキないし丁寧なナデを行なっている。

二類（132・134・140～148・172～178・182・183・186～188・194～209・353・354など）

頸部に文様をもつものであるが、文様によりさらに細分される。

二Ａ類（353など）は爪形文を施すものである。爪形文は基本的に口縁部から垂下させるものと、頸部下端にめぐらすものとが組み合わさる。口縁部から垂下する爪形文は、平口縁から４単位を垂下するものと、口縁部の４箇所を僅かに隆起させた波頂部から２列が頸部下端まで垂下するものとがあるが、後者の方が多数を占める。爪形文は頸部下端の胴部との境界にも横位に施されるため、境界部に明瞭な段をもつものが多い。同一固体では垂下するものと、横位に施される爪形文は同じ工具と思われるが、なかには異なるものもある。爪形は各種見られ、幅の狭いもの（207など）と広いもの（199など）、あるいは押引き状のもの（200など）や爪形と言えないような刺突（174・175など）などが認められるが、頸部下端の爪形は基本的に逆Ｃ字状になる。なお、口縁端部は一類同様、平坦な面を作り出すように仕上げ、そこに刻目をめぐらす。

調整は口頸部外面に横位の条痕を残すもの（199・353など）が多く、胴部外面はケズリによる仕上げである。内面はミガキないし丁寧なナデを行なっている。

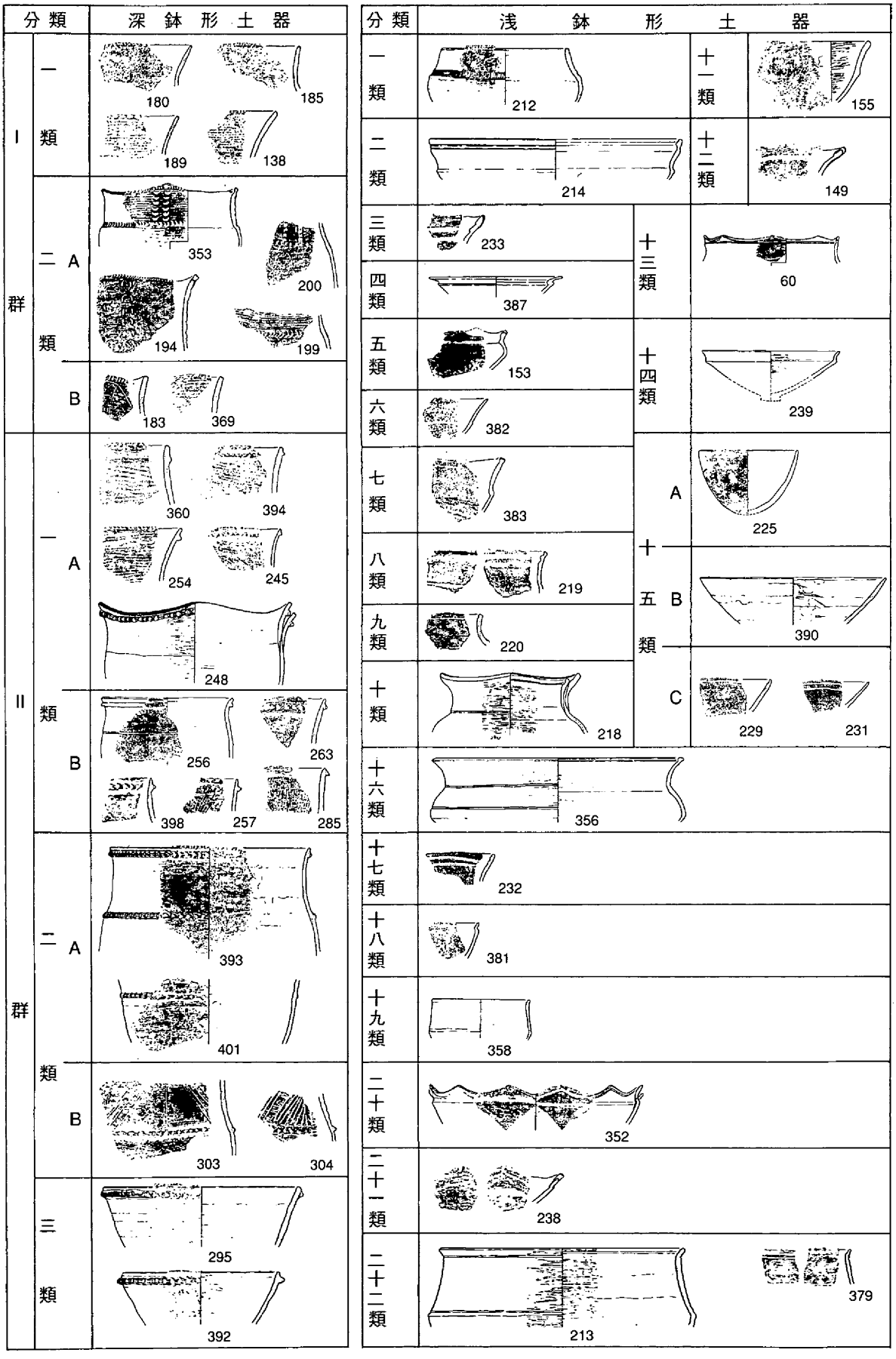
二Ｂ類（183など）は頸部に箆描文を施すもので、調整等は二Ａ類と同じである。

II群

突帯文をもつものを一括したが、文様と器形でさらに細分できる。器形は基本的にＩ群を踏襲するが、新たに口縁部から底部に向かって単純にすぼまるものが加わる。底部は丸底と平底がある。

一類（92・158・242～283・285～287・289・298・347～350・360・361・391・394～398など）

口縁部に１条の突帯をめぐらすものであるが、口縁端部の形状でさらに細分できる。



第230図　縄文晩期の土器分類（1/8）

一Ａ類（360など）は原則として口縁端部を平坦に仕上げ、そこに刻目を施すものであるが、丸く仕上げて刻目を施すもの（246など）もある。突帯は口縁端部から僅かに下がった位置に貼り付けられ、基本的に刻目を施すが、刻目の無いもの（360）も少量存在する。器形は口縁部に平口縁と波状口縁（248など）との両者あるが、後者は少量である。Ｉ群に比較してくびれが弱くなり、頸部と胴部の境界が不明瞭になるものと明瞭なものとが認められる。調整は頸部外面を横方向に条痕で仕上げるもの（254など）と、ナデによるもの（245など）とがある。胴部外面は基本的にケズリであり、器形が胴部と頸部の不明瞭なものは、調整の違いによって頸部と胴部を分けている。内面は丁寧なナデないしミガキであるが、粘土紐の接合痕を残しているもの（391など）があり、その痕跡から粘土紐の幅を推定すると、２㎝前後となる。なお、粘土紐の接合はすべて内傾接合であった。

一Ｂ類（256など）は口縁端部を尖り気味ないし丸く仕上げ、刻目を施さないものである。突帯は基本的に刻目を施すが、その貼り付けられる位置は、一Ａ類と同じく口縁端部からやや下がったところ（268）、口縁端部に接するところ（289）、口縁端部から少し離れたところ（262）という３種類が認められる。器形は原則的に平口縁であるが、波状口縁も僅かにみられる。頸部から胴部にかけてのくびれは弱いが、その境界に沈線（249・256など）あるいは胴部上端側を箆で押さえて沈線状の段をめぐらすものもある。また、頸部下端のくびれが明瞭なもの（268など）もあるが、くびれの弱いものも合わせ、調整の違いによって頸部と胴部の境界を表している。その調整は頸部外面がナデないしミガキ、胴部はケズリであり、一Ａ類で認められた頸部の条痕は無くなる。内面は丁寧なナデないしミガキで仕上げられる。

二類（302～316・393・399～401など）

二類は口縁部に加え、頸部と胴部の境界にも突帯をめぐらす、いわゆる２条突帯をもつものを一括したが、文様の有無でさらに細分した。器形は平口縁で概して頸部のくびれが弱く、底部は平底が多いが丸底も存在する。

二Ａ類（393など）は頸部に文様が無いものである。口縁端部は尖り気味ないし丸く仕上げ、そこに刻目を施すものもあるが、原則的に刻目は施されない。口縁部の突帯が貼り付く位置は一Ｂ類と同じく３種類認められる。調整は頸部外面がナデないしミガキ、胴部はケズリが主でナデも見られる。内面は丁寧なナデないしミガキで仕上げられる。

二Ｂ類（303など）は頸部に箆描文をもつものであるが、沈線が密なもの（302・304など）と疎なもの（303など）とが見られる。その外の特徴は二Ａ類と変わることはない。

三類（288・294・295・392など）

三類は口縁部から底部に向かって単純にすぼまる、いわゆるバケツ形の器形を呈するものである。口縁部は平口縁で、突帯がめぐるが、突帯の貼り付く位置は、口縁端部からわずかに下がったところに付くもの（295）と、口縁端部に接して付くもの（288）とがある。底部は原則として平底である。内外面に残る接合痕から内傾接合であることが窺われ、その粘土紐の幅は２㎝前後を測る。調整は外面をナデ、内面はナデないしミガキで仕上げる。なお、392は胴部が浅いことから鉢に分類されるべきものであるかもしれないが、一応ここに分類しておく。

浅鉢形土器

浅鉢は多様な器形が認められるが、主に口縁部の形状で分類した。

一類（212・373など）

一類以外と異なり、文様、胎土、調整が深鉢と類似するもので、器形は内傾しながら立ち上がる口頸部に、やや膨らむものの底部に向かって急速にすぼまる胴部をもつ。頸部下端、胴部との境界には逆Ｃ字形の爪形文がめぐる。

二類（214など）

二類は口頸部が外反しながら稲妻形に立ち上がるもので、頸部と胴部の境界には明瞭な段をもつ。調整は内外面とも丁寧なミガキが施されているが、胴部外面はケズリと思われる。

三類（233など）

口縁部が外反しながら立ち上がるもので、口縁端部は外面がやや肥厚する。おそらく突起が付くものと考えられる。口縁部内面は強く押さえながらミガキを行なうことによって、段を２段めぐらしている。調整は内外面ともミガキである。

四類（387など）

四類は斜めに立ち上がる胴部から、一旦内側に強く折れ再び強く外反する短い口縁部をもつもので、調整は内外面ともにミガキである。

五類（153など）

五類は上半が内傾する胴部に、やや外反気味に立ち上がる短い口縁部が付くもので、おそらく口縁部には突起があるものと思われる。調整は内外面ともミガキである。

六類（236・382など）

胴部上半から口縁部まで外反しながら立ち上がるもので、口縁部と胴部の境界には沈線がめぐる。調整は丁寧なナデないしミガキである。

七類（383など）

七類は胴部から一旦内側へ屈曲させ、再び外反気味に立ち上がる口縁部をもつもので、頸部と胴部の境界には明瞭な段をもつ。調整は胴部外面を条痕で仕上げる以外は、ミガキである。

八類（219など）

やや外湾気味に立ち上がる口縁部をもつもので、胴部との境界には胴部側から強く押さえ付けるようにして作り出した沈線状の段がめぐる。また、口縁部の内面には２条の沈線がめぐる。調整は内外面ともミガキである。

九類（220など）

胴部から一旦内傾するものの再び外湾しながら立ち上がる口縁部をもつもので、口縁部内面には沈線が１条めぐる。調整は内外面ともにミガキである。

十類（218など）

十類としたものは一見壺形土器のようなものであるが、一応浅鉢に分類した。偏球形の胴部から一旦真直ぐに立ち上がり、上半が外反する口縁部をもつものである。口縁部は波状口縁で、内面には浅くて幅広い沈線がめぐる。頸部と胴部の境界には箆で強く押さえ付けた段がめぐる。調整は内外面とも丁寧なミガキが施されている。

十一類（155など）

胴部から単純に外反しながら立ち上がる口縁部をもつもので、口縁部と胴部の境界には外面のみ段がめぐる。

十二類（149など）

強く外反しながら立ち上がる口縁部をもつものである。口縁部は波頂間が短い波状口縁となり、内面は口縁端部から少し下側を篦で強く押さえ付けて器壁を薄くしているため、端部の内面が少し肥厚しているように見える。調整は内外面ともミガキである。

十三類（60など）

十三類はほぼ真直ぐ立ち上がる口縁部をもつもので、胴部との境界に明瞭な段をもつと考えられる。口縁部は波状になり、その波状にそっては沈線が施され、さらにその直下にも沈線がめぐる。また口縁端部からやや下がった位置には沈線がめぐる。調整は内外面ともミガキである。

十四類（239など）

底部から大きく開く胴部に、一旦内側に屈曲するが再び外反気味に立ち上がる口縁部をもつものである。口縁部と胴部との境界には明瞭な段が作られる。調整は基本的にミガキである。

十五類（226～231・255・389・390など）

十五類は椀状になるものであるが、形状および文様からさらに細分される。調整は二類から十四類に比べ、概して粗雑である。

十五Ａ類（225・389など）は深目のボール状を呈し、底部は丸底である。器壁は厚く、調整もナデで仕上げるため、粗雑な感じを受ける。

十五Ｂ類（390・226など）は底部から直線的に大きく開く器形で、内外面ともナデ調整のため粗雑な感じがする。

十五Ｃ類（229・231）は十五Ｂ類と同じ器形であるが、口縁部内面に１条（229）ないし２条（231）の沈線をめぐらす。

十六類（356など）

胴部最大径から内傾する胴部上半に、外反しながら立ち上がるやや長めの口縁部が付くもので、口縁部内面はカマボコ状に肥厚する。頸部と胴部の境界および胴部最大径の少し上には沈線がめぐる。調整は内外面ともミガキである。

十七類（232など）

十七類は外反しながら立ち上がる口縁部をもつもので、口縁部内面には篦で強く押さえ付けた段が２段めぐっている。調整は内外面ともミガキである。

十八類（381など）

十八類は椀状になると思われる胴部から、一旦内傾した後強く外反する短い口縁部をもつもので、内外面の屈曲部は段になる。調整は内外面ともにミガキである。

十九類（358など）

外側に大きく開く胴部にやや内傾気味に立ち上がる口縁部をもつもので、口縁端部はわずかに外反する。胴部と口縁部の境界には浅い沈線がめぐり、その結果そこには段が作り出されている。調整は内外面ともにミガキである。

二十類（352など）

平底の底部から大きく開く胴部に、外湾しながら立ち上がる口縁部をもつものである。口縁部は波頂間の短い波状口縁で、その内面には波状にあわせて１条の沈線がめぐる。調整は内外面ともミガキである。

二十一類（238・386など）

上面観が方形を呈する浅鉢である。口縁部の内面には沈線がめぐる。

二十二類（213・357・379など）

平底の底部から内湾気味に大きく開く胴部に、内傾しながら立ち上がる長い頸部の上端を短く外傾させた口縁部をもつものである。口縁部は頸部との境界および内面に沈線をめぐらせているが、沈線を施さないものもある。頸部と胴部の境界にも沈線をめぐらす。調整は内外面ともミガキである。

Ｂ．既存の土器型式との関係

主に口縁部の形状および文様などから土器の分類を試みたが、編年に沿って既存の土器型式との対応関係を述べておく。ただ、典型的なものについては細分された土器型式に対応さすことが出来るが、時期幅をもって存在する土器の対応関係はたやすくない。そこで、突帯文出現以前、そして突帯文出現以後を１条突帯の段階と２条突帯の段階という、大きく三時期に分け、その中での新旧関係のわかるものについては随時触れていきたい。

表３　縄文晩期の土器編年

突帯文出現以前	＋ 舟津原・南溝手土器溜り１ 舟津原・南溝手河道２ 谷尻式
突帯文出現後	前池式 広江・浜
	南溝手河道１ 津島岡大式 沢田式

さて、本論に入る前に関係する時期の土器型式について簡単に述べておく。まず突帯文出現以前であるが、表３に示した編年表（註２）のごとく、舟津原、谷尻式が知られている。この内、舟津原は南溝手遺跡出土土器を基準に、平井泰男によって新古に細分された（註３）。なお、舟津原以前の土器についてはここでは関係しないので省略する。

突帯文出現後はまず大きく二時期に分けられる。前半は１条の突帯がめぐることを特徴とする段階、後半は２条突帯とバケツ形の器形を呈する深鉢が出現することを特徴とする段階である。前半には前池式と広江・浜があるが典型的な土器は別として、ある程度一括性のあるものでないと対応関係は困難である。後半は南溝手河道１、津島岡大式、沢田式があるが、これらも漸移的な変化を示しており、典型的なもの以外はその帰属を明確にすることが困難である。なお、南溝手河道１の土器（註４）は新旧のものが混在しているが、大勢として津島岡大式より古い様相を示している（註５）。

深鉢Ｉ群一類は南溝手河道２の時期から突帯文出現後の前半まで認められ、前池式には30％前後が伴う。しかし、中心は南溝手河道２から谷尻式であり、Ｉ群二類が谷尻式の典型であることを考えると、Ｉ群一類の多くは谷尻式に伴うものであろう。谷尻式に特徴的な爪形文（註６）は、爪形文の幅が狭いものと広いものとが認められ、これは前者から後者へという時間的な変化として考えている（註７）が、田益田中遺跡では両者が見られるものの、分離することは困難である。なお、この時期の爪形文は、原則として逆Ｃ字形になる。

突帯文出現以前の浅鉢としては一類・二類・三類・四類・五類などが考えられるが、これらの中には突帯文出現後の前半まで残るものもある。浅鉢一類は深鉢Ｉ群二類の特徴をもつもので、ほぼこの時期に限定できる。浅鉢十六類も口縁端部が谷尻式に特徴的なカマボコ形をしており、この時期のものと考えられるが、南溝手遺跡の河道１（註８）からも類似した土器が出土しており、時期的な幅をもつ土器である可能性がある。なお、浅鉢四類は舟津原遺跡（註９）や南溝手遺跡の河道２（註10）

から出土しており、どちらかといえば舟津原の段階に中心をもつものである。この点を重視すれば、深鉢Ⅰ群の一部は舟津原の段階に伴うものである可能性もある。

以上、突帯文出現以前の土器は谷尻式を中心に、一部舟津原の新段階にあたる南溝手河道２に相当するものを含むと考えられる。

突帯文出現後の前半に属する土器は、深鉢ではⅡ群一Ａ類がある。前半は少なくとも２段階に細分できる（註11）が、一Ａ類をそれに明確に対応させることはできない。ただ、口縁端部が平坦で刻目を施し、頸部を条痕調整するものは前池式の可能性が強い。逆に口縁端部が丸くあるいは尖り気味に仕上げられ、条痕調整でないものは広江・浜に相当する可能性が強い。

浅鉢は七類・八類・九類・十類・十二類・十三類・十七類・十八類などがこの時期のものと考えられるが、明確さを欠くことは否めない。十四類は広江・浜から南溝手河道１の段階まで認められる。十五類もある程度時期幅をもっており、十五Ｂ類・十五Ｃ類は後半に中心をもつのに対し、十五Ａ類は前半にも後半にも存在する。

突帯文出現後の後半は、深鉢ではⅡ群一Ｂ類と二類、そして三類が相当する。一Ｂ類は口縁端部が丸くあるいは尖り気味になるとともに刻目も無くなり、さらに頸部から条痕調整が無くなることを特徴とするが、それがこの時期の特徴でもある。２条突帯である二類、バケツ形の器形を呈する三類は後半を象徴する特徴である。なお、二Ｂ類の箆描文は、時期が新しいものほど三角形の中を埋める斜線の数が多くなる。

浅鉢は十九類・二十類・二十一類・二十二類などが相当する。このうち二十類は津島岡大式に伴い、二十二類は沢田式を中心に津島岡大式にも伴う。また、十五Ｂ類と十五Ｃ類もこの時期に伴うものであるが、前半にも少量伴う。

さて、後半は３段階に細分されている（註12）が、それぞれに属する土器を明らかにすることはできない。したがって後半という長い時間幅の中でとらえておき、将来に期したい。

以上、田益田中遺跡の河道から出土した土器を分類し、既存の土器型式との関係を考えてきた。その結果、一部南溝手河道２（舟津原新段階）の段階まで遡る可能性のあるものもあるが、谷尻式から沢田式までの土器が認められた。

（平井　勝）

註

註１　佐原眞氏や近藤義郎氏の説に依拠するが、具体的には北部九州の山ノ寺式、中部瀬戸内地域の津島岡大式から弥生時代早期、板付Ⅰ式、津島式から前期と考えている。

佐原眞「弥生土器入門」『弥生土器Ⅰ』　1983年

近藤義郎「時代区分の諸問題」『考古学研究』126号　1985年

なお、最近では縄文後期の籾痕などの発見により、縄文時代の稲作は疑いないものと考えられる。しかし、弥生時代の基層は朝鮮半島からもたらされた水稲農耕文化の吸収発展により形成されており、縄文時代の稲作が弥生時代に継承されたものではないと思われる。ただ、朝鮮半島からの水稲農耕を吸収するにあたって、縄文時代の稲作経験が大きく役立ったに違いないであろう。

註２　下記の文献を基に作成した。

平井勝「岡山における縄文晩期突帯文土器の様相」『古代吉備』第10集　1988年

平井勝「瀬戸内地域における突帯文土器の出現と展開」『古代吉備』第18集　1996年

註３　平井泰男ほか「南溝手遺跡Ⅰ」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』100　1995年

註４　註３の文献に同じ。

註５　平井泰男氏は註16の文献で、津島岡大式より古い様相であるとの位置付けを行なっており、筆者も同様の見解である。

註６　爪形文は舟津原で出現するが、谷尻式に最も盛行し、前池式で激減する。

註７　註２の文献。

註８　註３の文献に同じ。

註９　藤田憲司「倉敷市舟津原貝塚の資料」『倉敷考古館研究集報』16　1981年

註10　註３の文献に同じ。

註11　註２の文献に同じ。

註12　註２の文献に同じ。

第２節　弥生時代の遺構と遺物

(1) 遺　構

今回の調査区から検出された弥生時代の遺構の種類は、竪穴住居・土壙・溝などがある。これらの内訳は、竪穴住居１軒、土壙103基（うち舟形土壙１基)、溝67条である。また多数の柱穴も検出されているが、基本的には土壙と溝が主要な遺構である。

溝は、規模によって大型のものと小型のものの２種類に分けることが出来る。大型の溝は、幅が３～４ｍのものから、中には10m前後に及ぶものもある。小型の溝は、１ｍ未満のものが大半で、40～50cmのものが主流である。大型の溝は、全てが北東方向から南西方向へ流れる。これらの方向は、規模こそ違うが縄文時代の河道の流れと概ね同じである。このことから考えてこれらの溝は、環濠のような形にはならず、実際に排水の用途があったものと思われる。ただし大型の溝は、時期によって遺跡の範囲を決める境界線にもなっていただろう。これに対し小型の溝は、流れる方向も一定せず、大半が大型溝に合流して終わる。これらのあり方から、小型溝は大型溝に付随するものであって遺跡範囲の境界線ではない。また土壙は、大型溝の周辺で築かれる傾向がある。

続いて遺構の時期であるが、前期から終末期まで全ての時期のものが存在する。しかし出土遺物は、その中でも前期Ⅱから中期Ⅱのものが多く、中期Ⅲからは極端に減少する。前期Ⅱから中期Ⅱまでの遺物の量は、弥生時代だけでなく、全時代を通じて最も多い。よって田益田中遺跡の中心時期は、この時期であるといっても過言ではない。続いて、各遺構を時期別に分けてみる。

表４　おもな溝の消長　（＊は大型溝、◎は主要時期）

遺構名	前期Ⅰ	前期Ⅱ	前期Ⅲ	中期Ⅰ	中期Ⅱ	中期Ⅲ	後期Ⅰ	後期Ⅱ	後期Ⅲ	後期Ⅳ
＊溝９		◎	○							
＊溝10						◎				
溝19										
溝24			○	○						
＊溝32		◎								
＊溝33						◎	○		○	
溝34										
溝35		○								
溝52			○							
＊溝53		○	◎	○						
溝59						◎				
溝60			◎							
溝62					○					
溝63					○					
＊溝64					○		○	○	○	
＊溝65				○	○			○	○	○
＊溝66			○	○	◎					
＊溝67			○	◎	○					
＊溝68					○	○				
溝69			○							
溝70						○				

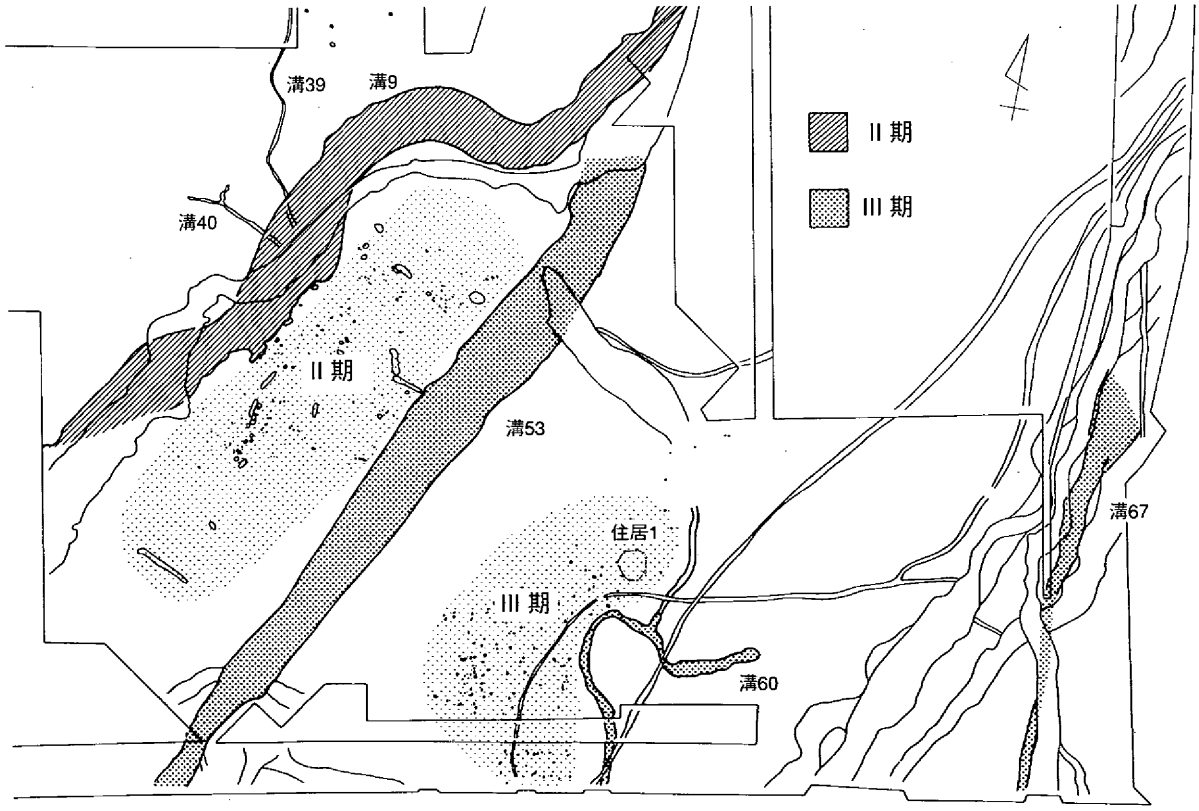
弥生前期（第231図）

前期Ⅱ－この時期の大型溝としては、溝９と溝32が存在する。溝32は、15Ｄ区周辺に位置し、溝の両サイドには同時期のものとして土壙24・25・28などがある（第61図）。位置関係や検出面などから考えると、土壙21・22・23・26・27もこの時期になると思われ、溝32周辺は前期Ⅱ期の段階に、一つの単位が存在したことになる。

溝９は第231図上の西側の位置し、同時期には小型溝39・40があり、溝９にそそぐような形を取る。これら溝39・40と同じ形をとる溝43～48も、この時期に位置付けられよう。このように溝９の西側には多数の小型溝が存在するが、東側へのびるものは１条も存在しない。代わりに溝９の東側では、多数の土壙や柱穴が存在する。溝９は18Ｊ区付近で一旦西側へ迂回し、再び南西方向へ向かって流れ出す。本来直進すべき場所に土壙群が存在するわけで、当時は土壙群のあった箇所が微高地として他の箇所より高く、最も良好な場所であったのであろう。逆に溝９の西側は多数の小型溝の存在から考えて、当時は湿地帯のような場所であったのかもしれない。この様に溝９とその東側周辺は、溝32周辺と共に、前期Ⅱにおける主要単位の一つとなる。また今回の調査区には入らないが、溝９より西側へ約150ｍほどいった地点に方形周溝墓などがある主要単位が存在する（註１）。

溝９の東側に位置する土壙群は、北側の方が前期Ⅱの土器を出土し、南側に行くにつれて前期Ⅲの土器が出土する。北側が古相で、南側が新相となる。最も古い土壙は土壙41で、土壙群中最も西側に位置し、溝53に切られている。溝９周辺の存続時期は、溝９からも前期Ⅲの土器がわずかに出土することから考えて、前期Ⅱをピークに前期Ⅲまで続き、Ⅲ期中に廃棄されたものと思われる。

前期Ⅲ－この時期の大型溝としては、溝24・溝53・溝67が存在する。溝24は12Ｈ区周辺に位置する溝である（第61図）。溝53と溝67は第231図上に位置する。このうち溝53は本館５・８区にあり、前段



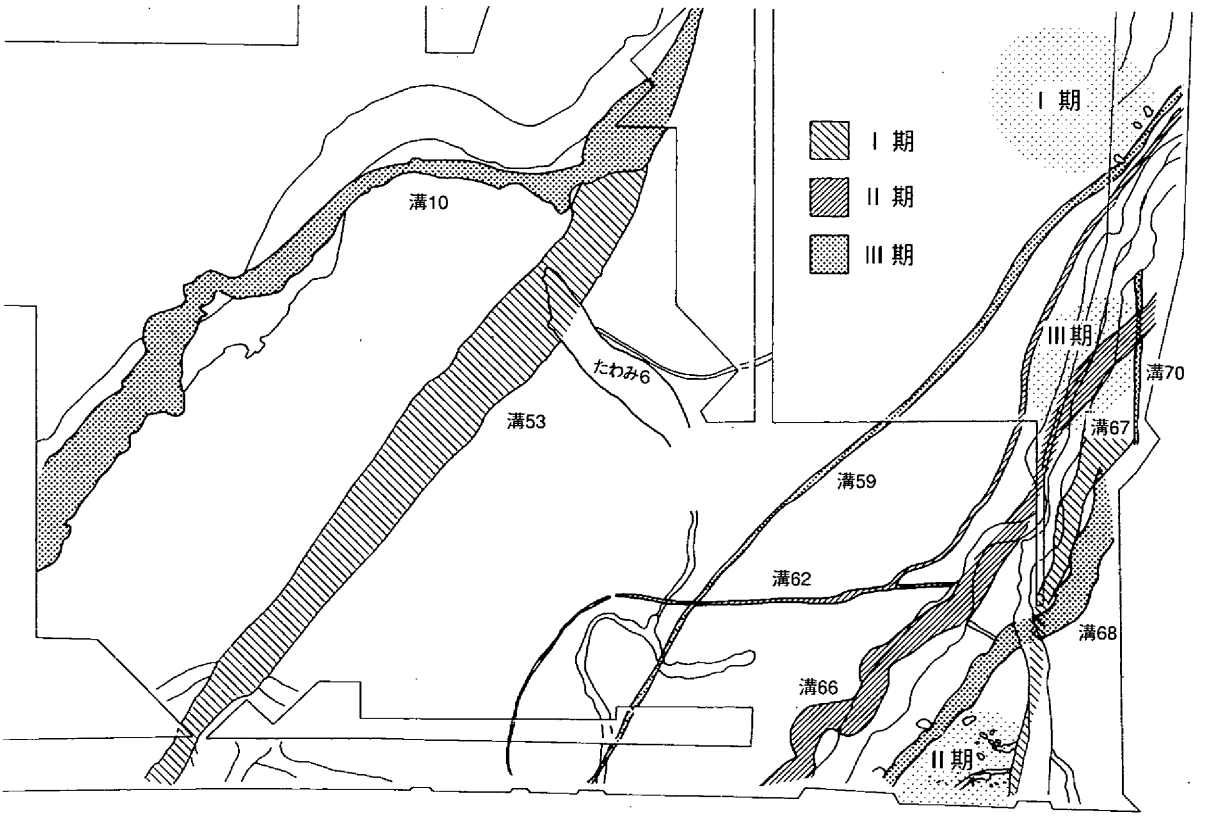
第231図　弥生時代の遺構配置（前期）

階の溝９周辺単位はすぐ西側に位置する。溝67は水路２－１区に位置する。両溝とも存続期間のピークはこの時期であるが、溝53は中期Ⅰまで、溝67は中期Ⅱまでの土器が出土する。２つの溝のちょうど中間地点には、小型溝である溝60が存在する。この溝60の西側には多数の柱穴群が存在し、また竪穴住居１もこの位置である。竪穴住居１にしても柱穴群にしても、遺物が出土せず確実な時期は解らない。しかし、２つの大型溝の中間地点に位置する溝60周辺に築かれることなどから考えて、竪穴住居１と柱穴群は前期Ⅲの遺構である可能性が強い。よって前期Ⅲの中心単位は、前段階より南東側に移り、溝60周辺になると思われる。

弥生中期（第232図）

中期Ⅰ－この時期の大型溝は、前時期と同じで溝24・溝53・溝67である。ただし溝60は姿を消し、代わってたわみ６が現れる。土壙では、土壙76・77・78・79・80・81・82・83・84・85・86・87・88・89・90・91・92・93が築かれる。これらの土壙は16Ｐ区周辺に位置し、前段階の中心単位からは北東方向へ 120mほど離れた位置になる。この位置は、溝53・たわみ６・溝67を結んだ線の内側になる。おそらくこれら土壙群の周辺が、この時期の中心単位であろう。よって大型溝は前段階と代わらないが、中心単位のみが移動したこととなる。

中期Ⅱ－この時期の大型溝としては、溝66が存在する。この溝の周辺には、中期Ⅱの土器を出土する大型溝が多数存在するが、土器出土量から考えてこの時期の中心は溝66であろう。溝66には小型溝として溝62が伴う。この溝62の東側は、前段階まで中心単位が存在した箇所であるが、この時期には全く遺構が無くなる。この時期の土壙としては、土壙112が大型溝67のすぐ西側に存在する。また溝66の東側にあたる土壙112周辺には、多数の土壙が存在する。それぞれの土壙の確実な時期は解らないが、位置と検出面から考えると中期Ⅱの可能性が強い。そうなるとこの時期の中心単位は、溝66の



第232図　弥生時代の遺構配置（中期）

東側で、土壙112の周辺と考えるのが妥当で、全段階の中心単位から約100m南に移る。

中期Ⅲ－この時期の大型溝として、溝10・33・68が存在する。この内溝33は調査区の西側に位置し、後期まで存続する（第61図）。溝10・68は第232図上にあり、溝10が西側で溝68が東側に位置する。溝10には小型溝として溝36・37・50が存在し、溝68には溝59・70が存在する。溝10はかつて溝９が存在したところと、ほぼ同一地区に位置する。この地区は中期Ⅱの段階で一旦溝の系譜がとぎれるが、中期Ⅲの段階になって再び治水が必要になったのだろう。ただし溝10周辺にはこの時期の土壙が全くなく、溝10は治水のみに使われ、中心単位を形成する様な溝ではない。また、第232図上東側の溝68周辺にも、確実にこの時期と認定できる土壙はなく、強いて中心単位をあげるならば溝68・59・70を結んだ線の内側に当たる土壙101・102・103周辺が候補になる。

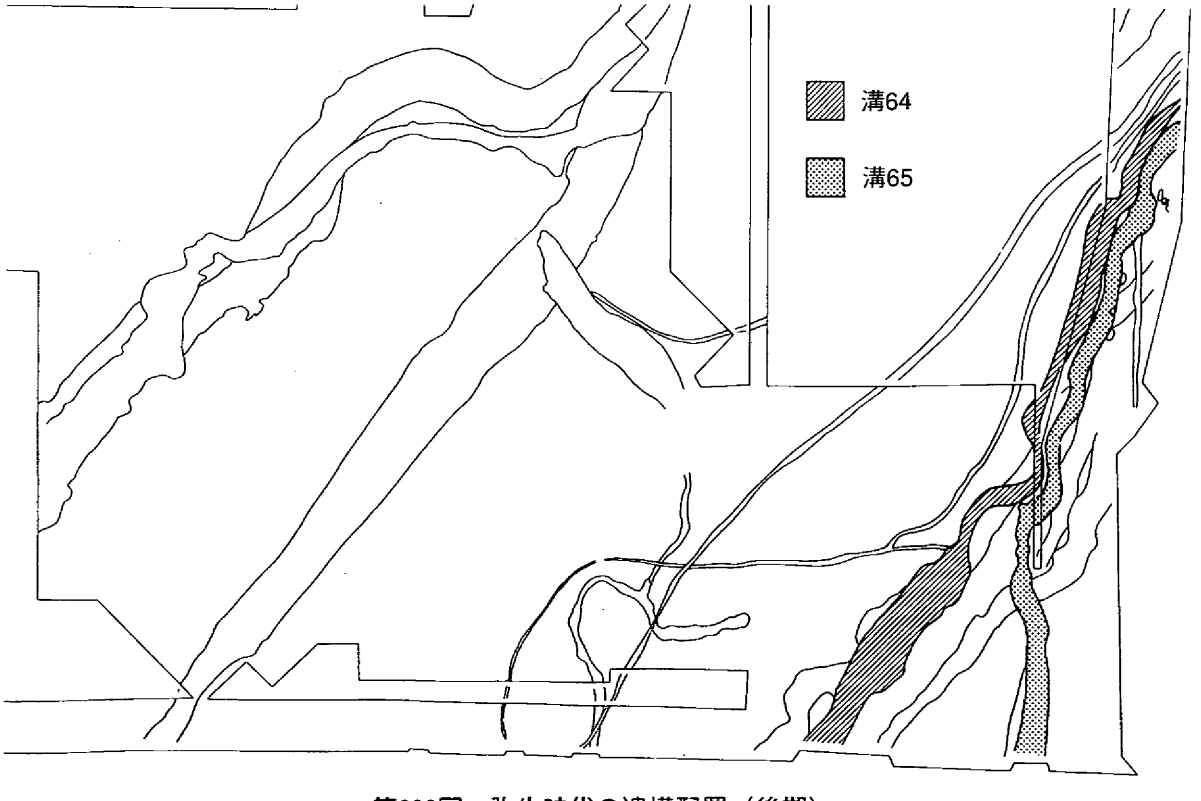
弥生後期（第233図）

後期の段階は、第233図上内から出土遺物が激少するため、前段階までのような細分は難しい。大型溝としては、前段階から引き続き溝33・64・65が存在する。第233図上に位置する両溝は、後期の土器を、小片で少量ではあるが、全時期を通じてまんべんなく出土する。ただし、溝65には後期Ⅳの土器が出土し、こちらの方が長く存続したものと思われる。土壙では、溝65のすぐ東側の土壙95・96から後期Ⅱの土器が出土する。この土壙95・96周辺に一つの単位が考えられ、もう一つの単位として、土壙95・96周辺から約100mほど南側の箇所が考えられる。後者は今回の調査区ではないが、竪穴住居が５軒検出されている（註２）。この単位は、ちょうど溝64と溝65の間に当たる。　　（小林利晴）

註

註１　伊藤晃ほか「田益田中遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』140　岡山県教育委員会　1999年

註２　二宮治夫ほか「田益田中遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』128　岡山県教育委員会　1998年



第233図　弥生時代の遺構配置（後期）

(2) 弥生土器の分類と出土パターン

A．土器の分類

今回の調査区から弥生土器は、前期から後期まで全時期を通じて出土する。しかし、津島式といわれる前期Ⅰの土器は出土しない。また、土器の量からいえば前期Ⅱから中期Ⅱまでの間がほとんどを占め、中期Ⅲから後までは小片が出土するにすぎない。よって前期Ⅱから中期Ⅱまではほとんどの器種で系譜が追えたが、中期Ⅲ以降は器種よって系譜が追えないものも存在する。

前期Ⅱ

出土の中心は、溝９とその周辺土壙および溝32とその周辺土壙である。

壺

削り出し突帯のものを基本とする。また頸部には２～３条程度の沈線が存在する。口縁部は、逆ハ字状に短く開くものを基本とする。頸部から口縁が横へ強く張り出し肥厚する554、頸部が直に立ち上がり口縁が少しだけ外反する553、頸部の沈線間に半竹管文がある601などがある。底部は上げ底が基本であるが、そのまま立ち上がる412、端部に粘土を貼り付けて段にする544などがある。文様には２～３条の重弧文（427)、羽状文（418)、無軸木葉文（419)、綾杉文、沈線間に刺突文があるものなどがある。やや古相のものとしては、土壙41出土の425～427がある。このうち425・426の口縁端部は、内側に刻目文がある。

無頸壺は、口縁部が肥厚してやや外反する557、外反しないで終わる560がある。

甕

頸部を削り出し突帯のみで飾る564・565、２～４条の沈線文がある566・567などがある。口縁部の形態は、く字形でわずかに外反するものを基本とする。口縁端部に刻目文のある564・567、無い565・566があり、数量的にはあるものの方が多い。胴部の形態は、やや膨れる564・566・567、そのまま底部へ直行する565などがある。

蓋

底部を逆さにしたような形で大型の535、頂部がわずかに持ち上がり下部が外反する小型の433などがある。

前期Ⅲ

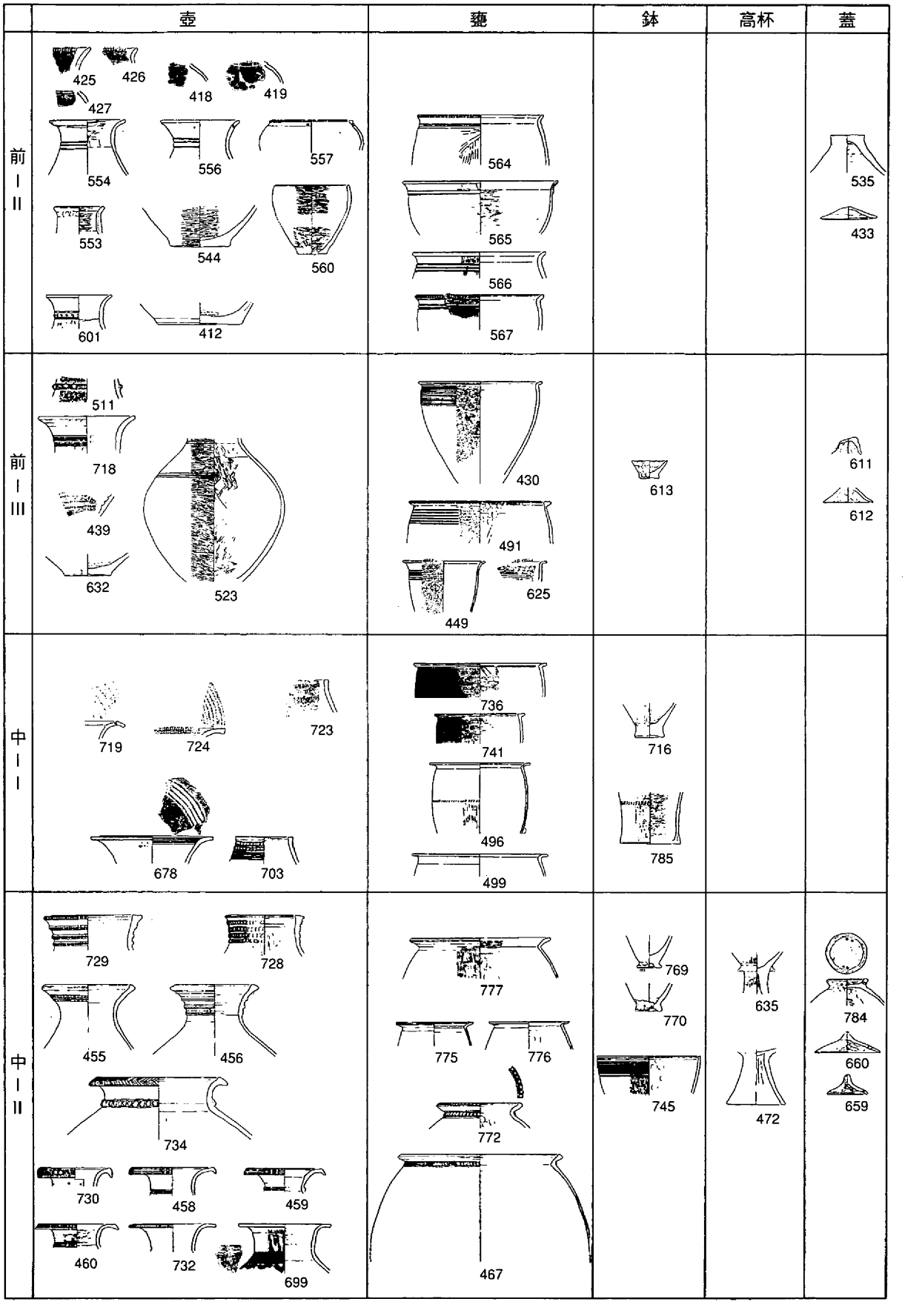
出土の中心は、溝24・53・60・67とその周辺である。前段階から引き続いて、溝９からも出土する。

壺

貼付突帯のもの（511）を基本とするが、数量はあまり多くない。全体的に器形は、523のように前期Ⅱより細めになる。頸部から口縁部の開きは一体的に開き、明瞭な稜をもたない。底部は、端部の段が前期Ⅱより少な目になる。頸部に付された沈線文が多条化するもの（718）もある。また口縁部の内側に、突帯の付くもの（439）が現れる。基本的に胴部に文様はない。

甕

頸部の沈線文が多条化し、削り出し突帯が無くなる。口縁端部に刻目文の付く491・625、付かない430・449があり、大半のものには付く。口縁部の形態は、基本的に前期Ⅱより鋭く外反する430、他に逆Ｌ字状の491、頸部からあまり差が無く外反する449、真横に外反する625などがある。胴部の形



第234図　弥生土器分類（前～中期）

態は、前期Ⅱより膨れ方が小さくなる。

鉢

小型で手捏ね風の613のみである。

蓋

大型のものは出土していない。小型の612は、頂部が前期Ⅱより高くなる。

中期Ⅰ

出土の中心は、溝24・53・67と土壙76～93である。

壺

口縁部が、頸部から大きく逆ハ字に外反し、端部内側に突帯文等が付される。端部が下方に下る719、肥厚する724がある。

無頸壺では、新相のもので、肥厚した口縁部の直化に指頭圧痕文が巡る703がある。これらは中期Ⅱに繋がる系譜である。

甕

古相と新相に分かれる。

古相の736・741は、前期まで頸部に付されていた沈線文が櫛描文に代わったものである。口縁部の形態は、前期Ⅲよりさらに鋭く外反する736、逆Ｌ字状の741などがある。端部に刻目文がある個体数が減る。

新相のものは、頸部への櫛描文が無くなる。496のように胴部最大径付近に列点文のあるものが多くなる。口縁部の形態は、く字状であるが、端部が下方にやや垂れる形である。

鉢

ジョッキ形の鉢785が現れる。

中期Ⅱ

出土の中心は、溝62・66と土壙112周辺である。

壺

古相と新相に分かれる。

古相のものは、口縁部が漏斗状に開き、頸部付近から口縁部にかけて突帯刻目文や指頭圧痕文などが３～４条付く。開きが少ない729・728と大きい455・456があり、前者は「船山５」式に、後者は「菰池」式に相当する。また「菰池」式には大型のものがあり、口縁端部が外方に引き出され、面を形成する734がある。734は端面に羽状文があり、頸部に指頭圧痕文が付される。

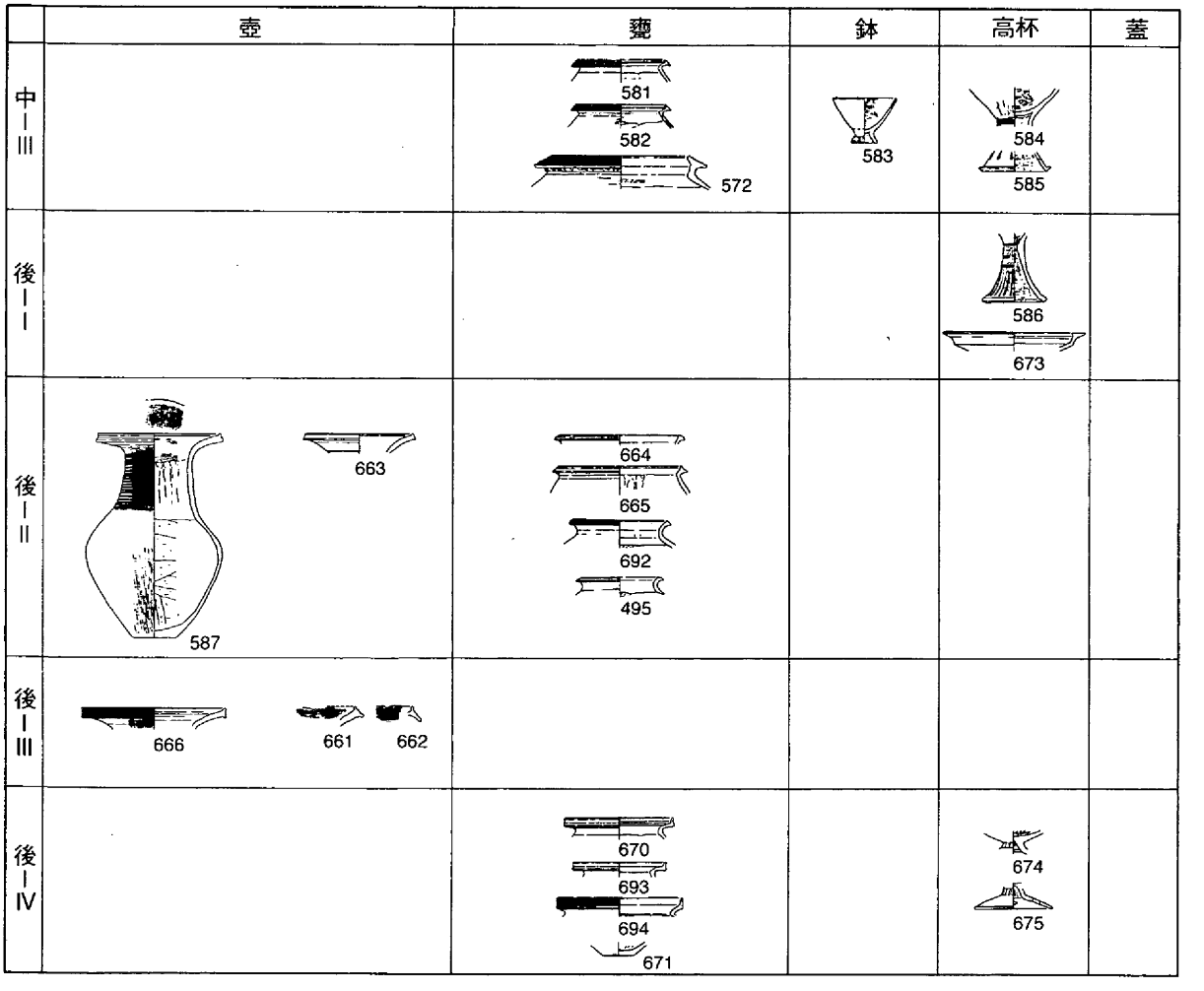
新相のものは、頸部から直状に立ち上がるが、口縁部が大きく外反し、端部が下方に張り出す。大半のもの（730・458・459・460・732・699）は端面に刻目文や斜格子文・凹線文をもつ。文様の上に円形浮文730、棒状浮文458・459をもつものも多い。胴部に櫛描文が付されるもの（699）もある。

甕

古相と新相に分かれる。

古相のもの（775～777）は、く字口縁の端部がわずかに上方に引き出される。胴部の最大径は、口縁径より大きくなるものが多い。

新相のもの（772・467）は、く字口縁の端部が肥厚し、上方に引き出される。頸部には指頭圧痕文が付されることが多い。



第235図　弥生土器分類（中～後期）

鉢

大半が台付（769・770）である。745は口縁部が直上に立ち上がり、多条の沈線文が付される。

高杯

脚部が高く、脚底部の開きが少ない。古相と新相に分かれ、前者（635）は身と脚の境に突帯があり、後者（472）にはない。

蓋

大型と小型がある。大型のもの（784）は、台付鉢を逆さにしたような形である。小型のもの（659・660）は、頂部に突起状のつまみが付き、下部は内側に向く。

中期Ⅲ

出土の中心は、溝10・33・36・37・50・59・68・70などである。

甕

古相と新相に分かれる。両者とも口縁端面には、凹線文が付される。

古相のものは口縁部がＴ字に張り出す581、上方へ張り出す582、などがある。「前山Ⅱ」式に相当する。

新相のもの（572）は口縁部がＴ字に張り出すが、端面が上方へ向く。「仁伍」式に相当する。

鉢

台付で小型のもの（583）のみ出土する。

高杯

杯部と脚部一体に作られ、杯部底部は、円盤充填がなされる。584は、杯部と脚部の境に沈線文が付される。585は、三角透かし孔が内側まで貫通している。

後期Ⅰ

高杯

中期Ⅲと同じで、杯部底部は円盤充填がなされる。586は、脚部の三角透かし孔が内側へ貫通しない。673は杯部の口縁部が外方へ立ち上がり、さらに端部が外方に張り出す。586は古相で、673は新相である。

後期Ⅱ

壺

587は、長頸壺である。663は口縁が逆ハ字状に立ち上がり、端部が上方に張り出す。

甕

口縁端部が下方へわずかに張り出す。端面は斜めであり、凹線風の沈線文が付される。

後期Ⅲ

壺

666は口縁端部が上方へ張り出し、端面が横を向く。ヘラ描き沈線が付される。661・662は端面に鋸歯文が付される。

後期Ⅳ

甕

口縁端部の上方張り出しがいっそう強くなり、端面は横を向く。端面にヘラ描き沈線のある694、無い670・693がある。671の底部は平底で、径が小さくなる。

高杯

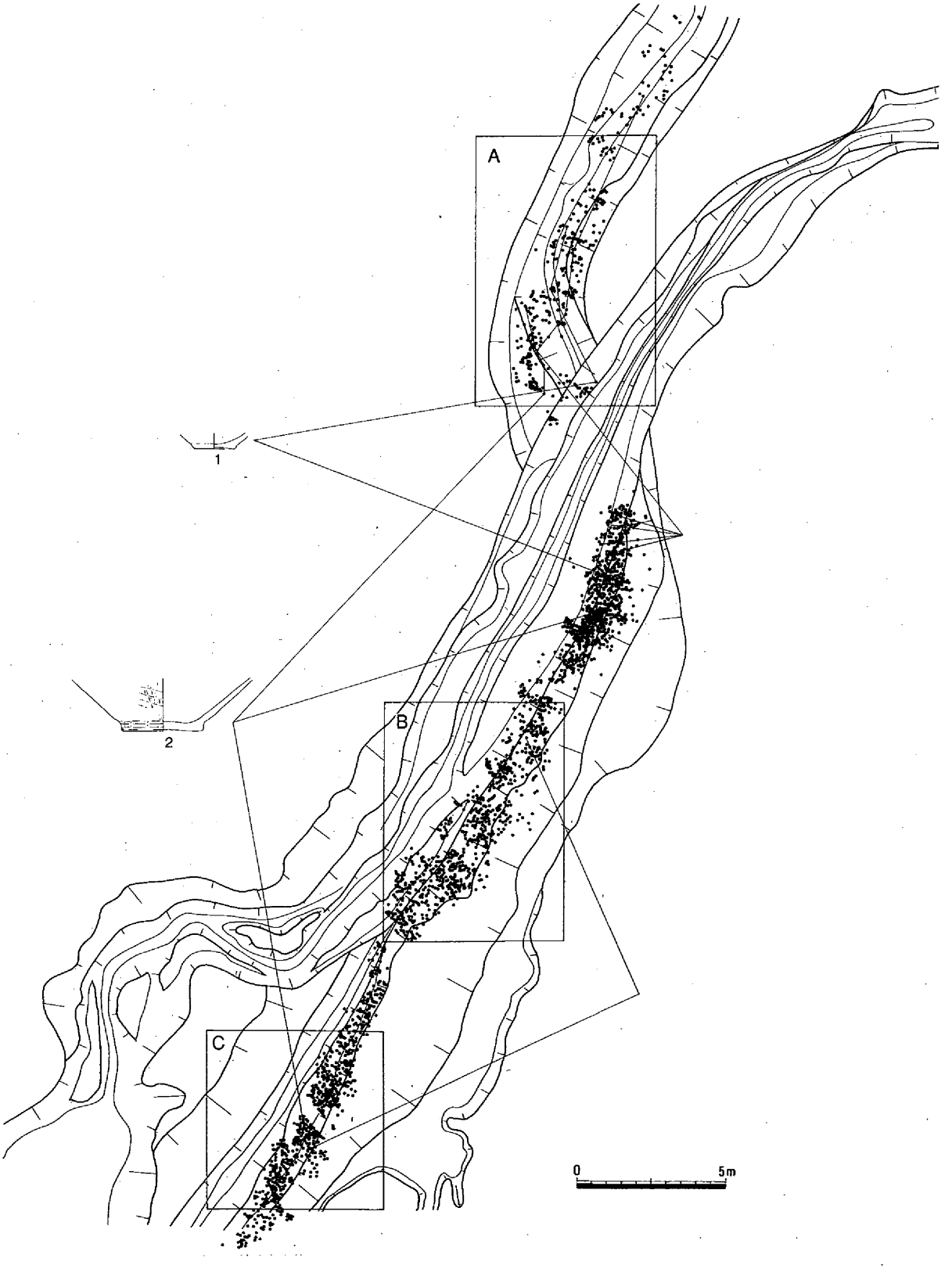
675のように脚部が低脚になる。

Ｂ．土器の出土パターン

本遺跡の弥生時代の遺構は、基本的に溝と土壙のみであるが、当然出土遺物の大半はそこから出土する。溝については、ほぼ同じ場所を流れる大型溝の溝９と溝10が全く違う遺物の出土パターンを示す。ここでは部分的ではあるが、本館５区と８区における溝９と溝10の遺物の出土パターンについて考えたい。溝９と溝10は、本館５・８区の東側に位置し、北東方向から南西方向に流れる溝である。このうち溝９からは、前期Ⅱの土器が多量に出土し、中には前期Ⅲの遺物も含まれる。溝の西側には、多数の小型溝があり、溝９に流れ込む。東側には多数の土壙や柱穴が築かれ、この状況からこの土壙群が前期Ⅱ段階での主要単位の一つであると推定した。近接した位置に主要単位をもつ溝９は、覆土中に多量の土器を含んでおり、溝の覆土は粘質土である。これに対し溝10は中期Ⅲの土器を出土する溝で、溝10に流れ込む小型溝はあるが、近隣に同時期の土壙が全く存在しない。溝の覆土は砂質が中心であり、覆土中には土器が少量しか出土しない。以上これら２つの溝の土器出土パターンを考察したい。

溝９出土の土器は、覆土中でも特に下層から出土する。上層からも出土するが、下層と比較して少量である。下層の中でも大多数は、溝の底面直上からの出土である。図示した出土状況図は、溝底面

直上から出土する土器である（第236～239図）。第236図では溝10の東側に一部土器が入っているように見えるが、断面的にみると全てが溝９の覆土中になる。出土する土器は、ほとんどが破片で個体になるものが全くない。破片は全てが小片で、大きいものでも５～10cm前後にしかならない。これら



第236図　溝９・10相関〈本館５・８区内〉(1/200)

の破片は、接合するものが土器量に比較すると少なく、接合したとしても器形の50％を越えて復元出来るものは皆無である。

本館５・８区内では、平面的にみて土器片はどこかに集中地点を作ることなく、全体的にまんべんなく出土する（第236図)。しかし溝の最深部を中心にみると、土器片は溝の東側に寄る。第237図では土器片の過半数が東側に寄っている。第238図では溝の西側が溝10に切られているため参考にはならない。第239図は 100％の土器片が、東側に寄っている。つまり溝９の土器は、土壙群のある東側方向に集中することになる。

次にこれらの土器の接合関係を考察する（註１)。溝９出土土器の接合パターンは、大きく分けて以下のごとく３つのパターンに分類できる。

①－１ｍ前後に接合関係があるもの（第238・239図)

②－１ｍ～５ｍ前後まで接合関係が広がるもの（第237図)

③－10ｍを越す位置にまでも接合関係が及ぶもの（第236図)

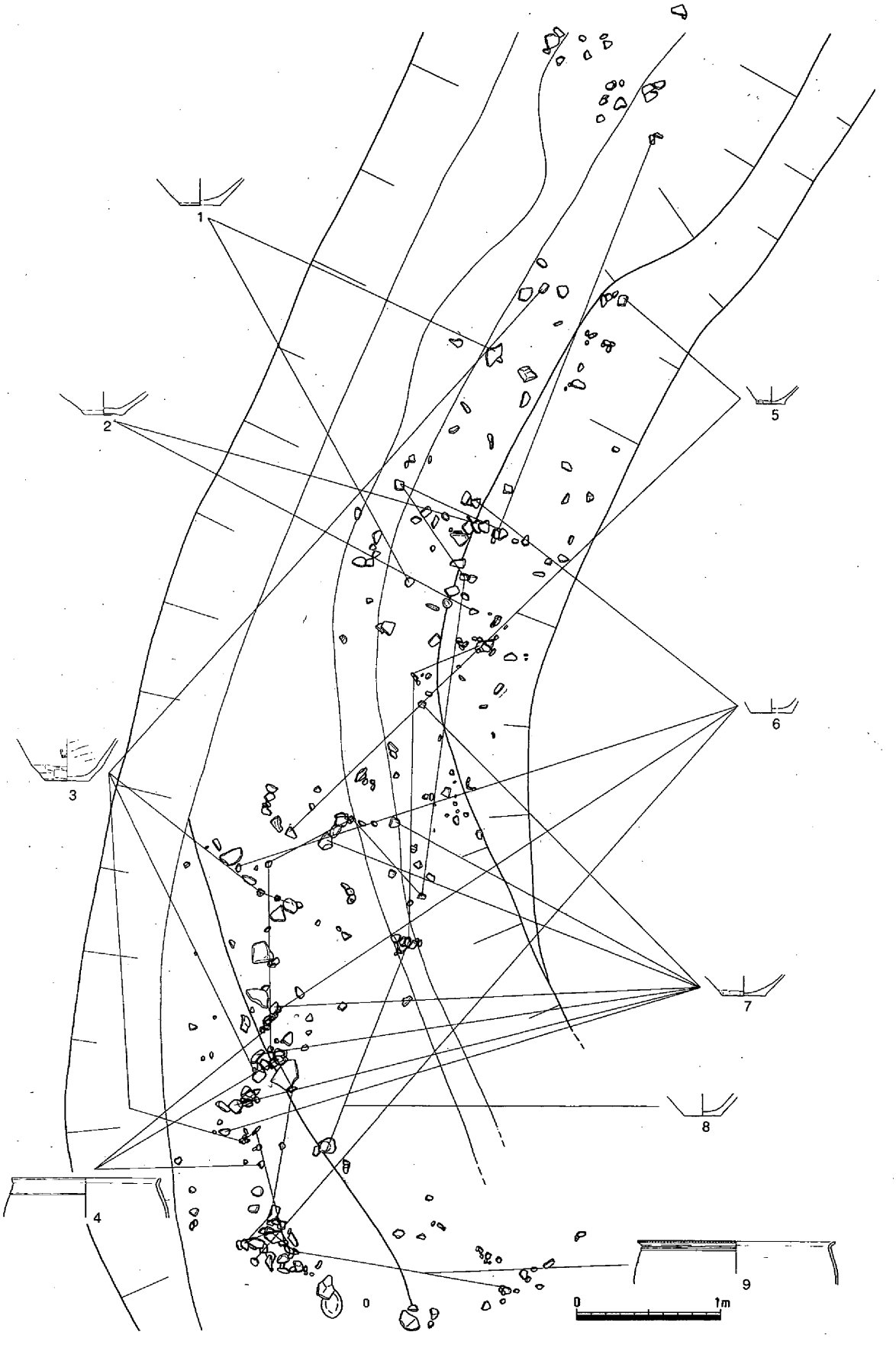
①は本館５・８区の中でも南側に多いパターンである。②は北側に多い。③は４例しか存在しないが、本館５・８区の全域に及ぶ。①は第238図の１や３で示す様に、同一個体が溝の覆土に入り込んだ後に散らばったもののように見える。しかし②・③は、明らかに①の様な状態ではなく、広域にわたって土器が散乱している状態である。しかも３つのパターン全てが、接合できても器形を復元できないほどに割れている。次にこの様な広域にわたる接合パターンと、土器が溝の東側に寄る出土状況から、溝の土器廃棄方法について考えたい。

縄文時代の研究には、特に竪穴住居に廃棄された土器について、小林達雄などの細かい分類がある（註２)。これによると竪穴住居への土器廃棄パターンを、吹上パターン・井戸尻パターン・平和台パターンなど６つに分類している。溝９は、土器が大量に破片で出土し、堆積土中に含まれたものである。この状況は、遺構が溝と住居という違いはあるが、小林の分類でパターンＣ１に当てはまる。このパターンＣ１での廃棄ケースとして、小林は意図的に「運んできて棄てる」と考えている。このことから考えて、時代が縄文時代と弥生時代という違いこそあれ、溝９出土の土器は「運んできて棄て」たものと考えるのが自然である。

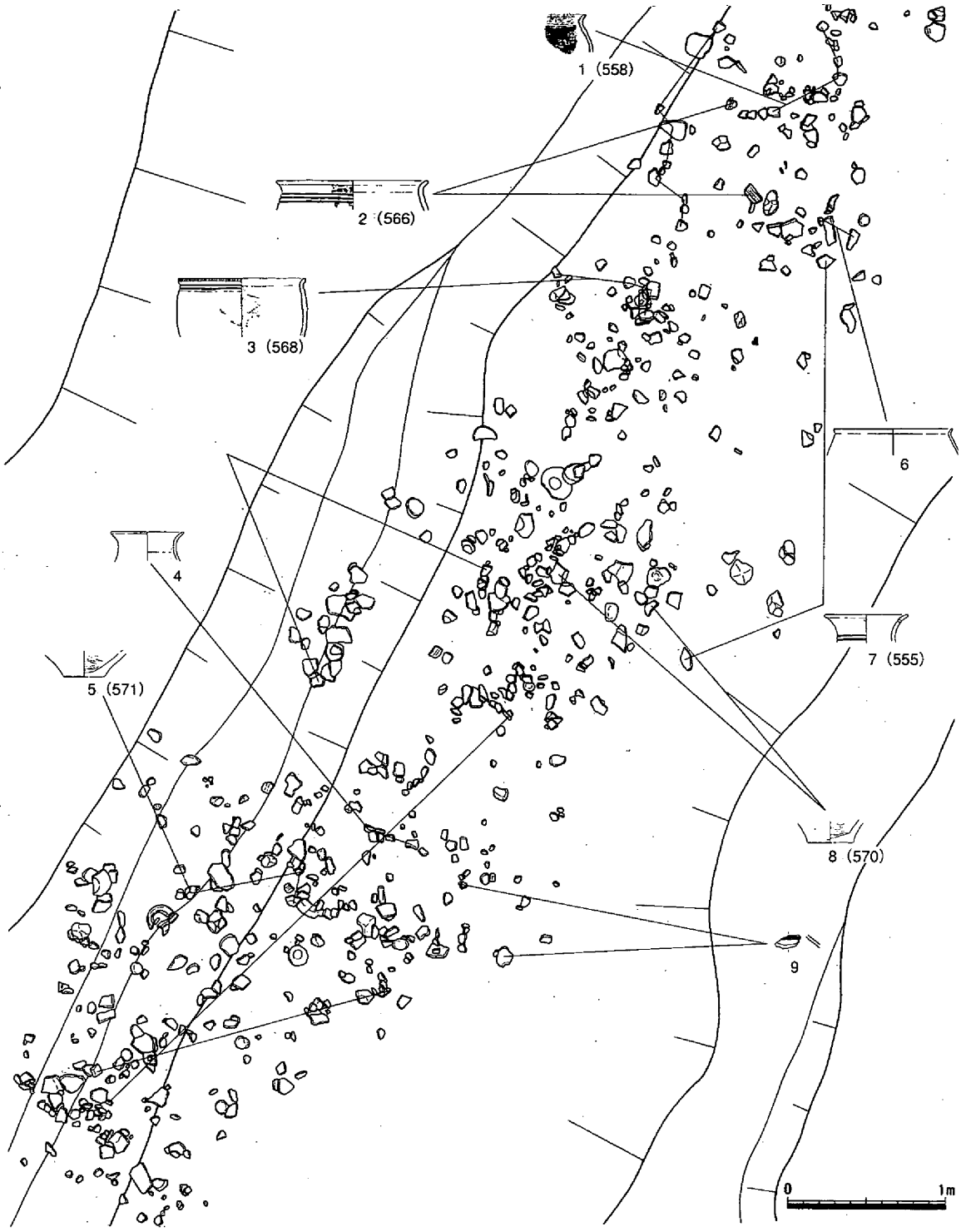
次に弥生時代の他の遺跡で、廃棄パターンを比較してみる。ここでは上東遺跡（註３・４）を挙げる。上東遺跡は倉敷市に位置する弥生時代の集落址である。溝は弥生時代中期後半から古代まで築かれるが、ここでは弥生時代中期後半と後期の溝の出土状況事例を取り上げる。

中期後半の溝（註５）からは、完形に近い土器（ほとんどのものが一部破損している）が、底面直上ではなく上層から出土する。これらの土器は、平面的にみると溝の中央部に並んだ形で出土する。覆土は粘質土である。この状況は溝を廃棄するときに、ある程度溝を埋めてから土器を棄てたものと思われる。ほとんどの土器が完形に近く、一部分だけ破損しているという状況は、溝を廃棄するに当たって古くなった完形土器の一部を割って棄てたのかもしれない。

後期の溝は、かつての調査で（付け変え用水）土器だまり（註６）といわれていたものである。この溝からは、底面直上のものを含め多量の破損土器が出土する。覆土は粘質土である。破損しているとはいえ、ほとんどの土器がある程度原形をとどめており、接合関係は数10cmの中に収まる。これらの土器の中には、胴部付近に意図的に割ったと思われる穿孔があるものもある。胴部穿孔土器の存在は、この溝から出土する大半の土器が廃棄される段階では完形ではなかった、という証明になろう。



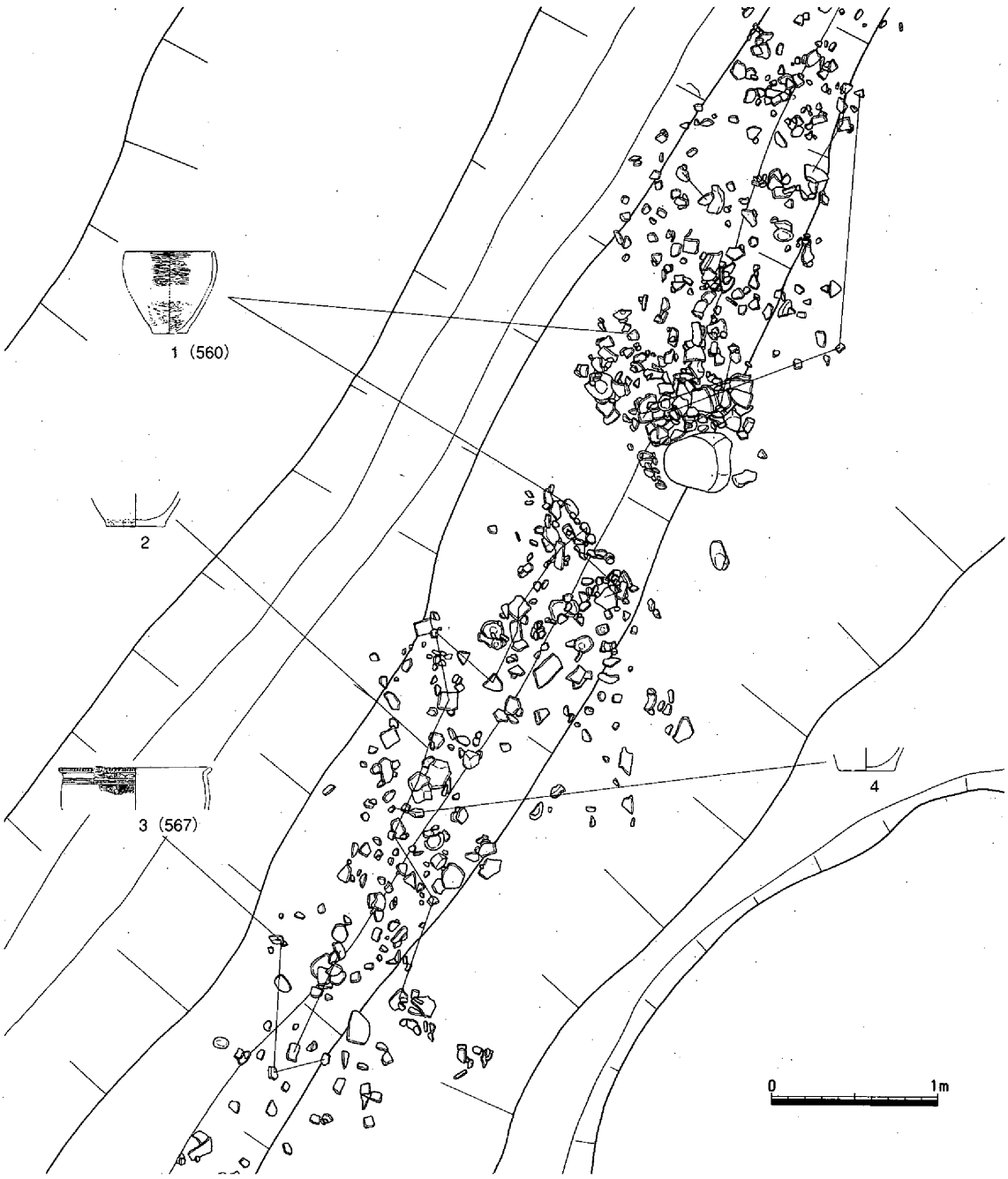
第237図　溝９遺物出土状況と接合関係〈A〉(1/40)



第238図　溝９遺物出土状況と接合関係〈B〉(1/40)

つまりこの溝自体を埋める時、破損した土器もしくはいらなくなった土器（胴部穿孔のものを含む）を一緒に埋めていたことになる。以上、上東遺跡の２つの溝の状況からいえることは、完形に近い状態で廃棄された土器は、完形に近い状態で出土するということである。

これに対し本遺跡の溝９出土の土器は、完形とは程遠い小片のものばかりで、接合関係も近接のものが少なく、距離をおくものばかりである。これは溝９出土の土器が、あらかじめ割れていて小片だったと考えられる。



第239図　溝９遺物出土状況と接合関係〈C〉(1/40)

これらの土器は、洪水などによって割れたと考えることもできる。しかし以下の説によって、これを否定する。溝９とほぼ同じ位置にあった溝10は、覆土が砂質で、しかも覆土中にはわずかにしか土器片が含まれていなかった。この砂質覆土の溝10こそが、洪水によって埋まった溝だと思われる。これに対し、溝９の覆土は粘質である。土器がほぼ原形をとどめて出土する上東遺跡の２例も、覆土は粘質であった。ほぼ原形の土器が粘質土から出土する事実は、粘質覆土の溝が洪水によって埋まったものではなく、意図的に埋められたものだという証明になろう。先に挙げた縄文時代の先行研究なども含めて、粘質覆土の溝９は人為的に埋められたものであって、覆土に含まれる土器は意図的に棄てられたものと判断する。

以上のように溝９から出土する土器は、溝の廃棄と共に意図的に棄てたものだと推定した。また土

器廃棄の時点では、すでに土器は小片になっていたとも考えた。これらの土器は平面的にみて、出土位置が溝の東側に寄っている。溝の東側とは、溝９が存在した前期のⅡ～Ⅲ期にかけての中心単位があった場所にほかならない。つまり中心単位で使用していた土器を、中心単位側から廃棄した状況が読みとれる。これらの土器は廃棄時には小片になっていたのであり、土器を棄てるときに、意図的に割って棄てた可能性もある。この様に弥生時代の前期には、溝を廃棄するときに、破損したもしくはいらなくなった土器を一定の方向から棄てることがあったわけである。この時土器は、すでに小片になっている。この様な弥生前期の土器廃棄パターンを「田益田中パターン」と名付けたい。

本遺跡の場合、前期Ⅲの段階で、溝９とその東側の土壙群（中心単位）が廃棄される。そして中心的な大型溝は溝53に代わり、中心単位も溝60周辺へと移動する。つまり上記のような土器廃棄パターンが起こったのは、前期Ⅲのどこかであるとみてよい。　（小林利晴）

註

註１　接合関係図のうち、器形を復元できるもののみ図化した。

註２　小林達雄「縄文世界における土器の廃棄について」『国史學』第93号　1974年

小林は縄文時代の土器廃棄パターンを６つに分類するが、そのうち吹上パターンは竪穴住居出土で、完形及び完形に近い土器が大量、出土状況は覆土の第一次埋没土上面になり、運んできて棄てたとする。井戸尻パターンは竪穴住居出土で、完形及び完形に近い土器が少量、出土状況は床面上で、置き去ったものとする。平和台パターンは遺跡内の特定地点からの出土で、完形及び完形に近い土器と破片が大量、出土状況は集中的で、運んできて棄てたものとする。上東遺跡後期の例は平和台パターンに含まれる。

註３　伊藤晃ほか「上東遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』第２集　岡山県教育委員会　1974年

註４　柳瀬昭彦ほか「川入・上東」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』16　岡山県教育委員会　1977年

註５　註３・４での西鬼川市調査区 溝４にあたる。

註６　註３での東鬼川市調査区 溝２にあたる。

土器分類参考文献

正岡睦夫ほか「雄町遺跡」『埋蔵文化財発掘調査報告』　岡山県教育委員会　1972年

伊藤晃ほか「上東遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』第２集　岡山県教育委員会　1974年

柳瀬昭彦ほか「川入・上東」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』16　岡山県教育委員会　1977年

高橋護「入門講座　弥生土器－山陽１・２」『考古学ジャーナル』173・175　1980年

正岡睦夫・松本岩雄編『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編　木耳社　1992年

平井勝「弥生時代への移行」『吉備の考古学的研究』近藤義郎編　山陽新聞社　1992年

秋山浩三「弥生前期土器」『吉備の考古学的研究』近藤義郎編　山陽新聞社　1992年

藤田憲司「弥生中期の地域性」『吉備の考古学的研究』近藤義郎編　山陽新聞社　1992年

平井典子「弥生土器からみた備前・備中南部とその周辺」『吉備の考古学的研究』近藤義郎編　山陽新聞社　1992年

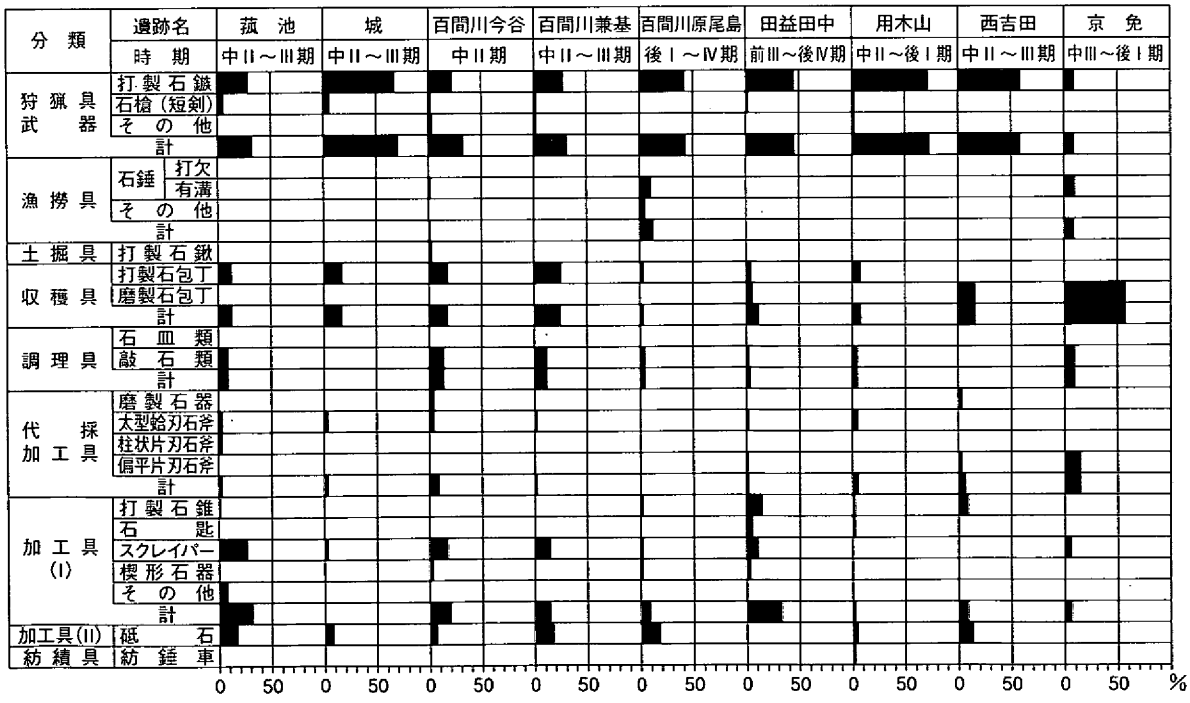
高橋護「弥生後期の地域性」『吉備の考古学的研究』近藤義郎編　山陽新聞社　1992年

(3) 石器の組成

田益田中遺跡の石器は、ほとんどが溝から出土しているが、その溝から出土する土器を見ると、各時期のものが混在していることから考えて、決して単一時期に属するものではない。したがって、かなり大雑把にはなるが、弥生時代前期から後期の石器を一括し、その組成を提示するとともに、他の遺跡との比較を行ない、田益田中遺跡の特色を浮かび上がらせたい。

さて、第240図の石器組成グラフ（註１）に示した通り、田益田中遺跡の組成は狩猟具・武器46％、漁労具１％、土掘具１％、収穫具11％、調理具４％、伐採・加工具３％、加工具（Ⅰ）32％、加工具（Ⅱ）１％、紡績具１％である。この組成を他の遺跡と比較するが、田益田中遺跡以外はかなり時期が限定されているため、厳密性については問題が残るものの、大まかな傾向を見るのには差し支えないものと思われる。石器組成グラフに掲げた遺跡は、菰池遺跡（註２）と城遺跡（註３）が瀬戸内海に面する児島に、百間川遺跡群（註４）は岡山平野に、用木山遺跡（註５）は岡山平野の北側を画する丘陵の北側に、西吉田遺跡（註６）と京免遺跡（註７）は山間部の津山に所在する。すなわち南の瀬戸内沿岸部から北の山間部までを縦断しており、これらはほぼＡ～Ｄの４地域に分かれる。Ａ地域は瀬戸内海沿岸部で、ほとんど平野がない。Ｂ地域は岡山平野で、広大な平野がある。Ｃ地域は岡山平野の後背地で、平野の北側を画する丘陵の北側に位置する。田益田中遺跡はこの地域に属する。Ｄ地域は山間部の津山盆地である。

ところで、石器組成の比較を行なう前に、石材について一言触れておく。岡山県は石器の石材、とりわけ剥片石器の石材はほとんどが金山産・五色台産サヌカイトを用いており（註８）、その傾向は南部がより一層強い。こうした傾向は石包丁に最も反映されている。Ａ・Ｂ地域の遺跡を見ると、中期以後はほぼ100％と言っていいくらいサヌカイト製打製石包丁であるのに対し、Ｃ地域になると結晶片岩製磨製石包丁が一定程度を占めるようになり、Ｄ地域ではすべて結晶片岩製磨製石包丁となる。



第240図　石器の組成

このことは従来より指摘されていたことであるが、田益田中遺跡の所在する地域はこれまで調査例が無く、岡山平野と同じ様相を呈するものと考えていた。しかし、かなりの磨製石包丁を有することから、岡山平野の集団とは明確に異なる集団とその領域が想定される。後期の上東式土器が岡山平野の北側を画する丘陵を越えると極端に少なくなる現象から推定される領域は、土器の上では明確にし得ないが、石包丁の違いから、すでに中期の前半から出来ていたことが知られるのである。なお、注意を要するのは、岡山平野においても前期には一時的に磨製石包丁が卓越する（註９）ことであり、田益田中遺跡では前期の遺物も混ざることから、磨製の割合が少し多いと言えなくもない。ただ、そのことを差し引いたにしても、なお磨製石包丁がある程度存在したことは確かであろう。

石器組成グラフを一見すると、京免遺跡以外はさほど大きな違いを認めることは出来ない。どのくらいの差から有意と見るかによって異なるが、分類項目毎の多寡はほぼ共通している。次に分類別に見ておく。狩猟具・武器は菰池遺跡や百間川遺跡群など、平野部に位置する遺跡は地域を越えても大きな差は無いが、城遺跡や用木山遺跡、そして西吉田遺跡などの丘陵上に所在する遺跡とでは20～30％異なる。この丘陵上に所在する遺跡とほぼ同じ狩猟具・武器の組成比を有する遺跡に、児島の丘陵頂部に所在する貝殻山遺跡（註10）がある。貝殻山遺跡は戦争に係わる特殊な集落（高地性集落）であるが、先に述べた遺跡は丘陵上に所在すると言うだけで普通の集落と考えられる。組成比にはあらわれない、狩猟具と武器と言う石鏃の性格の違いを内包するものであろうか。

漁労具はわずかであり、石器を見る限りでは、領域内に漁労を行なう環境が無かったものと思われる。収穫具はやや特異な京免遺跡を除けば、丘陵上も平野部の遺跡もほぼ同じ割合であることから、丘陵上の集落も近くの平地あるいは谷部で、平野の集落と同じように水田を経営していたのであろう。また、地域を越えて水田経営が同じ水準であったことも窺える。なお、百間川原尾島遺跡は後期の資料であることから、鉄器化したことによる減少を示しているのであろう。調理具もほぼ同じ割合と思われるが、遺跡により増減が見られるのは、調査担当者ないし報告書担当者の認識の違いが反映していることも推定される。このことは定型化した器種についてはあまり問題ないが、剥片石器、特に打製石錐、スクレイパー、楔形石器等では特に認識の違いが反映されている可能性が強い。

伐採・加工具も大きな違いは認められないが、これに分類された器種の多くは大陸系磨製石器であり、石器に占める割合は僅かである。この傾向は岡山県の特徴で、近畿や九州地方では10～30％と言う高い比率で存在（註11）している。岡山ではこれを補う鉄製の道具が存在したのであろうか。加工具（Ⅰ）は先に述べたように、認識の違いによる変化が大きいため、詳細な比較は出来ないが、ほぼどの遺跡も同じ割合ではなかろうか。打製石錐が田益田中遺跡で突出していたり、スクレイパーの割合に差が認められるのが、有意の差であるのかどうかについては、さらに検討を要する。加工具（Ⅱ）の砥石についても、ほぼ同じ割合で存在したものと考えられる。

最後に個々の器種について見ておく。第173図のＳ260は紅廉片岩製の玉鋸（擦切用砥石）である。他に玉の生産を物語る遺物は出土していないため、これだけで玉を生産していたとは言い難いが、サヌカイト以外の小さな剥片は見逃しやすいという地域的な特性を考えると、あながち否定も出来ない。今後の課題である。第181図のＳ352は両刃のノミ状石器であるが、身部には縦方向の溝が両面に認められる。この溝は、石器の機能に係わるものではなく、おそらく有溝石剣等の破片を転用したものと推定される。石材も石剣に多用される結晶片岩である。磨製石斧の多くは太型蛤刃石斧であるが、第174図のＳ283や第184図Ｓ362のような基端部が尖りぎみになる石斧もある。これは縄文時代の石斧の

特徴であるが、弥生時代前期まで残る。

以上、石器について述べたが、田益田中遺跡は石器組成と言う点では他の遺跡と大きく異なることはない。しかし、ほとんどがサヌカイト製打製石包丁である岡山平野に接していながら、結晶片岩製磨製石包丁をも有することは、明らかにＡ・Ｂ地域を中枢とするサヌカイト供給ネットワークとは異なるネットワークに属する集団であろう。また、ほとんどが結晶片岩製磨製石包丁であるＤ地域のネットワークとも異なり、Ａ・Ｂ地域とＤ地域との中間的様相を示している。ここに、Ｂ地域に接するのにも係わらず、Ｄ地域とも友好関係を保つという、両勢力の緩衝地帯的地域としての役割を担っていた勢力を構成する集団の姿が垣間見られる。　（平井　勝）

註

註１　石器組成グラフの石器分類は、国立歴史民俗博物館が実施した「農耕開始期における石器データの収集」のマニュアルによる。
「農耕開始期の石器組成１」『国立歴史民族博物館資料調査報告書』７　1996年

註２　内藤善史ほか「第12章　菰池遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』71　1988年

註３　伊藤晃ほか「倉敷市（児島）城遺跡発掘調査報告」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』19　1977年

註４　百間川河川敷に所在する遺跡の総称である。石器組成算出遺跡の文献は下記による。
正岡睦夫ほか「百間川兼基遺跡１・百間川今谷遺跡１」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』51　1982年
正岡睦夫ほか「百間川原尾島遺跡２」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』56　1984年

註５　神原英郎ほか「用木山遺跡」『岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報』４　1977年

註６　行田裕美「西吉田遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第17集　1985年

註７　中山俊紀「京免・竹ノ下遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第11集　1982年

註８　藁科哲男・東村武信「石器石材の産地分析」『考古学と自然科学』第16号　1983年

註９　百間川沢田遺跡の前期では打製より磨製石包丁が多い。しかし、中期になるとほとんど打製になる。こうした傾向が岡山平野で普遍的であるかどうかについては、前期の調査例が少ないため明確でないが、磨製がある程度含まれることは確かである。

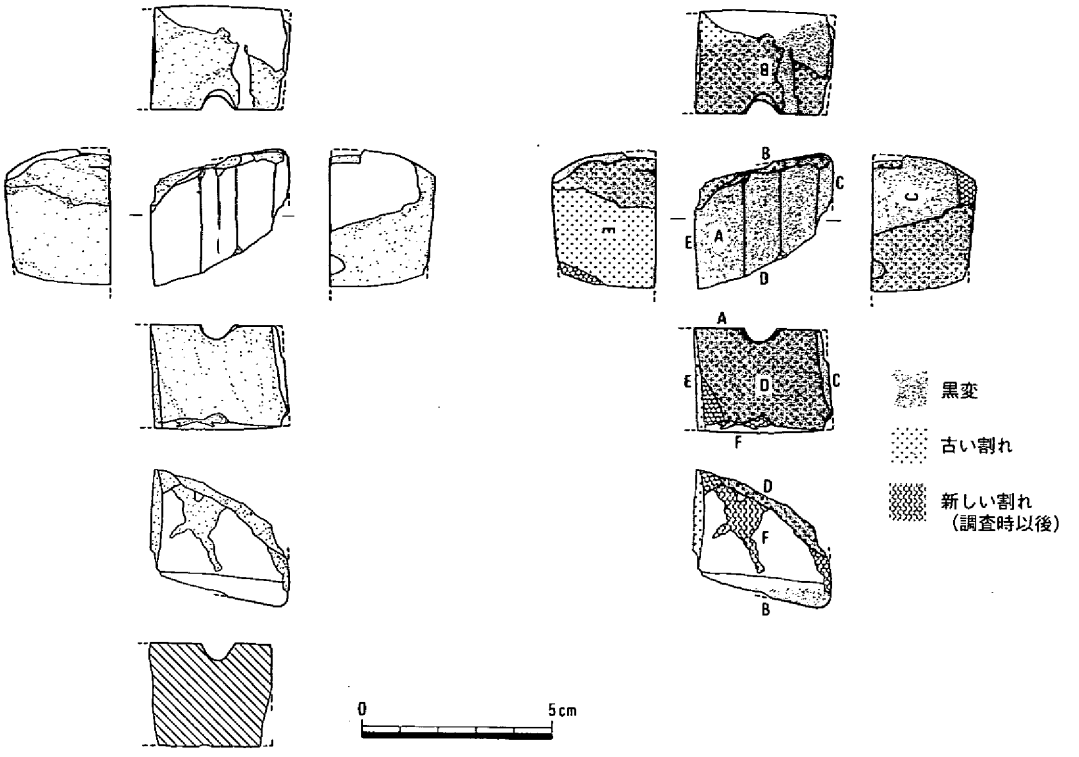
註10　小野昭「岡山県貝殻山遺跡」『日本考古学年報』28　1977年

註11　平井勝『弥生時代の石器』　1991年

(4) 銅剣鋳型様石製品

銅剣の鋳型と考えられる石製品（以下、鋳型と略す）は、浄化槽区を北東から南西方向に流走する溝64から出土した。調査時には気が付かなかったが、報告書作成の整理を行なっている段階で、あまり見たことがない形状であったため、いろいろな可能性を探ってみた結果、鋳型、それも銅剣である可能性が強まった。しかし、なお問題があることも否めない。そこで、以下詳細に遺物の説明を加えながら、銅剣の鋳型である可能性を指摘するとともに、問題点についても触れておく。

鋳型は幅3.5cm、長さ４cmあまりの小破片である。現存する部分の断面が長方形をなすことからも窺われるように、鋳型面とその裏面、および両側面は平坦な面をもち、長軸側は両面とも斜めに割れた面をもつ。これらの面をいま仮に第241図右のように主面（鋳型面）をＡ面、裏面をＦ面、両側面



第241図　溝64出土の銅剣鋳型様石製品

をＣ面とＥ面、長軸側の両面をＢ面とＤ面とし、以下説明を加える。

Ａ面にはほぼ中央に幅0.9cm、深さ0.4cmの溝が真直ぐ穿たれており、この溝の方向を長軸とする。溝の両側は平坦で、溝を含めて全面が淡い灰褐色（黒変）を呈する。この淡い灰褐色の部分は、煤が付着したというよりも、熱によって黒く変色したものと思われる。

Ａ面の右側面にあたるＣ面は、利用後砥石に転用された際の使用面であることから、本来はもう少し右側に延びていたものと思われる。なお、この面もＡ面同様、淡い灰褐色を呈している。

Ｅ面はＡ面の左側面にあたるが、割れたままの面であることから、さらに左側まで延びていたことは確実である。なお、Ｂ面の左側に見られる割れ面は淡い灰褐色を呈するが、Ｅ面までは及ば無いことから、Ｅ面の割れのほうが新しいと思われる。

Ｆ面は鋳型面の裏面にあたり、研磨された平坦面をもつことから、砥石として利用されたものと考えられる。この面は、Ｅ面と同じく石材本来の色調である乳白色を呈している。

長軸側にあたるＢ面には数回に亘る割れ面が拡がっているが、Ｆ面側に磨かれた面が残る。この磨かれた部分は、一部細長くＡ面まで延びていることから、本来は全面砥石として利用されていたものと思われるが、その後割れが進行し、廃棄されたのであろう。なお、Ｂ面では磨かれた部分から割れ面にかけて淡い灰褐色の面がＡ面側に拡がる。

Ｄ面は一回で割れた面で、その後利用された痕跡は認められない。全面淡い灰褐色を呈している。

以上、本品は割れの進行により使用に耐えられなくなった段階で砥石に転用され、その後砥石としても使用できない割れが生じたため、廃棄されたものと考えられる。では本品は本来何に使用されたものであろうか。このことを考えるにはＡ面が重要な手がかりを与えてくれる。とりわけ中央に穿たれた溝および溝の両側に拡がる平坦面は、銅剣の鋳型であるという結論に辿り着く有力な手がかりと

なる。

さて、本品が銅剣の鋳型だとすれば、Ａ面の溝は脊であり、その両側に拡がる平坦面は翼にあたる。いま刳方より少し茎寄りの部分だと仮定し、銅剣との対比を行なう。まず、脊であるが、細形銅剣では幅1.3cm前後が多いことから考えると、1.0cmのものもあるとはいえ、0.9cmはかなり細い部類であるといえよう。脊の断面を見ると、正円もあるがどちらかといえばやや偏平な円が多い。数値で示せば、幅より厚みのほうが２㎜前後少ない。本品は深さが0.4㎜であることから、製品にすると厚みは1.0cmあまりとなり、幅よりやや厚みがあることになる。脊の両側に拡がる翼は、ほぼ脊の幅と同じ程度のものが多い。それに比べ、本品は翼の幅が残存部で左側は1.3cm、右側は1.0cmであることから普通であるが、脊の幅との関係で言えば広すぎる感じがする。

中細形銅剣では脊の幅は細形銅剣より多少広くなるものの、著しく異なることはない。むしろ厚みの方がより一層偏平化するという点で違いを見せる。

次に鋳型との比較を行なう。銅剣の鋳型は兵庫県田能遺跡を除けば、あとはすべて北部九州からの出土である。北部九州の鋳型は、滑石片岩や流紋岩もわずかにあるが、ほとんど石英－長石斑岩が用いられる（註１）。本品は流紋岩であるが、春日市須玖岡本遺跡の石英－長石斑岩を見る限り（註２）、色調など外観はよく似ている。しかし、石英一長石斑岩が多少ざらつくのに対し、本品はきめ細かい肌合いが感じられる。

須玖岡本遺跡の５次調査で出土した銅剣鋳型（註３）は、表裏に細形銅剣と推定される鋳型面が認められる。両面とも脊が半分しか残存していないため正確ではないが、推定で脊幅1.1～1.2cm、深さ0.35～0.4cm、翼の幅は1.4～1.5cmを測る。

福岡市西新町遺跡出土の鋳型（註４）は細形銅剣と推定され、石材は砂岩が用いられている。鋳型は表裏に見られるが、使用されたのは片面だけとされている。その使用された面の脊幅は1.2cm、深さ0.45～0.46cm、翼の幅1.3cmを測る。

以上の２例は脊の幅が多少広いが、鳥栖市本行遺跡出土の鋳型（註５）は、脊幅0.9cm、深さ0.4cm、翼の幅1.3cmを測り、脊に関しては酷似している。なお、石材は石英－長石斑岩である。

中細形銅剣の鋳型は、佐賀県姉遺跡（註６）や兵庫県田能遺跡（註７）出土例を見ると、実測図だけからではあるが、姉遺跡例は脊幅1.4cm、深さ0.5cm、田能遺跡例では脊幅1.7cm、深さ0.3cmを測り、脊の偏平化が見て取れる。なお、石材は姉遺跡が石英－長石斑岩、田能遺跡が砂岩である。

さて、僅かな実物観察と報告書から読み取れた知見を長々と述べたが、結論から言えば銅剣の鋳型である可能性が強い。鋳型は小破片のためどの部分であるかの見当もつきにくいが、中央の溝が脊であり、その両側の平坦面が翼にあたる。翼の両端は一段高くなり、鋳型の合わせ面となるが、一段高くなる部分は残存しておらず、左側平坦部の端は丁度段の部分で割れたものと考えられる。その理由は、流紋岩の岩質に起因するもので、Ｅ面が垂直かつ平坦に割れているのは流紋岩の石理に沿っているのであるが、段などのような直線的な加工が加わった部分は加工に沿って割れやすいということがある。もしそうであるとすれば翼の幅は1.3cmとなるが、右側の幅はＣ面が砥石として利用されているため、かなり幅が狭くなっているものと推定される。

このように推定したとき、出来上がる銅剣は脊の幅が0.9cmと細目で、その断面は円形になり、翼は幅が1.3cmあまりとなる。確かに脊の細いのは気になるが、細形銅剣の場合でも細いものは少ないにしても、数値的には範囲内と考えられる。細形銅剣は翼の幅が概して狭く、たしかに刳方より峰側

では1.3cmもあるものは、すべて検討したわけではないが、無いかあっても極めて少ないと考えられる。しかし、刳方より少し茎側は翼の幅が広くなる部分であり、ここであれば1.3cmのものもある。したがって鋳型が細形銅剣であるとすれば、刳方より少し茎側の部分と推定される。ただ、このことを以て細形銅剣に限定することはできず、中細形銅剣の脊がやや偏平化するとしても、翼の幅が全体的に幅広くなることから、刳方より茎側だけでなく、峰側でも1.3cmが確保されるので、中細形銅剣まで含めて考えることが必要である。

ところで、鋳型面に認められる黒変であるが、通常の鋳型であれば鋳型面のみに見られるものである。しかし、本品は鋳型面のみならずＢ面、Ｃ面、Ｄ面にまで及んでいることから、単純に鋳型として利用した際に変色したものとは言えない。黒変が砥石として利用された面にも見られることは、Ｄ面が割れたことによって砥石としての利用を停止した後に黒変が生じ、その後さらにＥ面が割れたため廃棄されたものと思われる。したがってＡ面の黒変をもって、積極的に鋳型面であるとする根拠の一つにするには躊躇する。ただこうした疑問点はあるにしても、鋳型説を覆すほどの根拠はないことから、現状としては鋳型であると考えておきたい。

最後に鋳型の属する時期であるが、溝64から出土した土器を見ると、弥生時代中期前半から中頃が多いものの、少量ながら前期や後期も認められる。したがって、現状では弥生時代のものであるのは確かであるにしても、それ以上に時期を限定することは困難である。

鋳型の検討にあたっては、多くの方々の御意見を拝聴し、とくに下記の方々からは御教授とともに資料収集の便宜をはかっていただいた。記して厚くお礼申し上げる。

小田富士夫、高橋　護、柳田康雄、橋口達也、田崎博之、吉田　広、宮井善朗、藤瀬禎博、平田定幸、吉留秀敏、向田雅広、山崎龍雄、松本岩雄（順不同）　（平井　勝）

註

註１　唐木田芳文「弥生時代青銅器の鋳型石材考」『蟻塔』第39巻第２号　1993年

註２　春日市教育委員会平田定幸氏のご好意で鋳型を観察させていただいた。

註３　春日市教育委員会編「須玖岡本遺跡」『春日市文化財調査報告書』第23集　1995年

註４　折尾学ほか「西新町遺跡」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第79集　1982年

註５　柳瀬昭彦が鳥栖市教育委員会藤瀬禎博氏のご好意で観察させていただいた所見を参考にした。
向田雅彦「鳥栖市出土の青銅器鋳型類－本行遺跡・安永田遺跡出土例－」『考古学ジャーナル』No359 1993年

註６　堤安信ほか「姉遺跡」『千代田町文化財報告』３　1985年

註７　岩永省三ほか「田能遺跡発掘調査報告書」『尼崎市文化財調査報告書』第15集　1982年

第３節　古墳時代以降の遺構と遺物

古墳時代および古代の遺構は非常に少なく、時期の明確なものは溝76のみである。土師器が多量に出土しており、古墳時代前期後葉に位置付けられる資料である。これらの土師器の存在から、周辺にこの時期の集落を想定することもできるが、削平を受けたためか、そのほかに関連する遺構は認められない。一方、古代に明確に位置付けられる遺構は皆無であり、須恵器少量が出土しているのみである。このように、本遺跡の古墳時代および古代の状況については不明と言わざるを得ない。また、この時期と推定される遺構として、柵列状遺構がある。他遺跡での類例として、総社市南溝手遺跡（註１）、窪木遺跡（註２）の例がある。

中世と推定される遺構としては、小規模な掘建柱建物や溝、土壙があるが、時期を断定できるものは少ない。付属建物１・２区などでは、農業用水路と考えられる中世の溝が検出されており、中世には水田が広がっていたと考えられる。これらの溝はほぼ東西南北の方向を示すものが多く、条里地割にしたがっている。また、溝95・96については畎畝構造や導水・排水施設と考えられる構造など、灌漑技術の一端をうかがうことのできる資料といえる。一方、建物や土壙については時期、性格ともに判然としないものが多いが、包含層中からは、土器をはじめとする中世の遺物が比較的多く出土しており、水田のほかに生活域も存在していた可能性が高い。また、包含層出土の遺物には少量の鉄滓や吹子の羽口片も含まれており、小規模な鍛冶遺構も存在したと思われる。なお、中世の包含層出土遺物は、14世紀代のものが多いようである。

近世においても、引き続き水田が広がっていたと考えられ、農業用水路と考えられる溝97などの調査を行っている。溝97は中世の溝90と一部重複しているらしく、中世のものを部分的に踏襲したと考えられる。さらに、溝97がある程度埋没した上にはコンクリート製のＵ字溝が据えられており、現代まで踏襲された用水路と捉えることができる。また一方で、屋敷地の一部とみられる遺構も確認された。井戸１などがそれであり、底部から瓦片や櫛が出土していることから判断して、屋敷地内に設けられた生活用の井戸と推測される。建物についてはおそらく礎石建物であったものが削平されていると考えられる。溝97についても、埋土から多量の陶磁器が出土しており、屋敷地に近接していることを示している。また特徴的な遺構として、土壙121がある。土壙内に一辺１ｍ程度の方形の石組みを行ったものであり、岡山県内の類例としては、岡山市岡山城二の丸跡（註３）、岡山市足守藩武家屋敷跡（註４）、津山市十六夜山遺跡(津山藩武家屋敷跡)（註５）などにみることができる。いずれも生活域からの検出であり、機能については、貯蔵庫、便槽、水溜め桝などが考えられている。以上の近世の遺構から出土した陶磁器は、江戸時代後半期以降の時期を示すものが大部分であり、溝97については近代の遺物も含んでいる。

（尾上元規）

註

註１　平井泰男編『南溝手遺跡1』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告100　岡山県教育委員会　1995年

註２　岡田博編『窪木遺跡１』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告120　岡山県教育委員会　1997年
　　平井泰男編『窪木遺跡２』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告124　岡山県教育委員会　1998年

註３　柳瀬昭彦・宇垣匡雅編『岡山城二の丸跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告78　岡山県教育委員会

1991年

註４　草原孝典編『足守藩武家屋敷跡』岡山市教育委員会　1995年

註５　尾上元規編『十六夜山古墳・十六夜山遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告130　岡山県教育委員会　1998年

付載１　田益田中遺跡の旧河道流木（縄文時代）の樹種同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

田益田中遺跡では、発掘調査により縄文時代後期・晩期の遺物を含む旧河道、弥生時代の溝、古墳時代後期の溝、中・近世の土壙等が検出されている。このうち、縄文時代後期・晩期の遺物を含む旧河道は、北東から南西方向に流下しており、平行に数条検出されている。河道内からは、流木や種実が多数検出され、遺物は縄文時代後期の土器片が多い。

本報告では、旧河道から検出された縄文時代後・晩期の流木の樹種を明らかにし、当該期の河道沿いの森林植生を推定する。

１．試料

試料は、旧河道（河道１・２？・３・５・10）から検出された流木50点（試料番号１～50）である。このうち、試料番号41・44は炭化材であった。

２．方法

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

炭化材は、３断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

３．結果

樹種同定結果を表１に示す。試料には、保存状態が悪いものや組織の収縮が激しいために樹種の同定に至らないものが多かった。これらの試料については、観察できた範囲での結果を記した。その他の試料は、針葉樹２種類（モミ属・イヌガヤ）と広葉樹８種類（ヤナギ属・コナラ属コナラ亜属コナラ節・コナラ属アカガシ亜属・ムクノキ・ケヤキ・サクラ属・ムクロジ）に同定された。

４．考察

流木には、合計９種類が認められ、ムクノキとムクロジが比較的多い。このような流木は、基本的には流路沿いの河畔や谷斜面等の植生を反映していると考えられる。樹種同定の結果から、本遺跡周辺にはコナラ節、ムクロジ、アカガシ亜属、イヌガヤ等が生育する植生が見られたと考えられる。この結果は、基本的には百間川沢田遺跡で行われた花粉分析結果（パリノ・サーヴェイ株式会社、1993a、1993b)とも調和的である。これらの種類のうち、ヤナギ属、ムクノキ、ケヤキは、現在の生態などを考慮すれば河畔の植生を構成していた可能性がある。また、モミ属は現在の分布などを考慮

表１　樹種同定結果

番号	新遺構名	出土地区・旧遺構名・層位等	時代・時期	性格	樹種
1	河道５	HO７区河道１－１	縄文時代後期	流木	コナラ属アカガシ亜属
2	河道５	HO７区河道１－２	縄文時代後期	流木	広葉樹
3	河道５	HO７区河道１－３	縄文時代後期	流木	ムクロジ
4	河道５	HO７区河道１－４	縄文時代後期	流木	コナラ属コナラ亜属コナラ節
5	河道３	HO16区河道１－１	縄文時代後期	流木	コナラ属コナラ亜属コナラ節
6	河道３	HO16区河道１－２	縄文時代後期	流木	広葉樹（散孔材）
7	河道３	HO16区河道１－３	縄文時代後期	流木	ヤナギ属
8	河道１	HO17東区河道１－１	縄文時代後期	流木	コナラ属コナラ亜属コナラ節
9	河道１	HO17東区河道１－２	縄文時代後期	流木	ムクロジ
10	河道１	HO17東区河道１－３	縄文時代後期	流木	ムクロジ
11	河道１	HO17東区河道１－４	縄文時代後期	流木	イヌガヤ
12	河道１	HO17東区河道１－５	縄文時代後期	流木	ムクノキ
13	河道１	HO17東区河道１－６	縄文時代後期	流木	ムクノキ
14	河道１	HO17東区河道１－７	縄文時代晩期	流木	ケヤキ
15	河道１	HO17西区河道１－１	縄文時代後期	流木	ムクノキ
16	河道１	HO17西区河道１－２	縄文時代後期	流木	ムクノキ
17	河道１	HO17西区河道１－３	縄文時代後期	流木	コナラ属コナラ亜属コナラ節
18	河道１	HO17西区河道１－４	縄文時代後期	流木	広葉樹（散孔材）
19	河道１	HO17西区河道１－５	縄文時代後期	流木	広葉樹（環孔材）
20	河道１	HO17西区河道１－６	縄文時代後期	流木	広葉樹（環孔材）
21	河道１	HO17西区河道１－７	縄文時代後期	流木	広葉樹（環孔材）
22	河道１	HO17西区河道１－８	縄文時代後期	流木	ヤナギ属
23	河道１	HO17西区河道１－９	縄文時代後期	流木	イヌガヤ
24	河道１	HO17西区河道１－10	縄文時代後期	流木	広葉樹（散孔材）
25	河道２？	HO17西区河道２－11	縄文時代後期	流木	広葉樹
26	河道２？	HO17西区河道２－12	縄文時代後期	流木	広葉樹
27	河道２？	HO17西区河道２－13	縄文時代後期	流木	広葉樹（環孔材）
28	河道２？	HO17西区河道２－14	縄文時代後期	流木	広葉樹（散孔材）
29	河道２？	HO17西区河道２－15	縄文時代後期	流木	広葉樹（散孔材）
30	河道２？	HO17西区河道２－17	縄文時代後期	流木	モミ属
31	河道１	HO17西区河道１－18	縄文時代後期	流木	ムクロジ
32	河道１	HO17西区河道１－19	縄文時代後期	流木	サクラ属
33	河道１	HO17西区河道１－21	縄文時代後期	流木	広葉樹
34	河道１	HO17西区河道１－22	縄文時代後期	流木	広葉樹
35	河道１	HO17西区河道１－24	縄文時代後期	流木	ムクロジ
36	河道１	HO17西区河道１－25	縄文時代後期	流木	イヌガヤ
37	河道１	HO17西区河道１－26	縄文時代後期	流木	コナラ属コナラ亜属コナラ節
38	河道10	JO区旧河道３－１	縄文時代晩期	流木	モミ属
39	河道10	JO区旧河道３－２	縄文時代晩期	流木	モミ属
40	河道10	JO区旧河道３－３	縄文時代晩期	流木	モミ属
41	河道10	JO区旧河道３－４	縄文時代晩期	流木	広葉樹
42	河道10	JO区旧河道３－５	縄文時代晩期	流木	ムクロジ
43	河道10	JO区旧河道３－６	縄文時代晩期	流木	モミ属
44	河道10	JO区旧河道３－７	縄文時代晩期	流木	広葉樹
45	河道10	JO区旧河道３－８	縄文時代晩期	流木	モミ属
46	河道10	JO区旧河道３－９	縄文時代晩期	流木	ムクロジ
47	河道１	水路６－１区No.２河道－１	縄文時代後期	流木	モミ属
48	河道１	水路６－１区No.２河道－２	縄文時代後期	流木	ムクノキ
49	河道１	水路６－１区No.２河道－３	縄文時代後期	流木	ムクノキ
50	河道１	水路６－１区No.２河道－４	縄文時代後期	流木	ムクノキ

すればモミと考えられ、谷斜面等の不安定な場所を中心に生育していたと考えられる。

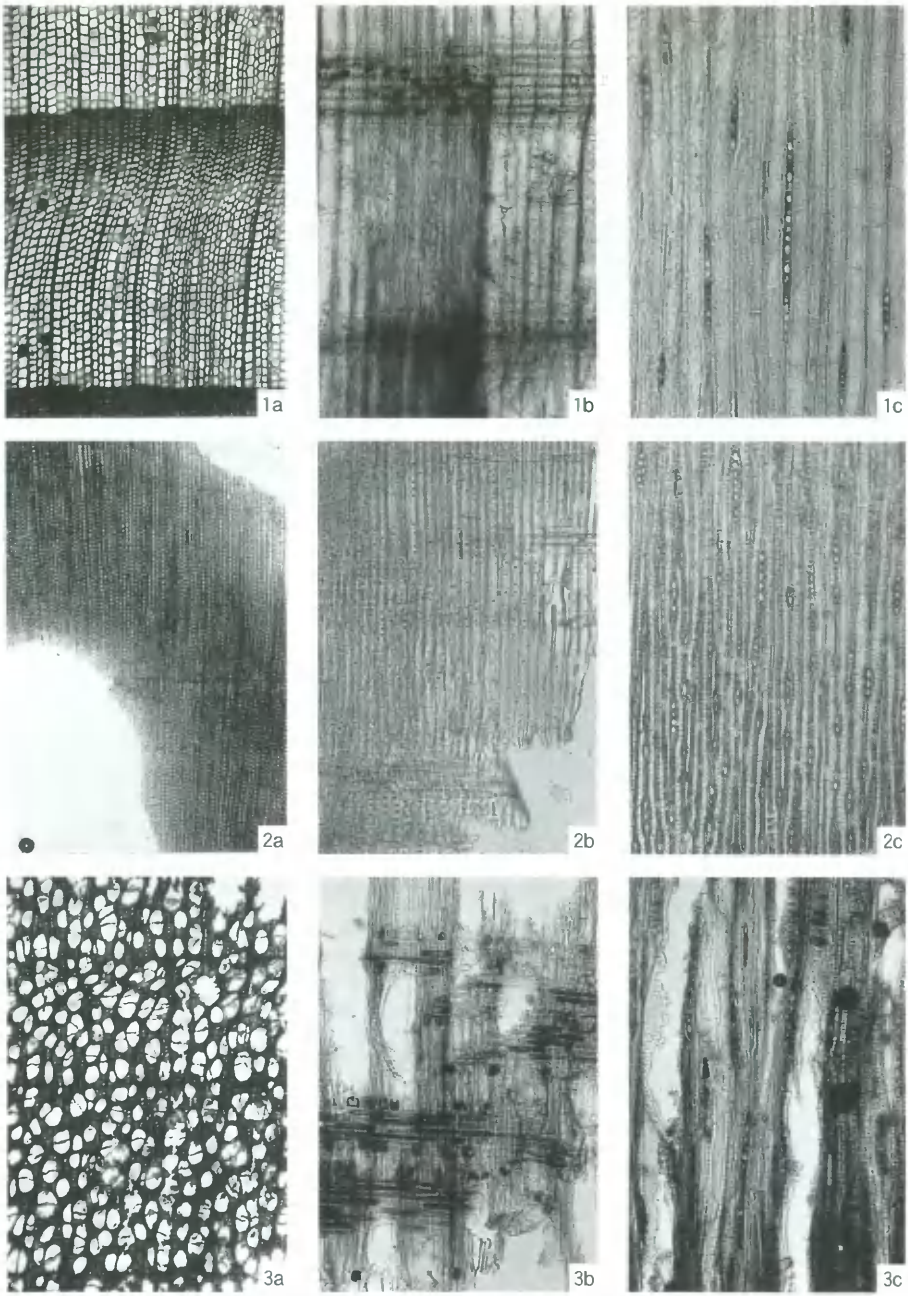
本遺跡では、花粉分析などによる古環境の復元に関する分析調査も行われており、今後これらの結果を含めて、古植生について詳細に明らかにしたい。

〈引用文献〉

パリノ・サーヴェイ株式会社（1993a)植物化石分析報告．岡山県埋蔵文化財発掘調査報告84「百間川沢田遺跡３　旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査Ⅷ（本文)」、p.405-417、岡山県文化財保護協会．

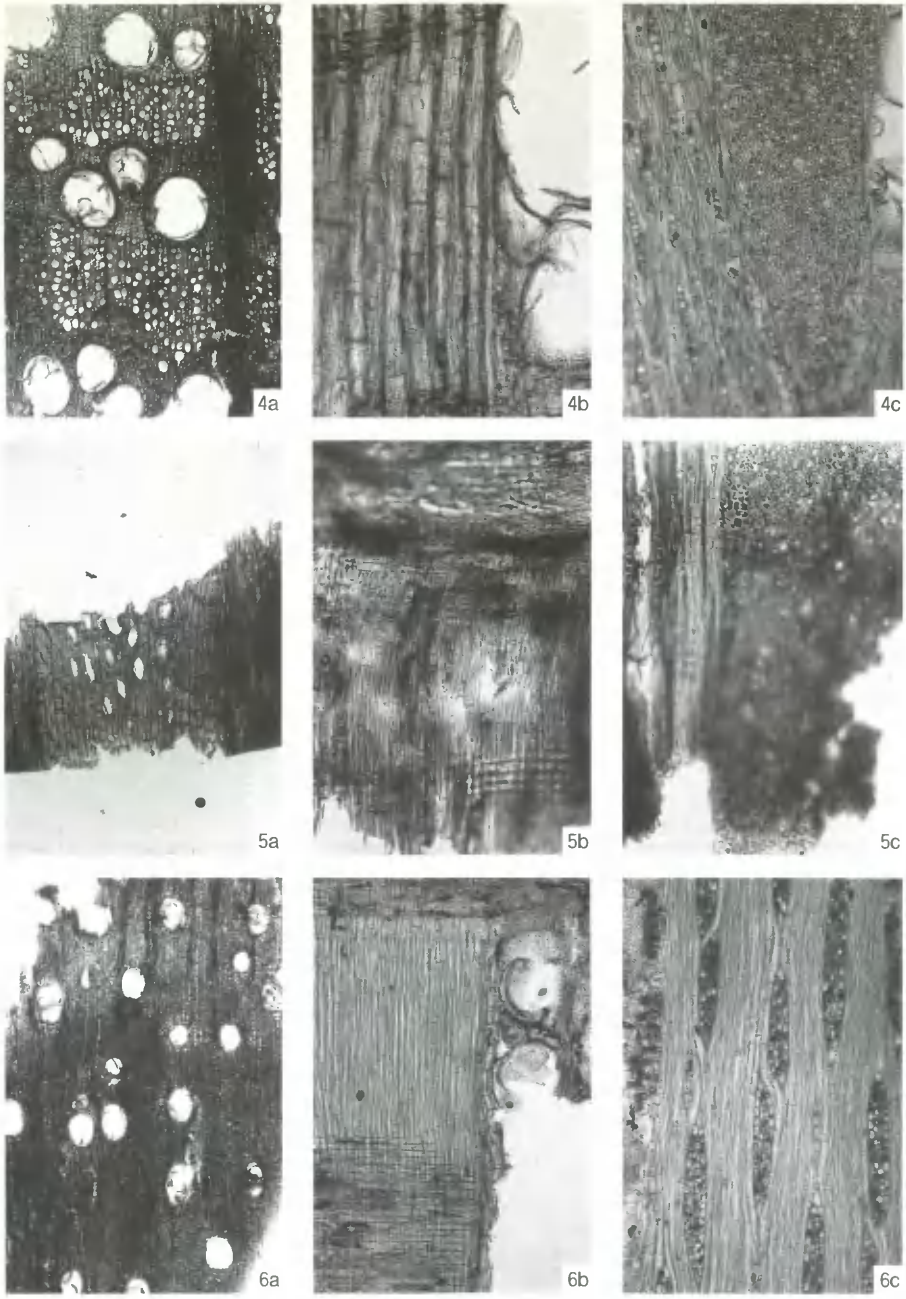
パリノ・サーヴェイ株式会社（1993b)自然科学分析．岡山県埋蔵文化財発掘調査報告84「百間川沢田遺跡３　旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査Ⅷ（本文)」、p.418-426、岡山県文化財保護協会．

図版１　木材（1）



1.モミ属（試料番号47）
2.イヌガヤ（試料番号11）
3.ヤナギ属（試料番号7）
　a：木口、b：柾目、c：板目

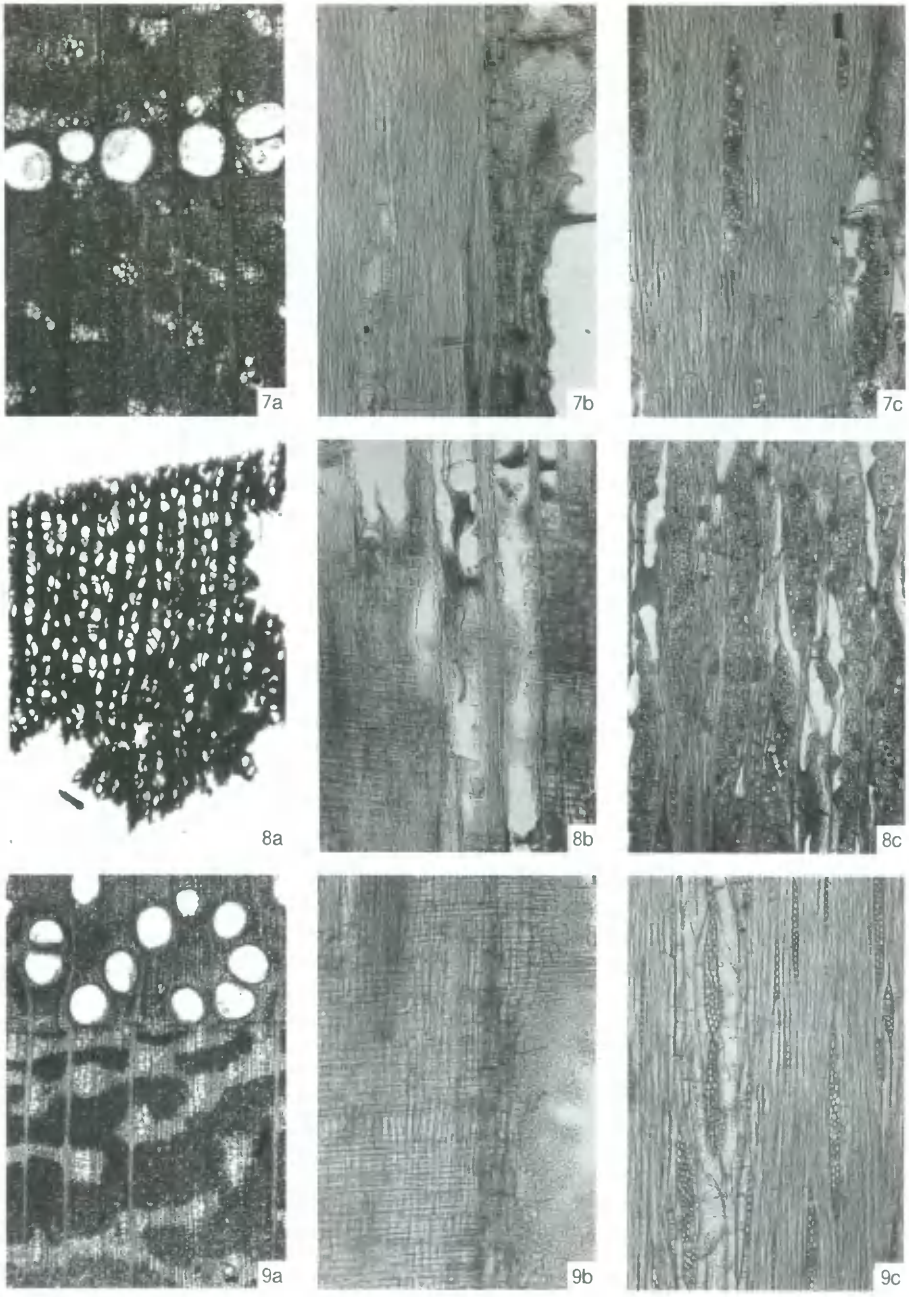
200μm：a
200μm：b、c



4.コナラ属コナラ亜属コナラ節（試料番号8）
5.コナラ属アカガシ亜属（試料番号1）
6.ムクノキ（試料番号50）
　a：木口、b：柾目、c：板目

200μm：a
200μm：b、c

図版 3　木材（3）



7.ケヤキ（試料番号14）
8.サクラ属（試料番号32）
9.ムクロジ（試料番号46）
　a：木口、b：柾目、c：板目

200μm：a
200μm：b、c

付載２　田益田中遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

今回の自然科学分析調査では、縄文時代以降の本遺跡周辺の植生変遷を明らかにするために、植物珪酸体分析と大型植物遺体の同定を行う。また、低地の堆積環境の変遷について検討するために、珪藻分析を実施する。

１．試料

試料は、水路５区北壁から６点（試料番号１～６）、共同溝１区西壁から６点（試料番号１～６）、溝16覆土から３点（４層・５層・６層）、合計15点採取された（表１）。これら15点について植物珪酸体分析を、また共同溝１区西壁から採取された６点について珪藻分析を実施する。また、大型植物遺体同定試料は、縄文時代後期の河道（河道１・５）と弥生時代前期の土壙（土壙75）から検出された種実ならびに葉である。

２．分析方法

（１）珪藻分析

試料を湿重で７ｇ前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に分離化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入して永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に、同定・計数する。種の同定は、K.Krammer and Lange-Bertalot（1986・1988・1991a

表１　土壌分析試料の一覧

試料採取地点・試料名		土質	時期等	分析項目	
				D	PO
水路５区　北壁	No.1	耕作土	近現代		○
	No.2	灰色砂質土	中近世		○
	No.3	淡灰色砂質土	中近世の洪水砂		○
	No.4	灰色色微砂と淡灰色粘質土	中近世の洪水砂		○
	No.5	淡褐灰色粘土	時代時期不明　水田層？		○
	No.6	黄色粘土	弥生時代前期の基盤層		○
共同溝１区　西壁	No.1	黄褐色粘土	弥生時代前期の基盤層	○	○
	No.2	暗灰色・淡灰白色粘質土	縄文時代晩期～弥生時代前期	○	○
	No.6	暗灰色・淡灰白色粘質土	No.2と同一層準		○
	No.3	褐灰白色粘質土	縄文時代晩期～弥生時代前期	○	○
	No.4	暗灰褐色粘質土	縄文時代晩期～弥生時代前期	○	○
	No.5	淡黄灰白色粘土	縄文時代晩期～弥生時代前期	○	○
溝16	４層	淡灰褐色粘質微砂	弥生時代前期		○
	５層	淡灰色粘土	弥生時代前期		○
	６層	灰色粘土	弥生時代前期		○

・1991b)、K.Krammer (1992) などを用いる。結果は、産出種をアルファベット順に並べた一覧表で示す。

（２）植物珪酸体分析

湿重５ｇ前後の試料について、過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理（70W、250KHz、１分間)、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入して永久プレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現する短細胞珪酸体および機動細胞珪酸体を、近藤・佐藤（1986）の分類に基づいて同定・計数する。結果は、検出された種類と個数の一覧表として示す。

（３）大型植物遺体同定

各試料に300ccに数％の水酸化ナトリウム水溶液を加えて放置し、試料を泥化させる。静かに水洗後、試料中から大型の種実と葉を抽出する。残った残渣を再度篩を通して水洗する。これらを双眼実体顕微鏡下で観察し、種実遺体を選別・同定する。試料は種類毎に分けて、硼酸と硼砂の水溶液中に保存する。

３．化石の産状

（１）珪藻化石

珪藻化石はほとんど検出されなかった。共同溝１区西壁No. １～３は無化石であり、共同溝１区西壁No. ４で *Nitzschia* sp. は１固体、共同溝１区西壁No. ５で *Pinnularia borealis* は１固体検出される程度である。

（２）植物珪酸体

結果を表２に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるが、種類・検出個数ともに少ない。水路５区北壁試料では、No. ６・５でタケ亜科やヨシ属がわずかに認められる。またNo. ４～１ではこれ以外に栽培植物のイネ属も検出される。

表２　植物珪酸体分析結果

種類	水路５区北壁						共同溝１区西壁						溝16		
試料番号	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6	４層	５層	６層
イネ科葉部短細胞珪酸体															
イネ族イネ属	7	4	4	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
タケ亜科	21	21	21	14	—	5	4	36	23	54	55	32	10	21	25
ヨシ属	2	—	1	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—
ウシクサ族ススキ族	4	—	—	3	—	—	—	1	1	—	2	1	—	—	—
イチゴツナギ亜科	1	3	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	1	—
不明キビ型	3	2	6	3	—	1	1	—	—	—	2	—	2	2	—
不明ヒゲシバ型	2	5	3	8	1	1	—	2	—	2	2	3	1	2	5
不明ダンチク型	4	2	3	1	—	—	1	3	—	—	—	2	1	1	—
イネ科葉身機動細胞珪酸体															
イネ族イネ属	28	8	5	11	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—
タケ亜科	22	8	4	6	3	2	1	13	25	29	35	13	5	12	16
ヨシ属	1	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ウシクサ族ススキ族	6	4	2	1	—	1	—	—	1	—	—	—	—	—	1
不明	8	3	2	1	—	1	2	1	—	—	—	—	—	—	—
合　計															
イネ科葉部短細胞珪酸体	44	37	38	30	1	7	6	43	24	56	62	38	14	27	30
イネ科葉身機動細胞珪酸体	65	23	13	19	3	5	3	14	27	29	35	13	5	12	17
総　計	109	60	51	49	4	12	9	57	51	85	97	51	19	39	47
組織片															
イネ属穎珪酸体	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
イネ属短細胞列	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

共同溝1区西壁では、いずれの試料からもタケ亜科やヨシ属が産出し、特にタケ亜科の産出が目立つ。溝16では、4層・5層・6層ともタケ亜科が産出する。

（3）大型植物遺体

表3　大型植物遺体同定結果

遺構名	河道1	河道5		土壙75	遺構名	河道1	河道5		土壙75
種類名（部位）　試料番号	1	2	3	4	種類名（部位）　試料番号	1	2	3	4
モミ（葉）　多数	31	80	−		マテバシイ（葉）	3	−	3	−
ツガ属（葉）	1	1	1	−	ケヤキ（種子）	1	1	−	−
カヤ（種子）	−	−	2	−	サクラ属（核）	1	−	−	−
カヤ（葉）	1	21	1	−	マタタビ属（種子）	−	1	−	−
イヌガヤ（種子）	−	−	2	−	センダン（核）	−	−	1	−
イヌシデ（種子）	1	−	−	−	ツバキ（種子・果実）	−	−	17	−
コナラ属（子葉）	−	−	−	14	エゴノキ属（核）	−	−	13	−
イチイガシ（葉）	12	22	2	−	ナデシコ科（種子）	−	2	−	−
アカガシ亜属（果実）	4	−	11	−	照葉樹（葉）	17	28	29	−

4．考察

今回の微化石分析では、植物珪酸体・珪藻化石がほとんど検出されなかった。この原因としては、砂を含む試料が認められることから、堆積速度が速く堆積物中に取り込まれる量が極端に少なかったなどの可能性がある。したがって、本遺跡周辺の低地の古環境変遷について、詳細に検討することは難しい。ただし、わずかに検出される植物珪酸体の出現状況から、微高地などにはタケ・ササ類が、後背湿地などにはヨシ属などが生育していた可能性がある。また、水路5区N0.4より上位でイネ属珪酸体が検出されることから、中近世以降になると集水域で稲作が行われており、そこから化石が運搬・堆積したと考えられる。同地点で水田層の可能性があるとされているNo. 5は、植物珪酸体の検出固体数が少なく、しかもイネ属珪酸体が検出されず、今回の分析結果から見る限り稲作が行われていたとは考えにくい。

一方、検出された植物遺体をみると、葉も保存よく残存していることから、今回得られた大型植物遺体の多くは遺構のごく近くに生育していた母植物に由来すると考えられる。検出された大型植物遺体の中で、モミ、ツガ属、カヤ、イヌガヤは温帯性の針葉樹である。また、イチイガシ、アカガシ亜属、マテバシイなどは典型的な照葉樹で、暖温帯林の主要な構成要素である。センダンやツバキなども暖温帯に特徴的にみられる種類である。また、ケヤキやエゴノキ属は落葉樹で、河畔などに生育することが多い。遺跡の立地を反映しているらしく、河道近くに生育していたものと考えられる。このように、本遺跡周辺は温帯性の針葉樹や照葉樹が生育し、ケヤキやエゴノキ属なども河川沿いを中心に分布していたことが示唆される。本地域の植生史研究によると、岡山平野や倉敷平野の丘陵地はごく最近までシイ・カシ林を中心とした照葉樹林が優占し、江戸時代もしくは明治時代以降急激な森林の乱伐によりアカマツ二次林が急増したとされている（三好、1988）。今回の調査結果はこれと調和的な傾向であるといえる。

なお、弥生時代の土壙75から検出されたのはコナラ属の炭化種子である。コナラ属は収量が多く、かつ貯蔵が利くため、古くから利用されてきた種類である。また、周囲にはカシ類の森林が存在して

いたと考えられ、容易に入手可能であったと思われる。また、縄文時代の河道で多く検出されたイチイガシは「あく抜き」が不要である。調理が容易な為、食料としてよく利用されていた可能性がある。

〈引用文献〉

近藤錬三・佐瀬　隆（1986）植物珪酸体分析、その特性と応用。第四紀研究、25、p.31-64.

Krammer, K. （1992）PINNULARIA, eine Monographie der europaischen Texa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA, BAND26, p.1-353, BERLIN・STUTTGART.

Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. （1986）Bacillariophyceae, Teil 1, Naviculaceae. Band 2/1 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 876p., Gustay Fischer Verlag.

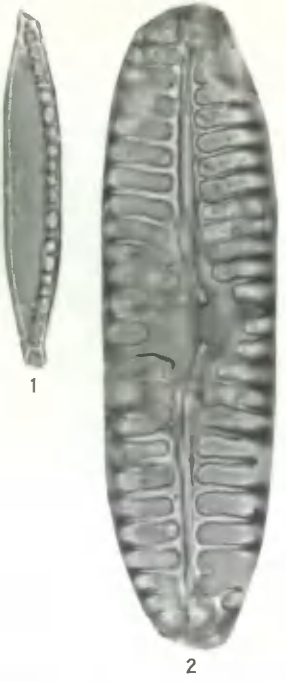
Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. （1988）Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. Band 2/2 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 536p., Gustav Fischer Verlag.

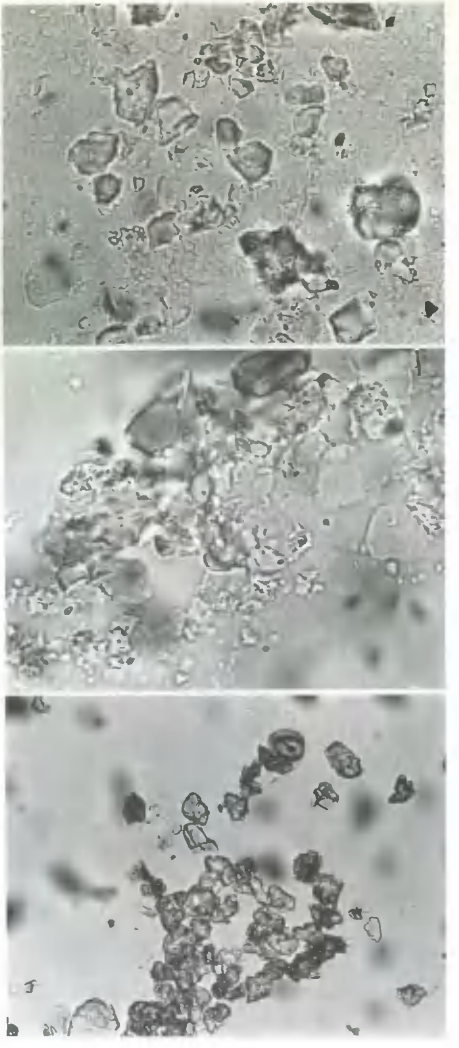
Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. （1991a) Bacillariophyceae, Teil 3, Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. Band 2/3 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 230p., Gustav Fischer Verlag.

Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. （1991b) Bacillariophyceae, Teil 4, Achnanthaceae, Kritische Ergaenzungen zu Navicula(Lineolatae)und Gomphonema. Band 2/4 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 248p., Gustav Fischer Verlag.

三好教夫（1988）岡山県の植生変遷史．岡植研，７，p.1-9.

図版１　珪藻化石・植物珪酸体





1. *Nitzschia* spp.（共同溝１区西壁No.4）
2. *Pinnularia borealis* Ehrenberg（共同溝１区西壁No.5）
3. 珪藻化石プレパラート内の状況写真（共同溝１区西壁No.2）
4. 珪藻化石プレパラート内の状況写真（共同溝１区西壁No.1）
5. イネ属機動細胞珪酸体（水路５区北壁No.3）
6. 植物珪酸体プレパラート内の状況写真（共同溝１区西壁No.2）

図版２　大型植物遺体

1. カヤ（種子；河道5；試料番号3）
2. イヌガヤ（種子；河道5；試料番号3）
3. ツバキ（種子、果実；河道5；試料番号3）
4. アカガシ亜属（果実；河道5；試料番号3）
5. アカガシ亜属（果実；河道5；試料番号3）
6. イチイガシ（葉；河道5；試料番号2）
7. イチイガシ（葉；河道5；試料番号2）
8. イチイガシ（葉；河道5；試料番号2）
9. マテバシイ（葉；河道5；試料番号2）
10. マテバシイ（葉；河道5；試料番号2）
11. モミ（葉；河道1；試料番号1）
12. モミ（葉；河道1；試料番号1）
13. カヤ（葉；河道5；試料番号3）
14. ツガ属（葉；河道1；試料番号1）
15. エゴノキ属（核；河道5；試料番号3）
16. センダン（核；河道5；試料番号3）
17. コナラ属（子葉；土壙75；試料番号）
18. サクラ属（核；河道1；試料番号1）
19. イヌシデ（種子；河道1；試料番号1）
20. ケヤキ（種子；河道1；試料番号1）
21. マタタビ属（種子；河道5；試料番号2）
22. ナデシコ科（種子；河道5；試料番号2）

出土遺物一覧（観察）表

1．土器観察表

2．石器・石製品観察表

新旧遺構名称対照表

報告書抄録

凡　　例

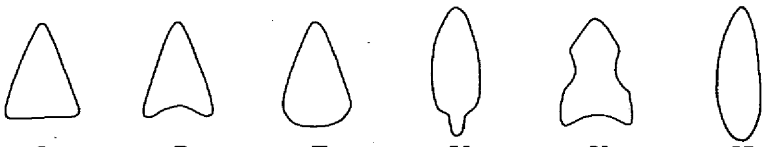
1　土器観察表の項目欄のうち、**番号**は実測図の整理番号であり、番号の頭にＪを付すものは縄文土器の略である。また、**掲載番号**は本報告書掲載図の番号と対応する。

2　石器・石製品観察表も同様であり、番号の頭に付したＡ～Ｃは、破損度や稀少性等を加味した整理上の区別である。

3　石器・石製品観察表の**出土地区**および**遺構名**は、報告書作成時の新出土地区と新遺構である。また、**時代・時期**は遺構の時期を示しており、必ずしもその遺物の時期を示すものではない。

4　石器・石製品の形式は、石鏃についてのみ以下の分類を行っている。

Ⅰ．平基式　Ⅱ．凹基式　Ⅲ．凸基Ⅰ式　Ⅳ．有茎式　Ⅴ．抉り入り式　Ⅵ．凸基Ⅱ式



5　新旧遺構名称対照表の**新遺構名**および**新遺構調査区**は、報告書作成時に付した名称であり、旧名称は発掘調査時のものである。

1．土器観察表

掲載番号	番号	新遺構名	旧遺構名	種別	器種	法量（cm）			特徴・備考
						口径	底径	器高	
1	J17	河道1	水路5区 Na10河道	縄文土器	浅鉢				器表は荒れている
2	J20	河道1	水路5区 Na10河道	縄文土器	浅鉢				
3	J30	河道1	水路5区 Na10河道	縄文土器	深鉢?				
4	J24	河道1	水路5区 Na10河道	縄文土器	深鉢				RLの縄文
5	J25	河道1	水路5区 Na10河道	縄文土器	深鉢				
6	J29	河道1	水路5区 Na10河道	縄文土器	深鉢				RLの縄文
7	J32	河道1	水路5区 Na10河道	縄文土器	深鉢				
8	J28	河道1	水路5区 Na10河道	縄文土器	深鉢				RLの縄文
9	J21	河道1	水路5区 Na10河道	縄文土器	浅鉢				
10	J1	河道1	水路6区 Na2河道	縄文土器	浅鉢				
11	J6	河道1	水路6区 Na2河道	縄文土器	鉢				器表荒れている
12	J10	河道1	水路6区 Na2河道	縄文土器	浅鉢				器表荒れている
13	J3	河道1	水路6区 Na2河道	縄文土器	深鉢				
14	J5	河道1	水路6区 Na2河道	縄文土器	深鉢				
15	J16	河道1	水路6区 Na2河道	縄文土器	鉢		7.6		
16	J15	河道1	水路6区 Na2河道	縄文土器	深鉢		4.8		
17	J9	河道1	水路6区 Na2河道	縄文土器	深鉢				全体に表面荒
18	J14	河道1	水路6区 Na2河道	縄文土器	深鉢		8.0		
19	J13	河道1	水路6区 Na2河道	縄文土器	深鉢		5.2		
20	J72	河道1	本館1区 Na1河道	縄文土器	浅鉢				
21	J36	河道1	本館1区 Na1河道	縄文土器	深鉢				器表荒れている
22	J34	河道1	本館1区 Na1河道	縄文土器	浅鉢				
23	J107	河道1	本館1区 Na1河道	縄文土器	浅鉢				
24	J58	河道1	本館1区 Na1河道	縄文土器	深鉢				被熱のため（？）変色。
25	J70	河道1	本館1区 Na1河道	縄文土器	深鉢				器表荒れている
26	J77	河道1	本館1区 Na1河道	縄文土器	深鉢				
27	J113	河道1	本館1区 Na1河道	縄文土器	深鉢				器表荒れている
28	J39	河道1	本館1区 Na1河道	縄文土器	深鉢				
29	J71	河道1	本館1区 Na1河道	縄文土器	浅鉢				
30	J106	河道1	本館1区 Na1河道	縄文土器	深鉢				
31	J82	河道1	本館1区 Na1河道	縄文土器	深鉢				
32	J80	河道1	本館1区 Na1河道	縄文土器	浅鉢				
33	J78	河道1	本館1区 Na1河道	縄文土器	深鉢				
34	J60	河道1	本館1区 Na1河道	縄文土器	浅鉢				
35	J76	河道1	本館1区 Na1河道	縄文土器	浅鉢				全体に黄褐色に変色、付着。
36	J98	河道1	本館1区 Na1河道	縄文土器	深鉢				
37	J112	河道1	本館1区 Na1河道	縄文土器	深鉢				
38	J50	河道1	本館1区 Na1河道	縄文土器	浅鉢				
39	J79	河道1	本館1区 Na1河道	縄文土器	深鉢				
40	J67	河道1	本館1区 Na1河道	縄文土器	浅鉢				
41	J59	河道1	本館1区 Na1河道	縄文土器	浅鉢				
42	J105	河道1	本館1区 Na1河道	縄文土器	深鉢				
43	J57	河道1	本館1区 Na1河道	縄文土器	浅鉢				
44	J41	河道1	本館1区 Na1河道	縄文土器	浅鉢				器表荒れている
45	J69	河道1	本館1区 Na1河道	縄文土器	浅鉢				
46	J35	河道1	本館1区 Na1河道	縄文土器	浅鉢				
47	J38	河道1	本館1区 Na1河道	縄文土器	深鉢				
48	J46	河道1	本館1区 Na1河道	縄文土器	深鉢				器面黄褐色で艶あり。
49	J84	河道1	本館1区 Na1河道	縄文土器	深鉢				
50	J48	河道1	本館1区 Na1河道	縄文土器	深鉢				
51	J49	河道1	本館1区 Na1河道	縄文土器	浅鉢				
52	J51	河道1	本館1区 Na1河道	縄文土器	深鉢				
53	J92	河道1	本館1区 Na1河道	縄文土器	深鉢				
54	J91	河道1	本館1区 Na1河道	縄文土器	深鉢				
55	J99	河道1	本館1区 Na1河道	縄文土器	深鉢				
56	J103	河道1	本館1区 Na1河道	縄文土器	深鉢				
57	J100	河道1	本館1区 Na1河道	縄文土器	深鉢				
58	J42	河道1	本館1区 Na1河道	縄文土器	浅鉢				
59	J74	河道1	本館1区 Na1河道	縄文土器	深鉢				沈線内に刺突を施す。
60	J33	河道1	本館1区 Na1河道	縄文土器	浅鉢				
61	J90	河道1	本館1区 Na1河道	縄文土器	深鉢				
62	J53	河道1	本館1区 Na1河道	縄文土器	深鉢				外面は巻貝条痕の調整。
63	J44	河道1	本館1区 Na1河道	縄文土器	深鉢				
64	J52	河道1	本館1区 Na1河道	縄文土器	深鉢				内面は巻貝条痕の調整。
65	J62	河道1	本館1区 Na1河道	縄文土器	浅鉢				
66	J64	河道1	本館1区 Na1河道	縄文土器	深鉢		5.0		
67	J95	河道1	本館1区 Na1河道	縄文土器	深鉢		5.1		
68	J63	河道1	本館1区 Na1河道	縄文土器	深鉢				
69	J65	河道1	本館1区 Na1河道	縄文土器	深鉢		4.8		
70	J116	河道1	本館1区 Na1河道	縄文土器	浅鉢		5.1		
71	J115	河道1	本館1区 Na1河道	縄文土器	深鉢		4.0		

掲載番号	番号	新遺構名	旧遺構名	種別	器種	法量（cm）			特徴・備考
						口径	底径	器高	
72	J94	河道１	本館１区 No1河道	縄文土器	深鉢		5.7		
73	J117	河道１	本館１区 No1河道	縄文土器	浅鉢		6.1		
74	J133	河道２	本館４区 No5河道	縄文土器	深鉢		7.1		
75	J114	河道１	本館１区 No1河道	縄文土器	浅鉢		7.9		
76	J132	河道２	本館４区 No5河道	縄文土器	深鉢				
77	J125	河道２	本館４区 No4河道	縄文土器	深鉢				RLの縄文
78	J127	河道２	本館４区 No8河道	縄文土器	浅鉢？				
79	J124	河道２	本館４区 No4河道	縄文土器	深鉢				
80	J126	河道２	本館４区 No8河道	縄文土器	浅鉢？				
81	J123	河道２	本館４区 No4河道	縄文土器	浅鉢				
82	J502	河道1	本館４区 西河道砂層中	縄文土器	深鉢				
83	J501	河道1	本館４区 西河道砂層中	縄文土器	深鉢				
84	J499	河道1	本館４区 西河道砂層中	縄文土器	深鉢				
85	J495	河道1	本館４区 東河道底面直上	縄文土器	深鉢				LRの縄文
86	J496	河道1	本館４区 西河道砂層中	縄文土器	深鉢				二枚貝条痕の調整
87	J497	河道1	本館４区 西河道砂層中	縄文土器	深鉢				
88	J503	河道1	本館４区 西河道砂層中	縄文土器	深鉢		6.0		
89	J508	河道1	水路７区 西河道上部	縄文土器	深鉢	2.3			
90	J506	河道1	水路７区 西河道底粗砂層	縄文土器	浅鉢				
91	J511	河道1	水路７区 西河道上部	縄文土器	浅鉢				
92	J509	河道1	水路７区 西河道上部	縄文土器	深鉢				
93	J510	河道1	水路７区 西河道上部	縄文土器	深鉢				
94	J135	河道２	宿舎区 No21河道	縄文土器	深鉢				
95	J118	河道２	本館１区 No2河道	縄文土器	浅鉢				
96	J121	河道２	本館１区 No2河道	縄文土器	浅鉢				RLの縄文
97	J120	河道２	本館１区 No2河道	縄文土器	浅鉢				
98	J119	河道２	本館１区 No2河道	縄文土器	浅鉢				
99	J136	河道２	本館１区 No２河道土器溜	縄文土器	深鉢	35.8	6.8		
100	J484	河道10	水路２区 河道1	縄文土器	深鉢	26.5			
101	J485	河道7	水路２区 河道2	縄文土器	深鉢				
102	J486	河道7	水路２区 河道2	縄文土器	深鉢				
103	J491	河道7	水路２区 河道2	縄文土器	深鉢				
104	J487	河道7	水路２区 河道2	縄文土器	深鉢	15.5			
105	J488	河道7	水路２区 河道2	縄文土器	深鉢				
106	J492	河道7	水路２区 河道2	縄文土器	深鉢				
107	J489	河道7	水路２区 河道2	縄文土器	深鉢				LRの縄文
108	J493	河道7	水路２区 河道2	縄文土器	深鉢		8.6		
109	J490	河道7	水路２区 河道2	縄文土器	深鉢				
110	J517	河道5	本館８区 縄文河道	縄文土器	深鉢				
111	J519	河道5	本館８区 縄文河道	縄文土器	深鉢	32.4			
112	J516	河道5	本館８区 縄文河道	縄文土器	深鉢				
113	J515	河道5	本館８区 河道1	縄文土器	深鉢				
114	J512	河道5	本館８区 河道1	縄文土器	深鉢				
115	J513	河道5	本館８区 河道1	縄文土器	深鉢				
116	J514	河道5	本館８区 河道1	縄文土器	深鉢				
117	J152	河道５	本館３区 旧河道1	縄文土器	深鉢				
118	J154	河道５	本館３区 旧河道1	縄文土器	深鉢				
119	J151	河道５	本館３区 旧河道1	縄文土器	深鉢				
120	J148	河道５	本館３区 旧河道1	縄文土器	深鉢				
121	J153	河道５	本館３区 旧河道1	縄文土器	深鉢				
122	J155	河道５	本館３区 旧河道1	縄文土器	深鉢				
123	J156	河道５	本館３区 旧河道1	縄文土器	深鉢		8.4		
124	J157	河道５	本館３区 旧河道1	縄文土器	深鉢		8.0		
125	J481	河道6	水路２区 河道3	縄文土器	深鉢				沈線間に縄文あるが、荒れて不明確
126	J482	河道6	水路２区 河道3	縄文土器	深鉢				
127	J480	河道6	水路２区 河道3	縄文土器	深鉢				RLの縄文
128	J483	河道6	水路２区 河道3	縄文土器	浅鉢				
129	J479	河道6	水路２区 河道3	縄文土器	深鉢				
130	J445	河道7	水路２区 河道2	縄文土器	深鉢				
131	J450	河道7	水路２区 河道2	縄文土器	深鉢				
132	J478	河道7	水路２区 河道2	縄文土器	浅鉢				
133	J447	河道7	水路２区 河道2	縄文土器	深鉢				
134	J471	河道7	水路２区 河道2	縄文土器	浅鉢				
135	J448	河道7	水路２区 河道2	縄文土器	深鉢				
136	J469	河道7	水路２区 河道2	縄文土器	深鉢				外面は二枚貝条痕の調整
137	J468	河道7	水路２区 河道2	縄文土器	深鉢				外面は二枚貝条痕の調整
138	J455	河道10	水路２区 河道1・15層	縄文土器	浅鉢				
139	J470	河道7	水路２区 河道2	縄文土器	浅鉢				
140	J451	河道7	水路２区 河道2	縄文土器	深鉢				
141	J477	河道7	水路２区 河道2	縄文土器	深鉢				頸部外面は二枚貝条痕調整
142	J460	河道10	水路２区 河道1・15層	縄文土器	深鉢				頸部外面は二枚貝条痕調整
143	J452	河道7	水路２区 河道2	縄文土器	深鉢				
144	J461	河道10	水路２区 河道1・15層	縄文土器	浅鉢				

掲載番号	番号	新遺構名	旧遺構名	種別	器種	法量（cm）			特徴・備考
						口径	底径	器高	
145	J476	河道7	水路２区 河道2	縄文土器	浅鉢				
146	J459	河道10	水路２区 河道1・15層	縄文土器	浅鉢				
147	J475	河道7	水路２区 河道2	縄文土器	深鉢				頸部外面は二枚貝条痕調整
148	J474	河道7	水路２区 河道2	縄文土器	深鉢				
149	J465	河道7	水路２区 河道2	縄文土器	浅鉢				内外面とも丁寧なミガキ
150	J457	河道10	水路２区 河道1・15層	縄文土器	浅鉢				内外面ともミガキ
151	J466	河道7	水路２区 河道2	縄文土器	浅鉢				
152	J467	河道7	水路２区 河道2	縄文土器	浅鉢				内外面ともミガキ
153	J454	河道10	水路２区 河道1・15層	縄文土器	浅鉢				
154	J446	河道7	水路２区 河道2	縄文土器	浅鉢				
155	J463	河道7	水路２区 河道2	縄文土器	浅鉢				
156	J453	河道7	水路２区 河道2	縄文土器	浅鉢				荒い条痕調整
157	J449	河道7	水路２区 河道2	縄文土器	深鉢				箆描文あり
158	J472	河道7	水路２区 河道2	縄文土器	浅鉢				
159	J462	河道10	水路２区 河道1・15層	縄文土器	浅鉢		4.5		
160	J387	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				
161	J389	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				
162	J388	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				
163	J411	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				
164	J307	河道10	浄化槽区 旧河道3(下層)	縄文土器	深鉢				
165	J317	河道10	浄化槽区 旧河道3(下層)	縄文土器	深鉢				
166	J428	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				RLの縄文
167	J379	河道10	浄化槽区 旧河道3(下層)	縄文土器	深鉢				頸部に垂下条線
168	J342	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	浅鉢				
169	J267	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	浅鉢				
170	J378	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				
171	J314	河道10	浄化槽区 旧河道3(下層)	縄文土器	浅鉢				
172	J436	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				
173	J442	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				
174	J270	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				
175	J370	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				
176	J331	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				
177	J318	河道10	浄化槽区 旧河道3(下層)	縄文土器	深鉢				
178	J309	河道10	浄化槽区 旧河道3(下層)	縄文土器	深鉢？				
179	J340	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				
180	J367	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				
181	J371	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				
182	J271	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				箆描文あり
183	J386	河道10	浄化槽区 旧河道3(下層)	縄文土器	深鉢				箆描文あり
184	J380	河道10	浄化槽区 旧河道3(下層)	縄文土器	深鉢				
185	J341	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				
186	J432	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				
187	J422	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				条痕後ナデ調整
188	J338	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				条痕後ナデ調整
189	J366	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				二枚貝条痕調整
190	J253	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢	31.2			外面条痕、内面ミガキ調整
191	J312	河道10	浄化槽区 旧河道3(下層)	縄文土器	深鉢				
192	J415	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				外面は二枚貝条痕の調整
193	J310	河道10	浄化槽区 旧河道3(下層)	縄文土器	深鉢				
194	J361	河道10	浄化槽区 旧河道3(下層)	縄文土器	深鉢				
195	J400	河道10	浄化槽区 旧河道3(下層)	縄文土器	深鉢				頸部はナデ、胴部はケズリ調整
196	J205	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				
197	J305	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				
198	J383	河道10	浄化槽区 旧河道3(下層)	縄文土器	深鉢				
199	J313	河道10	浄化槽区 旧河道3(下層)	縄文土器	深鉢				頸部は条痕調整
200	J333	河道10	浄化槽区 旧河道3(下層)	縄文土器	深鉢				垂下する爪形は押印による
201	J348	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				
202	J334	河道10	浄化槽区 旧河道3(下層)	縄文土器	深鉢				頸部は条痕調整
203	J410	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				
204	J327	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				
205	J344	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				
206	J335	河道10	浄化槽区 旧河道3(下層)	縄文土器	深鉢				
207	J326	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				
208	J439	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				胴部はケズリ調整
209	J409	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				
210	J293	河道10	浄化槽区 旧河道3(上層)	縄文土器	深鉢				外面は二枚貝条痕の調整
211	J420	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				沈線間に縄文あるが、荒れて不明瞭
212	J372	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				
212	J373	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				J372と同一
213	J191	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				
214	J332	河道10	浄化槽区 旧河道3(下層)	縄文土器					
215	J347	河道10	浄化槽区 旧河道3(下層)	縄文土器	浅鉢	32.0			
216	J222	河道10	浄化槽区 旧河道3(下層)	縄文土器	浅鉢				

掲載番号	番号	新遺構名	旧遺構名	種別	器種	法量（cm）			特徴・備考
						口径	底径	器高	
217	J254	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	浅鉢	31.3			
218	J394	河道10	浄化槽区 旧河道3(下層)	縄文土器	深鉢	19.1			
219	J303	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	浅鉢				内面はミガキ調整
220	J325	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	浅鉢				内外面ともにミガキ調整
221	J381	河道10	浄化槽区 旧河道3(下層)	縄文土器	深鉢				
222	J283	河道10	浄化槽区 旧河道3(上層)	縄文土器	浅鉢				補修孔あり
223	J375	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	浅鉢				
224	J273	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	浅鉢				
225	J258	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	浅鉢				
226	J360	河道10	浄化槽区 旧河道3(下層)	縄文土器	深鉢				
227	J343	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	浅鉢				
228	J408	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	浅鉢				
229	J173	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	浅鉢				
230	J171	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	浅鉢				
231	J202	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	浅鉢				内外面ともにミガキ調整
232	J416	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	浅鉢				内外面ともにミガキ調整
233	J239	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	浅鉢				
234	J256	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	浅鉢				
235	J405	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	浅鉢				
236	J172	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	浅鉢				
237	J336	河道10	浄化槽区 旧河道3(下層)	縄文土器	浅鉢				荒い条痕調整
238	J255	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	浅鉢				
239	J274	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	浅鉢				
240	J412	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	浅鉢				
240	J413	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	浅鉢				
241	J418	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				
242	J166	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				
243	J376	河道10	浄化槽区 旧河道3(下層)	縄文土器	深鉢				口縁端部に刻目を施す
244	J198	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				頸部は条痕後ナデ調整
245	J245	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				
246	J329	河道10	浄化槽区 旧河道3(下層)	縄文土器	深鉢				
247	J219	河道10	浄化槽区 旧河道3(下層)	縄文土器	深鉢				
248	J167	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢	26.3			
249	J197	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				頸部はナデ調整
250	J278	河道10	浄化槽区 旧河道3(上層)	縄文土器	深鉢				口縁端部に浅い刻目あり
251	J237	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				
252	J177	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				
253	J359	河道10	浄化槽区 旧河道3(下層)	縄文土器	浅鉢				
254	J286	河道10	浄化槽区 旧河道3(上層)	縄文土器	深鉢				
255	J168	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				
256	J265	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				頸部に篦描文あり
257	J246	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				頸部に篦描文あり
258	J158	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				頸部に篦描文あり
259	J218	河道10	浄化槽区 旧河道3(下層)	縄文土器	深鉢				頸部に篦描文あり
260	J365	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				頸部に篦描文あり
261	J297	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				頸部に篦描文あり
262	J262	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				
263	J353	河道10	浄化槽区 旧河道3(下層)	縄文土器	深鉢				頸部外面はナデ調整
264	J288	河道10	浄化槽区 旧河道3(上層)	縄文土器	深鉢				
265	J298	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				
266	J217	河道10	浄化槽区 旧河道3(下層)	縄文土器	深鉢				
267	J247	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				
268	J352	河道10	浄化槽区 旧河道3(下層)	縄文土器	深鉢				頸部外面はナデ調整
269	J355	河道10	浄化槽区 旧河道3(下層)	縄文土器	深鉢				
270	J261	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				頸部外面はナデ調整
271	J183	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				
272	J195	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				
273	J196	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				頸部外面はナデ調整
274	J250	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				
275	J289	河道10	浄化槽区 旧河道3(上層)	縄文土器	深鉢				空帯に刻目なし
276	J193	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				
277	J215	河道10	浄化槽区 旧河道3(下層)	縄文土器	深鉢				
278	J251	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				
279	J163	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				
280	J295	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				
281	J351	河道10	浄化槽区 旧河道3(下層)	縄文土器	深鉢				頸部外面はナデ調整
282	J290	河道10	浄化槽区 旧河道3(上層)	縄文土器	深鉢				
283	J350	河道10	浄化槽区 旧河道3(下層)	縄文土器	深鉢				
284	J181	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				
285	J291	河道10	浄化槽区 旧河道3(上層)	縄文土器	深鉢				
286	J280	河道10	浄化槽区 旧河道3(上層)	縄文土器	深鉢				頸部に篦描文あり
287	J264	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				
288	J182	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				頸部外面はナデ調整

掲載番号	番号	新遺構名	旧遺構名	種別	器種	法量（cm）			特徴・備考
						口径	底径	器高	
289	J296	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				
290	J194	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				
291	J221	河道10	浄化槽区 旧河道3(下層)	縄文土器	深鉢				
292	J216	河道10	浄化槽区 旧河道3(下層)	縄文土器	深鉢				
293	J160	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				
294	J165	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				補修孔あり
295	J390	河道10	浄化槽区 旧河道3(下層)	縄文土器	深鉢	27.5			
295	J391	河道10	浄化槽区 旧河道3(下層)	縄文土器	深鉢				
296	J214	河道10	浄化槽区 旧河道3(下層)	縄文土器	深鉢				213と同一個体
297	J324	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				
298	J207	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				頸部に篦描文あり
299	J159	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				頸部に篦描文あり
300	J162	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				
301	J357	河道10	浄化槽区 旧河道3(下層)	縄文土器	深鉢				
302	J180	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				頸部に篦描文あり
303	J275	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				頸部に篦描文あり
304	J226	河道10	浄化槽区 旧河道3(下層)	縄文土器	深鉢				頸部に篦描文あり
305	J269	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				
306	J227	河道10	浄化槽区 旧河道3(下層)	縄文土器	深鉢				
307	J302	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				
308	J164	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				
309	J209	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢.				
310	J228	河道10	浄化槽区 旧河道3(下層)	縄文土器	深鉢				
311	J236	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				
312	J225	河道10	浄化槽区 旧河道3(下層)	縄文土器	深鉢				
313	J203	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢？				
314	J238	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				
315	J272	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				ナデ調整
316	J192	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				ナデ調整
317	J244	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢		6.8		
318	J179	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	浅鉢？		5.3		
319	J404	河道10	浄化槽区 旧河道3(下層)	縄文土器	浅鉢				
320	J212	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢		6.9		
321	J211	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢		6.8		
322	J232	河道10	浄化槽区 旧河道3(下層)	縄文土器	深鉢		9.8		
323	J190	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	浅鉢		12.8		
324	J206	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				
325	J234	河道10	浄化槽区 旧河道3(下層)	縄文土器	深鉢		6.1		
326	J306	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢		9.6		
327	J186	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢		9.6		
328	J287	河道10	浄化槽区 旧河道3(上層)	縄文土器	深鉢		5.5		
329	J276	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				
330	J231	河道10	浄化槽区 旧河道3(下層)	縄文土器	深鉢		6.8		
331	J230	河道10	浄化槽区 旧河道3(下層)	縄文土器	深鉢		8.1		
332	J315	河道10	浄化槽区 旧河道3(下層)	縄文土器	深鉢		5.4		
333	J187	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢		6.0		
334	J434	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢		8.0		
335	J435	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢		5.0		
336	J444	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢		6.4		
337	J440	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢		7.4		
338	J259	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	浅鉢		7.0		
339	J321	河道10	浄化槽区 旧河道3(下層)	縄文土器	深鉢		4.4		
340	J316	河道10	浄化槽区 旧河道3(下層)	縄文土器	深鉢				
341	J345	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢		2.7		
342	J233	河道10	浄化槽区 旧河道3(下層)	縄文土器	深鉢		7.4		
343	J260	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢		6.5		
344	J188	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢		7.6		
345	J369	河道10	浄化槽区 旧河道3	縄文土器	深鉢				
346	J524	河道10	本館７区 河道1	縄文土器	深鉢				口縁部から爪形文が垂下
347	J521	河道10	本館７区 河道1	縄文土器	深鉢				
348	J525	河道10	本館７区 河道1	縄文土器	深鉢				
349	J523	河道10	本館７区 河道1	縄文土器	深鉢				
350	J522	河道10	本館７区 河道1	縄文土器	深鉢				
351	J526	河道10	本館７区 河道1	縄文土器	深鉢				二枚貝条痕の調整
352	J520	河道10	本館７区 河道1	縄文土器	浅鉢				
353	J144	河道５	水路３区 旧河道2	縄文土器					
354	J143	河道５	水路３区 旧河道2	縄文土器	深鉢				頸部は二枚貝条痕の調整
355	J142	河道５	水路３区 旧河道2(下層)	縄文土器	深鉢				
356	J145	河道５	水路３区 旧河道2	縄文土器	深鉢	33.4	35.2		
357	J137	河道５	水路３区 旧河道2(下層)	縄文土器	深鉢				
358	J138	河道５	水路３区 旧河道2(下層)	縄文土器	深鉢				
359	J146	河道５	水路３区 旧河道2	縄文土器	深鉢				
360	J141	河道５	水路３区 旧河道2(下層)	縄文土器	深鉢				

掲載番号	番号	新遺構名	旧遺構名	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	特徴・備考
361	J140	河道５	水路３区 旧河道2(下層)	縄文土器	深鉢				口縁端部に刻目なし
362	J536	河道10	付属建物２区 河道1	縄文土器	深鉢	27.2			
363	J544	河道10	付属建物２区 河道1	縄文土器	深鉢				
364	J537	河道10	付属建物２区 河道1	縄文土器	深鉢？				
365	J532	河道10	付属建物２区 河道1	縄文土器	深鉢				
366	J531	河道10	付属建物２区 河道1	縄文土器	深鉢	推定25.4			RLの縄文
367	J529	河道10	付属建物１区 河道1	縄文土器	深鉢				
368	J571	河道10	付属建物１区 河道1	縄文土器	深鉢				頸部外面はナデ調整
369	J576	河道10	付属建物１区 河道1	縄文土器	深鉢				頸部に箆描文あり
370	J533	河道10	付属建物２区 河道1	縄文土器	鉢				
371	J575	河道10	付属建物１区 河道1	縄文土器	鉢				
372	J540	河道10	付属建物２区 河道1	縄文土器					
373	J528	河道10	付属建物１区 河道1	縄文土器	浅鉢	19.8～18.8			
374	J562	河道10	付属建物１区 河道1	縄文土器					
375	J564	河道10	付属建物１区 河道1	縄文土器					
376	J572	河道10	付属建物１区 河道1	縄文土器	深鉢				
377	J538	河道10	付属建物２区 河道1	縄文土器	深鉢				
378	J545	河道10	付属建物２区 河道1	縄文土器	深鉢				
379	J558	河道10	付属建物１区 河道1	縄文土器	深鉢				内外面ともにミガキ
380	J560	河道10	付属建物１区 河道1	縄文土器	浅鉢				内外面ともにミガキ
381	J559	河道10	付属建物１区 河道1	縄文土器	浅鉢				
382	J557	河道10	付属建物１区 河道1	縄文土器	浅鉢				内外面ともにミガキ
383	J570	河道10	付属建物１区 河道1	縄文土器					
384	J586	河道10	付属建物１区 河道1	縄文土器	鉢				
385	J579	河道10	付属建物１区 河道1	縄文土器	浅鉢				
386	J578	河道10	付属建物１区 河道1	縄文土器	浅鉢				口縁部の内外面はミガキ
387	J547	河道10	付属建物２区 河道1	縄文土器	浅鉢	17.7			
388	J584	河道10	付属建物１区 河道1	縄文土器	鉢	推定19.0			
389	J568	河道10	付属建物１区 河道1	縄文土器	鉢	推定14.0			
390	J553	河道10	付属建物１区 河道1	縄文土器	鉢	25.8			
391	J554	河道10	付属建物１区 河道1	縄文土器	深鉢	27.2			頸部外面はナデ調整
392	J555	河道10	付属建物１区 河道1	縄文土器	深鉢	推定22.1			頸部外面はナデ調整
393	J582	河道10	付属建物１区 河道1	縄文土器	深鉢	28.0			
394	J585	河道10	付属建物１区 河道1	縄文土器	深鉢				頸部外面は二枚貝条痕調整
395	J569	河道10	付属建物１区 河道1	縄文土器	深鉢				頸部外面はナデ調整
396	J556	河道10	付属建物１区 河道1	縄文土器	深鉢				頸部外面はナデ調整
397	J567	河道10	付属建物１区 河道1	縄文土器	深鉢				
398	J577	河道10	付属建物１区 河道1	縄文土器	深鉢				頸部外面はナデ調整
399	J580	河道10	付属建物１区 河道1	縄文土器	深鉢				
400	J563	河道10	付属建物１区 河道1	縄文土器					
401	J581	河道10	付属建物１区 河道1	縄文土器	深鉢				頸部外面はナデ、胴部はケズリ調整
402	J566	河道10	付属建物１区 河道1	縄文土器			推定9.4		
403	J552	河道10	付属建物１区 河道1南部	縄文土器			8.8		
404	J550	河道10	付属建物２区 河道1	縄文土器			8.3		
405	J573	河道10	付属建物１区 河道1	縄文土器			推定4.6		
406	J543	河道10	付属建物２区 河道1	縄文土器			2.8		
407	J565	河道10	付属建物１区 河道1	縄文土器	鉢		2.0		
408	J551	たわみ１	付属建物２区 たわみ1	縄文土器	鉢	推定29.4			
409	39	土壙24	市道拡幅区 土壙2	弥生土器	甕		6.6		
410	40	土壙24	市道拡幅区 土壙2	弥生土器	甕		6.0		
411	41	土壙24	市道拡幅区 土壙2	弥生土器	甕		6.8		
412	38	土壙24	市道拡幅区 土壙2	弥生土器	大甕		17.5		
413	37	土壙25	市道拡幅区 土壙1	弥生土器	甕				
414	68	土壙28	水路８区 土壙1-1	弥生土器	壺？		8.8		
415	69	土壙29	水路８区 土壙3	弥生土器	壺？		10.2		黒斑あり
416	31	土壙34	本館５区 土壙1	弥生土器	大型壺	49.7			
417	32	土壙35	本館５区 土壙2-①	弥生土器	甕		7.2		煤付着
418	179	土壙38	本館２区 土壙2	弥生土器	壺		9.0		
419	178	土壙38	本館２区 土壙2	弥生土器	壺				
420	181	土壙38	本館２区 土壙2	弥生土器		20.4			
421	180	土壙38	本館２区 土壙2	弥生土器	壺		8.6		
422	175	土壙38	本館２区 土壙2	弥生土器	壺				
423	210	土壙41	本館２区 土壙3	弥生土器	壺		9.0		
424	209	土壙41	本館２区 土壙3	弥生土器	甕		9.0		
425	211	土壙41	本館２区 土壙9	弥生土器	壺				
426	212	土壙41	本館２区 土壙9	弥生土器	壺				
427	213	土壙41	本館２区 土壙9	弥生土器	壺				
428	216	土壙41	本館２区 土壙9	弥生土器	甕		8.3		
429	217	土壙41	本館２区 土壙9	弥生土器	壺		10.4		
430	218	土壙43	本館２区 土壙5	弥生土器	甕				煤付着
431	380	土壙47	本館８区 土壙5	弥生土器	甕				黒斑あり
432	382	土壙47	本館８区 土壙5	弥生土器	甕		8.0		
433	383	土壙48	本館８区 土壙6①	弥生土器	蓋	11.5		2.8	

田益田中（国立岡山病院）遺跡

掲載番号	番号	新遺構名	旧遺構名	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	特徴・備考
434	387	土壙48	本館８区 土壙6⑧	弥生土器	壺	14.0			
435	384	土壙48	本館８区 土壙6②	弥生土器	甕		7.8		
436	386	土壙48	本館８区 土壙6⑤	弥生土器	壺				
437	379	土壙49	本館８区 土壙4	弥生土器	甕		7.1		
438	392	土壙42	本館８区 土壙3	弥生土器	甕		6.0		
439	376	土壙54	本館８区 土壙11	弥生土器	壺				
440	375	土壙54	本館８区 土壙11	弥生土器	甕				
441	369	土壙57	本館８区 土壙9	弥生土器	甕				煤付着
442	370	土壙59	本館８区 土壙10	弥生土器	甕				
443	372	土壙59	本館８区 土壙10	弥生土器	甕		6.1		煤付着
444	371	土壙59	本館８区 土壙10	弥生土器	甕		8.2		煤付着
445	373	土壙59	本館８区 土壙10	弥生土器	壺		9.3		
446	365	土壙63	本館８区 土壙3	弥生土器	甕		9.0		
447	366	土壙63	本館８区 土壙3	弥生土器	甕		7.1		
448	367	土壙64	本館８区 土壙5	弥生土器	甕				
449	353	土壙68	本館８区 土壙7	弥生土器	甕	推17.0			
450	354	土壙68	本館８区 土壙7	弥生土器					
451	512	土壙76	水路２区 土壙9	弥生土器	甕				
452	515	土壙80	水路２区 土壙11	弥生土器	甕				
453	321	土壙79	水路２区 土壙6	弥生土器	壺	15.3			
454	323	土壙79	水路２区 土壙6	弥生土器	壺	14.2			
455	308	土壙79	水路２区 土壙6	弥生土器	壺				
456	326	土壙79	水路２区 土壙6	弥生土器	壺	16.4			
457	319	土壙79	水路２区 土壙6	弥生土器	無頸壺	11.4			
458	324	土壙79	水路２区 土壙6	弥生土器	壺	17.4			
459	417	土壙79	水路２区 土壙6	弥生土器	壺	16.2			
460	325	土壙79	水路２区 土壙6	弥生土器	壺	16.3			
461	327	土壙79	水路２区 土壙6	弥生土器	蓋	13			
462	330	土壙79	水路２区 土壙6	弥生土器	ミニチュア甕	6.6~7.0	4	9.8	
463	318	土壙79	水路２区 土壙6	弥生土器	甕	19.7			黒斑あり
464	320	土壙79	水路２区 土壙6	弥生土器	甕	18.4			
465	310	土壙79	水路２区 土壙6	弥生土器	甕	30.4			
466	314	土壙79	水路２区 土壙6	弥生土器	甕				
467	309	土壙79	水路２区 土壙6	弥生土器	甕	33.6			煤付着
468	313	土壙79	水路２区 土壙6	弥生土器	甕		7.6		
469	342	土壙79	水路２区 土壙6	弥生土器	壺		7.3		
470	312	土壙79	水路２区 土壙6	弥生土器			7.6		
471	329	土壙79	水路２区 土壙6	弥生土器		18			
472	331	土壙79	水路２区 土壙6	弥生土器	台付鉢		推11.4		煤付着
473	333	土壙79	水路２区 土壙6	弥生土器	鉢		6.8		
474	502	土壙81	水路２区 土壙7	弥生土器	甕				
475	500	土壙81	水路２区 土壙7	弥生土器	甕				
476	501	土壙81	水路２区 土壙7	弥生土器	甕				
477	497	土壙81	水路２区 土壙7	弥生土器	甕		推定7.9		
478	498	土壙81	水路２区 土壙7	弥生土器	甕		推定8.0		
479	499	土壙81	水路２区 土壙7	弥生土器	甕		推定7.0		
480	517	土壙82	水路２区 土壙12	弥生土器	甕				
481	520	土壙82	水路２区 土壙12	弥生土器	甕		推定6.3		
482	518	土壙82	水路２区 土壙12	弥生土器	甕		推定5.2		煤付着
483	505	土壙92	水路２区 土壙8	弥生土器	甕				煤付着
484	507	土壙92	水路２区 土壙8	弥生土器	甕				
485	508	土壙92	水路２区 土壙8	弥生土器	甕				
486	509	土壙92	水路２区 土壙8	弥生土器	甕				煤付着
487	504	土壙92	水路２区 土壙8	弥生土器			4.6		煤付着
488	503	土壙92	水路２区 土壙8	弥生土器			7.6		煤付着
489	511	土壙92	水路２区 土壙8	弥生土器	手づくね				黒斑あり
490	527	土壙93	水路２区 土壙17	弥生土器	甕				煤付着
491	532	土壙95	水路２区 土壙29	弥生土器	甕	27.2			
492	523	土壙96	水路２区 土壙14	弥生土器	甕				
493	526	土壙96	水路２区 土壙14	弥生土器			5.0		
494	525	土壙96	水路２区 土壙14	弥生土器			4.3		煤付着
495	530	土壙97	水路２区 土壙27	弥生土器	甕				
496	416	土壙112	浄化槽区 土壙2	弥生土器	甕	20.4			
497	412	土壙112	浄化槽区 土壙2	弥生土器	甕	28.6			煤付着
498	413	土壙112	浄化槽区 土壙2	弥生土器	甕	16.7			煤付着
499	415	土壙112	浄化槽区 土壙2	弥生土器	甕	27.8			煤付着
500	414	土壙112	浄化槽区 土壙2	弥生土器	甕	29.5			
501	424	土壙112	浄化槽区 土壙2	弥生土器	甕				
502	420	土壙112	浄化槽区 土壙2	弥生土器	甕		7.4		
503	425	土壙112	浄化槽区 土壙2	弥生土器	甕				
504	422	土壙112	浄化槽区 土壙2	弥生土器	甕				
505	423	土壙112	浄化槽区 土壙2	弥生土器	甕				
506	418	土壙112	浄化槽区 土壙2	弥生土器	甕		4.7		

掲載番号	番号	新遺構名	旧遺構名	種別	器種	法量（cm）			特徴・備考
						口径	底径	器高	
507	426	土壙112	浄化槽区 土壙2	弥生土器	高杯				
508	421	土壙112	浄化槽区 土壙2	弥生土器	ジョッキ型壺		10.7		
509	447	溝9	No2凹み	弥生土器	壺	13.0			
510	445	溝9	No2凹み	弥生土器	甕				煤付着
511	444	溝9	No1溝	弥生土器	壺				
512	443	溝9	No1溝	弥生土器	壺				
513	446	溝9	No2凹み	弥生土器	甕				
514	450	溝9	No2凹み	弥生土器	壺	21.8			
515	451	溝9	No2凹み	弥生土器	壺		7.7		
516	449	溝9	No2凹み	弥生土器	甕		8.0		
517	448	溝9	No2凹み	弥生土器	甕		8.0		
518	442	溝9	No1溝	弥生土器	壺		7.6		
519	427	溝10	進入路1区 No9河道	弥生土器	甕	18.4			煤付着
520	430	溝10	進入路1区 No9河道	弥生土器	壺	15.5			
521	429	溝10	進入路1区 No9河道	弥生土器	甕		6.0		煤付着
522	439	溝10	進入路1区 No9河道	弥生土器	甕		4.4		煤付着
523	220	溝9	本館2区 溝2	弥生土器	壺				
524	155	溝9	本館2区 溝2	弥生土器	甕	19.4			
525	157	溝9	本館2区 溝2	弥生土器	甕				黒斑あり
526	187	溝9	本館2区 溝1・2	弥生土器	無頸壺				
527	160	溝9	本館2区 溝2	弥生土器	壺				
528	190	溝9	本館2区 溝1・2	弥生土器	壺				
529	154	溝9	本館2区 溝2	弥生土器	甕	19.6			煤付着
530	182	溝9	本館2区 溝1・2	弥生土器	甕				
531	183	溝9	本館2区 溝1・2	弥生土器	甕				
532	184	溝9	本館2区 溝1・2	弥生土器	甕				
533	186	溝9	本館2区 溝1・2	弥生土器	甕				
534	185	溝9	本館2区 溝1・2	弥生土器	甕				煤付着
535	198	溝9	本館2区 溝1・2	弥生土器	蓋		7.0		煤付着
536	161	溝9	本館2区 溝2	弥生土器			5.0		黒斑あり
537	199	溝9	本館2区 溝1・2	弥生土器	壺		7.3		
538	202	溝9	本館2区 溝1・2	弥生土器	壺		8.2		
539	205	溝9	本館2区 溝1・2	弥生土器	壺				
540	165	溝9	本館2区 溝2	弥生土器	壺		8.0		
541	204	溝9	本館2区 溝1・2	弥生土器	壺		7.4		
542	167	溝9	本館2区 溝2	弥生土器	壺		9.0		
543	200	溝9	本館2区 溝1・2	弥生土器	壺		6.0		
544	166	溝9	本館2区 溝2	弥生土器	壺		12.8		
545	206	溝9	本館2区 溝1・2	弥生土器	壺		15.1		黒斑あり
546	219	溝9	本館2区 溝2	弥生土器	甕		8.7		煤付着
547	197	溝9	本館2区 溝1・2	弥生土器	甕 or 蓋		6.1		
548	203	溝9	本館2区 溝1・2	弥生土器	甕		6.6		煤付着
549	162	溝9	本館2区 溝2	弥生土器			7.2		煤付着
550	163	溝9	本館2区 溝2	弥生土器	壺？甕？		8.0		黒斑あり
551	201	溝9	本館2区 溝1・2	弥生土器	壺		8.9		
552	164	溝9	本館2区 溝2	弥生土器	壺		8.2		
553	395	溝9	本館8区 溝2 A	弥生土器	壺	10.1			
554	396	溝9	本館8区 溝2 2B	弥生土器	壺	15.9			
555	394	溝9	本館8区 溝2 A3層	弥生土器	壺	15.5			
556	393	溝9	本館8区 溝2 3層A	弥生土器	壺	16.3			
557	411	溝9	本館8区 溝2 C	弥生土器	無頸壺	推17.0			
558	402	溝9	本館8区 溝2 A	弥生土器	甕				
559	410	溝9	本館8区 溝2 C	弥生土器	甕				煤付着
560	408	溝9	本館8区 溝2 B	弥生土器？	壺		6.0		
561	403	溝9	本館8区 溝2 3層A	弥生土器	甕				
562	407	溝9	本館8区 溝2 3層	弥生土器	甕				煤付着
563	404	溝9	本館8区 溝2 A	弥生土器	甕				
564	399	溝9	本館8区 溝2A 3層	弥生土器	甕	26.3			
565	398	溝9	本館8区 溝2 A	弥生土器	鉢	32.6			煤付着
566	400	溝9	本館8区 溝2A 3層	弥生土器	甕？	28.0			煤付着
567	409	溝9	本館8区 溝2 3層C	弥生土器		26.6			
568	401	溝9	本館8区 溝2A 3層	弥生土器	甕	23.6			
569	397	溝9	本館8区 溝11	弥生土器		22.3			
570	405	溝9	本館8区 溝2 A	弥生土器	甕		8.8		
571	406	溝9	本館8区 溝2 3層A	弥生土器	甕		9.0		外傾接合
572	377	溝10	本館8区 溝1	弥生土器	甕	22.0			煤付着
573	356	溝10	本館8区 溝1	弥生土器	甕		7.4		
574	378	溝10	本館8区 溝1	弥生土器	甕		7.6		煤付着
575	44	溝32	水路7・8区 溝3	弥生土器	壺？				
576	66	溝33	水路7区 溝1	弥生土器	壺				黒斑あり
577	61	溝33	水路7区 溝2	弥生土器	甕	15.7			
578	62	溝33	水路7区 溝2	弥生土器	甕	14.4			
579	63	溝33	水路7区 溝2	弥生土器	壺？甕？	25.5			黒斑あり

掲載番号	番号	新遺構名	旧遺構名	種別	器種	法量（cm）			特徴・備考
						口径	底径	器高	
580	48	溝33	水路７区 溝1・2	弥生土器	甕	19.2			黒斑あり
581	49	溝33	水路７区 溝1・2	弥生土器	甕	13.8			黒斑あり
582	50	溝33	水路７区 砂利層	弥生土器	甕	14.2			
583	57	溝33	水路７区 溝1	弥生土器	小型台付鉢	9.9	7.4		
584	54	溝33	水路７区 溝2上層	弥生土器	高杯				
585	55	溝33	水路７区 溝2上層	弥生土器	高杯		10.2		
586	56	溝33	水路７区 溝2	弥生土器	高杯		9.3		
587	67	溝33	水路７区 溝1	弥生土器	長頸壺	19.4~19.2	6.6	33.1	
588	42	溝33	水路７区 溝2	弥生土器	壺？甕？		6.1		煤付着
589	43	溝33	水路７区 砂利層上面	弥生土器	壺？甕？		7.3		煤付着
590	46	溝33	水路７区 溝2	弥生土器	甕？鉢？		8.6		
591	58	溝33	水路７区 溝2上層	弥生土器	甕		9.8		
592	59	溝33	水路７区 溝1	弥生土器	甕		5.5		
593	60	溝33	水路７区 溝1	弥生土器	甕		5.1		
594	52	溝33	水路７区 溝1	弥生土器	甕		6.7		
595	51	溝33	水路７区 溝2上層	弥生土器	甕		5.8		
596	246	溝35	本館８区 溝4	弥生土器	壺		8.1		
597	363	溝37	本館８区 溝4	弥生土器	甕		8.4		
598	364	溝37	本館８区 溝4	弥生土器	甕		8.6		煤付着
599	362	溝37	本館８区 溝4	弥生土器	蓋				
600	358	溝50	本館８区 溝4	弥生土器	甕		10.0		
601	718	溝53	本館８区 溝5	弥生土器	壺	13.8			黒斑あり
602	711	溝53	本館３区 溝1	弥生土器	壺				
603	688	溝53	本館３区 溝1	弥生土器	壺				
604	693	溝53	本館３区 溝1	弥生土器	壺	11.8			
605	704	溝53	本館３区 溝1	弥生土器	壺	14.6			黒斑あり
606	691	溝53	本館３区 溝1	弥生土器	壺	15.6			
607	702	溝53	本館３区 溝1	弥生土器	壺	16.2			
608	712	溝53	本館３区 溝1	弥生土器	壺				
609	690	溝53	本館３区 溝1	弥生土器	壺				
610	705	溝53	本館３区 溝1	弥生土器	壺				
611	687	溝53	本館３区 溝1	弥生土器	蓋				
612	686	溝53	本館３区 溝1	弥生土器	蓋	10.6			煤付着
613	717	溝53	本館８区 溝5	弥生土器	小型台付鉢	7.4	3.8	3.8	
614	697	溝53	本館３区 溝1	弥生土器	台付鉢				黒斑あり
615	692	溝53	本館３区 溝1	弥生土器	壺				
616	706	溝53	本館３区 溝1	弥生土器	甕				煤付着
617	715	溝53	本館３区 溝1	弥生土器	甕				
618	720	溝53	本館８区 溝5	弥生土器	甕				煤付着
619	714	溝53	本館３区 溝1	弥生土器	甕				
620	716	溝53	本館３区 溝1	弥生土器	甕				
621	683	溝53	本館３区 溝1	弥生土器	甕				
622	713	溝53	本館３区 溝1	弥生土器	甕				
623	685	溝53	本館３区 溝1	弥生土器	甕				煤付着
624	689	溝53	本館３区 溝1	弥生土器	甕				
625	709	溝53	本館３区 溝1	弥生土器	甕				煤付着
626	684	溝53	本館３区 溝1	弥生土器	甕				
627	695	溝53	本館３区 溝1	弥生土器	甕				煤付着
628	696	溝53	本館３区 溝1	弥生土器	甕				煤付着
629	707	溝53	本館３区 溝1	弥生土器	甕				
630	708	溝53	本館３区 溝1	弥生土器	甕				
631	694	溝53	本館３区 溝1	弥生土器	甕				
632	700	溝53	本館３区 溝1	弥生土器	壺				
633	698	溝53	本館３区 溝1	弥生土器	壺				
634	699	溝53	本館３区 溝1	弥生土器	壺				
635	710	溝53	本館３区 溝1	弥生土器	高杯				黒斑あり
636	719	溝53	本館８区 溝5	弥生土器	鉢	17.8			
637	701	溝53	本館３区 溝1	弥生土器	ジョッキ型鉢				
638	298	溝58	水路２区 溝10上層	弥生土器	甕		3.9		
639	299	溝58	水路２区 溝10上層	弥生土器	甕		5.2		
640	616	溝59	付属建物１区 No6溝	弥生土器	壺or甕				
641	607	溝60	付属建物１区 No4溝	弥生土器	甕				煤付着
642	609	溝60	付属建物１区 No4溝	弥生土器					黒斑あり
643	613	溝60	付属建物１区 No4溝	弥生土器	甕or壺		推定9.3		
644	612	溝60	付属建物１区 No4溝	弥生土器	甕or壺		推定3.6		
645	615	溝60	付属建物１区 No4溝	弥生土器	甕or壺		推定9.0		
646	611	溝60	付属建物１区 No4溝	弥生土器			7.0		
647	608	溝60	付属建物１区 No4溝	弥生土器			6.8		
648	345	溝60	本館７区 溝1	弥生土器	甕		5.0		
649	623	溝61	付属建物１区 No7溝東	弥生土器	甕	推定19.0			
650	626	溝61	付属建物１区 No7溝東	弥生土器	壺or甕		推定9.0		煤付着
651	624	溝61	付属建物１区 No7溝東	弥生土器	壺or甕		推定9.4		
652	622	溝61	付属建物１区 No7溝底	弥生土器	壺or甕		推定7.0		

掲載番号	番号	新遺構名	旧遺構名	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	特徴・備考
653	348	溝61	本館7区 溝2	弥生土器	壺		7.5		
654	606	溝62	付属建物1区 No3溝	弥生土器	甕 壺		3.8		
655	303	溝63	水路2区 溝13	弥生土器	甕	28.5			
656	618	溝63	付属建物2区 No16溝	弥生土器	壺or甕		5.2		
657	258	溝64	水路2区 溝9	弥生土器	壺	17.0			
658	639	溝64	付属建物2区 No15溝	弥生土器	壺	推定17.0			
659	646	溝64	付属建物2区 No15溝	弥生土器	蓋	8.3		4.3	
660	647	溝64	付属建物2区 No15溝	弥生土器	蓋	13.6			
661	637	溝64	付属建物2区 No13溝	弥生土器	壺				
662	632	溝64	付属建物2区 No15溝	弥生土器	壺				
663	259	溝64	水路2区 溝9	弥生土器	壺				黒斑あり
664	634	溝64	付属建物2区 No12・13上層	弥生土器	甕	推定18.8			黒斑あり
665	636	溝64	付属建物2区 No15溝	弥生土器	壺	推定19.4			
666	642	溝64	付属建物2区 No15溝	弥生土器	壺	推定22.7			
667	635	溝64	付属建物2区 No13溝	弥生土器	甕	推定12.6			
668	633	溝64	付属建物2区 No15溝	弥生土器	甕	推定12.4			
669	641	溝64	付属建物2区 No15溝	弥生土器	甕	推定14.0			煤付着
670	640	溝64	付属建物2区 No15溝	弥生土器	甕	17.2			
671	644	溝64	付属建物2区 No15溝	弥生土器	甕or壺		推定4.8		
672	260	溝64	水路2区 溝9	弥生土器	甕		5.7		
673	631	溝64	付属建物2区 No15溝底	弥生土器	高杯	22.4			
674	651	溝64	付属建物2区 No15溝	弥生土器	高杯				
675	648	溝64	付属建物2区 No15溝底	弥生土器	高杯				
676	638	溝64	付属建物2区 No15溝	弥生土器	鉢	11.2			
677	645	溝64	付属建物2区 No15溝	弥生土器	甕or壺		推定5.8		
678	95	溝65	水路2区 溝3中層	弥生土器	壺	26.0			
679	286	溝65	水路2区 溝3	弥生土器	壺	11.6			内面に炭化物付着
680	93	溝65	水路2区 溝3中層	弥生土器	壺	16.0			
681	81	溝65	水路2区 溝3上層	弥生土器	無頸壺	16.8			
682	630	溝65	付属建物2区 No10溝	弥生土器	壺	推定19.0			
683	252	溝65	水路2区 溝3下層	弥生土器	甕				煤付着
684	88	溝65	水路2区 溝3中層	弥生土器	甕	16.5			
685	86	溝65	水路2区 溝3中層	弥生土器	甕				煤付着
686	287	溝65	水路2区 溝3	弥生土器	甕	17.2			煤付着
687	84	溝65	水路2区 溝3上層	弥生土器	壺		9.0		
688	83	溝65	水路2区 溝3上層	弥生土器	壺		10.0		
689	92	溝65	水路2区 溝3中層	弥生土器	甕		7.8		
690	98	溝65	水路2区 溝3中層	弥生土器	壺		8.3		
691	289	溝65	水路2区 溝3	弥生土器	壺	11.3			
692	628	溝65	付属建物2区 No10溝	弥生土器	甕	推定15.0			
693	629	溝65	付属建物2区 No10溝	弥生土器	甕	推定14.8			煤付着
694	627	溝65	付属建物2区 溝10	弥生土器	甕	推定20.0			煤付着
695	89	溝65	水路2区 溝3中層	弥生土器	甕		5.7		
696	79	溝65	水路2区 溝3上層	弥生土器	甕		6.3		煤付着
697	90	溝65	水路2区 溝3中層	弥生土器	甕		5.6		
698	256	溝66	水路2区 溝8	弥生土器	甕				煤付着
	257	溝66	水路2区 溝8	弥生土器	甕				
699	129	溝66	水路2区 溝8	弥生土器	壺	19.4			黒斑あり
700	133	溝66	水路2区 溝8	弥生土器	壺	10.8			
701	132	溝66	水路2区 溝8	弥生土器	壺	16.8			
702	131	溝66	水路2区 溝8	弥生土器	壺	13.0			
703	130	溝66	水路2区 溝8	弥生土器	壺	12.0			
704	138	溝66	水路2区 溝8	弥生土器	壺				
705	139	溝66	水路2区 溝8	弥生土器	壺				
706	99	溝66	水路2区 溝8	弥生土器	甕	14.4			
707	102	溝66	水路2区 溝8	弥生土器		21.7			
708	103	溝66	水路2区 溝8	弥生土器	甕	18.8			
709	110	溝66	水路2区 溝8	弥生土器	甕	16.8			煤付着
710	109	溝66	水路2区 溝8	弥生土器	甕	18.8			煤付着
711	101	溝66	水路2区 溝8	弥生土器	甕				煤付着
712	122	溝66	水路2区 溝8	弥生土器			6.0		煤付着
713	127	溝66	水路2区 溝8	弥生土器	甕		5.8～6		
714	143	溝66	水路2区 溝2	弥生土器	甕		9.5		
715	153	溝66	水路2区 溝8	弥生土器	無頸壺	18.8			
716	121	溝66	水路2区 溝8	弥生土器	甕	18.8			
717	123	溝66	水路2区 溝8	弥生土器	甕		7.7		
718	565	溝67	水路2区 溝5,5'	弥生土器	壺	推20.0			
719	572	溝67	水路2区 溝5,5'	弥生土器	壺				
720	573	溝67	水路2区 溝5,5'	弥生土器	壺				
721	566	溝67	水路2区 溝5,5'	弥生土器					
722	560	溝67	水路2区 溝5,5'	弥生土器	甕				
723	567	溝67	水路2区 溝5,5'	弥生土器	壺				
724	550	溝67	水路2区 溝5,5'	弥生土器	壺	推30.0?			

田益田中（国立岡山病院）遺跡

掲載番号	番号	新遺構名	旧遺構名	種別	器種	法量（cm）			特徴・備考
						口径	底径	器高	
725	561	溝67	水路２区 溝5,5'	弥生土器	壺	11.8			
726	548	溝67	水路２区 溝5,5'	弥生土器	壺	推10.6			
727	569	溝67	水路２区 溝5,5'	弥生土器	壺	13.4			
728	553	溝67	水路２区 溝5,5'	弥生土器	壺	推18.2			
729	552	溝67	水路２区 溝5,5'	弥生土器	壺	推17.2~20.4			
730	564	溝67	水路２区 溝5,5'	弥生土器	壺	推15.0			
731	574	溝67	水路２区 溝5	弥生土器	壺	推定16.0			
732	549	溝67	水路２区 溝5,5'	弥生土器	壺	推18.2			
733	576	溝67	水路２区 溝5	弥生土器		推定20.7			
734	544	溝67	水路２区 溝5,5'	弥生土器	壺	推26.4			
735	568	溝67	水路２区 溝5	弥生土器	甕				黒斑あり
736	546	溝67	水路２区 溝5,5'	弥生土器	甕	推28.2			
737	558	溝67	水路２区 溝5,5'	弥生土器	甕	18.6			
738	556	溝67	水路２区 溝5,5'	弥生土器	甕	22.4			
739	571	溝67	水路２区 溝5,5'	弥生土器	甕	19.2			
740	555	溝67	水路２区 溝5,5'	弥生土器	甕	推17.4			
741	559	溝67	水路２区 溝5,5'	弥生土器	甕	18.8			煤付着
742	551	溝67	水路２区 溝5,5'	弥生土器	甕				煤付着
743	557	溝67	水路２区 溝5,5'	弥生土器	甕	22.8			黒斑あり
744	254	溝67	水路２区 溝5,5'	弥生土器	壺	10.4	6.7	22.1	
745	575	溝67	水路２区 溝5,5'	弥生土器	甕	推定21.9?			
746	570	溝67	水路２区 溝5,5'	弥生土器	高杯	20.8			黒斑あり
747	562	溝67	水路２区 溝5	弥生土器	杯				
748	599	溝67	水路２区 溝5,5'	弥生土器	無頸壺		14.2		
749	506	溝67	水路２区 溝5,5'	弥生土器	高杯				
750	597	溝67	水路２区 溝5	弥生土器	高杯				
751	588	溝67	水路２区 溝5,5'	弥生土器	高杯				黒斑あり
752	563	溝67	水路２区 溝5,5'	弥生土器	甕	18.7			
753	547	溝67	水路２区 溝5,5'	弥生土器	甕	推24.0			
754	545	溝67	水路２区 溝5,5'	弥生土器	甕	推32.4			
755	577	溝67	水路２区 溝5	弥生土器	壺or甕		推定12.5		
756	584	溝67	水路２区 溝5	弥生土器	壺or甕		8.8		黒斑あり
757	591	溝67	水路２区 溝5	弥生土器	甕		推定6.8		
758	586	溝67	水路２区 溝5,5'	弥生土器	甕		5.8		
759	604	溝67	水路２区 溝5,5'	弥生土器	甕		6.0		
760	594	溝67	水路２区 溝5,5'	弥生土器	壺or甕		8.9		
761	595	溝67	水路２区 溝5,5'	弥生土器	壺or甕		推定3.1		黒斑あり
762	587	溝67	水路２区 溝5,5'	弥生土器	甕		5.5		黒斑あり
763	585	溝67	水路２区 溝5,5'	弥生土器	甕		6.8		
764	601	溝67	水路２区 溝5,5'	弥生土器			推定5.2		
765	600	溝67	水路２区 溝5,5'	弥生土器	壺		7.0		黒斑あり
766	602	溝67	水路２区 溝5	弥生土器	台付鉢？		推定4.8		
767	592	溝67	水路２区 溝5	弥生土器			3.6~3.8		
768	589	溝67	水路２区 溝5,5'	弥生土器	甕		5.7		
769	583	溝67	水路２区 溝5	弥生土器			4.9		
770	593	溝67	水路２区 溝5,5'	弥生土器	蓋？		5.4		
771	735	溝68	水路２区 溝6	弥生土器	壺	17.8			
772	734	溝68	水路２区 溝6	弥生土器	壺	推16.6			
773	724	溝68	水路２区 溝6	弥生土器	甕	16.2			
774	723	溝68	水路２区 溝6	弥生土器	甕	16.8			黒斑あり
775	726	溝68	水路２区 溝6	弥生土器	甕	16.4			黒斑あり
776	722	溝68	水路２区 溝6	弥生土器	甕	16.6			
777	725	溝68	水路２区 溝6	弥生土器	甕	推29.6			
778	721	溝68	水路２区 溝6	弥生土器	甕	推33.6			
779	729	溝68	水路２区 溝6	弥生土器	甕		4.9		
780	740	溝68	水路２区 溝6	弥生土器	甕		4.6		
781	736	溝68	水路２区 溝6	弥生土器	長頸壺				
782	732	溝68	水路２区 溝6	弥生土器	高杯				
783	733	溝68	水路２区 溝6	弥生土器	高杯		13.2		
784	737	溝68	水路２区 溝6	弥生土器	蓋	ﾂﾏﾐ8.8			
785	730	溝68	水路２区 溝6	弥生土器	ｼﾞｮｯｷ型鉢			推12.6	黒斑あり
786	307	溝69	水路２区 溝14	弥生土器	甕		6.0		
787	536	溝70	水路２区 溝7	弥生土器	甕				
788	540	溝70	水路２区 溝7	弥生土器	甕		推4.8		
789	456	土壙115	水路４区 No2落ちこみ	土師器					
790	457	土壙115	水路４区 No2落ちこみ	須恵器	杯身				
791	15	溝76	水路８区 溝1下層	土師器	壺？柑？	7.2			
792	16	溝76	水路８区 溝1下層	土師器	壺？柑？	13.0			
793	17	溝76	水路８区 溝1	土師器	壺？柑？	13.7			
794	29	溝76	水路８区 溝1下層	土師器	壺？甕？				
795	3	溝76	水路８区 溝1上層	土師器	直口?壺?	15.2			
796	2	溝76	水路８区 溝1下層	土師器	壺？	15.5			
797	24	溝76	水路８区 溝1	土師器	高杯				

掲載番号	番号	新遺構名	旧遺構名	種別	器種	法量（cm）			特徴・備考
						口径	底径	器高	
798	6	溝76	水路８区 溝1下層	土師器	鉢	12.9			
799	12	溝76	水路８区 溝1上層	土師器	手捏	8.2			
800	5	溝76	水路８区 溝1上層	土師器	柑？	10.3			
801	1	溝76	水路８区 溝1上層	土師器	直口?壺	9.8			
802	14	溝76	水路８区 溝1下層	土師器	手捏	5.5	1.9	3.6	
803	13	溝76	水路８区 溝1上層	土師器	手捏		4.2~4.5		
804	4	溝76	水路８区 溝1上層	土師器	柑？	9.1	2.0	10.6	黒斑あり
805	25	溝76	水路８区 溝1	土師器	塩製土器				
806	27	溝76	水路８区 溝1下層	土師器	甕				
807	19	溝76	水路８区 溝1下層	土師器	高杯	21.2			
808	9	溝76	水路８区 溝1	土師器	高杯	19.4			
809	23	溝76	水路８区 溝1下層	土師器	高杯				
810	10	溝76	水路８区 溝1上層	土師器	高杯		11.4		
811	22	溝76	水路８区 溝1	土師器	高杯				
812	8	溝76	水路８区 溝1下層	土師器	高杯		9.9		黒斑あり
813	20	溝76	水路８区 溝1下層	土師器	高杯				
814	7	溝76	水路８区 溝1上層	土師器	高杯	7.0	10.6		
815	21	溝76	水路８区 溝1下層	土師器	高杯		14.7		
816	481	土壙121	宿舎区 No4土壙	陶磁器	椀	推定7.3	3.2	4.9	
817	482	土壙121	宿舎区 土壙4	陶磁器	椀				
818	480	土壙121	宿舎区 No4土壙	伊万里	椀				
819	479	土壙121	宿舎区 土壙4	伊万里	皿	12.8		3.2	
820	477	土壙121	宿舎区 土壙4	備前	徳利	7.2			
821	478	土壙121	宿舎区 No4土壙	唐津	椀				
822	484	土壙123	宿舎区 No2土壙	陶器	碗				
823	293	土壙128	水路２区 江戸期土壙1	陶磁器	染付皿？				
824	294	土壙128	水路２区 江戸期土壙1	備前焼	土師器	12.6	6.9	2.4	
825	297	土壙128	水路２区 江戸期土壙1	備前焼	平鉢	12.9	14	6.1	
826	296	土壙128	水路２区 江戸期土壙1	備前焼	摺り鉢				
827	295	土壙128	水路２区 江戸期土壙1	備前焼	小壺		2.1		
828	653	井戸1	付属建物２区 井戸下層	磁器	染付碗				
829	656	井戸1	付属建物２区 井戸下層	磁器	小碗	7.8		3.7	
830	654	井戸1	付属建物２区 井戸下層	磁器	染付皿				
831	655	井戸1	付属建物２区 井戸下層	瓦質	丸瓦				
832	464	溝83	水路５区 溝1	陶磁器	小碗				
833	463	溝83	水路５区 溝1	陶磁器	小碗		4.4		
834	461	溝83	水路５区 溝1	備前焼	摺鉢				
835	462	溝83	水路５区 溝1	備前焼	摺鉢	14.0			
836	668	溝97	付属建物２区 近世･近代溝	磁器	酒杯（猪口）				
837	670	溝97	付属建物２区 近世･近代溝	磁器	鉢	6.9	3.3	4.3	
838	675	溝97	付属建物２区 近世･近代溝	磁器	蓮花器	8.5			
839	658	溝97	付属建物２区 近世･近代溝	磁器	小鉢	推8.2			
840	659	溝97	付属建物２区 近世･近代溝	磁器	瓶（台付）	推4.7			
841	660	溝97	付属建物２区 近世･近代溝	磁器	染付碗	8.2		3.7	
842	672	溝97	付属建物２区 近世･近代溝		染付碗	10.6			
843	663	溝97	付属建物２区 近世･近代溝		染付皿				
844	671	溝97	付属建物２区 カクラン		染付碗				
845	662	溝97	付属建物２区 近世･近代溝	磁器	碗	推12.0			
846	661	溝97	付属建物２区 近世･近代溝	磁器	染付鉢・碗	10.2			
847	679	溝97	付属建物２区 近世･近代溝底	陶器	碗　天目	推10.8		3.8	
848	667	溝97	付属建物２区 近世･近代溝	磁器	鉢		7.5		
849	666	溝97	付属建物２区 近世･近代溝	磁器	鉢		推(外)8.8	(内)8.4	
850	674	溝97	付属建物２区 表土	磁器	蓋	5.8			
851	665	溝97	付属建物２区 近世･近代溝	磁器	絵付皿	12.2			
852	682	溝97	付属建物２区 近世･近代溝底	陶器	小皿	6.9	3.2	1.6	
853	664	溝97	付属建物２区 近世･近代溝	磁器	染付皿	9.6		2.0	
854	673	溝97	付属建物２区 近世･近代溝	磁器	染付皿	10.6		1.7	
855	669	溝97	付属建物２区 近世･近代溝	磁器	皿	推9.2	4.9		
856	676	溝97	付属建物２区 近世･近代溝	備前焼	灯明皿	9.2	3.3	1.3	
857	681	溝97	付属建物２区 近世･近代溝底	備前焼	灯明受皿	9.2	4.2	1.4	
858	677	溝97	付属建物２区 近世･近代溝	磁器	灯明受皿		5.5		立敲形
859	657	溝97	付属建物２区 近世･近代溝	磁器	脚付碗？	推8.3		5.6	
860	680	溝97	付属建物２区 近世･近代溝底	肥前	大鉢	29.0			
861	J504	溝33	水路7・8区 溝2下層	縄文土器	浅鉢				
862	J505	溝33	水路7・8区 溝2下層	縄文土器	深鉢				
863	J507	溝33	水路7・8区 溝2下層	縄文土器	深鉢		5.6		器表は荒れている
864	433	包含層	包含層	弥生土器	壺				
865	434	包含層	包含層	弥生土器	壺				
866	169	包含層	包含層	弥生土器	甕				煤付着
867	230	包含層	包含層	弥生土器	甕	16.0			煤付着
868	237	包含層	包含層	弥生土器	甕	18.8			
869	250	包含層	包含層(海抜770cmまで)	弥生土器	無頸壺		9.6		
870	241	包含層	包含層(海抜770cm以上)	弥生土器	無頸壺		12.4		

掲載番号	番号	新遺構名	旧遺構名	種別	器種	法量（cm）			特徴・備考
						口径	底径	器高	
871	240	包含層	包含層(海抜770cm以上)	弥生土器	無頸壺		11.3		
872	238	包含層	包含層(海抜770cm以上)	弥生土器	蓋	6.4			
873	239	包含層	包含層(海抜770cm以上)	弥生土器	蓋	7.0			煤付着
874	231	包含層	包含層	弥生土器	甕	14.6			
875	233	包含層	包含層	弥生土器	甕	19.7			黒斑あり
876	234	包含層	包含層(海抜770cm以上)	弥生土器	甕	25.4			煤付着
877	171	包含層	包含層	弥生土器	壺				
878	236	包含層	包含層	弥生土器	壺	18.3			
879	221	包含層	暗黄褐色土	弥生土器	台付鉢	9.5	4.1	6.3	
880	441	包含層	側溝	須恵器	杯身	12.5			
881	452	包含層	包含層	須恵器	杯蓋宝珠	16.2		3.5	
882	389	包含層	包含層	須恵器	甕	18.0			
883	263	包含層	包含層	須恵器	皿		14.8		
884	465	包含層	No6溝(包含層)	須恵器	大甕				
885	227	包含層	包含層	須恵質土器	杯身	11.8	9.9～10	4.4	
886	454	包含層	包含層　北壁	土師質土器	椀		3.6		
887	466	包含層	包含層	近世陶磁器	高台		4.6		
888	467	包含層	包含層	近世陶磁器	高台		4.8		
889	226	包含層	西側溝壁面清掃中	土師器	高台付椀		4.8		
890	453	包含層	包含層　北壁	瓦質土器	羽釜	23.0			
891	459	包含層	北側溝	備前焼	摺鉢	26.2			
892	251	包含層	西側溝	備前焼	摺鉢	34.3	16.0	11.5	
893	437	包含層	包含層　中近世以降	伊万里	杯	7.1			
894	284	包含層	西側溝(上位層)	陶磁器	伊万里碗		3.8		
895	277	包含層	西側溝(上位層)	陶磁器	染付碗				網目文
896	283	包含層	西側溝(上位層)	陶磁器	碗				
897	282	包含層	西側溝(上位層)	陶磁器	碗		7.5		
898	281	包含層	西側溝(上位層)	陶磁器	青磁碗？				
899	280	包含層	西側溝(上位層)	陶磁器	唐津鉢	19.7			
900	279	包含層	西側溝(上位層)	陶磁器	染付鉢				
901	285	包含層	西側溝(上位層)	陶磁器	染付鉢				
902	276	包含層	西側溝(上位層)	陶磁器	青白磁碗	11.6			
903	460	包含層	北側溝	備前焼	灯明皿				
904	225	包含層	西側溝壁面清掃中	備前焼	灯明皿	8.9		1.5	
905	274	包含層	西側溝(上位層)	備前焼	灯明皿	10.3			
906	275	包含層	西側溝(上位層)	備前焼	灯明皿	11.8			

2．石器・石製品観察表

掲載番号	番号	出土地区	遺構名	時代・時期	器　種	形式	計測最大値（mm）			重量	石　材	残存
							長さ	幅・径	厚さ	(g)		
S1	A69	水路６区	河道1	旧石器	ナイフ型石器		53.5	16.5	7.0	6.1	ｻﾇｶｲﾄ	完
S2	A73	本館１区	河道1	縄文後期	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ		80.0	29.0	6.0	13.9	ｻﾇｶｲﾄ	完
S3	A75	本館１区	河道1	縄文後期	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ？		74.0	45.5	9.0	23.0	ｻﾇｶｲﾄ	完
S4	A72	本館１区	河道1	縄文後期	石匙		51.0	31.5	8.0	8.5	ｻﾇｶｲﾄ	完
S5	A74	本館１区	河道1	縄文後期	石匙		66.5	34.5	7.5	14.8	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S6	A82	本館１区	河道2	縄文後期	石鏃	Ⅱ	18.5	14.0	2.0	0.4	ｻﾇｶｲﾄ	完
S7	A76	本館１区	河道2	縄文後期	石鏃？		20.5	16.0	5.0	1.3	ｻﾇｶｲﾄ	完
S8	A81	本館１区	河道2	縄文後期	石鏃	Ⅱ	20.5	19.0	3.3	1.2	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S9	A70	宿舎区	河道2	縄文後期	打製石鍬		139.0	53.0	15.5	139.4	流紋岩	完
S10	B283	本館５区	河道2	縄文後期	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ		91.5	33.5	11.5	29.5	ｻﾇｶｲﾄ	完
S11	A140	本館８区	河道5	縄文後期	石匙		76.5	32.5	11.0	27.4	ｻﾇｶｲﾄ	完
S12	B219	浄化槽区	河道10	縄文晩期	石鏃	ⅡorⅤ	15.0	11.5	2.5	0.3	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S13	B216	浄化槽区	河道10	縄文晩期	石鏃	ⅡorⅤ	18.0	16.0	2.8	0.5	ｻﾇｶｲﾄ	完
S14	A27	浄化槽区	河道10	縄文晩期	石錐		25.5	27.0	5.3	2.5	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S15	B215	浄化槽区	河道10	縄文晩期	石包丁（打製）		53.5	48.0	8.5	17.2	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S16	A21	浄化槽区	河道10	縄文晩期	石包丁（打製）		104.5	49.5	12.0	61.8	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S17	B218	浄化槽区	河道10	縄文晩期	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ		48.0	44.5	14.5	34.9	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S18	A28	浄化槽区	河道10	縄文晩期	石包丁？		86.0	50.0	10.0	53.1	ｻﾇｶｲﾄ	完
S19	A24	浄化槽区	河道10	縄文晩期	石包丁（磨製）		72.0	43.5	8.8	38.6	流紋岩	欠
S20	A22	浄化槽区	河道10	縄文晩期	石包丁（磨製）		65.5	34.0	6.5	21.0	頁岩	欠
S21	A58	浄化槽区	河道10	縄文晩期	石包丁（磨製）		72.0	53.0	9.8	31.7	溶結凝灰岩	欠
S22	A23	浄化槽区	河道10	縄文晩期	石包丁（磨製）		57.5	55.0	7.0	20.4	流紋岩	欠
S23	A110	水路２－１区	河道10	縄文晩期	太型蛤刃石斧		101.5	69.5	45.0	233.1	流紋岩	欠
S24	A25	浄化槽区	河道10	縄文晩期	太型蛤刃石斧		84.0	65.5	48.0	229.2	流紋岩	欠
S25	A3	水路3区	河道10	縄文晩期	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ		75.0	44.5	11.5	39.1	ｻﾇｶｲﾄ	完
S26	A431	付属建物１区	河道10	縄文晩期	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ		56.0	53.0	10.5	29.1	ｻﾇｶｲﾄ	完
S27	A400	付属建物２区	河道10	縄文晩期	石匙		69.5	45.0	6.8	20.1	ｻﾇｶｲﾄ	完
S28	A401	付属建物２区	河道10	縄文晩期	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ		85.5	29.5	9.0	16.7	ｻﾇｶｲﾄ	完
S29	A186	本館５区	土壙37	弥生前期？	石鏃	Ⅱ	25.5	18.0	3.3	1.1	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S30	A117	本館２区	土壙38	弥生前期	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ		55.0	53.0	7.0	19.4	ｻﾇｶｲﾄ	完
S31	A116	本館２区	土壙38	弥生前期	石錐		55.5	35.0	5.3	9.4	ｻﾇｶｲﾄ	完
S32	A120	本館２区	土壙40	弥生前期	石錐		23.0	8.0	3.5	0.6	ｻﾇｶｲﾄ	完
S33	A178	本館８区	土壙48	弥生前期	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ		75.5	30.5	5.3	14.8	ｻﾇｶｲﾄ	完
S34	A160	本館８区	土壙54	弥生前期？	石包丁（磨製）		76.5	41.5	7.3	28.3	頁岩	欠
S35	A159	本館８区	土壙56	弥生前期	石鏃	Ⅴ	23.0	18.0	3.7	0.8	ｻﾇｶｲﾄ	完
S36	A136	本館８区	土壙67	弥生前期？	石錐		29.0	11.0	5.0	1.4	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S37	A138	本館８区	土壙68	弥生前期	石鏃	Ⅱ	16.0	12.0	1.8	0.3	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S38	A137	本館８区	土壙68	弥生前期	石錐		34.0	16.0	5.5	1.8	ｻﾇｶｲﾄ	完
S39	B268	水路２－１区	土壙79	弥生中期	石匙		34.5	28.0	5.5	5.8	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S40	A105	本館１区	土壙79	弥生中期	石斧？		73.0	51.5	26.0	124.4	ｻﾇｶｲﾄ質	欠
S41	A114	水路２－１区	土壙81	弥生中期	石鏃	Ⅱ	24.0	15.5	2.7	1.0	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S42	A115	水路２－１区	土壙97	弥生後期	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ		69.5	46.5	9.5	28.7	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S43	B267	水路２－１区	土壙101	弥生中～後期	凹石		86.5	76.0	52.5	546.7	流紋岩	欠
S44	A62	進入路２区	溝9	弥生前期	石鏃	Ⅱ	17.0	12.0	2.0	0.3	ｻﾇｶｲﾄ	完
S45	A64	進入路２区	溝9	弥生前期	石鏃	Ⅱ	16.0	14.5	2.0	0.4	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S46	A65	進入路２区	溝9	弥生前期	石鏃	Ⅱ	23.0	17.0	3.5	1.2	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S47	A66	進入路２区	溝9	弥生前期	石鏃	Ⅴ	25.0	16.0	6.5	1.2	ｻﾇｶｲﾄ	完
S48	A63	進入路２区	溝9	弥生前期	石鏃	Ⅱ	21.0	15.5	3.0	0.8	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S49	A61	進入路１区	溝9	弥生前期	石鏃	Ⅰ	20.0	14.5	2.8	0.8	ｻﾇｶｲﾄ	完
S50	A71	駐車場区	溝9	弥生前期	石包丁（打製）		104.5	50.5	10.5	69.9	ｻﾇｶｲﾄ	完
S51	A60	進入路１区	溝9	弥生前期	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ		70.0	52.5	9.0	35.8	ｻﾇｶｲﾄ	完
S52	B274	進入路２区	溝9	弥生前期	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ		64.0	41.0	11.5	32.5	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S53	A59	進入路１区	溝9	弥生前期	石包丁（磨製）		53.5	48.5	8.6	24.1	流紋岩	欠
S54	B278	進入路２区	溝10	弥生中～後期	石鏃	Ⅴ	18.5	15.0	3.4	0.7	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S55	B276	進入路２区	溝10	弥生中～後期	石鏃	ⅡorⅤ	17.0	12.0	2.8	0.5	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S56	B277	進入路２区	溝10	弥生中～後期	石錐		23.0	17.5	4.2	1.0	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S57	A67	水路１区	溝10	弥生中～後期	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ		86.5	73.0	12.0	69.6	ｻﾇｶｲﾄ	完
S58	B318	本館５区	溝9	弥生前期	石鏃	Ⅰ	19.0	17.5	2.5	0.8	ｻﾇｶｲﾄ	完
S59	A183	本館５区	溝9	弥生前期	石鏃	Ⅰ	27.5	18.0	3.0	1.5	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S60	B297	本館８区	溝9	弥生前期	石鏃	ⅠorⅡ	15.5	12.5	2.6	0.6	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S61	B319	本館８区	溝9	弥生前期	石鏃	Ⅱ	18.0	16.5	3.5	0.9	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S62	A184	本館５区	溝9	弥生前期	石鏃	Ⅱ	15.0	11.0	2.0	0.3	ｻﾇｶｲﾄ	完
S63	B299	本館８区	溝9	弥生前期	石鏃	Ⅱ	13.5	14.5	3.0	0.4	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S64	A147	本館８区	溝9	弥生前期	石鏃	Ⅱ	16.5	15.0	3.5	0.6	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S65	A177	本館８区	溝9	弥生前期	石鏃	Ⅱ	23.0	18.0	4.0	1.1	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S66	A174	本館８区	溝9	弥生前期	石鏃	Ⅱ	22.0	13.5	3.2	0.7	ｻﾇｶｲﾄ	完
S67	B314	本館８区	溝9	弥生前期	石鏃	Ⅱ	17.5	14.0	2.8	0.6	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S68	B317	本館５区	溝9	弥生前期	石鏃	Ⅱ	23.5	16.5	3.5	0.9	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S69	B300	本館８区	溝9	弥生前期	石鏃	ⅡorⅤ	16.0	10.0	1.8	0.1	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S70	B320	本館５区	溝9	弥生前期	石鏃	Ⅴ	16.0	13.5	3.0	0.5	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S71	A158	本館８区	溝9	弥生前期	石鏃	Ⅴ	25.5	18.0	2.8	1.0	ｻﾇｶｲﾄ	欠

掲載番号	番号	出土地区	遺構名	時代・時期	器　種	形式	計測最大値（mm）			重量	石　材	残存
							長さ	幅・径	厚さ	(g)		
S72	A155	本館８区	溝9	弥生前期	石鏃	Ⅳ	36.0	12.5	3.7	1.7	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S73	A156	本館８区	溝9	弥生前期	石錐		25.0	17.0	3.8	1.7	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S74	B315	本館８区	溝9	弥生前期	石錐		21.5	13.0	3.5	0.6	ｻﾇｶｲﾄ	完
S75	A172	本館８区	溝9	弥生前期	石錐		32.0	12.0	4.2	1.2	ｻﾇｶｲﾄ	完
S76	A182	本館８区	溝9	弥生前期	石錐		37.0	14.0	5.0	1.9	ｻﾇｶｲﾄ	完
S77	A176	本館８区	溝9	弥生前期	石錐		37.0	12.5	5.0	2.0	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S78	A173	本館８区	溝9	弥生前期	石錐		35.5	11.5	3.0	1.1	ｻﾇｶｲﾄ	完
S79	A146	本館８区	溝9	弥生前期	石錐		337.0	8.0	6.0	1.3	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S80	B298	本館８区	溝9	弥生前期	石錐		53.0	15.5	8.0	7.1	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S81	B302	本館８区	溝9	弥生前期	石錐		42.5	2.5	9.7	9.1	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S82	A188	本館５区	溝9	弥生前期	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ？		104.5	51.0	13.0	79.2	ｻﾇｶｲﾄ	完
S83	A142	本館８区	溝9	弥生前期	石匙		10.0	37.5	9.0	17.3	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S84	A154	本館８区	溝9	弥生前期	石匙		52.0	33.0	6.0	9.3	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S85	B310	本館８区	溝9	弥生前期	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ		87.0	47.0	10.0	35.8	ｻﾇｶｲﾄ	完
S86	B309	本館８区	溝9	弥生前期	石包丁（打製）？		96.5	47.5	8.8	34.2	ｻﾇｶｲﾄ	完
S87	B305	本館８区	溝9	弥生前期	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ		44.0	41.0	5.5	9.7	ｻﾇｶｲﾄ	完
S88	A148	本館８区	溝9	弥生前期	石包丁（磨製）		46.0	37.5	6.0	10.2	頁岩	欠
S89	A189	本館８区	溝9	弥生前期	石包丁（磨製）		54.0	60.5	6.5	34.0	流紋岩	欠
S90	A145	本館８区	溝9	弥生前期	石包丁（磨製）		106.5	43.5	8.0	35.9	緑色片岩	欠
S91	A179	本館５区	溝9	弥生前期	小型方柱状片刃石斧		58.5	9.5	12.6	14.6	泥質片岩	完
S92	A157	本館８区	溝9	弥生前期	方柱状片刃石斧		108.5	14.0	16.0	41.2	頁岩	完
S93	A175	本館８区	溝9	弥生前期	扁平片刃石斧		70.5	14.5	9.5	11.2	流紋岩	欠
S94	A171	本館８区	溝9	弥生前期	扁平石斧		38.0	31.0	16.0	26.3	流紋岩	欠
S95	A143	本館８区	溝9	弥生前期	紡錘車		46.5		4.8	6.9	流紋岩	欠
S96	A149	本館８区	溝9	弥生前期	紡錘車		45.5		6.5	19.4	流紋岩	完
S97	B303	本館８区	溝9	弥生前期	敲石		51.0	63.0	48.0	222.9	流紋岩(黒色)	完
S98	A144	本館８区	溝9	弥生前期	敲石		75.5	53.5	40.0	238.0	ﾎﾙﾝﾍﾙｽ	完
S99	A187	本館５区	溝9	弥生前期	凹石		86.0	62.5	28.5	232.6	流紋岩	完
S100	A119	本館２区	溝9	弥生前期	砥石		79.0	48.0	46.0	259.6	砂岩	欠
S101	A167	本館８区	溝10	弥生中～後期	石鏃	Ⅰ	22.0	17.5	3.2	1.2	ｻﾇｶｲﾄ	完
S102	A150	本館８区	溝10	弥生中～後期	石鏃	Ⅰ	24.0	17.5	3.5	1.2	ｻﾇｶｲﾄ	完
S103	A153	本館８区	溝10	弥生中～後期	石鏃	Ⅰ	16.5	15.5	2.8	0.7	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S104	B286	本館６区	溝10	弥生中～後期	石鏃	ⅠorⅡ	12.0	10.5	2.6	0.3	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S105	B307	本館８区	溝10	弥生中～後期	石鏃	Ⅱ	11.0	14.0	3.0	0.4	ｻﾇｶｲﾄ	完
S106	B293	本館８区	溝10	弥生中～後期	石鏃	ⅠorⅡ	17.0	12.0	3.1	0.6	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S107	A169	本館８区	溝10	弥生中～後期	石鏃	ⅠorⅡ	16.0	13.5	2.0	0.4	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S108	B289	本館８区	溝10	弥生中～後期	石鏃	Ⅱ	18.5	15.0	3.9	0.7	ｻﾇｶｲﾄ	完
S109	B295	本館８区	溝10	弥生中～後期	石鏃	Ⅱ	25.0	16.5	4.8	1.7	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S110	B308	本館８区	溝10	弥生中～後期	石鏃	Ⅰ	33.5	21.5	5.0	3.3	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S111	B285	本館６区	溝10	弥生中～後期	石鏃	Ⅱ	25.5	19.5	5.0	1.7	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S112	B290	本館８区	溝10	弥生中～後期	石鏃	Ⅱ	21.0	15.5	4.0	1.0	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S113	A139	本館８区	溝10	弥生中～後期	石鏃	Ⅱ	21.0	14.5	3.3	0.9	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S114	A151	本館８区	溝10	弥生中～後期	石鏃	Ⅱ	23.0	20.5	4.5	1.4	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S115	C333	本館８区	溝10	弥生中～後期	石鏃		29.5	19.0	4.2	1.9	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S116	A170	本館８区	溝10	弥生中～後期	石鏃	Ⅱ	19.0	14.5	3.0	0.6	ｻﾇｶｲﾄ	完
S117	C335	本館８区	溝10	弥生中～後期	石鏃		21.5	16.0	3.4	0.9	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S118	A190	本館８区	溝10	弥生中～後期	石鏃	Ⅱ	22.5	14.0	3.5	0.8	ｻﾇｶｲﾄ	完
S119	A191	本館８区	溝10	弥生中～後期	石鏃	Ⅱ	20.0	16.0	3.2	0.7	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S120	A152	本館８区	溝10	弥生中～後期	石鏃	Ⅱ	26.0	17.0	3.5	0.9	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S121	B313	本館８区	溝10	弥生中～後期	石錐		28.0	6.5	4.5	0.7	ｻﾇｶｲﾄ	完
S122	B291	本館８区	溝10	弥生中～後期	R.F(細調整剥片)		29.0	7.5	3.0	0.7	ｻﾇｶｲﾄ	完
S123	A168	本館８区	溝10	弥生中～後期	石錐		18.0	10.5	3.0	0.6	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S124	A162	本館８区	溝10	弥生中～後期	石錐		19.5	17.0	2.8	0.7	ｻﾇｶｲﾄ	完
S125	A180	本館８区	溝10	弥生中～後期	石匙		50.0	42.5	6.5	13.4	ｻﾇｶｲﾄ	完
S126	B312	本館８区	溝10	弥生中～後期	石匙		48.0	33.5	8.5	11.2	ｻﾇｶｲﾄ	完
S127	B292	本館８区	溝10	弥生中～後期	石匙		40.5	41.0	9.0	16.3	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S128	B316	本館８区	溝10	弥生中～後期	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ		68.0	54.5	15.0	47.6	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S129	B296	本館８区	溝10	弥生中～後期	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ？　楔？		46.5	26.0	9.0	11.8	ｻﾇｶｲﾄ	完
S130	A166	本館８区	溝10	弥生中～後期	楔		33.0	24.5	8.4	9.1	ｻﾇｶｲﾄ	完
S131	A161	本館８区	溝10	弥生中～後期	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ？		57.0	71.0	15.5	62.3	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S132	A164	本館８区	溝10	弥生中～後期	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ		126.5	71.5	7.0	73.9	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S133	A163	本館８区	溝10	弥生中～後期	大型石包丁(打製)		157.0	89.5	19.5	276.3	ｻﾇｶｲﾄ	完
S134	A165	本館８区	溝10	弥生中～後期	石槌		72.0	54.5	38.5	204.4	流紋岩	欠
S135	C391	水路５区	溝18	弥生	石鏃		14.5	13.5	3.4	0.6	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S136	A68	水路５区	溝24	弥生前～中期	石鏃	Ⅰ	20.5	15.5	4.1	0.9	ｻﾇｶｲﾄ	完
S137	C390	水路５区	溝24付近	弥生前～中期	石鏃		21.5	16.5	3.2	1.1	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S138	A185	本館５区	溝38	弥生前期？	石鏃	Ⅱ	27.5	18.0	4.0	1.3	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S139	B282	本館５区	溝39	弥生前期？	石鏃	Ⅱ	24.0	17.0	4.0	1.2	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S140	D380	本館８区	溝43	弥生	敲石		52.0	67.0	39.5	193.3	流紋岩	完
S141	D379	本館８区	溝43	弥生	敲石		80.5	57.5	28.0	180.5	流紋岩	欠
S142	A133	本館８区	溝53	弥生前～中期	石鏃	Ⅰ	30.0	15.5	3.5	1.7	ｻﾇｶｲﾄ	完
S143	A134	本館８区	溝53	弥生前～中期	石鏃	Ⅲ	21.0	17.0	3.5	1.1	ｻﾇｶｲﾄ	完
S144	B272	本館２区	溝53	弥生前～中期	石鏃	ⅠorⅡ	28.5	15.0	4.1	1.5	ｻﾇｶｲﾄ	欠

掲載番号	番号	出土地区	遺構名	時代・時期	器　種	形式	計測最大値（mm）			重量	石　材	残存
							長さ	幅・径	厚さ	(g)		
S145	A131	本館８区	溝53	弥生前～中期	石鏃	Ⅱ	12.5	11.5	2.0	0.2	ｻﾇｶｲﾄ	完
S146	A129	本館８区	溝53	弥生前～中期	石鏃	Ⅱ	20.5	16.5	3.5	0.9	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S147	B284	本館２区	溝53	弥生前～中期	石鏃	Ⅱ	25.0	18.5	4.0	1.1	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S148	C322	本館２区	溝53	弥生前～中期	石鏃	ⅡorⅤ	29.5	17.0	5.0	1.2	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S149	A130	本館８区	溝53	弥生前～中期	石鏃	Ⅱ	24.5	17.0	3.0	1.1	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S150	C324	本館２区	溝53	弥生前～中期	石鏃	Ⅱ	30.5	17.5	2.8	1.2	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S151	A421	本館６－２区	溝53	弥生前～中期	石鏃		24.0	14.0	3.0	0.7	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S152	C321	本館２区	溝53	弥生前～中期	石鏃	Ⅴ	19.5	13.0	3.3	0.7	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S153	C325	本館２区	溝53	弥生前～中期	石錐		21.5	11.0	2.3	0.6	ｻﾇｶｲﾄ	完
S154	A128	本館８区	溝53	弥生前～中期	石錐		30.5	13.5	4.0	1.3	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S155	A124	本館２区	溝53	弥生前～中期	石錐		57.0	21.0	8.3	10.7	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S156	A135	本館８区	溝53	弥生前～中期	石鎌？		63.5	28.5	10.0	19.6	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S157	A127	本館８区	溝53	弥生前～中期	石匙		56.5	29.5	5.4	7.2	ｻﾇｶｲﾄ	完
S158	B270	本館２区	溝53	弥生前～中期	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ？		50.0	21.0	8.0	7.8	ｻﾇｶｲﾄ	完
S159	A122	本館２区	溝53	弥生前～中期	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ		69.0	71.0	8.5	42.9	ｻﾇｶｲﾄ	完
S160	A121	本館２区	溝53	弥生前～中期	石包丁（磨製）		51.0	31.0	6.5	13.0	頁岩	欠
S161	A123	本館２区	溝53	弥生前～中期	石包丁（磨製）		57.0	52.5	6.5	30.6	流紋岩	欠
S162	A132	本館８区	溝53	弥生前～中期	石包丁（磨製）		78.5	43.0	6.5	33.9	流紋岩	欠
S163	A126	本館８区	溝53	弥生前～中期	石包丁（磨製）		100.0	54.5	8.5	58.8	頁岩	欠
S164	A125	本館８区	溝53	弥生前～中期	石包丁（磨製）		100.0	47.0	8.5	51.4	流紋岩	完
S165	D377	本館２区	溝53	弥生前～中期	敲石		53.0	59.5	37.5	174.1	石英脈岩	欠
S166	B228	本館３区	溝53	弥生前～中期	石鏃	Ⅰ	24.0	19.5	4.2	1.4	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S167	B230	本館３区	溝53	弥生前～中期	石鏃	Ⅱ	14.0	11.5	1.8	0.3	ｻﾇｶｲﾄ	完
S168	A35	本館３区	溝53	弥生前～中期	石鏃	Ⅱ	21.0	13.0	2.5	0.6	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S169	A41	本館３区	溝53	弥生前～中期	石鏃	Ⅱ	19.0	24.5	2.0	0.4	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S170	B229	本館３区	溝53	弥生前～中期	石鏃	Ⅱ	22.5	16.0	3.3	0.7	ｻﾇｶｲﾄ	完
S171	B225	本館３区	溝53	弥生前～中期	石鏃	Ⅱ	21.5	15.5	3.5	1.0	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S172	A45	本館３区	溝53	弥生前～中期	石鏃	Ⅱ	25.5	19.0	3.2	0.9	ｻﾇｶｲﾄ	完
S173	A42	本館３区	溝53	弥生前～中期	石鏃	Ⅰ	25.0	17.0	4.3	1.2	ｻﾇｶｲﾄ	完
S174	A53	本館３区	溝53	弥生前～中期	石鏃	Ⅱ	26.0	19.5	2.5	1.1	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S175	A52	本館３区	溝53	弥生前～中期	石鏃	Ⅱ	33.0	19.0	4.5	1.8	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S176	A51	本館３区	溝53	弥生前～中期	石鏃	Ⅱ	19.5	17.0	3.8	1.6	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S177	B232	本館３区	溝53	弥生前～中期	鏃？　錐？	Ⅳ	29.0	17.0	3.3	3.3	ｻﾇｶｲﾄ	完
S178	A34	本館３区	溝53	弥生前～中期	石包丁（打製）		165.5	54.0	14.0	122.6	ｻﾇｶｲﾄ	完
S179	A48	本館３区	溝53	弥生前～中期	石包丁（磨製）		62.5	49.0	7.0	27.4	頁岩	欠
S180	A32	本館３区	溝53	弥生前～中期	石包丁（磨製）		68.0	52.5	8.0	35.9	流紋岩	欠
S181	A36	本館３区	溝53	弥生前～中期	石包丁（磨製）		61.0	48.0	10.0	19.3	頁岩	欠
S182	A49	本館３区	溝53	弥生前～中期	石包丁（磨製）		100.0	39.5	9.0	49.6	流紋岩	完
S183	A44	本館３区	溝53	弥生前～中期	石包丁（磨製）		39.0	28.5	7.3	13.0	流紋岩	欠
S184	A31	本館３区	溝53	弥生前～中期	石包丁（磨製）		72.5	42.5	6.0	23.3	流紋岩	欠
S185	A37	本館３区	溝53	弥生前～中期	石包丁（磨製）		47.0	42.0	7.5	21.7	粘板岩	欠
S186	A39	本館３区	溝53	弥生前～中期	太型蛤刃石斧		78.0	60.0	42.5	278.6	流紋岩	欠
S187	A38	本館３区	溝53	弥生前～中期	扁平片刃石斧		47.0	36.5	12.5	41.1	流紋岩	欠
S188	A50	本館３区	溝53	弥生前～中期	ノミ状石器		26.0	29.0	6.0	8.0	頁岩	完
S189	B224	本館３区	溝53	弥生前～中期	石錐		88.5	75.0	29.5	221.1	流紋岩	欠
S190	A47	本館３区	溝53	弥生前～中期	敲石		93.5	51.0	33.0	318.3	流紋岩	完
S191	C326	本館７区	溝60	弥生前期	砥石		55.5	38.5	20.0	39.8		欠
S192	B269	水路２－１区	溝63	弥生中期	石鏃	Ⅲ	23.0	20.5	3.5	1.7	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S193	B256	水路２－１区	溝64	弥生中～後期	石鏃	Ⅱ	18.0	13.0	2.5	0.5	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S194	B252	水路２－１区	溝64	弥生中～後期	石鏃	Ⅱ	18.5	14.0	2.8	0.6	ｻﾇｶｲﾄ	完
S195	C344	水路２－１区	溝64	弥生中～後期	石鏃		25.0	16.0	3.5	1.0	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S196	C343	水路２－１区	溝64	弥生中～後期	石鏃		28.5	19.5	4.3	1.9	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S197	A104	水路２－１区	溝64	弥生中～後期	石鏃	Ⅰ	26.0	23.0	3.8	1.9	ｻﾇｶｲﾄ	完
S198	B251	水路２－１区	溝64	弥生中～後期	石鏃	ⅡorⅤ	26.5	15.5	3.0	0.9	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S199	C348	水路２－１区	溝64	弥生中～後期	石鏃		28.5	19.0	3.3	1.9	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S200	C345	水路２－１区	溝64	弥生中～後期	石錐		37.0	14.0	7.0	3.2	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S201	B255	水路２－１区	溝64	弥生中～後期	石錐		39.0	13.0	5.4	2.9	ｻﾇｶｲﾄ	完
S202	C347	水路２－１区	溝64	弥生中～後期	石錐		29.5	19.5	4.0	2.6	ｻﾇｶｲﾄ	完
S203	B257	水路２－１区	溝64	弥生中～後期	石錐		49.0	21.5	6.2	6.4	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S204	B250	水路２－１区	溝64	弥生中～後期	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ？　楔？		42.5	34.0	8.5	14.4	ｻﾇｶｲﾄ	完
S205	B253	水路２－１区	溝64	弥生中～後期	石包丁（打製）		53.5	49.5	8.5	23.6	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S206	B254	水路２－１区	溝64	弥生中～後期	石包丁（打製）		54.0	50.5	10.0	26.9	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S207	B437	付属建物２区	溝64	弥生中～後期	石鏃		14.0	13.5	3.5	0.6	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S208	B434	付属建物２区	溝64	弥生中～後期	石鏃		16.5	15.5	3.0	0.7	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S209	B457	付属建物２区	溝64	弥生中～後期	石鏃		15.5	9.5	3.0	0.4	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S210	A407	付属建物２区	溝64	弥生中～後期	石鏃		17.5	12.5	3.0	0.6	ｻﾇｶｲﾄ	完
S211	B459	付属建物２区	溝64	弥生中～後期	石鏃		19.0	14.5	3.5	0.9	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S212	B449	付属建物２区	溝64	弥生中～後期	石錐		19.5	15.0	2.5	0.8	ｻﾇｶｲﾄ	完
S213	A432	付属建物２区	溝64	弥生中～後期	石鏃		24.0	14.5	2.8	1.0	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S214	A414	付属建物２区	溝64	弥生中～後期	石鏃		24.5	17.5	5.2	1.6	ｻﾇｶｲﾄ	完
S215	A427	付属建物２区	溝64	弥生中～後期	石鏃		27.0	15.5	3.3	1.5	ｻﾇｶｲﾄ	完
S216	B442	付属建物２区	溝64	弥生中～後期	石鏃		21.0	12.5	3.0	0.6	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S217	A417	付属建物２区	溝64	弥生中～後期	石鏃		15.0	11.0	3.2	0.7	ｻﾇｶｲﾄ	欠

掲載番号	番号	出土地区	遺構名	時代・時期	器種	形式	計測最大値（mm） 長さ	幅・径	厚さ	重量 (g)	石材	残存
S218	B443	付属建物２区	溝64	弥生中～後期	石鏃		15.0	15.5	3.5	0.6	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S219	A418	付属建物２区	溝64	弥生中～後期	石鏃		17.5	14.0	3.3	0.6	ｻﾇｶｲﾄ	完
S220	B450	付属建物２区	溝64	弥生中～後期	石鏃		21.0	14.0	3.0	0.7	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S221	A403	付属建物２区	溝64	弥生中～後期	石鏃		19.5	16.0	3.5	0.9	ｻﾇｶｲﾄ	完
S222	B444	付属建物２区	溝64	弥生中～後期	石鏃		21.5	15.0	3.0	0.9	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S223	B438	付属建物２区	溝64	弥生中～後期	石鏃		20.0	15.0	3.5	0.8	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S224	A408	付属建物２区	溝64	弥生中～後期	石鏃		23.0	17.5	4.2	1.1	ｻﾇｶｲﾄ	完
S225	A406	付属建物２区	溝64	弥生中～後期	石鏃		22.5	16.0	4.0	1.2	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S226	A430	付属建物２区	溝64	弥生中～後期	石鏃		22.5	15.5	2.5	1.0	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S227	A428	付属建物２区	溝64	弥生中～後期	石鏃		22.5	16.5	3.5	1.1	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S228	A405	付属建物２区	溝64	弥生中～後期	石鏃		28.5	14.5	4.2	1.0	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S229	A412	付属建物２区	溝64	弥生中～後期	石鏃		27.0	17.5	4.5	1.3	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S230	B435	付属建物２区	溝64	弥生中～後期	石鏃		30.5	14.5	3.5	1.3	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S231	B441	付属建物２区	溝64	弥生中～後期	石鏃		22.0	19.5	4.0	1.2	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S232	A413	付属建物２区	溝64	弥生中～後期	石鏃		25.0	15.5	3.3	1.2	ｻﾇｶｲﾄ	完
S233	A410	付属建物２区	溝64	弥生中～後期	石鏃		23.0	16.5	3.2	1.1	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S234	A424	付属建物２区	溝64	弥生中～後期	石鏃		23.0	14.5	3.5	1.0	ｻﾇｶｲﾄ	完
S235	A426	付属建物２区	溝64	弥生中～後期	石鏃		29.0	10.5	3.0	1.1	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S236	B454	付属建物２区	溝64	弥生中～後期	石鏃		28.5	21.5	4.5	2.6	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S237	A422	付属建物２区	溝64	弥生中～後期	石鏃and石錐		29.5	14.5	3.7	1.3	ｻﾇｶｲﾄ	完
S238	B452	付属建物２区	溝64	弥生中～後期	石錐		19.5	7.0	4.0	0.5	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S239	B455	付属建物２区	溝64	弥生中～後期	石錐		20.0	12.5	3.7	0.9	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S240	B456	付属建物２区	溝64	弥生中～後期	石錐		18.0	13.0	4.0	0.9	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S241	B446	付属建物２区	溝64	弥生中～後期	石錐		22.0	15.0	4.3	1.3	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S242	B448	付属建物２区	溝64	弥生中～後期	石錐		27.0	18.5	5.5	2.4	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S243	B460	付属建物２区	溝64	弥生中～後期	石錐		26.5	12.0	4.5	1.1	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S244	A404	付属建物２区	溝64	弥生中～後期	石槍		30.5	16.0	4.0	1.8	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S245	A425	付属建物２区	溝64	弥生中～後期	石錐		26.5	17.0	5.0	2.3	ｻﾇｶｲﾄ	完
S246	A409	付属建物２区	溝64	弥生中～後期	石錐		34.5	18.0	6.5	3.6	ｻﾇｶｲﾄ	完
S247	A419	付属建物２区	溝64	弥生中～後期	石錐		29.0	11.5	4.0	1.3	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S248	A420	付属建物２区	溝64	弥生中～後期	石錐		37.0	10.5	4.0	1.4	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S249	A415	付属建物２区	溝64	弥生中～後期	石錐		17.0	16.5	5.0	1.0	ｻﾇｶｲﾄ	完
S250	A411	付属建物２区	溝64	弥生中～後期	石錐		32.5	12.5	6.5	2.7	ｻﾇｶｲﾄ	完
S251	B445	付属建物２区	溝64	弥生中～後期	石錐		37.0	13.5	4.0	1.7	ｻﾇｶｲﾄ	完
S252	B440	付属建物２区	溝64	弥生中～後期	石錐		31.5	14.0	4.4	1.7	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S253	B451	付属建物２区	溝64	弥生中～後期	R.F（細調整剥片）		38.5	23.5	10.5	8.7	ｻﾇｶｲﾄ	完
S254	B447	付属建物２区	溝64	弥生中～後期	ｴﾝﾄﾞｽｸﾚｲﾊﾟｰ		43.0	31.5	9.5	12.2	ｻﾇｶｲﾄ	完
S255	B433	付属建物２区	溝64	弥生中～後期	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ		49.0	26.5	9.0	14.4	ｻﾇｶｲﾄ	完
S256	B461	付属建物２区	溝64	弥生中～後期	石包丁？		35.0	31.0	7.5	11.7	紅簾片岩	欠
S257	A402	付属建物２区	溝64	弥生中～後期	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ		66.0	39.5	8.5	18.0	ｻﾇｶｲﾄ	完
S258	A423	付属建物２区	溝64	弥生中～後期	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ		75.5	37.5	12.0	35.5	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S259	A399	付属建物２区	溝64	弥生中～後期	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ		80.0	51.0	9.0	45.5	ｻﾇｶｲﾄ	完
S260	A416	付属建物２区	溝64	弥生中～後期	石鋸？		65.5	28.5	3.0	9.0	紅簾片岩	欠
S261	C361	浄化槽区	溝64	弥生中～後期	石鏃		16.5	11.5	3.0	0.5	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S262	C362	浄化槽区	溝64	弥生中～後期	石鏃		19.0	13.0	2.0	0.4	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S263	B197	浄化槽区	溝64	弥生中～後期	石鏃	I or II	20.0	14.5	3.7	0.7	ｻﾇｶｲﾄ	完
S264	B198	浄化槽区	溝64	弥生中～後期	石鏃	I	19.5	17.0	4.1	1.0	ｻﾇｶｲﾄ	完
S265	A15	浄化槽区	溝64	弥生中～後期	石鏃	I	25.0	18.5	3.8	1.7	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S266	B205	浄化槽区	溝64	弥生中～後期	石鏃	II	20.5	12.5	3.0	0.7	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S267	C360	浄化槽区	溝64	弥生中～後期	石鏃		16.5	16.0	3.5	0.8	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S268	B199	浄化槽区	溝64	弥生中～後期	石鏃	II	20.0	13.5	3.2	0.8	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S269	A18	浄化槽区	溝64	弥生中～後期	石鏃	II	21.0	16.5	2.7	0.6	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S270	A12	浄化槽区	溝64	弥生中～後期	石鏃		20.0	18.0	3.8	0.8	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S271	A17	浄化槽区	溝64	弥生中～後期	石鏃	II	25.5	17.0	3.5	1.2	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S272	B195	浄化槽区	溝64	弥生中～後期	石鏃	II	22.5	17.0	2.4	0.9	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S273	B201	浄化槽区	溝64	弥生中～後期	石鏃	III	16.5	16.5	2.6	0.7	ｻﾇｶｲﾄ	完
S274	B200	浄化槽区	溝64	弥生中～後期	石鏃	II	22.0	12.0	3.8	0.8	ｻﾇｶｲﾄ	完
S275	A11	浄化槽区	溝64	弥生中～後期	石錐		27.5	26.5	4.0	2.6	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S276	B194	浄化槽区	溝64	弥生中～後期	石錐		23.5	18.5	4.8	2.0	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S277	B204	浄化槽区	溝64	弥生中～後期	石錐か？		26.0	9.5	4.2	1.3	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S278	B202	浄化槽区	溝64	弥生中～後期	石包丁（打製）		37.0	20.5	5.5	3.2	ｻﾇｶｲﾄ	完
S279	B203	浄化槽区	溝64	弥生中～後期	石錐		41.0	24.5	5.5	5.9	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S280	B196	浄化槽区	溝64	弥生中～後期	石包丁（打製）		51.0	17.5	7.5	6.0	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S281	A14	浄化槽区	溝64	弥生中～後期	石鍬		109.0	54.5	14.0	105.9	ｻﾇｶｲﾄ	完
S282	A16	浄化槽区	溝64	弥生中～後期	銅剣鋳型？		35.0	36.0	29.0	40.1	流紋岩	欠
S283	A13	浄化槽区	溝64	弥生中～後期	蛤刃石斧（柄？）		96.5	56.0	43.0	319.0	ﾋﾝ岩	欠
S284	A91	本館１区	溝65	弥生中～後期	石鏃	I	26.0	17.0	3.0	1.5	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S285	B244	水路２－１区	溝65	弥生中～後期	石鏃	II	18.0	17.0	3.7	1.0	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S286	C336	水路２－１区	溝65	弥生中～後期	石鏃		32.5	15.0	4.3	2.3	ｻﾇｶｲﾄ	完
S287	A84	本館１区	溝65	弥生中～後期	石鏃	IV	42.5	19.0	5.0	3.5	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S288	A83	本館１区	溝65	弥生中～後期	石錐		34.0	15.5	4.0	1.5	ｻﾇｶｲﾄ	完
S289	B245	水路２－１区	溝65	弥生中～後期	石錐		40.0	22.5	7.3	4.3	ｻﾇｶｲﾄ	完
S290	B239	水路２－１区	溝65	弥生中～後期	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ		86.0	59.0	11.0	68.2	ｻﾇｶｲﾄ	完

掲載番号	番号	出土地区	遺構名	時代・時期	器　種	形式	計測最大値（mm）			重量	石　材	残存
							長さ	幅・径	厚さ	(g)		
S291	B262	水路２－１区	溝65	弥生中～後期	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ		45.5	20.5	4.7	4.0	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S292	C351	水路２－１区	溝65	弥生中～後期	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ		39.5	36.5	9.3	13.2	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S293	C356	水路２－１区	溝65	弥生中～後期	楔？		43.0	51.0	11.0	32.7	ｻﾇｶｲﾄ	完
S294	B263	水路２－１区	溝65	弥生中～後期	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ？		557.0	62.5	17.0	60.9	ｻﾇｶｲﾄ	完
S295	B258	水路２－１区	溝65	弥生中～後期	石匙		76.5	42.0	9.3	22.8	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S296	A92	本館１区	溝65	弥生中～後期	太型蛤刃石斧（柄）		119.5	71.0	54.5	849.1	流紋岩	欠
S297	C339	水路２－１区	溝65	弥生中～後期	敲石		159.0	78.5	49.0	1195.2	花崗岩	完
S298	A466	付属建物２区	溝65	弥生中～後期	石鏃		15.5	13.0	4.0	0.7	ｻﾇｶｲﾄ	完
S299	B453	付属建物２区	溝65	弥生中～後期	石錐		18.5	14.5	3.4	0.6	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S300	A464	付属建物２区	溝65	弥生中～後期	石錐		22.5	7.5	4.0	0.6	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S301	A463	付属建物２区	溝65	弥生中～後期	石錐		25.0	22.5	5.0	2.3	ｻﾇｶｲﾄ	完
S302	A465	付属建物２区	溝65	弥生中～後期	石錐		32.0	14.0	6.0	1.8	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S303	A462	付属建物２区	溝65	弥生中～後期	石匙		74.0	32.0	7.0	12.5	ｻﾇｶｲﾄ	完
S304	A6	浄化槽区	溝65	弥生中～後期	石鏃	Ⅰ	18.0	15.0	4.0	0.9	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S305	A7	浄化槽区	溝65	弥生中～後期	石鏃	Ⅰ・Ⅱ	22.0	15.0	3.0	0.9	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S306	B213	浄化槽区	溝65	弥生中～後期	石鏃	Ⅱ	25.0	17.0	3.0	1.1	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S307	A10	浄化槽区	溝65	弥生中～後期	石鏃	Ⅰ・Ⅱ	26.0	13.0	3.8	1.2	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S308	A4	浄化槽区	溝65	弥生中～後期	石鏃	Ⅱ	25.0	23.5	4.2	2.1	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S309	A8	浄化槽区	溝65	弥生中～後期	石鏃	Ⅱ	30.0	21.5	3.0	1.7	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S310	A5	浄化槽区	溝65	弥生中～後期	石鏃	Ⅱ	33.0	17.5	5.0	1.9	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S311	B210	浄化槽区	溝65	弥生中～後期	石錐		33.0	22.0	5.0	3.7	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S312	B211	浄化槽区	溝65	弥生中～後期	楔？		22.5	24.5	6.0	3.5	ｻﾇｶｲﾄ	完
S313	B212	浄化槽区	溝65	弥生中～後期	楔？		33.5	31.0	6.8	7.0	ｻﾇｶｲﾄ	完
S314	A9	浄化槽区	溝65	弥生中～後期	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ?		41.5	30.0	7.2	9.3	ｻﾇｶｲﾄ	完
S315	D372	浄化槽区	溝65	弥生中～後期	敲石		159.0	67.5	58.0	956.5	流紋岩	完
S316	A1	水路３区	溝66	弥生中期	石鏃	Ⅱ	16.0	12.5	2.5	0.4	ｻﾇｶｲﾄ	完
S317	A429	付属建物２区	溝66	弥生中期	石鏃		17.5	15.5	3.0	0.6	ｻﾇｶｲﾄ	完
S318	B206	浄化槽区	溝66	弥生中期	石鏃	Ⅱ	19.5	13.5	3.5	0.6	ｻﾇｶｲﾄ	完
S319	A19	浄化槽区	溝66	弥生中期	石鏃	Ⅱ	15.0	17.5	3.4	0.7	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S320	A2	水路３区	溝66	弥生中期	石鏃	Ⅱ	21.0	15.5	3.0	0.9	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S321	B207	浄化槽区	溝66	弥生中期	石鏃	Ⅴ	27.0	18.0	3.8	1.1	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S322	B249	水路２－１区	溝66	弥生中期	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ		38.5	24.5	7.0	8.2	ｻﾇｶｲﾄ	完
S323	C355	水路２－１区	溝66	弥生中期	楔		33.5	48.0	8.8	15.3	ｻﾇｶｲﾄ	完
S324	A103	本館１区	溝66	弥生中期	石匙		64.5	40.0	8.2	22.0	ｻﾇｶｲﾄ	完
S325	B209	浄化槽区	溝66	弥生中期	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ		38.5	42.0	6.5	10.3	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S326	A102	本館１区	溝66	弥生中期	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ？		86.5	64.5	11.5	63.4	ｻﾇｶｲﾄ	完
S327	B208	浄化槽区	溝66	弥生中期	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ		49.0	30.0	9.0	15.1	ｻﾇｶｲﾄ	完
S328	A101	本館１区	溝66	弥生中期	石包丁（磨製）		56.5	48.5	7.5	29.1	流紋岩	欠
S329	C337	水路２－１区	溝67	弥生中期	石鏃		18.0	13.0	2.8	0.6	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S330	B266	水路２－１区	溝67	弥生中期	石鏃	欠	29.5	22.0	5.2	3.2	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S331	C340	水路２－１区	溝67	弥生中期	石鏃		18.0	9.0	3.3	0.4	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S332	C342	水路２－１区	溝67	弥生中期	石鏃		23.0	18.5	5.0	2.0	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S333	A94	本館１区	溝67	弥生中期	石鏃	Ⅱ	20.5	14.5	3.7	0.8	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S334	A100	本館１区	溝67	弥生中期	石鏃	Ⅱ	18.5	18.0	4.0	1.0	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S335	B264	水路２－１区	溝67	弥生中期	石鏃	Ⅰ or Ⅱ	21.5	16.5	3.7	1.2	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S336	A113	水路２－１区	溝67	弥生中期	石鏃	Ⅱ	27.0	15.5	3.3	1.1	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S337	A85	本館１区	溝67	弥生中期	石鏃	Ⅱ	24.0	21.0	4.5	1.6	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S338	C353	水路２－１区	溝67	弥生中期	石鏃		14.0	12.5	2.5	0.4	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S339	C352	水路２－１区	溝67	弥生中期	石鏃		18.5	19.0	3.0	0.9	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S340	B260	水路２－１区	溝67	弥生中期	石錐		32.0	15.0	4.0	2.2	ｻﾇｶｲﾄ	完
S341	A95	水路２－１区	溝67	弥生中期	石錐		39.0	14.5	6.0	2.5	ｻﾇｶｲﾄ	完
S342	A93	水路２－１区	溝67	弥生中期	石鏃		71.0	40.0	7.0	23.4	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S343	B248	水路２－１区	溝67	弥生中期	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ		51.5	36.5	5.0	10.3	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S344	A96	水路２－１区	溝67	弥生中期	石槍		62.5	32.5	12.5	39.5	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S345	A112	水路２－１区	溝67	弥生中期	石鍬		46.0	60.0	16.0	46.0	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S347	A106	水路２－１区	溝67	弥生中期	石包丁（磨製）		85.0	56.5	7.5	49.7	頁岩	欠
S348	B247	水路２－１区	溝67	弥生中期	石包丁（磨製）		47.5	23.0	5.0	5.6	頁岩	欠
S349	A107	水路２－１区	溝67	弥生中期	石包丁（磨製）		89.0	49.5	9.0	16.8	流紋岩	欠
S350	A108	水路２－１区	溝67	弥生中期	石包丁（磨製）		60.0	38.0	7.1	23.3	流紋岩	欠
S351	A111	水路２－１区	溝67	弥生中期	石包丁（磨製）		69.0	43.5	8.0	43.4	緑色片岩	欠
S352	A109	水路２－１区	溝67	弥生中期	磨製石器		111.5	19.0	10.0	31.7	ｻﾇｶｲﾄ質	完
S353	A97	水路２－１区	溝67	弥生中期	太型蛤刃石斧		71.5	67.0	47.5	249.0	流紋岩	欠
S354	B237	水路２－２区	溝68	弥生中期	石鏃	Ⅰ or Ⅱ	21.5	15.5	2.5	0.8	ｻﾇｶｲﾄ	完
S355	A89	水路２－１区	溝68	弥生中期	石鏃	Ⅱ	26.0	14.5	4.2	1.0	ｻﾇｶｲﾄ	完
S356	B236	水路２－２区	溝68	弥生中期	石鏃	Ⅰ or Ⅱ	31.5	15.5	4.0	1.6	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S357	B241	水路２－１区	溝68	弥生中期	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ		54.5	46.0	7.0	16.7	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S358	C338	水路２－１区	溝68	弥生中期	楔？		52.0	31.0	7.5	12.8	ｻﾇｶｲﾄ	完
S359	A87	水路２－１区	溝68	弥生中期	石鍬		68.5	43.5	12.0	51.4	玄武岩か?	欠
S360	A86	水路２－１区	溝68	弥生中期	石匙		79.5	51.5	6.2	27.0	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S361	A90	水路２－１区	溝68	弥生中期	石匙		67.5	45.0	6.0	21.8	ｻﾇｶｲﾄ	完
S362	B261	水路２－１区	溝68	弥生中期	太型蛤刃石斧(柄)		49.5	50.0	32.0	102.7	安山岩	欠
S363	A88	水路２－１区	溝68	弥生中期	太型蛤刃石斧		86.5	73.0	47.7	379.5	流紋岩	欠
S364	A80	本館５区	包含層	縄文後期	石鏃	Ⅱ	15.5	15.0	3.5	0.6	黒曜岩	欠

田益田中（国立岡山病院）遺跡

掲載番号	番号	出土地区	遺構名	時代・時期	器　種	形式	計測最大値（mm）			重量	石　材	残存
							長さ	幅・径	厚さ	(g)		
S365	A78	本館５区	河道1？	縄文後期	石鏃	Ⅱ	20.5	18.0	3.0	0.7	ｻﾇｶｲﾄ	完
S366	A79	本館５区	河道2？	縄文後期	石鏃	Ⅱ	17.5	16.5	3.0	0.4	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S367	A77	本館５区	河道2？	縄文後期	石鏃	Ⅱ	27.0	19.5	4.7	1.9	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S368	A20	浄化槽区	中世層	弥生	石鏃	Ⅰ	22.5	14.0	4.2	1.7	ｻﾇｶｲﾄ	完
S369	B306	本館８区	包含層	弥生	石鏃	Ⅰ	31.5	17.0	4.5	2.2	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S370	C349	水路２－１区	包含層	弥生	石鏃		28.5	15.5	4.0	1.9	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S371	C393	駐車場区	包含層	弥生	石鏃		31.5	18.5	4.0	2.2	ｻﾇｶｲﾄ	完
S372	B294	本館８区	包含層	弥生	石鏃	Ⅱ	17.0	15.5	2.5	0.6	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S373	C388	水路１区	包含層	弥生	石鏃		21.0	16.0	2.7	0.7	ｻﾇｶｲﾄ	完
S374	C359	水路３区	包含層	弥生	石鏃		20.5	13.0	4.0	0.8	ｻﾇｶｲﾄ	完
S375	C389	水路１区	包含層	弥生	石鏃		21.5	14.5	3.0	0.7	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S376	C327	本館８区	包含層	弥生	石鏃		22.5	17.0	3.0	0.6	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S377	B458	付属建物２区	包含層	弥生	石鏃		26.0	19.5	3.5	1.2	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S378	A30	浄化槽区	基盤層	弥生	石鏃	Ⅱ	28.0	16.0	3.8	1.1	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S379	A57	本館３区	基盤層	弥生	石鏃	Ⅱ	29.0	15.5	4.5	1.5	ｻﾇｶｲﾄ	完
S380	A29	浄化槽区	基盤層	弥生	石鏃	Ⅳ	32.5	11.0	3.0	1.0	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S382	B220	本館３区	包含層	弥生	石鏃	ⅡorⅤ	25.0	15.0	3.2	1.1	ｻﾇｶｲﾄ	完
S384	C387	進入路２区	包含層	弥生	石鏃		20.0	12.0	3.2	0.5	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S385	C368	本館３区	包含層	弥生	石鏃		20.5	17.0	3.3	0.9	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S386	A118	本館２区	？	弥生	石鏃	Ⅴ	26.5	17.5	5.0	1.4	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S387	B275	進入路２区	包含層	弥生	石鏃	Ⅰ	34.0	14.0	4.5	1.7	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S388	A56	本館３区	基盤層	弥生	石錐		33.5	11.5	4.0	1.0	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S389	B279	水路６区	包含層	弥生	石錐		30.5	13.5	5.5	1.9	ｻﾇｶｲﾄ	完
S390	C346	水路２区	包含層	弥生	石錐		30.5	12.0	5.0	1.7	ｻﾇｶｲﾄ	完
S391	C367	本館３区	包含層	弥生	石錐		32.5	7.5	5.0	1.1	ｻﾇｶｲﾄ	完
S392	C385	進入路２区	包含層	弥生	石錐		33.5	9.5	4.0	1.2	ｻﾇｶｲﾄ	完
S394	A55	本館３区	基盤層	弥生	石匙		52.5	39.5	4.4	7.9	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S395	B288	本館８区	包含層	弥生	石包丁（打製）		115.5	51.0	9.5	70.8	ｻﾇｶｲﾄ	欠
S396	C357	水路２－１区	包含層	弥生	石包丁（打製）		72.5	45.5	12.0	46.3	ｻﾇｶｲﾄ	完
S397	B221	本館３区	包含層	弥生	楔？		53.5	67.0	25.0	80.7	ｻﾇｶｲﾄ	完
S398	A141	本館８区	包含層	弥生	楔		19.5	18.5	6.0	2.7	ｻﾇｶｲﾄ	完
S399	A54	本館３区	基盤層	弥生	石包丁（打製）		98.0	42.5	10.5	49.2	ｻﾇｶｲﾄ	完
S400	D378	水路8区	包含層	弥生	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ		92.0	33.0	9.7	24.5	ｻﾇｶｲﾄ	完
S401	B243	水路２－１区	包含層	弥生	石包丁（磨製）		68.0	47.0	9.5	36.4	流紋岩	欠
S402	D467	付属建物１区	溝65	弥生	敲石		56.0	65.0	44.0	272.5		完
S403	B311	本館８区	包含層	弥生	扁平片刃石斧		10.0	30.5	15.0	34.6	玄武岩	欠
S404	C364	浄化槽区	河道10	弥生	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ		80.5	46.0	5.5	29.0	ｻﾇｶｲﾄ	完
S405	C363	浄化槽区	河道10	弥生	敲石		75.5	51.5	57.0	285.3	流紋岩	完
S406	A33	本館３区	溝53	弥生	敲石		70.0	65.0	26.0	189.3	流紋岩	欠
S407	B273	水路２－１区	溝67	弥生	石錐		94.0	95.5	19.4	282.3	ﾋﾝ岩	完
S408	C358	水路２－１区	溝65	弥生	砥石		136.5	67.5	25.5	288.8	流紋岩	完
S409	D376		包含層	弥生	砥石		127.0	84.5	51.0	806.0	流紋岩	欠

新旧遺構名称対照表

縄 文 遺 構

新遺構名	旧調査区 遺構名	新遺構調査区	担当者
土壙1	水路5－2区 No11土壙	水路5区	平井泰
土壙2	水路5－1区 No9土壙	水路5区	平井泰
土壙3	水路5－1区 No8土壙	水路5区	平井泰
土壙4	SH区 No23土壙	宿舎区	平井泰
土壙5	HO16区 土壙1	本館5	柳瀬・小林
土壙6	HO15区 土壙1	本館5	柳瀬・小林
土壙7	HO12区 土壙1	本館5	柳瀬・小林
土壙8	HO2区 土壙10	本館2区	弘田・根木
土壙9	HO3区 土壙3	本館3区	平井勝
土壙10	HO3区 土壙3	本館3区	平井勝
溝1	水路5－1区 No7溝	水路5区	平井泰
溝2	水路6－1区 No3溝	水路6区	平井泰
溝3	水路7区 東溝1	水路7区	柳瀬・小林
溝4	水路7区 東溝2	水路7区	柳瀬・小林
溝5	HO17区 東溝1	本館4区	柳瀬・小林
溝6	水路8区 北溝1	水路8区	柳瀬・小林
溝7	水路8南区 溝1	水路8区	柳瀬・小林
溝8	HO3区 溝4	本館3区	平井勝
河道1	水路5－2区 No10河道	水路5区	平井泰
河道1	水路6－1区 No2河道	水路6区	平井泰
河道1	HO1区 No1河道	本館1区	平井泰
河道1	HO4区 No5河道	本館5区	柳瀬・小林(平井ヤ)
河道1	HO17区 河道1	本館4区	柳瀬・小林
河道1	水路8南区 河道1	水路8区	柳瀬・小林
河道2	水路5－2区 No10河道	水路5区	平井泰
河道2	SH3区 No12河道	宿舎区	平井泰
河道2	SH1区 No21河道	宿舎区	平井泰
河道2	HO1区 No2河道	本館1区	平井泰
河道2	HO4区 No5河道	本館5区	柳瀬・小林(平井ヤ)
河道2	HO9区 河道1	本館8区	岡本泰
河道3	SH4区 No22河道	宿舎区	平井泰
河道3	排水路2区 No1河道	共同溝1区	平井泰
河道3	HO1区 No3河道	本館1区	平井泰
河道3	HO16区 河道1	本館5区	柳瀬・小林
河道3	HO4区 No6河道	本館5区	柳瀬・小林(平井ヤ)
河道3	HO12区 河道1	本館5区	柳瀬・小林
河道4	HO2区 河道1	本館2区	弘田・根木
河道4	HO14区 河道1	本館5・8区	柳瀬・岡本泰・小林
河道5	FU1・2区 河道2	付属建物1・2区	柳瀬・尾上
河道5	HO5区 河道1	本館6区	岡本泰
河道5	HO2区 河道2	本館2区	弘田・根木
河道5	HO2区 残河道1	本館8区	岡本泰
河道5	HO10・11区 河道1.・2	本館8区	岡本泰
河道5	HO13区 河道1.・2	本館8区	岡本泰
河道5	HO7・8区 河道1	本館8区	岡本泰
河道5	HO3区 旧河道	本館3区	平井勝
河道5	水路3区 旧河道	水路3区	平井勝
河道6	水路2－e区 河道3	水路2区	弘田・根木
河道7	水路2－d区 河道2	水路2区	弘田・根木
河道8・9	排水路3区 河道1・2	共同溝2区	弘田・根木
河道10	水路2－b区 河道1	水路2区	弘田・根木
河道10	JO区 旧河道	浄化槽	平井勝
河道10	FU1・2区 河道1	付属建物1・2区	柳瀬・尾上
河道10	HO6区 河道1	本館7区	岡本泰
河道10	水路3区 旧河道	水路3区	平井勝
たわみ6	FU2区 たわみ1	付属建物2区	柳瀬・尾上

弥 生 遺 構

新遺構名	旧調査区 遺構名	新遺構調査区	担当者
竪穴住居1	FU1区 竪穴住居1	付属建物1区	柳瀬・尾上
土壙11	進入路A区 No7土壙	進入路1区	平井泰
土壙12	進入路A区 No8土壙	進入路1区	平井泰
土壙13	水路5－2区 No7土壙	水路5区	平井泰
土壙14	SH区 No19土壙	宿舎区	平井泰
土壙15	SH区 No18土壙	宿舎区	平井泰
土壙16	水路5－1区 No6土壙	水路5区	平井泰
土壙17	水路5－1区 No2土壙	水路5区	平井泰
土壙18	水路6－1区 No1土壙	水路6区	平井泰
土壙19	水路7東区 土壙1	水路7区	柳瀬・小林
土壙20	水路7東区 土壙2	水路7区	柳瀬・小林
土壙21	水路7西区 土壙1	水路7区	柳瀬・小林
土壙22	水路7西区 土壙2	水路7区	柳瀬・小林
土壙23	水路7西区 土壙3	水路7区	柳瀬・小林
土壙24	市道拡幅区 土壙2	市道拡幅区	柳瀬・小林
土壙25	市道拡幅区 土壙1	市道拡幅区	柳瀬・小林
土壙26	市道拡幅区 土壙6	市道拡幅区	柳瀬・小林
土壙27	市道拡幅区 土壙5	市道拡幅区	柳瀬・小林
土壙28	水路8北区 土壙1	水路8区	柳瀬・小林
土壙29	水路8北区 土壙2	水路8区	柳瀬・小林
土壙30	HO15区 土壙4	本館5区	柳瀬・小林
土壙31	HO15区 土壙1	本館5区	柳瀬・小林
土壙32	HO15区 土壙2	本館5区	柳瀬・小林
土壙33	HO15区 土壙3	本館5区	柳瀬・小林
土壙34	HO14区 北土壙1	本館5区	柳瀬・小林
土壙35	HO14区 北土壙2	本館5区	柳瀬・小林
土壙36	HO14区 北土壙3	本館5区	柳瀬・小林
土壙37	HO14区 北土壙4	本館5区	柳瀬・小林
土壙38	HO14区 北土壙5	本館5区	柳瀬・小林
土壙38	HO2-b区 土壙2	本館2区	弘田・根木
土壙39	HO2-b区 土壙1	本館2区	弘田・根木
土壙40	HO2－c区 土壙3	本館2区	弘田・根木
土壙41	HO2－c区 土壙9	本館2区	弘田・根木
土壙42	HO2－c区 土壙4	本館2区	弘田・根木
土壙43	HO2－c区 土壙5	本館2区	弘田・根木
土壙44	HO2－c区 土壙6	本館2区	弘田・根木
土壙45	HO2－c区 土壙8	本館2区	弘田・根木
土壙46	HO2－c区 土壙7	本館2区	弘田・根木
土壙47	HO14南区 土壙5	本館8区	岡本泰
土壙48	HO14南区 土壙6	本館8区	岡本泰
土壙49	HO14南区 土壙4	本館8区	岡本泰
土壙50	HO14南区 土壙2	本館8区	岡本泰
土壙51	HO14南区 土壙3	本館8区	岡本泰
土壙52	HO14南区 土壙1	本館8区	岡本泰
土壙53	HO13区 土壙11	本館8区	岡本泰
土壙54	HO13区 土壙1	本館8区	岡本泰
土壙55	HO13区 土壙12	本館8区	岡本泰
土壙56	HO13区 土壙2	本館8区	岡本泰
土壙57	HO13区 土壙9	本館8区	岡本泰
土壙58	HO13区 土壙8	本館8区	岡本泰
土壙59	HO13区 土壙10	本館8区	岡本泰
土壙60	HO13区 土壙6	本館8区	岡本泰
土壙61	HO13区 土壙4	本館8区	岡本泰
土壙62	HO13区 土壙7	本館8区	岡本泰
土壙63	HO13区 土壙3	本館8区	岡本泰
土壙64	HO13区 土壙5	本館8区	岡本泰
土壙65	HO11区 土壙6	本館8区	岡本泰
土壙66	HO10区 土壙1	本館8区	岡本泰
土壙67	HO7区 土壙1	本館8区	岡本泰
土壙68	HO7区 土壙7	本館8区	岡本泰
土壙69	HO3区 土壙2	本館3区	平井勝
土壙70	HO3区 土壙1	本館3区	平井勝
土壙71	HO7区 土壙2	本館8区	岡本泰
土壙72	HO7区 土壙3	本館8区	岡本泰
土壙73	HO7区 土壙4	本館8区	岡本泰
土壙74	HO7区 土壙5	本館8区	岡本泰
土壙75	HO7区 土壙6	本館8区	岡本泰
土壙76	水路2－d区 土壙9	水路2区	弘田・根木
土壙77	水路2－d区 土壙10	水路2区	弘田・根木
土壙78	水路2－d区 土壙30	水路2区	弘田・根木
土壙79	水路2－d区 土壙6	水路2区	弘田・根木
土壙80	水路2－d区 土壙11	水路2区	弘田・根木
土壙81	水路2－d区 土壙7	水路2区	弘田・根木
土壙82	水路2－d区 土壙12	水路2区	弘田・根木
土壙83	水路2－d区 土壙25	水路2区	弘田・根木
土壙84	水路2－d区 土壙13	水路2区	弘田・根木
土壙85	水路2－d区 土壙22	水路2区	弘田・根木
土壙86	水路2－d区 土壙20	水路2区	弘田・根木
土壙87	水路2－d区 土壙19	水路2区	弘田・根木
土壙88	水路2－d区 土壙21	水路2区	弘田・根木
土壙89	水路2－d区 土壙23	水路2区	弘田・根木
土壙90	水路2－d区 土壙18	水路2区	弘田・根木
土壙91	水路2－d区 土壙24	水路2区	弘田・根木
土壙92	水路2－d区 土壙8	水路2区	弘田・根木
土壙93	水路2－d区 土壙17	水路2区	弘田・根木
土壙94	水路2－d区 土壙28	水路2区	弘田・根木
土壙95	水路2－d区 土壙29	水路2区	弘田・根木
土壙96	水路2－d区 土壙14	水路2区	弘田・根木
土壙97	水路2－d区 土壙27	水路2区	弘田・根木
土壙98	水路2－d区 土壙16	水路2区	弘田・根木
土壙99	水路2－d区 土壙15	水路2区	弘田・根木
土壙100	水路2－c区 土壙5	水路2区	弘田・根木
土壙101	水路2－c区 土壙4	水路2区	弘田・根木
土壙102	水路2－c区 土壙3	水路2区	弘田・根木
土壙103	水路2－c区 土壙2	水路2区	弘田・根木
土壙104	FU2区 土壙1	付属建物2区	柳瀬・尾上
土壙105	JO区 土壙12	浄化槽区	平井勝
土壙106	JO区 土壙7	浄化槽区	平井勝
土壙107	JO区 土壙6	浄化槽区	平井勝
土壙108	JO区 土壙4	浄化槽区	平井勝
土壙109	JO区 土壙8	浄化槽区	平井勝
土壙110	JO区 土壙5	浄化槽区	平井勝
土壙111	JO区 土壙3	浄化槽区	平井勝
土壙112	JO区 土壙2	浄化槽区	平井勝
土壙113	JO区 土壙14	浄化槽区	平井勝
土壙114	JO区 土壙17	浄化槽区	平井勝
溝9	進入路A区 No9	進入路1区	平井泰
溝9	進入路B－2区 No1・2溝	進入路2区	平井泰
溝9	進入路B－1区 No1溝	進入路2区	平井泰
溝9	水路1北区 No6溝・No3窯み	水路1区	平井泰
溝9	CH区 No3溝	駐車場区	平井泰
溝9	排水路3区 溝	共同溝2区	弘田・根木
溝9	HO2区 溝1・2	本館2区	弘田・根木

新遺構名	旧調査区 遺構名	新遺構調査区	担当者
溝9	HO15･14北区 溝2	本館5区	柳瀬・小林
溝9	HO14南・11・10区 溝2	本館8区	岡本泰
溝10	進入路A区 No6溝	進入路1区	平井泰
溝10	進入路B－1区 No2溝	進入路2区	平井泰
溝10	水路1北区 No5溝	水路1区	平井泰
溝10	水路1南区 No11溝	水路1区	平井泰
溝10	CH区 No2溝	駐車場区	平井泰
溝10	排水路3区 溝	共同溝2区	弘田・根木
溝10	HO2区 溝3	本館2区	弘田・根木
溝10	HO15･14･11･10･5区 溝1	本館5・8区	柳瀬・岡本泰・小林
溝10	HO8区 溝2	本館8区	岡本泰
溝10	HO7区 溝3	本館8区	岡本泰
溝11	進入路B－1区 No4溝	進入路2区	平井泰
溝12	進入路B－1区 No5溝	進入路2区	平井泰
溝13	進入路B－1区 No3溝	進入路2区	平井泰
溝14	水路1北区 No8溝	水路1区	平井泰
溝15	水路1北区 No1溝	水路1区	平井泰
溝16	水路1北区 No2溝	水路1区	平井泰
溝16	水路1南区 No9・10溝	水路1区	平井泰
溝16	水路2－e区 溝	水路2区	弘田・根木
溝17	水路4区 No1溝	水路4区	平井泰
溝17	SH4区 No17溝	宿舎区	平井泰
溝18	水路5－2区 No10溝	水路5区	平井泰
溝19	水路5－2区 No4溝	水路5区	平井泰
溝20	水路5－2区 No8溝	水路5区	平井泰
溝21	SH3区 No13溝	宿舎区	平井泰
溝22	SH1区 No8・10溝	宿舎区	平井泰
溝23	SH3区 No9溝	宿舎区	平井泰
溝24	水路5－1区 No1溝	水路5区	平井泰
溝25	水路5－1区 No3溝	水路5区	平井泰
溝26	水路5－1区 No4溝	水路5区	平井泰
溝27	水路5－1区 No5溝	水路5区	平井泰
溝28	CH区 No7溝	駐車場区	平井泰
溝29	CH区 No5溝	駐車場区	平井泰
溝30	CH区 No6溝	駐車場区	平井泰
溝31	水路7東区 溝1	水路7区	柳瀬・小林
溝31	HO17東区 溝1	本館5区	柳瀬・小林
溝32	水路7西・水路8区 溝3	水路7区	柳瀬・小林
溝33	水路7西区 溝2	水路7区	柳瀬・小林
溝33	市道拡幅区 溝5	市道拡幅区	柳瀬・小林
溝34	市道拡幅区 溝4	市道拡幅区	柳瀬・小林
溝35	HO2区 溝4	本館2区	弘田・根木
溝36	HO2区 溝1	本館2区	弘田・根木
溝36	HO15･14北･12･11区 溝6	本館5・8区	柳瀬・岡本泰・小林
溝37	HO2区 溝	本館2区	弘田・根木
溝37	HO14北・12・11区 溝4	本館5・8区	柳瀬・岡本泰・小林
溝38	HO12･14北区 溝5	本館5区	柳瀬・小林
溝39	HO4･15・12・14北区 溝7	本館5区	柳瀬・小林
溝40	HO12･11・14北区 溝8	本館5・8区	柳瀬・岡本泰・小林
溝41	HO12区 溝9	本館5区	柳瀬・小林
溝42	HO11区 溝	本館8区	岡本泰
溝43	HO10・11区 溝	本館8区	岡本泰
溝44	HO11・10区 溝	本館8区	岡本泰
溝45	HO11・10区 溝	本館8区	岡本泰
溝46	HO11・10区 溝	本館8区	岡本泰
溝47	HO11・10区 溝	本館8区	岡本泰
溝48	HO10区 溝5	本館8区	岡本泰
溝49	HO11・10区 溝3	本館8区	岡本泰
溝49	HO9・8区 溝1	本館8区	岡本泰
溝50	HO10区 溝4	本館8区	岡本泰
溝51	HO7区 溝2	本館8区	岡本泰
溝52	HO7区 溝1	本館8区	岡本泰
溝53	HO5－2区 溝53	本館8区	柳瀬・尾上
溝53	HO2区 溝1・5	本館2区	弘田・根木
溝53	HO5区 溝1	本館8区	岡本泰
溝53	HO2区 残溝5	本館8区	岡本泰
溝53	HO3区 溝1	本館3区	平井勝
溝53	水路3区 溝2	水路3区	平井勝
溝54	HO3区 溝3	本館3区	平井勝
溝55	HO3区 溝2	本館3区	平井勝
溝56	水路3区 溝3	水路3区	平井勝
溝57	水路3区 溝1	水路3区	平井勝
溝58	水路2－d区 溝10	水路2区	弘田・根木
溝58	排水路4区 溝1	共同溝3区	平井勝
溝58	FU1・2区 No2溝	付属建物1・2区	柳瀬・尾上
溝59	水路2－d区 溝12	水路2区	弘田・根木
溝59	排水路4区 溝1	共同溝3区	平井勝
溝59	FU1・2区 No6溝	付属建物1・2区	柳瀬・尾上
溝59	水路3区 溝4	水路3区	平井勝
溝60	FU1区 No4・8溝	付属建物1区	柳瀬・尾上
溝60	HO6区 溝1	本館7区	岡本泰
溝61	FU1区 No5・7溝	付属建物1区	柳瀬・尾上
溝61	HO6区 溝2	本館7区	岡本泰
溝61	水路3区 溝6	水路3区	平井勝
溝62	FU1・2区 No3溝	付属建物1・2区	柳瀬・尾上
溝62	HO6区 溝3	本館7区	岡本泰
溝62	水路3区 溝5	水路3区	平井勝
溝63	水路2－d区 溝13	水路2区	弘田・根木
溝63	FU2区 No16溝	付属建物2区	柳瀬・尾上
溝64	水路2－d・c区 溝9	水路2区	弘田・根木
溝64	FU2区 No9・12・13・15溝	付属建物2区	柳瀬・尾上
溝64	JO区 溝6	浄化槽区	平井勝
溝65	水路2－d・c・b区 溝3	水路2区	弘田・根木
溝65	FU2区 No10溝	付属建物2区	柳瀬・尾上
溝65	JO区 溝1	浄化槽区	平井勝
溝66	水路2－c区 溝8	水路2区	弘田・根木
溝66	FU2区 No11溝	付属建物2区	柳瀬・尾上
溝66	JO区 溝11･12	浄化槽区	平井勝
溝66	水路3区 溝9	水路3区	平井勝
溝67	水路2－c・b区 溝5・5'	水路2区	弘田・根木
溝67	JO区 溝2	浄化槽区	平井勝
溝68	水路2－b区 溝6	水路2区	弘田・根木
溝68	JO区 溝4	浄化槽区	平井勝
溝69	水路2－d区 溝14	水路2区	弘田・根木
溝70	水路2－c区 溝7	水路2区	弘田・根木
溝71	FU2区 No18溝	付属建物2区	柳瀬・尾上
溝72	水路2－b区 溝4	水路2区	弘田・根木
溝73	JO区 溝7	浄化槽区	平井勝
溝74	JO区 溝5・13	浄化槽区	平井勝
溝75	JO区 溝3	浄化槽区	平井勝
たわみ2	水路5－2区 No9たわみ	水路5区	平井泰
たわみ3	SH1区 No11溝	宿舎区	平井泰
たわみ4	水路2－e･d区 溝11	水路2区	弘田・根木
たわみ5	HO4区 No3くぼみ	本館4区	平井泰
たわみ5	HO16区 溝状たわみ	本館5区	柳瀬・小林
たわみ6	HO2区 溝7	本館2区	弘田・根木

古 墳～古 代 遺 構

新遺構名	旧調査区 遺構名	新遺構調査区	担当者
土壙115	水路4区 No2落ち込み	水路4区	平井泰
土壙116	水路5－2区 No5土壙	水路5区	平井泰
溝76	水路8北区 溝1	水路8区	柳瀬・小林
溝77	市道拡幅区 溝3	市道拡幅区	柳瀬・小林
溝78	市道拡幅区 溝2	市道拡幅区	柳瀬・小林
溝79	市道拡幅区 溝1	市道拡幅区	柳瀬・小林
溝80	水路2－e区 溝15	水路2区	弘田・根木
溝80	HO2区 溝6	本館2区	弘田・根木
溝81	FU2区 No1溝	付属建物2区	柳瀬・尾上
柵列状遺構1	SH4区 No14溝	宿舎区	平井泰
柵列状遺構2	CH区 No1遺構	駐車場区	平井泰

中 世 以 降 遺 構

新遺構名	旧調査区 遺構名	新遺構調査区	担当者
建物1	水路2－e区 近世建物1	水路2区	弘田・根木
建物2	FU2区 建物1	付属建物2区	柳瀬・尾上
土壙117	水路1－1区 No4土壙	水路1区	平井泰
土壙118	水路5－2区 No3土壙	水路5区	平井泰
土壙119	SH区 No16土壙	宿舎区	平井泰
土壙120	SH区 No15土壙	宿舎区	平井泰
土壙121	SH区 No4土壙	宿舎区	平井泰
土壙122	SH区 No1土壙	宿舎区	平井泰
土壙123	SH区 No2土壙	宿舎区	平井泰
土壙124	SH区 No3土壙	宿舎区	平井泰
土壙125	水路7東区 土壙3	水路7区	柳瀬・小林
土壙126	水路2－e区 近世土壙1	水路2区	弘田・根木
土壙127	水路2－e区 近世土壙2	水路2区	弘田・根木
土壙128	水路2－e区 近世土壙3	水路2区	弘田・根木
土壙129	HO12区 中世土壙1	本館5区	柳瀬・小林
土壙130	HO11区 土壙4	本館8区	岡本泰
土壙131	HO11区 土壙5	本館8区	岡本泰
土壙132	HO11区 土壙3	本館8区	岡本泰
土壙133	HO11区 土壙1	本館8区	岡本泰
土壙134	HO11区 土壙2	本館8区	岡本泰
土壙135	FU2区 土壙1	付属建物2区	柳瀬・尾上
土壙136	JO区 土壙1	浄化槽区	平井勝
井戸1	FU2区 近世井戸	付属建物2区	柳瀬・尾上
溝82	水路5－2区 No2溝	水路5区	平井泰
溝83	水路5－2区 No1溝	水路5区	平井泰
溝84	SH区 No5溝	宿舎区	平井泰
溝85	SH区 No6溝	宿舎区	平井泰
溝86	SH区 No7溝	宿舎区	平井泰
溝87	SH区 No20溝	宿舎区	平井泰
溝88	水路2－b区 溝1	水路2区	弘田・根木
溝89	水路2－b区 溝2	水路2区	弘田・根木
溝90	FU2区 No20溝	付属建物2区	柳瀬・尾上
溝91	FU2区 No22溝	付属建物2区	柳瀬・尾上
溝91	JO区 溝8	浄化槽区	平井勝
溝92	FU2区 No21溝	付属建物2区	柳瀬・尾上
溝92	JO区 溝10	浄化槽区	平井勝
溝93	JO区 溝9	浄化槽区	平井勝
溝94	JO区 溝11	浄化槽区	平井勝
溝95	FU1区 中世溝	付属建物1区	柳瀬・尾上
溝96	FU1区 中世溝	付属建物1区	柳瀬・尾上

報告書抄録

ふりがな	たますたなか（こくりつびょういん）いせき
書名	田益田中（国立病院）遺跡
副書名	国立岡山病院建設に伴う発掘調査
巻次	I
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	141
編著者名	柳瀬昭彦・平井勝・平井泰男・弘田和司・根木智宏・岡本泰典・尾上元規・小林利晴・難波拓史
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター
所在地	〒701－0136　岡山県岡山市西花尻1325－3　TEL086－293－3211
発行機関	岡山県教育委員会
所在地	〒700－0824　岡山県岡山市内山下2－4－6　TEL086－224－2111
発行年月日	1999年　3月　31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
田益田中 （国立病院） 遺跡	岡山県 岡山市 田益	33201	——	34度 42分 20秒	133度 54分 30秒	1995.4.1～ 1996.12.31 1997.12.1～ 1998.3.31	30,431	国立岡山病院建設に伴う発掘調査

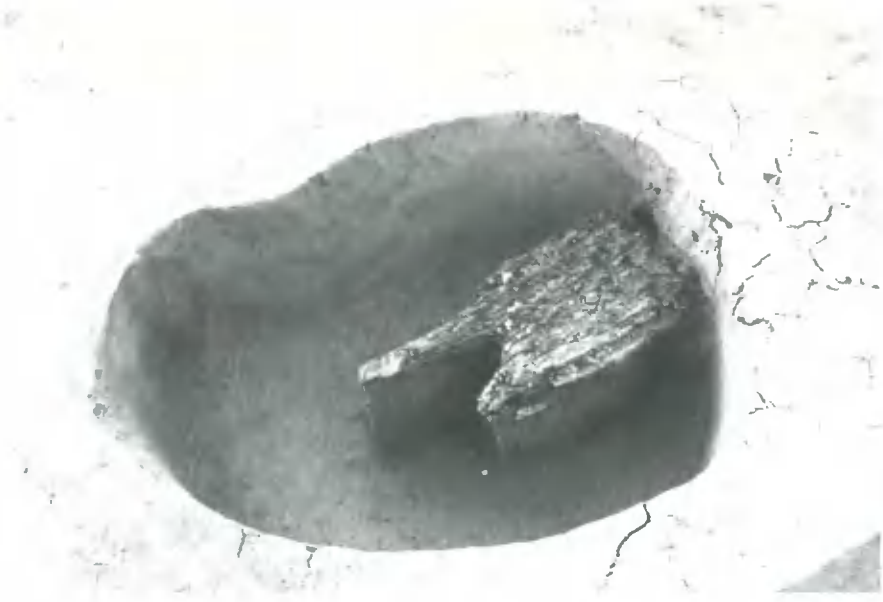
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
田益田中 （国立病院） 遺跡	集落跡	縄文時代	土壙　10基 溝　8条 河道　6条 たわみ　1基	縄文土器 弥生土器 土師器 須恵器 陶磁器 石器 石製品 土製品 木製品	銅剣の鋳型の可能性がある石製品
		弥生時代	竪穴住居　1軒 土壙　104基 溝　67条 たわみ　5基		
		古墳時代～古代	土壙　2基 溝　7条 柵列状遺構　2条		
		中・近世	掘立柱建物　2棟 土壙　20基 井戸　1基 溝　15条		

１．田益田中遺跡遠景（北西から）

２．確認トレンチＴ５（東から）

３．確認トレンチＴ18（東から）

図版２



１．土壙５（東から）

２．土壙６（南から）

３．土壙８（東から）

1．溝3（北から）

2．溝4（北から）

3．溝5（南西から）

図版４

１．水路５区河道１
（南西から）

２．本館１区河道１・２
（南西から）

３．本館４区河道１
（北西から）

１．本館４区河道１断面（南から）

２．宿舎区河道２
（北東から）

３．本館１区河道２（北から）

図版6

1．本館5区河道3
（西から）

2．本館2区河道4
（北から）

3．本館2区河道5
（東から）

1．本館8区河道5（南東から）

2．本館8区河道5（北東から）

図版８

１．本館３区河道５
（南西から）

２．水路２区河道６
（北から）

３．水路２区河道７
（南から）

１．付属建物１区河道10（南から）

２．付属建物２区河道10（南東から）

図版10

1．浄化槽区河道10（北西から）

2．浄化槽区河道10
（北東から）

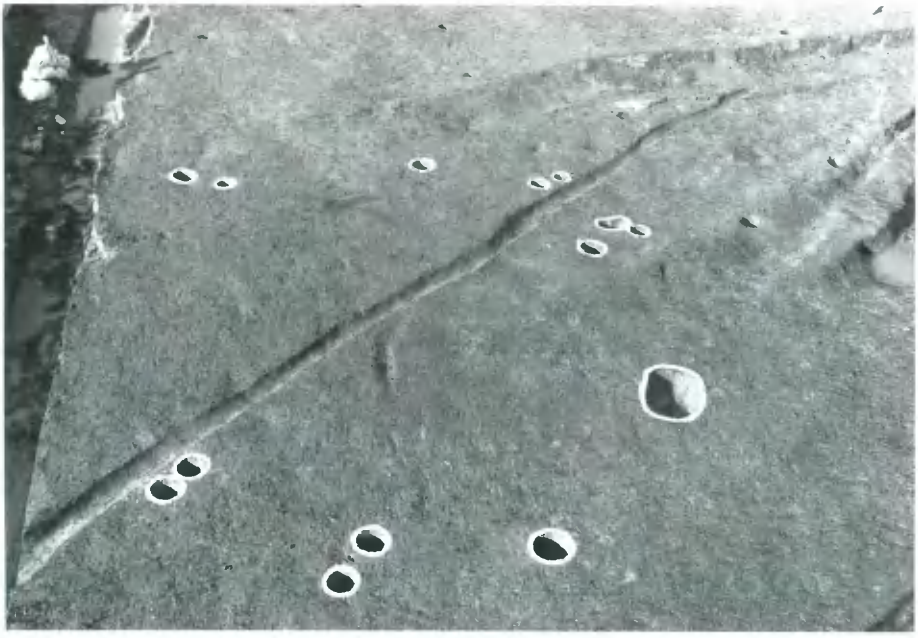
3．浄化槽区河道10断面（北から）

1．河道10掘り下げ状況（北西から）

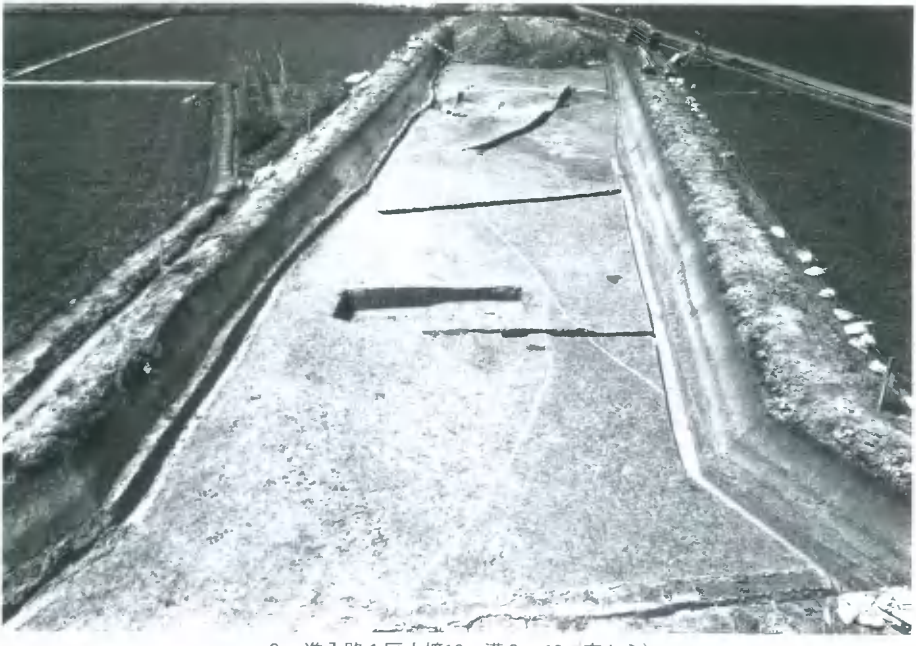
2．たわみ１（東から）

3．たわみ１断面
（南から）

図版12



1．竪穴住居1（南から）



2．進入路1区土壙12、溝9・10（南から）

1．土壙19・20、溝31
（南西から）

2．土壙25（南東から）

3．土壙29（南から）

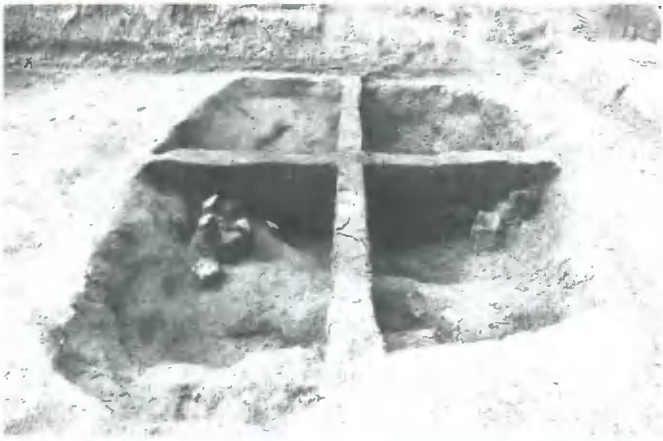
図版14

1．土壙34
（南西から）

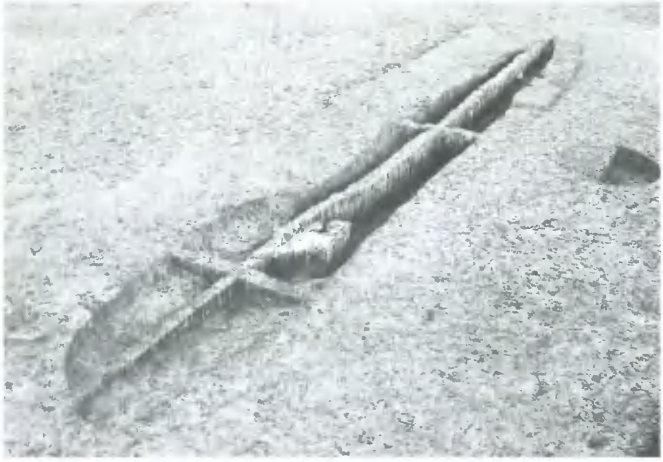
2．土壙36
（南東から）

3．土壙37・38（東から）

4．土壙38（北西から）



1．土壙41（北西から）



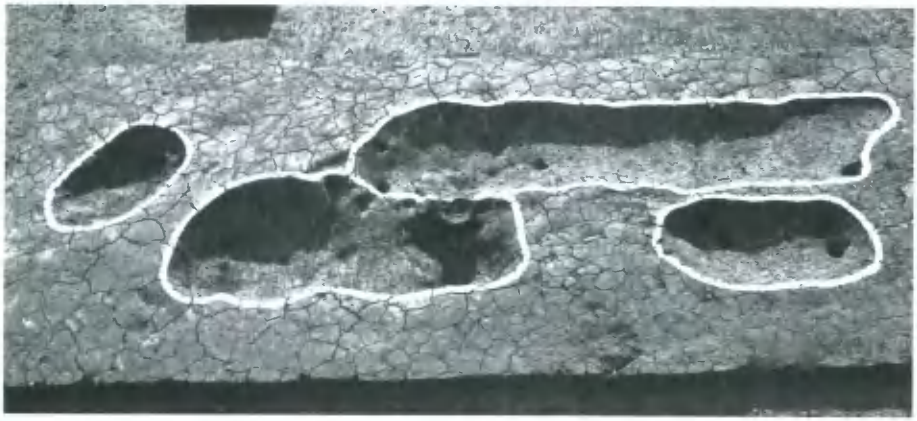
2．土壙43（東から）

3．土壙46（北から）

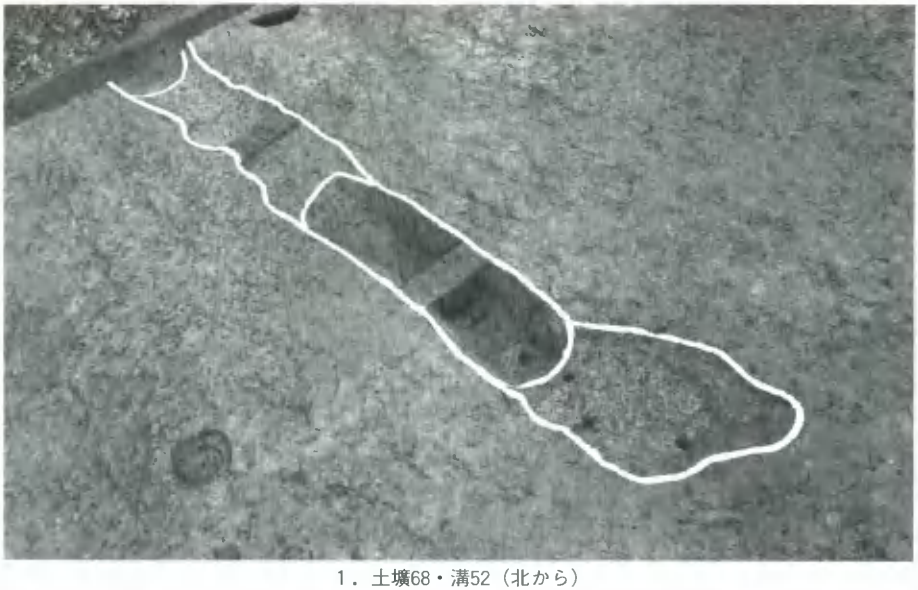
図版16

1．土壙48（南東から）

2．土壙53～64
（南西から）



3．土壙57～60（東から）



1．土壙68・溝52（北から）

2．土壙77（西から）

3．土壙78（西から）

図版18

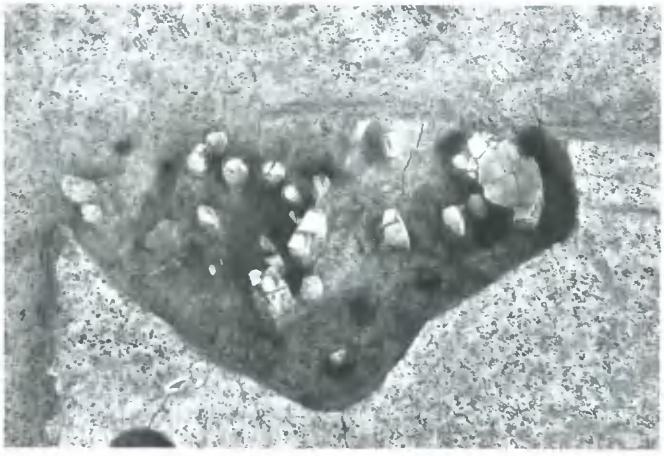
1．土壙79遺物出土状況
（北東から）

2．土壙79・80、溝58・59
（北西から）

3．土壙79完掘状況
（北西から）

1．土壙81～84、溝58・59・63（北から）

2．土壙81（北東から）



3．土壙82（西から）

図版20

1．土壙83・84
（南西から）

2．土壙85・86
（南東から）

3．土壙87・88・90、溝63
（西から）

1．土壙87・89
（東から）

2．土壙87・89断面
（南東から）

3．土壙90断面
（西から）

図版22

1．土壙91（東から）

2．土壙92（東から）

3．土壙92断面
（南東から）

1．土壙93（北東から）

2．土壙95（北から）

3．土壙95・96
（北東から）

図版24

1．土壙104、たわみ1、溝63・64・97　井戸1（北東から）

2．土壙105～112、溝74・75（東から）

3．土壙112（北から）

1．進入路２区溝９～13（北東から）

2．水路１区溝９・10（南から）

3．駐車場区溝９・10・28～30（東から）

図版26

1．本館2区溝9・10
（北西から）

2．本館5区溝9・36
（北東から）

3．本館8区溝9・10
（北東から）

1．本館５区溝９遺物出土状況・溝10（南から）

2．本館５区溝９・10・36（南から）

図版28

1．本館８区溝９遺物出土状況・溝10（南西から）第236図Ｂ

2．本館８区溝９遺物出土状況・溝10（北西から）第236図Ｃ

1．本館８区溝10（北東から）

2．本館８区溝10（南東から）

図版30

1．溝16（北から）

2．溝16断面
（南東から）

3．宿舎区溝17
（南から）

1．溝39・40（南から）

2．本館３区溝53（北東から）

3．本館８区溝53断面
（北から）

図版32

1．溝56（西から）

2．溝58・59、60・61
（南から）

3．溝60・61断面a
（西から）

1．本館７区溝62・
河道10肩部
（南西から）

2．付属建物２区溝62～64
（南から）

3．付属建物２区溝63
（南西から）

図版34

1．水路２区溝58・59、64・65（南から）

2．水路２区溝65・70（北から）

1．浄化槽区溝64・66（北東から）

2．浄化槽区溝65～68（北から）

図版36

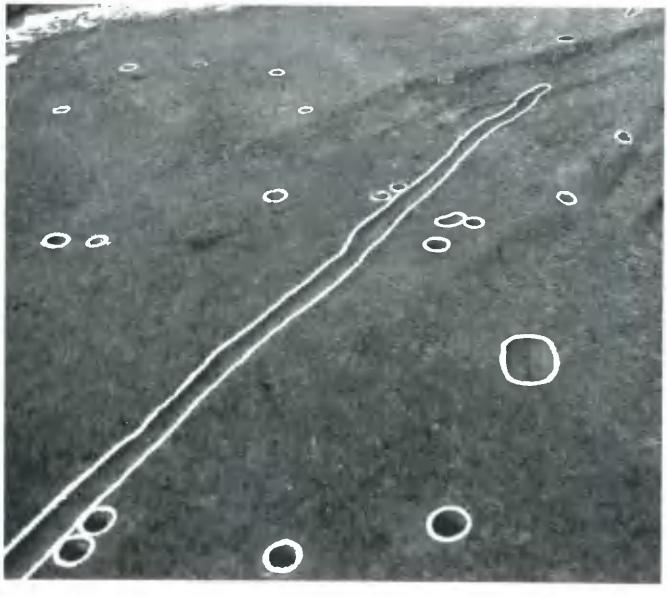
1．たわみ4（南から）

2．たわみ4断面
（南から）

3．たわみ6・溝80
（西から）

1．溝76（南から）

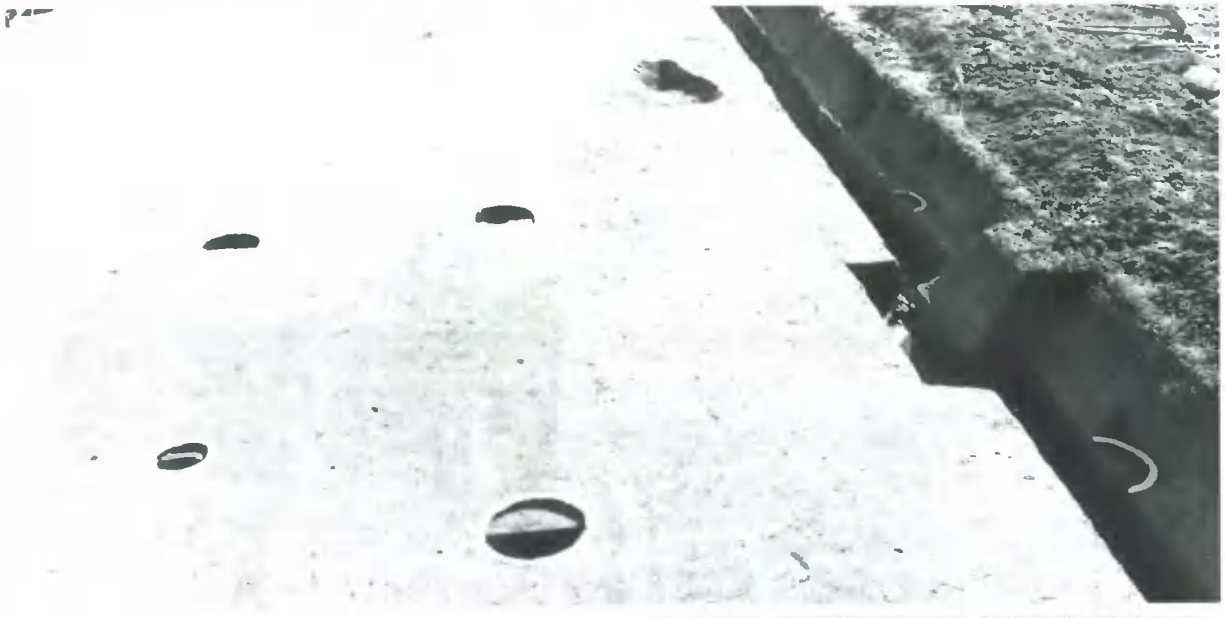
2．溝78断面（南から）



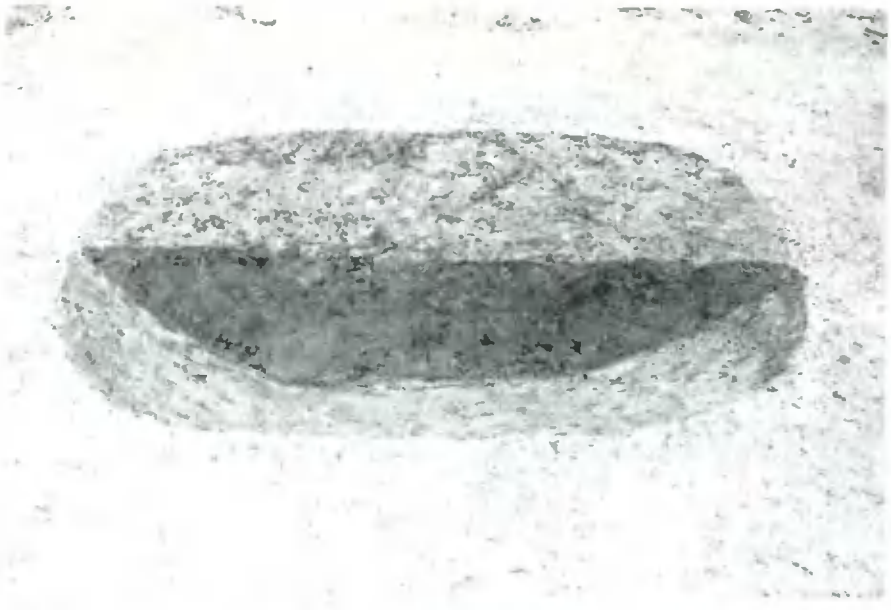
3．溝81・竪穴住居1
（南から）

図版38

1．柵状遺構２（北西から）



2．建物１（北から）、Ｐ１（南から）Ｐ３（東から）



1．土壙117（南から）

2．土壙119（南から）

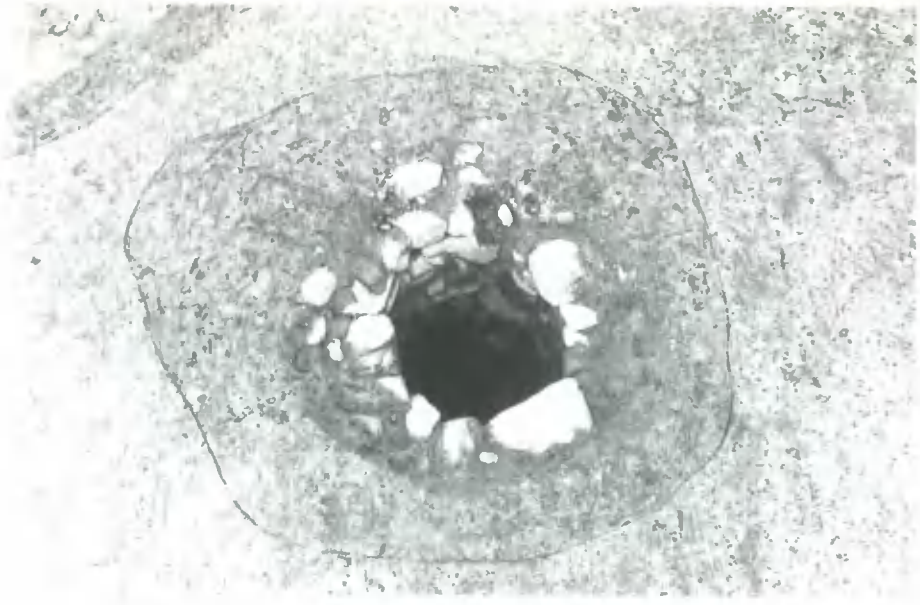
3．土壙121（北東から）

図版40

1．土壙123（南西から）

2．土壙129（南から）

3．土壙133（南東から）



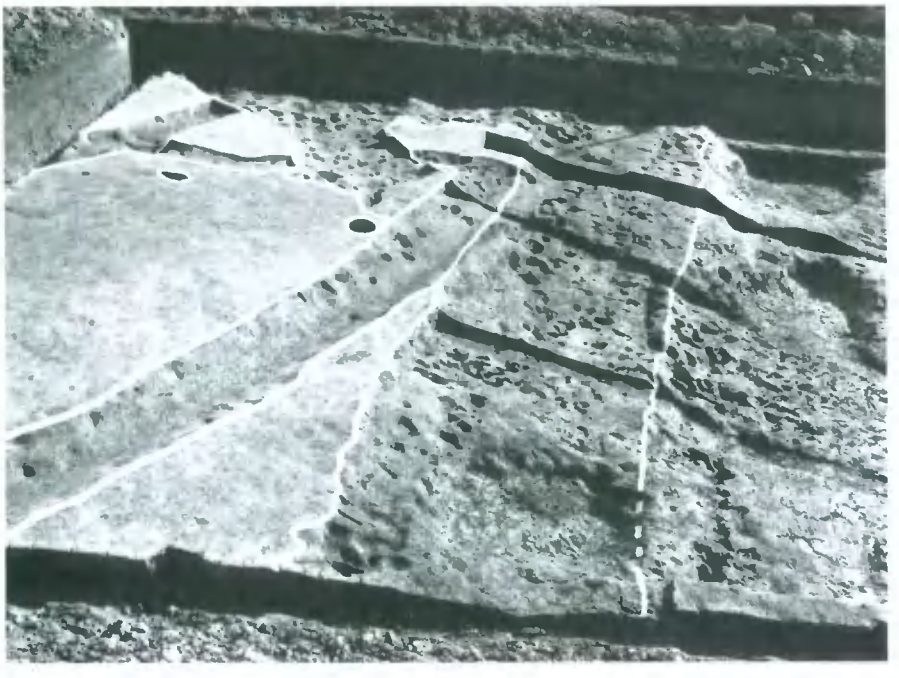
1．井戸１平面
（南から）

2．井戸１井側断面
（南から）

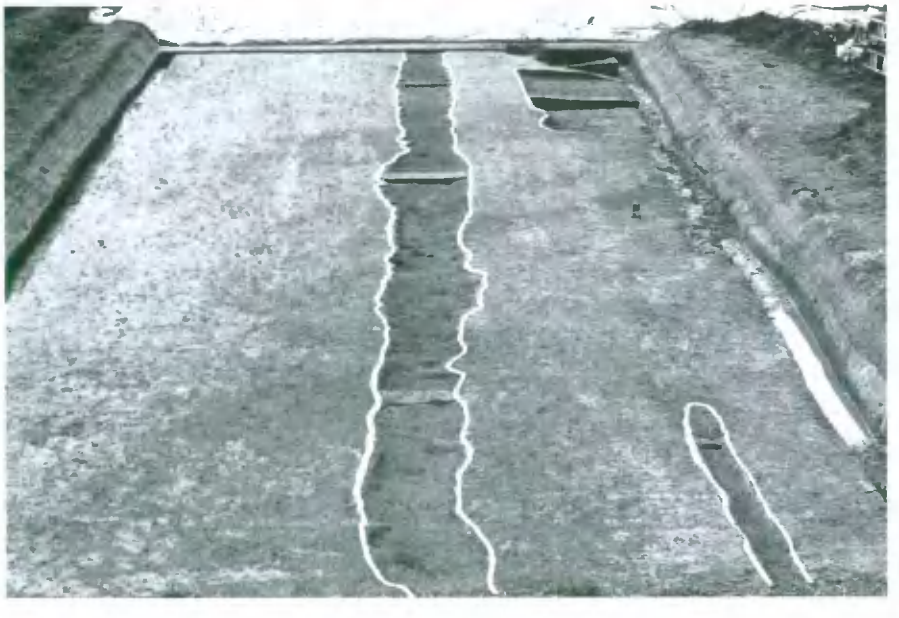
3．井戸１掘方断面
（南から）

図版42

1．溝83（東から）



2．溝22・たわみ3、
溝85・86
（北東から）



3．溝88・89
（北から）

94

95

99

160

縄文後期土器(1)〈1/2,1/6〉

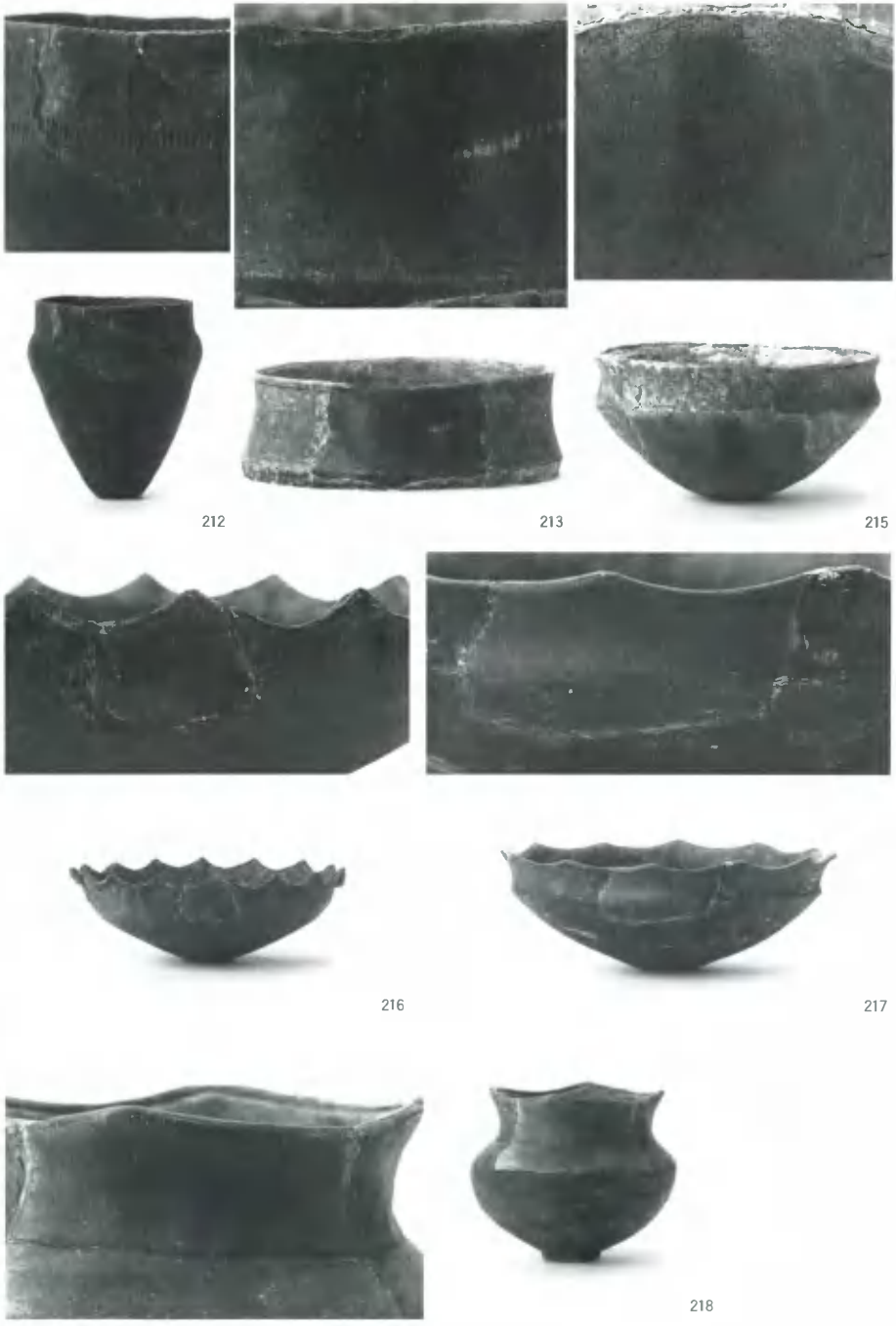
162

161

162

163

縄文後期土器(2)〈1/2,1/6〉



縄文晩期土器(1)〈1/2,1/6〉

図版46

縄文晩期土器(2)〈1/2,1/4,1/6〉

393

1. 縄文晩期土器(3)〈1/2,1/6〉

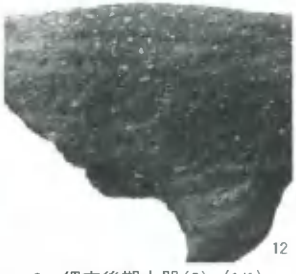
1

4

7

9

11



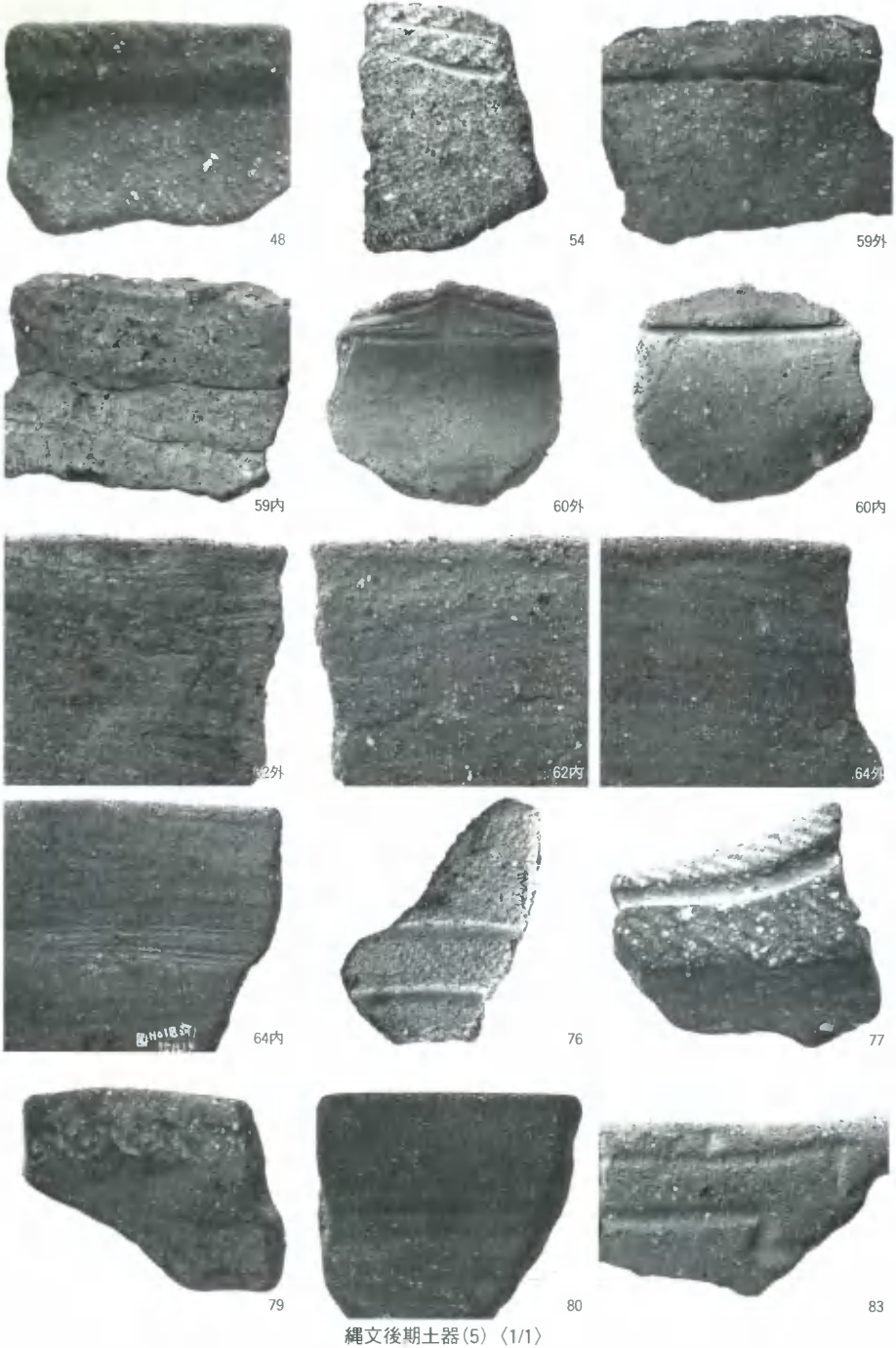
12

13

2. 縄文後期土器(3)〈1/1〉

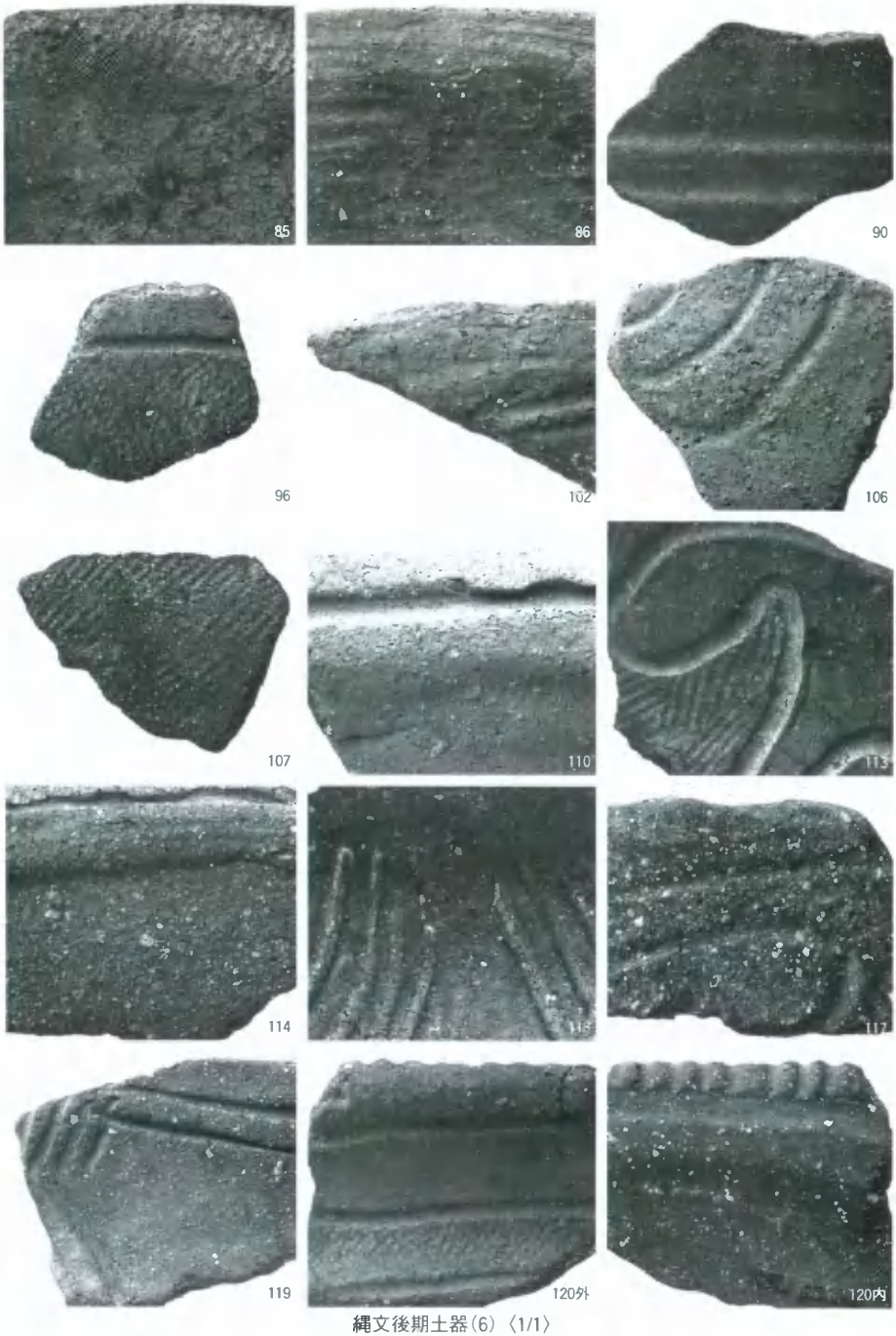
図版48

縄文後期土器(4)〈1/1〉

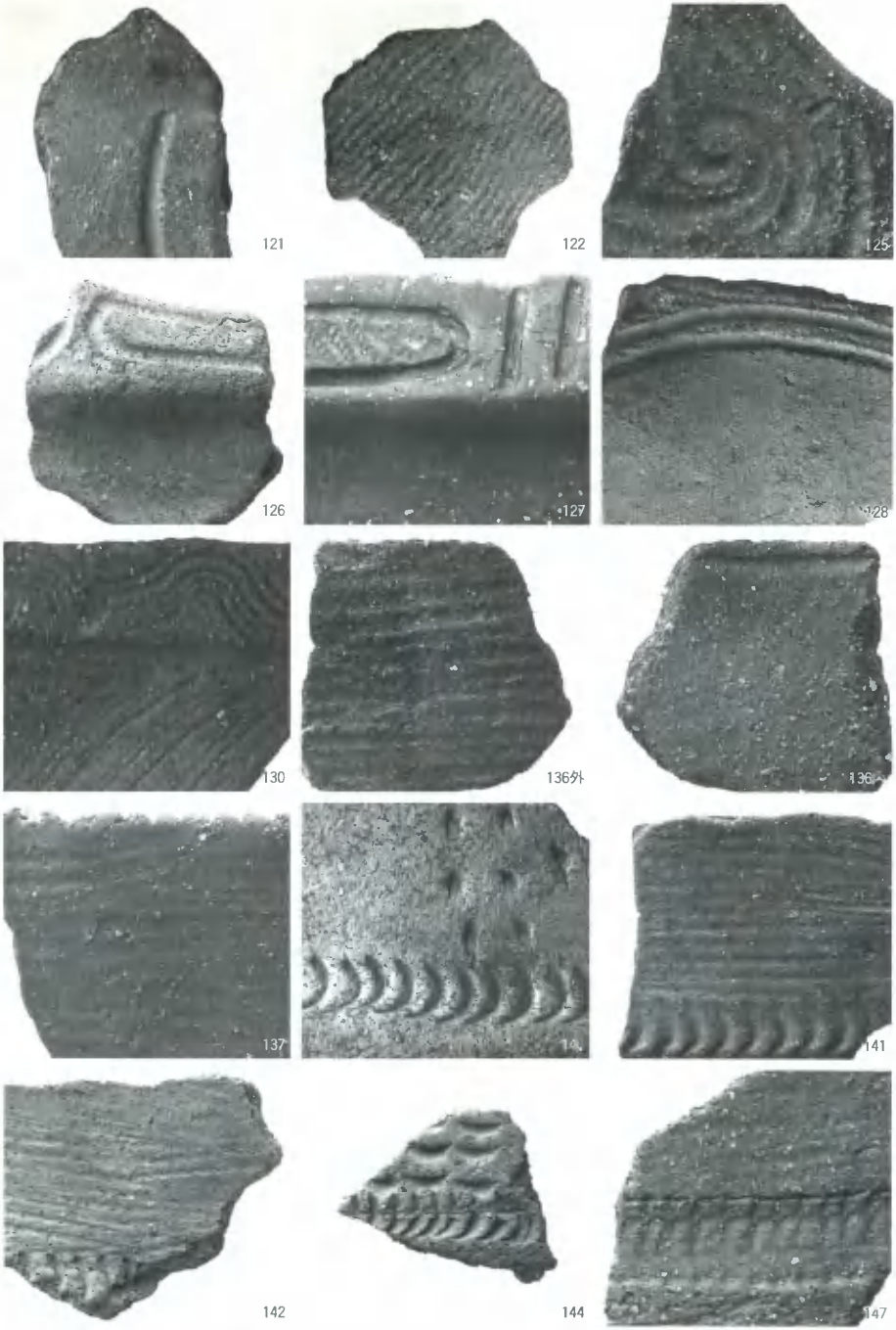


縄文後期土器(5)〈1/1〉

図版50

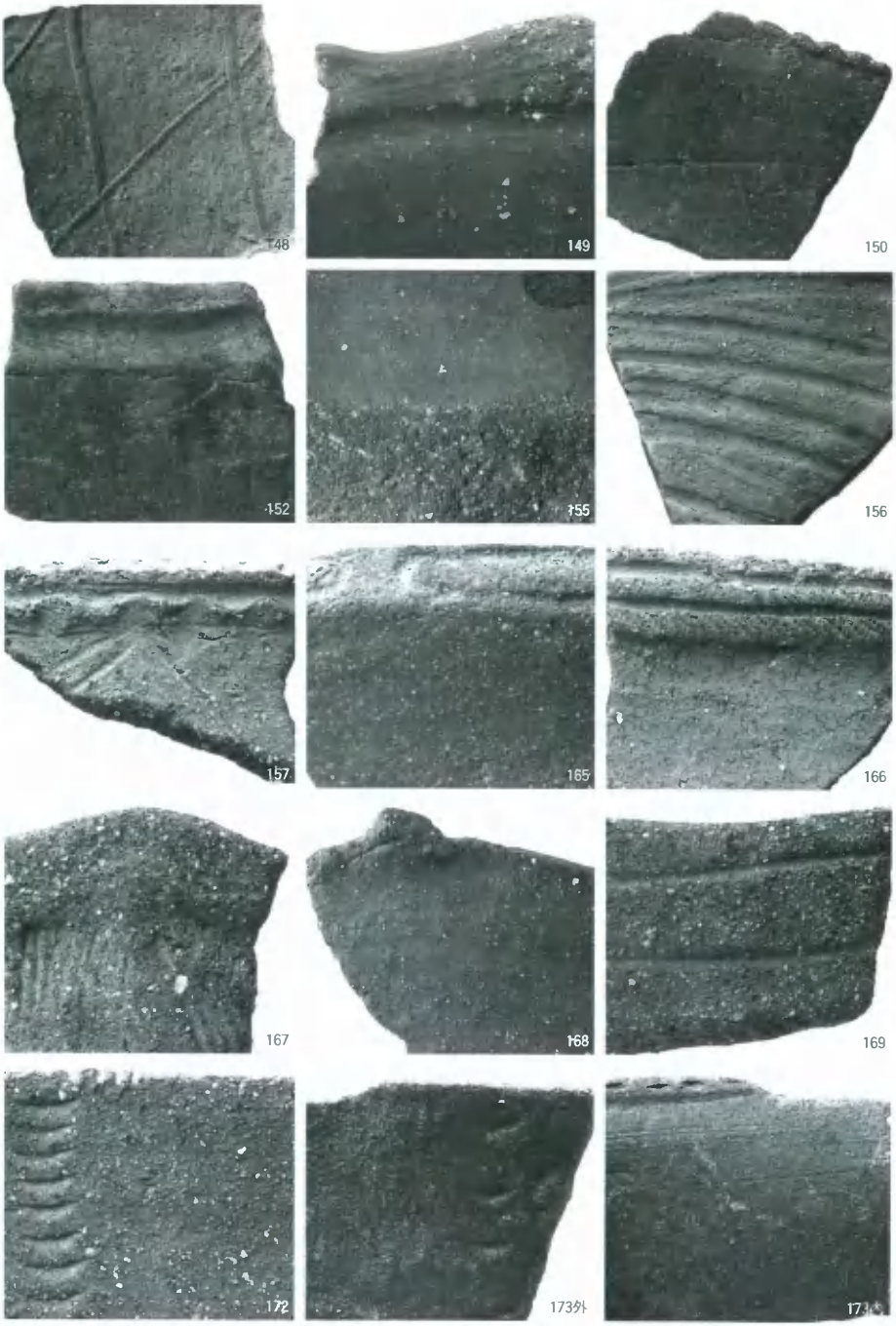


縄文後期土器(6)〈1/1〉



縄文後・晩期土器(1)〈1/1〉

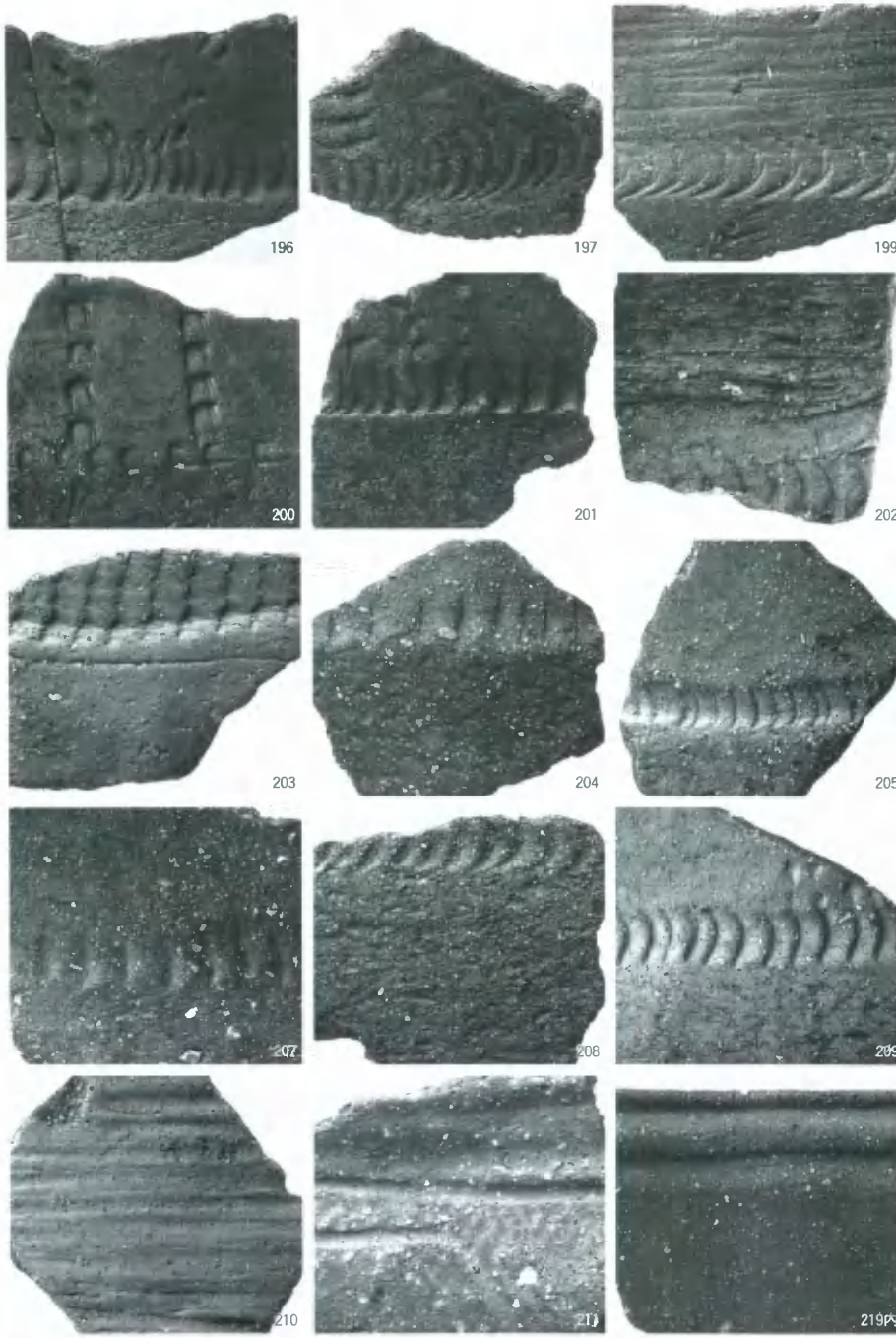
図版52



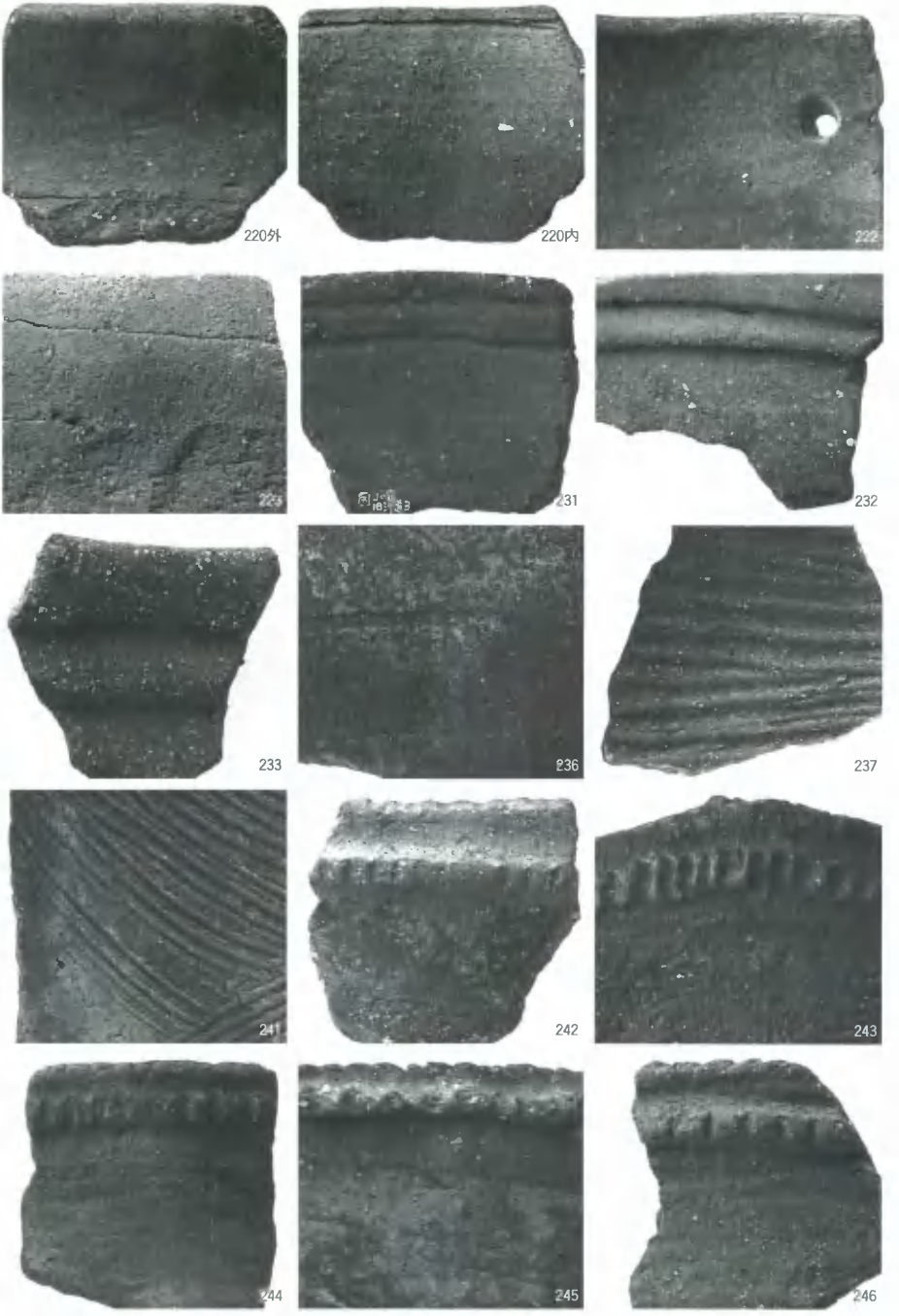
縄文後・晩期土器(2)〈1/1〉

縄文晩期土器(4)〈1/1〉

図版54

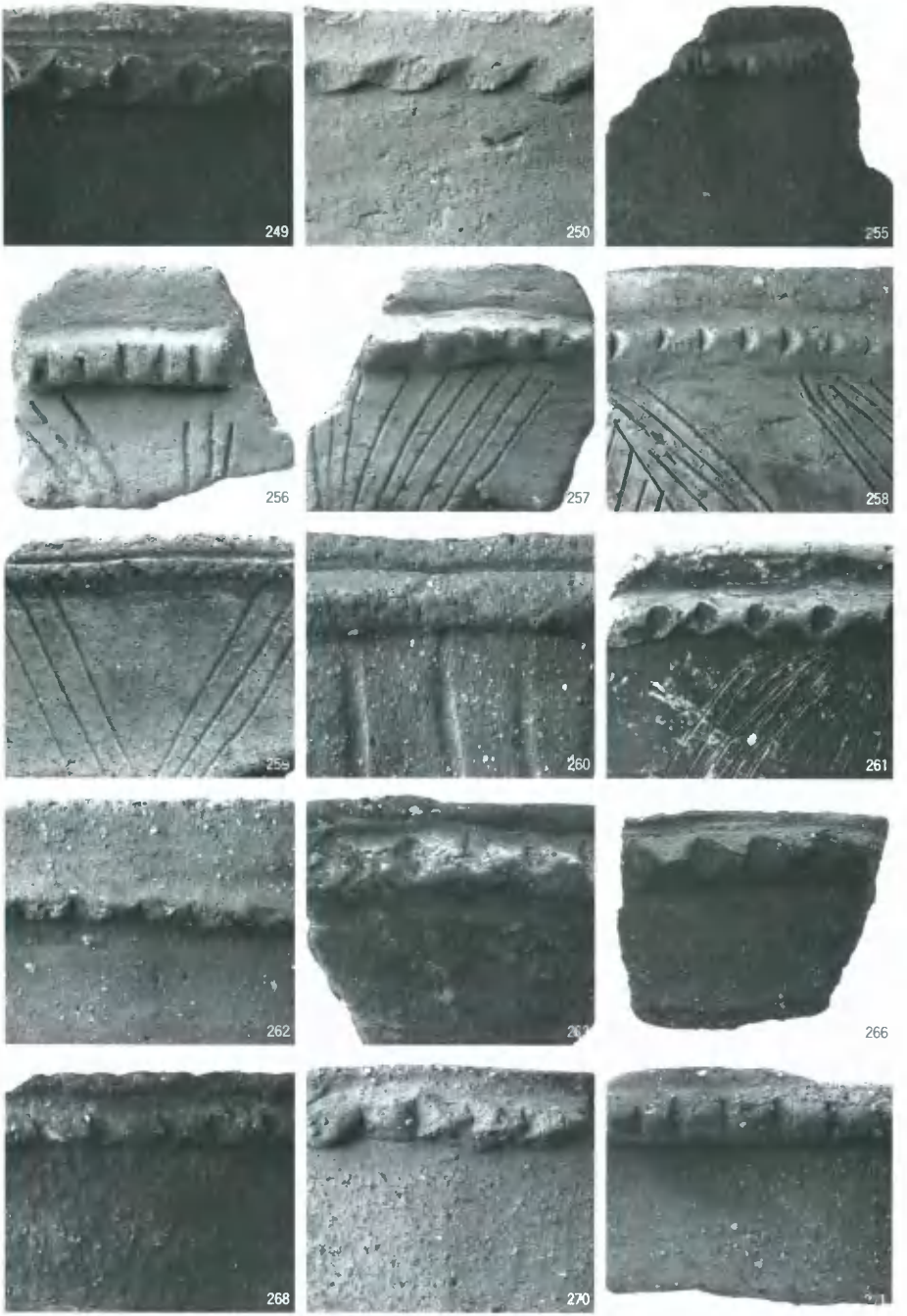


縄文晩期土器(5)〈1/1〉

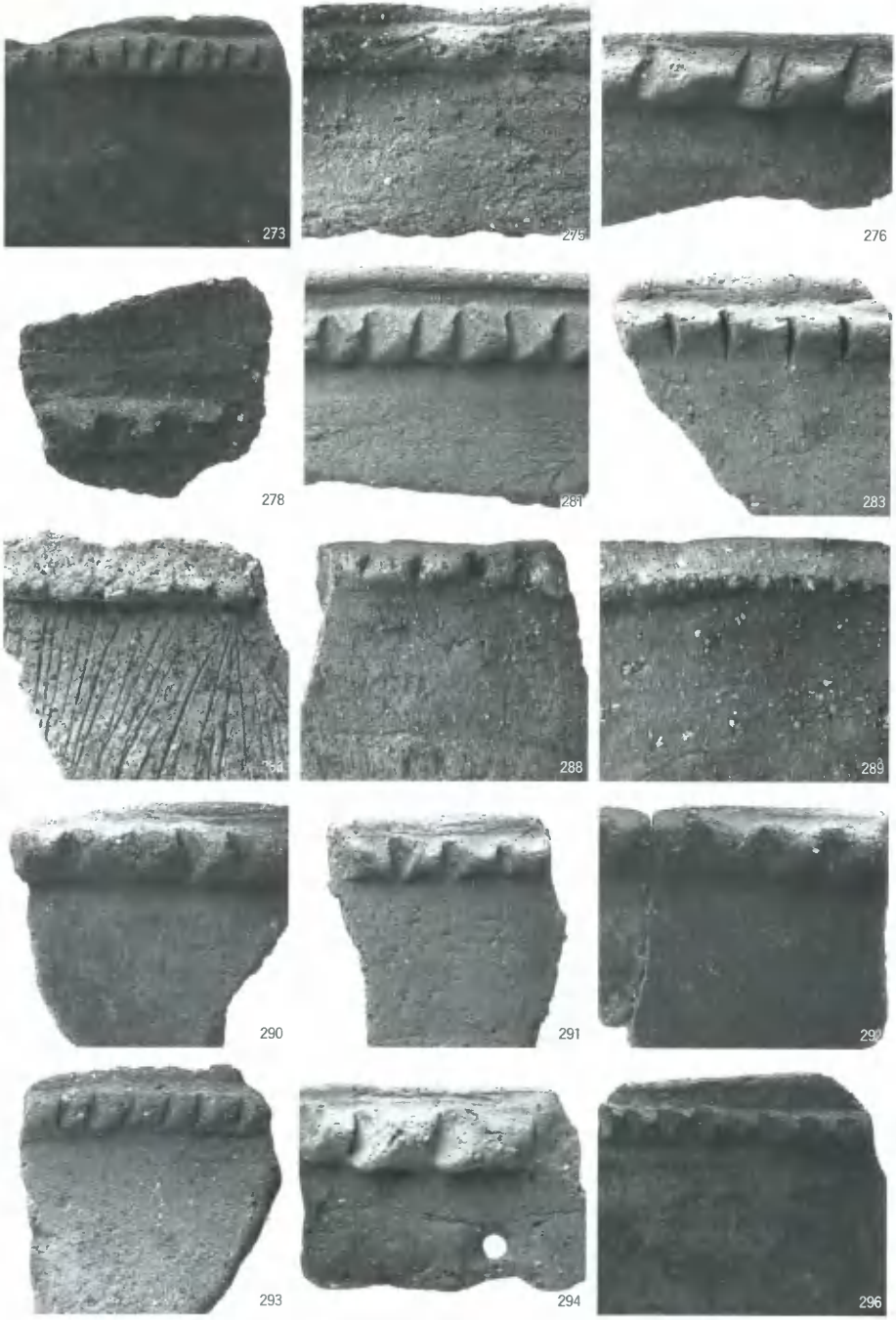


縄文晩期土器(6)〈1/1〉

図版 56

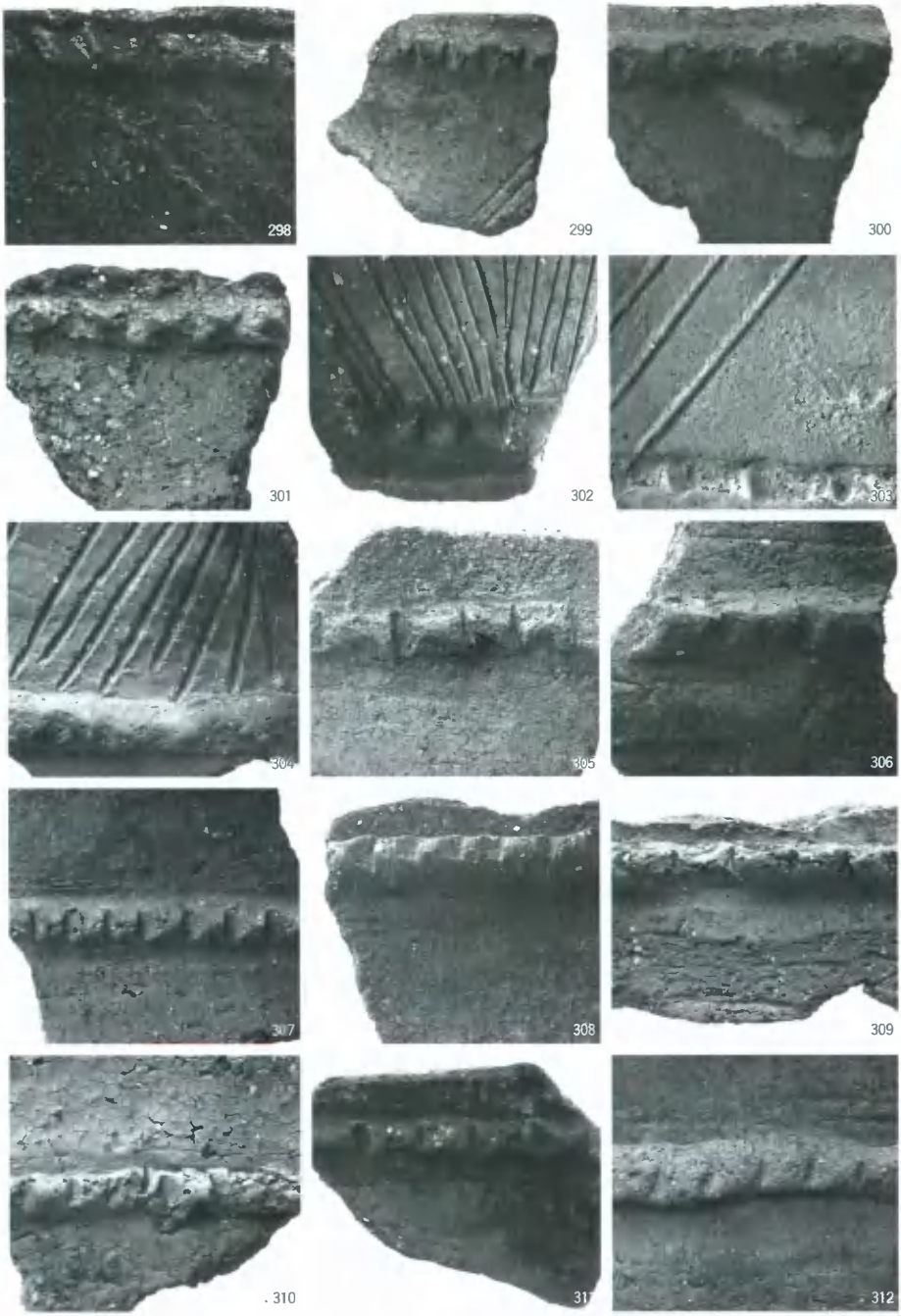


縄文晩期土器(7)〈1/1〉



縄文晩期土器(8)〈1/1〉

図版58



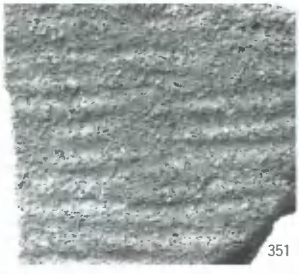
縄文晩期土器(9)〈1/1〉

313

315

316

346


351

352

354

360

361

362

363

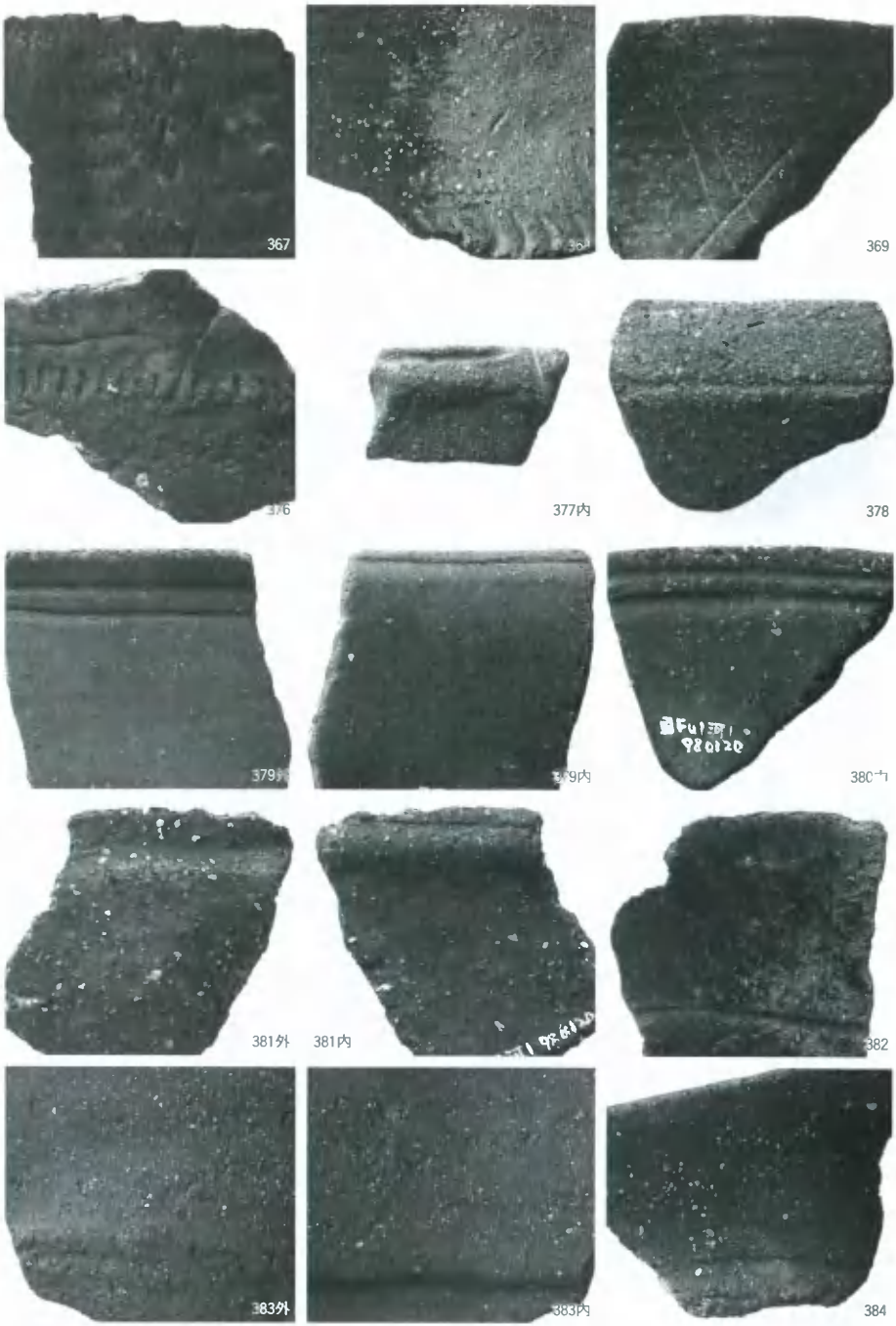
364

365

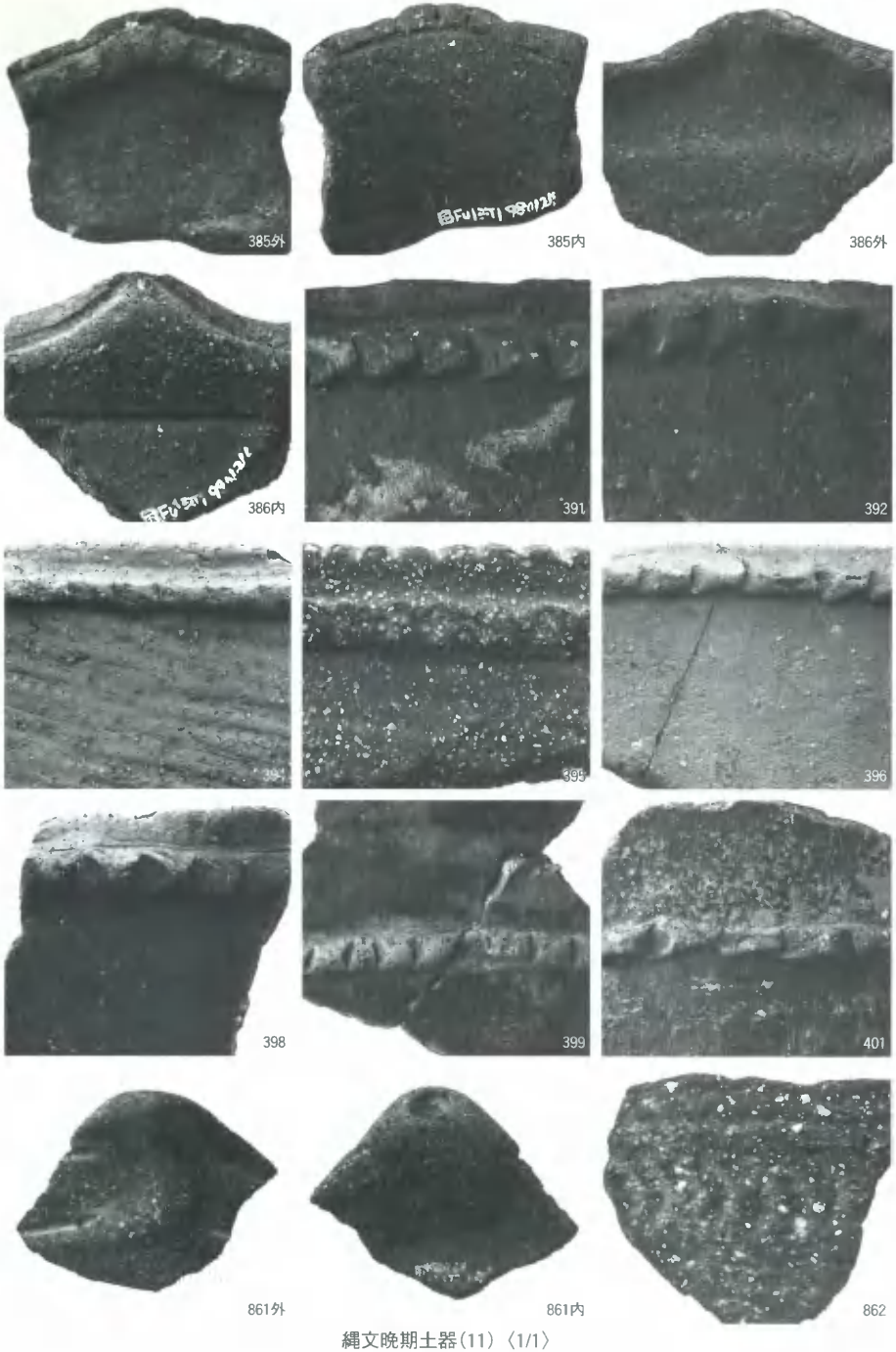
366

縄文後・晩期土器(3)〈1/1〉

図版60



縄文晩期土器(10)〈1/1〉



縄文晩期土器(11)〈1/1〉

433

456

430

458

459

460

462

465

468

弥生前・中期土器(1)〈1/2,1/4〉

496

505

506

554

555

556

571

565

744

弥生前・中期土器(2)〈1/2,1/4〉

1/4　881

1/4　892

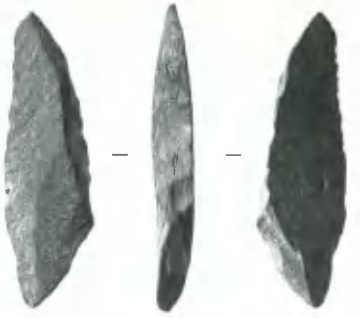
1/3　816～821

1．奈良～近世陶磁器等〈1/3,1/4〉

1/1　C1

1/1　C7

2．縄文・古代土製品〈1/1〉



S1

1．ナイフ形石器〈1/1〉

S9

S2

S3

S4

S5

S10

S16

S18

S11

S19

S20

S21

S24

S26

S27

S28

2．縄文後期石器各種〈1/2〉

図版66

S6 S8 S12 S29 S35

S13 S364 S366 S37 S41

S44 S45 S46 S47 S48

S49 S54 S58 S59 S62

S63 S64 S65 S66 S67

S69 S70 S71 S72 S101

石鏃(1)〈1/1〉

S102

S103

S104

S105

S106

S107

S108

S109

S111

S112

S113

S114

S116

S117

S118

S119

S120

S136

S137

S138

S139

S142

S143

S144

S145

S146

S147

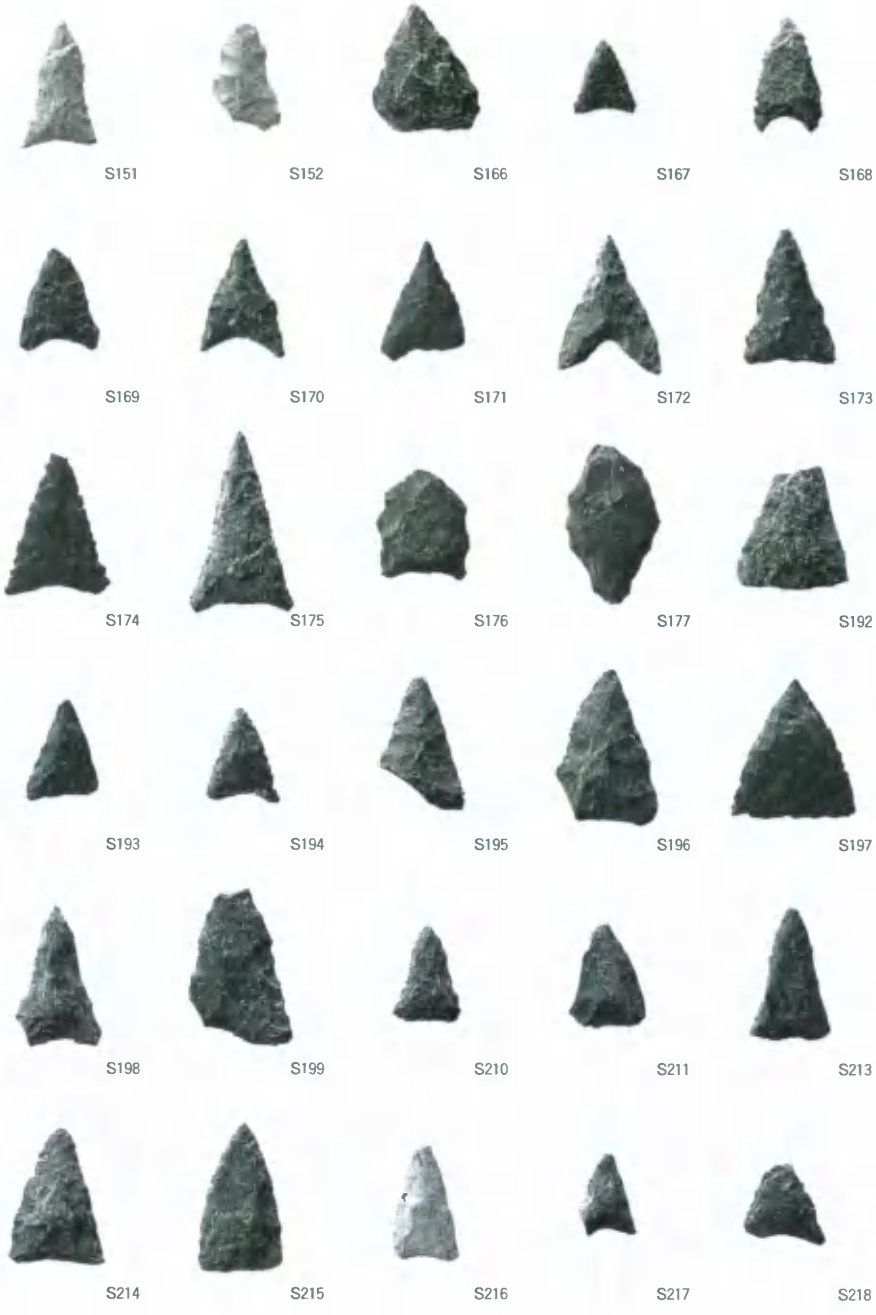
S148

S149

S150

石鏃(2)〈1/1〉

図版68


S151
S152
S166
S167
S168
S169
S170
S171
S172
S173
S174
S175
S176
S177
S192
S193
S194
S195
S196
S197
S198
S199
S210
S211
S213
S214
S215
S216
S217
S218

石鏃(3)〈1/1〉

S219 S221 S222 S223 S224

S225 S226 S227 S228 S229

S230 S231 S232 S233 S234

S235 S261 S263 S264 S265

S266 S267 S268 S269 S270

S271 S272 S273 S274 S284

石鏃(4)〈1/1〉

S285

S286

S287

S298

S304

S305

S306

S307

S308

S309

S310

S316

S317

S318

S319

S320

S321

S330

S331

S332

S333

S334

S335

S336

S337

S338

S339

S354

S355

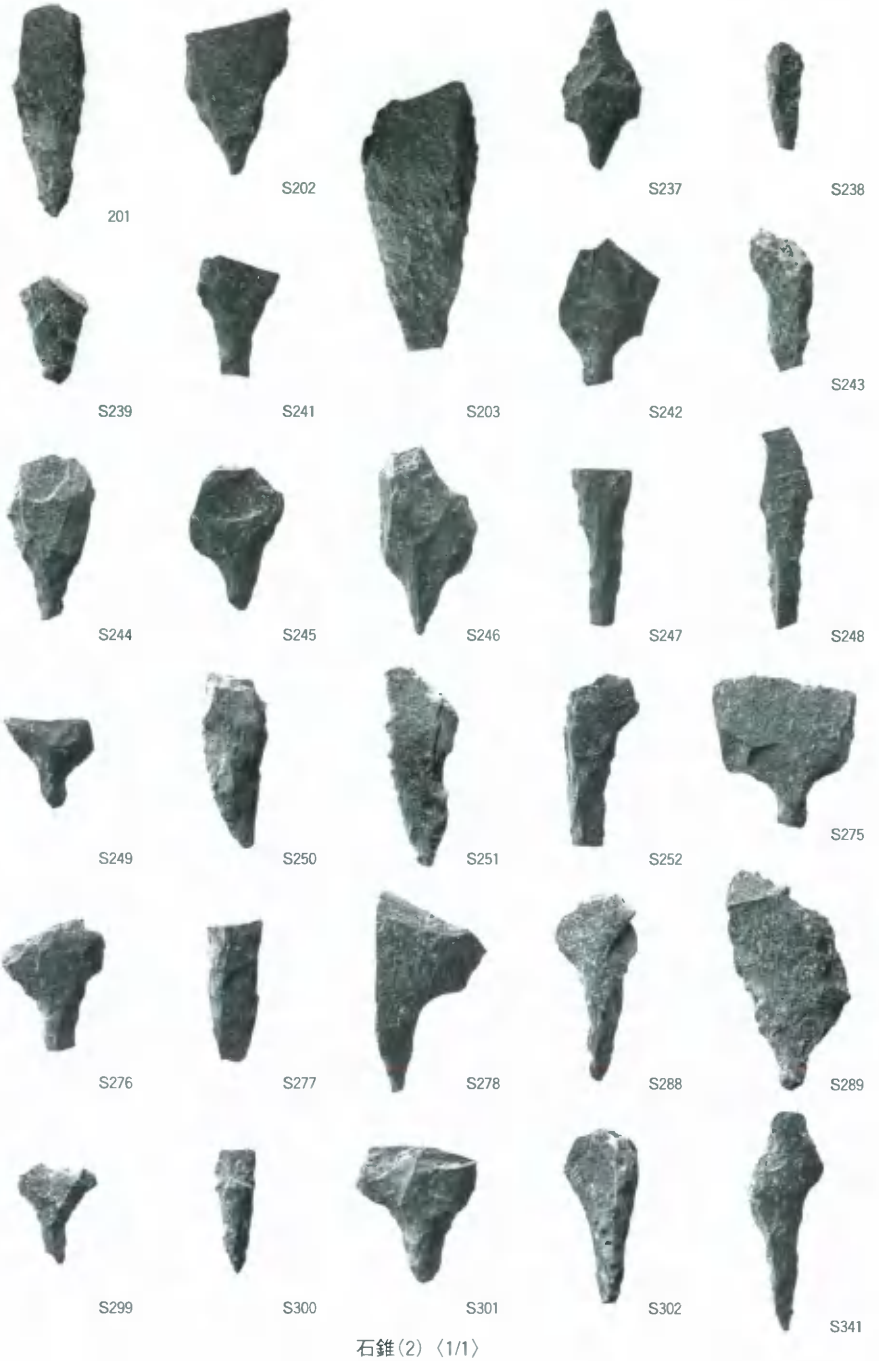
S356

石鏃(5)〈1/1〉

S14
S32
S36
S31
S38
S56
S73
S74
S75
S76
S77
S78
S79
S121
S122
S123
S80
S81
S124
S153
S154
S155
S200

石錐(1)〈1/1〉

図版72


201
S202
S237
S238
S239
S241
S203
S242
S243
S244
S245
S246
S247
S248
S249
S250
S251
S252
S275
S276
S277
S278
S288
S289
S299
S300
S301
S302
S341

石錐(2)〈1/1〉

S34

S88

S89

S90

S160

S161

S162

S163

S164

S179

S180 1/1

S183

S184

S328

S347

S349

S350

S351

磨製石包丁〈1/1,1/2〉

S42

S50

S52

S82

S205

S206

S133

1/1 S254

S258

S178

S259

1/1 S280

S342

S343

打製石包丁〈1/1,1/2〉

S344

S39

S83

S84

S127

S125

S126

S303

S324

S360

S33

S86

1/1 S253

1/1 S322

1/1 S255

1/1 S130

S293

1/1 S327

S294 1/1

S312

石槍・石匙・スクレイパー・楔〈1/1,1/2〉

石鏃・石斧（打製・磨製）・石鑿1/2,1/3）

S93

S187

S188

S352

S95

S96

S282

S100

S191

S189

S260

S99

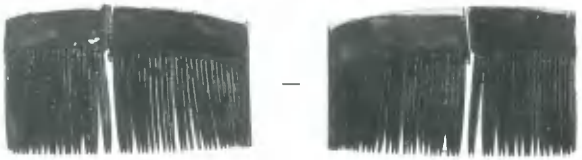
S43

S134

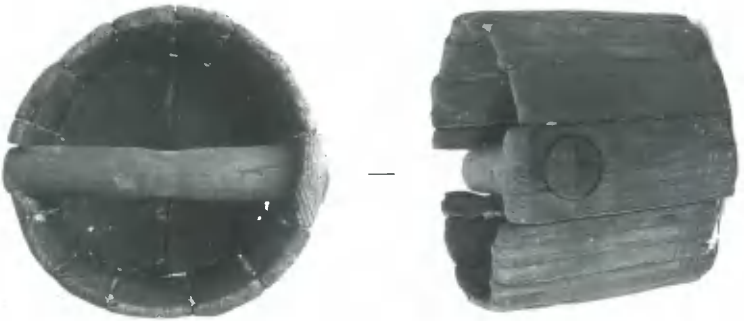
扁平片刃・紡錘車・砥石・凹石・石錘・銅剣鋳型？等〈1/2〉

敲石等〈1/2〉

W1 W2 W3



W4



W5 W8

木器（櫛・釣瓶）〈1/2,1/4〉

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 141

田益田中（国立岡山病院）遺跡

国立岡山病院建設に伴う発掘調査Ⅰ

1999年３月23日　印刷
1999年３月31日　発行

編　集　岡山県古代吉備文化財センター
岡山市西花尻1325-3
発　行　岡山県教育委員会
岡山市内山下2-4-6
印　刷　富士印刷株式会社
岡山市桑野516-3